
GUNDAM SEED Destiny～Readjustment World～

リーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUNDAM SEED Destiny Readjustment World

【Nコード】

N4871I

【作者名】

リン

【あらすじ】

世界は英雄の手によって救われた。だが、愚かな世界はまた新たな血を欲する。

歯止めのきかない戦争の中で、それが一概に誰のせいでもないことをクロードは悟る。前対戦の英雄であっても、全てが正しい訳ではないことも一緒に。

オリジナルキャラクター設定

主人公…クロード・タクス

年齢…19

搭乗MS

名前…ラグナロク

対MS特化型。セカンドシリーズで、インパルスと共に製造された。こちらは換装等の特殊機構を搭載していないが、インパルスと同じく艦に帰還することなく燃料を補給できる。そしてその機構を利用した兵器、ニブルヘイムと呼ばれる二門のビームキャノンを背負う。そのエネルギーをMS単機で賄うことができないため、母艦の近くでしか打てない制限はあるが、一度銃爪を引けば、名前通りの光景が目の前に広がる。

人物設定

オーブ出身。父親はフリーのジャーナリストで、主に連邦のネタを追っていた。新しいネタを追うためには、オーブでは無理だと判断した父親は、クロードを伴って移動。途中の飛行機の中で、後にエイプリルフルクラインシスと呼ばれる大災厄に遭遇。コントロールを失った飛行機は墜落し、その事故で唯一の生存者となった。

その地はニュートロンジャマーの被害を顕著に受けており、エネルギーの供給が滞っていた。また、度重なる戦争の爪痕が目に見えており、作物も育たない場所であった。この時、彼は15歳だった。

そしてそこで一ヶ月程のサバイバル生活を余儀なくされたクロード

は、生きるためにかなりの数の殺人を犯していた。

そのせいか、ナチュラルにあるまじき戦闘力と感受性を身につけ、連邦によって保護されるまでには、並のコーディネ이터の能力を超えていた。

そして保護されたのもつかの間、クロードの乗った船はザフトにより制圧された。クロードは一般人であるということが功を奏したのか、プラントに保護されることとなった。

しかし、その保護も条件がついた。それはクロードの能力がコーディネ이터のものを遥かに超える数値を叩き出していたからだ。そこに目を付けた現プラント議会最高議長である、ギルバート・デュランダルによって軍役を課せられた。

クロードも生きるためと割り切り、軍の仕事に没頭した。そのお陰か、一年後には汎用MSに搭乗し、連邦兵士の命を刈り取っていた。

そして、ヤキン・ドゥーエ大戦終戦間近にはプラントのMS開発のスタッフに回され（戦績は良かったが、開発陣営の人材不足とクロードが自分のMSの武器開発や装甲の強化を的確に行っていたのを、整備主任のマッド・エイブスが認め、上層部に推薦していたためこうなった）、そこで設計のノウハウを学ぶ。

それがクロードも開発に携わった、ラグナロクの設計に大きな影響を与えている。

PHASE-01 終わらせることができるなら…（前書き）

このSSはオリジナルキャラクターをメインに据えた物になります。原作に出ていないキャラクターがいるのは嫌だor苦手だ、という方はお戻り下さい。

大丈夫だ、設定なんてそんなに気にしないという方はそのままお進み下さい。

PHASE-01 終わらせることができるなら…

地球に降り注ぐそれは、無数の流星としか思えない。光の尻尾を纏い、それが大気圏に突入したことを教えてくれていた。それが何なのか、地球にいる人々にはそれが何かを知る者はいない。それが自分達に災厄を引き起こし、悉く人々に恐怖と絶望を与えることになるなんて。

約二ヶ月前、連邦は世界を焼く光、核をプラントのコロニーの一つ、ユニウスセヴンを撃ち込んだことから口火を切られたことであった。血のバレンタインと呼ばれるこの事件の報復が、プラントが決定したニュートロンジャマーの散布であった。連邦にとっては因果応報、自業自得なのだが、地球に住む人々にとっては、身に覚えもないことで意味のわからない機械が地中に潜り、その直後から核を使用していた機械がみな使えなくなってしまったのだから。

そして地球は慢性的なエネルギー不足に陥ることになった。食のための火力も、暖をとるための熱も、夜を照らす電気も何もかも、便利に怠けていた人々は、その何もない過酷な状況生き抜くことを押し付けられることになったのだ。

クロードもそんな中で生きていく事を余儀なくされた一人であった。その記憶は、大破した飛行機と無数に飛び散る破片、そして草も茂らない剥き出しの大地から始まった。クラクラする頭で臃げながら思い出せるのは、何かの弾みでぐらつき始めた飛行機と、その中で悲鳴と絶叫をあげる人々。勿論、クロードもその一人であり、頭を抱えてシートの足元にうずくまる。

そんな中でも父は、怯えることなくクロードの身を守るために身を

呈す。うづくまるクロードの上から覆いかぶさり、降り注ぐ何かから我が息子を守るために。

母は既に他界しており、クロードは父親と二人で生活していた。父はフリーのジャーナリストで常に何処かに出掛けているような状態であった。だからか、一人で家の大抵のことはできるようになっていた。父の分の食事も用意し、夜更け前には寝る。

父がいなくて寂しくなかったと言ったら嘘になる。まだ大した歳にもなっていない頃から、父親との触れ合いも母親との触れ合いも殆どなかった。

けどそれでも良かった。

父が何のために働いているぐらいわかっているし、それくらい割り切っていないと父に甘えてしまう。行かないで、と。一緒に居て、と。それは叶わぬと知っているのに。

そしてそんな生活も十年以上続いたある日、父は仕事の関係で引越すことが決まった。クロードにも学校があったが、今までも寂しい思いをさせてきた息子を、これ以上悲しませる訳にはいかないと判断した父は、クロードを連れてオーブを出た。

そしてその行きの飛行機の中、それが今なのだ。縦横に震える機体が大きな恐怖を与える。どうなるかなんて15歳の自分にだってわかっていない。

そして飛行機は急速に重力に引かれ始めた。推進力が失くなった機体は、水流にも逆らえない小さな魚のよう。そして手を滑らせて落としてしまった模型のように、地面に一直線に突っ込む。もう終わりだと思った。

が、クロードは生きていた。自分の上には父の物言わぬ屍が、死し

でも彼を守るように身体を呈していた。

パチパチと燃料が爆ぜる音が聞こえる。周りは紅く染められ、ここが地獄のような錯覚さえ起こさせる。

「……父さん？」

身体を揺する。クロードは理解しなくなかったのだ、目の前の現実を。――父の死を。

「父さん！」

いくら強く呼び掛けても、父さんはあの笑顔を見せてはくれない。父の顔には陰が落ちていた。

「父さん!？」

必死の呼び掛けはまだ続く。止めたくなないと、クロードの心が拒否する。

「父さーーんっ!!」

そこら中一带に響き渡るような咆哮。小さな頃から、父に縋ることさえせずに懸命に生きてきたクロードにとって、何もかもを奪われてしまったかのような感覚。そして虚無と絶望。

ここで命尽きるのもやむを得ないだろうと、諦めそうにもなった。だが、自分の生存本能は思っているより強かったのだと、後から思い知ることとなった。

そして事故から一ヶ月の時間が過ぎた。クロードは苛烈な環境の中でもがむしゃらに生きていた。片手には刃毀れたナイフ、衣服には飛び散った何物かもわからなくなったものの赤黒く変色した染み。

生への執着に塗れたその顔には、意思等殆ど垣間見えず、畜生同様な生き方をしてきたことが伺えた。

それが最初にクロードを発見した地球軍兵士の感想であった。目は虚なのだが、確かにその中に何かを捉えているようで、動く物を見れば反射的に襲い掛かるような雰囲気さえ感じとれた。

兵士は特に突出した感を持っている訳ではなかった。そんな兵士でも感じ取れる程の雰囲気、深い緑色の髪の少年から感じ取ることができたのだ。余程何かの力を身体の芯で感じてしまった。

その瞬間、気圧されて一步後ろに下がったのがまずかった。踵が小石に当たる。

コツンと兵士にしかわからないような音がした。少し後ろを見て、安堵の溜息を吐いた。そして前を見る、あの少年を窺うために。

だが、そこには姿形も見当たらない。ちょっと待て、目を離れたのなんか一秒にも満たない筈だ。そう反芻した次の瞬間、右側から冷たい物が首筋にあてがわれた。一度引かれれば、血潮が噴き出し、出血多量で死に至るだろう。そういった場所に的確にナイフがあるのだ。

「ち、ちょっと…待て…」

無理矢理声を捻り出す。そうでもしなければ、こいつは自分を殺すだろうと確信できた。

「お前、ここに何しに来た。俺を殺すつもりか…?」

はっきりとした言葉を喋った。なら、こいつはここで起こった飛行機事故の生き残りともいえるのか?

「お前、何で…ここに…?」

また声を捻り出す。首筋にもあてられたナイフのせいで、どうにも息苦しい。

「…俺はここで墜落した飛行機に乗っていた。それだけだ」

やはりそうだったようだ。ただの野生児には見えなかったし、なにより、『あの事件』の被害者の一人がこうして生きているのだから。

「わ、我々は、その調査に来て…いるのだ。よって、その被害者であるあなたにご同行、願いたいのですが?」

兵士の言葉を聞いたからか、クロードの纏う空気から殺気が少しずつ消えていっていた。ようやくと手に入れた、この地獄から抜け出せる切符を目の前に見つけのだから当然ではある。

「その話嘘じゃないよな…?」

縋るような思いでその話を掴む。もうこんな場所にいるのは懲り懲りだった。

「も、勿論だ…!」

そしてクロードは地球軍の軍用艦に案内された。兵士から聞いた話では、ニュートロンジャマーが地球に打ち込まれてから戦いは熾烈を極め、防衛にも進行にも兵をさかなければいかず、また違う戦場に補充も必要で、この場所を調べるための軍編成を一ヶ月近く見送らなければならなくなったのだという。

その事情はクロードにも理解できていた。地球軍はザフトと戦うのにはあまりに劣勢で、物量なら地球軍が圧倒できるが、その質は明らかにザフトだ。数の力は恐ろしいとはよく言われるが、質が圧倒的となれば、数に勝ち目等無いに等しい。

「まあ、生きてあそこから出られただけ儲けか？」

あの場所では何人の命を奪ったか、わからない。最初はただ殺されなためにナイフを手にした。何も持たない状態でいけば、殺して下さいと言っているようなものだ。相手を止めるため、最初はそれだけだった。

だが、すぐにそんな甘い考えを捨て去ることとなる。

一日歩き回り何も発見できなかった。食べ物も雨風を凌げる場所も飲み水もだ。特に最後の項目は今日中に見つけておきたかったのだが、事故のショックと疲れもあり、その場で倒れるように寝てしまったのだ。

クロードは何かの気配で目を覚ました。誰かがこちらを窺っている気持ち悪い感覚。獲物を狙う、獣と対峙している感覚だった。

懐にナイフを忍ばせた。そして、それが近づいて来るまで狸寝入りを続けることにした。

そしてそれは近づいてきた。足音を殺しながらスルスルと。だがクロードはそれが手に取るようにわかった。何故わかるかは知らないが、好都合だと思う。どうにか組み伏せて、帰って貰おうと思った。

「がああああっ!!」

雄叫びがあがった。そして突き立てられたナイフが、クロードの寝ていた場所、それも心臓の位置を正確に刺していた。

それを起き上がり、飛び退くことで避けたクロードは目の前の人物を見て愕然とした。その服は自分が良く見ていた軍服で、ボロボロにはなっているがかなり面影がある。

「オーブの…軍人!」

オーブは一応中立の筈だ。今回の戦争でも、大西洋連邦にもザフトにも支援せずに鎖国のような態勢を取っている。それなのにこんな所でこの軍服を見てしまうのだろう。

(オーブが裏で手を回しているのか?それとも…)

「がああああっ!」

そのオーブの軍服を着た男は遮二無二ナイフを振り回し始めた。自分も素人だが、その断ち筋が明らかに素人以下なのが気になる。

「錯乱してるのか…?なら!」

適当なナイフの軌道を読むのは難しいが、振り回している腕に狙い

をつけ、そこらへんに落ちていた石を投げつける。それが見事に命中し、相手の腕の降りが鈍った。そこに身体ごと突っ込み、ナイフを持っている手を後ろに回して捻った。

うっ、と相手は低く呻き、握られていたナイフは渴いた音をたてて地面を転がる。それを見届けたクロードは、下に敷いた相手に声を掛けてみた。

「なあ、何で襲ってきたんだ？」

数秒待ってみる。返事はない。沈黙が落ちる。

不審に思ったクロードが相手を覗き込もうと身体を倒した。それがいけなかった。

「ぐわあうっ!!」

クロードの力の数倍はあるかのような力で振り回され、少し離れた大きな石に叩きつけられた。肺に入っていた空気が、一遍に外へ強制的に吐き出させられた。

目の前がチカチカする。上手く息を吸えない。次第に視界が暗転し始める。だが、ここで意識を手放すわけにはいかない。敵はすぐ近くにいるのだから。

しかし痛む身体に鞭を打ち、周りを見回してもあの兵の姿は見留められない。

どこに消えた…、と神経を尖らせる。気配が動くのを感じようとするけど、どうしても捉えることができない。もう何処かに行ってしまったのか、そう思い始めた。

「うがあああっ！」

瞬間、後ろから聞こえる戦慄。振り向く間もなく、首筋を握り潰すように相手の左手が襲ってきた。

「ぐっ…うっ…」

頸動脈を確実に捉えられ、少しもない内に頭がボーッと始めた。脳に酸素が供給できていないから、じわじわと意識が死神の鎌に刈り取られるような感覚。薄れゆく思考の中でわかっているのは、このままでは死ぬという事。

「かっ…はっ…」

こんな惨めな死にかたなんてあるか。乗っていた飛行機が墜落して、父さんが死んで、食料も調達できてない。しかも飲み水も確保できてなくて、喉も腹も満たせない。

こんな状態で、獣のように狂った奴に殺される…。そんな死にかた！

「がっ…！！」

目の前が紅く染まる。顔に生暖かい液体が降り注ぐ。何か、なんて疑問はわからない。なんせ自分の行動が、この現象を引き起こしたのだから。

相手も虫の息なクロードを見て油断していたのだろう。腕の力は弱まらないが、意識はクロードには向いていなかった。

そこでクロードは何とか腕を伸ばし、ナイフを掴む。

もう余力はない。この一断ちに全てを賭けるしかない。クロードは渾身の力を振り絞ったのだ。

ドスッと何かを貫いた感覚が手に残っていた。喉を潰そうとしていた握力は、徐々に弱まり喉元から手が離れていく。そして戻ってくる思考力。

今、自分は何をした？

この手に残る気持ちの良くない感覚は？

この生暖かく、少しづつ冷えて固まっていく紅い液体は？

自分の上でぐったりしている、右腕が変な方向にひしゃげているこの人は？

そして目の前の現実には気付く。自分とは疎遠で無縁だと思っていた世界。特殊な人種しか知らない筈の世界。

「う、う、うわあああああーっ!!」

――人を殺した。

内側から湧き上がる恐怖に堪えられなくなり、クロードは狂ったように叫び声を上げ、その場から逃げ出す。どこへ行けばいいかなんて、検討もついていないが、とにかくこの場所から離れたかった。ここにいたら自分が自分でいられなくなるような気がした。

どのくらい走ったのだろうか、不毛な地ではそれさえ臆げで、確かめるための目印すら見つけられない。でもここがどこかなんて関係のないことだ。死臭のするあの場所に留まって、自分のした事をまざまざと思い知らされるよりは、よっぽどマシだと思ったからだ。

寒気がする。頭で何をしたかを理解し、受け入れるしかないとわかっているのに、心が拒否し続ける。

――こんな状況なんだ、人一人殺したところで、なんだ。それに奴

は正気を失ってたみたいだったじゃないか。だからあれは人とは呼ばない。

（それは理屈だろ。俺は人だと思って抗戦した。だから俺は人殺しだ。割り切ることなんてできやしない）

――だったらあの局面をどう打開するんだ。それとも何か、あんな所で死んで良かったのか？死にたくないから抵抗したんじゃないか？

（そりゃ…そうだが…）

――なら割り切れよ。お前は生きていきたいんだろ？だったらこれぐらいの試練を超えないでどうする。

（……………）

理解している頭が、どうにも邪魔だった。身体が理解に追いついていけないのだ。

いや、あの感覚がこびりついてしまうのが怖いのだ。殺人に慣れてしまうことが。

「俺は……」

心と身体の矛盾が、自分の中の何かを壊してしまう気がしていた。

ガタンと身体が傾く感覚で目が覚めた。どうやら張り詰めていた緊張の糸が切れてしまったらしい。まだ信用もできない奴らの中に居るというのに、自分の愚かしさを呪った。

（しかし、あの夢か…。久しぶりに見たな…）

人を殺した最初の日、その日はあの凄惨な光景が繰り返し鮮明に蘇ってきた。

久々の夢が何やら不穏な気配を感じさせた。クロードの運命がこれ以上に大きく変わってしまうような…。

保護されて幾日がたった。あの後簡単な身体検査、健康診断、衣服の支給等があり、血生臭い服以外を久しぶりに着た。こんな普通の事に感動できることが、何故か嬉しく思えた。部屋から出ることはできないが、一通りの設備はついている。がそんな物が無くとも、今のクロードにとっては雨風が凌げて、ゆっくり休めることは至福だ。

そんなゆとりが持て、オーブに帰れるとクロードは思っていた。あんな激動を切り抜けられた自分には、その資格があり、普通の学生と同じ生活に戻れると。だが、現実には非情で留まることはないと感じさせられた。

ドン、と何かがこの艦に当たった音と同時に、大きな揺れが襲う。この艦が戦場を通過するなんていうことは放送されていない。何かに襲われているという事なのか…？

外を窺おうにも、ドアには電子ロックが掛けられている。だが外から微かに聞こえてくる音は、銃声、叫び声、命令、檄、そして絶命の咆哮。

やはり襲われ、そして落とされてしまったのだろう。銃の火薬の臭いや音が地球軍の物だけでなく、遠くで小さく響くのは違う銃声だ。

（大方ザフトだろうが……）

あそこで見たオーブ軍の軍服を思い出す。オーブも中立を唱えてはいるが、裏で何をしているかわかったもんじゃない。

さて、どうしようかと思案する。この密室の中、隠れる場所も武器として使えるような物もない。ドアが開いた瞬間に突撃してもいいが、相手は銃を携えている。正直、避けきる自信はない。

しかし、事態は待ってくれる筈もなく、電子盤を破壊するためであろう銃声が響く。バチツとショートする音と共に、電子ロックが無効化し、ドアがスライドした。そして銃を構え、現れたのはザフト軍のノーマルスーツを纏った二人。

「動くな！…って、軍服じゃない？」

金の短髪、少し黒い肌のクロードとそう変わらない歳のザフト兵が不思議そうに銃を降ろす。だが、もう一人の銀髪、おかつぱ頭は銃を降ろそうとしなかった。見た限り、こちらもクロードとそう変わりはないだろう。

「ディアッカ、油断するんじゃない。軍服を着ていないからって、軍の人間じゃないと決めつけるな」

至極尤もな見解だ。休んでいて軍服を着ていなかったとも考えられるし、こういう時に油断させるための罠の可能性も捨て切れない。ただ、

「閉じ込められてた奴が、軍服着てないなら捕虜だとは思わないのか？」

自分ならそう考えると、クロードは思った。だが口を開いた事が気に障ったのか、銀髪の男の方が怒鳴り声をあげた。

「貴様の意見など聞いてはいない！」

眉間に皺が刻まれ、明らかな不機嫌を表す。それを窺めたのは、隣で気楽そうにしているディアッカと呼ばれた少年だった。

「まあまあ、イザーク。確かにこいつの言う事にも一理ある訳だし。それにいざ襲われたとしても、俺達には銃もある」

銃があることに慢心しているのだろうか。もう少し近付けば銃よりナイフの方が速いというのに。

「それに俺達コーディネイターの軍人に、一般人が敵うわけ無いでしょ」

コーディネイターは、生まれる前に遺伝子を組み替え、身体能力や学力、果ては勘すらもナチュラルと大きく異なり、病気に関わる遺伝子を弄ることにより、ほぼ完璧な人間として生まれてくる。

人として、全ての部分でナチュラルより優れた状態で生を受ける。

つまり、スタート地点が違い過ぎるのだ。能力的に言えば正に月とスッポン。

だがその違いがこの世界を焼く争いの種なのだ。

コーディネイターは言う、ナチュラルは劣る存在だと。

ナチュラルは言う、コーディネイターは流れに反すると。

双方の言い分は一方的で、どちらにも響くことは無い。互いを知ろうとする心がないのだから、当然の成り行きだ。

それぞれが勝手な正義で、互いの正義を貶す。その繰り返し。抜け出すことのない無限の輪。勿論、抜け出すつもりもない。どちらかが滅びれば、世界が円く治まると信じているのだ。

だが、どちらかが滅びればその穴埋めをどうするつもりか。ナチュラルが持つ長所、コーディネイターの持つ長所。それが絡み合って上手くいっている国だってあるのだ。

（…今はあんまり信用できないかもしれないけど）

「おい、この船の機構がわかるか？」

少し静かにしていたイザークと呼ばれた銀髪の少年が突然に声を掛けてくる。大方情報を引き出したいのだが、予想以上にセキュリティが固く、作業が難航しているのだろう。

「おいおい、ただの捕虜がそんな事――」

「まあ、この端末のことと、そこからのメインコンピューターへのアクセスぐらいなら」

「できるわけって…、マジ？」

この部屋の端末には電子ロックの他に、この部屋に存在する者の監視及び状態変化の計測ができるらしい。

初めてここに来た時に、研究者が話していたことだ。間抜けなことにクロードが寝ていると思ったのか、携帯片手に端末を弄りながら同僚とそんな会話をしていた。その会話は、端末のパスを忘れたと言う呆れるような内容だった。

「で、それを憶えていたって訳？」

「まあな。ここの連中が俺を殺さない保障はなかったし、いざって時に逃げ出す方法は確保しておいて損はないしな」

カタカタとタイピングの音がする。目の前の画面は切替を繰り返して、メインコンピューターへの侵入を阻もうとする。

「だったら何で俺達が来た時に脱出しなかったんだ」

隣で画面を見つめる金髪の少年は、黙ってメインコンピューターへのアクセスを待っている。一方、銀髪の少年はクロードにそう問い掛けたのだった。

確かに疑問に思うだろう。いつでも逃げ出せる状況にありながら、ザフトが襲ってきた混乱に利用しない手はないと。

「ま、理由は結構あるけど、一番大きいのは、ここがどこの領海かもわからないし、領海じゃなかったにしても、何日も海を彷徨う程の食糧の確保ができないからだな」

「…確かにな。そうなるんだったら俺達に捕まり、一般人であることを証明すればいいってことか」

銀髪の少年が納得したようだ。だが、クロードは少しホッとしていた。

実を言うと、逃げ出す気でいたのだ。だが、焦っていたのか端末のことが頭に無く、脱出への方法を模索している時に、この二人がこの電子ロックを壊したのだ。こんな間抜けなことを話す気にはなれなかった。

「ほら、これがここに保管されているデータのリストだ」

クロードが見た限り、軍の機密に触る内容は一つしかない。なら、ザフトの狙いもそれに違いない。

「あったぞ！これだ」

「本当に造ってやがるとは…。連邦もオーブもやるねえ…」

データを引き出し、詳細を画面に表示すると、数機のMSの設計図が展開された。

「ストライクにイージス、バスターにデュエル、それにブリッツか…。五機も開発していたとは…」

悔しそうに呟く銀髪の顔が歪む。見る限り、これだけの性能を持つMS五機を、敵勢力に気付かれずに造るのは至難の技だ。しかも、こんなMSを五機も造ることは多分ザフトでも無理だろう。隣の二人を見ていればわかる。

「…何か、色々と思じられない気分だな」

「何が？」

「ディアッカだっけ？良く見てみるよ。このMSの装甲とデザイン。どっかで見たことないか？」

見た目は明らかにガンダムタイプだ。性能も明らかに今までのスペックとは雲泥の差だ。

そして核心の装甲――

「そうだよ、よろしく。で、装甲だっけ？どれどれ……。
お、おい、これって…！」

「どうした!？」

ディアッカの驚きの声に、銀髪の少年も画面を注視する。そしてすぐに気付いたようで瞠目し、わなわなと震えだした。それが怒りなのか、恐怖なのかはわからなかった。

「お前らならわかるだろ？装甲の組み方が明らかにザフトの技術の流用だ。で、ザフトは連邦とは敵対関係。じゃあ、どこが協力したかなんか明白だよな」

この世界には中立を貫いて、どちらの勢力とも交流を持つ国が存在する。そこが間違いなくこのMSの設計も製造もしたのだろう。それはクロードが帰れると思っていた場所。

「…オーブが…？」

「ま、それ以外に考えられないしな…」

どんな国にも国民に知られてはいけない裏という物があり、それ事態を否定するつもりはない。なぜなら、その裏によって自分達が恩恵を受けている場合も少なくないからだ。

だが、オーブ国民にとってこの裏は違う。

オーブに住む人々にとって、戦争とはとにかく根絶し、廃れるべき事柄なのだ。それは移民の多さが証明になっている。それにその移民達は、オーブの理念に共感してその地に移住を決めたのだ。

則ち、「オーブは他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の戦いに介入しない」。

この理念の元でなら、平和に暮らしていける。オーブに住む人々はそう思っているのだ。

「……………」

「おい、どうした？」

何やら悍ましい雰囲気から漂い、ディアツカはそちらに目を向けた。そのニコルとは違い濃い緑色の髪のせいか、一層冷たい瞳をしているように見えた。

「ああ、何か非道な裏切りにあった気がしてな」

「裏切りって…。お前、オーブに住んでたのか？」

「ん、まあな。さて、これで帰れる場所もなくなっちゃったな…」

こんな機密事項を知った以上、クロードの居場所はオーブにはもうないだろう。オーブに帰ったとしても、この艦の撃沈は上層部に知れ渡っているだろうから、歓迎されるどころか、強制連行で死刑、若しくは監禁されるのがオチだろう。

「じゃあ、どうするんだ？」

今まで興味がなさそうにデータを見ていたイザークが話に割り込む。何だかんだで、人の事を放っておけない奴だよな。

「うーん。お前らがこの艦落としちまったから、はっきりいつて絶望的なんだよな…。いつそプラントに亡命でもしようか」

「プラントについて…。お前コーディネイターなのか？」

プラントは、コーディネイターが地球から追い出されてしまった時に造られた、コロニー群でできた宇宙都市だ。故にコーディネイターしかそこに住んでいないし、地球から追い出したナチュラルを恨んでいる。

そしてクロードはナチュラルだ。だが、今の地球でクロードの居場所はないだろう。

「一応、な」

一応、クロードはコーディネイター達の特徴である美形の部類に入っている。本人に自覚はないが、この時程それが役にたったことはなかっただろう。

「ふーん。まあ、いいや。もうすぐ迎えがくる。その時に捕虜として捕まってた一般人だって言えば、艦に乗れるだろう」

「頼むよ」

こうして、クロードは地球と別れを告げることになった。迎えの艦には何事もなく乗れ、プラントへ亡命することに成功したのだった。

「ふむ、これは…?」

長い黒髪が、首を傾けた時にさらりと流れた。秘書が持ってきた資

料には遺伝子の配列が写っていた。

「それをどう思いますか？デュランダル議員」

良く眺めてみる。遺伝子にはなんら問題はない。ただ、我々と同じ弄られた形跡が見当たらないのが気になる。それに――

「一見すれば、これがナチュラルのものだとは判断できるが、この能力の高さは……」

「はい、ナチュラルのものでは無いと検査官も言っています。それに頭脳はともかく、身体能力がコーディネイターより上をいくナチュラルなんて――」

「実に興味深いじゃないか。この者は今どこに？」

純粹に会ってみたいと思った。コーディネイターはどうしてもナチュラルを見下す嫌いがある。それも一つのナチュラルと和解できない原因になっている。

なら、コーディネイターの英雄がナチュラルになればどうか。自分たちを救った英雄が、自分たちの嫌ったナチュラルであれば、彼らだってナチュラルを否定できない。

また、ナチュラルも努力さえすればコーディネイターと同等の力を手にし、見下されるだけではないと気付ける筈だ。

「はい、すぐそこに待機させてあります。最悪の場合はクライン議長に判断を、と思っていましたので」

「それは好都合だ。君が彼と最初に応対したのも含めてね」

そして数秒もしない内に、ドアが開かれた。秘書と共に入ってきたのは、まだ年端もいかないような感じの少年。まあ、彼ぐらいのザフトレッドが数人いるわけだから、歳はあまり関係ないのだが。

「君が地球軍の艦に囚われていたという子か。大変だったね」

劳いの言葉を掛けてみる。取り敢えずの挨拶みたいなものだ。

「いえ、捕らえられたというよりは保護してもらった、と言った方が正しいでしょう」

しっかりとした言葉遣いを見ると、デュランダルは少し驚いた。見た目からすれば、もう少し幼く、そして緊張しながら話すものだ。

「ほう、それは。まあ、あまり横道に逸れる気はない。単刀直入に話そう。君は軍に所属するのだ」

これには、流石に驚きを隠せないようだ。今までいた地球の軍と敵対していた勢力に所属するわけだから、当然と言えば当然ではある。

「……軍にですか？」

「ああ、そうだ。亡命という名目はあるが、君は親もいなければ親戚もないこの地で、どうやって生きていくつもりかね？」

「それは……」

確かにすぐに決断しろと言うには渡っ酷な話だ。軍の情報部によれば、この子はニュートロンジャマーの散布によるエンジントラブル

が原因で墜落した飛行機の、唯一の生存者であるらしい。そして、その事故で親も失い、一人で一ヶ月以上のサバイバルをしていたのだ。

プラントを恨む理由がある彼にとっては、破格の優遇でここに住む権利もあるだろう。だが、この能力と存在を腐らせるのは勿体無いと、デュランダルは思った。

「すぐに決断しろとは――」

「わかりました」

言わない、という言葉を呑み込む。適当に対応しているのかと思いついて瞳を覗きこめば、決意の光と意志の強さが垣間見えた。

「そうか。よく考えたのかね？」

だがその考えまでは、瞳を見てもエスパーでもないのにわかるわけがない。確かめておきたかった。

「私はある事故で家族を失い、また地獄のような一ヶ月を過ごしました。それがザフト軍の行った、ニュートロンジャマーの散布が原因であることも、ここまで聞いた話で察しがついています」

拳を固く握りしめ、俯いている顔には影がある。そして濃い緑色の髪がまた大きな影の役割を果たす。

「でも、それが連邦が行った核攻撃の報いであることも承知しています。ただ、やられたからやり返す。殺されたから殺すの連鎖じゃ何も解決しやしない」

俯いていた顔があがる。瞳が潤み、目の端には涙が見えた。だが、
眼光は鋭く意志を湛えていた。

「それを止めるための手段があなたにあると言うなら、私は、俺は、
軍に所属することも、人を殺すことも厭わない。例え矛盾している
と言われても」

……決意は本物のようだ。

「よろしい。では早速入隊の申請にかかろう。では、名前を伺おう
か」

「あ、はい。クロード、クロード・タクスです」

「クロードか。では君はこれからナチュラルではなく、コーディネ
イターとして生活してもらう。不便もあるだろうが、軍にいる限り
は正体を明かすことは許されない」

ナチュラルだとわかってしまえば、デュランダル立場も無くなり
擁護できなくなる。それは、クロードの死をも意味しているのだ。

「わかりました。プラント最高議会議員、ギルバート・デュランダ
ル議員」

「なんだ、知っていたのかね」

地球にいる人にとっては、自分等プラントに住む数億の人々と同じ
だと思っていたのだが、意外なこともある。

「革新的な議題を出すことで有名ですよ。それに食えない人だって噂も」

こういう所はまだ子供といった所か。

「そういう事は、噂を聞いていても思っても口にしないものだよ。大人のマナーとしてね」

「す、すみません…」

少し短慮な所があるが、大きな少年である。考え方も立ち振る舞いも。軍に入れば、より一層磨かれるだろう。

「気にはしていない。そんなにすまなそうな顔をするな。では、明日から一応養成所に通ってもらう事になる。住居は近くのマンションの一室を借りてある。秘書のソフィアに案内せよう」

「そこまでして貰っていいのですか？」

申し訳なさそうに、身体を縮こませてクロードは尋ねる。あまりにも良くして貰い過ぎた。

「構まわんよ。君には権利がある筈だ」

「…ありがとうございます」

ボタン、と扉が閉じられると同時に、デュランダル顔には笑みが浮かんでいた。先程までの形式的な笑みとは違う笑みが。それは、何を意味しているのかは誰にもわからない。

PHASE-01 終わらせることができるなら…（後書き）

お読みいただきありがとうございます。色々史実と間違っているかもしれませんがご容赦下さい。

さて、あまり推敲もできなくて日本語を間違っていたかもしれませんが、どうだったでしょうか？

まだあまり慣れていないせいか、練られた文章には程遠い内容かと思えます。

PHASE-01は本編に入る前の内容ですが、早くも捏造設定しています。SEEDでは地球軍のMS五機の詳細な情報を、どこから得たのかを詳しく描写されていなかったのも、そこを加えつつ、クロードとあの二人を絡ませてみました。

それと、デュランダル…というか人物の言葉遣いがいささか上手くいきませんでした。脳内で声をあててみましたが、違和感バリバリです（^| ^）；

ではこんな拙いSSにお付き合い頂きありがとうございました。

PHASE-02 オープン…だと…

最新鋭ザフト艦、ミネルバ。女神の御名に恥じぬその佇まいは、観るものを時に圧倒し、時に魅了する。

だが、この艦は未だ軍の機密事項とされており、数日後ここアーモリーワンで行われる式典で漸くお披露目を迎え、軍としての初仕事を熟すことになる訳だ。

クロードはそのミネルバのMSデッキにいた。目の前に聳え立つのは、自分が設計した黒を基調としたガンダム。

「こいつの設定ももう終わったし…どうすっかな」

赤い丈長のジャケットを羽織り直しながら、クロードはパソコンから離れた。そして肩を回しながら、他のMSを眺めてみる。赤いザク・ウオーリアにブレイズ・ザク・ファントム、それと、

「…ああ、そう言えばあれはここには無いんだっけ」

このミネルバにはクロードの設計したラグナロクと共に、もう一つ機密となっているガンダムが存在する。それは今の主流となった分離式のMSで、核であるコアスプレンダーさえ破壊されなければ、予備のパーツを換装することで、すぐに戦線に復帰できるという優れたものだ。

それに乗るのは、16歳のザフトレッド。気性が荒く、暴走しやすいのが欠点ではあるが、パイロットとしての才能は確かなものだ。

「ちゃんと設定してんだろうな…。不安だ」

クロードは大戦を生き延びた経歴と、MSを駆ることも整備することもできるその腕を見込まれ、新造艦ミネルバのMS隊長として搭乗することになった。

ただ、それが決まったのはミネルバの進水式が取り決めになってすぐで、こちらに来てからまだ一週間程しか経っていない。こんな予定を押し付けるのは、あの議長しか考えられない。また少し頭が痛みだした。

「どうしたんですか？風邪ですか？」

後ろから声がする。振り向けば、赤い髪のザフトレッド、制服を改造（というよりは、下の制服をピンクのミニスカートに履き変えただけ）した女の子というべき容姿の、軍人らしからぬ者がいた。

「ああ、ルナマリアか。ちゃんとザク・ウォーリアの設定はしてあるか？」

ルナマリア・ホーク。今年養成所を卒業したザフトのエリートパイロットだ。生身での射撃はあまり得意じゃないが、MSでの射撃は得意、という成績がきてはいるが、何となく胡散臭い。

「ちゃんとしていますよ。シンと一緒にしないで下さいよ、隊長」

少しいじけたように頬を膨らますルナマリアは、見ている分には和むのだが、やはり軍人らしくは見えない。と言うよりは、軍人らしくしていかないのかと思う。

「悪い悪い、別にやってないと決め付けていった訳じゃないんだ。それと、平時には隊長と呼ぶなど言ったよな？」

「あ、そうでしたね、クロード」

「敬語もやめい。すんごい違和感があるぞ」

「…わかったわ、クロード」

「うん、よろしい！」

クロードは敬語を使われるのが苦手だった。堅苦しいし、何より距離を置かれているような気がしてならないからだ。

それを全員に言っではいるが、中々浸透してくれない。なぜなら皆から言わせれば、

「けど、特務隊に所属している人が敬語を使うな、なんて普通言わないわよ」

クロードの胸に煌めく白い紋章、それが彼を選ばれた者であると証明している。

特務隊とは、議長の意志の下に信頼の置ける軍人達に与えられる特権で（信頼の意から FAITHとも呼ばれる）、議長や軍の上層部の判断なしでも、自分の信念を優先することができる、というものだ。

隊というよりは、寧ろ一人一人の勲章みたいなものだ。隊として機能していないし、個人が力を持っているが故に纏まりに欠けるだろうから、現場の状況を見て自分の判断を活かせるようにと作られたもののだろう。

クロードはその特務隊 F A I T H に任命されている。勿論、授けたのはあの時は議員だったギルバート・デュランダル議長だ。

戦後の混乱したプラントを見事に立ち直らせ、戦前よりも富んだものに出来たのは議長の力があってこそだった。彼がいなければ、今もプラントは疲弊していただろう。

「特務隊だろうが、一般兵だろうが、ザフトレッドだろうが要は一介の軍人だろう？何も変わらないさ」

「まあ、本人が良いと言えばそれまでよね。私もあんまり敬語って好きじゃないし」

砕けた性格の彼女には、最初から好感が持てていた。今まで一緒に乗っていた女性士官は、色目を使ったり、取り入ったりして、正直好きになれなかった。やはり、女性はサバサバしている方がいい。

「だろ？じゃあ、俺はグラデイス艦長の所に行くから」

「あ、ねえ、後で昼食でも行かない？訓練以外は暇だし、退屈なのよねー」

ほとほとうんざりしているように溜息を吐き、頭を抑えるルナマリア。確かに息抜きも必要ではあるだろう。

「わかった。じゃあ、グラデイス艦長との用事が終わったら迎えに行くよ」

「ええ、部屋で待ってるわ」

艦長のいる部屋はMSデッキからは少し距離があった。部屋を向かう廊下を歩いていると、先程ルナマリアと話していた人物が前からだるそうに歩いてきた。大方寝坊して、これから設定に向かうのだろう。

「おい、シン。お早いお目覚めで」

皮肉たっぷりな敬語と、クロードの声を聞いたせいか、シンは気怠そうな表情を一気に引き締め、目の前から歩いてきたザフトレッド、特務隊 FAITH 所属の人物を見遣った。

「ク、クロード隊長！お、おはようございます！」

シン・アスカ。彼も今年養成所を卒業したパイロットだ。成績はMSに関する項目は極めて優秀、学力は：あまり触れないでこう。MSを駆ることに長けてはいるが、素行があまりよろしくなく、教官を殴ることもしばしばあったらしい。それでも最新鋭のMSと、エース候補としてミネルバに配属されたのだから、上層部の期待は大きいのだろう。

「早くない。もう昼飯前だ。それに平時は呼び捨てると言っただろう？」

シンはやってしまった…、といった感じの表情を見せた。おはようなんて挨拶をこの時間にする奴は、間違いなく寝坊したという事だろう。

「それにしてもお前、自分から墓穴を掘ったな」

バツが悪そうにシンは頭を掻いた。が、あまり反省しているようには見えない。

「う、言わないで下さいよ。自分でも気付いているんですから…」
自分のしてしまった事が恥ずかしかっただけらしい。恥ずかしがる前に、やるべき事が終わっていないことを反省するべきだとおもうのだが…。

「まあ、いい。さっさと設定済ませてこいよ。いつ何時、何が起こるかわからないからな」

世界は一応の平和を取り戻しはしたが、ザフトも連邦も武力放棄をすると言う段階には至っていない。どちらも牽制という意味で、新しい力を生み出し、また新しい火種を撒き散らしている。

「大丈夫ですよ。どんな奴らが来たって、俺と隊…クロードとルナマリアとレイがいるんですから」

余程自信があるのだろう。まだ戦場に出たこともない、シュミレーターでの体験しかしていない新兵が、中々恐ろしいことを言う。

「ほう、そうか。ならどんな敵が相手だろうが、シンは躊躇いなく落とせるんだな。例えば、俺が敵の諜報員だったとしても」

味方と思っていた人物が、本当は敵の諜報員で、情報を引き出している場面に遭遇、敵が逃走を計りMSを奪取した。

この場合の追撃は、その場で動ける者が行くべきなので、MSに乗って出撃しなければならぬ。そして敵の駆るMSを捕獲するか、落とすかしなければ、敵側に情報が漏れてしまう。

「そ、それは…」

「今ここで俺が裏切った場合、設定不足のお前のMSじゃ到底追撃なんてできない。だからちゃんと調整しなければいけないんだ。わかるな？」

理由が無いにせよ、MSの調整はやっておいて損はない。如何なる時に出撃の任を受けるかなんて、わかっていないのだから。

「…わかりました、すぐに調整を済ませてきます」

急ぎ足でMSデッキに向かうシンの背中へ、先程までの気怠さを含んではいなかった。

少しはわかってくれたのか、とは思うがどうにも軍人としての自覚が、この艦のクルーからは感じられない。確かにまだ戦場に出たことのない者ばかりだが、養成所で心構え等も叩き込まれるはずだ。自分が通っていた頃と、色々と変わってきているのかもしれない。

「まあ、いいか」

意味の無いことを考えるより、今は艦長の部屋に行くのが優先だろう。あんまり待たせるのも忍びない。

少し急ぎ足で艦長室の前まで辿り着いた。呼びだしの時間は1100。10分前には到着できたことに、少し胸を撫で下ろした。

グラデイス艦長が特に時間に厳しいと言う訳ではないのだが、自分の精神的によくないし、遅れて待たせてしまうよりは幾分マシだ。

「艦長、クロードです。御在室でしょうか？」

部屋の前の扉で声を上げる。やはり緊張するものだ。いつの時代でも言えることだが、年上の者、特に女性と会うとなると余計に気が負いが生じるものだ。

「良いわよ、入りなさい」

凜とした声が耳に届いた。了解も得たので扉の隣についている開閉パネルに手を当てた。

「クロード・タスク、呼び出しに応じ、参上致しました。用件は？」

「…ええ、ちょっと厄介事よ。あなただけにね」

タリア・グラデイス。新造艦ミネルバの艦長に抜擢された女性士官だ。特に経歴等の報告書は上がって来ないが、どうやら統率力に優れた人物らしい。

会って見れば成る程、と納得もできた。包容力の中に見える厳しさ、それでいて普段は何かに悩まされている姿が様になっている。

「厄介事…ですか？」

クロードは首を捻る。厄介事なんて別に厭わないが、この艦のクルー全員ではなく、個人的に何かの命令が下りたという事が何処か釈然としない。

「ま、この指令書を読めば嫌でも解るわ」

艦長から差し出された一枚の紙を、訝しみながら受け取る。そして指令者の印を見ると、身体中に戦慄が走った。

「――！！ぎ、議長の指令書！？」

驚きよりも愕然とする、といった方が正しいかもしれない。上手く言葉が出てこないのが、何よりの証拠だろう。

「ね、だから言ったでしょう。厄介事だって……」

額に手を当てて、艦長はうなだれた。机に肘をついた状態なので、余計に辛辣な印象を受ける。

視線を艦長から指令書に移す。議長からの指令だからといって、厄介事ばかりと決まっては……決まっていまいだろう。多分。

「……………、…艦長、これは遊んでるんですよね？俺達が困っているのを見て、面白がっているんですよね、あの人」

信じられない内容の指令書を見切り、覚えた戦慄が余計に大きくなったことにクロードは気付いた。気付いたとしても、対処する気も無いし、できそうにもない。

「どうやら遊びでもなんでも無くても。今日のシャトルに、オーブ代表がお乗りになったそうだから」

指令書の内容はこうだ。

――アーモリーワンでオーブ代表と会談する。クロード・タスクにはその随員と、オーブ代表を会談場所へとお連れする事を命ずる。

…目眩がしそうだった。このまま倒れても誰も文句は言えまい。艦

長もまた自分と同じようで、さっきの体勢のままだ。

アーモリーワンは軍事産業用のコロニーだ。ザフトのMSやMA、そして艦や船、重火器等を製造している。そんな機密だらけの場所に他国の代表、それもよりによってオーブのアスハ代表を呼んで会談しようと言うのだ。

「…艦長、お断りー」

「出来るとでも思っているの、クロード。あなたも良くわかつている筈よ」

「…だよなー、断れたらだれも頭を痛めていない、か」

議長の指令は何度となく無茶苦茶な物や、明らかにこちらが困ってしまうようなものばかりだった。それを断ろうとしても、のらりくらりと言葉で避け、正論やら議長の権限やらを使って、その命を遂行させるのだ。

それが悪い事ではないとは思う。ただ、今回の件は毛色が違い過ぎる。明らかに異端で、危険な会談だ。それに――

「会談もそうだけど、あなたにとってちょっと辛いんじゃない？ オーブ代表との対面は」

オーブの代表は20歳にも達していない。前代表のウズミ・ナラ・アスハの後を継いだのはいいが、本当に国を率いていけるのか、国の理想ばかりを追って窮地に立たされたりしないのか、とオーブ議会は少々の不満もあるようだ。実際、政治の実権は宰相であるウナト・ロマ・セイランが握っていると、専らの噂だ。

「いえ、それは大丈夫です。オーブのあれこれは、代表ではなく他の閣僚級の勝手な行動だったようですし。代表に対する恨みなんかは、多分…無いですよ」

「なら受諾…、でいいのね」

念を押すように艦長は尋ねてきた。後悔しないのか、と心配してくれているのだろうか？

「ええ。何より、受諾以外の選択肢が俺には見えません…」

「…それもそうよね…」

二人で大きな溜息を吐きだした。気苦労も徒労もとにかく、あの人が議長になってから、大幅に増えてしまった気がする。

「じゃあ、指令書の受諾は本国に通信しておくから。あなたはもう下がっていいわ」

時計を見る。部屋に入ってから一時間とちょっと。昼食の時間にもちょうど良い頃合いだろう。

「ありがとうございます。艦長はお昼、どうするんです？」

まだ文書をまとめ終わっていないのか、クロードが時計に目を移した際に、端末の操作を行っていた。その体勢のまま、タリアは言葉を返す。

「もうちょっとで目処が立ちそうだから、それまではここに居るわ」

新造艦では、艦長の仕事はどうしても増えてしまう。艦の装備や装甲、中の設備や備品、果ては士官室一つ一つの電力系の不良確認まで、あらゆることの把握が求められる。

その上、上層部に停泊権の取り付けや、入港許可用のコードなどの発行を行って貰うための手配まで。とにかく忙殺されることとなるのだ。

「そうですか、あまり無理はしないで下さいね。自分にも手伝えることがあれば、遠慮なく言って下さい」

顔色が悪いという訳ではないが、疲れが見え始めているのは事実で、あまり休んでいるようには見えない。

（副官があんまり頼りになりそうにないしな…）

この艦の副官の名前は、アーサー・トライン。26歳と副官にしては若く、上層部に期待されているのかとは思うのだが、何処か頼りない雰囲気漂っているのだ。

艦長がどう思っているかは別として、もう少し色々経験して欲しいところである。

「心配してくれてありがとう。その時は遠慮なく、力を貸してもらおうわ」

小さく微笑みが見えた。あまり心配はいらなそうだ。

自分に与えられた士官室に戻り、クローゼットを開ける。士官服以外の服が申し訳程度に並んでいるのを見ると、近頃買いい物にすら行

けていないことに気付いた。

「進水式が済んだら、買い物に行くのも悪くないかもな」

ミネルバだって、早速実戦に投入される訳ではない。ちよつとの休暇ぐらいなら、許されるべきである。

適当に楽な格好に着替え、部屋を出る。外に出る訳だからそれなりのものではあるが。

そして自分の部屋の上の階に上がる。そこが主に女性士官の部屋がある階だ。その一室のパネルに手を置く。呼び出しのブザーが中になったのが確認できた。

『はい?』

「ルナマリア、クロードだ。遅くなってすまない」

告げると、扉がスライドした。出てきたのは私服のルナマリアだ。黒いカットソーにピンクがかった赤いショートパンツ、正に活動的なルナマリアにぴったりの服装だった。

「お、良く似合ってるじゃないか。じゃあ行こうか」

横を向いて格納庫へ向けて歩を進めた時、下の階からドタドタと走ってくる足音が聞こえ始めた。そして現れたのは、少し髪の毛が乱れたシン・アスカであった。

「隊…クロード!ここに居たんですか、探しましたよ」

「ど、どうしたんだよ、息を切らして…」

シンはチラッとルナマリアを確認してから、何かに納得したように頷き、険しい表情でクロードに詰め寄った。

「ルナだけずるいですよ！お昼奢ってもらうなんて！」

……少しの間、時間が止まった気がした。クロードとルナマリアでは理由が違うが。

「……シン？それはどこから聞いた話だ？」

何やらおかしい感じに誤解されている気がする。確かに自分が代金を持つつもりではあったが、何も奢るつもりで食事に行く訳ではないし、誘ったのはルナマリアだ。

ルナマリアが奢らせる目的で自分を誘ったのなら、シンの言葉にも間違いはないが…。

「ヨウランとヴィーノに聞いたんです。MSデッキで食事に行く約束を二人がしていたって！」

「昼食に行くのは本当だが…、別に奢るために行くわけじゃないぞ」

正直に話したつもりだった。だが、シンはどういった訳か見当違いなことを言い始めた。

「でも、クロードのことだからルナの支払いだって持つ筈です。それじゃ不公平ですよ」

もうお手上げ状態に近かった。こんなにしつこく理屈を捏る奴だとは思っていなかった。

と言うよりは、外に出て食事をするのが羨ましい…のか？

「…わかったよ、一緒に食事に行こう。それに奢ってやる」

隣のルナマリアの身を刺すような雰囲気は気にはなるが、何を言っただ所でシンが納得するとは思えない。だったら承諾するしか道がない。

「流石、クロード隊長！ついでにレイも誘ってきますね！」

「……空気読みなさいよ、バカ！」

誰宛てなのか微妙にわからないルナマリアの呟き。自分でないことを願おう、とクロードは少し開き直るのだった。

「レイ！」

呼び出しのブザーも鳴らさずに飛び込んできたシンは、レイを端末の前で見つけたと同時に、急かすように早口に言葉を吐き出す。

「着替えて、早く！」

何事かの緊急事態かと身構えたのだが、どうやら違うようだ。何もわからないままではどうしようもないので、レイは一心不乱に着替え始めたシンに冷静に聞いてみる。

「何を急いでいるんだ？理由を言え」

問い掛けてみても、シンは変わらずにデニムに足を通している。と、

レイははたと気付いた。

シンは着替えろと言ってここに入ってきた。そして私服へと着替え
ている。という事は、軍の仕事というわけでは無いようだ。

「私用か？なら、俺はパスー」

「いいから着替えろって。クロードが昼飯奢ってくれるんだからさ」
既に着替え終えているシン。ここまでの所要時間は30秒、早過ぎ
である。

そのシンはレイの背中を押しながら、クローゼットへと誘導する。

「ちょっと待て、行かないと言っているだろう！」

いつもの冷静なレイとは対照的に、少し苛立ちが含まれた声だ。そ
れでもシンは気にせず、彼のクローゼットを勝手に開け、適当な服
を放り投げた。

「はい、それに着替えて。クロードもルナも待ってるんだからさ」

……最早強制の類いとなってきた気がする。こいつは決めた事は頑
として変えようとしなから困ってしまう。

レイは大きな溜息を吐き出してから、渋々と着替え始めた。その横
で囃し立てるシンの声を聞きながら。

二人が着替えを終えて、ミネルバの格納庫へ向かおうと廊下の曲が
り角に差し掛かった時、遠くにルナマリアの姿があった。

「おい、ルナ」

シンが呼びかける。ルナマリアはチラッとこちらを確認はしたが、すぐにあらぬ方向へと顔を向けてしまった。

不審に思いながらも、シンとレイはルナマリアの近くまで歩み寄った。するとルナマリアは、レイの方だけに顔を向けた。

「クロードが車もって来るから、私たちはタラップで待ってましよう」

それだけ告げるとスタスタと歩いていこうとしてしまう。シンはそんなルナマリアの態度が全く解せなかった。自分が何かしたのだろうか。

「おい、ルナ。何怒ってるんだよ」

「怒ってなんかないわよ！」

：どう見たって怒っている。特に思い当たる節がないシンにとって、あまりにも理不尽な態度だった。

「ルナマリア、ちょっと聞きたいんだが」

そこに落ち着いた声が割り込んだ。レイは大体シンが何をしたか想像できた。後は言質をルナマリアから取りたい。

「どういった経緯でクロードと食事に行くことになったんだ？」

既に三人はタラップに着いていた。歩きながら話していたので当然

ではあるが。

「…私がMSデッキでクロードを誘ったのよ。一緒に昼食でもどうですか、って」

レイにはすぐにピンときた。そして思う。完全にシンが悪いと。

「シン、今回はお前が悪い」

「はあ？何でだよ」

明らかに不服そうな表情をシンは見せた。それを諭すようにレイは述べる。

「いいか、ルナマリアはクロードと二人で食事をしたかったんだ」

「はあ？」「ち、ちょっと…」

片方からは困惑、片方からは当惑の声が上がる。だがそんな事は素知らぬといった感じで、レイは言葉が続ける。

「お前はそれを邪魔した。ルナマリアが怒るのも当然だ」

自分だって二人でいたい時に邪魔をされれば、そいつに怒りをぶつけてしまうだろう。シンはそれを理解していない。

「と言う訳だ。俺とシンは行かないと、そう伝えてくれ」

顔を赤くし、もじもじしているルナマリアにレイは告げた。同期のよしみで気をきかせてやろうとしたのだ。

「…今更帰るなんて言うなよ」

エンジンの音と共にタラップへ入ってきた、四人乗りの黒い車から降りてきたクロードが言う。だが、レイはシンの背中を押し、無理矢理帰ろうとしていた。部屋の時とはまるで反対の光景だ。

「しかし、クロード」

どう考えたって、この二人で食事を楽しんだ方が良いに決まっている。二人がこの短い間にそういう関係になったのなら尚更だ。

「人の恋路を邪魔するのは――」

「だ、誰の恋路よ!」

ルナマリアの顔が更に赤くなる。最早トマトとそう変わらないのではなからうか。

「あのな、俺はもう全員分の外出許可も取って来たし、今更それを取り消すのも面倒なんだ」

クロードは額に手を当てた後、周りを見回す。どこかそれが様になっっていて、この人がMS隊の隊長としてここに来たのだと、思い知らされるようだった。

「それに、ここの四人でチームを組むんだ。今の内に親睦を深めてもいいだろう?」

「そうだよ、レイ。クロードの言う通りだって!」

（ルナマリア、お前苦労しそうだな…）

率直にレイはそう思った。クロードは別に大した理由もなく誘いに乗ったのだろうが、そこが残酷な所だ。それだけでも頭が痛いのに、シンにも邪魔されてはどうしようもない。

「そうよ、クロードの言う通り。皆で食べに行きましょう！」

ルナマリアがそう言ってしまえば、誰も断る理由がなくなる。ならここは素直に従っておくべきだ。

「ほら、行こうぜ」

クロードが車に乗り込む。三人もそれに続き、助手席にルナマリア、後部座席にシンとレイが乗る。特に意識した編成ではなかったが、こういう風に落ち着いたのは幸いだったとレイは思った。

「で、どこに行くんです？」

車が走り出すとすぐにシンが尋ねた。食べにいく場所は知っておきたいのだろう。

「うん？ ああ、俺もアーモリーワンは詳しくないから、ちょっとネット調べておいた。確か、ファミリアっていう店だったな」

「ファミリア？もしかしてファミレスですか？」

ルナマリアがおっかなびっくりで聞いてくる。自分との食事に、ファミレスなんかに入れて行かれたら堪ったもんじゃないだろう。そ

れはクロードだってちゃんとわかっている。

「勿論、ファミレスなんかじゃないよ。列記とした高級レストランだ」

「え、でもこの服装じゃ…」

至極最もな意見である。ルナマリアの困惑を余所に、クロードは笑みを浮かべている。

「ああ、入れないかもな」

「じゃあ…」

「早く戻りましょうよ！」

そこでルナマリアは気付いた。もし入れないとしたら、急いでミネルバに戻るか、街の中心街へ向かうだろう。だが、クロードは海岸に向けて車を走らせることを止めていない。

「気付いたか？今から行くレストランは、高級らしいが敷居が高い訳じゃない。高級な料理は出すが、普段着で寛げるのが自慢なんだとさ」

それを聞いて安心できたが、次に湧いてきたのはからかわれたことへの不満であった。

だが、何となく口にするのは躊躇われた。何故かはわからないが、今クロードを攻めることは憚られた。

（きっと奢ってもらうからよね、うん）

そう結論付けて、ルナマリアは目を閉じた。何やら考え過ぎて自分自身がよくわからない。

もやもやと渦巻く心の中。クロードを昼食に誘ったのは、特に考えもないことで、一緒に行くことになって最初に感じたのは嬉しさであった。

与えられた部屋に戻る時にも、何を着て行こうとか、どこへ行こうとか、昼食の後はどうしようとか、そんなことばかり考えていた。軍人として、あまり褒められたことではないが、外出できることと相俟って喜びは倍増していた。

（はあ、何が嬉しかったんだろう…）

目の前に手のこうを乗せる。目を閉じているのもあって、暗闇が広がる。そのお陰か、幾分かは落ち着いた気がする。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

運転をしているので、クロードは前を見ながら尋ねてきた。ちゃんと周りを見ている証拠だ。

「大丈夫…。ちょっと…考え事していただけだから」

「そうか…」

そこからクロードとの会話はなかった。聞こえてくるのはシンとレイの会話だけ。時々、その会話に混ざるクロードの声も確認できた。

だが、その声もだんだん遠くなっていく。そしてすぐに意識を手放した。

「ほら、着いたぞ」

車で30分。ちょうどいいぐらいにお腹が空くような所要時間だった。その道中疲れていたのか、ルナマリアが寝てしまったので、クロードが起こそうと身体を揺すった。

「…う、ううん……」

余程深く眠っていたのだろう、呻き声と共に目覚めたルナマリアは虚ろな瞳をしている。

「ああ、クロードだ…。どうしたのー？」

「おい、ちゃんとしろ！昼ご飯抜くのか？」

瞳を見る限り、徐々に覚醒しつつあるようだ。だが、未だに動きはかなり緩慢だ。

「いい加減にしろよ、ルナ。夜更かしでもしたのかよ…」

呆れたように呟くシン。今日の朝、寝坊したのはどのどいつだと突っ込みたくなったが止めておいた。

「多分違うぞ、シン。大方、クロードと二人でこられなくて不貞寝といったところだろう」

恥ずかしくなるような事をさらっと言い放った、肩につくぐらいの

金髪で片目が隠れた少年が、ブレイズ・ザク・ファントムのパイロット、レイ・ザ・バレルだ。

レイもシンとルナマリアの同期で、MSの操縦技術、頭脳、それに統率力と全てに優れた理想的な兵士だ。

本来ならレイがミネルバのエースだろうと、クロードは思っていたが、インパルスを与えられたのはシンであった。上層部には何か思惑があるのだろうか？

「な、何言ってるのよ！そんな訳ないでしょ！」

と、先程のレイの言葉で寝ぼけていたルナマリアは完全に覚醒したようだ。

（そんなに力強く否定しなくても良くないか…？）

少し悲しい気持ちになったが、これで漸く飯にありつくことができ。ちよつと涙が出かけたのは内緒だ。

そんなクロードの事など露知らず、ルナマリアはレイに向かって文句を並べている。が、レイは何食わぬ顔顔で相手にしていないようだ。

「ほら、そろそろ入ろう。シンが待ちくたびれてるぞ」

ようやく、レストランにて昼食にありつくことが出来た。料理はコースで、もう殆どの料理を胃に収めていた。量も適度で味も良く、満腹になりづらい拔群のバランスだった。流星に高級レストランという箔がつくだけはある。

「そう言えばクロードはどここの出身なんです？」

ナイフでロースを斬りながらシンが聞いてきた。このタイミングで聞きたいことなのだろうか？

「どこって…、そんなこと知りたいのか？」

するとシンは首を縦に振った。ルナマリアも聞きたそうにこちらを見ている。

「オーブだけど」

ただ答えたただけだった。取り繕いも嘘もなかったのだが、一気に空気が冷たくなっていくのを感じた。

シンのナイフがピタッと止まる。フォークを持った右手がテーブルに叩きつけられる。まるで消せない憎しみという業火を振り撒くように。

「オーブ…だと…」

眩きはこの場を凍てつかせるのに十分だった。飛び散った料理が床に落ちたのも、今は気にしている場合ではない。

誰もが無言で、手を動かす事さえ億劫に感じてしまう程の空気の重さ。シンが放つ強烈な雰囲気がなしえる業だろう。

「くっ……！」

立ち上がり、エントランスに向かっていくシン。もう止められやしないだろう。

「すみません、お勘定は置いていきます」

壊してしまった食器の分の代金も置いて、クロードはシンを追い掛けた。それにレイとルナマリアも続く。未だに店の中は静まりかえっていた…。

そこからはとにかく駆け足で事が過ぎていった。シンはだんまりを続けて車から動かないし、そのお陰で車内は先程より更に重たい空気が流れていた。それだけを憶えている。

ミネルバの格納庫に車を停めて一息吐く。あまりにも心の負担になった空気を、肺から思いつ切り出したかった。

キーを外し、ドアを開ける。そこにはタラップで降ろした筈のルナマリアが居た。自分がかかなり長いこと車で休んでいたことがわかった。

「シンのあれ、気にすることないわよ」

あれ、とはあの急変した態度のことだろう。あの激しい憎悪を内包した紅い瞳は、戦慄を憶えるのには十分だ。だが、あの変容はちょっと普通じゃない。オーブで何かあったというのか……？

「あいつね、オーブのオノゴロで家族を亡くしたのよ。MSの流れ弾に当たってね」

それが二年前のオーブ戦役での出来事だと、容易に想像ができた。オーブが自国の理念を守るために行った戦争だが、そのせいでたくさんの方々が亡くなったとは聞いていたが、その中にシンの家族が含ま

まれていたとは…。

「で、あいつは理念を守るために戦ったオーブを恨んでいる、と」

わかった気がする。あいつの瞳が宿す戦慄の正体が。多分、オーブの理念と同時に、その時に力がなかった自分までも恨んでしまっているのだろう。だから、時が経ってもその悔しさが消えずに、憎しみもそれに呼応するように、日に日に増してしまっているのだろう。

止められない負の連鎖、どうしようもない程の絶望、そして苦しみ。シンの感情をクロードは思い知らされ、また同じだとも思えた。

PHASE-02 オープ…だと…（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回は本編の繋ぎの話として書きました。というよりは、シン達とさっさとからませておいた方が書きやすいんじゃないか？というのが本音だったりするのですが…まあ、そこは気にしないで下さい。

では、ありがとうございました。

PHASE-03 未熟な代表かもしれない…（前書き）

PHASE-03にて、カガリが登場しますが、彼女の性格と科白が大分変わっております。

原作通りでなきや嫌だという方は、ご覧にならないことを推奨いたします。

PHASE-03 未熟な代表かもしれない…

プラントコロニー、アーモリーワンは俄かに活気づいていた。式典に向けての準備に人が行き来を繰り返し、工廠の出入りも活発だ。それだけ大きな式になるという訳だ。

「そろそろかな…」

シャトルの発着口にクロードは居た。理由は勿論、ここに極秘に對談にくるオーブ代表をお迎えにあがるためだ。

オーブ代表、カガリ・ユラ・アスハ。ヤキンドゥーエ大戦の英雄にして功労者。彼女の乗ったアークエンジェルが、暴走する双方の戦いに介入することで戦いを沈静化したのだ。

その彼女は帰国後、すぐに代表となった。しかし彼女の影響力を傘に被り、自分達の政治的見解を無理矢理通そうとする連中が後を絶たないらしい。

だが、毅然とした態度でそれを突っぱね、代表としての責務を果たそうとはしているらしい。セイランの傀儡は中々突っぱねられないらしいが。

やがてシャトルが入港してきた。到着は時間通りに行われ、開閉ハッチが開く。タラップの階段を降りてくるのは、バーガンディのスーツに身を包み、気品すら感じられる佇まいを見せる代表の姿。だが、クロードの瞳はそちらではなく、もう一人の随員の方に向いていた。

その随員もこちらに気付いたようだ。サングラスをしているせいで、どんな瞳をしているかはわからないが、明らかに同様しているのがわかる。

それもそうだ。クロードもかなり驚いている。そいつは前大戦で唐突に消え、行方をくらました一人。大戦時の前半はザフトレッドとして、連邦から四機のMSを奪い、アークエンジェルを迎撃したクルーゼ隊の一員。後に父の考えに反発し、ザフトに対し謀反を起こし、アークエンジェルと共に終戦へと導いた一人、アスラン・ザラに間違いなかった。

が、それは今言及する時ではない。そう自分に言い聞かせ、クロードは与えられた仕事に入る。

「オーブ代表、カガリ・ユラ・アスハ様ですね？」

目の前まで歩き話し掛ける。代表もこちらに気付いたようだ。シャトルのタラップを下ってくる。

「特務隊 FAITH所属、クロード・タスクです。今日の会談場所まで案内致します」

名乗り、敬礼をした。それに呼応するように代表は少し表情を崩した。

「ああ、よろしく頼む」

柔らかい雰囲気漂う。クロードが想像していたより、ずっとしつかりした代表のようだ。

「で、そちらの随員の方は？」

クロードの懸念事項の最優先は、今のところそこにあった。ザフトに謀反した彼がここにアスランのままで来たのか、はたまた偽名を使っている正体を知られたくないのか、確かめておかねければならなかった。

「ああ、彼はアレックス・ディノ。会談の場にも出るようになってる」

（アレックス・ディノ：ね。やっぱり偽名使ってるのか）

オーブでは知らないが、こちらでその名前を出せば、伝説のエースと騒がれるのは必至だし、旧ザラ派からは命を狙われかねない。確かにこちらの方が得策だろう。

「では代表、こちらです」

手を伸べて車を停めてある場所へと誘導する。車は簡素なジープしか容易できなく、仮にも国の代表を迎えるようなものではなかった。そこに、クロードは解せないものがあつた。

この式典の準備で忙しく、ただでさえバタバタしていて、しかも機密も多い工廠地帯で、何故会談をする必要があるのだろうか。会談ならもっと相応しい場所があるだろうに。

「港も工場も騒がしいな、何かあるのか？」

「ええ、軍の式典が」

汎用型MSのザクが前を横切る。クロードは速度を少し落としてそれをやり過ごす、すぐに先程と同じ速度に戻す。それを眺めてか、代表はぽつりと言葉を落とす。

「このような状況で、議長の心遣いには痛み入る」

嫌みにも聞き取れる言い方だった。それに慌てたのはアレックスだった。

「緊急かつ、内密にとお願いしたのはこちらなのですよ」

確かに内密に会談をしたいのなら、ここはうってつけであろう。周りは人口の海、人口もさほど多くなく、おまけに工場地帯とくれば、情報の漏洩を防ぐにはちょうどいい場所だ。

だが、あの議長がそんな真っ当なことでのこの場所を選んだとは思えない。何となく今から嫌な予感が頭を掠めるのだが、気にしていたら精神が持たない。

「アレックスさん、気になさらないで下さい。こんな場所で会談しようとする方も、配慮が行き届いているとは言えませんから」

議長の胡散臭い笑みが浮かび、睨みつけて掻き消す。全く、色々な厄介事を熟してきたが、今回程異色なものもまず無いだろう。

「それに国賓級の待遇でお迎えしなければいけないのに、式典の準備が遅れていて、私一人でとなってしまうた事をお詫びしなければなりません」

車の運転をしているので頭は下げられないが、それ相応の誠意を込

めたつもりだ。

「いや、これくらいで丁度良い。あまりやり過ぎの方が困るしな」

「そうおっしゃって頂ければ幸いです」

そのまま車は工廠の建物の一つに停まる。工場とは比較にならない程小さい棟、ここで内密な会談をする訳だ。

会談の内容は一兵卒に過ぎないクロードに知らされてはいないが、大体の予想はつく。前の大戦を繰り返さないための軍備の縮小的な話だろう。

「失礼します」

短くノックを二つ。中からの返事を待たずに開いた。中に居なかったら、それこそオーブに対して失礼になるわけだから、居てくれなければ困る。

「おお、代表。御足労頂きありがとうございます」

笑みを浮かべて立ち上がるギルバート・デュランダルが中に居てくれて、クロードは安堵の溜息を吐いた。この人はどんな状況でも自分のしたい事をしてしまう、それが大体他人には良くない方向に動くからほとほと頭が痛くなる。

「時間を頂きありがとうございます、デュランダル議長」

二人が握手を交わす。対等な立場での会談だという事を印象づけた。

会談が始まる。クロードはデュランダルの後ろに立ち、アレックスはカガリの後ろに立った。

「で、火急な用事とは何ですか？」

明らかにわかっているだろうに。ほくそ笑む議長を見ると、代表が可哀相になってくる。

「オーブは前々から、大戦の折に我が国から流出した人材や技術の軍事的利用を、控えて頂きたいと再三申し入れている」

（オーブよりの流出、ね…）

前大戦の末期にオーブからたくさんの方のコーディネイターが戦火を逃れるために、プラントへと移住していた。その中には技術者等も含まれていて、その技術がザフトの軍備に使われているのだ。

オーブの技術が使われて戦争にでもなれば、オーブは連邦からプラントに組していると思われてしまう。そうなれば中立を保つのは難しくなり、オーブの一国の力ではプラントの属国になってしまう事も考えられる。
だが…。

「我々はオーブの難民となりうる者達を受け入れました。その者達が、自分の力を存分に振るえるようにするのは当然のことだと思いますが」

尤もな言い分だ。こうやってでも仕事を与えて自分達で賄えるようにしないと、難民に掛かるお金ばかり増えてしまう。そうするとプラントの疲弊が広がり、連邦に（特にブルーコスモスに）後ろを見

せることにも為り兼ねない。

「だが！」

言い募ろうとする代表に、手を挙げて静止を促す。：何か嫌な予感がするのは、自分の思い過ごしだろうか…。

「代表、ここは狭すぎます。外へ出ませんか？」

「…議長」

咎めるために声を掛ける。ただでさえ他国の代表が機密だらけの中にいると言うのに、工廠内に出るとは如何程の用件なのか、と聞きたくなる。

「前大戦の功労者である彼女に、色々意見を聞いてみたくてね」

「……はあ、どうなっても知りませんよ」

（前大戦の功労者と、議長はおっしゃった。英雄ではなく。気付いているのか…？）

考えていても仕方ない。扉を開けて出て行こうとする二人を追い掛けて、クロードとアレックスは歩き始めた。同時に、肘で小突かれた。

「おい、お前がくるなんて聞いてないぞ…」

「俺だって、お前がくるなんて知らなかったんだ」

クロードとアスランは一時期、一緒の艦に乗っていたことがある。立場的にはアスランが完全に上で、イージスのパイロットとして活躍していた。一方クロードはMSの整備が主で、一見二人の交流はないかのように思うが、MSの調整や設定の関係で話すことが増えて、いつの間にか仲良く飯を食べる間柄になっていた。

「議長は何を考えておられる？」

「知るか！俺が聞きたい」

何がしたくてここを会談の場所を選んだか、何が聞きたくて代表を外に連れ出したか、はっきり言って謎だらけなのだ。

二人を追い、外に出た。もうかなりの距離があったが、あちらも特に気にしていないようだ。

急いで追いつく。警護の任を疎かにして議長が何者かに襲撃でもされたら、目覚めが悪くなってしまう。

「お気に召しませんか？姫」

議長は何かを確かめているような気がする。姫、という単語からそう思った。

代表と先程まで使っていたのに、いきなりの呼び方だ。代表も馬鹿にされていると感じているに違いない。

そこで代表の顔色を窺ってみると、どうしたことだろうか、少しの憂いを含んだ笑みを浮かべていた。

「姫、か。確かにあなたから見ればそうなんだろう。未熟過ぎる代表だ」と

俯く代表の顔には、悲しみが溢れていた。自分の力の無さをわかっているから、こうして代表自らここに訪れたのだろう。誠意を見せて、本気だと知らしめるために。

「だが、未熟だとわかっているからこそ、こうして話さなければならぬ。」

強すぎる力は災いを呼ぶと！また新たな力を造ると！」

正に魂の叫びと言うのだろうか。代表として、自分達の技術で生み出される力が、どれ程の不幸を生み出すか。また、一個人として争うばかりの世界を正したいと。

「そうですね、代表」

議長 of 言葉遣いが元に戻った。試した結果、カガリ・ユラ・アスハは代表としての責務を果たしていると認めたのだろう。

「確かにこの世界は争いを続けています。ナチュラルとコーディネイターだけじゃない。ナチュラル間の民族紛争、コーディネイター間のコロニーでの内紛。挙げ出したらきりが無い」

議長の顔に変化は無いが、彼の中にも渦巻く思いがあるのだろう。拳が握られている。

「だからこそ、それを牽制するための力が必要なのです。それを否定するのは、オーブも無理でしょう？」

オーブも軍備の拡張までは行っていないが、兵力を削ることまではしていない。確かに否定はできないだろう。

「否定はしない。連邦も更なる力を造ろうと躍起になっている。それを牽制する意味では、新型の艦やMSの量産の意味もあるだろう」

連邦の非人道的な行いの噂は耳にしている。小さな子供を母親事誘拐し、薬によってコーディネイターと同等の能力を持つ兵士、いや兵器に仕立て上げるという残虐な行いを。

「だが、その争いが終結したとしてその力をどうしようとお考えか！その力で抑えつけ、属国でも増やすつもりか！」

カガリの激情を受けても、デュランダルは涼しい顔を崩さない。そして残酷な言葉を紡ぎだした。

「世の平穏が保たれるというのなら、私は独裁者と言われてもいいと思っています。それぐらいの覚悟を持って、力を造っているのです」

毅然とした表情で、議長は言った。並大抵の覚悟じゃない。その力の使い方さえ間違えなければ、戦いの抑止力になり得る。自分自身がどんな汚名を受けようと、世界の平和を保とうとする姿勢だ。

二人の間に静寂が訪れる。議論をぶつけ合ったのだ、二人の心に渦巻く物を確かめているのだろう。

「カガリ！」 「議長！」

悪い沈黙ではなかった。だが、静けさはいつまでも続かなかった。

一棟の工場が、内部からの瞬間的な光で爆発を起こしたのだ。

その爆風に襲われそうになる両人を、クロードは腕を引っ張り、アレックスは飛び付いて抱きしめながら転がることで回避した。

（くそ、こんな時に何だってんだ！）

状況を確認するため、音のした方を振り返る。爆発による火災と誘爆により、そこは戦場のように燃え上がり、警報があちらこちらで鳴り響く。

そして見つけた。噴煙の中に立つ三つの人型のシルエット。開発に携わっていた訳ではないが、これがここにある事は知っていた。そして迂闊だった。ここが襲われることが、想定できていなかった。

「あれは…まさか…」

「ガンダム……」

わなわなと震える代表の瞳。アレックスも拳が震えていた。

その二人を他所に、救助にきたジープにデュランダルを乗せ、そして二人にも他のジープに乗ってもらう。

「クロード、君はどうするのかね？」

「俺はあいつらの追撃を行います。全力で捕獲を試みますけど、最悪破壊します」

一応、ザフトの戦力になる物だった。無事捕獲できればいいのだが、

状況次第といったところだろう。

「ああ、それで構わない。頼むよ」

二つのジープが走り去る。残ったクロードは、ミネルバの艦橋に通信を入れる。

「ミネルバ、聞こえるか！」

『はい、こちらミネルバ』

すぐに返事が返ってきた。どうやら工廠の様子には気付いているようで、慌ただしく指示を飛ばす、グラデイス艦長の声が後ろに聞こえた。

「メイリンか、こっちの状況は把握しているな？」

メイリン・ホーク。彼女も今年から軍属となった新兵の管制官だ。ホークというラストネームの通り、ルナマリアとは姉妹の関係にあり、メイリンは妹だ。管制官としての能力は高く、ハッキングの技術も目を見張るものがある。

『はい。クロードさんの現在位置も確認済みです』

「よし、流石だ。なら、こちらに向けてラグナロクを射出してくれえっ！と驚く声が聞こえた。それもそうだろう、シンのインパルスのような分離式のMSならともかく、クロードのラグナロクは普通のMSだ。」

「大丈夫だ、ラグナロクには自動航行のプログラムが組んである」
どんな状態で戦闘になるかわからないので、クロードはあらかじめ手を打っていたのだ。その一つがこの自動航行プログラムだ。

『わかりました、すぐに射出しまー』

『ちょ、ちょっと待って、クロード』

グラデイス艦長の声だ。明らかに焦りが声に反映している。

『あなたのMSもシンのMSもザフトの機密事項なのよ！今出すのはー』

「タリア・グラデイス！」

恫喝が飛ぶ。クロードの声に言葉を飲み込んだ。流石のタリアも、これには瞠目して沈黙するしかなかった。

「こういった緊急事態の時に優先すべきことはなんだ？」

『…その時に出来得る限りの最善を尽くすこと』

タリアの答えに満足そうに笑みを一瞬浮かべたが、クロードはすぐに表情を引き締める。

「そうだ。なら、やるべき事はわかるだろう？」

『メイリン、ラグナロクを射出！シン、レイ、ルナマリアを出して！』

艦長は決心したみたいだ。これで艦長を咎めると言うのなら、自分がちゃんと肩代わりしようとかクロードは考えていた。FAITHという特権を使って。

その間にも、三機のMSはそこら中を破壊してまわっていた。工場は例外なく燃やし尽くされ、港はまだ被害を受けていないが、移動手段を潰さずに置くとは思えない。

「くっ、早く来い！」

もう射出済んでいる筈だ。なら待つしかないのだが、この時間がどうしてももどかしい。また、工場の一つと複数のMSが大破した。

そのMS群の中に、まだ大破していないザク・ウォーリアがぽりつとあった。それを破壊しようとか三機の内の一つ、漆黒のMSガイアが詰め寄る。誰も乗っていないそれが、破壊されるのは必至だった。

だが、それは叶わなかった。ザク・ウォーリアの瞳に起動を示すピントがかった光が灯る。そして急発進したかと思いきや、ガイアの攻撃を軽々と避け、ビームアックスを盾から取り出して反撃に出た。

（動きが洗練されている…。こりゃあいつの可能性が高いか…）

だが、立ったザク・ウォーリアに気付いた他の二機、水色のアビス、緑のカオスが順に詰め寄る。明らかに多勢に無勢だ。

そしてザク・ウォーリアに三機が散開して攻撃を仕掛け始めた時、漸く待ちに待った物が現れた。

黒のボディに銀のリフレクターを背中に背負い、優雅に舞い降りた

それは、クロードの前に降り立ち、膝をついて手を差し延べた。それを伝い、クロードはコックピットに乗り込む。そして思う、もう少しプログラムせねばと。

そして急いで操縦桿を握る。ザク・ウォーリアに乗っているであろう友を助けるために。

「行こうぜ、ラグナロク！」

神々の黄昏を意味するこの名前を授かったのは、この戦いだらけの世界に黄昏を、平和な未来の日の出を、と祈っての事だ。

そして背負う二つの砲門。使うことで、全てに決着がついてしまう程の威力を秘めたこの兵器を、クロードはラグナロクと共に背負うことを決めた。大切な物を守っていくために。

ザク・ウォーリアは苦戦していた。ただでさえ性能差が歴然だというのに、三機の最新鋭のMSを相手に立ち廻らなければいけなかった。

正面のアビスの攻撃を避ける。だが、背後からカオスはビームサーベルを振りかざす。それをビームアックスで防ぎ、弾き返す。ガイアがMAに変形し、肩のカリドウス改複相ビーム砲を放つ。ザク・ウォーリアは回避と共に、ビームアックスを投げつけて攻撃する。だが、ひらりと避けられてしまう。

ちっ、と短い舌打ちが聞こえた。後ろにいるカガリにも聞こえたのだから、相当切羽詰まっているのだろう。

また攻撃を避けた。だが、どんどんと窮地に追い込まれていた。

「アスラン！」

カガリが叫ぶ。回避と共に、カオスのビームライフルが襲い掛かってきたのだ。回避行動の終わっていないザク・ウォーリアに、それを避ける方法はない。直撃を覚悟し、カガリを抱き抱える。そして目を閉じた。

ビームが弾け飛ぶ音が聞こえた。だが、その衝撃は襲ってこない。目を開けてみると、ザク・ウォーリアの前に黒いMSが立ちはだかっていた。

「おいアスラン、無事か？」

『クロードか！？俺は大丈夫だ』

間一髪、カオスの放ったビームライフルの間に割り込み、ラグナロクの装備の一つ、他目的可変型ビームソード『ガラディン』で弾き飛ばしたのだ。

そして前の三機を見据える。新たなMSの登場に少し混乱しているようだ。

『おい、新型は三機だけじゃなかったのかよ！？』

『俺だって知らねえよ！とにかくやるしかねえ』

明らかに自分より年下の少年たちの会話。それをラグナロクのプログラム、周辺電波集音機能が拾ってくれた。はっきり言ってプライベートも引ったくれもないが、情報を手に入れることで戦局は大き

く変化する。そのための機構だ。他の目的では使用する気はない。

「ほら、混乱している暇なんかあるのか？」

ガラディンを翳し、ラグナロクを駆る。アビスに向けて振り下ろすと、後ろに避けた。クロードはすぐさまビームマシンガンを脚の辺りから引き抜き、追撃を放つ。それを防いだのはカオスで、あちらも二機でアビスがビームランスを、カオスがビームサーベルを抜き、連携で襲い掛かろうとする。

「甘い！」

連携には隙があった。二人の間が開き過ぎていたのだ。その間に高速で期待を割り込ませ、ガラディンを振るう。狙いはコックピット。だが、カオスもアビスも機体を捻りコックピットへの攻撃は避けたが、武装の一つは破壊できたようだ。

『くっ……！』

『こいつ！』

アビスもカオスも武装の数は豊富だから、そこまでの成果ではないか。

一方、アスランはガイアと交戦していた。どうやら苦戦とまではいかないが、あまり芳しい感じではなさそうだ。

「アスラン、ここは任せろ！お前はどうか逃げろ。どうせ代表も乗ってるんだろ？」

『ああ、すまん』

『ありがとう!』

二人を乗せたザクが港の方へ動き出す。それを目敏く見つけたアビスはM A形態になる。

『逃がさないよ!』

そして放たれたカリドウス改の二連ビーム。防ごうにもカオスとアビスと斬り合いを演じていて、ビームとの間に割り込めない。

「アスラン!」

ザクの機動力ではもう避けられない。守りたいものが、目の前で崩れゆくのが鮮明に浮かんでしまった。

その時だ。

『また戦争がしたいのか、あんたたちは!』

白と赤のカラーリングが浮かび上がった機体が、アスランの乗ったザクを突き飛ばす。その場所を狂いなく二連のビームが通過し、そのまま港へと直撃した。

その光景を目の当たりにし、インパルスが対艦刀エクスカリバーを振りかざしながら、シンが叫んだ科白がこれだ。

その声には憎しみが宿っていた。そしてその声を冷静にさせるためのクロードの檄が飛ぶ。

「ミネルバのMS隊の初戦闘だが、やることはわかっているな？ シミュレータで確認した連携を思い出すんだ。わかったな！」

『はい！』『ええ！』『ああ！』

まずシンが、感情がそのまま操縦に現れているかのように荒々しくエクスカリバーを振り回す。効果的な攻撃と呼ぶには少し無理があるが。

攻撃を避けた所にビームライフルと粒子砲の赤い光が飛ぶ。三機は何とかかわしているが、明らかに追い詰められていく。

「よし、シン、もう少し派手に動くぞ！」

『はい！』

インパルスとラグナロクの連携は、まるで獲物を狩る狼のようだった。狡猾に二機の間で三機を誘導し、効果的な斬撃を放つ。致命的な損傷は与えられないが、機体が少しずつ疲弊していくのがわかる。そこにブレイズザク・ファントムのビームライフルの三連射と、赤いザク・ウォーリアの粒子砲が炸裂する。カオスのビームライフルが落ちた。

『くっ、まずいぞ…』

『何やってんだよ、ちゃんとしろよ！』

『うるせえ。ステラ、大丈夫か？』

『こいつ、何なんだ…』

男の子の声二つと女の子の声が聞こえる。カオスとアビスが男の子の乗ったMSなのは確認済みだ。よってガイアのパイロットが女の子だということか。

三機とも装備を失い始めていた。もう一息だ。

「全機、畳み掛けるぞ！」

号令を掛けたその時だった。人口の空が一瞬光った。それだけなら気にもしないが、その光を合図にカオスとアビスが逃げ出したのだ。それを追撃しようとするが、ガイアが立ちはだかった。

『おい、ステラ！時間だ、逃げるぞ！』

『お前は何なんだ！？』

ガイアはインパルスに執拗に攻撃を繰り返す。シンはそれに応戦し、エクスカリバーを振って追い詰めていく。

『落ちろーっ！』

腕が斬り落とされる。ガイアの攻撃は明らかに低下している。

『うう……』

ガイアの動きが止まる。もう捕獲も簡単だろう。シンはそう考えていた。

『ステラ、何をやってる！？』

逃げ出した二機を追うラグナロクに、焦ったような声が入ってきた。
ガイアの行動は明らかに予定外ということか。

『いいじゃん、ステイング。あんな奴、ほつといて。
もういいから、お前死ねよ』

もう一人は特に焦っていない。それに今の言葉、本当に仲間なのか
疑いたくなる。

『ネオに言うておくれ、さよならってな！』

『い、いやーっ！』

ガイアの動きが、完全に停止した。そこにインパルスが襲い掛かる
が、カオスがそこに割り込みガイアを拾い上げる。間一髪の救出劇
だった。

『…死ぬのはいやーっ！！』

(この反応は…)

どうやら二人の会話の中に言っではいけない〈word〉が存在し
たようだ。これは連邦が行っている非人道的な薬による副作用らし
い。こういった過程で発生するかまでは知らないが、あってはいけ
ない行為であること事態は明白だ。

そして、今その拒絶反応が出てガイアに乗った女の子が苦しんでい
て、行動不能だという事が重要だ。

『逃がすか!』

インパルスが追撃に出る。だがソードシルエットのスラスターでは出力不足だ。シンもそれはわかっていた。

『メイリン、フォースシルエットを!』

『はい!』

『って、ちょっと待て! あれは我が軍の機密――』

これ声はミネルバ副官のアーサー・トラインの声だ。明らかな動揺が声からわかるが、クロードは先程の言葉を忘れたのかと思い、溜息が出た。

「アーサー・トライン、あまり私を失望させるな。この非常時に機密を守って敵を逃がすのと、敵を捉えて機密を曝すのはどちらが良いと思う?」

『クロードの言う通りよ。メイリン、射出して!』

グラデイス艦長の声と共に、ミネルバからシルエットフライヤーがカタパルトを飛び出す。そして、ソードのシルエットを切り離すと、背中にこう出力のスラスターを搭載したパックを装着した。

インパルスの換装システムの強みがこれだ。相手に合わせてシルエットを帰ることで、柔軟に対応することができるのだ。

追撃は続く。カオスはガイアを抱えているので、機動力に弊害が出

ていた。チャンスだと、クロードは思っていた。これなら破壊せずに済むと。

だが、現実には厳しいものだ。

一瞬の光がまた空に輝く。今度の光は先程のより大分強い。嫌な予感が頭を掠めた。

『逃がさないわよ!』

スラスターの付いていないザク・ウォーリアは、地上から粒子ビームを放つ。が、予め放たれるのを知っていたかのように避けられたのだ。

光が強くなっていく。

『ルナマリア! 逃げろ!』

光は人口の空を覆う。そして着弾すると大きな穴を開けた。ザク・ウォーリアはどうか避けたようだが、脚を大破していた。

『う、うわあゝっ!』

外は勿論、星々の広がる宇宙。気圧の存在しない場所に気圧が流れ込むのは当たり前で、その力は並大抵ではない。

それに上じて、カオスとアビスがガイアと共に脱出する。シンのインパルスも巻き込まれて、宇宙に投げ出されたようだ。

「ちっ、やってくれる…!」

工廠は完膚なきまで破壊され、港は大破、おまけにコロニーには穴を開けられるこの状況は、ほぼ負けに等しい戦果だった。

「シン、深追いするな。ミネルバも多分追撃にでる筈だからそこで待っている」

『けど、クロード!』

「お前、ちゃんとエネルギーの残量気にしてるか? もう殆どない筈だぞ」

クロードのラグナロクのエネルギー残量も殆ど底をついていた。なら、シンも同じセカンドステージの機体だ。こちらと同じ状態に違いない。

『…くっ!』

どうやら確認して気付いたようだ。これなら無理に追撃しまい。そう結論づけて地面に転がった赤いザク・ウォーリアを抱える。

「大丈夫か、ルナマリア?」

『…ええ、何とか。くそっ、次にあったら絶対落としてやるわ!』

元気な声が返ってきて、クロードは安心した。一先ず、発進しようとしているミネルバに戻るためにバーニアを吹かす。それにレイも続いた。

『やられたな、クロード』

「ああ、まさかあの三機の情報が漏れてたなんてな」

連邦やオーブに知られると厄介極まりないので、極秘に開発していた筈なのだが。もしかしたらスパイでも潜り込んでいたのだろうか。

『ああ。それにここまで目茶苦茶にされてしまった…』

「…あんな奴らにむぎむぎと逃げられて黙ってられる程、俺は大人じゃない。早くミネルバに戻ろう」

『勿論よ!』

ミネルバに着艦する。MSデッキへの収容を確認して、OSの設定を変える。どうにも自動航行機能の正確性を重視し過ぎて、速度の設定が遅すぎた。

設定の間にミネルバは三機の追撃に出たようだ。あのビームを放ったのが、多分奴らの母艦なんだろう。当たり前のことだが、もうここら辺にはいないだろう。

だが、ミネルバも新造艦だ。足の早さで追いつける筈だ。

設定を終えOSを切った。そしてコックピットを開けて外に出た時、ルナマリアの声が聞こえてきた。周りを見渡すと、小破したザクがあった。嫌な予感しかしない…。

「止まれ! お前たちは何者だ!?!」

銃を構えている。その先にいるのは、紺の髪の子と金の髪の子。

「それは我が軍のものだ。民間人が操縦など――」

「ルナマリア、そこまでだ」

コックピットから、MSの僅かな突起を利用して飛び降りたクロードは、ルナマリアの手を握り銃を降ろさせる。

「この方はオーブの代表だ」

「えっ……!?!」

目を見開いて硬直してしまった。自分が銃を向けていたのが誰かわかれば、そうなるのは当然だが。

「こちらはオーブ首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ。そして俺は随員のアレックス・ディノ」

あの混乱の中でサンダラスを無くしたのか、アスランは素顔を曝していた。この艦の中ではバレはしないだろうけど。

「ここにデュランダル議長が避難なされているのを見て、こちらに搭乗させて頂いた。

よろしければ、搭乗の許可とデュランダル議長との面会を希望したい」

…前言撤回。絶対に正体を知っている人物が、この艦に乗っていて、更にこの状態で追撃まで熟さなければいけないのか。考えるだけでも、頭が痛む…。

「それと代表が避難の途中で怪我をしてしまったんだ。治療をお願いしたいのだが」

よく見ると、額の辺りから血が出ていた。ハンカチで押さえているが、まだ固まっていなかったらしく、どんどんハンカチを紅く染めている。

「わかりました。じゃあルナマリア、案内を頼む」

「はっ！」

敬礼を返し、ルナマリアは二人の前に立つ。そしてまた敬礼を形どる。

「ルナマリア・ホークであります。先程は失礼致しました。こちらが医務室になります」

敬礼を解き、通路を腕で示した。そして歩き出した後に、二人も続いて行った。これで一応この收拾もついただろう。

後は、もう一つの懸念事項に釘を刺しておかねばならないだろう。

急いで艦橋に上がる。扉がスライドして、中の様子が浮かび上がる。そしてクロードは目の前のゲスト席に居る、ある意味疫病神を睨み付ける。

「おい、何でここに来たんだ？」

敬語を使うのも、今のクロードには億劫だった。それぐらい頭にきているのだ。

「いきなりだな。無事だったのを喜んでくれないのか？」

ギルバートは、いつもの軽口を叩いたつもりだった。だが、いつもは呆れる筈のクロードは余計に凄みを増した。：逆効果だったようだ。

「喜んで欲しいのか？なら、何故素直にシエルターに逃げないんだ！」

「実はな、工場の爆発で道を――」

「嘘だね。シエルターの方向では大した爆発はなかった筈だ。そっちを優先して、守りながら戦っていたんだから」

冗談すらまともに取り合ってくれない所をみると、完全に逆鱗に触れてしまったようだ。

「あんたはいつもそうだ、理由と権力に託つけてすぐに無茶する。こっちがどれぐらい心配してるか、わかってんのか？」

人が赤面しそうな事を平気で言い放った。たぶん怒りで、そんな感情を放り出しているのだろう。

「クロード、いつからそんな――」

「わかったのか、わかんないのか、どっちなんだと聞いているのはこっちだ」

有無も言わせてくれない。こうなったら、デュランダルが折れるしか、この場を治める方法はなかった。

「わ、わかった、クロード。以後気をつけるよ」

「なら良い」

漸く終わったと、デュランダルが安堵したが、周りの空気が明らかにおかしい。艦橋にいる全員が、ポカーンと呆けている。その内の一人、赤い髪のツインテールの少女、メイリン・ホークが恐る恐る口を開く。

「…クロードさんと議長ってあんな性格なんだ…」

進水式すら終えていないミネルバの初めての航海は、波瀾に満ちたものになってしまい、タリアは頭を抱えるのであった。

PHASE-03 未熟な代表かもしれない…（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

PHASE-03はアニメの一話から始まる訳ですが、カガリの登場とそこでの態度等、大分改変しました。

自分はSEEDの最後の方にアスランにカガリが言う、「生きることが戦いだ!」という言葉で、カガリというキャラクターに好感を持ったのですが、Destinyの彼女はその芯の強さを無くしてしまったように思えます。

アニメで、その辺をもう少し鑑みて欲しかったかなと思います。

では、ありがとうございました。

PHASE-04 こんな甘い考えの奴に（前書き）

この話では、ヨウランとヴィーノを叱り付ける描写がされています。

そこまでの捏造ではありませんが、苦手な方はお戻り下さい。

PHASE-04 こんな甘い考えの奴に

艦橋に流れる、何とも言えない空気。皆一様に口を閉ざして、誰も声を出さない。何とも奇妙な光景だ。カタリと、何かがぶりかり合う音が場違いに響いた。

だが、すぐに空気が一変する。ちらつとレーダーを見たメイリンは血相を変えた。

「奪われた三機の反応を発見。近いです！」

艦橋に緊張感が戻る。クロードはすぐにメイリンの側により、レーダーの反応の仕方を確認する。まだ宇宙に出て、大して時間が経ってもしないのに追いつくなんて、どう考えたって怪しい。

何かを企んでいるのか、はたまた問題が発生したのか…。

「どうするの、クロード」

タリアは意見を仰ごうとする。クロードは確かに FAITH に所属しているため、タリアより上の立場にある。上司に相談することは間違いではないが。

「艦長、俺が FAITH であなたより上の立場であることは間違いないが、艦の方針を決めるのはあなただ。俺を気にする必要はない」

クロードの中では、自分に与えられた特権は最後の切り札と考えている。気に入らないことがあれば特権を使う、といったような横暴

なやり方は気に食わないし、議長の信頼を裏切る行為だ。

それに判断がおかしいと思った場合は、すぐに意見する。そうする事で、お互いの考え方が理解できるし、信頼関係を築いていく基盤になる。

「…私は攻撃を仕掛けるべきだと思うわ。何か企みがあるにしても、敵の母艦の情報を手に入れておくべきだわ」

確かに敵の情報を手に入れておいて損はないだろう。リスクは大きいが、MSが四機あれば何とかなるか…。

「艦長の言う通りかもな。俺もあの三機に乗ってるパイロットが気になるし…」

「パイロット？強奪犯がどうかしたんですか？」

そういえば、まだ敵の情報を皆に伝えていなかったことに思い至り、疑問を口にしたアーサーの方を向いた。

「実は三機のパイロットの会話を傍受してみたんだが、明らかにシンたちとそう変わらない子供だったんだ」

子供、と聞いて艦橋はどよめいた。動揺する者、驚愕する者、頭を抱える者、そして静観する者。だが、どの者も浮かぶ疑問は一つ。

「強奪したのが地球軍として、コーディネイター相手に互角に立ち回っていたんですか!？」

コーディネイターの考え方は、ナチュラルより自分たちが肉体的に

も精神的にも優れていて、ナチュラルに負ける筈がない、というのが殆どだ。

事実その通りで、軍で教育を受けたザフト兵は、個の力は地球軍兵士と比べてしまえば圧倒的である。

だから地球軍は薬による人体強化で、コーディネイターを上回る力を持つ兵士を造ろうとしているのだ。

そしてアーサーの言う通り、三機のMSのパイロットはシンたちとの交戦で勝てはしなかったが、こちらも落とそうとして落とせなかった。これはある意味決まりだろう。

「地球軍だとして、という仮定はいらないと思う。やり方がザフトの行ったMS強奪にそっくりだからな。前回の復讐って所だろう」

ラウ・ル・クルーゼの指揮の下ザフトの行った地球軍の新型MSの強奪も、オーブのコロニーで極秘裏に開発された物を少年兵たちが奪い去ったもので、今回のMS強奪も同じような状況であった。

「そうね、地球軍で間違いはないでしょう。でも、何故MSを強奪したのかしら？地球軍の技術が、そこまで劣っているとは思わないのだけど…」

考えていても仕方なさそうだ。それに考えている時間も、今は惜しい。

「とにかく、奴らの母艦を叩くことは決定だな」

決まったとなればパイロットであるクロードは、最終調整をしなけ

ればならない。足早に扉に近づく。

「あっ、そうそう。議長、次勝手な真似をしたら強制的にプラント本国へ帰って貰うから、そのつもりで」

クロードの瞳は明らかに冷たかった。嫌な汗がデュランダル額の頬から頬へと伝う。そして本能が告げる。これ以上、クロードの怒りに触れるような行為は避けると。

「あ、ああ。肝に、銘じておくよ…」

MSデッキでは、調整や修理のためにメカニックたちが走り回っていた。特に脚が大破したザク・ウォーリアにはかなりの時間をかけなければならなかった。

「インパルス、ラグナロク、ブレイズザク・ファントムはすぐに出撃できるが…」

マッド・エイブスは小さくごちた。この三機があれば、大抵のことには対応できるだろうが、有利に戦局を進めるためにはMSが多いに超した事はない。

「ルナってば、派手にやられたね」

前髪の一部の色を染めた少年がザク・ウォーリアを見上げる。その隣には肌の浅黒い少年がいて、同じように見上げ、壊れていない足に手を当てている。

「まあ、しょうがないんじゃないか？汎用型で最新鋭のMSに対抗

するのは、並大抵の技量じゃ無理だろうし」

ヴィーノ・デュプレとヨウラン・ケント。ミネルバのメカニックでシンとは仲が良く、三人で行動していることが多い。口は軽いが悪い奴らではない。

「ルナの実力が足りないってこと？」

「そうは言わないけど、同スペックじゃないと厳しいかもな」

残酷な事を言う。MSの性能が全てではないことを、この二人は知らないのか。前大戦では、汎用型のMSでガンダムを落とした者だっているし、MSの大群を相手に生き延びた者だっている。どちらも同一人物だが。

そいつは言った。戦場等で生き残るには、気持ちの問題が大きいのだと。生き残りたいという気持ちの大きさは、全ての力に勝ることもある。腕だけで生き残る奴は、それこそ悪魔に近い存在だと。

「お前ら、サボっているな！まだ作業は終わっていないだろ！」

マッドの声が飛ぶ。こんな場面をあいづが聞いていたら、どんな顔をするかはわかり切っているが、恐ろしくてあまり想像したくない。

「ふーん、お前らは人の腕をどうこう言える程の余裕があるのか？」

：かなりまずい状況になった。コンディションレッドが発令していると言うのに、MSに彼が乗るのがかなり遅れてしまうことは明白だった。

声の主はMSデッキの入口で、感情が籠っていない顔をしたクロードだった。

「初めての实戦、初めての戦場での戦いでMSを少しも破壊されずに帰ってこれる奴なんていない。まして、こんな準備も大してできないままの出撃はベテランにだって無理だ」

シンだってボディに多少の傷を負ったし、レイだってスラスターの一部を破損している。クロードだって、初めての戦場では死ぬ一手前まで追い詰められたものだ。

「誰もが通る道を、腕前云々を問おうとするのが間違ってるんだ。それに…」

言葉を切ると、クロードはザク・ウォーリアに近づく。ヨウランとヴィーノは身を引いた。そこを通り、ワイヤーを使ってコックピットに乗り込む。OSを立ち上げると、警告を知らせる画面が映った。

「壊れた脚はともかくとして、装甲や駆動系の修理や調整はどうした？ 艦に配置されるメカニックなら、十分もかからない筈だぞ」

他の機体があるにしても、ここに收容されてからもう一時間以上は経っている。少なくともザク・ウォーリアの装甲の修理ぐらいはできていなければ、はつきり言って無能だ。

「それに装甲も駆動系も、手入れをしてやらなければ耐久力が落ちる。もし戦闘で装甲が突然駄目になったり、駆動系が操作を受け付けなくなったりしたらパイロットの命に関わるだろう？」

外ではどうやら敵の母艦を見つけたらしい。各機にスクランブルが

かかる。慌ただしく、ブレイズザク・ファントムとコアスプレンダーがカタパルトから飛び出す。

だが肝心の機体が出ないことに、艦橋には不安が広がる。

『クロードさん、出撃願います！クロードさん！』

艦内放送がけたたましく響く。だが、クロードはMSに乗り込もうとしない。マッドは知っていたからこそ、二人の軽口を止めるように言ったのだ。こうなってしまうては、クロードは梃でも動かない。

「すみません、艦長」

『マッド？クロードはどうしたの！？』

艦長の焦りがマッドにも伝わってくる。クロードという大黒柱が抜けてしまえば、MS隊が纏まらないのも不思議ではない。

しかし、もう時既に遅し。クロードを止められる者はいないだろう。

「ちょっと面倒な事になってしまいましたて…」

そこからかい摘まんでの説明が始まる。戦闘が始まっているというのに、この艦の雰囲気はそれを凌駕してしまうのではないか。それぐらい噛み合っていなかった。

そして艦長の大きな溜息と、射殺するような瞳に精神的疲労が重なったのだが、それだけでマッドの苦悩は終わらなかった。

ちょうど報告を終えてデッキの内側に入ってきた時だ。クロードがコックピットから降りて、ノーマルスーツに着替えようと隣にある

ブリーフィングルームに入ろうとしていた。

「てか、壊れたら新しい物と交換すればいいだけのことでしょ」

ヨウランは特に深く考えずに言ったのだろう。顔の表情が素面だ。隣のヴィーノはうんうん、と首を縦に振る。

だが、それは二人だけの空気で、他のメカニックたちはなにやら様子が違う。青褪める者や、睨む者、ある者は軽蔑の瞳で見る者までいた。

マッドはその中の一番目だ。この場が戦慄することを、覚悟した。

「……そうか、そんな甘い考え方の奴に俺たちは命を預けてたのか……」

クロードの纏う空気が更に変化する。周りを心の底から恐怖させるような、威圧の雰囲気。

流石のヨウラン、ヴィーノもこれには軽口を叩く余裕などなかった。

「わかった、もういい。お前たちは仕事をしなくていい。次の補給に立ち寄るまでおとなしくしている」

そう言って、ブリーフィングルームに入ろうとノブに手を掛けたのだが、ヨウランはそれに納得できないようだ。

「どうしてですか！ 訳を言って下さい！ 訳もわからなく仕事を取り上げるのは――」

「理由？ 知りたいのか……？」

もう他のメカニックは仕事に戻っていた。ヴィーノは俯いているだけ。ヨウランとは違い、自分で理由に至ったのか、それとも絶望しているのか。別に知る必要はないが。

「宇宙に出て、敵を追っている状態では新しいパーツなんかを使うのは、極力避けるように言われなかったか？」

「え…はい」

養成所で教わったのに理由を尋ねてくるなんて、どれだけ愚かな事か。

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥、百聞は一見に如かず。確かに知らない事を聞くことは悪くはない。だがこんな事は、メカニックにとって初歩の初歩である筈だ。

「それはな、宇宙での補給が難しいからだ。無人のコロニーやMSの残骸なんかは漂ってるが、信用できる物かはわからない。だからこそ、整備や修理を迅速に行って、機体を長持ちさせなきゃいけない」

それだけ告げて、クロードはノブを捻った。こんな疲れるやり取りを、いつまでも続けてる訳にはいかない。もう手遅れだろうが。

ノーマルスーツを着込み、ラグナロクのOSを立ち上げる。するとすぐに通信が入り、タリアの顔が映る。明らかに呆れた表情だが、クロードを攻めるような目ではなかった。

「すみません、後で罰は受けます」

毅然とクロードは、タリアの顔を真っ直ぐに見つめた。出撃命令を

無視してでも行うことではないことは、よくわかっていた。だが、人の命が軽く見られているようで、許せなかった。

十五の時に体験したあの凄まじいサバイバルは、鮮明に脳裏にこびり着いている。その体験があったからこそ、殺してしまった命の分だけ人を大切にできているのだ。

自分の周りに居る人達を守るために全力を尽くす、それがクロードの信条だ。この小さな思いも、皆が持てば大きな繋がりとなっていく。その過程で、世界が守られるのかもしれない。

『いいえ、罰なんてないわ。クルーを叱ってくれて、ありがとう』

タリアは微笑んだ。確かに命令違反ではあるが、この艦は初めての戦闘を成り行きで熟していた。それゆえ、この艦の新兵達は心構えもできていないままだった。

『それにあなたを裁くのなら、私も監督不行き届きで同罪みたいなものよ』

艦長はその心構えを説いていかなければいけなかった。艦の全てのクルーの命を預かっているからこそ、経験を活かして示していくのだ。生き残るための、皆を守るための術を。

確かに戦うのは、MSパイロットが表立って活躍するが、パイロットがMSを降りたその瞬間から、他のクルーの戦いが始まるのだ。

メカニックは、万全の状態でMSを使えるように。

救護班は、傷付いた者たちの手当てを。

管制官は、その戦闘のデータを元に、敵の戦力の解析を。

操舵士は、安全な航路を丁寧に進むことを。

それぞれの役割を懸命に取り組めば、自然に生き残る確率は上がる。だからこそ、クロードは怒ったのだ。戦場で無惨に散らないためにも、懸命に取り組む姿勢が見えないと。

「いえ、何か罰がないと皆に示しがりません。それに艦長の場合監督不行き届きではなく、単純な準備不足です」

『…わかったわ。あなたにはこの戦闘が終わり次第、オーブ代表の警護の任に着けるわ』

クロードにとって、MSの調整やクルーの現状の把握をしなければならぬが、それをせずにオーブの代表に不自由なよう振る舞う。その上で戦闘になれば、ベストの状態で出撃しなければならない。…成程、確かに罰だ。

「はい。クロード・タクス、オーブ代表の警護の任をお受けします」
他国代表の警護だ。失礼があつてはいけないし、問題が起ければ国際問題だ。クロードは気合いを入れた。

「一先ず、あいつらの支援に行ってきます！」

『ええ、頼むわ』

MSが固定され、カタパルトへと移動する。冷たい鉄に囲まれたここは、何故か熱気を感じるのだ。

『カタパルトオンライン、ラグナロクどうぞ！』

「ラグナロク、クロード・タクス出るぞ！」

その頃、ルナマリアは医務室にいた。代表の傷は思っていたよりも深く、頭には包帯が巻かれ痛々しい印象を与えていた。

「君はいいのかい？」

アレックスと名乗った随員がこちらを見ていた。ルナマリアは壁に寄り掛かるのを止め、手を後ろで組んだ。

「何がです？」

聞きたい事は理解できていた。だが、気分的にそのまま言うのは憚れた。

「君はパイロットで、スクランブルが掛かってるんだろう？ 出なくていいのか？」

やはりそこを聞いてくるのか。あまり喋りたい事ではないが、隠すことでもない。

「私の機体は出れないんです。それにオーブの方がそんな事を気にするのもおかしい話ですね」

「代表が乗っているんだ。この艦の戦力は強い方がいい」

それもそうだと、ルナマリアは納得した。でも新型二機を含めたあの編成なら、私を含めなくても…。

「どうしたんだ？落ち込んでいるようだが」

どうやら顔に出てしまっていたらしい。今回の実戦が初めてとはいえ、ルナマリアの機体だけがすぐに出れない状況に追い込まれてしまった。別に油断をしていた訳ではなく、空への気も配っていた筈があの様だ。言い訳のしようもない。

「……実は、私だけ機体を破壊されて出れない状況なんです。隊長はともかく、他の二人は私と同期で戦闘も初めてなのに軽微な傷で済んだのに…」

養成所時代から、シンとレイにMSで勝てたことはなかったが、ルナマリアだってエリートの証である赤服を授かったのだ。女だからって、負けるつもりもなかった。だが、現実は一筋もなかった。

今二人は戦闘に出ているのだろう、隊長と一緒に。役に立てない自分が歯痒かった。

「それに隊長は私を見限るかと思うと、何だか悲しくって…」

涙が溢れそうになっていた。自分の腕にもそうだが、他の三人の反応を考えると辛いものがあった。

「…隊長って、クロード特務兵のことか？」

ハッと顔を上げる。クロードが何か特別な仕事で艦を離れて、議長の下に行っていたが、代表との会談があってそこに出ていたということか。そうでもなければ、クロードの事を知っている筈もない。

「ええ、そうですけど」

一瞬、アレックスの瞳が遠くを見ているように感じた。何か昔の事を思い出しているような、そんな憂いをルナマリアは感じた。

「あいつなら、そんな事言わないさ」

「えっ！どう言うー」

ルナマリアの言葉が最後まで紡がれる事はなかった。ミネルバの艦体が揺れた。思わず壁に手をつく。尋常じゃない揺れは、敵の攻撃が当たったか、掠ったか、どちらにしろ苦戦しているという訳だ。

（みんな…）

唇を噛む。

悔しさで押し潰されそうだった。

「この艦、大丈夫なのか？」

アレックスの表情が固い。何かを決めかねているようだ。その様子を見て、カガリが思わず叫ぶ。ここで明かされるべきでない、彼の名前を。

「アスラン！それは…」

「……アスラン！？」

二人の顔が歪む。しまったという後悔と、まずいという焦りと。そ

してルナマリアは上手く言葉に出来ず、瞠目するしかなかった。

艦橋の中は、先程までの焦燥が嘘のように消え失せていた。これも偏にクロードの出撃のお陰であろう。

暗闇の中、ぼんやりと光るモニターに映し出させる戦闘にも安心感がある。

決してシンとレイの二人で勝てない相手ではなかった。三機が出撃してくるものだと思ったのだが、相手もガイアを欠いた二機で、少し押され気味ではあったがしっかりと対処できていた。

それだけでなく、シンとレイは同期という事もあって中々の連携を見せ、相手を追い詰める場面も見受けられ、成程流石はザフトレックスドと思えた。

だがクロードの安心感程、艦橋を落ち着かせるものはなかった。事実、先程までの固さは成りを潜め、クルーの動きが良くなっているのをデュランダルは感じていた。

（この艦に彼を着けたのは正解だったようだな）

ミネルバのクルーは比較的若く、責任者はそれなりの場数を踏んでいるが、他の者は殆どが新兵だ。戦闘を実戦と言っているのが、何よりの証拠だろう。

シミュレーションでしか体感してこなかった戦闘がいきなり始まり、すぐに宇宙に出ることになった。

「トリスタン起動、一番、二番撃てえーっ！」

艦からの援護を受け、更に加速する戦闘の熱。MSの整備も良さそうだ。

（頼もしい限りだな）

「…そう言えばタリア。先程の通信は何だったんだ？罰とか何とか言っていたが」

気になることは聞いておく。それがデュランダルという男だ。場の空気は二の次だ。

「今は戦闘中です」

短く、冷たく返された言葉を受けても、デュランダルはやんわりと笑みを浮かべていた。この男の頭に、諦めるという言葉は存在しない。

「タリア、これからのこの艦の動きにも関わるのではないか？クロードとの会話は特に」

ゲスト席を見上げるタリア。顔を見ても、説明しなければいつまでも絡んできそうだ。見せ付けるように、大きく溜息を吐き出した。

「…アーサー、少しあなたに任せるわ」

「は、はい！」

固く返事をしたアーサーに一抹の不安が残るが、タリアは説明を始めた。

メカニックスの発言のこと、それを聞いたクロードが注意をしたこと、それにメカニックスが小さな皮肉を返したこと、クロードの怒りが爆発したこと。説明が進むにつれて、更に笑みを深めるデュランダルは、昔からちつとも変わらない。

「ふむ、それは災難だったね」

顎に手を当てて気の毒そうな言葉を吐くが、顔は明らかに楽しんでるようにしか見受けられない。

「確かにメカニックスは災難かもしれませんが、彼等の発言が――」

「いや、そうじゃない」

タリアの言葉を遮る。彼女の见解は、デュランダルに言わせれば見当違いだった。

「怒られる事が災難だったら、この世の中は災難で溢れてしまうよ。それに怒って貰えることは幸せだよ。それだけ期待されたり、気に掛けて貰っている証拠だからね」

何も感じていない人に構ってられる程、人というものは心広くない。クロードだってそうだろう。

「私が災難だと思うのは、寧ろクロードの方だよ」

「クロード？」

艦橋のクルーの空気が変わる。戦闘に集中してはいるが、デュラン

ダルの見解にも興味があるようだ。

「そう、彼は強そうに見えて実は繊細で傷付き易い。そんな彼が心を鬼にして、彼等を叱り付けたのだ。心が痛んだに違いない」

そんな見解の仕方を、誰も持ち合わせていなかった。

それもそうだ。昔から知っているデュランダルならではの見解に違いない。

「そう、ですか。だから彼は罰を望んだのですね…」

「まあ、そんな所だろう。律儀な奴なのだよ」

そこで会話は終わった。タリアは前を向き、モニターを見つめる。クロードの参戦で、こちらの優位はほぼ固まった。後は我が艦が敵艦を叩けば良い。

「タンホイザー起動、目標敵母艦！」

ミネルバの先端、足が展開して一つの砲門が姿を現す。そこに集まる粒子の力、敵を薙ぎ払うには十分な力だ。

エネルギー充填が半分を超えた辺りで、敵の信号弾が二発上がる。カオス、アビスがそれぞれ敵艦に戻っていく。

それを追撃しようとしてインパルスが前に出るが、すぐに停止する。深い追いは禁物だと、通信から聞こえた。だが、敵は逃げられやしないだろう。ミネルバは足自慢だ。あの大きさの艦に負けるのは小回りぐらいだろう、と高を括っていた。

「何…？」

敵艦の周りに揺らぎが生じ始めた。タンホイザーの充填は終わっている。先手を取るべきか。

「タンホイザー、ってえー」

『待て、艦長！撃つなーっ！』

クロードの声は一步遅かった。タンホイザーの高出力粒子ビームが敵艦を襲う。直撃した筈だった。だが、先程気付いた揺らぎがビームを抑え込むように展開され、バチバチと音を立てて火花が爆ぜた。そして次の瞬間――。

『バート！急速回避！！』

クロードの必死な声がスピーカー越しに響く。すぐに回避行動をおこしたが、少し遅かった。跳ね返された粒子ビームは、ミネルバの左舷翼を掠め、艦に酷い揺れを起こした。立っていれば、思わず倒れてしまう程の揺れだった。

艦橋に悲鳴が響く。ドカンと、何かが大きな衝撃を受けた音が嫌に耳に残る。ハッとモニターを見上げる。既にそこに敵艦の姿はなかった。

舌打ちを一つ打ち、唇を噛み締める。敵に逃げられた事より、自分の迂闊さが悔しかった。

「皆、大丈夫か？」

アーサーの声だ。本来なら自分が真っ先に心配すべきことを、彼が

行っていた。また唇に係る圧力が増えた。

「マリクさんが肩を！」

肩を抑えているのは、メイリンと同じ管制官のマリク・ヤードバズ。見る限り、どうやら外れてしまっているようだ。

「アーサー、悪いんだけどマリクを医務室へ」

「はい！」

マリクを支えるように、肩の外れていない立って艦橋を出ていった。

一つ大きな溜息が知らずに出た。この戦闘、クロードが居なければ確実にミネルバは落ちていた。咄嗟の判断とはいえ、自分の行動を恨めしく思う。お陰で大事な管制官、それも索敵に優れたマリクに怪我をさせてしまう結果になった。

…落ち込んではいけな。この艦の導き手は自分なのだから。

「メイリン、敵艦のデータは取れたわね？」

「はい。武装全てを使っているとは思えませんが、使ってきた物と装甲、機動力等は分析済みです」

ハッキングが得意なだけあって、データの管理や取得の能力はやはり突出している。タリアはの胸に悔しさが蘇る。

「…よくやったわ、メイリン。これから不明艦をボギーワンとし、追撃を本格的に行います」

そう仕切った。今はこれ以上の対処まで、思い浮かぶ程の余裕はなかった。

（代表にも了解を取らないと…）

この艦に乗る二人の国の代表が、この後の戦闘にどの程度の支障を齎すか、考えるだけで頭が痛み出した。

クロードは艦に帰って真っ先にノーマルスーツを脱ぎ、ある部屋に向かう。そこはいつもは空部屋だが、今回の航海では特別な意味を持っていた。

呼び出しを掛ける。中からの返事はすぐに返ってきた。

「失礼します。代表、この度はこのように戦闘に巻き込んでしまい、誠に申し訳ありません」

深々と頭を下げる。クロードの深緑の髪もまた、さりと下を向く。カガリはそれに困惑を覚えた。無理矢理にこの艦に乗り込んだのは我々だ。保護してもらっておいて、その上謝られる等とは考えていなかった。

「いや、謝らなくていい。こちらが勝手に乗艦したのだ」

「そう言って頂けると、こちらとしても気が軽くなります」

軽く浮かんでいる笑みに、カガリは信頼性を感じた。

カガリの周りには、彼女を一人の代表として見ている人など殆どいない。多くの者が彼女の権力があれば良いだけの、餌に群がるハイエナのようなものだった。

そんな彼女にとって真に心を許せ、全てを委ねられるのはアスランだけだった。そしてその彼もまた、彼女を支えるために戦後姿を消したのだ。

力を持ち過ぎると、それを奪うために暗殺や謀殺を考える輩が湧き始める。そこは政治も戦争も変わらない。そんな恐怖から彼女を守りたい、と彼は誓っている。

クロードの笑顔は、そんな彼と非常に良く似ていた。アスランから聞いたが、キラと同じくらいの親友らしい。

「クロード…特務兵だっけ？あなたは私をどう見ている？」

突然の質問に、クロードは面を食らった。カガリから見ても、明らかに素面の表情だった。

「どう思う、とは」

「あなたが思っていることだ」

一瞬、クロードは押し黙った。考えていることは誰にでもわかる。国家の代表に、下手なことを言えば国交が断絶してしまう。そうなれば彼は、重いでは済まない処罰を受けることになってしまう。

「大丈夫。侮辱とかそんな風には考えない」

自分でも、いつもより優しい声色だと思った。それに背中を押されたように、クロードは口を開いた。

「恐れながら申します。私はあなたが国家代表を背負うには、まだ未熟だと感じています」

やはりな、とカガリは納得していた。父上が国家代表だったこと、前大戦で英雄と呼ばれ国民に人気があること。それだけでカガリは、国家の代表という重たい枷を付けられることとなった。彼女は、オーブを救いたい思いから受諾したが、本当はもっと違う生き方をしてみたかった。それは――。

「考え方も、実益よりも理想を優先するような綺麗事が多いように思えます」

真剣に話すクロードの目は、馬鹿にするための言葉ではないとカガリに印象づけた。だが、それでも心は擦り減る。アスランも親友の考え方を、注意深く聞いていた。

「ですが、私はそれで良いと思います」

クロードの瞳に強い光が宿る。思わずカガリは、クロードの瞳を覗き込んでいた。

「綺麗事も理想も語れない奴に、国を守るなんてできやしない、と私は考えます」

カガリは微笑む。これ程真っ直ぐに意見をしてくれる者が、もう一人いるなんて思いもしていなかった。

「ありがとう、クロード特務兵。あなたはアスランに聞いた通りの人だ」

照れ臭そうに頭を掻いて、視線を彷徨わすクロードは、MSを駆って敵を葬る者には思えなかった。そしてふと、聞いてみたいことをもう一つ思い出した。

「そうそう、もう一つ聞いていいか？」

「ええ、構いませんよ」

「議長との対談している時、あなたは私の言葉で顔色を変えた箇所があった。あれはどうしてだ？」

アスランはすぐに思い至った。クロードがどの言葉で、どう思ったかを。

カガリの鋭さが、今は裏目に出てしまった。

「…実は私もあなたが言う、オーブから流出した人材なんですよ」

瞠目する。クロードの顔は、明らかに先程までと正反対の感情を湛えていた。

「私は大戦前期、あなたのお父様が預かり知らぬところで開発された五機のガンダムに絶望して、プラントに亡命したんですよ」

カガリに衝撃が走った。それだけこのクロードの話には、彼の憎しみと悲しみが籠っていることが、否応なしにわかってしまったからだ。

そのカガリを見ながら、アスランは目を閉じる。彼の纏う赤い空気が感じながら、この場をどう収拾するかを考えていた。

PHASE-04 こんな甘い考えの奴に（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ここからは色々と原作とは違う展開になっていきますが、よろしければお付き合い下さい。

では、ありがとうございました。

PHASE-05 簡単な話じゃないんだ(前書き)

この話では、CP要素が強く出ています。マイナーなCPではないので、そこまで気をつけなくても良いと思いますが、苦手な方は注意して下さい。

また、軽い性的表現もありますので、重ねてご注意下さい。

PHASE-05 簡単な話じゃないんだ

空気が重い。アスランは目の前の二人を見てそう思った。クロードもカガリも口を閉ざし、片方は無表情、片方は俯きがちで顔に陰がある。

「そう言えば、アスランの親友なんだよな？」

先に沈黙を破ったのはカガリだった。堪えかねたのか、はたまた本当に聞きたかったのかはわからないが、場の空気が動き始めて、アスランの心にも幾許の余裕ができた。

「…えー、自分で親友と言うのは憚れますが、確かに仲は悪くないですね」

クロードの顔に微笑みが見えた。アスランはクロードの過去を知らない——と言うよりは、クロードが話したがらない——が、オーブに居て、しかもあのガンダム有些事も知っているとは思ってもよらなかった。

「まあ、先程言ったようにアスランから色々聞いている。ザクに乗っている時に新型に声を掛けられ、そのパイロットがアスランの名前を呼んだのには驚いたがな」

プラントでのアスランの有名さは、誰もが認めるところだ。前議長の子息、ラクス・クラインの婚約者、若干十四歳のザフトレック、そして伝説のエースパイロット。

どれもこれも彼の後ろに付き纏い、カガリと同じく雁字絡めにされ

る。だから、ザフトの誰かにアスランの正体に気付かれているとしたら、この艦から早く離れた方がいいと思ったのだが。

「だが、あなたのようにアスランを上辺で見えていない人が居てくれて良かった。他の誰かに知られたら大事――」

「いや、もうバレただろう、あれは」

アスランの顔には明らかに諦めが漂っていた。目を閉じて、腕を組んでうなだれる。カガリも俯き、目を閉じた。痛い程に拳を握って。

「本当にすまん！」

あの時のアスランの表情は、戦う事を決意した顔だったとカガリは考えている。あのままだと、アスランは戦場に出してしまう。そうなれば…。

アスランも手を握る。MSから離れてもう二年になるのだが、それでもあの感覚は忘れられないのだ。

自分の極限が引き出される感覚。自分の中の種が弾けて、目の前の光景が遅くなり、周りの事象全てを把握できるあの力を、アスランは恐れていた。

研ぎ澄まされた刃を振るわずにいられる人間は少ない。数多くの者は、その輝きに魅了され、次々と罪を重ねていく。そして気付いた時にはもう泥沼に嵌まり、力から逃れることができなくなる。

強すぎる力は災いを呼ぶ。カガリの言葉は、アスランの不安と直結していた。彼女は、もう彼が苦しむ姿を見たくはなかった。

「なあ、アスラン。聞きたいんだけどさ」

クロードの顔は真面目だった。だからこそ、放たれた言葉の威力は半端ではなかった。

「二人はいつ結婚するんだ？」

「……………!!!!」 「な、何を!？」

カガリの顔は、時間が経つにつれて赤くなり、今や完熟したトマトでさえ負けるのではなからうか。

とか言うアスランも、この言葉にはどうにも心がしどろもどろになってしまい、上手く言葉にできずに吃ることしかできていない。

「だって、代表とお前を見てると明らかに夫婦なんだもん。互いの心配ばかりする似た者夫婦って感じだ」

嬉しい言葉だった。前の大戦の折に不時着した島で彼女と出会った。その時の互いの印象は最悪に近かったが、今はそれが逆に良かったのかもしれないと思える。

とにかく一つ言える事は、あの時から俺はカガリに惹かれていて、彼女を自分の物にしたいというエゴが毎日膨れているという事だ。

だが、そんなに単純な話でないのだ。

「…俺とカガリでは、身分が違う。結婚なんて、そう簡単な話じゃないんだ!」

悔しくて、後半は半分叫んでいた。心の中に彼女が居て、存在が大

きくなるにつれて、アスランのエゴも大きくなる。萎む事のないこの思いは、叶わないことを知っているのに。

奥歯を噛み締め、拳を先程より強く握る。ちらりと見えた悲しそうなカガリの顔で、余計に歯止めが効かなくなる。

「…悪い、俺が口出すことじゃなかったな」

頭を垂れたクロードの表情は良く見えないが、不用意に話題を出したことに落ち込んでいるのか。

だが、顔を上げたクロードの顔は精悍としていた。一瞬、アスランは気圧された。

「だけど、もう一つ言わせて貰う」

カガリもクロードの方を向く。アスランはぞくりと、気の昂りを感じた。

「代表を、カガリ・ユラ・アスハを一人の女の子として守れるのはお前だけだ。それを忘れんなよ？」

クロードの言葉は重かった。

代表という苛酷な責務を考えればこそ、アスランはプラントではなくオーブを選んだ。まだ成人もしていない代表に、降り懸かる火の粉はあまりにも苛烈で、心を碎かれ、操り人形同然になってしまうかもしれない。それに、

「わかっている。惚れた女を泣かせる程、俺も馬鹿じゃない」

理屈じゃなく、本能が告げている。コーディネイターにあるまじき考え方だが、こういうのも悪くはない。

「ア、アスラン！」

先程までの顔は成りを潜め、また顔が赤くなっていくカガリを見て、アスランは知らず微笑んだ。いつまでも恋愛事に馴れないこの娘を、命続く限りに守ろうと再度誓った。

その光景を見て、クロードはいたたまれなくなった。話題を振ったのは自分だが、この桃色の空間に居て、二人を邪魔してはいけない。

「じゃ、じゃあ、俺は外に居るから何か――」

通信機が存在を主張した。部屋備え付けの物だから、この空間を早く離れたかったクロードにとって、取るのもかなり億劫な作業に感じた。

「：はい、こちらクロード」

『クロード、会談の準備が整ったわ。議長の部屋まで代表を連れていらして』

画面に映し出されたタリアが告げた。それにしても時間がかかったものだ。プラント本国に連絡を入れるにしても、そこまでの時間を擁するとは思えないし、第一代表を待たせてまでやる必要があると言うのか？

「：わかりました。では」

通信を切る。暗転した画面に自分の顔が映る。何か釈然としない物

が心を渦巻いていた。

切り替えて、クロードは振り向くと同時に敬礼を象る。

「代表、大変お待たせ致しました。議長の準備が整ったようなので、会談場所までご案内致します」

「ああ、頼む」

立ち上がるカガリとアスランの顔には、一抹の不安が見え隠れしていた。クロードも不安を拭えてはいなかった。

「申し訳ありません、代表。時間をお取りしまして」

デュランダルが指定した部屋に入ると、すぐに謝罪の言葉が聞こえた。状況的にバタバタしていて、すぐに面会できなかったことに對しての謝りだろうが、クロードはその前に何をしていたのか、問い質したい気分になっていた。

大きな溜息を吐き出す。この部屋で何が起きていたのか、はっきりとクロードにはわかってしまった。

ドアロックの画面に映るオートの文字、整えてはあるが少し乱れが残るシート、ごみ箱の惨状。二人が恋人だったことはデュランダルから聞かされていたが、代表との会談前にこれはないのではないだろうか。

「…議長」

耳元で囁く。こんな事が世に知れたら、議長としての立場も危うくなる。自重しろ、と言外に含んだ。

「…しようがないじゃないか。久し振りの再開だったのだ」

悪びれる気もないのだろう。口の端には、やはり胡散臭く口角が上がっている。

「……………」

クロードは無言で離れる。何を言った所でこの最高議長は反省どころか、非を認めようともしてくれない。

「では、始めましょうか」

二人が向かい合わせで座る。タリアとクロードがデュランダルの後ろに立ち、手を後ろで組む。アレックスもまた、こちらと同じ格好でカガリの後ろに立つ。

「あの強襲部隊は何者なのかわかったのか？」

強張った表情だ。敵の正体を明かす事ができずにこのままでいれば、ザフトの名折れだ。だが、これはあくまでクロードの考えだ。上に立つ者の考えは、そんな軍単位の物ではない。

「いえ。大した事はわかっていません。ですが、我々はあれを放置しておけません」

追撃を行うと、デュランダルは告げているようなものだ。この時はさすがに口角も引き締まっていた。

俯きがちなカガリは、肘を腿につき、手を絡ませて額を当てている。表情を窺い難い態勢だが、きっと先程と同じくらいの悲しみが心を占めているのだろう。

「ああ、わかっている。どんな事がこの世界の均衡を崩すかなんて、私たちにはわからない。だが、この件はその危険を孕んでる」

世界は前大戦をきっかけに、仮初めの平和を手にした。だがプラントも地球も武装を外そうとせず、力を持つ事で均衡が成立している状態だ。

天秤に例えればわかり易いだろう。一度傾けば、皿から欲望が溢れ出し、世界を人を殺していく。

そして民間人は何も知らないままに、戦争という理由で搾取までされてしまうのだ。その資金で新たな脅威が生まれる。なんと深い業なのだろうか。

「代表を危険に巻き込んでしまいましたが、このまま追撃を行わせて頂きます」

「ああ、構わない。何か手伝えれば言ってくれ」

普通に考えれば、他国の者には士官室で大人しくしていて貰うのが一番なのだが、先の交戦で多くの怪我人を抱えていた。何かあれば、柔軟な対応を求められるかもしれない。

それに二人は《英雄》なのだから。

「お心遣い、ありがとうございます。出来れば、そのような事態にならないよう努力はしますが」

デュランダル言葉には、やはり含みが感じられた。この人はどんな状況であろうと、二人を戦闘に引きずり出すのではなかろうか…。

「クロード、ちょっと…」

控えめにクロードを呼んだのはタリアだった。外に出ようと仕種で示された。

扉を潜って廊下に出ると、タリアは壁に寄り掛かる。どうやらお疲れのようだ。

「妙に疲れてますね。それに嬉しそうだ」

確信に至っている筈のクロードがこんな事を言う。明らかな皮肉な訳だが、タリアが大人の女性の余裕を見せ付ける。

「あら、よくわかるわね。まだ十代だというのに経験豊富なのかしら？」

問われたことを理解出来ずに、数秒フリーズ。そして理解したと同時に顔に血が集まってしまう。

「け、経験豊富って…。俺はそこまで――」

「ふふっ。冗談よ」

悪戯な笑みを浮かべて、タリアはうなだれるクロードの肩を叩く。

その手を一瞬見てから溜息を吐き出し、クロードは背筋を伸ばした。

「艦長、昔の恋人との再開を喜ぶのはいいのですが、先にやるべきことは済ませるべきです。現に他国の代表をお待たせしてしまったのですよ？」

優先事項のを後に回してしまうと、酷いしっぺ返しを喰らうことがままある。だからこそ軍人としては、念頭にすべきことの順序を振っておかなければならないのだ。

「でも、割り切れない時もあるのよ。軍人の前に私たちは男と女。自制できない時もあるわ」

確かに、大きく分ければ二つしかない。だから片方を求めるし、逆に邪魔に思うこともある。そして愛しさ故に、我慢ができない衝動に駆られてしまうこともあるのだろうが、クロードにはまだその感覚はわからなかった。

「：俺にはよくわかりません。それより、どうしたんですか？」

理屈で解決できないような恋を知らないクロードにとって、このやり取りは不毛に感じられた。だったらさっさと話を聞いて、自分の仕事を全うした方が良さだろう。

「マリクの怪我は大した事はなかったんだけど、機器を触るのは無理みたいなのよ」

症状は軽い脱臼。動かすと痛みを感じられ、癖にしないためにもギプスで固定している。ということは、パネルを弄る事さえ難しいという事だ。

「で、俺に索敵をやれと？」

適当に思い付いた事を言ってみただけだった。クロードにはMS隊を指揮する仕事もあるし、代表の警護もある。これ以上の御役目なんて、御免だと言わんばかりの物言いだった。

「…そのまさかよ」

艦長の顔色を窺う。とてもふざけているようには見えなくて、クロードは顔が引き攣っているのを自覚した。

「……ほ、本気で言ってるんですか…？」

「しょうがないのよ。MSは一機欠いたとしてもそこまでの支障はないし、索敵を疎かにするとどんな状況に陥るかわからないわ」

：わからない話ではない。実際、敵が一艦だけだと高を括って油断していると、増援が彼方から現れたりしないとは限らない。因って、非戦闘時の索敵も重要だが、戦闘時の索敵はもっと大きな意味を持つのだ。

だとしても、戦闘に出るべきMSを余らせるのもどうかとは思っているのだが。

「他に人はいないんですか？」

別に艦橋に居るのが嫌な訳ではないのだが、管制の制御をやったことがないのに、何故御指名がきたのだろうか？理由はわかるが、納得したくはない。

「機器を扱える人員はいないわ。それはあなたもわかっているでしょう？」

「それは、わかってますけど…」

ミネルバはまだ進水式前だったのもあって、補充員が存在しない。普通これだけ大きな艦の運営には、最低でもこの二倍の人員を要するのだが、動かす予定も当分先だったので、ほぼ最低限の兵しかないのだ。

そうになると、何でも熟せる器用な人材が重宝されるのだが、この場合誰も管制制御を行えないので、とにかく人員が足りてる場所から引っ張るしかない。

「それにあなたなら大丈夫だろうって、議長が」

知らず、拳を強く握っていた。あの狸の顔を一発殴ってやりたい…。

「……わかりましたよ。議長の言葉なら仕方ないですね」

だらりと力を抜いて、クロードは疲れたように表情を緩めた。拳も開かれ、もう完全に気持ちもおきている。

「なら俺は、あいつらにこの事を知らせなきゃいけないんで、一度MSデッキに行ってきます」

「ええ、代表の警護はその時はいいわ。あの随員も優秀そうだし」

勿論、優秀なんて言葉では済まないだろう。守る対象が対象なだけ

に、余計に安心感がある。

「では」

クロードは敬礼をしてその場を離れた。そして顔を引き締める。あいつの怒声が響くだろうことは間違いないだろうから。

ガンツと何かが吹き飛ぶ音が聞こえた。MSデッキで調整をしていたレイとルナマリア、それにメカニックもあまりの大きな音に、発生源であるMSデッキの入口に積まれた小さなコンテナを見る。

そしてそこに居たのは、怒りに瞳を燃やした一人の少年兵。

「シン！どうしたのよ、そんなにかっかして」

真っ先に声を掛けたのは、こういう事態に慣れているルナマリアだった。メカニックたちは、あまりの雰囲気動きが固まっていた。

「何って！ルナは聞いてないのかよ！ヨウランとヴィーノの事！」

空気が戻り始めた。何に怒号を上げているかと思えば、あの二人の処分のことか。

メカニックの大半はそれだけで、シンの怒りがあまりにも滑稽に感じられた。

「そりゃ聞いてるわよ。クロードを呼ぶ艦内アナウンスだって鳴り響いてたし」

メイリンの呼び掛け方で、どれだけ必死だったかが伝わってきたの

だ。どんな事態があったかを気にしない訳がない。

「だったら何で平然としてられるんだよ！二人が下ろされるかもしれないんだぞ！」

手を水平に思いっ切り降る。何故仲間がクビになるかもしれないのに、何もしないで仕事をしているのか。何故クロードを糾弾しないのか、シンには不思議でなかった。

「確かにヨウランとヴィーノが下ろされるのは嫌よ」

ルナマリアは赤いザクから離れ、シンの目の前に歩み寄る。シンの怒りに触れても、ルナマリアの心は静かだった。

それはクロードの言い分が正しいと思ったからであった。

「でも、二人の発言から考えればこれが普通だと思うわ」

ルナマリアには、前にあった二人の会話は伝えられていない。伝えるべきでないし、どんな風に思うかも推測できる。メカニックスはマツドの言い付けを守っていた。

「ルナマリアの言う通りだ。二人の考えでは、この先、生き残るには――」

「生き残るとか、そんなの関係ない！」

シンの激情は中々収まらない。レイの言葉を遮って、周りの意見も聞かずに暴走する感情を声に出す。

「友達を庇わないのは何でなんだって聞いてるんだよ！」

シンにとって、二人は本当に信頼を於ける存在だ。どうやってでも二人をこの艦に居させる。今のシンの頭にはそれしか無かった。

「シン、感情だけで物を言うのは止めた方がいい。この場合、あの二人は言うてはならない事を言ったんだ」

MSなんて部品を替えればいい、こんな事を言われれば、多分レイでもクロードと同じ気持ちになる筈だ。

だがレイは、クロード程甘くない。その場で一言吐き捨てて去っていただろう。《死にたいのか？》と。

「そうよ。初めて戦場に出たからって、あんな考え方してたらいつか痛い目に遭うわ。」

そうならないためにも、クロードは言ってくれたんでしょ！」

思わず語尾に力が入った。目の前のシンは未だに怒り剥き出しの瞳をしていた。昔から誰も窘められないこの瞳を、こいつは未だにギラつかせている。

その瞳でどれだけ問題を起こしてきたのか、忘れた訳ではあるまいに。

「そんなの知るか！あんな奴だなんて思ってた！」

シンはルナマリアの横を通り、インパルスの格納庫へと向かう。イライラは最高潮のようだ。

そんな時だ。間が悪いなんて物ではない。はっきり言って、こんな場面で一番来てはいけない人物が、上の連絡通路に現れたのだ。

「さあ代表、こちらです」

男性の声が響く。上の手摺り越しに、長い黒髪とコントラストになった白い肌が見えた。

あの人物に見覚えのないクルーが居るわけがない。戦後のプラントを導いたカリスマ、その判断力と柔軟過ぎる思考は、他の追隨を許さない、悪く言えば変わった性格の人物、ギルバート・デュランダルその人であった。

そしてその隣には、金髪の少女と紺髪の青年。先程までルナマリアの案内によって、医務室で治療を受けていた、クロードとシンの故郷の代表までお出でであった。

ここは明らかに機密エリア。他国の者が、事故以外で訪れるのは有り得ない。だが、デュランダルは故意にここに連れて来ていた。何をお考えなのか、レイにもルナマリアにもさっぱりだった。

だが、そんなことはどうでもいい者もいた。先程までの激情が更に燃え上がり、今にも爆発しそうに身体が震えている。握りしめられた拳から、血が滴り落ちていた。

「これが我が軍自慢のMSです。これらが我々を守ってくれる訳です」

手を広げて大仰に説明を始めるデュランダルを他所に、ルナマリアの疑問は大きくなるばかりだ。

何故、代表がこの艦を動き回る？それだけでも、我々にとって損害

が発生するかもしれないのに。

それに、議長は知らないかもしれないが、シンの心に多大な負担を懸けることになるかもしれない。そうなれば、シンはこれ以上に荒れる。クロードとぶつかることも避けられなくなってしまう。

そして気付けば、デュランダルの嬉々とした説明は止んでおり、神妙な表情に変わっていた。

デュランダルの目の前のカガリの顔色が優れない。そこから少しの沈黙が流れる。メカニックが作業する音だけが、その場を支配していた。

「やはりお気には召しませんか、代表？」

自分たちの力の無さがカガリは恨めしかった。現にオーブは微妙な立場で揺れ動き、どちらつかずな状況だ。

軍備を強化する案に踏み込む気もないし、他国の力を借りてその代償に属国にされることも避けたい。

そんな事を宰相は許してはくれない。セイラン家が、ブルーコスモスと関係深いことは調べがついていた。因って、オーブは大西洋連邦に組みするべきだという考えが、議会に広がっていた。

そしてプラントも、こうして軍備を着々と整えつつある。そこにはオーブの技術も存在し、大西洋連邦の心境も悪くなる。

難解を極めていた。

「このように軍備を進めるという事は、また宇宙に命を散らし、地球を焼くということなのか？」

悲しげな声だった。表情もまたそれを引き立てて、彼女の悲しみが心からの物であると印象づける。

「……それは」

詰まったのはどういった理由か。肯定なのか、はたまた否定のための言葉を探しているのか。…また世界が焼かれるのは、止められないのか。

「これ以上、地球も宇宙も血で穢れていくのを見るのは嫌なんだ！」

この二年で、カガリの中の考えは変わった。オーブを守り、理念を貫くことも大事だが、何より守られるべきは存在する人なのだと。

どの人種でも些細な争いは存在するが、それでもブルーコスモスやコーディネイター至上主義を認めては、争いが拡大するだけで、結局は何も止められないのだ。

「血を多く流さないためにも、兵器が必要なのは痛い程にわかる。だが、どこかで戒めなければ、際限がないのではないか!？」

「それは、貴国の状況を鑑みて言っているのですか？」

オーブは軍備は戒めている。その証明まではできないが、この微妙な立ち位置がその証拠となくもない。

「そうだ…と言いたいが、我々も理念を持っている。だから兵器を

捨てることはできない……。だが、誰かの望むように戦争をしたいわけじゃない！」

このカガリの言葉がきつかけだった。

オーブの代表と議長の話等、本当は聞きたくもなかったが、何故かここから動こうとは思わなかった。

話を聞いている内に、またふつふつと怒りが湧き上がる。家族を奪ったくせに、まだのうのうとオーブの代表を務めるアスハ家を許す気にならない。

そして聞こえてきたのが、シンが嫌う最大の言葉。

《オーブの理念》

「流石、綺麗事はアスハの御家芸だな！！」

怒号一閃。全員の注目が集まっているが、そんな物は一切気にならない。今シンの瞳に映っているのは、家族の仇の姿だけ。

その仇は一瞬怯んだように見えたが、すぐにこちらを見下ろしてきた。…不愉快だ。

「……見下ろすな、国民を見捨てる偽善者が！」

「シン！」

艦長の声がしたが、構いやしない。吐き捨てて、踵を返す。自分がどれだけ不敬な事をしているかの自覚はあるが、それ以上の憎悪が

彼を後押ししていた。そのままMSデッキを去ろうとしたが、そうは問屋が卸さなかった。

「おい、シン」

冷たい声だった。一瞬誰の物かわからなかったが、振り向けばなんて事はない。シンの怒りが向かう、もう一人の人物が目の前にいた。

「クロード」

遠くでバキッと音がした気がした。その次にわかったのは、自分が倒れていることと、口の中に広がる鉄の味。

そして連絡通路の四人以外のMSデッキにいる者が、一様に殴ったクロードを見つめた。

「…な、何すんだ！この野郎！」

シンは起き上がると同時に殴り掛かる。クロードは避けることもせずに素直に殴られた。しかしクロードは倒れない。

彼の口の中も切れたようだ。口の端を伝い、血が顎に一筋の紅を彩る。

「…お前、代表の言葉をちゃんと聞いて、それでも許せないからの暴言だよな？」

殴った事と関係ないことが、彼の口から発せられた。だがシンは頭に血が上っているため、そんな事を考える余裕などない。

「当たり前だろ！俺は家族をオノゴロで見殺しにされたんだ！俺はアスハを許せない。どんな謝罪を吐いてもだ！」

シンは再度、連絡通路を睨みつける。カガリも、正々堂々とそれを真っ正面から受け止める。

「そうか、それがお前の意思なら好きにしろ」

「えっ…？」

当然怒鳴られて、もっと殴られて、始末書と懲罰が待っているものだと思っていた。だが、クロードから出た判断はお咎めなし。拍子抜けも良いところだ。

「だが、一つだけ言うておく」

先程までの冷たい雰囲気、少し緩くなった気がした。クロードの表情は更にきつくなった。

「この先、自分の考えを曲げるなよ。許容するにしても、否定するにしても、全部自分で考えて行動しろ。あと、レイ」

「はい」

突然の指名にも、レイは即座に対応する。艦の外の人物がいるため、ちゃんと敬語を使っている。

「次の戦闘までにマリク・ヤードバースの怪我が治らない場合、私は出撃せずに管制官として索敵を行う。その場合のMS隊の指揮をお前に任せる」

「はい。了解致しました」

敬礼を象ったレイを確認すると、クロードは頼んだと一言掛けてMSデッキから出て行った。

そして、その場に残されたシンの頭では、クロードの言葉が反芻していた。

《自分で考えて、その考えを曲げない》。今のシンには上手く飲み込めない言葉だった。

オーブから亡命したシンは、兵役のための年齢を満了した時すぐに養成所へと入った。あの時自分に力があれば、父さんも母さんもマユも死ぬことはなかったと、自分の不甲斐なさを呪っていた。

シンはこうも思っていた。力さえあれば、大切なものは守っていけるとも。それが唯一正しいものだと思っていた。

だが、クロードの言葉を思い返すとわからなくなる。確かにここに居るのは自分が考えて、ザフトに入隊したからだ。

だが、その動機は？

復讐という悪鬼に囚われた心が、暴走するままに導いた答ではなかったか？

自分自身を信じられなくて、盲目的に力を信じていなかったか？

（わからない…）

大きな疑問が渦巻いていた。シンの心は今、クロードの言葉に掻き乱されていた。

綺麗に整えられた部屋に、明かりは灯っていない。パネルも電源が切れていて、殆ど何も見えない状態だ。

ベッドの上で、何かがガサリとシーツを乱した。部屋の主である彼は、ブーツも脱がずに仰向けに寝転んでいた。

先程の出来事を思い浮かべる。あまりに滑稽過ぎて、嘲笑が鼻から漏れた。

（俺だって、言えた義理でもないのにな…）

身体を傾ける。深緑の髪がサラリとベッドに散る。

シンに言った事は、自分に向けた戒めのようなものだ。クロードの中にも、悪鬼が存在しているのだ。

父親の死と同時に強制的なサバイバルに突入し、地獄のような日々を送った。時には人肉を貪り、腸を嚼ることもあった。

このサバイバルが終わったのは、体内時計ではかなりの時間が経ったように思っていたが、一ヶ月という期間だった。改めて考えるとおかしい話な気がする。

何故あの時に調査に来たのが連邦だったのか。普通はオーブの飛行機が墜ちた訳だから、オーブの調査隊が派遣されるのではないか。

まだある。連邦に保護された時血を抜かれたのだが、その際に髪の毛まで採られたのだ。疾病を患っていないか調べるのに、髪の毛ま

で必要になるとは思えない。

この不自然な点を考えると、あの時のオーブは連邦と関係があり、更には何かの実験を、あの土地で行っていたのではないかと推測できる。

考えるだけで、心に憎悪が溢れ出す。

「結局、シンと俺は何も変わらないじゃないか…」

抑えられるか、爆発させるか。その違いしかない自分たちは、皮肉な運命に巻き込まれた愚かな俗物でしかないのだろう。

クロードはブーツを脱ぎ捨て、布団に潜り込む。もう何も考えたくなかった。

PHASE-05 簡単な話じゃないんだ(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

シンがカガリにキレる場面ですが、お咎めなしにするにしてもアニメではあっさりし過ぎていた気がします。

一国の代表をけなした罪は、どんな人物であれ重い筈だと思うのですが…。一応、そこを念頭に描いてみました。

では、ありがとうございました！

PHASE-06 知ったような口聞きやがって…(前書き)

デブリ帯での交戦です。結構書くのに苦戦しました…。

駄文ですが、よろしければお付き合い下さい。

PHASE-06 知ったような口聞きやがって…

微睡みの中、薄く残る感覚が布団を手繰り寄せる。寒さから少しづつ身体の覚醒を促す。うんっと、まだ眠りたい身体が反射的に縮こまるが、状況がそれを許さなかった。

『コンディションレッド発令！各員は所定の位置で待機せよ！繰り返します、各員は所定位置で待機せよ！』

ゆっくり休める余裕はないという事か。時計を見る。あれから数十分も経っていない事に愕然としたが、微睡む身体を無理矢理起こし、クロードは脱ぎ捨ててあったジャケットを羽織る。そして駆け足で艦橋への廊下を進んでいく。

途中で、同じ服を着た三人とすれ違った。向かう先が違うのに少し違和感がある。本来なら自分もあちらに駆けていた筈だから。

そしてその内の一人と目が合った。あの時のような荒くれた瞳は鎮まっていたが、迷いが色濃く浮き出していた。

一先ず、自分の意図は間違っていなかったことに胸を撫で下ろす。だが、その為に行った自分の行動に小さな後悔があった。

心がズキッと、小さな針で刺された時のような悲鳴を上げる。あれ程に心を鬼にしたのは、FAITHとなってからは始めてで、仲間を殴ったのだって始めてだった。

「後悔先に立たず、だな」

蟠りが残るだろうが、シンの憎しみに対する盲目が少しでも軽くなればいい。この時はそう思っていた。

艦橋は既に、対艦対MS戦闘用に位置を下げていた。暗く、モニターや計器類の光だけが頼りない光源となった世界。これも艦橋を一撃で仕留められないための工夫だ。

通常的位置では、外の状況を窺うための窓があるのだが、如何せんその窓から漏れる光で、そこにいることが筒抜けだった。それはどうしようもない事であったが、ミネルバはその弱点を克服していた。流石最新鋭の艦だけあるが、卑怯な気がしないでもないがどうなのだろうか？

そんな事はさておき、扉の付近で辺りを見回すと、…何か見てはいけない者を見てしまった気がする。

（何故この三人がいるんだ！？）

見間違いではない。確かに三人はここに居て、有り得ないくらいの頭痛が彼を襲った。終いには眩暈までする有様だ。

「クロード、遅かったね。それに体調不良かね？不摂生は軍人には大敵だよ」

知った風な口を聞く。この戦闘が終わったらどうしてくれようと、心の中が呆れと怒りが支配しそうになったが、もっと肝心な事を聞かなければならなかった。

「…議長、あなたはまだ良い。だが代表までお連れしているとはど

ういう事ですか？」

静かに問われた言葉に、クロードの怒りが集約しているように感じられた。艦長も非難したのだが、議長がそれを飄々と受け流したあの光景が目には浮かぶ。

「何を言っているのだ？この艦は人員不足に喘いでいるのだ。何でも手伝うという申し出があった以上、お力添えを頼むのは当たり前だろ？」

額に手を当てて俯く。そして思う、代表の手伝うはそういう意味じゃないだろうと。

「あんな、そんな直球に解釈しないだろ、普通！」

クロードの言葉から敬語が消えていた。

それはそうだろう。他国の代表を戦いに巻き込み、挙げ句ここまでこのうとしていいるのなら、誰であろうと不敬等省みずに咎めるだろう。

「解釈の仕方は人それぞれ。それに代表にはアドバイスを貰うことしかないつもりだよ」

「敵艦との距離近いです！一人じゃ限界です！クロードさん、索敵お願いします！」

必死に通信と索敵を行っていたメイリンも限界のようだ。クロードは大きく舌打ちを響かせ、艦橋の下方部へ向かう。

そんなクロードを見ても特に何も感じていないのか、デュランダル

は笑みすら浮かべていた。昨日、ここで憶えた恐怖を忘れたのだろうか…。

「MS隊はまだ待機か？」

索敵用のレーダー機器の前に座り、インカムを着けながらメイリンに尋ねる。

「はい。インパルスの換装を決めあぐねているようです」

モニターに目を移す。周辺は小惑星が寄り集まったデブリ帯。本来ならそれを利用しながらの銃撃戦か、待伏せて一撃で仕留めるか。

だが、こちらには換装可能なインパルスがあるのだ。これを最大限に利用しない手はない。

「換装はソードだ。シンには思いつ切り暴れてこいと伝えろ」

「はい！」「ち、ちよつと待って下さい」

メイリンの返事とほぼ同時にアーサーが待ったをかけた。振り向くと、顔には焦りが見える。

「近接武器しかないソードシルエットで出撃なんて、デブリ帯でのセオリーと違うんじゃない？」

確かにそうなのだが、敵がここに隠れていたとなると、既に何かの作戦を用意していると考えるべきだろう。そうなれば、セオリーでは狙い撃ちにされる恐れがある。

また前の戦いで、敵の指揮官は相当やり手である事もわかった。な
ら一泡吹かせるのも悪くない。

「セオリーは確かに頼れるものだが、頼り過ぎても駄目だ。セオリ
ーは崩してこそ意味があるんだ」

クロードの顔には自信が窺えた。それだけで信じてみようという気
持ちにさせるのだから、この男には本当に恐れ入る。アーサーもこ
の自信を前にすれば、引き下がるしかない。

「わかりました。そろそろ敵艦も仕掛けてくる頃だわ。MSを出し
ます」

タリアの一声で作戦が決まった。その事に一番安堵したのはアレッ
クスだった。

クロードと同じ立場だったら、自分もデブリ帯を利用しようとする
敵の作戦を逆手に取るべきだと思っ

う。
デブリは確かに障害物として使えるが、一度破壊された破片はもっ
と大きな利用価値が生まれる。クロードはそれを狙っているのだろ
う。

「君もクロードと同じように考えていたようだね」

カガリを挟んで向こうにいるデュランダルは、モニターに視線を向
けている。直接こちらを向いていない筈なのに、心を見透かされて
いるような気分だ。

「セオリーとは破るためにある…。この言葉は意味深いね」

デュランダルと視線が落ち合う。黒い髪に縁取られた瞳からは、人の上に立つ者のみが放てる雰囲気を感じている。足が震えていた。

「君はセオリーを無視して、自分にとってもオーブにとっても険しい道を選んだ。これもセオリーを破るという事なのかね」

これ以上議長を喋らせるな、とアレックスの本能が告げる。

艦からはMSが射出され、カオス、アビス、ガイアと交戦しているのがモニターに映ったが、今のアレックスにもカガリにもそこに気が配れない。

これ以上は駄目だ！本能が告げる。だが、声を出せない。議長の醸す雰囲気には怯んでいるというのか…！

「君の選択は正しいと胸を張れるのかね、アスラン・ザラ」

無情にも告げられたその名前を聞いて、艦橋の空気が止まった。一様にアスランと呼ばれた青年に注目する。

伝説のエースパイロットと呼ばれ、無敵と称えられたストライクを討ち取り、ジャステイスを駆って迷走する両軍を諫めた英雄。

それがザフト軍の知るアスラン・ザラという人物。謀反を起こした事は、軍の上層部しか知らないことだ。

そして一般兵が知る必要もないこと。話が伝われば、混乱した統制が余計に拗れることが目に見えていた。

エースを欠くこと、その原因が謀反だなんて波紋が広がるに決まっ

ている。

「……………」

二人は何も喋らない。が、明らかな動揺が見て取れた。だが否定しようとする程、肯定しているようなものだ。

「何も言わない所を見ると、間違った選択をした、と後悔しているのかな？」

カッと頭に血が上る。相手がプラントのお偉いさんだろうが関係ない。この問題に口を挟んでいいのは彼女だけだ。

「何も知らない議長に、とやかく言われたくはない！」

突然の怒号が、艦橋に静けさを齎す。一人の例外を除いて、全員が目を丸くした。そんな空気でも、声を上げただけではアレックスの熱は収まらなかった。

「あなたに何がわかる！ あんな苦境の中、前代表の娘というだけで祭り上げられ、挙げ句、国民からの人気を利用しようとする奴を相手にするカガリの気持ちがい！」

拳が震えている。議長の言い方は、自分を通じてカガリを馬鹿にしていると思えなかったからだ。

つまり、デュランダルからして見れば、カガリのオーブでの活動は目に余るもので、アスランもその現状を見て後悔しているのだろう、と聞いているように思えたのだ。

「うるさい！今は戦闘中だ！
艦長、敵に増援の気配はありません」

歯を食いしばって睨むような体勢をとっていたアレックスは、その一言で話の腰を折られてしまい、椅子に腰を下ろす事にした。

ここで言い争えば、艦橋のクルーに迷惑をかけるし、議長の言葉によって墓穴を掘りかねないと考えたからだ。

それを確認したクロードはモニターを見遣る。インパルスはカオスと交戦しながら順調に小隕石を破壊しており、他の二機はレイがアビスを、ルナマリアがガイアをそれぞれ相手にしていた。

（順調だな。これなら…）

碎けていく隕石を見ながら、クロードは自信に満ちた表情を見せた。敵艦はまだ姿を現さないが、そろそろ高見の見物を止めざるを得ない筈だ。

「トリスタン、一番、二番、イゾルデ起動。
トリスタン一番、標準、右隕石撃てえ！」

ミネルバも主砲を駆使しながら隕石を砕く。クロードの予想では、隕石の塊があればあるほどこちらに不利だ。

あちらはこちらと違い、艦体が大きくない。隠れるのにも都合だし、隕石と隕石の間を移動する事で、こちらの視界から消えることができる。

それにあちらは隠れていることから考えて、搭載武装はそこまで強くなさそうだ。なら攻撃方法は限られてくる。

「クロード、本当にこんなに碎いていいの？そろそろ私達も動けなくなるわよ？」

タリアの不安も仕方のないことだが、動けなくなるだけならそこまですべて深刻になる必要はない。この艦にはアンチビーム爆雷もあるし、CIWS等の防御機構も揃っている。神経質になることもないだろう。

「大丈夫です。近くに存在する隕石はあらかじめ片付いたようですし、後は敵艦の様子を見ましょう」

ミネルバの周辺には、無数の隕石群の破片が漂っている。確かに身動きしにくそうだが、ここまで小さな破片なら苦にせず突破できるだろう。

「…そうね。それにしても、敵の動きがないのが不気味だわ」

動きづらく、そして考えづらくするための隕石破碎だったが、これだけ動きがないのも不気味だ。ただ、MS同士の交戦は未だに続いていて、どちらももう一歩といった感じに、切迫した戦闘を見せている。

ザク・ウォーリアの放った陽電子ビームを、ガイアが避けたのがモニターに映った。

「クロード」

振り返るまでもない。後は待つしかないこの状況で、空気を読まずに話しかけてくる男なんて、この艦橋の中では一人しかない。

「何です？軍人以外の口出しは控えて頂きたいのですが」

手厳しい言葉だ。だが、タリアも同じ考えだ。軍人でない者に戦局を掻き回され、予測できない事態になる事が、この状況では一番恐ろしい。

国のトップ二人の命が懸かっているのだ。そのトップの片方にそんな事をされたら、はっきり言ってやってられない。

「わかつているよ。だが、君にお客だよ」

「客？」

戦闘中、艦橋の中にいる人物に会いたいなんて、かなり酔狂な考えなのだが、一応確認はしなければならないか。

そう考えて扉をパネル操作で開くと、俯いた二人の少年がいた。服は作業着、浅黒い肌の者に前髪の一部を染めた者。

「…今は戦闘中だ。お前たちと話している暇など無い」

確認すると、すぐに踵を返したクロード。後ろ姿が邪魔だ、と語っている。だが、少年二人も引かなかった。

「待って下さい！働きたいんです、皆で生き残るために！」

二人は考えたのだ。どれだけ自分達の考えが甘くて、その分だけ大きな危険を生み出す事を。

クロードが身体をこちらに向ける。顔は未だに固く、表情は威圧感を放っているが、ここで怯む訳にはいかない。

「…メイリン、少しの間索敵を頼む」

「はい！」

心なしかメイリンの返事に力を感じた。一緒に働いてきた仲間が許されるかもしれない、そう考えるだけでも声は大きくなる。

そしてメイリンを見るクロードの顔には、優しげな笑みが浮かんでいた。

「皆で生き残りたい、ね。本気でそう思ってるのか、俺は疑問なんだが」

パネルを操作して扉を閉めたクロードの最初の言葉。確かに、人間はすぐに自分の考えを変えられない。数時間前に聞かされた、あの衝撃的な言葉が未だにクロードの耳に染み付いている。

「あれは…本気で言った訳じゃ…」

ヨウランにとっては、叱られた事に対するちよつとした反抗だった。確かに養成所で習ったことを忘れてはいたが、自分の仕事をそこまです疎かにしていたわけではない筈だ。

「本気じゃなきゃ何を言ってもいいのか？」

無表情だったクロードの眉が釣り上がる。ヨウラン、ヴィーノの顔が俯く。瞳を見ていられなかったのだ。

「人の顔を見て話せない奴を信じる程、俺は馬鹿じゃないんだけど

な」

痛い所を突いてくる。嘘や疚しい事がなければ、瞳を真っ直ぐに見て話せばいい、とどこかのお偉いさんが言っていた。その通りかもしれないが、実行するのはかなり難しい。

特に目上の者には、何もかもが見透かれそうで、疚しくなくても怖いものがある。

「…でも、信じて下さい！シンや皆が命懸けで闘っているのに、何もしないでいるなんて堪えられないんです！」

クロードに響いたかはわからないが、ヴィーノは自分の感じた一番の理由を叫んでいた。ヨウランも同じ気持ちだ。

クロードの眉が緩む。表情はさほど変わらないが、雰囲気は柔らかくなっていることに二人は気付く。そして歩み寄ってきたクロードは、笑顔を見せてくれていた。

「…今の言葉、しっかり刻んで忘れるなよ。その気持ちさえあれば、簡単にこの艦は墜ちない筈だ」

…許されたのか？あの時はあんなに冷たくあしらわれてしまったのだから、こんなに簡単にお許しを頂くとは思っていなかった。

「簡単に許すな、って思ってるだろう？」

余程顔に出ていたのか、クロードはにやりと表情を崩しながら二人の顔を覗き込んだ。ヨウランもヴィーノも計りかねて、顔を縦に振ることしか出来なかった。

「俺はただ二人に学んで欲しかったんだ。何かのせいにしてはいけない事と、慢心なんかで自分の役割を疎かにしない事。俺はそれだけで十分なのさ」

「…え？それじゃあ、艦を降ろすって嘘だったんですか？」

皆が騒いでいて二人も知ったのだ。クロードがヨウランとヴィーノを艦から降ろす気だと。

最初は特権の濫用だと反発を覚えたが、冷静に考えればクロードの考えも理解できた。それだけおかしい事を言っていたのだ。

「艦を降ろす？俺はそんな事を言った覚えはないぞ。そもそも人員不足だったのに、艦から人を降ろすなんてできるかよ」

…二人の空気が止まった。

「えっ？えっ！？でも…」

「俺が言ったのは、《次の補給までおとなしくしている》だぞ。それまで反省しろって意味だったんだけどな…」

ポカンとしてしまった二人を他所に、クロードは踵を返す。艦橋に戻って、状況の把握とメイリンの負担を軽くしてやらなければならない。

パネルを操作し扉を開いた時、後ろからの呼び掛けにクロードは半身で振り返った。

「あの！俺達――」

「ああ、戻ってマッドさんに伝えてくれ。仕事を増やしてすみません、てな」

嬉しそうに、はいと二人で返事をして駆けていくのを、目の端で確認しながら艦橋へ入る。

すると聞こえてきたのは、慌ただしく飛ぶタリアの指示、アーサーも迎撃のために声を張り上げている。雰囲気が一変していた。

「どうしたんですか！？」

クロードも声を張り上げた。するとゲスト席から立ち上がったデュランダルが、クロードの前に立った。

「敵艦が突然現れてね、主砲でこちらを攻撃してきたのだよ。それを避けるためにミネルバを動かして、今は追われている状態だ」

クロードの顔から血の気が引いた。迂闊だった、と自分の考え方も甘かった事を痛感させられた。

「メイリン、代わってくれ！」

インカムを取り付け、レーダーの画面を注視する。敵艦の反応がミネルバの後ろにある事は確認できたが、その速度が少しおかしい気がする。

今度はモニターを見上げる。映し出された映像には、敵艦がこちらに向けてビーム砲を放ってはいるが、どれも照準が甘く当てる気が

ないように思える。

(何だ？この違和感は…)

敵艦の動きによって、導かれているよいな気がする。クロードの額から汗が流れた。

「敵艦からMSが射出されました！」

「何ですって!?!」

モニターに映し出されているのは、連邦の汎用MSのようだが、ダガーに似ているが色の配色が違う。確かユニウス条約の後に量産され始めた機体で、ウィンダムといっただろうか。

そしてこの誘導は、ウィンダムに乗っている切れ者パイロットの仕業だろう。マズイ事になった。

「メイリン、MSを呼び戻して！取り付かれたら厳しいわ！」

「は、はい！」

艦までMSが戻るのにかなりの時間を要するだろう。そうなれば、こちらの形成がかなり悪くなってしまう。こうなれば仕方ない。

「艦長、俺も出ます！」

インカムを置き、地を蹴ったクロードは既に扉を開けていた。だが、今は彼が索敵担当の管制官だ。艦橋を離れられては困ってしまう。

「ち、ちよつと、クロード！」

呼び止める声がある。だが、クロードは足を止める気はない。

「艦長もこんな所で墜ちる気はないでしょう!？」

扉が閉じた。まだ止めようもあるが、タリアもこのままでは真綿に首を絞められるように、ジリジリと嬲られることはわかっていた。

索敵を疎かにはできないが、彼をここに縛りつける事は、この艦の寿命を縮めるようなものだ。

「頼んだわよ、クロード……」

閑散としたMSデッキは、ラグナロクの整備だけが仕事だった。マッドの的確な指示もあり、ほぼ完璧に調整が為されていた。後はパイロットの自分に合わせた微妙な調節だけだ。ふう、とマッドが溜息を吐き出した時だった。

「マッドさん！」

飛び込んできた顔馴染みの姿に、戦局が芳しくない事を悟った。自分が懸命に働いた甲斐があるというものだ。

「クロード、何時でも行けるぞ！」

「ああ、ありがとう！」

黒を基調とし、随所に白をあしらったノーマルスーツがワイヤーを

通じてコックピットに乗り移る。OSの起動と共に、キーボードを叩く渴いた音が聞こえてきた。

『カタパルトエンゲージ』

画面に映る、G・U・N・D・A・Mの頭文字。それは力への誘惑か、それとも自由への解放か。或いは両方か。

『ラグナロク、発進どうぞ!』

暗き宇宙へ羽ばたくのは、銀に輝く双砲を背負いし黒の使徒。守るべきもののためなら、どこまでも冷酷な刃を携えながら、戦場を恐怖させる。

「クロード・タクス、ラグナロク行くぞ!」

飛び出したラグナロクは急速に旋回し、紫色のウィンダムに接近する。ガラディンは既に掌にあった。振りかざして斬り掛かると、ひらりと避けてビームライフルを二発放った。

それを機体を捻ることで避けるが、ウィンダムは既に目の前にいて、ビームサーベルを斬り上げる動作に入っていた。

ジュツと弾ける音。それに続いてサーベルとソードの爆ぜり合う音がした。クロードの額に汗が滲む。これ程の手練を相手にするのは、かなり久しぶりになる。あの三機とは緊張感が違った。

『あら。今ので落とせると思ったのにな』

スピーカーからの声は妙に軽い。だが、大抵こんな輩の方が世渡り

も上手く、頭もキレるものだ。

「あんたがああ艦の隊長か？」

回線を割り出し、無理矢理通信を繋げる。ジリジリと線混じりの画面に映し出されたのは、仮面を付けたウェーブ混じりの金髪の男。長さは肩で溜まるくらいだ。

『お、どうなってんのこれ？あんたがやったのか？』

どうにも驚いているようには見えない。その証拠にウィンダムは、胸部を開いてバルカンを打ってくる。それを上に移動することで避け、ビームマシンガンを取り出して反撃する。だが、それも汎用型の機動力とは思えないスピードで避けられてしまった。

「そんな事はどうでもいいだろ。それにしても、あの三人は何なんだ？まだ子供だろ」

『それこそどうでもいい事じゃないか。それに少年兵はザフトの十八番じゃないか』

ビームサーベル、ガラディン。二つの闘ぎ合いが、強い光を放つ。間を置くために、互いは弾き返し合った。

「お前達と一緒にするな。薬によって手に入れた力の代償を知らない、なんて事はないよな？」

捍を握る掌に力が入る。静かな怒りが頭を支配する。

『あら、知ってんの？けどな、あんた達だって極秘にあんな物造っ

てるんだ。同じだろ？」

（同じ？こいつは今、同じと言ったのか…？）

冷静さを欠いた方が負けるのは、戦いの上では有りがちな事象だ。クロードだって理解している。だが、今のクロードには自分の感情を制御できそうにない。

「ふざけんな！お前達は人を何だと思ってる！」

ガラディンを横に薙ぎ、ウィンダムが避けたと同時に体勢そのままにスラスターを避けた逆方向に吹かす。

『何！？』

ラグナロクの機動性を利用すれば、相手が行動する前に攻撃を加えることができる。ライフルを斬り落とした。

「どうしたらそんなに鬼畜な事が出来るんだ！？あの子達が可哀相だと思わないのか！？」

今度は肩の一部がビームマシンガンで蒸発した。このまま一気にけりを着けるつもりだった。だが本能が告げた、引けと。

『知ったような口をききやがって…』

声に圧倒感を覚える。こんな風に怯ませられる程に、ウィンダムのパイロットの纏う空気が重苦しい。

『お前らみたいに生まれた時からすげえ奴らに、あいつらの気持ち

がわかって堪るか!』

ウィンダムは脚の一部が開く。取り出されたのは短剣のようだが、それで何が出来るといふのだ。行動を起こす前に、潰すために突っ込む。

だが、それは油断だったと今更気付く。

『終わりだ!』

短剣なのだから、こちらと距離を詰めるとばかり考えていた。だがウィンダムは、それに反してこちらとの距離を取る。そして短剣を投げ付けてきた。

「そんな物!」

簡単に避ける事が出来る速度だった。だが、それはただの布石であって、落とせると思ったのは慢心だった。

「なっ!？」

突然短剣の軌道が変わる。追尾するようにラグナロクへと突進してきた。

(くそっ! まずい...!)

ラグナロクには盾が装備されていない。機動力のために、限界まで武器等を無くす設計をしたのだ。そのため、一般のMSでは大丈夫な損傷も致命傷に成り兼ねないのだ。わかっていた事なのに。

「…畜生」

迫り来る短剣が唸りを上げた。

突き刺さる音と、短剣が爆発する音が艦橋に響いた。茫然とするクルーと立ち上がるアスラン。デュランダルは無表情だが、心の底はどうなのか。

だが、悲しんでいられない。今度は目の前にダガーが現れ、こちらにビームを放つ。これをアンチビーム爆雷で無効化したが、弾数にも限りがある。

モニターで周囲を見渡す。何か体勢を立て直すきっかけが欲しい。

「バート、あの隕石の陰に隠れて！」

そこでアスランはハツとする。今までの敵の行動の謎だった点が繋がりは始める。

艦に当ててこない砲撃。三機しか出てこなかったMS。そして今の回避できるダガーの攻撃。誘導するような一連の動き。

誘導…？

（まずい！）

「待て！デコイだ！」

バートがアスランを見上げる。だが、時既に遅し。ミネルバは隕石

の傍らに寄り添うように停泊してしまっていた。

「デコイってどういうー」

アーサーの言葉は最後まで続かない。艦に衝撃が走ると共に、砕けた隕石の破片が降り注いできたのだ。破片と言っても大きさはかなりの物。ミネルバの装甲では、損傷が大きい。

「艦長、左翼部付近から火災発生！他の部分にも無視できないダメージが！」

「くっ…！」

焦るな、考えろ。そうタリアは自分に言い聞かせるが、一気に局面が変わり過ぎて頭がついてきていない。それにクロードの件もあり、簡単には冷静になれそうにない。

そこそこの思い知らされる。今までクロードに頼ってきた自分を。FAITH だから、といって戦闘の前に彼の意見を聞き、それに従ってここまで無事にきたこと。

彼が居なくなつて、自分の甘さが痛い程に身に染みる。

タリアは見上げた。こんな時、彼が居たなら何て言うのだろうか。また、諭されるのだろうか？

今度は突き放されるのだろうか？

『おい、何を腑抜けてるんだ！』

彼の声がしたような気がした。そんな事、ある筈なのに。タリアは自分の衰弱ぶりに驚いた。

「そんな訳、無いのにね…」

『何がそんな訳無いんだよ！しっかりしろ、タリア・グラデイス！』

「クロードさん！！」

今度は間違いではない。メイリンの嬉しそうな声が、明らかな証拠となる。

「クロード！？一体どうやって…？」

あんな爆発なら、ラグナロクが無事で済む筈がないと誰もが思っただろう。疑問に思うのも当然である。

「メカニックには悪いけど、ビームマシンガンを犠牲にしたのさ。だから、あんなに派手に爆発した訳」

何か腑に落ちない。クロードの口調が特に腑に落ちない。

「生きているなら、何ですぐに連絡しないの！」

タリアの怒りは、艦橋のクルー全員の代弁だ。クロードの不謹慎さに呆れが止まらない。

「…すみません。あの爆発で通信機能が一時的に麻痺しまして本当にすみません…。それよりその状況をどうにかしないと」

上手く話をごまかしたつもりだったが、そんな簡単なことではない。

「…クロード、帰ってきたら覚悟なさいね」

嫌な汗がたらりと流れた。これはもう覚悟するしかなさそうだ。

「…俺に考えがあります」

ゲスト席から聞こえた声。少し躊躇いがちに口を開いたのは、紺色の髪の青年。艦橋の人間皆が驚いたが、一番驚いたのは彼の隣の少女だった。

ザフトとの関わりを極力避けていたアスランが、自分から声を上げたのだ。

カガリは立ち上がったアスランを心配そうに見つめる。彼はこちらを見るとにこりと笑い、また前を見る。

「一般人がでしゃばるような事ではないわ」

冷たくあしらわれるが、アスランの瞳は真っ直ぐだ。くじける訳にはいかない。

「アスラン・ザラとしての進言だとしたら、どうしますか？」

また艦橋がざわつく。先程まで、その話題にはだんまりを決め込んでいたのに、ここに来てその事実を認めたのだ。

「…どういうつもり？」

真っ直ぐな瞳だと、タリアは思った。何かを決意したこの瞳を信じてもいいか、とも思わせるのは、彼の雰囲気のせいかな。

「俺はただ、大事な人をこんな所で死なせる訳にはいかないんです」

「けど、ね……」

軍人として一般人の、それも他国の一般人の進言をまともに受け入れてしまうのは、流石に抵抗がある。

だが、彼がアスラン・ザラである以上、この状況を打破する方法を考えつくのも頷けるのだ。

「いいのではないかな？彼を信じてみても」

またゲスト席からの声。タリアはほとほと参り始めた。この人はザフトの面子を潰す気なのだろうか。

『艦長、アスランを信じてやってくれ』

モニターに映るラグナロクは、先程対峙していた紫色のウィンダムと隊を組むダガーを相手にしていた。

これ以上迷ってられない。

「…わかったわ。あなたを信じるわ、アスラン」

頷く彼の顔は引き締まっていた。その瞳の奥に宿した気持ちが、みんなの迷いを消し去っていた。

PHASE-06 知ったような口聞きやがって…（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

この話で一番苦労したのは、ネオとの戦闘描写ですね。くどくない程度に二人の意見をぶつけてみたのですが、いかがだったでしょうか？

後、シン、レイ、ルナマリアの戦闘描写も次で行う予定なので、この話では空気でしたね。申し訳ありません。

では、次もよろしくお願い致します。

PHASE-07 逃げ出してしまおうか？（前書き）

前回の後書きで書いたように、シン、レイ、ルナマリアの戦闘がメインの話です。

それでは、駄文ですがお付き合い頂けるならお願いします。

PHASE-07 逃げ出してしまおうか？

「でえやあぁーっ！」

対艦刀エクスカリバーがカオスに襲い掛かる。受け止めるのは無謀と判断したのか、カオスは横にスラスターを吹かしてこれを避けた。後ろにあった小隕石が砕け散るのを、シンは片手間に確認していた。

「はぁぁぁあっ！」

そして追撃を仕掛ける。今度は横にエクスカリバーを薙ぐ。カオスは上方に移動することで避け、反撃とばかりにビームライフルを連発した。

段幕を張られては、この装備では近付きようがない。だが、それも考えるだけ無駄だった。

カオスの後方から白いザクが迫る。それは、構えたビームライフルでカオスの背中を捉えた。

「サンキュー、レイ！」

体勢を崩すカオス。撃墜するのにはもってこいのシチュエーションだ。

「落ちろーっ！」

エクスカリバーを水平に構えて突撃する。対艦刀だから、突き刺すだけでも落とせる筈だ。

『シン、避ける!』

レイの声が響く。何事かと思うと、ザク・ファントムの後ろから水色の機体が迫り、M Aに変型すると同時に三連ビームを放ってきた。

「くそっ!」

下方に移動し、ビームが通り過ぎるのを確認した。すぐに突っ込む気でいたのだが、レイに止められてしまう。

「レイ、どうして!」

『少し落ち着け。何を焦っている?』

敵の二機が合流していた。今突っ込んでいたら、間違いなくこちらが落とされていただろう。だが、心の焦りは消えてくれない。

何故、何に焦燥しているか…わからない。

「くそっ。レイ、二人で一氣に攻め立てよう!」

今は戦闘に集中する事だ。がむしやらに戦えば、雑念は消えてくれる。

『ああ、切り込みは任せるぞ』

二機と二機、パイロットの緊張感が嫌にも高まる。先に仕掛けるのが誰か、それで体勢は決まる。

動いたのはカオスだった。インパルスとの近接戦は不利とみたか、ビームライフルを二発放つ。シンはエクスカリバーで打ち払い、予備動作を終えていない所を突きにいく。

それを邪魔するようにアビスが踊り出て、ビームランスを構え、インパルスの進路を塞ごうとしたが、レイのザク・ファントムの射撃に怯む。

「今度こそ！」

エクスカリバーの切っ先は、カオスの目と鼻の先。一機落としただけでも大した戦果であろう。

機体に衝撃が走る。エクスカリバーは標的の横をすり抜け、インパルスはカオスに蹴落とされる。

シンはカメラを回す。背後から迫ってきていたのは、アーモリーワンドで謎の失踪を遂げた黒い機体。犬のようなMA状態で走るように飛んでくる。

赤いザク・ウォーリアの攻撃を避けながら放たれたビームは、インパルスのスラスタ付近に着弾したが、特に問題はなかった。それよりも、どちらも三機が合流した事がどう出るのか。

『シン！大丈夫？』

ザク・ウォーリアの攻撃。カオスとアビスを分断するように赤い粒子が飛ぶ。陽電子の砲撃は、MSでは防ぎようがない。

「…ああ、何とか。ルナこそ機体壊してないだろうな？」

分断された二機に追撃を仕掛ける。少し距離があるが、ソードシルエットにも中距離用の武装はちゃんとある。それが脚部に収納された、ビームを纏う曲線形の刃。右脚のそれを、インパルスはアビスに投げ付ける。

ひらりと、アビスに紙一重で避けられてしまうが、シンの表情には笑みが浮かぶ。

反撃を仕掛けるアビス。ビームランスを振り翳した時だった。何かが上方を通る。アビスは気にせずに振り下ろしたのだが、肝心の刃が無く、残っているのは切断された柄だけ。

そしてインパルスの手には、先程投げた筈の刃が戻っていた。投擲と同時に返ってくることで敵に攻撃を仕掛ける武器。所謂、ブーメランだ。

『お生憎様。まだ傷一つ付けてないわよ』

ザク・ウォーリアの標準はガイアに向かった。余程因縁を感じているらしい。

長い砲身を背中に取り付け、ザクはシールドから斧を取り出す。刀身は現れた瞬間にビームを纏い、ルナマリアはガイアの側面に回り振り下ろす。

ガイアはそれに対抗するためにMS形態に変型し、ビームサーベルを抜き放つ。ぶつかり合い、火花を散らす両武器。ギリギリと攻めぎ合うが、決定打に欠けていた。

「へ、漸くザフト・レッドの自覚が出たんじゃない？」

ブーメランを再度放つことで牽制し、フォースシルエットの物と同じ前大戦時より強力になったビームサーベル、ヴァジュラを左手で抜き放ち、エクスカリバーとのコンビネーションを放つ。

アビスは振りの遅い攻撃をひらりと避ける。だがこちらは囧。本命は左手のヴァジュラ。

アビスは回避行動の予備動作を終えていない。それに機構上、近接戦を得意にしていない筈だ。左手を振り切るつもりだった。

「何!？」

アビス、カオスの動きばかりに気を取られ、ガイアの事の確認までしていなかった。MAガイアの両肩からビームサーベルが羽のように展開された。

『やらせるか!!』

ルナマリアの声と同時に、ザクの格闘で下方に吹き飛ぶガイアを確認する。その一瞬の隙が、アビスに反撃のチャンスを与えてしまっていた。

『シン!!』

悲鳴に似た声が聞こえた。MAに変じたアビスのカリドウス砲が、インパルスのコックピットの目の前に宛てがわれる。

(やられる…!)

『油断し過ぎだ』

ビームの着弾する音と共に、水色の機体がぐらつく。シンは捍を思いつ切り引つ張り急速で離脱する。

「くそっ！何なんだ、こいつら。本当にナチュラルなのかよ！」

カオスの放ったカリドウスを避けながら、シンはごちた。

自分たちのようにコーディネイターで、養成所の教育を受けた者たちは大抵、連邦のパイロット一人に苦戦はしない。数の暴力の前では苦戦も必至だが、単騎での戦闘力では雲泥の差だ。

それなのにこいつらは…！

アビスの被害は思った程ではないようで、三連ビーム砲とカリドウスを同時に放つ。範囲も広く上に避けるしかない。ザク・ファントムとインパルスは同時に上昇すると、待っていたのはカオスによるオールレンジ攻撃。

背中に付いたポッドが切り離され、自由な意思を持った生き物のように動き回り、そこからビームが放たれる。一発は大した威力ではないが、蓄積されるダメージを考えれば馬鹿にならない。

「うわああっ！」

『シン！くっ…、ビームライフルで狙い撃つしかない！』

ザク・ファントムは的確に捉えてくる攻撃を何とか躲し、施条銃を

構える。放たれた線条は易々とは当たらない。

「そんな事しなくたって！」

突撃する。近くまで行けば、あのポッドに攻撃手段はない。二つあったって、二機を相手にする以上同時に狙ってくることはない筈だ。

『なっ！？ダメだ！』

一基のポッドに狙いを定め、襲いくるビームを躲す。インパルスの性能のお陰か、ポッドには彼弾せずに到達できたが、それは罠だった事に今更気付く。

「まず一つ！」

ヴァジュラを薙ぐ。真つ二つになったポッドは爆散したのだが、その爆煙で周りが見えない。

「しまった！」

『シン！』

援護に向かおうとするザク・ウォーリア。しかしそれは黒きMAに立ち塞がれて難しい。レイもアビスと交戦するのに精一杯だ。

『くそおっ！』

カメラを回しても、映るのはピンクの煙。その一部に、薄くシルエツトが浮かび上がる。

「そこか！」

バーニアを吹かして、急速に影を追う。するとすぐに煙から飛び出したのだが、突然の光が横を通り抜けた。

咄嗟の回避行動は間に合わず、左腕を持っていかれた。ヴァジュラは幸い収めていたので無事だが、エクスカリバーの制御が難しくなった。

芳しくないこの戦況の中で、追い撃ちをかけるように悪い事は続くと言うのは本当のようだ。

『MS全機に通達！直ちに帰艦願います！』

メイリンの必死な訴え。

それがミネルバの危険を示していた。

しかし。

『この状態ではな…』

レイが零した通り、こちらも目の前の三機を相手にするのに手一杯で、とても背中を見せられる状況ではない。現に敵の攻撃が止む事はなく、対応するのにも精神が削れる。

「くそっ！メイリン、ブラストシルエットとチェストフライヤーを飛ばせないか！」

何とか状況を打破するにも、長距離からの火力が欲しい。

『シン、ちょっと待ってて!』

インパルスを庇うように立ち回らなくてはいけなくなり、防戦一方となってきた。レイとルナマリアで三機を相手にするには、技量云々より機体の性能差がきつい。

『くそっ! 早く戻らないとミネルバが!』

『シルエットフライヤーが届くまでの辛抱だ』

歯痒い思いが支配し、頭を垂らす。目の前のレーダーに映る反応が増えていることに気付いた。

「これは!」

本格的にやばい。この中にクロードが混じっているにしても、この数ではいくらラグナロクでも対処できない。

『…耐えて。お願い…』

赤い線を放ちながら、ルナマリアは呟いた。クロードが何とかしてくれると思うのだが、厭な予感がしてしまう。

『弱気になるな。何とかするしかないんだ』

カオス、アビス、ガイアの攻撃が折り重なり隙の無い連携を繰り出す。ビームの嵐が三機を襲うが、シールドや打ち払いでどうにか耐える。

だがそれも何時までも続かない。ザク・ファントムの右脚に直撃し

た。

『ぐっ！』

全壊とまではいかないが、機動力に支障が出てしまうぐらいに破損していた。

「レイ！」

『構うな！それよりシン、来たぞ！』

待ちに待った換装パーツが届く。シンはキーボードを叩き、胴とソードシルエットパックを取り外し、レーザー誘導を利用してチェストフライヤー、ブラストシルエットを換装する。

「行くぞ、レイ、ルナ！反撃開始だ！」

『ああ！』『ええ！』

腕部に備え付けられた大型の砲門は、二つの武装を有する。圧倒的な破壊力を持つケルベロス、そしてミサイルランチャー。そして肩部には発射時の速度を高めたレールガンを装備。徹底的に長距離を想定したシルエットなのだ。

早速シンは牽制にレールガンを放つ。狙うはガイアとアビスの間。

先程のルナマリア同様に、連携をとられないように引き離すためだ。

案の定、二機は離れた。そしてルナマリアは陽電子砲を、シンはケルベロスを構える。

「『いけーっ!』」

放たれたビームは、アビス、ガイアに寸前で躲されはしたが、膨大なエネルギーの奔流は装甲を溶かしていた。そこにビームランスで襲い掛かり、MAガイアの肩部分を断つ。そして蹴りつけアビスに飛ばし、二機に纏めてダメージを与える。

レイも負けてはいない。インパルスの支援を受け、ビームライフルを放ちながら接近する。脚をやられた事を思わせない動きで、カオスのもう一つのポッドに傷を付けた。

「よし! もう少しだ!」

シンの心に芽生えていた迷いや焦りは、もうここには無かった。それを促したクロードが戦っているからか、自分の中に生まれていた疑問も茅の外に出来ていた。

――この時までには。

ピーッと警告音になる。自分達が相手を圧倒している状態なので、その音も平常心で受け止められ、レーダーを何も考えずに覗き込む。

「『『………!!』』」

三人の時間が止まった。攻撃の手を緩めてはいないが、明らかに照準が散漫になっている。

シンの心に再び巻き上がる焦り。言葉を示しておきながら、考えを教えもせずに去る上官が何処にいるのか。これから習いたい事もたくさんあった。

「う、嘘だろ……」

『まさか……』

レイの心には欺瞞ではないか、という感情が湧き上がる。クロードはああ見えて茶目っ気があり、ブラックな冗談も度々言っていた。レイ自身、信じたくもなかった。

『ク、クロード……？』

ルナマリアの心には、何も浮かんでこない。周りの音は消え失せて、目の前が真っ白になるような感覚に囚われる。

周波数をラグナロクに合わせて通信を試みる。ウンともスンとも言わず、雑音の中からクロードの声が聞こえることはない。

知らず、頬を雫が伝う。

「くっそおおおっ!!」

砲門を全て開き、ケルベロスのビームと共にミサイル八門を同時に放つ。本来なら少なくとも一発命中するであろう攻撃だが、激情に囚われ過ぎたシンの捍捌きでは、一つも命中しない。

だが、そんな事は構わなかった。ケルベロスのチャージに掛かる隙を、レールガンの攻撃で埋める。

エネルギー切れも弾切れも軍人らしさも関係ない。

この感情を抑え切れずにはいられなかった。それはルナマリアも同

じょうで、陽電子砲を撃ち続けている。

「くそっ！シン、ルナマリア、落ち着くんだ！」

呼び掛けても返事はない。聞こえてくるのは、悲しみに咽ぶ悲鳴にも似た叫び。

レイだって、二人みたいに見境を無くせたらどれだけ楽だろう。だがそんな訳にもいかない。クロードに任された小隊の隊長。自分が取り乱せば、ただの個別で戦う無秩序な傭兵と変わらない。

「いい加減にしろ！クロードがこんな戦い方を望む訳がないだろう！」

それでも止まらない。咽びは何時しか本格的な嗚咽に変わり、悲しみはもう抑えてはいけない所まできていた。

（俺じゃ止められないのか…）

小隊すら率いれない自分の技量が恨めしい。頼まれた仕事すら熟せなく、人の死すら悼めないこの心境では、感情などあってないものか…。

「俺はやはり…」

『シン、ルナマリア、攻撃止め！』

レイの俯いた顔が反射的に跳ね上がる。聞こえてきた声に間違いなければ、これは守護霊の導きか、それとも亡霊の誘いか。

どちらにせよ、

「幻聴を聞く程に弱っていたのか、俺は…」

『…それ艦長にも言われたんだけどな』

返答？ 幻聴が律儀に返答をする訳がない。レイは必死にカメラを回す。右の後方に向けた時、それは見えた。

バーニアを受けて輝く銀色の翼。機体は宇宙と見紛う黒。片手に握られた印象的なビームソード。間違いようがない。

「クロード！？」

ラグナロクはザク・ファントムの傍で停止する。機体に傷と焦げはあるが、大きな損害は見当たらなかった。

「生きているならどうして連絡を入れないんです！？」

自分の中に渦巻く感情に戸惑いながら、レイは抑えられない物を爆発させる。

『悪い、説明は後だ。それよりあいつらを何とかしないと』

こんなに感情を剥き出しにしたのは久しぶりで、自分の中にもまだこんな物が眠っていたことに驚くと同時に、それよりで済ませる気にはなれなかった。

だが、クロードの言う事も尤もで、暴走する二人を止めなければ作戦も意味を成さない。

「…そうですね。でも後できっちり話を聞きますよ」

『わ、わかってる。はあ…、これで二人目か…』

憂鬱そうに溜息を吐き出すクロードは気に入らなかったが、今はあの二人を止めるために動くことにした。

…とその前に重大な事に気付いた。

「クロード、ミネルバはどうしたんです？」

ミネルバが墜ちることになれば、自分達は戻る場所を失う。戦う意味が失くなるのだ。

『あっちは大丈夫だ。粗方のMSは沈めたし、あいつがいるからあの状況でも何とかなるだろうし』

改めてレーダーを見してみる。確かに反応は、MSの反応は味方の四機と敵の三機しか無い。

「で、そのあいつとはオーブ代表の随員の方ですね。アスラン・ザラと噂の」

MSデッキで調整をしていた時に、ルナマリアから聞いたのだ。代表が随員をアスランと呼んだと。容姿も噂に聞いた通りで、ほぼ決まりだろうと皆が言っていたのを憶えている。

『まあ、それは秘密で。とにかく行くぞ』

「はい」

それぞれ違う方へ向かう。レイはインパルスへ、ラグナロクはザク・ウォーリアへ。

『ルナマリア、止まれ!』

宇宙空間ながら涙が伝うのは、とめどなく溢れてくるからだ。それ程までに悲しいのは、自分の中でクロードの存在が大きい到他らない。

そろそろ自覚しなければいけないのかもしれない。

失って始めて認めてもしようがない事だとわかってはいるが、そのまま消えてくれる程簡単ではない。

『うつ…くつ…クロード…っ…』

陽電子の銃爪を引こうとしたが、腕を掴みそれを阻止する存在があった。

「レ…イっ! 邪魔しな—」

カメラが捉えた物を見て絶句する。有り得ない事だと思い、目を擦ろうとしたが、ヘルメットが邪魔でそれもできない。通信と映像が鮮明に届く。

『……………。…悪い、早く連絡を入れるべきだった』

クロードはぐちゃぐちゃに崩れた私の顔を見たのだろう。涙はヘルメットで浮かんでいるし、漏れる嗚咽は止められない。

「ほ…、本…当よ…っ！き…っちり…、話聞…き…ます…っからね！」

『…ああ。気が済むまで聞いてくれ』

優しい顔のクロードを見て、また涙が溢れそうになる。一度バイザーを上げて雫を外に逃がす。

『それにはまず、この戦闘を終わらせるぞ。幸い、俺が指示した通りに小隕石が砕けてる』

ニヤリといやらしい笑みを浮かべるクロード。少し寒気が襲った。

「やらしいわよ、顔が」

涙も嗚咽も一気に引っ込んだ。こんな顔を見れば、誰だってこうなると断言できる。

『わ、悪かったな。しょうがないだろ、元々こんな顔なんだから』

どうやら拗ねてしまったようだ。言動や顔が普段以上に幼くて、小さな笑みが零れた。

その時、クロードに気付いたシンが怒涛の勢いでクロードに迫ったのもお約束だ。

しかし、いつまでもこうして居られない。目の前には、倒さなければ

ばいけない敵がいるのだから。

『シンがブラストシルエットに換装していたのは好都合だ。今から奴らを一網打尽にする。』

三機とも俺の指示に従え。いいな?』

『『はい』』』

クロードが指示した配置はこうだ。まず、ラグナロクを基準としてシンが最奥の隕石群の近く。レイが下方向の碎けたデブリの中。ルナマリアが、上に漂うデブリの一番大きな塊。

合図と同時に行動開始だ。

三機はレーダーを頼りにラグナロク以外を発見しようとするが、目の前の黒い機体はそれを許さない。

機動力を活かし、致命的な損傷を与えられてはいないが、反撃すらさせずに翻弄する。

カオスの左手をビームライフル毎斬り落とした時だ。

『今だ!』

全速で三機から離脱するラグナロクを確認して、ルナマリアは、巨大なデブリを出力を加減した陽電子砲で撃ち抜く。

他の二機も同様に手持ちの武器で、隕石を破壊した。その意図に気付いたのだろう、三機が離脱を試みるがもう遅い。

粉々に碎けた隕石の破片がカオス、アビス、ガイアに驟雨の如く襲

い掛かる。

幾らフェイズシフト装甲でも、直接打撃には強くない。強くないだけならともかく、MSは機動性を重視する傾向にあるため、小さな隕石の破片でも、

これ程の量になれば十分な脅威を発揮する。

見事にボロボロになった装甲。後は適当にバルカンでも撃ち込んでおけば、撃墜出来そうな感じだ。

パーンと三色の信号弾が上がった。どうやら敵の母艦からで、のろのろと三機が帰艦していく。

『逃がすか!』

ケルベロスを構えるインパルス。だが、それを下ろすようにラグナロクが手を添える。

『今はいい。俺達も帰るぞ。多分ミネルバも大変な事になってるだろうからな』

遠くを進むミネルバを見ると、右側の装甲はボロボロに損傷し、右翼はほぼ全壊していた。

「そうね、早く帰りましょう。：クロードには聞きたい事が山ほどある訳だし」

『そうだな、反省してもらおうぞ』

『覚悟して下さい』

三人の怒気に充てられて、たじたじなクロードは大きな溜息を落とした。

『…勘弁してくれよ』

この中に勘弁しようと思う程、人間の出来た人物がいなかったのは言うまでもないだろう。

地獄全てを巡り巡ったような感じの長さが、今回の質問攻めにはあった。

とにかく艦橋のクルーには、やれ人手が足りないのとか、心臓が止まったとか、もっとマシな回避方法があったでしょうにとか。

メカニックからは、ビームマシンガンを一から造り直したとか、機体の損傷が激しくて大変だと愚痴を聞かされ。

三人からは、何と戦ってそうなったんだとか、ビーム兵器以外への対応を考えてなかったのかとか、艦の守るためとはいえ無茶し過ぎだとか。

強ち間違っていないのだから、反論する訳にもいかない。返事をしながら項垂れて、反省しきりだった。

そして今は、その地獄から解放されたかと思いきや、そうでは無い。

「お前は！死んだとして、深く悲しむ者がいる事にいつ気付くんだった！」

鬼面を被り、中身まで鬼と化した親友が机に手を叩きつけながらに問うてくる。余りの勢いに、代表がビクッと反応してしまっているのが目の端に映ったが、今は構っている余裕もない。

「その…すまん…。あんな不自然な爆発なら、誰も心配しないだろうと…」

ビームマシンガンのエネルギーは、機体のエネルギーと違う。因って爆発時の爆煙の色が違うのだ。

「爆発に自然も不自然もあるか！それに、何ですぐに爆煙から離れた？お前があそこで黙って居れば、誰も心配せずに済んだんだぞ！」

（それはお前だって知ってるだろうが…）

煙の中では身動きが取り辛い。それに敵には煙の中にいる事はわかるので、狙い撃ちは出来なくとも攻撃は加えられる。

「いいか！お前には無茶するなどは言わん。あの機体だって、見限り防御機構を削ぎ落としてるみたいだし」

別に無茶をするつもりでいる訳ではないのだが、気が付けばあんな風に設計していたのだ。自分の好みを反映すると、恐ろしい結末が待っているという教訓か。

「だが、引く時は引け。それが誰かを犠牲にするにしても、自分の命と換えるな！」

アスランが自分を心配してくれている事がわかる。それだけでも嬉

しく思える自分が、中に居てくれる事に安堵した。

「…ああ。肝に銘じておくよ」

クロードの言葉を受けても、アスランの表情は緩まない。信用できないのかもしれない。

クロードはクルーゼ隊にいる時、アーケエンジェルとの交戦の損傷で四機が無理をしなければ出撃できない時に、連合の独立部隊の奇襲に遭ったのだ。

その時に四機が直っていないのは自分のせいだ、と言って単独でジーンで特攻したのだ。

その時は幸い、イージスの修理は出撃できる程度に回復したので事無きを得たが、クルーゼ隊長から大目玉をくらい、謹慎を喰らったのもお約束だろう。

「まあまあ、アスラン。今はこうして生きているんだ。大目に見てはどうだ？」

居心地が悪くなったのだろう、カガリが助け船を出してくれた。

流石に彼女には弱いのか、アスランも表情を崩す。これで漸く地獄から抜け出したのだと、この時は思った。

「ああ、そう言えば。代表へのお迎えがそろそろオーブから出立するそうです。もう地球からも近い距離にありますし、三日もあればこちらに着くでしょう」

「そうか…」

何やら物悲しさを纏う代表の雰囲気。自国に帰ることが、それ程に嫌なのだろう。

クロードにもそれは伝わる。帰ればアスランではなく許婚とも言うべき、ユウナ・ロマと一緒にいなければならない。

ユウナは既に議会の一員で、一応カガリの補佐役とされているが、実質は父であるウナト・ロマが配したカガリの監視役だ。今回のアスランとの遠征は、非公式での会談であるから目立たないように、護衛を就けるだけに留めたのだろう。

（そう考えると納得がいくな。オーブが非公式に、と願い出た理由も）

やはりカガリは、代表と言っても女の子に他ならないという事だ。

「カガリ…。逃げ出してしまおうか？」

「えっ？」

真剣な表情が、冗談ではないとカガリの中に印象づける。

「お前が望むなら、俺は国家反逆者になってだって連れ去ってやる。その覚悟がある」

手を差し出すアスラン。その言葉に心に大きく熱が籠る。

その手を握って誰も知らないような場所で、二人で家庭を築き、二人の子供を育み、一緒に老いていけたらどれだけ幸せなんだろう。

いつまでも笑みを絶やすことがない、と断言だって出来る。

だが、それは許されない。

「ありがとう、アスラン。だが、私はオーブの国民達を戦火に巻き込まない義務がある」

目の端に雫を浮かべ、微笑みを浮かべる表情に、アスランの心は締め付けられる。これ程までに彼女を追い詰める物から、守る術が自分にはない。

――力が欲しい。

『クロードさん、大変です!』

場違いに響いた通信機の呼び出しに、舌打ちをしながらクロードは受信を許可する。映ったメイリンの顔は、大変と言いながら何処か他所事のように感じられた。

「…どうした?」

違和感はすぐに確信へと変わる。本当にコーディネイターという人種は…。

『安定軌道にあったユニウスセブンが、地球への落下軌道に入ったんです!』

「何!?!」「何だって!?!」

思わず立ち上がるカガリと、その横で茫然とするアスラン。そしてカガリは駆け出す。アスランもそれに続いた。

「代表！議長の所には俺が案内します！」

クロードは二人の前に踊り出て、行き先を示すように足を早める。

（これはヤバい事になるぞ…）

世界の保たれていたバランスが崩壊する音が、今にも聞こえてきそうであった。

「…あやつらめ、漸く動き始めたか」

何処かも判らぬ暗い部屋。明かりは端末から延びる薄い光だけ。そこに存在するのは、確認できるだけなら二人。

『ああ。あいつら本当に地球を嫌ってるのか、甚だ疑問だぜ』

通信機能を開いていたようだ。スピーカーから聞こえるのは若い男性の声。

「そう言うな。奴らとて、人を大量に殺めるには抵抗があるのだろう」

通信を受けているのは、初老に近い男性。浮かぶのは、自分の目的のためなら何もかもを犠牲にするのも厭わない、欲望の影。

「どうやら議会は既に手を打ったようです。余程戦争はしたくないらしい」

女性の声だ。だが、感じられるのは温もりではなく、明らかな寒気。絶望を塗りたくった、復讐の塊。

「ふん、デュランダルめ。余計な事を…。きっちり邪魔するのだぞ」

『わかってるよ』

通信が切れる。世界は知るだろう。進み過ぎた科学の結末は、全人類に絶望しか与えない事を。そして科学者は思い知るだろう。お前達の行いが、どれ程の不幸を撒き散らしているのかを。

カタリ、と写真立てが揺れた。写るのは幼子を抱く幸せそうな父親。

「…ふふふっ…、はーっはっはっ！」

思い知るがいい！欲望を纏った復讐が如何に恐ろしいかを！

PHASE-07 逃げ出してしまおうか？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。今回はすんなり書き上がりました。

ですが、やはり戦闘描写は難しいですね。圧倒してしまうとすぐに終わってしまいますし、均衡し過ぎると長くなり過ぎる。うーん、難しいです。

では、お疲れ様でした。

PHASE-08 誤解してたわ（前書き）

ユニウスセブンに向かうまでの話になります。

駄文ですが、お付き合い頂けるのでしたらお願いします。

PHASE-08 誤解してたわ

地球の周回軌道に浮かぶ、農業を主とした目的で建設されたコロニーの残骸。外も中も核により焼き付くされ、煤こけた外見は正にその被害を顕著に表している。

そのコロニーはユニウスセブンと呼ばれ、安定した軌道上に存在し、連邦への戒めと成り得るものである筈だった。

だがそれは戒めではなく、落下という手段を用いて、地球に裁きを下そうとしていた。衝突すれば、地球は壊滅的な被害を受け、しかも生き残れる者は数少ないだろう。

「議長、お願いだ！ユニウスセブンへと向かってくれ！」

デュランダルは部屋へと案内し扉を開けたと同時に、カガリは飛び入って懇願する。顔に浮かぶ焦燥が、どれ程までにこの事態を重く受け止めているかを示していた。

「無論です。あれが地球に落ちることになれば、コーディネイターの仕業だとする風潮が高まる。それだけは避けなければなりません」

只でさえ、ブルーコスモス等の活動でコーディネイターを恨むナチュラルが後を絶たないのに、前大戦が本格的な戦争に突入した原因である、血のバレンタインで焼かれたコロニーが再びきっかけになれば、それこそ止めどない、血で血を洗うような紛争を生み出すに決まっている。

「ああ。それもあるが、やはり地球に住む人々のためにもどうにか

しなければ…」

手を額に当てて、俯いたカガリの表情は悲愴に塗れていた。自国の事だけではなく、世界を焼かせたくない彼女にとって、この事態だけはオーブも干渉という訳にはいかない。

代表の名前を使っても、プラントとの協同を計るべきであると考えた。

「そのための具体案なんですが…」

クロードの提案は即時で承認された。誰もがそうするしか無いと思っていたし、そうしなければユニウスセブンは、争いの種火を世界全てに振り撒く。

その頃、シン達は休憩室で団欒とまではいかないが、身体を休めていた。

シンとレイはコーヒー、ルナマリアはココア、メイリンとヨウランはオレンジジュース、ヴィーノはコーラだ。

「それにしてもクロードさん、あっさり二人を許したね」

艦橋に居たメイリンは、事の納まりを知っている。戦闘中に二人が艦橋まで来た事には驚いたが、それを取り合うクロードにもまた驚いた。

「ああ。けど、怒られて正解だったような気がするよ」

「だよね。あの人の言ってる事が正しい訳だし」

シンも帰艦と共に、友人二人がMSデッキに居ることに驚いたのだ。そんな勝手をしたら、もう庇いようも無いと思った。だがそれは杞憂であり、三人が笑い合うのがどうにも不可思議であった事が、まだ心に痞えている。

「意味も無く叱るような人じゃないしね。あの歳であの才能、はっきり言って私達もああ為れるとは思えないわ」

ルナマリアのごちた言葉が、胸を締め付けた。たった三歳しか違わない筈なのに、あの人はもう軍の上層で活躍してもおかしくない人徳を持っている。

それが妬ましくもあり、同時に嬉しくもあった事が、シンの心の小さなしこりになる。

「でもクロードさんって、相当苦労してるらしいわよ」

（また調べたのか…）

メイリンは気になる人ができると、軍のネットワークで経歴や生まれ、誕生日等様々な情報を仕入れてくる。

管制官だから何も悪くはないが、軍のメインコンピュータに後を残さないように侵入するのはどうなのだろう。

「軍に入る前らしいんだけどね、飛行機事故で不毛の大地でサバイバルしてたんだって」

「へー。それにしても身のこなしに品があるけどねー」

それに乗ったのはルナマリアで、二人は姦しくクロードの話を広げている。何となく、男性陣は居た堪れない気持ちになる。

「でも、現場で発見されたクロードさんの衣服は血だらけで、雰囲気もかなりヤバかったらしいよ」

こんな情報をどこから仕入れてくるのか甚だ疑問だが、メイリンに常識を当て嵌めてはいけないのかもしれない。シンはそう思い始めていた。

「まあ、それはそうよね。生き残るためには、そこに住む動物も狩らなきゃいけないし」

ふむふむと納得するルナマリア。納得するのはいいが、本当にそんな事になったら、動物の生肉を食べる勇気があるのだろうか。勿論自分にはない、とコーヒーを飲み干す。妙な苦さが口に広がった。

この時クロードの身の上話なんて興味も持てなかった。そんなの大戦時にはよくある話だ。

「それで、クロードは何でオーブを捨てたんだ？」

その場に居る全員が驚いた。興味を持ったのが、なんとあのレイだったのだから。

「……レイ…?」

流石のメイリンもこれには口が閉じた。

「何かおかしいか？」

レイからすれば、特に深い意味はなく、思った事を口にしてみただけだったのだが、こうも反応されてしまうとやりづらいものだ。

「う、ううん。おかしくないよ」

それでも少し吃りながら、メイリンは話の続きを話し始めたのだった。

「クロードさんがオーブを離れたのは、前の大戦でザフトが奪おうとした五機のガンダムが原因よ」

皆の頭にはてなが浮かぶ。プラントで育った者にはピンと来ない話だ。連合が造ったガンダムが、オーブと関係があるとは思えないのだ。

「そう言えば知らないのか、皆は。連合が造ったあの五機には、プラントの技術であるフェイズシフト装甲が組み込まれていたんだ」

答えたのはシンだった。オーブに住んでいたのだから、話ぐらいは聞いていた。

あの当時、地球でプラントと交流があったのは、完全中立を謳ったオーブコロニーだけであった。そのオーブコロニーで造られたのがあの五機だった。

「それって、オーブがプラントの技術が欲しいために、交流していたような物じゃない！」

「それがクロードの理由だな」

ルナマリアの言葉は、ほぼそのままクロードの国捨ての理由であった。シンもそれに気付いたようだ。

「どういう事だ？」

レイの疑問は尤もだ。他国の技術を転用したとはいえ、自分が育った国を捨てるには理由が軽すぎる。自分なら国を裏切る事は出来ないだろう。

「…オーブに居れば戦火に巻き込まれない。そう思って移住した者達が、あの国には多い。そういう事さ」

少し変わったな、とルナマリアは思った。前のシンなら、オーブの話をするだけで、怒りを顔にし、誰にでも噛み付く狂犬も可愛く見える始末だった。

だが今はどうだ。語り口調は暗いが、オーブという単語を自分の口から発したのだ。

きっかけはあのクロードの言葉だろう。自分で考え、それを曲げな。その言葉の意味をわかり始めているのかもしれない。

「成る程な。他国に侵略する事も、他国に侵略をさせない事も許さない筈のオーブが、戦争を拡大させるガンダムを造っていた…。国民にとっては裏切り同然だな」

目を閉じて考えてみる。国の裏切りが全てを駄目にし、何もかもを奪い去る。

…自分の境遇も似たようなものなのかもしれない。裏切られるものは違えど、絶望するには十分だ。

「…そうね。悲しいものを知ってるから、考え方も生き方も強いのかも」

「…そうかもな…」

…空気が重い。話題が話題だけに仕方ない気もするが、これじゃ休んでいゝる気がしない。

ルナマリアもシンも先程の言葉以来、喋ろうともしない。メイリンも雰囲気に負けてか、口を噤んでしまっている。レイは論外。いつも言いたい事だけ言って黙っている奴だ。

「…そう言えば、ユニウスセブンが地球に落ちそうなのよね？メイリン」

この情報は既に艦の全てのクルーに伝えられていた。もしかしたら、どうにかするために動くかもしれないとの通達されたのだった。

「そうなのよ！安定軌道上にある筈だったから、すぐに軌道のズレに気付いたらしいの」

核の炎に落ちたプラントコロニー。農業用の物と言えど、沢山の人々が暮らしていたのだ。見た目のせいとか、シンは墓のように感じていた。

「前の大戦の激化のきっかけだった物が、また争いを起こす火種に

なるのか…」

「そうだな。落ちれば連邦は黙ってないだろうな」

コーディネイターの住んでいたコロニーが、地球に落ちて被害を齎す。コーディネイターがナチュラルの殲滅を企てたと思われるもおかしい。

「でも、どうすんのさ。ユニウスセブンってかなりでかいんだろ？」

皆もその事は考えていなかったようだ。ヴィーノの疑問の後に少しの間が空く。そして口を開いたのはレイだった。

「…砕くしかないな」

「砕くったって、あんなでかいのどうやって！」

ユニウスセブンの全長は、半径 8 kmもある。質量もそれに見合うものであり、砕くにしてもかなりの労力と時間が掛かってしまう。

「メテオブレイカーを一つずつ固定し、作動させるしかないだろう」

他に方法があるのなら教えて欲しい所だ。地味な繰り返し作業だが、確実に砕けてくれる。それにミネルバが向かうのだから、ザフトも黙って見ている訳ではあるまい。当然、先行部隊や援軍もあるだろう。

「けどさ、本当に砕いていいのかな？」

ヴィーノの疑問は空間の時間を止めた気がした。疑問の意図がわか

らない。

「だってそうじゃない？あそこって、あの事件で死んだ人達の墓標があるんでしょ」

確かにそうなのだ。あそこで犠牲になった遺族が、わざわざ赴いてそこに墓を建てたのだ。自分達の住む場所にも墓はあるが、苦しむ隙も与えられずに死んでいった家族に、せめてもの餞けを送ったのだ。

「…しょうがないよ。あれが落ちて人が傷付く方が、亡くなった人達も悲しむよ」

ヨウランの言葉に一樣に頷く。だが、次の一言はあまり褒められたものではなかった。

「それに俺達が救えば、ナチュラルも文句言えないだろ？」

少し気分が大きくなる。言葉は人の気持ちを誇張し、自分が正しく高い立場にいると錯覚させる。それが、災難に繋がるなんて考えを放り投げて。

「あれが落ちたても、ナチュラルについては自業自得。俺達に救われるんだ、コーディネイターには勝てないって事、嫌でもわかるんじゃない？」

「…そう言う考えなのか、お前達は」

思わず口を噤む。恐る恐る入口を見ると、やはり立っていたのはオーブ代表、カガリ・ユラ・アスハだった。後ろには随員の方に、ク

ロードまでいるではないか。

「い、いや…。これは…その…」

明らかに吃った口調の彼から察するに、本気で言った訳ではない事ぐらいはカガリにもわかった。だが、悲しみは消えてくれはしない。

「…確かに連合のした事を考えれば、ユニウスセブンが落ちるのも仕方ないとは、私と思う」

表情は毅然としている。だがそれが余計に、彼女の瞳が宿す感情を際立たせていた。

「しかし、今を生きる人々にとってあれは過去なんだ。後悔を忘れてはいけないが、未来を見る方が大事じゃないのか？」

その通りだ。彼女の語る事は、正に理想的な生き方ではある。だが、割り切れない思いを持つ者はどうなる！？

人はそれぞれ違う感情を持ち、それぞれの生き方は違う。

「また綺麗事ですか？アスハ代表？」

低く、暗いその口調は、未だシンの心の中に溢れる憎しみを象徴していた。壁に凭れた身体を起こし、カガリに詰め寄る。

彼女の表情に変化は無かった。

「そう考えられない事だって、前の戦争にはあるんだ。お前達が守った理念のせいで、俺の家族は死んだ。それに」

シンは視線を変える。そこに居るのは彼の上司。表情は引き締まっていた。

「クロードだって、お前達が国民を裏切ったから、オーブを捨てたんじゃないか！」

再びカガリを睨むと、表情が崩れている事に気付いた。

わなわなと瞳が震えている。一文字になっていた口は開かれ、怯えるように口元に手を宛てた。

「……ど、どういう、意味だ…？」

紡がれた言葉は酷くしゃがれていた。今まで世話を焼いてくれたクロードが、オーブを捨てたかもしれないかと思うと、申し訳ない気持ちと共に、この少年と一緒に自分を糾弾するのではないかと考えてしまったからだ。

右にいるアスランを見る。彼もこれには驚いているようだった。

「知らないのか？クロードは前大戦で、連合がオーブと共に開発したガンダムを見て、お前達に絶望したからプラントに来たんだよ！そんなんで、よく代表なんてやってるな！」

知ろうが、知りまいが関係ない。オーブを治めている筈の彼女が、何も知らずにクロードと一緒に居た事が、滑稽に感じて仕方無かったのだ。

「シン！言葉が過ぎるぞ！」

レイが割り込む。口の聞き方がどうこうよりも、彼はカガリの後ろに居るクロードの無表情が気になった。

「…はいはい。この人偉いんですけどね」

フイツと外方を向くシン。自動販売機に近寄り、またコーヒーを買った。

「おい、君。家族が死んだ事で、オーブを恨むのは別に構わない」

カガリの前に歩み出たアスランは、オーブ代表の随員とは思えない言葉を放つ。

普通自国を守るような発言はするが、それ以外の時に随員が発言するなんて有り得る事ではない。

「だが彼女は、そんな前大戦で傷付いた人々のためにも、新たな争いが起きないように努力してきたんだ」

アスランは、相当熱くなっているとクロードは感じていた。この二年のカガリを見てきたからこそ、シンの発言を許せないのだろう。

「宰相からの脅迫に近い物言いに堪え、連邦から迫られる同盟への参加を突っ張ねて、平和なオーブを保ってきたんだ」

「そんなの俺には関係無い！」

シンの放った声は叫びに近かった。響きから伝わるのは、やるせなさ。

「じゃあ、何であの時はオーブを戦場にしたんだ！？オノゴロが戦場にならなきゃ、俺の家族は死ななかったのに！！」

怒りの瞳には、うっすらと涙が浮かぶ。言ってもしょうがない事だとわかっていても、ぶつける場所がオーブにしかないのだ、このやるせないさは。

「…君の言う通りだな」

「……えっ？」

言い訳をするものだと、シンは決め付けていた。だが、カガリの口から出たのは肯定の意。

「あの時は理念を守るため、何て言っていたけれど、結局は自分達が属国になった時に受けるであろう罰が、怖かったんだと思う」

理念を守るべきだと議会は一致していた。それで良いのかと、ウズミ・ナラ・アスハが問い掛けた事が心に残っていた。

二年前為政者となり、あの問い掛けの本当の意味が漸くわかった。

自分達の命を捨てて国民を守るとは考えなかったのか、と確認していたのだ。だが、誰も首を横に振らない。

あの時に一瞬浮かべた、お父様の悲しげな表情も今では焼き付いて離れないものになってしまっていた。

「それを許して貰おうとは思っていない。事実、君のように家族や大切な人を失った者は沢山居る」

大切な人を失う痛みや苦しみを自分も知っている。　こんな思いをこれ以上、広げる訳にはいかない。

「だからこそ、私はオーブの代表になった。どんな小さな思いでも、無ければ何も変わらないから」

誰かの息使いが聞こえる。それぐらいにその場は静寂に包まれていた。

カガリはただの飾りだ、と思っていた者達が多い。結局の所、議会の意思に従って頷くことしかできない人形だと。

しかし、目の前で熱弁を奮った彼女はどうか。過去を顧みて、自分の考えを貫く為に戦っていたのだ。自分達の想像もつかない、政治という戦場で。

「――くそっ！」

カガリを突き飛ばし、駆け出したシン。アスランは傾いた身体を支えて、彼が潜った出口を見つめた。

（認めたく、ないんだな…）

自分が憎くて、信用のおけない人物だと思っていたカガリが、自分なんかより物事をしっかり捉えていて、かつ考えていた事が悔しいのだろう。

「…代表、失礼致しました」

深々と頭を下げるクロード。シンの事もあるだろうが、それだけじ

やない雰囲気のアスランは感じ取った。

「いいさ、気にしていない。あなたの過去も知れたし、彼の憎しみも感じられた。それに自分が指導者の器でない事もわかつている」

カガリの笑顔は、憎しみも包み込んで癒すような柔らかな物だった。クロードの謝罪も包んで無くしてしまった。

「もう一つ、言っておく事が」

「何だ？」

クロードの表情は、それまでの固さが嘘のように消え去り、カガリのような柔らかな笑みが浮かんでいた。

「私はもうオーブに恨みも怒りもありません。代表もご存知の通り、あのガンダムは一人の議員の勝手が招いた事ですし」

「…そう言って貰えるとありがたい」

三人は歩き出した。流石に他国の代表が居ると、休憩室が休憩室で無くなってしまう。そういう配慮だろう。

「…凄かったね」

呟くようにメイリンが言う。あの迫力を目の前にして圧倒されずには居られない、そんな雰囲気が彼女にはあった。

「…ええ。私、誤解してたわ。カガリ・ユラ・アスハの事」

まだ成人もしていない代表。それだけで何と発言しても考えが甘いと貶され、取り合うのも億劫と言いたそうな雰囲気醸される。

彼女もそうだと、決め付けていた。

だが、現実はどうだ。彼女は為政者としてこの世界の行く末を憂いていた。自分と大して歳も変わらないのに。

「代表という激務を全うしているだけはあるな」

他国からすれば、あんな若い代表を据えるだけでも馬鹿馬鹿しいことなのだが、カガリを目の前にとそんな酷評も覆るのかもしれない。

オーブ議会の思惑とは違うのだろうか。

「助かったよね、ヨウラン。怒られなかったじゃん」

「あ、ああ…」

あれは自分でも失言だと思っていた。叱られるとばかり思っていたが、代表は自分の考えを述べただけだった。

（自分で考えろって、事なのか…？）

発言に対する責任なんかも、軍人である限りは自分の物だ。そういった事を叱る事ではなく、自分の考えを明かして考えさせる。代表はそう考えたのだろうか？

「…考えすぎかな」

ヨウランは残っていたオレンジジュースを飲み干す。渴ききった喉では、渴きが増すだけだった。

扉を開けるパネルを乱暴に叩く。しかし、扉は無情にただいつも通りに開くだけだ。部屋に飛び込み、備え付けの机の引き出しを開ける。中に入っていたのはピンク色の携帯。かわいらしいストラップも付いている。開いて留守電のメニューから、留守録の設定画面を呼び出す。

『はい、マユです。ごめんなさー』

流れてきたのは、幼さの残る少女の声。シンは目を閉じる。広がるのは、家族が揃っていた頃の幸せだった日々。

「…マユ……」

手で携帯を包み、俯く。

「…なあ、マユ。お前らを殺したアスハは、俺なんかよりこの世界の事を考えていた…。俺は…ただ敵を討てばいいと思っていたんだ」

マユの声が遠ざかる。頭の中にクロードの言葉が過ぎる。

「クロードに自分で考えろって言われたんだ。俺は確かに憎しみを戦いにぶつけていた。それじゃダメだってわかっているのに…な」

脳裏にクロードの戦い方が蘇る。感じられるのは誰かを守りたいという意思。

「だけど、俺に守りたい物があつた時には力がなかった…。……俺にも見つけられるのかな、守りたいもの…」

問い掛けても当然返事は無い。それでもシンは問い掛ける。やるせない気持ちと共に。

「…なあ、マユ……っ」

流れ出す涙は止められない。後悔するだけでは前に進めない、とガリの言葉が響き渡る。

「うっ…、うう……っ」

暗い部屋から聞こえる嗚咽は、悲しみの大きさを物語っていた。でもそれだけではない、何かを振り払うかのような必死さも垣間見えた。

「…強さが、欲しい」

憎しみに突き動かされる力ではなく、その心に打ち勝つための力をシンは求め始めていた。

あの後、クロードは二人を部屋に送り、自分の部屋に帰っていた。四六時中一緒に居なければいけない訳でもないし、自分の身体を休める事も兵士としての仕事だ。

そして思う。シンが変わり始めていると。あの紅い瞳が映し出していたのは、怒りだけではなかった。

考えろと言ったのが功を奏したのだろうか。それなら、自分の行動も無駄じゃなかったと思える。

それとカガリの存在も大きいだろう。クロードが思っていた人物より、遥かに立派な考え方ができる人であった。それがオーブを憎むんでいた、シンの心の大きな転機となっただろう。

（あんな決意を聞かされれば、誰だって心動かされるだろうな）

勿論、クロードもその一人だ。今度のユニウスセブンでの破碎作業を、全身全霊で行おうと心に誓った。

そこでふと思う。ユニウスセブンが安定軌道を外れる可能性はどれくらいなのだろうか？

端末を立ち上げ、ネットで検索をかけようとした時だった。

扉の横の操作パネルが存在を主張する。誰かが尋ねてきたようだ。少し億劫に思いながらも、扉まで歩み寄る。

「はい」

気の抜けた声が出た。今はどちらかと言えばプライベートみたいなものだ。そんな中に尋ねてくるものは、大抵決まっているのだ。

（さて、今度はどんな厄介事だ…？）

黒く、長い髪の男が立っているものだと思っていた。だが、予想は外れていた。男という部分は合っていたが、髪の色は紺色だ。そしてそいつは、この艦を自由に動く事が出来ない筈なのだが。

「アスラン！お前、どうやって…！」

「いや…ちょっと、な」

バツが悪そうに、歯切れが悪いアスランから察して、クロードは何も聞かなかった。

「…まあ、とにかく入れ。見つかるのはマズい」

部屋の中に招き入れると、アスランは机の椅子に座る。クロードは適当にベッドで足を組んだ。

「代表はどうしたんだ？」

彼は代表の護衛であり、無くてはならない存在だ。それなのに一人でクロードの部屋を訪れても、代表は心配しないのだろうか。

「カガリなら泣き疲れて寝ている」

「泣き疲れて？」

あの毅然とした態度からは考えられない事だった。威厳すら感じられた最後の弁が、未だに耳に残る。

「ああ。今まで無理をしていたのに、ユニウスセブンやらあの少年、シン…だっけ？」

「ああ」

「オーブに住んでいたシンと、そしてクロード、お前の事でもかなり心を痛めたみたいなんだよ」

シンの事はともかく、自分の事ではフォローをしたつもりだったのだがな。申し訳なくて頭を掻く。

「そう言えばお前、オーブの出身だったんだな」

「あれ？話してなかったっけ？」

特に隠しているつもりも無かったし、アスランにも話しているものだと思っていたのだが。自分の記憶も適当だな…。

「聞いてないぞ。それにしても俺には話さないで、この艦のクルーには話すのは薄情なんじゃないか？」

付き合いの長い友達として、この事実は許し難いものだった。そんなに自分は信用ならないのだろうか。すぐに人に吹聴したりする程、軽い口ではない筈なのだが。

「違うて！俺はあいつらに出身を聞かれたから答えただけだって！」

クロードの言葉を信用するにして、それでも腑に落ちない部分がある。それは、

「そうだとしても、オーブを捨てた理由まで話しているのは流石に――」

「あれには俺も驚いたんだ。あんな事話すつもりも無かったし、あまり知られたくない物だったし」

あんなゴタゴタの中で、自分の身の上話なんてできるわけない。あの帰りの車内を思い出して、少し胃が痛み出した。

「…そうなのか。済まない、疑ってしまっただけ」

本当に申し訳なさそうに、顔を俯けるアスランに焦るクロード。そんなに落ち込まれてしまうと、どうしていいかわからない。

「と、とにかく頭を上げろって。お前に何も話していない俺も悪いんだ」

そして漸く收拾がつく。こんな事のために、アスランはここに来た訳ではないだろう。

「で、何か話があるんだろ？」

問い掛けると、一瞬躊躇うような仕種を見せたが、すぐに決意の瞳を見せた。そして紡がれた言葉は、常識では考えられない事だった。

「無理な事を承知で頼む。俺にMSを貸して欲しい！」

頭を膝に着く程に垂れるアスラン。クロードも予想はしていたが、やはり本当に言われると戸惑うものだった。

「…お前、言ってる事わかってるよな」

アスランは確かに昔はザフトのエースパイロットだった。だが、今は他国の者。それがどういう意味かを知らない訳ではないだろう。

緊急事態を除いて、他国の者がザフトのMSに乗る事は禁じられている。何故なら、技術を盗まれるかもしれないからだ。また、その

機構上の弱点を見抜かれてもしたら、そのMSは実戦で使用不能になる。しかもそれが量産型のMSだったら、被害の程は計り知れない。

「わかってる。だが…このまま自分の持つ力を使わずに、ユニウスセブンが地球に落ちたら必ず後悔する。それに、」

掌を固く握り締め、アスランは決意の瞳を更に強めた。

「カガリの愛する国を守れもしないで、カガリを幸せにはできないからな」

…この決意なら、大丈夫だ。

「わかった、俺は反対しない。後は議長にも許可を取ってくれ」

「ああ！」

立ち上がり、アスランは地を力強く蹴った。部屋から飛び出ていくアスランの背中からは、頼りがいのある雰囲気が醸されていた。もうすぐユニウスセブンに到着する。アスランの腕があれば、作業がもっと楽に進められるだろう。

（それに、あれを使わずに済むしな…）

使う覚悟はある。だが、あれを使えば連邦に開戦の理由を与えてしまいかもしれない。クロードの考えでは、あくまで抑止力としての効果を望んでいた。

「銃爪を引く覚悟、か」

ラグナロクの背中にある、銀のリフレクターと連動した下を向く砲門。フルチャージを行えば、あの膨大な質量を持つコロニーも粉々にできるだろう。

カガリの言葉が脳を過ぎる。強すぎる力は災いを呼ぶと。ラグナロクの力が解放されれば、その言葉は現実になる。

全ての生きとし生ける物に、万遍ない恐怖を運ぶ《地獄からの使者》。この事態がそれを目覚めさせない事を、クロードは祈っていた。

PHASE-08 誤解してたわ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回は心理描写ばかりで、視点が転々としてしまい読みづらかったと思います。申し訳ありません。

さて、次はユニウスセブン破碎作業ですが、ここでオリジナルキャラが一人増えます。詳しい描写や設定は書けませんが、重要な人物という事はおわかり頂けると思います。

では、ありがとうございました。

PHASE-09 フェンリル（前書き）

この話から捏造の度合いが飛躍的に上がります。

原作通りでないと嫌だという方は、お読みにならない事を推奨致します。

PHASE-09 フェンリル

黒い宇宙の中に浮かび上がる黒いシルエット。大きな争いを生んだコロニーの残骸は、ひっそりと浮かび、そしてゆっくりと降下しているものだと思っていた。

「なあ、イザーク。何か様子がおかしくないか？」

ディアツカ・エルスマンの声だ。昔は赤服を着ていた筈が、今は緑に降格している。

理由は簡単、前大戦でアークエンジェルと共にザフトを攻撃した罰だ。そんな事をしても軍に戻れたのは、イザークの奔走と議長のお力添えがあったからだ。

お陰で降格という、最低限の罰で軍に復帰する事ができ、そのままジュール隊へと組み込まれる事になった。正に議長様様なのだ。

そのイザークは白い軍服を纏っている。若干19歳の指揮官である。性格的にも面倒見の良い彼が、この座に着いたのは当然の成り行きではあるが、やはり若過ぎるという懸念が上層部から出ていた。それを払拭するために、彼は奮闘しているのだ。

「…何だ、あの光は…」

ユニウスセブンの表面に浮かび上がる正体不明の光。先行している部隊がいるらしいから、作業のために光を放つ物を使っているのかも知れないが、どうにも違和感を感じる。

「何か嫌な予感がするな…」

少しずつ近付いていく度に、モニターに映る光景が変わる。遠くからでも確認出来た光が、どんどん大きく、そして多くなってきた。

そして二人は気付く。あれが何によって引き起こされ、何が光を放っていたのかを。

「何だと…!?!」 「これは!!」

先行部隊のMSが、黒いカラーリングを施されたジンによって駆逐されている。それが爆発するエネルギーの奔流が、あの光の正体だったのだ。

そしてジンは先行部隊の仕掛けたメテオブレイカーを破壊する。間違いない、あいつらがユニウスセブンを動かしたのだ。

「くそっ! 好き勝手やらせるか!」

艦橋を飛び出すイザーク。指揮官としてこういう所はマイナスだな、とディアッカは苦笑を浮かべる。

「相変わらずですね、隊長は」

背後から聞こえた声に、ディアッカは大袈裟な動きで答える。それぐらいが丁度いいのだ、彼女には。

「そうだね、シホ。けどあいつがあんな風だから、俺もお前もついていけるんだと思うけど?」

口調は軽い。それでもディアッカがイザークを心から信頼しているのが、シホにはよくわかっていた。

そして微笑みを浮かべる。赤服のエリートを笠に着ない性格、そして健康的な茶色の髪も合間って、彼女はディアッカと共にジュール隊の看板である。勿論、MSを駆る能力も相当だ。

シホ・ハーネンフース。それが彼女の名だ。ジュール隊に配属となつてから、彼女は飛躍的に力をつけてきた。イザークの指導もあるだろうが、彼女自体の才能もやはり高いのだろう。だが、最も大きい要素は――。

「ディアッカ、…あなた何考えてるの？」腹の底から響くような声。それだけで、ディアッカが震えるのには十分だった。

「な、何でもない！それより、早くイザークを追い掛けようぜ！また無茶するかもしれないからな」

もの凄い早口で言い訳をすると、艦橋の入口をこれまた凄い勢いで飛び出していく。シホからすれば大して凄んでもいなかったのだから、あの態度は結構堪えるものがあつた。

「…もう！」

それでも二人を追って、MSデッキへと向かう。どうせ隊長を止められる筈もないんだ。だったら大人しく出撃して、あの黒いジンを落とす方が苦労も少ない。

それにしても気になる事がある。こいつらはどうやってこのジンを

調達したのだろうか？

ザフトのMSであり、一昔前の型である事から、今軍備されているMSと比べて性能は正に月とスッポンだ。その筈なのだが、目の前映し出されているジンはザク・ウォーリアを圧倒しているのだ。

（誰かが手を貸しているとでも言うの…？）

ザフト内の誰か、いや、議会を含めればプラントの権力者のいずれか。その人物がこの事件の裏を引いているのだろうか？

……そんな訳ないか。

「私も出なきゃね」

金と銀の二人に追い付いたのはMSデッキで、既に機体に取り込んでいた。シホもノーマルスーツに着替え、MSの調整を行う。といっても数時間前にも行っていたので、そんなに時間は掛からない。

『ディアッカ、シホ。準備はいいな！』

『勿論！』

『OKです！』

正体不明のジンがザフト軍を攻撃するという、ある意味の同士討ちの様相を呈すこの戦場に、青いザクファントムが舞う。従えるは同じ機体とザク・ウォーリア。

黒褐色で遠距離特化の装備のもの、そしてハウセンカの刻印が印象

的なバランス重視のもの。どちらもスラッシュザク・ファントムに続く。

『とにかく、ミネルバの到着までに全滅させられる事は避けるぞ！あいつに笑われるのはごめんだからな！』

ジン二機と戦いながら、イザークは叫ぶ。それを聞いたディアッカは、とにかく苦笑が漏れるのだった。

『……本当、負けず嫌いだよね…』

『誰を意識してるんですか？ミネルバって新造艦でしょ？』

突撃してくるジンをいなしながら、疑問を浮かべる。

アーモリーワンで進水式もおこなっていない艦が、そこで奪われた三機の新型MSを追って宇宙に出た事は知っているが、誰がその艦に乗っているのか等シホには知る由しも無かった。

『ああ。だけど一人、居るんだよ。イザークを熱くさせる奴がね』

最初にあった時は、任務で連合の艦を襲った時だった。保護という名目で一室に捕らえられていたあいつが、ザフトの兵士となり、ここまで駆け上がったのだ。イザークも意識せざるを得ないだろう。

『お前も知ってるだろう？クロード・タクスの名前くらいは』

ジンの取り出したビームカービンと呼ばれる小型銃での攻撃を躲し、ガナーザク・ファントムはレールガンでの反撃を試みるが、ひらりと躲されてしまった。

(中々の腕じゃない！)

『クロードって、あの急遽赤服と F A I T H の勲章を与えられた、あの？』

ギルバート・デュランダルが議長に就任すると同時に、軍の人事が盛んに行われた。その時に異例な事態が起こったのだ。

それまでメカニックの仕事も請け負い、量産MSで出撃していた緑服の一兵卒が、いきなりエリート証である赤服と、軍の権限では最高峰の力を持つ特務隊に任命されたのだ。

流石にこの人事には軍上層部も黙っていなかったが、議長の言葉に渋々手を引く事となる。

《緑も赤も白もない。量産型でこの戦績の者を、いつまでも下で煙らせるつもりか？》

クロードの戦績は、量産型のパイロットとしてはズバ抜けていた。その事実を突き付けられると、上層部も反論をする訳にもいかなかった。

『そう、そのクロード。今はミネルバでMS隊の隊長をやってるのさ』

ブレイズザク・ウォーリアの放ったライフルの一撃がジンを捉えた。ビームのエネルギーに耐え切れず爆散する。

その攻撃の隙について他のジンが、斬機刀を抜いて左下から襲いく

るが、それはガナーザクの狙撃によりこれまた爆散した。

『…それは意識しますね、隊長は』

確かクロードは隊長と同年であった筈だ。自分も昇進したとは言え、クロードは一気にそれ以上の権力を手に入れたのだ。対抗心は烈火の如く、だろう。

『煩いぞ！目の前の敵に集中しろ！』

スラッシュザク・ファントムの持つ、巨大な斧がジン二機を屠った。流石にパイロットの腕が良くても、ジンでは一溜まりもなかった。

『たく、情けねえな！』

聞いた事の無い声が聞こえてきた。どうやら全包围通信での呼び掛けのようだ。そしてリーダーが突如、急速で接近するMSを捉える。

『力貸してやってんだから、もう少し頑張れよ！』

こちらへと真っ直ぐに北西から向かってきた反応は、こちらのいる位置で停止する。見上げる三機。そこには信じられない物が浮いていた。

『な…に…！？』

『馬鹿な…！！』

絶句する二人。シホに至っては言葉も出ない。それ程畏怖すべき存在として語られるMSが、目の前に居るのだ。

だが、しかし。否定の言葉がディアツカの頭を過ぎる。有り得る筈が無いのに、現にそれは全く異質な雰囲気を漂わせ、英雄とは違うカラーリングでそこにいるのだ。

『…フリー…ダム…?』

シホの掠れた声が二人の耳に厭に残った。

「ジュール隊が来てる、か」

クロードは深緑の髪を掻き上げた。そして溜息を吐き出す。

「あら、イザーク・ジュールが苦手なの?」

不思議そうにタリアが尋ねてくる。

同期ではないにしても、同じ年なのだから仲は悪くないと予想していたが、溜息までつくとは二人の間に何かあったのだろうか?

「いえ、あいつは大切な友人です。…ですが」

歯切れが悪い。そこから察するにやはり何かがあったのだろう。クロードの表情もそれを如実に表していた。

「ですが?」

「最近突っ掛かれるんですよ。何かした覚えはないのに睨まれる

し…」

タリアには何となく理由はわかる気がした。本人と会ったのは数回だけだが、性格を掴み易い人だとは思う。

熱く、そして負けず嫌い。それ以外の何物でもない。そしてこういった性格に付き物なのが、年齢の近い者には特に対抗心が燃え上がるという事だ。

「クロード、多分あなたは悪くないけど、彼の気持ちも考えてあげるべきだわ」

「はあ…」

クロードは、あまり良く理解出来ていないようだ。タリアから見ても、地位にこだわりを見せないクロードには、イザークの気持ちは簡単には理解出来ないだろう。

「ふふっ、まあ考えることね」

悪戯な笑みを浮かべるタリアを見て、クロードは本当にわからなくなってきた。

うーん、と腕を組み考え込むクロード。そしてそれを眺めるタリア。何となく、悩める息子に助言を送って見守る母親のようだ、とアーサーは思った。

が、今の状況が状況だけに和みムードは止めて頂きたい。

「…クロード、今は作戦会議中だ」

レイの一言で、漸くクロードは今がユニウスセブンでの破碎作業の割り振りを決めている途中だった事を思い出した。

現在、目的地まで一時間程の場所を航行中だ。ミネルバの足の速さには、クロードも驚きを隠せない。

それにしても、あの後調べた情報が解せない。ユニウスセブンが安定軌道上から外れる可能性は、万に一つも無いらしい。

そもそもあの質量の物体が、重力に引かれて地球に落ちない時点で、勝手に軌道を外れる事等有り得ないらしい。

（：嫌な予感がするな）

何者かがユニウスセブンを動かしているのはもう確定だろうが、それだけでは済まないかもしれない。そんな気がするのだ。

「ジュール隊との共同作業だから、こちらも邪魔をしな――」

「MS隊に言っておく」

アーサーが、こういった手順で作業を進めるかを説明している所に、クロードの声が割り込む。嫌でも注目してしまうのが道理だろう。

「多分、戦闘になるだろうから覚悟だけしておけよ」

突然の戦闘発言に、一様に疑問の表情が浮かぶ。誰もユニウスセブンを動かしている奴がいるとは思っていないようだ。

「どういう事？」

質問してきたのはルナマリアだった。クロードはそれを受けて、前面にあるプロジェクターを操作する。

映し出されたのは、何やら複雑な数式と大雑把にかかれた丸が二つ。

「ユニウスセブンが地球に落ちる可能性を示した式だ。ネットで調べたんだが、情報がなくてな。俺の友人に計算してもらったんだ」

養成所で知り合ったあいつが、今や軍医としてかなりの地位にあるのを、クロードは今だに信じられないが、あの頃からの凄い頭は良かったのだから、当然なのかもしれない。

「これに因れば、地球の引力に耐えて宇宙に存在する時点で、地球への落下の可能性はゼロらしい」

「て事は――」

「そう。ユニウスセブンは何者かに因って、意図的に軌道をずらされたんだ」

シンは驚愕する。あんな大きな物を動かす技術があるのか。それに…。

「…誰が、そんな事…」

血のバレンタインで死んだ数多くの人が、あの煤に塗れた場所で眠っているのだ。その人達を冒瀡するこの行為が許せなくて、シンの身体に力が入る。

ギリツと音をたてる齒。机の上に置いた手が、いつの間にか強く握り締められていた。

「さあな。だが、碌でも無い奴らだつてのはわかるがな」

クロードはこういった時には本当に表情を表に出さない。だが、皆も感じ取っているだろう。この表情の無さが、何よりの怒りの表現だという事を。

その後会議は解散となり、MS隊の面々は調整のためにMSデッキへと向かう。

ラグナロクの壊されたビームマシンガンも修理されており、一先ずは安堵できた。

ラグナロクの装備で、これを失ってしまうと遠距離からの攻撃ができない。幾ら機動力に重点を置いた機体だと言っても、牽制もせず突っ込むのは無謀というものだ。

ラグナロクのコックピットへ昇りながら、クロードは周りを見渡した。ルナマリアもレイも、自機の整備をしたメカニックと話をしていた。

そしてその中にシンが居るのに気付いたクロードは、ワイヤーを逆に回転させた。

そのシンは熱心に何かを見ている。覗き込むとそこに映っていたのは、赤と白の機体がザフト軍、そして地球連合のMSを薙ぎ払って

いる物だった。

「それはヤキンドゥーエの映像か」

ビクツと反応し、恐る恐る振り返るシン。無表情なクロードが居ると思いきや、優しい笑みを浮かべていた事にホッと溜息をつく。

「ええ。メイリンに頼んで見つけて貰ったんです」

再びシンは画面を注視する。フリーダムが全砲門を開き、範囲内にいるMSの武器やカメラを破壊した。

「ホント、凄いですね、フリーダムって。こんなに的確にMSを行動不能にするなんて…」

「…なあ、お前はこの戦い方、どう思ってる？」

思わず振り返る。画面を眺めているクロードの顔は普段と変わらな気がしたが、なんとなくいつもとは違う気がした。

「そりゃ懂れますよ。これだけMSの性能を引き出せば、敵無しって感じで。ただ、この機体にはあまり良い思い出はないんです」

「どういう事だ？」

シンの雰囲気は少しだけ変わった。怒りとは少し違うそれは、本人でさえ良くわからなかった。

「…オノゴロで逃げてる時に空で戦ってたんですよ。連合と戦っていたから、恨みなんて無いですけど」

画面がフリーダムから変わる。次に映し出された赤い機体、ジャステイスがビームブーメランでダガー三機を巧みに撃破する。

「俺はこのジャステイスの戦いの方が好きだな」

ぽつりと、まるでひとりごつのように呟かれたクロードの言葉は、何故かシンの耳に残った。

画面を眺めるクロードの顔が、やけに真剣だった。

「どうして…ですか？」

理由を聞くのに、少し躊躇いが混じった。クロードの雰囲気は普通じゃなかった。

「シンだったら、ただ武器を無力化されて艦に帰るしかないとしたら、どんな気持ちになる？」

「そんなの、惨めになるに決まっています！何をしに戦場にでたんだか、わかりません！」

「俺もお前と同じように感じるよ。だからこそ、フリーダムの高圧的な戦い方は嫌いなさ」

あの砲門を全てコックピットに向ければ、フリーダムなら無敵の力を奮う事が出来ただろう。だけど、それをしなかった。

その中に自分が居たとしたら、馬鹿にされたとは思えない。

留めを刺さずに敵から去る者が、反撃にあって散るドラマをよく見掛ける。フリーダムもああ成らざるを得ないだろう。

もし、少しでも武器を動かされて攻撃が避けられたら。もし、カメラを破壊出来なかったら。

考えれば考える程に吐き気がする。その甘さで生き残れたのは、最強のコーディネイターが為せる業か。

「でも、命あつての物種で言うじゃないですか」

「まあ、そうなんだけどな…」

クロードの雰囲気は元に戻っていた。もっと話を聞きたいと思い、口を開こうとした時だった。

「すみません、ここは関係者以外立ち入り禁止です」

入口付近から誰かを咎めるレイの声がした。確認して見ると、そこにはオーブ代表の随員、アレックス・ディノ改め、アスラン・ザラが居た。

「良いんだ、レイ。そいつも作業に参加するんだよ」

クロードはしれっと言うが、他の三人からすればおかしな話だ。

他国の者がザフトのMSに乗る事もそうだが、連携の取れない相手が居ると、それだけで戦力が落ちる。ぶっちゃけた話邪魔なのだ。

「何言ってるんですか！そんなの認めませんよ！」

「私もよ。アスラン・ザラだとしても、今はザフトの人間でもないんだし」

「ああ、それに議長の許可も無しに勝手な事はさせませんよ」

三人がクロードに詰め寄る。流石にたじたじになっている所に、アスランはある紙を取り出した。

「議長の許可なら貰っている。それにクロードのお墨付きもな」

レイは注意深く許可証を眺める。見間違う事無く、議長の実筆だった。

「それに君達の邪魔はしない。何か足を引っ張るような事があれば、捨てていって欲しい」

そんな事で許せる訳も無い。言い募ろうと、三人がアスランに向いた時だった。けたたましい警報の音が、メイリンの声と共に響き渡る。

『コンディションレッド発令！ユニウスセブンでジュール隊が正体不明のMSと交戦中！』

MS隊は準備が出来次第、発進願います！』

「くそっ、やっぱりこうなるか！」

ブリーフィングルームに駆け出すクロードに続き、三人もノーマルスーツに着替える。こうなった以上、文句を言っている場合ではなかった。

そしてすぐにカタパルトへと三機がエンゲージされる。

見据えたユニウスセブンの表面では、爆散する際のエネルギーの奔流が巻き起こる。あの二人なら簡単にはやられはしないだろうか、不安が胸に押し寄せた。

『ラグナロク、発進どうぞ！』

「ラグナロク、クロード・タクス、行くぞ！」

ユニウスセブンから、少し離れた位置から出撃を余儀なくされた。高機動のフォースインパルスは良いとして、宇宙用の追加バーニアを吹かすザクには申し訳ないが、ラグナロクは全速で飛ばす。

『クロード！それじゃ追い付けないわ！』

案の定、ザク三機との差はぐんぐんと開く。そこで漸くクロードは指示を飛ばした。

「悪い、俺は先行する。シン、レイ、ルナマリアは四機で行動しろ。何かあったらレイが指揮を取れ！後、アスラン。三人を頼む」

『ちょっと、クロード！』

ルナマリアの声も聞こえない程に、クロードには余裕が無かった。胸の内にあるモヤモヤが消えてくれないせいだ。

「イザーク、ディアッカ、無事で居ろよ！」

「……………」

沈黙するしか、イザークには出来なかった。

まず餌食になったのは、ブレイズザク・ウォーリア。レールガンによる、コックピット狙いの攻撃を紙一重で避けたのがいけなかった。信じられない速度で追撃され、シールドごと腕を真っ二つにされた。そしてすぐに標的が変わる。ガナーザク・ファントムは、ビームサーベルの攻撃こそ避けたが、ゼロ距離からのビームライフルまでは躲せず、スラスターをやられていた。

その出来事は瞬きも許さぬ程の高速。腕でどうこう出来る問題じゃない。三機が完全な状態でなければ、互角に渡り合うのも難しい。

『何だよ。こんなへボいのにやられたのかよ。ダッセーなー』

馬鹿にされているのがわかるのに、怒りが湧いてこない。いつもの自分なら激昂している筈なのだ。

（あまりの圧倒感に、何も感じられないとでも言うのか！）

『イザーク！』『隊長！』

二人の声にハッと気付けば、目の前に迫るフリーダムのような物。

自分の機体と同じ青の筈が、全てを凍えさせ滅ぼすかのような威圧感が溢れていた。

「くっ！」

急速で浮上する事で何とか躲したが、敵の追撃が一息つく暇しら与えてくれない。ビームサーベルをスラッシュウィザードで受け止めるが、大型武器故に細かい攻撃にまでは対応できそうにない。

『さっさと落ちなよ、三下』

ビームサーベルの切り上げに、スラッシュウィザードが持ち上げられる。そこに突き付けられるレールガン。

『隊長ーっ!!』

シホの声がスピーカーから響く。死を覚悟した時に彼女の声が聞けたのなら、まだマシなのかもしれない。

『何!?!』

真っ青のフリーダムが構えていたレールガンに、二発のビームが着弾する。

すぐにこちらとの距離を取ると、その間に黒いガンダムが割り込む。それは構えたビームマシンガンで牽制を行い始めた。

そしてイザークへと通信が入る。そこに映るのは、頼もしくも妬ましくもある存在。

『悪い、遅くなった』

レーダーに映し出された《RAGNAROK》の文字列。そして通信機に浮かぶクロードの顔。

正直、助かった。

「…すまん」

ただ謝る事しか出来なかった。その間にもラグナロクは移動し、ガナーザク・ファントムとブレイズザク・ウォーリアを庇うように立ち回る。

『気にすんな。』

それにしても、バーニアをやられるなんてディアツカらしくないな』
どうやらクロードは他の二機にも通信を送っているようだ。本当に、芸達者な奴だ。

『しょうがないでしょ、一瞬の隙を突かれたんだから!』

『…それにしても、驚いたな。フリーダムとは…』

「俺達だって訳がわからないんだよ!」

ラグナロクの攻撃に乗じて、ガナーザクはレールガンを連発する。命中には至らないが、行動の制限にはなる。

『ちっ! うぜーんだよ!』

敵は巧みに避けながらラグナロクに近付こうとするが、次はブレイズザク・ウォーリアのビームライフルに阻まれる事となった。

『初めまして、クロード特務兵。ジュール隊所属、シホ・ハーネンフースです』

敬礼まではしていないが、形式に乗っ取った自己紹介をシホは行う。その合間も、ビームライフルは連発だ。

『特務隊所属、クロード・タクスだ。シホ、バーニアは生きてるな？』

『はい！』

『よし、挟むぞ！ディアツカはシホの援護だ！』

ラグナロクはスラッシュザクの前に陣取り、ビームマシンガンの銃爪を引き続ける。

ブレイズザクはその反対から攻撃を続ける。その真下からレールガンで狙撃するガナーザク。

敵も流石に避け切れずに、左肩に被弾した。

『ちっ、流石に四機相手じゃ分が悪いか…』

敵は残っていた左のレールガンを、近くにある突起に向けた。だが、それは罠であった。

「はあああああっ！！」

振り降ろされるスラッシュウイザード。切り裂かれたレールガン。

エネルギーの奔流。爆発。

『やったか!?!』

だが、そう簡単にやられてはくれなかった。爆風の先から抜け出てきた真っ青な機体は、態勢を立て直し、地球とユニウスセブンを見据える。

『…まあ、ここまでだな。まだジンもあるし、後は地球が勝手に自滅してくれるだろうし』

そうスピーカーから聞こえてきた後、敵機は足元から消えていく。

前の大戦で奪い取った四機の一つ、ブリッツに装備されていたミラージュコロイドだ。

『待て、フリーダム!』

『フリーダム? 違うな』

スピーカーからの声が急激に低く、冷たくなる。身体が凍りついたような感覚に陥る。こんな冷たい声を出す人間を、イザークは知らなかった。

『これは《フェンリル》。やがて全てを喰らうものだ』

そう告げると、完全に視認できなくなってしまった。

『くそっ、逃げられたか…』

悔しそうに呟くクロード。数的優位のお陰で押し込めていたのに、落とせなかったのがどう後に響くのか。あまり考えたくはない。

「…それにしても、フェンリルだと？ふざけてる…」

色と装備が少し違ったが、あれは確かにフリーダムだった。あの莫大なエネルギーは、核装備でなければ実現不可能だ。その上ミラージュコロイドまで装備している。明らかに反則だ。

『…本当ですね。条約違反も良い所ですよ』

ユニウス条約の締結と共に、核を装備したMSの使用は禁止されている。そこで双方共にMSの開発に躍起になったのだ。

『……あいつの声、聞き覚えがある気がするんだよね…』

「何だと!？」

突然呟かれたクロードの言葉は信じられない物だった。

フェンリルに乗っていた奴が、ここを襲っていたジンを調達し、ユニウスセブンの軌道をずらしたのは明らかだ。

そんな敵の声を聞いた事があるなんて言われれば、誰だって驚くだろう。

『い、いや、聞いたような気がするだけだって』

慌てて否定するクロード。信じられても、確証もどこの誰だかもわ

からないのだ。

『こんな風に雑談も良いけど、作業進めないとマズくない？』

ディアッカの言う通りだ。地球の重力に引かれ始めてしまえば、大気圏の熱の中で活動できるMSが無いのだから、急がねばなるまい。

だが、未だにジンの妨害にあって中々作業が捗らない。こちら手負いを二人抱えている状態だ。

『おい、アスラン。聞こえるか？』

もう到着してもいい頃だと思い、何気なくクロードが呼び掛けた。その名前にイザークは血が煮え繰り返るのを自覚する。

「アスラン…だと…！」

『うわあっ！…イザーク、突然怒鳴るな』

クロードが文句を言っているが、そんな事はどうだっていい。ここどこかにアスラン・ザラが居るという事だけで、もう自分を抑えられないのだ。

『あっちゃ。ダメだよ、その名前を出しちゃ』

ディアッカは額に手を当てる。メテオブレイカーの設置し、起動すると内部にドリルのような物が穿孔する。これで地道に砕くしか無いのだ。

『アスラン・ザラ！？あのエースパイロットがここに来てるんです』

か？でも、彼は行方不明だっ…」

ブレイズザク・ウォーリアが放ったビームが、動力部に直撃し、ジンは無惨に爆発する。その合間にラグナロクがメテオブレイカーを作動させた。

『あいつはオーブに居るんだよ。姫君を守るためにね』

「あいつは勝手なんだ！自分の力をまるで自覚していない！」

激昂しているイザークは放っておくしかないだろう。そう結論付けてクロードは再度アスランに呼び掛けるが、やはり通信に出ない。

『おかしいな…。まさか落とされてはないだろうけど…』

『クロードさん、大変です！例の艦が現れました！』

いきなりのメイリンの声に吃驚したのも束の間、あの艦の出現にも驚かされる。

そしてアスランと通信が取れないのも頷ける。あの三機と交戦しているのだろう。

だが、奴らは大西洋連邦の者達なのに、なぜユニウスセブンを破壊しようとするザフトを攻撃するんだ？

『あの四機で何とかなりそうか？』

『はい。戦局は有利に進んでいます。ただ、気になる事が』

『気になる事?』

向かってくるジンをガラディンで一刀に伏せながら、メイリンに尋ねていた。そして彼女が告げた事が、この戦局を大きく変える事となる。

『三機共、ユニウスセブンが碎けていくのを見て戸惑っているようです』

そこでクロードは核心した。奴らは俺達がユニウスセブンを動かし、地球を滅亡させようと思っていると思っっているに違いないと。

『メイリン、艦長に伝えてくれ。救難チャンネルを使え、とな』

これど相手の出方次第だろう。蛇が出るか、はたまた鬼が出るか、運命だけが知る。

PHASE-09 フェンリル（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

このユニウスセブンの話からはかなり脚色が入ると思います。と言うか、この話自体がかなり脚色入ってますけどね。後、オリキャラの名前はまだ出ません。次か次当たりになると思います。

では、お疲れ様でした。

PHASE-10 ニブルヘイムを撃つ！（前書き）

今回はPHASE-09のミネルバとMS隊の話がメインです。はつきり言って、話は全く進んでいないに近いです。

それでも良ければお付き合いをお願いします。

PHASE-10 ニブルヘイムを撃つ！

「…もう一度言って。クロードは何て言ったの？」

メイリンが受けたクロードの通信は、タリアには全く以って信じられない物だった。だから思わず問い返すのも、仕方の無いことだ。

「え、はい！あの艦に救難チャンネルで呼び掛けよ。こちらとそちらの目的は同じであると」

聞き間違えではなくて、タリアは頭を抱えなくなった。

救難チャンネルの使用方法は主に二つ。艦が航行不能になった時に助けを求める場合。もう一つは、

「こ、降伏する訳でもないのに、救難チャンネルを！？」

うろたえるアーサーの言葉がもう一つだ。敵前逃走は普通するべきものではないが、場合によっては敵に降る事を選択しなければいけない時もある。困って、救難チャンネルはこんな時に使うものではないのだ。

「メイリン、クロードにもう一回通信を繋いで」

「はい！」

キーボードを操作し、インカムに手を当ててメイリンは呼び掛ける。数瞬の間の後、スピーカーから少し切羽詰まった声が流れた。

『どうした！？呼び掛けたのか！！』

「クロード、本気で言ってるの？救難チャンネルなんて、無茶過ぎるわ！」

敵艦の目的もはっきりしないのに、ただ呼び掛けただけでは成果が生まれるか、はっきりいって分の悪い賭けにしか思えないのだ。

「メテオブレイカーを持っていると言っても、相手のMSには敵意があるのよ！」

現にシン達、四機のMSが交戦しているのだ。今更敵意は無い、退けと言われても、自分ならしないだろうと思う。敵の指揮官を信用してはいけない。

『いいからやれ！敵の出方次第で戦局が変わるん、だよ！』

ジンを真つ二つにするラグナロクの映像が入る。あっちはあっちで敵を駆逐しながら、通信もしてメテオブレイカーも作動させている。

「艦長、敵艦がこちらに向かってきます！」

腕の怪我を押して、索敵を行っているマリクが声を上げる。主砲を展開し、段幕を張りながらこちらに進んでくる。

「CIWS起動、撃ち落とせっ！」

アーサーの指示が飛ぶ。何とか迎撃に成功はしたが、一発逃したように艦が揺れる。数名の悲鳴が響く。

「損傷は!？」

「右舷に被弾しましたが、支障はありません！」

このまま攻撃を受け続ける訳にはいかない。只でさえ、作業が遅れているのだ。あの艦と戦って時間を潰すのは惜しい。

クロードの意図とは違うが、呼び掛けで敵艦の動きを封じる事が出来れば、この状況の打破に繋がるかもしれない。

あわよくば、あの三機も作業を手伝ってくれる事だって可能かもしれない。

「……メイリン、救難チャンネルを開いて。敵艦に伝聞。こちらに敵意なし、願わくばユニウスセブン破碎作業を手伝われたし、と」

タリアの決断に、デュランダルは何も言わなかった。いや、何も言えなかったが正しいのかもしれない。

出撃前にクロードに釘を刺されたのだ。艦橋に入るなら、絶対に口出しをするなど。

そんな制限を設けられても、デュランダルは艦橋に入る事を選んだ。どんな事になろうとも、この戦場だけは自分の瞳で見詰めなければならぬからだ。

ユニウスセブンの降下が、ザフト軍のMSが引き起こしたという事だけでも、連邦に宣戦布告の機会を与えてしまっている。それをザフト軍が碎いて、地球に被害がでなければ丸く収める事も不可能ではないが、

(…実際は無理だろうな)

目の前の塊を砕いて、その欠片を大気圏で燃やし尽くすにはかなりの距離が必要になり、更に欠片も最小限に砕き切らなければならぬ。

そのデッドラインは、もう間近に迫っていた。

(…クロードは多分あれを使うのだろう…)

クロードがラグナロクに着けたいと言った装備に、流石のデュランダルも難色を示した。こんな物を装備したMSを造ったというだけでも、戦争の理由となってしまう世の中なのだ。

確かに自分も力を制すには、更なる力が必要だと思っている。だが、この《ニブルヘイム》は桁が違い過ぎる。下手をすれば、小さなコロニーを一撃で破壊しかねない。

だが、クロードは頑として引かない。そしてこう言ったのだ。

《兵器は使い方によれば人を救える。俺は人を殺すために、このニブルヘイムを着けたいんじゃない!》

その通りだと、デュランダルは思った。この状況で地球を最小限の被害に抑えるには、あの兵器に頼るしかない。だが、

《強すぎる力は争いを呼ぶ!》

カガリの言葉が脳裏に甦る。この言葉もまた、この世界の真理なの

だ。

「返事は？」

いつの間にか思考の海へと浸かっていたみたいで、タリアの言葉で現実へと回帰した。

こんな状況でも考え込めてしまう、自分の神経は相当に凶太らしい。

「まだです！」

敵艦はこの間にも攻撃を仕掛けてくる。ミネルバも、トリスタンとイゾルデで対抗しているが、こんな所で足止めを食っている事が、タリアには歯痒かった。

ギリツと歯が悲鳴を上げた時だった。

艦橋の入口が開く。部屋の中が暗いので外からの光に目が眩んだ。

ピントが次第に合い始めて、そこに立っている人物がはっきりとしてきた。

金の髪に彩られた表情は、疲れと不安を湛えており、焦りからか顔が歪んでいた。

「議長、アスランを知らないか！？」

殆ど叫ぶようなカガリの声が艦橋を覆う。敵艦からの攻撃が無ければ、誰もが振り返るのではなからうか。

「彼ならあそこです」

デュランダルが指で示したのは、眼前に広がるユニウスセブンの注
意深く見ると、MS同士の交戦も見て取れた。則ち…。

「まさか…戦場にいるのか…!!？」

MSが爆発する閃光が艦橋を照らす。むくりと、カガリの中に不安
が顔を出す。

あの大戦を生き残ったアスランに限って、そんな事はないだろうが、
いつ誰が死ぬかわからないのが戦場だ。

「くっ！」

踵を返すカガリ。冷たい鉄の扉を開いて、駆け出そうとした。

「どこに行くのです？代表」

思わず足を止める。気持ちは進みたいのに、足が鉛を着けられたか
のように動かない。これも議長という席に就いた、デュランダルの
力なのか？

「決まっている！アーー」

「アスラン・ザラの所に、ですか？」

カガリは思わず振り返る。ゲスト席から立ち上がって、デュランダ
ルは鋭く見据えていた。

何もかもを見透かされている、そんな気がしてならなかった。

「そうだ。だからMSを貸して欲しい！」

国の代表が頭を下げる事は、極めて思い意味を含む。軽々しく使う事の出来ないカードを、カガリはきったのだ。

それだけアスラン・ザラが大切な人である、という事はデュランダルにも理解出来た。

そして彼がMSに乗る許可を貰いに来た時を思い出すと、おかしく思えてくる。

（本当に似た者同士だな）

アスランが頭を下げる映像がフラッシュバックした。

「代表。アスラン・ザラがどうしてもあそこに出たか、知りたいですか？」

「えっ？」

会話の脈絡を断たれて、カガリは戸惑った。この人の考え方や話しかたが、どうにも理解しづらい。

その戸惑いの間にも、デュランダルは話を進める。敵艦の攻撃を撃ち落とした事で、強い光が艦橋を満たす。カガリの正面の顔に影が濃く浮かんだ。

「彼は私にMSに乗る許可を求めました。例え、自分の国がある星が危険であるからといって、私はこの話を認可したりしません」

最高議長という立場にある自分の行動は、プラントの意思であるのと同じだ。軽々しい判断や行動は許されない。

アスランが求めた事も、始めは斬って捨てるつもりだった。だが、彼の決意を聞いて許可を与える踏ん切りが付いたのだ。

光が収まり、影が弱くなる。デュランダル顔には薄く笑みが見えた。

「だが、彼の言葉に心動かされたのです。《カガリと生きていく地球を守りたい》という言葉にね」

只、闇雲に守りたいと思う力より、その守りたい物よりもっと大切なものを持つ彼は、この作業を成し遂げてくれる。そう思えたのだ。

「しかし……」

俯いてしまうカガリ。自分の不甲斐なさが恨めしい。

アスランは自分の力を使うのを躊躇っている。使えば精神が研ぎ澄まされ、無敵に近い戦闘を可能にするが、反面殺してしまう人数も増えてしまう。

人を亡くす悲しみを知っているからこそ、最小限の犠牲で終わらせたいと思う自分と、軍人として生きた時の考えとがぐちゃぐちゃに混じり合って、アスランは苦しんでいた。

そんな彼なのに自らMSを借りて、戦場と化してしまったユニウスセブン破碎作業を手伝っているのだ。

…悔しくない訳がない。

「代表はアスラン・ザラを信用していいのですか？」

デュランダルという言葉が突き刺さる。瞬間湧き上がった怒りが顔を上げさせ、瞳に反映されたが、すぐに冷静な内面が顔を出す。

そして考えてみると、確かに信用していいと言われてもおかしくない。言動も行動も。

「…議長、私は――」

「信用と信頼は違います。あなたは彼を信頼して、この艦で待つべきです」

数秒の沈黙後、今まで続いていた敵艦からの攻撃が止んだ。そしてメイリンが声を上げる。

「艦長、敵艦からの伝聞です！ 《そちらの意思を受け、我々も破碎を手伝う》！」

モニターに映っていた三機対四機の交戦も、そこで終わる。そしてメテオブレイカーを携えたカオスが、基本色のザクと共にユニウスセブンへと向かう。

「我々は、こんなにも頼もしいクルー達に守られているのです。彼もあの三機という限り、落ちやしません」

アビスとガイア、そしてザク・ファントム、ザクウォーリアは協力してジンの掃討に当たる。インパルスはカオスとザクの護衛を務めていた。

「…そうだな。あいつが私を守ってくれる事に対して出来るのは、無事で帰るように祈るくらいかな」

やるせ無いが、仕方の無い事なのだ。カガリは瞳を閉じた。アスラに届けと、願いを込めて祈りを飛ばした。

宇宙という闇の中、ビームの閃爍が輝く。激しい攻撃だとアスラは思った。

三機の連携は隙があるのだが、その僅かな間を突くのが、難しく感じられる。

『このおーっ!』

赤いザク・ウォーリアの放った陽電子のビームが、三機の間を貫いていく。

『…させない!』

その離れた隙を狙い、白いザク・ファントムとインパルスがそれぞれ、カオス、アビスに襲い掛かるが、MA状態のガイアの肩付近から展開されたビームブレイドで二機を支援する。

インパルスがその攻撃をビームサーベルで受け止めるが、弾き返せ

れて宙を舞う。そこにアビスのビームランスが襲う。

『くそっ!』

咄嗟にビームサーベルを収納し、ビームライフルを構える。撃ち込む隙は殆ど無いが、やれなきゃやられる。

だが、間に合わない。振り下ろされる矛が施条銃を嘲笑うように、機体へと目掛けられた。

そこに割り込む影があった。盾から出したビームアックスを翳して、インパルスへの一撃を受け止めたのだ。

『くそっ! 邪魔すんな!』

スピーカーから知らない少年の声がする。どうせクロードの仕業だろう、とアスランは特に気に留めなかった。

「大丈夫か?」

ギリギリと鏝ぜり合いを繰り返す矛と斧。その状況でも、アスランは冷静にこちらを気遣える。それがシンには悔しかった。

『…平気です!』

インパルスは体勢を整えると、ビームライフルでザクとアビスの距離を開ける。そこに急加速で突っ込む。ヤキンドゥーエのフリーダムの動きが頭に残っていた。

『シン! 無茶だ!』

止まる気など無かった。ルナもレイも高機能のザクに乗っていると
言っても、新型であるインパルス程の出力は無い。

俺がやるしかないんだ！

アビスの体勢は崩れていた。だが、ガイアの動きがシンには見えて
いなかった。

ルナマリアの攻撃を躲し、MAからMSへと可変する。そしてビー
ムサーベルを右手に構えた。

『はぁぁーっ！』

少女の声がけたたましくスピーカーを震わせる。インパルスとガイ
アの距離は無いに等しかった。

（間に合え！）

右に掴んだビームアックスは、本来の名前をビームトマホークと言
う。名前が示す通り、投擲によって本来の力を発揮するのだ。

投げ放った斧が綺麗な放物線を描き、アビスの左足を切り裂く。多
少の損傷と共に矛の軌道がずれて、インパルスの左側へ逸れた。

その合間にシンはビームサーベルを取り出し、袈裟に狙いをつけた。

『終わりだっ！』

『ヤバっ…』

アビスの機体が切り裂かれ、エネルギーの奔流に飲み込まれる……、

筈だった。

カオスとブレイズザクの乱入が無ければ。二機は縛れるようにアビスへとぶつかり、振り翳したヴァジュラは宙を斬る。

『ちっ！大丈夫か、アウル』

『…ああ、それにしてもこいつら、ちょっと強く成り過ぎじゃね？それにあのザクの動きもスゲえし』

少年二人の声は、片方がかなり幼く聞こえる。こんな戦場に似合わない、幼き声。

（本当に、この世界は…）

アスランの中に渦巻くのは、人の業の深さに対する嫌悪。

自分勝手な正義が溢れ返る、醜い欲望の世界。自分も言えた義理で無いのはわかっている。人間である限り、どこかで誰かを傷付けている。

だがこの現状はなんだ？地球は滅びの危機に瀕し、それを引き起こす輩がいて、落下を成し遂げるために殺し合いをしている。これを愚かと言わずに、なんと表現すればいいのか！？

『何ぼーっとしてんだよ！！』

アビスのビームランスが襲い掛かってくる。捍を少し捌き、紙一重で躲したアスランは、水色の機体を羽交い締めにした。

「お前たちは何がしたい！？何を求めてる！？」

『な、何だ！？誰の声だよ？』

突然の声に驚きを隠せないのだろう。上擦った調子が聞こえてきた。それでも振りほどこうと抵抗するのだから、パイロットとして優秀だ。

「くそっ……」

思わず漏れた溜息。

自分は何のためにMSを借りたのだ？こんな風に争うためじゃ無かった筈だ。

地球に落ちるユニウスセブンをどうにかしたくて、議長に掛け合っただんじゃ無いのか？

自分の母親が眠るあの墓標を犠牲にしても、大切な人と生きるこの惑星を守るために…。

『てか、何訳わかんない事言ってるんだよ！お前らが動かしたんだろ！？あれは！』

「どういう事だ！？それは！」

考えていた事が声に出て漏れていた事より、アスランはスピーカーからの声に反応していた。

ユニウスセブンを動かしたのは、確かにザフト軍のMSだ。だが破

碎作業を行っているのもまたザフト軍のMSなのだ。勘違いするにしても、あまりにあり得ない事では無かろうか…。

『どういう事って…』

言い淀む雰囲気を感じた。何か隠したい事があるのだろうが、そちらの意図次第では打開策が生まれそうな予感がした。

「言え。何を隠している？」

声だけでも、もの凄い威圧を感じた。ぞわっと噴き上がるように恐怖が押し寄せる。

正直、ここまでまともと言えない生活をしてきたアビスのパイロットアウルにとっても、ここまでの雰囲気声を声で出せる奴を知らない。喋らなければやられる！そう脳が警告する。

『つ、通信が入ったんだよ。ザフト軍が地球にコロニーぶつけようとしてるって！』

「どこの誰だ、そんな馬鹿な事を言った奴は！？」

『知らないんだよ！声も変えてたみたいだし、通信もどこから送られたかなんてわからないし…』

嘘を言っているようには聞こえない。陰謀めいた臭いを、アスランは感じていた。

しかし、あまりに解せない事がある。なぜこいつらはその通信を鵜

呑みにしたんだ？

指揮官たるもの、真実を確かめまでは兵力を温存するのが基本だろう。見た所こいつらは独立部隊のようだし、地球軍だとしても艦一つで作業をしようとするものではない。

『僕らが出たと言って言ったんだよ！地球は僕らの故郷だ。守りたいんだよ！』

（パイロットの独断で出撃…か）

普通なら軍法会議にかけられてもおかしくない行為だ。だが、それを承知でここに出てきているのだ。その想いは鉄よりも強固だ。

「お前らの指揮官に通信してくれ。俺達もユニウスセブンを破碎するために来たんだ。現場を見れば、誰が引き起こしているかわかるだろう、とな」

『…わかった』

どうやら薄々ではあるが、疑いを持っていたらしい。パイロットはすぐに納得し、通信を入れたようだ。

そして数十秒後、カオス、ガイアの動きが止まる。突然の出来事に、他の三人は隙だらけの機体に攻撃しようとは思えなかったようだ。

そして水色の機体から、通信が入る。今度は画面に顔を添えて。

映ったのは銀と水色を混ぜたような髪が印象的な、まだあどけない顔つきの少年。まだ十六にもなっていないのではないか？

『…お前らを手伝う。何をしたらいい?』

「じゃあー」

そこで思い至る。今の自分に指揮権等無いことに。

通信をブレイズザクに送る。白いノーマルスーツ姿のレイが画面に現れる。

「あの三機も作業に協力してくれる事になったのは知っているか?」

『…ええ、ミネルバから通信がありました。クロードが艦長にやれと命じたようです』

クロードもまた同じように考えていたのだと知ると、こそばゆい気もしたが、現状を考えればどうでも良い事だ。

「知ってるなら、何で指示を出さない? クロードから指揮権を託されたのは君だろ?」

画面に映るヘルメットが傾く。下を向いてしまったレイは、自嘲の笑みを浮かべ、すぐに表情を歪ませた。

『……情けないですね。前の戦いで二人を指揮出来なかった事だけで、こんなに怖がっている…』

感情が揺らめく。暴走する二人を捌ききれずに、落ち込むあの時の自分が蘇る。あまりに情けなくて涙が出そうになった。

『クロードは俺を買い被ってるんです。：俺はそんなに強くないんだ：』

「……強い奴なんていないんだよ」

優しい響きが心を満たす。レイは思わず顔を上げ、画面に映る紺髪
の青年を見つめる。

「誰だって失敗すれば、次に同じ事をしようとした時に怖がるもの
だ」

アスランの脳裏に蘇るのは、父親を止めようとした時の後悔。一度
説得に失敗したからと言って、父親に拒絶される事を恐れて、レク
イエムがわかるまで何もせずにした。

そのせいで父親を亡くし、唯一の肉親を失ったのだ。

「だからと言って、後悔ばかりでは前に進めない。反省に変えて生
かさなければ、失敗はただの失敗でしか無くなる」

昔の失敗を今、償えているかはわからない。

父さんが見ていてくれたとして、父さんの満足できるような世界は
創れないけど。

『失敗を：反省に：。：そうですね、すぐに落ち込んでしまっ
てはいけませんね：』

レイの顔が上がる。キツと引き締まった精悍な顔付きで、堂々と指
示を飛ばす。

『カオス、そしてアスランさんはメテオブレイカーでの破碎作業を行う。そして俺、ルナマリア、アビス、ガイアはジンの掃討を行う。素早く、確実に』

『え…。レイ、俺は？』

ポカンとするシン。確かに割り振りを忘れていたので、少し申し訳なくなる。

『あ、悪い。お前はカオスとアスランさんの護衛を頼む。
では、全機健闘を祈る』

一気に散開する七機。二方にバーニアの放物線を描く。

カオスと共にメテオブレイカーを仕掛け、ユニウスセブんに罅を入れていく。大分作業は進んでいたようで、もう少しで碎けてくれそうだ。

『上手くいったみたいだな』

向こうからやってきたジンが、横に真っ二つに斬り裂かれる。その後ろに聳え立っていたのは、アスランとシンには見慣れた、そしてカオスのパイロット、ステイングにはトラウマな黒色の機体。

『こ、こいつは！俺達の機体を悉く破壊しやがった――』

『何言ってるんだ！破壊してないだろう！？傷を付けたただけだ！』

やいのやいの文句を言い合う二人。頭痛がし始めて、アスランは眉

間を押さえた。

「…そこまでだ。さっさとこれを砕くぞ」

冷静なツツコミを受けて、流石に騒ぐ気はしなかった。ステイングはすぐにメテオブレイカーの設置へ。ラグナロクはインパルスの元へと寄る。

『…クロード。教えて欲しい事が――』

シンの声が途切れる。四機全てのMSの警告音が喧しく鳴り響く。リーダーが捉える三機のMSの反応は、《GINN》を示す。

『これ以上、この墓標を砕かせん!』

憎しみの籠った声が届く。似たような声を、アスランはシンから聞いた気がした。

『くそっ、まだ居たのかよ!?!』

そのシンはまた現れたジンに突撃する。またビームライフルで牽制する事もなく、ヴァジュラの斬撃を繰り返す。

様子がずっとおかしいと、アスランには映っていた。何かを探し求めて見つけれない、そんなもどかしさを感じていた。

『お前たちはコーディネイターの筈。なら何故気付かぬ!』

ビームカービンの一条の光の筋が、三方から絡まってラグナロクとインパルスを襲う。

そこを二機が飛び去りながら避けると、そこを狙い撃つ。目標はメテオブレイカー。

『させるか!』

ガラデインの展開を変え、ビーム状のシールドを形作る。着弾と共にエネルギーはそのまま吸収される。

「クロード!」

作業を中断してでも助けるべきだと思った。

相手は三機。新型二機とはいえ、数が多い方が有利に進む局面は多い。

『アスラン、お前は作業に集中しろ! 時間も迫ってる!』

ユニウスセブンの降下速度は上がり始めている。地球の重力に捕まり始めた証拠だ。

そうなれば碎く量が物を言う。少しでも細かく、少しでも遠くで。

「…わかった。気を付けろ」

『大丈夫だ』

展開をビームソードへと戻し、迫るジンの斬機刀を受け止める。その瞬間狙い、インパルスがジンの腕を切り落とす。

そしてそのまま他の二機へと突っ込んでいく。

（くそっ！無茶ばかりする！）

クロードの言葉の意味を理解するのに必死な事を、本人は気付いていない。投げかけた言葉を考え出すのは、もう少し先だと高を括っていた。

下から刳り込むように、ビームサーベルを構えながら突撃するインパルス。

『馬鹿野郎！』

もう一機のビームカービンに狙われている事に、シンは警告音で漸く気付く。

だが、既にサーベルを斬り上げる動作に入ってしまった。

しかしビームは飛んでこない。小銃を構えていたジンの片脚が吹き飛び、その倒れ際をビームソードに貫かれた。

一方、インパルスの攻撃は躲けて、斬機刀による反撃が始まった。

シンはビームサーベルで受け止めながら、隙を見つけようとするが見つけられずに押し込まれる。

『…何故、何故気付かぬのだ！あの血のバレンタインはコーディネイター全ての傷の筈。なのに何故邪魔するのだ！』

斬機刀を振るう鋭さが増す。隙どころか、こちらがやられそうな気

迫だ。

『あんな凄惨な行いを決定できるナチュラルを野放しにするのか！
貴様らは！

だからこそ、パトリック・ザラの取った行動こそ、唯一正しい物なのだ！』

ザクの行動が完全に停止する。

脳の根幹を揺らされた。父親の行動を肯定され、アスランの心は揺れ動く。

自分の愛した妻を失った父さんも、こいつらと同じ道を辿った。ナチュラルを滅ぼそうと、地球にレクイエムの照準を向けた。

それを息子である自分は命懸けで止めに行ったのだ。その行動はやはり、コーディネイターによって否定され、蔑まれるものだったのか…。

『…この娘が眠る墓標で、地球を焼かねば気が――』

『…ふざけんなっ！！』

怒号が響き渡る。だが、今までのシンの怒声とは違った。憎しみではなく、悲しみに彩られた叱咤の声。

『お前、死んだ娘がこんな事望むと思うのかよ！復讐に身を染める父親を見て喜ぶのかよ！』

シンの脳裏に浮かび上がる家族の顔。笑顔を見せてくれてはいない

けど、それでも優しい記憶。

『お前だけが戦争の被害者じゃないんだ！一人だけ痛みを抱えてると思うな！』

斬機刀を吹き飛ばし、ジンのカメラを吹き飛ばす。そこにラグナロクが接近する。

『ユニウスセブンで失われた命には友人の母親だった。そいつも一時期はザフト軍として、地球連合を相手にしていたんだ。だがな』

クロードは思い出す。前大戦を乗り越えて強くなった友人を。愛する人と共に生きていくために、作業に志願した眩しさを。

『今は失われた人の分だけ、世界をより良く変えようと頑張る人の手伝いをしているんだ。何で恨みをぶつける事ばかり考えるんだ！？未来に託すのが大人だろう！！』

『……くそおおーっ！』

『ここに眠る皆の気持ち、わかんないのかよ！！』

頭部を失っても斬機刀を振り回すジンに、ラグナロクのガラディンとインパルスのヴァジュラが襲う。

二機が擦れ違った後に残ったのは、三つに分かれた機体。じきにエネルギーが流れ出して、爆発が誘発して散っていった。

「…クロード」

アスランの心は刺られていた。父親の話を引き合い出されると、どうしても凹んでしまう。

『気にすんな。あんな風に言われて、何も感じない方が病んでる』

察してくれるクロードがありがたかった。少し気持ちが軽くなる心地がした。

『にしても苦戦し過ぎたな…。もっと碎かないとまずいな…』

ユニウスセブンの高度はもうどうしようも無い場所まできていた。

(……仕方ない、か)

クロードは作業を行う全ての部隊の母艦に通信を開く。

『特務隊、クロード・タクスが命ず。ミネルバ以外の艦は自隊のMSを回収後、ただちに撤退を。ミネルバは降下シークエンスを行いながら、艦首砲での破碎を行う。また、本国への報告と議長の護送をジュール隊へと託す。以上だ』

通信を切ると同時に、それぞれの艦から帰艦を示す三食の光が宙を彩る。

『ミネルバ、聞こえるか?』

『はい!』

クロードは一瞬目を閉じた。そして目を見開く。

『…デュードリオンビーム送電システム用意。ニブルヘイムを撃つ！』

『な、何を言って――』

タリアの非難の声はクロードに響かない。もう決意は揺るがない。大西洋連邦に何と言われようと、もう構わない。

『覚悟はあるのかね？』

デュランダルの声さえ、クロードの心に波風を立てない。誰も彼を止められない。

『ええ。ニブルヘイムを解禁します』

(ニブルヘイム…?)

アスランは疑問と共に、背筋がぞくぞくと少しづつ凍っていく感覚に包まれていた。

そして震撼し、恐怖する事になるのを今は知らずにミネルバへと帰艦していた。

PHASE-10 ニブルヘイムを撃つ！（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

まだユニウスセブン編が続いています。長くて申し訳ありません…。
ですが、ここから話の動きが激しくなるのです。

特にシンには伏線を結構用意しています。守りたいもの、がキーワードです。

では、お疲れ様でした。

PHASE-11 褒めてあげようと思って(前書き)

今回でユニウスセブン編は一応終了です。

結局三話に分ける事になってしまいました。もうちょっと話を短くする努力をすべきですかね？

それでは、お暇でしたらお付き合い下さい。

PHASE 11 褒めてあげようと思って

宙に浮いたミネルバへと、ザク三機は重くなっていく機体をどうにか操り、ようやくと到着していた。

新型の二機はどうせ自慢の機動力で、既に帰艦してしたり顔で待っているに決まってるのだ。

けど、それならそれで良いのだ。無事にこの戦場を切り抜け、また一緒に居られるというのなら、厭味も皮肉も受け入れられる。

ルナマリアは気持ちの昂ぶりを沈めながら、コックピットを開けて外に出る。隣には色違いのザクが収容されており、レイとアスランもコックピットから出てきていた。

その隣にある収納スペースががら空きなのを見て、ルナマリアは不思議に思った。

私達と同じように、クロードもユニウスセブンでジンの掃討とメテオブレイカーを設置していた筈だ。高機動のラグナロクなんだから帰っていない方がおかしいのだけだ…。

「――ロードが言ったニブルヘイムってわかるか？」

思考の海から突然抜け出す。その声がアスラン・ザラだとか、レイがどう反応しているだとか。そんな事はルナマリアにはどうでも良くて、ある一つの単語が頭に残った。

《ニブルヘイム》。地獄すら生温い、氷の世界。

「ニ、ニブルヘイムですって!？」

ワイヤーを使って、半ば飛び降りるように、コックピットからMSデッキの無骨な床へ着地する。

そして本能的に詰め寄ったのは、紺髪青年。単語を口にした者へと突撃した。

「クロードは、クロードは本当にそれを口にしたの!？」

必死な表情で迫り来た少女に一瞬度肝を抜かれたが、とにかく自分の疑問を解決する事にも繋がりそうなので、アスランは肯定を示すために頷いた。

「あ、ああ。確かにあいつは《ニブルヘイムを撃つ!》と」

さっと血の気が引いていく。ルナマリアの顔も、アスランの後ろに居るレイの顔も真っ青だった。

「だ、大丈夫か!？」

問い掛けてみても、目の前の少女の反応はあまりにも固かった。《ニブルヘイム》という単語はそれ程までに恐ろしいものなのか。

「レ、レイ、マズいわよ。議長に言って、クロードを止めなきゃ!」

ルナマリアの高い声が、余計に高く響く。クロードの判断がどれだけ大きな事か、アスランにも事態は飲み込めないが、雰囲気伝わっていた。

「そうだな。多分あの方は艦橋に――」

「いや、もう議長はミネルバに居ないと思うぞ」

ノーマルスーツのまま駆け出していた二人が、ブレイズザクの足元
辺りで振り向く。

ルナマリアもレイも目を瞠く。ここに居るメカニックが教えてくれるのならともかく、声を上げたのは他国の人間で、一緒に戦場に居た筈のアスランだったのだから。

「…どうしてあなたがそんな事を？」

「クロードの仕業だと思うが、俺の乗っていたザクは周囲の会話を拾っていたんだ」

こんな変な機能を付けてまで、クロードが見せたかったのはあの少年達だったのだろう。

この戦いの現状を、そして連邦の行いの非道さを俺に知らせるために。

「それであいつは各艦に指示を飛ばしたんだ、特務隊として。その内容の中に、議長の護衛はジュール隊に引き継ぐと言っていた」

アスランの言う事が正しければ、既に議長はジュール隊の母艦である、ゴンドワナ級ホルテールに移っている事になる。

レイは急いで隣の小部屋へと向かう。ルナマリアも同様に。

ここにある通信パネルでボルテールと繋げば…。

『こちらボルテール』

見知らぬ管制官の機械的な声を聞いている暇は無い。矢継ぎ早にレイは、議長へと繋いで欲しい旨を伝える。

『しかし、そう簡単に――』

途切れた声。後ろからぼそと誰かが話しているのが、通信機能でもわかる。

そしてレイには、それがデュランダルのものである事も確信出来た。

『…はい。レイ・ザ・バレル、議長の許可が出ました。今繋がります』

一瞬のちらつきが画面を通り過ぎて、レイにとっては何よりも大切な存在が映し出される。

心が浮き上がる。しかしそれを抑え付け、一兵倅を演じるのだ、皆の前では。

「議長！クロードを止めて下さい！彼は――」

『報告は受けている。私が許可したんだよ』

通信パネルの前の空気が止まる。まるで酸素を失ってしまったかのように、息が苦しい。上手く呼吸が出来ていない。

……議長はなんて？

報告を受けた？許可を出した？あの兵器を使うのに！？

「本気ですか！あれを使ったらそれこそ戦争が起きますよ！！」

必死に搾り出されたルナマリアの声は掠れていて、議長にちゃんと届いたのかわかり辛い。

それ程までに止めなければいけないのだ、あれは。

『…クロードは後の事よりも、目の前でユニウスセブンが地球に落ちて、後悔するのを嫌がったのだ』

デュランダル顔は酷く落ち着いていた。まるで全てを覚悟し、受け入れる父親のように。

『私も彼と同じように考えている。だったら許可を出さないのは筋違いだろう？』

だが、それでもやはり、あの兵器の使用は戦いの連鎖を生むとしか、レイには思えなかった。

また争いが始まれば、俺のような不幸が生み出されるに決まっているのに。

…なんて、愚かな世界だ。

「…自分は軍人です。ですが！争いは無いに越した事無いと考えます！ですから、クロードを止めて下さい！」

再びのルナマリアの声は、デュランダル沈黙を生んだ。画面に映る赤髪の少女の表情は悲痛で、本当に争いを憂いているのを感じ取れる。

しかし、局面は既にチェックされていた。チェックメイトも時間の問題なのだ。

『ユニウスセブンの降下で開戦を迎えるのなら、地球に住まう人々を救った代償として、争う方が私は覚悟を持てる』

ルナマリアの表情が崩れる。デュランダルの覚悟が、身体中の血液を冷やしていく。

デュランダルの強さを感じて、二人に衝撃が走る。

もう決めているんだ。敵と成り得るかもしれない人々を、ユニウスセブンから救う事を。

例え、それがどんな結末になろうとも。

「…わかりました。自分達も覚悟を決めます」

レイとルナマリアの顔にも滲み出る覚悟。それを見て、デュランダルも小さく笑む。

『済まない。最大限、争いを起こさない努力をしよう』

途切れた通信。目の前の暗い画面に映る二人。艦内放送が告げる、地球への降下と艦首砲での破碎作業の継続。

そして《ニブルヘイム》の使用。世界は急速に局面を動かし始めていた。

ユニウスセブンにまだ残るメテオブレイカーを作動させる。更に細かく、もっと小さく。

そんな願いを込めて、シンは帰艦信号を無視して作業を続けていた。隣にいた筈のカオスですら、帰艦してしまったというのに、インパルスはまたメテオブレイカーを作動させる。

そして最後の一基を機動して、漸くシンはユニウスセブンを離れた。そして様子がおかしいことに気付く。

（帰艦信号が出たにしても、何でもう艦が殆ど無いんだ…？）

ミネルバは当然ユニウスセブンの近くにいるのだが、他の艦はちらほらと見えるだけで、遠方遙か彼方にあつた。

カメラを回す。状況はやはり変わらなくて、ユニウスセブンの軌道は殆どズレていない。二つの塊が地球の北半球と南半球へと向かう。下手をしたら砕く前より被害が大きくなっているような気がした。

「これじゃ…俺達がした事って…」

意味なんか無いとしか言えない。ザフトが一生懸命に破碎している映像が流れているとしても、地球への被害が大きければ大きい程、民衆の意を盾に大西洋連邦は開戦を宣言するのだろう。

そうなれば俺のように、家族を失う人がたくさん増える。

そうなるのが嫌で、俺は力を求めたんじゃなかったのか？残虐非道な敵を薙ぎ払い、救い出したいんじゃないのか？

今はそれすらわからない。焦りと疑問で頭はぐちゃぐちゃなんだ。

焦りを振り払いたくて、俺は第二次ヤキンドゥーエ攻防戦の映像をメイリンに頼んで手に入れてもらった。その中に求める強さがあるような気がしたから。

そしてフリーダムの凄さを知った。的確に切り刻まれる武装、カメラを射抜かれ立ち尽くすしかないMS達。

それを全武装を使って、死者を出さずにやるのだ。憧れるな、と言われる方が無理だ。

この戦場で、俺は無意識の内にフリーダムの戦いを真似ていた。出来ると思ったからじゃない。やらなきゃいけないと思ったんだと思う。

俺みたいに家族を失う悲しみを、もう見たくは無いから。そんなの無理だってわかってはいるけれど、出来るだけ悲しみを広げたくない。

だが、あんな風に機体を操る腕なんて俺には無くて。結局はアスランさんやクロードに助けて貰ってしまった。

：それにクロードの言った言葉も気になる。フリーダムの戦い方を嫌い、何故俺にそんな事を言ったのだろう。

考えれば考える程、焦燥と謎ばかりが浮かぶ。だが、シンは考えずには居られない。自分に足りないものを…。

「…ん？」

半分に破碎された際に生じた欠片群の中に、もっと黒い物が一緒に浮かんでいるように見えた。宇宙の色に目が眩んだのかとも思ったが、何かの予感がそこを注視するのを止めさせなかった。

そして見つけた。宙にたゆたう黒き機体を。

所々に施された赤で、クロードのラグナロクでは無い事はわかる。見慣れた気がしたのは、敵として二度の激戦を交わし、この悲劇の地では共に戦ったせいだった。

レーダーが示す名は《G A I A》。アーモリーワンで奪取された機体だった。

「何だってあんな所に…？」

気になってスラスターを転換して、MS大の隕石群を掻き分けていく。

その中心付近にガイアはあった。バチバチと爆ぜる火花と、漏れる電気がただ事では無いことを印象付ける。機体の真ん中、コックピット付近の大きな凹みが痛々しい。

「おい、大丈夫か!？」

通信を無理矢理に繋ぎ、問い掛けてみても返事は無い。状態を知るために、映像回線も無理矢理に開く。

映し出されたものに、シンは酷いショックを受けた。

金の髪がさらりと流れ、額から流れた血がまだ幼さの残る顔とギャップを感じさせる。バイザー越しだから、それ以上の事はわからないが、これだけは言えた。

「…こんな娘を…連邦は…」

捍を握る手が震えている。言葉がこれ以上出てこない。

クロードから聞いたエクステンデッドという単語を、シンは興味も無く、頭に留めるくらいで聞いていた。

どうせ関わるのは戦闘。命のやり取りに私情等要らないと、その時はただ敵を倒す事だけを考えていた。

だが、今のこの気持ちはどうだ。目の前の傷付いた少女を見ると、心がぐらぐらと揺らめく。

そして頭の中に思い出されるのは、クロードの戦い方。守るべきもののために奮われる、絶大な力。

理屈も煩わしい思考も要らない。今はあの焦燥も迷いも無い。今すべき事が、シンの中にはつきりと示される。

（助けなきゃ！）

インパルスの腕の中に抱えて、バーニアを吹かす。

少女の瞳は未だに閉じられたままで、開きそうにも無いが、シンは呼び掛け続けていた。

シンの中では幼さの面影が残る少女を見ると、どうしても妹と重ねてしまう癖があった。

この少女にも同じように、マユが重なって見えた。だが、感覚がいつもと違う。

いつもなら悲しい記憶が噴き出して黒くなっていく気持ちが、今は必死で助けようとする前向きな気持ちに溢れていた。

漸く隕石群を抜け出す。少女はずっと静かに眠り続けていた。死んでいるのではないかと、疑いたくなるくらいに無反応だ。

「くそっ！早くミネルバへ！」

リーダーを確認し、カメラを回してミネルバを視界に収める。しかし、シンの目の前には驚くべき光景が広がる。

「な、何だ!？」

ユニウスセブンを覆う異様な雰囲気。ミネルバを残して、全ての艦は消え去っていた。

それだけじゃない。

ミネルバの展開された艦首砲と、その付近で白とも青とも銀とも似つかぬ光を纏う何かを見つける。

キーボードをいじくり、シンは映像を拡大する。そこにあったのは、不思議な光を放ち、二門の砲をその威圧感と共に今にも放とうとするラグナロクの姿であった。

「ミネルバ、準備は良いな？」

ラグナロクを、ミネルバの艦首砲から少し距離を取って静止させる。

武器の性質上、デュートリオンビームを長時間照射され続けなければならないので、機体が艦と遠すぎても近すぎてもいけない。

距離があると、デュートリオンビームのエネルギーが移動の間に消費されて、必要な分をチャージする事が出来ない。

近すぎると、チャージの間に機体熱の上昇で艦を焼きかねないのだ。ラグナロクの放熱能力は凄まじく、大気圏も楽々突破出来る程だ。

そしてニブルヘイムで発せられる熱量は、大気圏突入能力を備えている艦の装甲をも溶かしてしまう。よって、適当な距離を置かないと、ニブルヘイムは使用できないのだ。

『はい！いつでも大丈夫です！』

メイリンの返事にも気合いが入る。シュミレーションでは何度か使った事がある、ラグナロクへのデュートリオンビーム送電だが、実戦で、それも失敗の許されない状態での使用と、不安になる要素が絡み合っていた。

「大丈夫。落ち着いて、メイリン」

インカムにだけ流れてきたクロードの声。優しさに溢れた声だと思った。

自分の中に溢れてくる力を感じる。緊張は解けないが、恐れない勇気がそれを覆い隠す。

『デュートリオンビーム送電システム起動。大量のエネルギー消費が見込まれますので、艦の一部のシステムが使用不能になります』

艦内にも緊張が走る。

作戦はこうだ。まず、ミネルバの艦首砲、タンホイザーを一発撃ち込む。確実に碎けはするだろうが、隕石として地表に降り注ぐ量は増えてしまう。

その碎けた隕石群にラグナロクの誇る二つの砲門で追撃をかける。

ニブルヘイムの威力を知る、ミネルバクルーだからこそ、この作戦に踏み切ったのだ。

「…よし」

クロードの双眸が煌めく。握り締めた捍の親指辺りに付けられた、赤いスイッチを押す。

起動を確認する音と共に、前面の画面にチャージを確認するための映像が展開される。

そしてラグナロクの銀色に輝くりフレクターに、垂らされるように着いた二つの下羽根部分が、両肩へと移動し固定される。

それと同時に、上羽根部分が二つに分かれ、四枚のりフレクターが左右対称に展開される。そして腕、背中、脚の放熱フィンが開く。

『デュートリオンビーム、照射！』

ミネルバから放たれた光が、ラグナロクの胸部分にある緑色の水晶に到達する。すると、りフレクターが発光を始めて、チャージの確認画面の四枚の羽根に光が灯る。

最初は弱い光だが、チャージが進むにつれて強く輝き出す。それに加えて、放熱フィンからも同じような、白とも青とも銀とも似つかない粒子が漏れ始める。

もう少しでチャージが完了するそんな時だった。

『待って下さい！ニブルヘイムの射軸上に二機のMS反応を確認。
：インパルスとガイアです！』

メイリンの声を受けて、クロードはカメラを向ける。ユニウスセブンの欠片でできた小隕石群の中から出てきた、青と白の機体と、黒い機体がこちらに向かっているのを確認できた。

「くそっ、こんな時に！」

急いで通信回線を開く。インパルスはガイアとも通信を繋いでいるようで、シンと共に額から血を流して気絶している少女も画面に映る。

「シン、早くラグナロクの近くで待機しろ！艦に戻る暇は無い！」

ミネルバはタンホイザーを展開している。インパルスはそのすぐ近くにある、艦橋のすぐ下に収納されるのだ。よって今は艦に戻る事が出来ない。

ラグナロクの周りも半端ではない熱が溜まってはいるが、ミネルバに取り付くよりは、大気圏突入の際は安全だろう。

『で、でもこの娘が！』

治療してやりたい気持ちはクロードにも良くわかるが、この状況ではインパルスもガイアも消し飛びかねない。

「ニブルヘイムを撃つ！ごちゃごちゃ言っていると、蒸発するぞ！」

『ニブルヘイムを！？』

それでシンも光を放つラグナロクの姿に納得する。そして、急いでラグナロクのすぐ下へ移動する。言葉通り、本当に消し飛ぶだろうから。

画面に映る四枚の羽根が、チャージの完了を報せるように強く輝いた。

「作戦開始だ！」

タンホイザーに赤い光が少しつつ集まる。どんどんと強くなる光が、その破壊力を示すかのように一層の輝きを放つ。

『照準、ユニウスセブン!』

タリアの声にも緊張が走る。見据えたコロニーの残骸が、沢山のコーディネーターの眠る場所だと言う事がわかるからこそ、躊躇いも生まれる。

だが撃たなければいけないのだ。地球に生きる生命の殆どに罪は無いのだから。

『タンホイザー、ってえええっ!!』

収束した赤い光が二つに割れたユニウスセブンを同時に貫く。

内部に侵入したエネルギーの爆発で、更に細くなったのだが、やはり大きめの物がちらほらと見受けられる。

クロードは捍についた銃爪に手を掛ける。自分のこの一撃が、戦争を引き起こすかもしれないと思うと、手が震えるが、躊躇ってはいけないのだ。

友が守りたいと言った惑星を守るために。

「ニブルヘイム、いつけえええっ!!」

リフレクターに貯めたエネルギーが、銃爪を引くと共に、二つの砲門へと流れ出す。

リフレクターは輝きを強め、流れ出すエネルギーを更に高めていく。放熱フィンから流れ出す粒子も、強烈な熱さを孕んでいた。

そして放たれたビームは、先程までラグナロクが纏っていた光そのままの輝きを、砲門へと凝縮したような、艦でも放てない力を示す。凄まじい程に高められたエネルギーは、二筋のビームへと姿を変え、ユニウスセブンの落下軌道上へと立ち塞がる。

落下する欠片が輝きに触れる。飲み込まれた先から蒸発しているのが、シンには見えた。

『……これは…!』

浮かぶのは驚愕の念だけ。一体自分の目の前で何が起きてるのだろう？それともこれは夢の中の出来事なのか？

現実を超越したとしか思えない光景だと思えなかった。

シンもニブルヘイムのシュミレーションは見ていた。だが、それはあくまでシュミレーション。まさかこれ程までに圧倒的な火力を持ち得るとは、誰にも思えやしまい。増して、

（地球に住んでる奴らは、特にな…）

ニブルヘイムの照射は、既に二分を越えていた。ユニウスセブンは、殆どその原型を留めてはいなかった。

そして漸く、二つの砲門は沈黙した。綺麗に掃除をされたように、シンには見えていたのだが――。

「間に合わなかった…」

クロードの目には、ニブルヘイムの射線上を外れて地球に落ちていく欠片が映っていた。

量は全体からすれば雀の涙程度でしか無いが、隕石は大気圏から地表までの間に、想像を超える速度を叩き出す。そして質量は減るにしても、大きさは家一軒くらいはある。

地球は、そして生物は甚大な損害を被る事になる。

クロードの拳は痛い程に握りしめられていた。

それから少し待ってみてもラグナロクは動かない。もう大気圏まで間もない。艦に帰るべきだとシンは思った。

『クロード、ミネルバに帰りましょう！』

「……そうだな。そろそろやばいしな」

重力に捕まってしまうと、もうMSの出力では脱出不可能だ。そうなる前にミネルバへ帰らなければ、どうなるかわからない。

最悪大気圏で燃え尽きる事にも成りかねないし、運良く無事だとしても、艦の近くに不時着出来ないかもしれないのだ。

二機は急いでバーニアを吹かす。周りは既に熱を帯びて、目に映る全てが赤く見えていた。

「嘘だろ!？」 『くそっ!!』

二機とも既に最高出力だった。だが、少しも進めていない。それ
が徐々に引き込まれていた。

「『うわああああ……』」

そして一気に重力に機体を持っていかれ、地球の青へと消えていく。
同じようにユニウスセブンの欠片は、努力を嘲笑うかのように降り
注いでいた。

浜辺に建てられたひっそりとした小屋。中ではユニウスセブンの中
継放送が流れていた。

その前で一人の青年が、憂いを帯びた瞳で空を見上げていた。

どこかの流星群が、時期を間違えたかのように降り注いでいるのが、
彼の紫の瞳に映り込む。

「ここに居ましたの？」

心地好いソプラノが、彼の耳に届く。小屋の中から出て来たのは、
ピンクの艶やかな髪を持つ女性。まだ少女な面影を残すものの、風
格は既にそこの大人の比ではない。

「うん……」

振り向きたくとも彼には出来なかった。あの降り注ぐコロニーの残
骸が、自分の知らぬ場所で人を殺していると思うと齒痒くて仕方な
かった。

「仕方ありませんわ。今のわたくし達には止める術がありません…」
これ以上、闇雲に争うのが嫌で姿を眩ませたのは良いが、この世界の現状を見ると、判断は間違っていたのかもしれない。

人は争いを止めず、止める術を模索する者も現れない。もしかしたら居るのかも知れないが、邪魔者として始末されてしまっているのかも…。

そう思えば思う程、守りたい世界があると言った自分が滑稽に思えてしまう。

(それでも…)

自分は間違った選択はしていないと信じていた。カガリも頑張って世界をより良くしようと、プラントを訪れたりしている。

「あれを…見ましたか？」

あれ、という指示語だけでも彼には十分に理解出来た。脳裏に焼き付いて離れない、あの悪魔のようなMS。全てを破壊するような異様な威圧感。

テレビが再びその場面を流していた。

「うん。あれは世界にとって危険過ぎる」

漸く彼は振り返った。瞳は潤んでいて、深い悲しみが彼女にも伝わっていた。

「何を考えているんだろう、プラントも、ザフト軍も」

あれじゃ争いの火種をただ悪戯に撒き散らしたただけだ。強すぎる力を見せ付けられた人は、震えて何も出来ないか、必死に抵抗するか。二つに一つしかない。

大西洋連邦が取る道なんて、誰にだってわかる筈だ。それなのに…。

「あの力、棄てさせねばなりません。最悪でも管理が出来るようにしなくては…」

彼女の瞳もまた、憂いで揺らめいていた。零れ落ちそうな雫を、彼は人差し指で掬い上げた。

「何とかしなきゃね。だけど、もう少し様子を見よう。連邦の動き次第だ」

わかり切ってはいるのだが、それでも願わずにはいられない。これ以上、目の前の愛しい人が心を痛める姿を見たくはないが、動くにはまだ早い。

彼は腕の中へ彼女の柔らかい、そしてたおやかな身体を抱き寄せる。

「…キラ？」

吃驚する彼女の額にキスを一つ落とす。傷付いた心が少しでも癒えるように、優しい気持ちちが溢れ出さないように。

「もうここも危ない。行こう」

隕石の落下は未だに続いていた。ここもいつ津波に襲われるかわからない。

こうして彼女を抱き締めて居たいのはやまやまだが、自分も彼女もまだ死ぬ訳にはいけないから。

「…はい」

夜空には煌めく星々は、小屋から去る二人を見ていた。これから起こる争乱の気配に、さめざめと輝きを流しながら。

宇宙には廃棄されたコロニーがたくさんある。その一つの中に、真っ青なMSが侵入する。外の外見からは想像も出来ない、施設がそこには広がっている。

「はあ。つまんねえ仕事だな、毎回よ…」

フェンリルから出てきた少年は溜息を吐き出す。近頃指示されるのは、要人を乗せた航宙機を襲う事や、反乱の意思を持つものをけしかけることばかり。

今回のユニウスセブンで漸く戦う事は出来たが、最初は全然つまらなかった。

戸惑っていたにしても、一撃で機体に損傷を負うような奴らには興味が無かった。

ただ、一機。おもしろそうな戦いが出来そうな気がしたが、それも周りの奴らに邪魔されてしまった。お陰で少し頭にきていた。

「ご苦労様。早く降りてきなさい」

聞き慣れた女性の声の下から聞こえてきて、覗き混めば想像通りの人がいた。

「何？用ならここでも聞けるよ、ユリさん」

黒のショートヘアに青い瞳が映えて、余計に冷たい雰囲気的印象づける。

だが、彼女から冷たさを感じた事はない。こそばゆい物を貰っているような気がした。

「良いから早く降りなさい。レールガン二つの修理もあるんだから」
渋々フェンリルから降りると、すぐにメカニック達が修理を始めた。
多分二日もかからずに直るだろう。

「で、何？俺忙しいんだけど」

邪険に扱うような態度は、思春期特有の照れ隠しだ。それをユリ・シヨルメラは理解していた。

「何って、褒めたてあげようと思って。あんた暴走しなかったし」

褒める？暴走？彼には何の事だかさっぱりだった。

そんな彼の表情から読み取ったのか、ユリは驚いた表情を見せた。

「もしかして知らなかったの…？」

余計な事を口にしてしまった。もう既に知っていて、その上で割り切っていたのだと思ったのだが、どうやら勘違いも甚だしいようだ。

「…何だよ。何隠してんだ？」

詰め寄られて、壁際に追いやられる。表情は明らかに不機嫌が加速していた。

「あんたが知る――」

「良いから言いやがれ！！」

怒鳴り声一閃。もうこうなれば、こいつを止める事は出来ない。ユリは大きく溜息をつく。

「…あんた、ユニウスセブンで黒と銀の機体と遭遇したわね？」

あの機体の事ならいつでも思い出せる。そのくらいに印象が彼の中では強かった。あの機体捌きは見事だった。

「ああ。それが？」

「…あれはラグナロク」

その単語だけでも、血潮が煮えたぎるのを自覚する。頭の中が憎しみと怒りで爆発しそうだ。

その様子もユリにはお見通しだった。だから話したくなかったのだ。

自分達が目立つのは、明らかに早過ぎる。彼が暴走しなければ、まだ裏で動き続けられるのだが、もう難しくなりそうだ。

けど、それも仕方ないのだ。彼の中に渦巻く物を考えると。それに自分も、彼を見ているとあまり長く我慢できそうにない。

「わかったでしょ？あれにはクロード・タクスが乗っていたのよ。エリミオ、あんたの憎い相手がね」

表現できない爆音が耳元で鳴った。それが壁の凹む音と、エリミオの拳が潰れる音とが混じり合った物だと、すぐには理解できなかった。

ただ一つすぐに理解できたのは、彼にはまだ教えるべきではなかった事だけだった。

PHASE-11 褒めてあげようと思って（後書き）

お読み頂きありがとうございます。楽しんで頂けたのなら幸いです。今回で漸くニブルヘイムを使用する場面まで書くことができました。わかる方はわかっていると思いますが、ニブルヘイムはガンダムXの影響を強く受けています。

と言うか、殆どパクリです。ただ知っておいて頂きたいのは、自分がガンダムXが好きだという事です。だからこそ、オマーージュしました。

では、お疲れ様でした。

PHASE-12 俺が、俺が守るから! (前書き)

今回は完全に原作と違う形をとっています。多分、今後かなりズレていくと思いますが、それでも宜しければお付き合いです。

それと、生々しい表現はしていませんが、微エロ注意です。

PHASE-12 俺が、俺が守るから！

微かに香る木漏れ日の匂いが、シンの鼻腔を擦る。懐かしい匂いだ。何年も前から嗅いでいなかった気がする。

いや、それに気が付かなかったただけなのかもしれない。思考が感情に囚われ、湧き上がる憎しみやら怒りやらで、大した余裕も無かった。

特にヤキンドゥーエで終戦を迎えてからは、感情をぶつける物も殆ど無くて。教官やら、士官候補生やらに掴み掛かっては、罰を受けていた憶えがある。

別にそいつらが気に入らなくてやった訳じゃ無いけど、暴走する自分の感情を抑えられなかったんだ。

そして、俺はいつの間にか養成所を卒業していた。問題ばかりを起こしていたから、簡単に卒業なんか出来ると思ってなかったから、以外と言えば以外だったが、養成所での成績は悪くなかったし、世の中なんて力があれば渡り歩けるぐらいにしか思わなかった。

そんな荒んだ頃に、ミネルバへの配属が決まり、クロードと出会う事になった。

最初に会った時は衝撃的だった。とても上司とは言えない服装で、軍服すら着ていない始末。そして極めつけが、

《俺にはタメ口で話すように》

なんて宣ったのだ。俺が知っていた軍のお偉いさん方とは、明らかに毛色が違った。そしてその時の心境を一言で例えるなら、《不信》という言葉が似合っていた。

それから一週間もしない内に、俺達は進水式も終えていないミネルバで、半ば成り行きみたいな形で戦場に立っていた。

その時はクロードをただの信用ならない上司としてしか見ていなかったし、利用できればいいやと軽んじていたけど、宇宙へと出てすぐに心境は変わっていった。

ヨウランとヴィーノの退艦騒ぎでキレた俺を殴ったり、そのすぐ後に妙に頭に残るような事を言うし…。

とにかく、余計に不信任は募って。作戦の立案とか、そんな戦闘関連でしかクロードを見習う箇所なんて無いと思った。

だが、それは違った。クロードの強さの根底には、人を思いやる強さがあった。

そして気付いたと同時に、クロードの言葉もわかり始めた。けど、本当に守りたいものは既に無くなっていて。それでも俺は必死で探し求めた。

まだ見つけたとは言えないけど、それでも前より気持ちが軽くなった気がするんだ…。

『お兄ちゃん』

声が、マユの声が聞こえたような気がした。そんな訳無いのに、真

っ暗な中で振り返って確認までしてしまう。

『お兄ちゃん。もうマユ達の事で苦しむことないんだよ?』

また声が聞こえた。マユがいる筈無いか、もうそんなものどうでも良くて、必死に腕を伸ばす。

「マユ!でも…でも俺は!」

守ってやれなくて、そして自分だけが生き残ってしまった後悔が襲い掛かる。

また心が黒くなる。

『…いいのよ、お兄ちゃん。何も言わないで』

声が遠ざかっていく。シンは更に必死に手を伸ばす。一筋の光が見えた気がしたから。

「マユ!!」

『お兄ちゃんが見つけたものを大切にしてね。それと…』

切なげに呟かれたそれは、シンの心に温もりと同時に寂しさを与えていた。

『時々マユ達の事、思い出してね…』

だが、それでも。シンの心に強さを齎してくれた。そして思い出す。幸せだったあの頃を。

漸く、思い出す家族の顔に笑顔が戻っていた。

「――ン！シン！しっかりしろ！」

揺さぶられる感覚が、脳を覚醒へと導く。誰の声かも寝ぼけてわからず、シンは間拔けな返事をするしかなかった。

「…ふう。取り敢えず無事みたいだな」

「あれ…？ここは…」

緑色に生い茂った木々の間から漏れる日溜まりの中で、シンは目を覚ました。

周りを見渡しても、緑色が続いているだけで、他には何も確認できない。

右で木漏れ日から外れたクロードが、何やら木を削って先を尖らしていた。

「どうやら無人島みたいだ。運良くこここの近くの海に落ちてな、どうにか二機を抱えて辿り着いたんだ」

半覚醒だった頭も一気に目覚める。そうだ、ユニウスセブンを破砕しきれずに俺達は…。

手を広げて、空を仰ぐと思った。すると、左手に何やらの柔らかい感触が伝わる。

何気なく覗いたシンは、一気に青褪める事になった。

「うわあっ!？」

思わず手を引く。顔中に血液が集まり火照っているのが、自分にもわかった。

しかし、左手に残る胸の感触が忘れられないのも男の性だ。思わず左手を見つめてしまう。

「その娘の応急処置は済ませてある。幸い、怪我は機体の損傷の割には大したことなくあったから安心していい。ただ、」

クロードの顔を見遣る。明らかにからかうぞ、と顔に書いてあった。

「寝ている娘にお痛をするのは、ちょっとな…」

「そんなんじゃないです!!」

からかわれるとわかっていたのに、大声で反応してしまう自分が子供みたいで恥ずかしかった。

シンは一度深呼吸をして、隣で眠る金髪の少女の様子を窺う。ヘルメットを脱がされ、あらわになった髪はふわりと柔らかい空気を含み、閉じられた瞳を縁取る睫毛は長くて、目を開いた時はどうなるのか、一瞬想像してしまう。

…また顔に血が集まってしまった。

そしてシンは、想像の中の人物を見ている気がした。それにさっきと同じような事があったような……！

「ああっ！そうだ！こいつ、アーモリーワンでぶつかった……！」

MSで出撃する前、シンはヨウランとヴィーノと一緒に買い物へ街に繰り出していた。

その時、曲がり角でぶつかったのがこの少女だった。今はノーマルスーツを着ているから、服装が違うが間違いない。

その時も胸を鷲掴みにして、少々呆けていたのは内緒だ。

それにしても……。

「こんな娘を連邦は……！」

考えるだけで怒りが溢れ出す。力を持たぬが故に、力を持つ存在を妬んで、薬や機械やらで同じ力を身につけようとする。それじゃブルークスモスも遺伝子を弄っているやら、人間として間違っているやらなんて言える立場じゃ無いじゃないか！

「地球がこんな風だと知っていたら、ユニウスセブンの降下は阻止しなかった、って顔してるな」

いつの間にか、シンの前方に移って銃を取り出しているクロードを見て戦慄が走る。まさか、この娘を……！

「ダメだ、クロード！そんな事させない！」

銃を掴み取ろうとしたシンを嘲笑うように、クロードはマガジンを抜き出した。

(……抜き出した?)

「勘違いし過ぎだ」

クロードはマガジンから一発の弾丸を引き出して、ナイフで二つに割った。その中の火薬を、木板の窪ませた場所に乗せ、先程尖らせた木の棒で擦り合わせる。数秒後には、煙が昇り始めていた。

そこにどこから見つけたのか、枯れ葉を乗せて火種を作り、枯れ枝を焼べて大きくした。

後は少し大きめの枝を集めて、火を安定させるだけ。これだけでも獣避けにはなる。

焚火を木漏れ日の少し外に作ったクロードは、何処かへと歩いていく。方向も何もわからないシンは、その背中に待ったを掛ける。

「ちょ、ちょっと。何処へ行くんです?」

深緑の髪が同化してしまって、ノーマルスーツしか良く見えないが、クロードは焚火を挟んだ向こう側へ真っ直ぐに歩いていく。

獣道みたいな物も無いというのに、普段通りの歩き方で易々と進んでいた。

「俺達のMSの所だ。修理しなきゃ飛べもしない」

MSはすぐそこにある訳ではなく、海岸に近い場所にあるらしい。

なら何故、森の中にシンと少女を運んだかと言うと、潮風の影響が強いかららしい。少女の傷にも良くないし、夜になれば寒さを連れてくる。

野宿をするのなら、獣が出るにしても暖を取り易い森の中の方がいいらしい。

シンには良くわからないが、目の前でちらつく炎があるだけでも、心底安心できる事を知った。確かに海岸ではこうも行かないだろう。

シンは今度こそ天を仰いだ。空は昨日の出来事が嘘のように青くて、漂う雲が優雅に流れていた。

しかし、あれは現実で。完全に消滅させられなかった。そして自分達の努力は、残滓の前に儼く消え去ったのだ。

三機のMSと一緒に降り注いだ隕石は、地球にたくさんの爪痕を残して、犠牲になった人々も多くいるのだろう。

そう思えば思う程に、やるせなさが心を支配する。俺達がした事がどれだけ意味があったのか、地球の人々はどれだけ死なずに済んだのか。

具体的な物が無ければ、どんどん気持ち沈んでしまう気がした。目の前に土の色が見える。いつの間にか俯いていた自分に驚いた。

そして隣で眠り続ける金髪の少女。今回の騒動で唯一、自分が守れ

たと誇れるものだ。

「……君だけでも救えて、良かった…」

見つめる瞳が優しい。例えば、恋人を見守るような、小さな妹をあやすような。複雑に感情が絡んだ、綺麗な瞳だった。

彼女の瞳は未だに開かない。そう簡単に目を覚ますものでない事はわかるが、どうしても不安になるものだ。

シンは自分のノーマルスーツをまさぐる。何か無いかと、探してみるけど大したもののは身に着けていない。

家族を失ってから、洒落た物にも興味を無くしていた事を、今更に後悔した。

少しでも結び付きがあれば、安心の度合いも増える気がしたのだ。

「そんな訳も無いのにな…」

この娘を見ていると切なくなってしまう。いつからこんな日々を過ごしているかはわからないけど、あまりにも不憫だ。

周りに居る大人が、戦いしか教えてくれないような場所に居れば、自然と精神は歪む。そうと決まった訳ではないが、優しさを知らずに育ったんじゃないかと、そう思ってしまう。

焚火に木を焼べる。まだ若木だったようで、バチツと爆ぜる音と共に煙が強くなった。

シンは少女に煙が当たらないように、身体を移動させた。もう夜の帳は降りていて、木々のせいもあるが、火の光だけが頼りな真っ暗な世界が広がっていた。

（遅いな、クロード…）

あれから一回もこちらに戻ってきていない。修理に夢中になっている、という事か。

幸いMSに積んである非常食はこちらに運んでくれていたので、腹を空かす事はないのだが、如何せん心細い。

傍らで眠る少女は居る訳だが、見知らぬ土地でそれも真っ暗な世界では、不安になるのは仕方ない事だ。

気を紛らわせるために、もう一度木を火に焼べる。今度のは爆ぜる火も、煙が増える事もなかった。

「……退屈だな…」

今度は言葉にしてみる。思っている事とは違うが、余計に自分の不安を煽る気はない。焼べた木が崩れて、火花が舞った。

その小さな虫みtainな火花を追い掛けて、シンは夜空を見上げた。

星がまるで宝石をぶち撒けたかのように、所狭しと輝きを放っていた。

（こんな星空、家族とすら見た事ないな…）

少し気が紛れたような、心の不安を家族が埋めてくれたような、そんな感覚。オーブへの怒りばかり抱えていた頃には、考えられないくらいに穏やかな心境だった。

小さな笑みが自然と零れて、隣に眠る少女の様子が気になった。心に余裕が出来たという事かな、とシンは悪くない気持ちだと感じた。顔を覗き込むと、ぴくりと瞼が震えた。慌てて、身体を少女の横へ移動する。

更に覗き込むと、少女は何かに驚かれるように苦しみ始めた。一瞬ぎよつとさせられたが、シンは肩を掴んで覚醒を促すために左右へ揺らす。

「おい！大丈夫か！」

呼び掛けると、一日中閉じられていた瞳が漸く開かれた。紫を含ませた赤色。シンの瞳と近い色で、少しの間見つめ続けていた。

だが、いつまでもそうしている訳にはいかなかった。少女の瞳が歪み始める。肩に添えられたシンの手を掴んだかと思うと、信じられない力で引きはがした。

「お、お前は…誰だ！？」

飛び退いて距離を開ける少女の瞳は恐怖で彩られ、シンにも痛い程に伝わる程だった。

「…怖がらなくていいよ。もう大丈夫だから」

宥めるつもりだった。だが、少女には通じない。まるで外からの声を、全て拒絶しているかのように見えた。

「嘘…嘘…。大丈夫なわけない…。だってあんな大きいのが、地球に…」

どうやら、まだユニウスセブンでの出来事が頭の中にあるらしい。

確かにあそこで気絶して居たし、起きたばかりで混乱しているのかもしれない。

「あれはもう無くなったよ。怪我してるんだから大人しー」

そこで言葉が途切れる。少女の瞳は何も映していない。まして目の前の少年の戸惑った表情も。

少女は囚われていた。《死》という人間として、一番の恐怖に。

無くなったという言葉で、少女の中に生まれたのは安心ではなく。

がたがたと震え出した身体。溢れ出す恐怖。もう、止められなかった。

「いやあああつ！皆死んじゃう！ネオ、ネオ助けてえええつ！」

少女は暗闇の中に駆け出す。内にあるどうしようもない恐怖から逃げ出すために。

シンは一瞬呆気にとられたが、それでも追い掛けなくちゃいけない

と本能が告げた。

少女の後ろ姿は、既にかなり離れていて。暗闇でも目立つ金の髪がなければ、間違いなく見失っていただろう。

「おい！待てって！」

全速力で走っているというのに、全く距離が詰まらない。シンには良くわからないが、少女は何かに怯えている事だけはわかった。

それが何で、何対してなのか知りたくもあったが、今はあの娘を見失う訳にはいかない。

見失えば、そのまま帰ってこないような嫌な予感がするから。

少女の足は止まらない。草やら藪やら木やらが生い茂った、足をとられ易い筈の地形を何も無いかのよう to 駆けていってしまう。

追い掛けるシンは、木の枝で腕や脚に傷を負いながらも速度を落とさずに走っている。先程まで遠かった背中が少しずつ、少しずつ近付いてきた。

いくら強化された人間だとしても、所詮は女の子だ。体力はシンの方に分がある。

散々走り回って、漸く手を伸ばせば届く距離までこれた。今は無理矢理にでも止めて、焚火の所まで戻った方がいい。あそこまで帰る宛もある。

「いい、加減に、捕まれ――」

「きゃーっ！？」

思いっきり伸ばした手が虚空を掴む。急に視界が開けたかと思ったら、少女は叫び声と共に姿を消した。

いや、そうじゃない。目の前の断崖から落ちたのだ。

急いでシンは下を覗き込む。不幸中の幸いか、下は湖のようで自分の居る所からそんなに高さもない。水面に浮かぶ金色も見えて、一先ずは死んではいけないのがわかった。

しかし様子がおかしい。ばたばたと動かされる腕。激しく浮き沈みを繰り返して、上に伸ばされる手。

「あいつ、泳げないのか!？」

気付くと同時に、シンは湖に飛び込む。夜の水中は暗くて、飛び込んだ反動で深く潜ってしまったシンは、周りを見回してから水面へと向かう。

彼女を見つけるのは簡単だった。水中は音を正確に伝えてくれるので、腕を動かす度に水面を叩く音を頼りに向かえば、じたばたと暴れる人影があった。

「あふっ…、がっ…。ごほっ！」

急いで向かって、少女のお腹の上部を両手で挟む。そうすれば彼女の身体は水面より高くなれて、溺れる事もない。

しかし、錯乱している少女は大人しくしてくれない。腕に爪を立て掻き毟る。激痛が両腕を襲った。

ノーマルスーツは破れ、肌からは鮮血が流れ出していた。それでもシンは腕を放さない。彼女の身体を持ち上げ続けた。

「頼むから！大人しく、してくれ！死にたいのか！？」

急に動きが止まる。シンの腕に食い込んでいた爪も、今は力なく腕に置いていただけになった。漸く、岸まで運べる。そう思ったのだが…。

「死……死ぬ……？」

呟かれた言葉は震えていて、酷く聞き取り辛い。少女の身体が異常なまでに小刻みに震え始め、腕に置かれていた手は少女自身の腕に食い込む程、きつく身体を抱きしめた。

「死ぬのダメ！！死ぬの怖い！！死ぬのいやあああっ！！」

暴れはしないが、この異常さがシンの行動を阻んだ。岸に上がっても、また逃げられてしまったては元も子も無い。

（どうすれば良いんだよ！？）

少女の腕から血が流れ出してきた。落ち着けなきゃ、少女は自分の身体を傷付け続ける。

どうにかしなければ…。

しかし、方法なんて少女の事を知らないからどうしようもなくて。
シンはここまでの彼女の行動を思い出す。

目覚め。怯え。ユニウスセブンの事。そして逃亡…。

待て、その前にもやり取りはあった。確かユニウスが落ちたらみんな死んじゃう…だとか。

……そう言えば今も俺が死にたいのか、って言った時からこんな風になったな…。

だったら！

「大丈夫！君は死なない！俺が、俺が守るから！」

シンは叫んだ。あらん限りの力で。自分でも本心かはわからないけど、素直に口からこの言葉が飛び出していた。

理屈も道理も考えてはみたけど、結局は意味を成さなかった。そんな物より、目の前の少女を助けたいという一心の方が遥かに勝っていたから。

そして少女は、ふるふるとシンの方に顔を向ける。恐怖に満たされた瞳が、シンの紅い瞳を見つめる。

「ま、守る……？ステラを……？」

少女の名前はステラと言うのだろう。妹も自分を呼ぶ時、マユと言っていたのを思い出した。

「ああ。ステラは俺が守る。約束する！」

見つめてくる瞳から、恐怖が消えていくのがわかった。それ程までにステラの瞳はわかり易く、恐怖を湛えていたのだ。

そして安心したようにシンに凭れ掛かったのを確認して、岸へと上がった。

お互いノーマルスーツだから濡れても然程問題は無いが、シンには別の意味で困った事になった。

濡れた髪やら、押し付けられる柔らかな身体やら、張り付いてしまつて浮かび上がるボディラインやら。煩惱を押さえ込むのに必死に為らざるを得ない状況だった。

「顔：真っ赤」

岸で取り合えずクロードの真似て火を起こし、暖を取ると共にノーマルスーツを乾かす。

ステラは先程までは想像できない程に、柔らかな表情を見せてくれて、シンは心まで和らいでいくのがわかった。

しかし、顔が真っ赤なのは仕方がないのだ。ステラの方を碌に見る事ができない。見たならば、自分の中の何かが崩れ去る自信がある。

「し、しょうがないだろ！？だってステラがそんな格好…」

シンはノーマルスーツの上半身だけを脱ぎ、中のインナーまでは脱いでいないのだが、彼女は下着以外を脱ぎ去っており、シンが作っ

た木の物干しで服を火に当てている。つまり、

(……裸になんかなるからだろ……)

どうにもステラからは羞恥という感情を読み取れない。どう見ても自分とそう変わらない筈なのに、おかしい気がした。が、今は問うても仕方ない。

シンは火の加減と、時々周りの様子を伺っている。勿論、ステラの方を見ないで。しかし、ずっと彼女の視線は感じていた。

ちらりと見てみる。柔らかな笑顔で、じっとこちらを見ているステラにドキリとさせられる。どうしようもなく、心臓が高鳴っていく。

「名前……」

「えっ？」

唐突に呟かれた言葉の意味を、シンは理解できなかった。名前と聞こえた気がしたけど、何に対してなのか量りかねた。相手の名前を知っているから余計に。

「名前……聞いてない」

「……ああ、そう言えば。俺はシン。シン・アスカ。君はステラで……良いんだよね？」

さっき呼んではみたものの、自分の名前が長くて略している人も世の中には居る。そうだとしたら、本名を知らずに居るのは失礼だと思ふのだ。

「…うん。ステラ・ルーシェ。…シン」

呼ばれて振り返ってしまったシンは、先程よりも赤くなり、更に力強く外方を向く。

けどそんな事はステラには関係無いらしい。シンとの距離を詰めて、ふわりと微笑む。

「シン、ステラのこと守る」

振り返させれるには十分どころか、威力があり過ぎる言葉だった。こんな事をあんな表情で言うなんて反則だ。

彼女の表情に見惚れて、我を忘れたシンだったが、彼女を守るという言葉に偽りは無い。

「…うん。俺は君を守るよ」

シンの顔にも、ステラと同じ笑みが浮かぶ。すると彼女はもっと身体を寄せ、シンの腕にピタッとくっつく。

シンの心臓も煩惱も抑えが効かなくなってきた。ステラの顔を見つめて、時間が止まったかのように感じた。その時だった。

殺気を感じる。岸の近くは木々と藪で作られた、自然の隠れ蓑。そこに潜む何かが、シン達を取り囲んでいた。今手元には銃が一丁。しかも火を起こすのに何発か使ってしまったているから、残弾数に不安がある。それにステラを守りながらの立ち回りは、上手く熟す自信はない。

湖に逃げるという手もあるが、ステラは先程知ったように泳げない。抱えて泳ぐにも、岸に上がるしかないのだから、先回りをされてしまえば、そこで襲われてしまう。

「シン…?」

不安げな表情で、瞳を揺らすステラ。やはり見た目以上に幼くて、本当にアーマリーワンで、ガイアを奪った三人の内の一には、どうしても見えない。

武器がもう一つでもあれば、ステラにも手伝ってもらえただろうが、流石にそれでは男が廃る。どうにかして守るしかない。

「くそっ！一か八かだ！」

シンは銃爪を引いた。銃口は上へと向けられていて、威嚇射撃のように見えた。

その音が戦いの火蓋を落とす。茂みから勢いよく飛び出してきたのは涎を垂らした狼で、シンの腕へと一直線に襲い掛かってくる。

シンはステラの腕を掴み、自分の後ろへと移動させ、彼女の身体ごと自身を捻りそれを躲すと、鉛玉の一撃を見舞う。

見事に脳天に風穴を開けて、狼は岸の岩石だらけの地形を転がる。しかし、それで怯む程にこの群れは甘くなかった。

次々と牙を剥き出しにして、噛み砕こうと喉元を狙ってくる。流石にコーディネイターで身体能力が優れているにしても、数十匹近い

狼を同時に相手にはできない。増してや、ステラを後ろに匿いながらでは、派手に動く訳にもいかなかった。

喉元へと二匹で襲ってくる片方を踵で蹴り下げる。頭蓋骨が碎ける、厭な感触が踵に残る。もう片方は避けると同時に銃で撃ち抜く。もう二桁に近い数を屠ったと思った。

シンの周りには狼達の血溜まりがいつの間にかできていて、その生臭さに意識が持っていかれそうになる。だが、ステラの確かな温もりが正気を保たせていた。

狼たちも馬鹿では無いようで、今度は四方からシンの両腕と両脚を狙ってきた。

後ろから右腕を狙ってきた狼を、まず銃で撃ち落とす。これでステラの安全は確保できた。

次に左脚を狙って正面から来る奴に、石を蹴って直撃させた。

後はステラを抱えて飛び退けば、左右から来る二匹は激突してくれる。重なって倒れる二匹に一発の弾丸を見舞えば、同時に絶命してくれた。

ステラを降ろして、後ろに着かせようとした。湖の方を向き、彼女を落ち着かせるように肩に手を置く。

後ろから迫る、石をぶつけて怯ませた狼。シンの首元へと牙を立てる。

「シン！」

鮮血が飛び散り、ステラの頬を紅が彩る。呆然とした瞳が見つめていたのは、崩れ落ちる肢体。

首は撥ねられて、河原にごろごろと転がりたくさんの骸の仲間入りを果たす。

「たく…。碌な武器も持たずに夜の森に入るなよな」

森の色より更に深い緑色が、焚火の炎に照らされて、余計に濃く映る。ステラを抱きしめているシンの髪よりも、もっと暗い気がした。

「ク、クロード…。助かった…」

シンはホッとして身体力も緊張感も抜ける。神経を張り詰めたままだった事で、安心と共にどっと疲れが浮き出る。まだ助かった訳では無いのに。

「…良くその娘を守ったな。後は任せろ」

銀の刃が煌めく。大型のコンバットナイフが、白と黒のノーマルスーツに映えていた。

そしてそれは一瞬の出来事のように感じられた。

狼達の牙は悉く弾かれ、叩き折られ、切り捨てられていった。夥しい鮮血がクロードのノーマルスーツを穢していく。

首を撥ねられ、心臓を突かれ、手足をもがれて夥しい出血でどんどんと絶命していく。

そして最後には、数十匹の狼の亡殻が山積みになり、酷い死臭を漂わせていた。

「……うつ…」

思わず吐き気を催す。湖に映る自分の顔が酷く穢れているように見えた。

「…シン、大丈夫…？」

隣に座り混んで背中を摩ってくれるステラは、これを見ても大して動じていない。これもエクステンデッドだからなのか？

「まあ、養成所でも本物の死体は拝まないもんな」

飄々としているクロードが羨ましかった。飛行機の墜落によってサバイバルを余儀なくされ、幾多の戦場を生き残ってきて。こんな場面も普通のように感じられている事が。

だが、それが見当違いなのをシンはすぐに知る事になる。

クロードは急に真面目な表情になり、死体の山へと手を合わせた。全身に飛び散った血が、余計にその行動を不可思議なものにした。

「…悪い。お前らも生きるのに必死なのにな…」

シンも気付く。こいつらも飢えを凌ぐ為に必死になって、食べ物を探してきたのだ。その本能を、こんなちっぽけな焚火だけで追い払

える訳も無い。

生きる為に、守る為に。精一杯になったからこそ、こうして無事に生きているのだ。

尊い命を犠牲にして、俺達は今を生きているのだ。

「……よし。ああ、所で――」

クロードの視線がシンの後ろに注がれる。シンも振り返るとキョトンとした表情のステラが居て、身体を自分に押し付けている。生肌の温もりが心地好い。

（……生肌……？）

「仲良くなったのは良いんだが、流石に早くないか？そこまでイクのは……」

急激に現実へと帰ってきて、シンの頭は混乱していた。

押し付けられる双丘を背中に感じ始めて、顔やらに血がどんどんと昇る。更に混乱する頭で、とにかく否定しなければと思考を巡らす。

「そんなんじゃないんだよ！ただ、濡らしちゃったから乾かしているだけで。それでステラが、えっと、焚火で――」

どんどん支離滅裂になって吃っていくシン。うぶだな、とクロードは思うと同時に、悪戯心がむくりと顔を出す。

「そうか、そうか。乾かしている間にやろうとしたのか。獣だな、

お前」

「ち、違う！誤解だーっ！」

叫ぶシンとからかうクロード。その傍らで訳が分からずに、瞳を白黒させているステラ。

そんなこんなで孤島の夜は更けていくのだった。

PHASE-12 俺が、俺が守るから！（後書き）

お読み頂きありがとうございます。楽しんで頂けたでしょうか？

今回から完全なオリジナルパートに入った訳ですが、前々回の後書きで言ったシンの守りたいものが漸く判明しました。

察しの良い人は当然、先が読めないという人にもこれは何となくわかっていた方が多いと思いますが、やはりステラ嬢に収まりました。

原作での描き方も悪くはないのですが、自分の妄想を駆使して序盤から二人を接近させております。

それでは、お疲れ様でした。

PHASE-13 んな訳無いでしょ!?(前書き)

今回の話は、恒例と言っていいくらいに進んでいません。まだ降下して一日が明けていないです。

それでも良ければ、お付き合いお願い致します。

PHASE-13 んな訳無いでしょ!?

シンはげんなりしていた。あの後も続いたクロードの口撃により、精神的に疲弊したためだ。

怒鳴り返したり、顔を真っ赤にしたりしながら、ようやく自分達が最初に目覚めた場所へと戻ってきた。肉体的にも精神的にも疲労がピークだ。

あの後、ステラには乾ききっていない服を着させた。多少膨れられ、心が折れそうにはなったが、無理矢理に言う事を聞かせた。あれ以上、あの格好を続けられたら、理性を保つ自身がなかった。

少し機嫌を悪くしたステラだったが、今はシンの手を握って大人しくしていた。

やはりステラは最初、クロードの事を見て怯えていたが、シンの悪い人じゃないの一言で、多少は警戒を解いてくれてはいる。

しかし、いつ、どんな風に怖がるかはわからない上に、彼女の怪我の状態も心配だ。できるだけ離れないようにしないと、とシンは思う。

「取り敢えず、これに包まって先に寝ていいぞ」

クロードの差し出したのは巨大な葉っぱで、大人二人は余裕で入れるくらいの大きさがあった。

成程、確かにこれだけあれば暖かそうだし、風邪を引くこともない

だろう。その上、二人で包まればお互いの体温で余計に温もれる――。

「て、何で一枚なんですか!？」

渡された葉を叩きつける。どう考えたって、からかわれているように感じられた。

「お前な、さっきまでのあれは確かに悪ノリし過ぎた俺が悪いが、これはサバイバルじゃ普通の事だぞ？」

今は十月。こんな場所では碌に暖も取れず、朝方の冷え込みも想像以上だろう。そうなれば、大した防寒具を備えていない自分達が風邪を引くのは道理だ。

それを防ぐには、やはり人肌を寄せるのが一番だ。一人では限界のある事が、二人では簡単に乗り越えられるのは、サバイバルでは良くある事だ。

「でも、男と女が同じベッドで寝るようなもんじゃ…」

シンの言いたい事はよくわかる。女性と同じ床を共有するのには、生半可な気持ちじゃいけないと思う。特に女性の気持ちを汲めない奴は、余計にだ。

その点で、シンは前者は満たしているが、後者を満たしていない。だって現に、

「ステラは全然気にしてないみたいだぞ？」

そう、既にステラはシンが叩きつけた葉の中に包まっていた。そしてシンを見つめているのだ。まるで、幼い妹が兄に縋るような目で。

「で、でも……」

まだ踏ん切りがつかないようだ。全く以って羨ましい状況に手を付けないのは、褒められた事じゃない。

クロードの心が少しやさぐれてきていた。

そして思い付く。シンが絶対にステラと一緒に葉の中に入る魔法の言葉を。

「何だ？もしかして、俺と一緒に包まりたいのか？」

「んな訳無いでしょ!？」

全力の否定を頂いた。クロードだって何が悲しくて、男と一緒に寝なきゃいけないのか、と内心では思っていた。

シンの視線がステラの包まる葉に移る。今だに躊躇っているのを見て、ステラの顔に悲しみが浮かんできた。

「…シン。ステラと寝るの…いや？」

何とも凄まじい威力の言葉だと、クロードは思った。潤んだ瞳や垂れ下がった眉、極めつけが小首を傾げる仕種。

この申し出を断る奴は男じゃない、と断言できる程だった。

シンも覚悟を決めたようだ。そろりそろりと近付いていき、葉っぱの中に入る。流石にステラと真っ正面から向き合う事は難しいようで、端っこの方で焚火を見るような大勢だ。

それでもステラの顔には笑みが宿り、背中へとピトツと引っ付く。一気に赤くなる顔がおもしろくもあった。

（全く…。一気に進展し過ぎじゃないか？）

巷に溢れるカップルなんて霞んでしまうくらいに、この二人が眩しい。

ステラを大切に思うからこそ、少し遠ざけておきたいシン。

シンを信じているからこそ、触れ合いを求めるステラ。

何とも微笑ましい光景だ。だが、彼女の身体の心配があるのも確かなのだ。

医者や専門的な科学者に見せなければ、はっきりとした事は言えないが、エクステンデッドにされた代償がある筈だ。

その不安が付き纏う訳だから、早くMSを修理したい。そのためここに戻ってくるのが遅くなったのだ。

クロードは二人が寝入ったのを確認して、焚火の近くの木に座り、寄り掛かる。一つ、大きく息をついた。

それにしても、シンは無茶をしたものだ。腕には切り傷やら引っ掻き傷やらでボロボロになってるし、そこからの出血も酷かったよう

で、赤を基調としたノーマルスーツがより紅く色付いている。

それと対照に、ステラには大した傷はなく、精々小さな切り傷が肌を露出した箇所にあるぐらいだ。

あの銃声が無ければ、俺はあそこに辿り着けなかっただろう。シンの判断が光った訳だ。

（いつの間にか大きくなるもんだよな…）

艦で始めて会った時を考えると、感慨深いものがある。シンに関しては、特に。

挨拶のために皆の前で自己紹介をした時、赤服を着ている三人は嫌でも目に付く。その中でもシンは、あまりにも強烈な印象を受けた。睨め付けてくる瞳の紅や、言葉と違い辛辣な態度。信頼されるような人柄で無いとはわかっていたが、ここまで露骨にされるとは思っていなかったから、少し傷付いた。

だが、それも理由がある事だと着艦してすぐに、ルナマリアから教えられる事になった。

原因を知れば、成程と納得出来るには出来たが、クロードは気に入らなかった。

家族を失う悲しみを経験したのは、あの大战では何もシンだけではない。他にもたくさんの人々が、親しく愛しい者を亡くしたのだ。

悲しみを忘れないのは悪い事ではないが、引き摺るのは良い事だと

は言えない。それじゃ外の世界に目を向けられないから、井の中の蛙状態に陥る。外の情報を取り入れないから、身の回りの出来事だけに囚われて、悲しみは憎しみや怒りに昇華してしまう。

それが巡り巡ると、心が見る影もなく弱くなってしまう。これの典型がシンなのだ。

（ま、俺もあんまり変わらないけどな…）

星空を見つめ過去を振り返れば、シンと同じように連鎖に囚われていたかもしれない自分が映る。

いきなりの墜落。父親との死別。地球連合に保護され、知ってしまった真実。

絶望を憎しみに変えないとは言いつても切れない、そんな哀しみ。それを癒していたのは、周りに居てくれた人達のお陰だ。

だから、シンにも教えてやりたかったのだ。憎しみに囚われる辛さを。目を向けてみた世界は悪くない事を。

そしてシンは気付いてくれたのだ。ステラという存在を通して。

彼女の背景を考えると、シンはまだ苦しむ事になりそうだが、その棘を包み込んでしまう力がステラにはあるように感じた。

木を放り込んで、火の勢いを保つ。先程みたいに野生の動物に襲われる事も考えられ、未然に気付くためにも灯りを絶やす訳にはいかない。

一陣の風が吹き込む。ゆらゆらと揺らめく焚火の赤が、一人の少女を連想させる。

ミネルバに戻っている筈だから、地球に無事に降下できてはいるだろう。そこから何処へ向かっているのだろうか？

着水する場所によって変わるが、最寄りの基地へと向かっているのだろうか。それとも、

(……オーブて事も、有り得るよな……)

代表がまだ乗っている訳だから、基地よりオーブを優先する可能性は高い。そうなれば、三年振りに帰郷する事になる。

「…あんまり気は進まないけどな」

クロードは取り敢えず考えるのを止めた。MSを動かせるようにならないければ、どうしようもない訳だ。

今日の星空はより一層に輝いて、昨日を忘れるために頑張っているように見えた。

ミネルバの外の景色から、赤色が消え去り、青い空気と白い雲のコントラストが広がった。

艦の装甲も機動系にも、何ら問題は見られない。一先ず安心できる状況になったのだが。

「…艦長、ラグナロク、インパルス、ガイア、三機全てのシグナル

がロストしました」

非情な現実が突き付けられる。あの未曾有の危機を、ここまで軽くしたMSが大気圏突破までに帰艦出来ずに、他の二機と共に行方がわからなくなってしまったのだ。

戦力面でもかなりの落ち込みを見込まなければいけないし、何よりクロードもシンも、この艦には居なくてはいけない人材だ。

クルーの士気が落ちる事になれば、襲われた時に対処しきれない。

「…そう。…弱ったわね」

溜息を吐き出して、タリアは背凭れに寄り掛かる。考えれば考える程に、状況は良くない事を理解しなければならなかった。

まず、自分達が落ちたのは太平洋の真ん中だ。取り敢えず近場に基地は無く、最寄りの基地はカーペンタリアにあり、四日以上航海を必要とした。

だが、ミネルバの備蓄はそんな移動に対応できる程の余裕はない。

「済まない。ちょっと見せてくれないか？」

ゲスト席に居たカガリが艦橋の一番下へと動いていた事に、メイリンは驚いたが、条件反射的に席を立って、画面を見つめるオーブ代表の隣に立つ。

映っているのは、ミネルバの現在位置と地球の地形図。周りは海だらけで、陸らしい物は北の遙か彼方に広がっていた。

その見取り図を見たカガリは頷くと同時に、タリアの方へと向き直る。

「食糧やらの備蓄はどれくらい持つのだ？」

「…恐らく三日も持たないでしょう。最寄りの基地までは持ちません」

隠してもしようがないと判断し、タリアは正直に話した。地球に降下するにしても、こんなだっ広い海の真ん中へ放り出されるとは考えてなかった。

その愚かさが恨めしくて、でもどうしようも無い。要するに開き直るしかないような状況なのだ。

「なら、オーブへ向かってくれないか？」

「…オーブへ？」

タリアにとっては、喉から手が出る程に魅力的な申し出であった。ここからオーブへなら、二日足らずで入港できる。食糧の心配もしなくて良いし、あわよくば補給を受ける事もできるかもしれない。

だが、代表は大丈夫なのだろうか？

「代表、ミネルバは戦艦です。貴女方の理念から外れるのでは？」

他国を侵略させず、侵略せず、争いに介入しない。まだ開戦していないとはいえ、大西洋連邦は難癖を付けて、無理矢理にでも戦争を

起こそうとするだろう。

その相手方を入国させる事は、他国の争いに介入している事にならないのだろうか？

「その点は心配しなくてもいい。代表をテロから救い、ここまで護衛してくれたザフトの有志とでも言えば、閣僚も文句は言えないだろう」

有志は言い過ぎである気がするが、上を納得させるための口上とすれば上等だろう。それにカガリは、恩を仇で返すつもりは無い。

「貴方達は私をここまで守ってくれた。その感謝をここで示さなければ、オーブ代表の名が廃る」

成りたくて成った訳では無いが、この席に着いた以上はオーブの気品は自分が守らなければいけないのだ。

カガリの真摯な瞳は信用に足るものだと、タリアは恐れ多くも考えた。

代表という後ろ盾が無くとも、この方は人間として、密度の濃い経験と元々の正義感の強い性格が合間って、誰からも信頼される偉人に器がある。

だからこそ、英雄として世界から崇拝されているのだろう。

「…お心遣い感謝致します。その申し出に甘えさせて頂こうと思います」

ミネルバの進路は決まった。太平洋の端にある小さな島国、オーブ首長国に。

『これより我が艦はオーブへと向かいます。到着は明後日の予定です。また、大西洋連邦との交戦も予想できるので、道中気を抜かないように』

艦内に響いたタリアの声に、特に不満や不平を挙げる者は居なかった。今はとにかく地に足をつけて、ゆっくりと休みたい気持ちだった。

そんな中、憂鬱そうに溜息を吐く者と、心配そうに空のMSハンガーを見つめる者が一人。どちらも気が漫ろだ。

「……クロードとシン、結局見つからなかったわね……」

ルナマリアの俯いた顔が、余計に不安げに見えた。瞳は少し潤んでいる気がする。

レイも無表情ではありながら、拳が握られているのが、悔しさの表れなのだろう。

シンは成り行き上、事故みたいな形で巻き込まれたが、クロードは決意を籠めてあの銃爪を引いたに違いない。

そうせざるを得ない状況を作ったのは、他ならぬ俺達なのだ。

幾ら相手が新型で、クロード曰くエクステンデッドという強化人間だからといって、四機で掛かってあれ程の時間を費やしてしまった

のだ。

あの子の協力がなければ、ニブルヘイムを起動してもどうしようもなかっただろう。あの兵器が幾ら強いといっても、落ちるコロニーの残骸を破壊し尽くす事は、非現実的だ。

と、とやかく言っても仕方のない事だ。地球はニブルヘイムにより救われ、その立役者は行方不明なのが現状で。

アスランを含めた、三機での搜索も実を結ばなかった。近くには落ちていないのかもしれない。

「…仕方ないと割り切ろう。ラグナロクもインパルスも大気圏を突破するのは可能だ。死んではいないだろう」

「…そうだな。あいつは簡単に死ぬような奴じゃない」

アスランの纏う空気は心配よりも、やはり鬱屈とした雰囲気だった。クロードの心配よりもっと大きな、心を占めるものがあるように見える。

また大きな溜息を吐き出す。

「オーブに…何かあるんですか？」

ルナマリアの頭に浮かんだ素朴な疑問だ。

だが、これは的確にアスランの悩みというか、どうしようもない現実を叩きつけられるというか、考える度に自分の無力さを痛感してしまうものだ。

「…君たちには関係の無い事さ」

そう言ってMSデッキを去っていく。踏み込んで聞いてみたい気もしたが、更に深まった憂鬱な雰囲気がそれを許さなかった。

「…色々あり過ぎね」

「全くだ…」

降下が上手くいったと思えば、クロード達の行方は知れなくて。海底探査も見つけられたのは、前大戦の名残ばかりだ。

搜索も続けたいが、MSに補給できるエネルギー残量も少ない。ニブルヘイムの弊害も出始めている。

そう思えば今度は中立ではあるが、地球の一国であるオーブへ向かうという。代表が乗っているからと言って、手荒い歓迎が待っていないとも限らない。

不安要素を考えれば、考える程に頭が痛くなる心地だ。

アーモリーワンを出立してから、たった二日で地球に降りて、しかも非公式な会談を行った国の代表を送り届ける。こんな忙しい艦が他にあるのだろうか？

恨み言の一つでも言わなきゃやってられない、とルナマリアは溜息を吐き出してから、自分の部屋へと引っ込んだのだった。

（オーブに帰る…か。……くそっ！）

カガリとアスランに与えられた簡素な士官室で、紺髪青年は膝を叩いた。悔しさが溢れてくるのを止められない。

（…また、あのお坊ちゃんにカガリを渡さなければいけないのか…）
公式な発表に迄は至っていないが、カガリの嫁ぎ先は決まっているようなものだった。

オーブでも絶対の力を誇るセイラン家。その一人息子であるユウナ・ロマ・セイランへと、カガリはその身を捧げる事になる。

目的はセイランとアスハの結び付きによる、政治の安定と国力の増強。だが、これは建前であるとアスランは睨んでいた。

何か他の目的、例えばオーブの理念を何らかの形で捨て去り、争いの渦へと投じるとか。そんな良くない事が起こりそうな気が、アスランにはしていた。

しかし、今はそんな事はどうでもいい。彼の思考を支配しているのは、たった一つの憎悪にも似た感情。

（カガリに、また触れるのか…。あの汚い手が）

ユウナの下卑た笑みが浮かんできて、アスランの顔が歪む。備え付けのソファアールが一つ、派手な音を立てて吹っ飛ぶ。アスランの腕は振り切られたままだ。

「アスラン！」

一気に怒りが冷めていく。声を聞いただけでもこんなに安心するなんて、我ながら重症だと思う。

それを齎してくれる彼女は、一瞬嬉しそうな表情を浮かべてくれたが、すぐにキツと目付きをきつくした。

「お前！なんで何も言わずに戦場に出たんだ！？あたしがどれだけ心配したと……」

言葉が終盤に向かえば向かう程、彼女の瞳は潤んでいた。そして彼は小さくなっていく声を掻き消すように、彼女の身体を包んでしまふ。

「……悪かった。お前に心配かけたくなかったんだが、逆効果だったな」

包んでくれるアスランが温かくて、優しく頭を撫でってくれる手がこそばゆくて。そして生きて還ってくれた事が、何よりも嬉しくて。

気付けば、胸に縋って泣いていたのだった。止めたくても、緩んでしまった感情の詮は戻ってくれない。

「……ごめ、すぐ……に、止める、から……」

「……いいんだ。気が済むまで泣いたって」

普段の張り詰めた雰囲気は、彼女の心をここまで喰らい尽くしていたのだ。簡単に止む訳も無い。

だったら自分の前で曝される彼女の弱さを、次に立ち向かう強さに変えてやろう。

それがどんな事であろうと、俺は喜んでやってやろう。

数十分後、落ち着いたカガリは正面に座り、真剣な面持ちを見せていた。

「あのニブルヘイムという兵器、お前はと思う？」

あの迸る光の奔流と、被弾した小隕石が溶けて無くなっていく様は、カガリの中に戦慄を走らせた。

「……クロードが何を考えてあんなものを造ったのか、俺には理解できない。それだけで世界をひっくり返せるような代物をどうして……」

あの閃光がアスランに齎したのは、戦慄だけではなかった。戸惑いもまた生まれていた。

友であるクロードの考えがわからない。普通に見れば、ニブルヘイムはただの大量破壊兵器にしか見えない。

そんな虐殺染みた事をしながらない奴だと思っていたが、それは間違いだっただいのか？

「確かなな。あの兵器だけで世界の均衡が崩れて、戦争に突入するような力だ」

カガリの態度に違和感を感じた。戦争を繰り返さないために、強す

ぎる力を自制する事を目的として、プラントを訪れたはずだ。それならば、カガリの表情は歪むか、曇るかのどちらかだ。

しかし、今の表情はどちらでもなく。

「でも、あれが無ければ、地球は確実に滅びの道を辿ったろう。そう考えれば、クロードは何かを救うために、あの力を手にしたとも考えられないか？」

目から鱗が飛び出るような見解だった。確かに、クロードの性格を考えると、そのように捉える事も出来よう。

それを、クロードと会って二日しか経っていないカガリに教えられるとは、何だか情けなくて頭を掻いた。

「お前の友達だろう？信じてやらなくてどうする」

少し呆れたような表情が、アスランの心に刺さった。全く以ってその通りだから、反論の余地もない。

「…そうだな。済まない」

「あたしに謝るな。それにクロードはアスランを信じていて、ニブルヘイムの事もわかってくれると思っているかも知ない」

「そこを突かれると、どうしようも無いな…」

二人から自然に笑い声が零れた。

議長との会談が決まり、それが大体一週間前くらいからだった。そ

の時から、少々の背徳感からあまり和めるような状況じゃなかった。

「それにしても、議長も良くニブルヘイムの開発を許可したよな」

一頻り笑った後に、カガリがボソリと落とした言葉は、確かに疑問に思う事だ。

開発許可もそうだが、ユニウスセブンでの発射許可もどういう経緯での判断なのだろうか？

同じ立場だとして、カガリも俺も間違いなく躊躇いで判断が遅れるだろう。

カガリ曰く、クロードとの会話一つで、議長はすぐに発射許可を出したそうだ。世界が戦火で焼かれる事を想定出来ない人では無い筈だが…。

「何か思惑がありそうだな…」

それが知らなきゃいけない物のような気が、アスランにはしていた。

議長はプラントに戻られてしまった。直接会って、その考えを問い質しておく必要があると思う。

だが、そうなる俺はオーブを離れる事になる。その間に無理矢理カガリを好きにされる可能性だって、否定できない。

それに地球側が宣戦布告を行えば、間違いなくオーブもその煽りを受ける。今の議会は理念を守る気等無いだろうから、同盟への参加を表明するだろう。

抵抗するためにカガリも声を挙げるだろうが、セイラン家の事だ、カガリを自分の家へと嫁がせ、ユウナの権力を強くして戦争へと向かうに決まっている。

「…行ってこい。アスラン」

「え…？」

「プラントに行つて、議長に色々聞きたいって顔してる。あたしも知っておきたい事だし、お前なら込み入った話も聞けるからな」

しかし、アスランの不安は拭えない。カガリの身の安全が保障されない状況で、自分が離れれば何が起きるか、想像しただけでも悍ましい。

それを彼女も知っているのだろう。だが、強気な笑みを浮かべて、アスランの背中を押す。まるで自分に言い聞かせるように。

「大丈夫、心配するな。いざとなれば、キサカが何とかしてくれる。だからお前はお前がしたいようにしたら良い。誰もお前を責められやしないんだから」

身体が震えている気がした。やはり不安は大きいのだろう。カガリにとって本当に信頼できる身近な男性は、アスランとキサカぐらいなのだから、片方が欠けただけでも、身に降り懸かる火の粉は増えてしまう。

「…やはり駄目だ。キサカさんだけでどうにかなると思えん」

「アスラン!!」

全身が強張る。彼女の顔が、厳しい。

「お前は自分の知りたい事ややりたい事を、あたしのせいにしてしないのか!? そうだとしたら、お前は臆病者だ」

「何!」

「そうだろ!? 人のせいにして進もうとしない奴は、それ以上絶対に進めないんだ。先にある物を怖がってな!」

…確かに先にあるものが怖いのは本当だ。だが、それは。

「俺はお前が心配なんだよ! 気丈に振る舞ってはいるが、現に今震えてるじゃないか! そんなお前を放ってプラントに行ける程、落ちぶれちゃいない」

アスランも一步も引く事なく、カガリに食ってかかる。しかし睨み返すカガリの瞳は、余計に強さを増していた。

「あたしはお前を縛り付ける存在でしか無い、という事か。そんなに重い存在なのか、お前の中では」

だがその強さも仮染めで。強さを保ってはいるが、揺らぎ初めている瞳がアスランの想いを固くしていく。

やはり行けない、と。

「…あたしは縛り付ける存在で居たくはないんだ。ただの重荷には

なりたくないんだよ!」

半ば泣き叫ぶような感じで、カガリは必死にアスランに訴える。アスランに燻って欲しくないから。

(重荷…か…)

「…わかった。但し、勝手に結婚なんかするんじゃない。それが条件だ」

しょうがないな、といった感じに笑んだ表情は何処か大人びていて、何故だが、子供扱いされているような気がして、カガリはおもしろくなかった。

「わかってる!人を尻軽女みたいに言うな!」

アスランは膨れた頬を突いてみた。柔らかく、滑らかな肌だ。

そして生まれてくる感情は、黒く醜い独占欲。

「アス…ラン…?」

気付けば小さな身体を抱きしめていた。首筋に顔を埋めて、彼女の存在を確認する。自分の物であると。

「……………」

黙ってしまった自分を包む者の頭を撫でる。

あたしが居るべき場所はここで。アスランの隣以外、あり得ないと

心に込めて。

ごろりと寝返りをうち、ステラと向かい合わせになるシン。朝起きた時も同じ体勢だった時の驚きようを考えると、思わず吹き出しそうになる。

「幸せそうな顔しやがって…」

ちょっと前までのシンからは考えられない、柔らかな顔だ。憎しみが消えた訳ではないだろうが、もう囚われ過ぎる事もないだろう。

また一迅の風が通り過ぎる。目の前の灯りを揺らして、少しだけ炎の勢いを弱めた。

ミネルバの今の状況は知れないが、問題は無いだろうと思える。それだけ信頼も信用も出来るクルー達が居るし、代表もアスランも居る。

ただ、二人が居る事も厄介の一つで。オーブに行ったとして、どんな風に扱われるかが、最大の懸念事項だ。

最初の内は、代表を送り届けた艦として出迎えられるだろうが、そんなに長い期間優遇はされないだろう。

代表の力が及ばなくなれば、考えたくはないが、大西洋連邦に売られる可能性だってある。

「…そうなれば、もう開戦したも同然だな」

クロードは火を絶やさぬように、また木を焼く直す。衰えていた勢いが、少しづつ復活していく。

（こんな風に、世界も動いてるんだよね…）

火は人の営み、生み出される炭は人の罪。そして木を焼く者こそが、この世界を廻していく者たち。

それがどんな者であるかは知らないが、一つだけ言える事がある。

「そいつらが求めてるって事だよな、今度の戦争も」

争う事が、この世界の宿命であるような錯覚。そんな風に考えてしまうのは、人の業深い内面の表れなのかもしれない。

俺も間違いなく、その感情を持っではいるだろうが、そいつらとは違っていると信じたい。

争う事が必然であるなら、守る事もまた必然で。偶然出会った人々をそんな魔の手から守っていく、そんな力で居たいのだ。

けど、俺に世界を背負うとか、ナチュラルとコーディネイターの手を結ばせるとか、そんな大それた事が出来る筈無いと、わかっている。

だから、という訳ではないが。目に見えるものは守っていかうと、思っている。

破壊が何かを救うというのなら、背負った《地獄》の力を解き放つ事も躊躇いはしない。

後で後悔するくらいなら、世界の人々から蔑まれても構いやしない。
自分の行動をわかってくれれば、仲間達さえ居れば。

どんな苦行にも耐えていける筈だ。

クロードは更に薪を放り込む。勢いを増した炎が、ちりちりと新たな熱を生み出す。

思わずクロードは空は見上げていた。闇の中で輝く星々が陰を潜めて、ゆっくりと新たな始まりを告げるために白み始めていた。

どんな苦行にも耐えていける筈だ。

見上げた空は、星々が陰を潜めて、ゆっくりと白み始めていた。

PHASE-13 んな訳無いでしょ!?(後書き)

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

さて、今回も自分の悪い癖が出てしまいました。それは他の視点や
らを描くために、話が全くと言って良い程進んでいない事です。
サクサクを求めている方もいらっしゃると思いますが、自分の性格
だとこんな書き方しか出来ません。こんなマイペースなSSですが、
今後ともよろしくお願い致します。

では、お疲れ様でした。

PHASE-14 結ばれて欲しいけどね…(前書き)

今回からオーブに舞台が移ります。ここで考えているプロットが結構濃いので、かなり話数を取る事になりそうです。

それでは、お付き合い頂けるならお願い致します。

PHASE－14 結ばれて欲しいけどね…

海の青の向こうに、小さな白い建物群と緑の木々がモニターを通して確認できる。

夜通しの移動の甲斐もあって、次の日の昼にはオーブの海域に到達した。一昨日からの強行軍のせいで、クルー達の疲労は溜まるばかりで、オーブに入港して休みたいものだ。

しかし、そうもいかないのが世の常で。簡単には安息を手に入れられる気が、タリアにはしなかった。

海域の少し内側で待ち構えている、オーブ海軍の艦。放射状に広がって、ミネルバの進路上に立ち塞がる。

『貴艦はオーブ首長国の海域に侵入しつつある。そこで引き返せば、撃墜はしない。しかし、それ以上近付けば、容赦無く砲撃を仕掛ける。繰り返す――』

艦橋に沈黙が訪れる。

オーブ側の対応が何故こんなおかしい歓迎なのか、クルー全員が理解に苦しんでいた。

「ど、どうするんですか…？ 艦長…」

どうするも何もあったもんじゃない。こちらはオーブに代表を保護した旨と、その迎えがやって来る事を連絡されている。それにミネルバの識別コードも送っているのだから、他の艦と間違える事も無

い筈。

しかし、現にオーブの艦隊は完全に戦闘体勢だ。代表の事を考えれば、そんな危険を冒す意味があるのだろうか？

「∴代表をここに来るようお願いして。呼び掛けて貰うしか無いわ」
アーサーは勢い良く駆けていく。こちらの動き次第だろうが、あまりここに留まっては居られないだろう。そうなる前に何とかしなければ、ミネルバの備蓄が無くなって途方にくれる事となる。

『これ以上、貴艦がそこに留まるのなら三分後に攻撃を仕掛ける。速やかに立ち去る事を所望する』

どうやら最後通告のようだ。忍耐力が無いと言いたいぐらいの早さだ。ここに来てまだ五分も経っていないのに、何かを急いているような感じだ。

「何だというんだ、これは!？」

艦橋に飛び込んできたカガリは、驚きと戸惑いに揺れていた。

ここまでの恩を返すために、国へと案内した筈が、歓迎されるどころか逆の状況になっているではないか。

「全包围回線を開いてくれ！」

「はい！」

メイリンのタイプ音が小気味良く鳴り、瞬く間に外へと声を伝えら

れるように通信が設定される。

カガリは自国の愚かな態度に対して、憤りをぶつけた。

「私はオーブ首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ。私をここまで守り抜いてくれた同士に、この対応はなんだ！？恥を知れ！」

響き渡った明瞭な声が、全てに静寂を齎した。オーブ艦隊からの返答も無く、ただ悪戯に時間が過ぎていく。

暫しの後、艦隊の動きが慌ただしくなった。主砲の展開を止めて、艦を横に動かしてオーブへの道を作る。そして漸く返答がきたのだった。

『申し訳ありませんでした！我々は貴艦、ミネルバを歓迎致します。どうぞご入港下さい』

どうやら飢える事で苦しむ事はなさそうで、一先ずの安堵が吐き出す息と共に、全身に入っていた力を抜けさせてくれた。

タリアは通信機器の前に立っているカガリを見遣る。こんな風になった事で、国の対応に怒りを憶えているようで、歯を食い縛って窓から見える戦艦に睨みをきかせていた。

そしていきなり振り返ると同時に頭を深々と下げる。

「…済まない。気分を悪くさせてしまつて…」

代表の頭を見下ろす形になって、クルー達はあたふたとし始める。勿論、タリアもアーサーもそこまでされてしまうと、こちらが申し

訳なくなってしまう。

「い、いえ、お気になさらないで下さい！」

「ア、アーサーの言う通りです。我々はオーブに入港できるだけでも、ありがたいのですから」

歯痒くて、余計に歯を食い縛る。あんなに良くしてくれて、こんな行為すら許してくれる寛大な者達に対する我が国の無礼は、簡単に許してしまえる物では無い。

カガリは閣議で、この対応に対する追及を行う事を心に誓った。

灰色の艦が港へと横付けする。その姿は優雅で気品に溢れて、とても宇宙用の戦艦だとは思えない。

タラップがゆつくりと、港のコンクリートに接地する。そこから降りて来たのは四人の男女。

左から黒服の軍人、同じく白服の者。そして、見慣れたバーガンディのスーツを纏う金髪の少女と紺髪の青年。

後者の二人は、港へ集まった要人達には良く知る人物だ。

「代表、良くぞ御無事で」

恰幅の良い、カガリと同じスーツを着た男が歩み寄ってくる。その後ろにも、同じ格好をした者が三人程見受けられる。

ムツとしたカガリは、差し延べられた手を握る事無く、男を睨み据えた。

「私の無事より先に、言う事があるんじゃないか？ウナト・ロマ」

ウナト・ロマ・セイラン。オーブの現首相で、実質的には議会の決定権は彼にあると言っている。ただ、カガリの代表権限も無視する事は出来ないの、それを吸収するために色々と画策しているらしい。

カガリもその事には気付いていて、極秘裏にキサカに調べさせたりしているのだが、中々尻尾を掴ませてくれない。とんだ狸なのだ。

「はて…？留守中の報告は会議で致す予定ですが？」

惚けているのか、それとも本当に知らないのか。どちらにせよ、悪ふざけが過ぎる。

「ふざけるな！ミネルバクルーへの謝罪をしろと言っているのだ！」

激昂するカガリ。しかし目の前のウナトは表情を変える事無く、緑内障用眼鏡の位置を直した。

その態度が、癪に障ったカガリはウナトに詰め寄ろうとするが、そこに割り込む影があった。

「まあまあ、カガリ。落ち着きなよ」

水色の特徴的な髪型と端正とは言えないが、決して悪くない顔立ちの青年。議員の一人であるという証明の、バーガンディのスーツで

出で立ち。

そう、この人物こそカガリの許婚的存在。

「…ユウナ」

ウナトの二世議員である彼は、父の権限により既に議会の中でも確かな地位を築いていた。

だが、それも上面の物である事をカガリは気付いていた。

出来るなら近寄りたくない存在なのだ。

「そんなに怒るものじゃない。かわいい顔が台無しだよ？」

「何を言う！お前も同罪なんだぞ！」

気障な科白を吐くユウナに身震いを起こしそうになったが、それを堪えて言い募る。

他国の者が居る前でこの軽い態度は、要人としての自覚が足りないのでは無いと言わざるを得ない。

「何を言うと思えば、僕も同罪か。良く考えてから発言願いますよ、代表」

浮かんでいるのは、いつもの軽薄な表情。だが、冷酷な雰囲気を感じさせた。

「いいですか？代表が乗って居るとい通信は確かに受けましたが、

簡単に信用していいものですか？」

劇をしているかのように、大きな手振りでユウナは説明を始める。その様は自分に酔いしれていると、誰から見てもはつきりと判る。

「もしかしたら、保護という名目で捕虜化して、入港と同時に降伏を迫るかもしれない。

そして代表が偽者だとしたら、国内に入り込んでの制圧を目論んでいるかもしれない。

僕らは、そういう所まで考慮しなければいけないんだよ」

…悔しいがその通りだ。しかし、それと今回の件では内容が違う。

無礼は礼を尽くして償うのが当たり前だ。

「だが――」

言及するために紡ごうとした言葉は、ユウナの行動により飲み込む結果になった。

肩に掛けられた手。首に廻された腕。そして密着してくる身体。その状態でユウナは、耳元で囁いてくるのだ。

「四日も国を空けて、疲れてるんだよ。ゆっくり休むといい」

強制的に外へと連れ出されていくカガリが、アスランへと縋る瞳を送る。だが、ただの護衛にそれを止める術は無い。

表情に出さないようにしてはいるが、拳は正直で血が滴り落ちていた。

「では、ミネルバの滞在は認めますのでゆっくりしていくといい。ああ、それと代表の事は感謝しておきます」

その言葉を棄てるように吐き、ウナトもドックを出ていく。残された三人は、複雑に絡み合う感情を持て余していた。

「…凄いですね、色々と」

漸く発せられた言葉はアーサーの物でもあり、タリアの中にも生まれている感情でもあった。

「代表の苦勞が目には浮かぶわ…」

上に立つ者同士で通じる物があるのだろう。タリアは深々と溜息を吐き出して、眉間を抑えていた。

「では、私はこれで」

横に立っていたアスランも歩み出て、二人の目の前に居た。彼もまた本来の仕事へ戻るのだろう。

「ええ。…どうもありがとうね。あなたが居なければ、この艦は無事では済まなかったでしょう」

微笑んだタリアの表情は優しげで。心から感謝しているのだとわかる。

アーサーも薄く笑みを浮かべてくれていた。

その場で頭を下げて、アスランは去って行く。その背中はやるせなさを帯びていて、何処か哀愁さえ感じさせる。

必死で姫を守ってきた騎士は、大抵の物語で報われないものだ。

身分の違いという、大きい隔たりは容易に壊せる物じゃなく、増して他国の王子に見初められでもすれば、騎士が想いを叶えるには攫うしかない。

「出来れば、結ばれて欲しいけどね…」

「はい？何か言いました？」

「いいえ。もう中に入りましょう」

艦の中へ、アーサーが先に戻っていく。その後ろで、タリアはドックを出ていくアスランに、もう一度瞳を向ける。

自分と立場は違うが、愛し合う者同士が結ばれる結末が、一番望ましい筈なのに、遺伝子やら運命やらで振曲げられていく。

悲しい世界だと、思わざるを得なかった。

木々を青々と見せる太陽は、既に天頂に差し掛かっていた。隙間から漏れ入る眩しさに、自然と覚醒を促され、漸くシンは目を開いた。

酷く喉が渴いていて、寝惚け眼で周囲に手を伸ばし、何かないかと手探ると何か硬い骨みたいな物に触れた。

そして目の前、いや自分の胸に何かが埋もれている事にやっと気付いた。

恐る恐る覗いてみると、金色の房が目映る。それが何かわかるのだが、わからない振りをしていたい。

だが、感覚はそれを許してくれなかった。柔らかい身体と女の子特有の甘い香りに、くらりと脳が揺れる。

曖昧な思考の中で昨日の事を思い出しても、ステラに背を向けて寝ていた筈だ。まあ、寝返りでもしたのだろうが、それでも女の子を抱いて目を覚ますなんて、何処の恋愛マンガとツツコミを入れたくなった。

混乱して、中々動き出せないシンの腕の中で、もぞりとステラが動いた。

胸に埋もれてた顔を上げ、赤紫の瞳が見上げてくる。ドキリと心臓が跳ねた。

「…シン、おはよう」

「お、おはよう」

とろんと垂れた寝惚け眼を擦る仕種が、余計にシンの動きを止める。瑞々しい唇が半開きで誘っているように見えて、シンは首を思い切り振る。

（…ステラは懐いてるだけ。ステラは懐いてるだけ！ステラは懐い

てるだけ!!)」

自分に言い聞かせる。そうでもしなきゃ、この状態はやバすぎる。

「ス、ステラ、先にここから出てくれない？」

腕の中から出て貰えば、それだけでシンの止まった物が動き出せる。

だが、思惑は反対の方向に進んでいくもので。

「…やだ。シンの腕、あったかいんだもん」

瞳を閉じて、少女はシンの胸に再び埋まる。ピタリと密着されて、シンは自身の心音すら遠く離れていく。

気が付けば、シンはステラの小さな身体を抱きしめていて、その感覚で思考が蕩けていく。

そしてステラが顔を上げる。きょとんとした表情が、シンの理性を彼方に吹き飛ばしてしまった。

――抑えられない。

顎を上げているステラの顔に顔を近付ける。唇と唇が近づく。ステラも瞳を閉じてくれた。もう後戻りは出来ない。

後、数cmで全てを捨て去る事になると、シンの冷静な部分は告げている。

だが、据え膳をもう我慢しきれない。柔らかな唇を、唇を通して感

じる事になる、筈だった。

がさごそと藪を掻き分ける音で、シンの冷静な部分が顔を出した。正直助かった。が、また飢えた獣だったら迎え撃たなければならぬ。

シンは銃を取り出した。

「…悪い、邪魔するつもりはなかったんだが」

現れたのは良く知る人物で。深緑の髪の男は、バツが悪そうに顔を背けていた。

クロードが見たのは、二人の接近が一気に離れた所で、どういう意図かは知らないが、いい雰囲気に見えたのだ。

因って謝るのが道理で、シンは別段怒っている訳ではなさそうだが、ステラが少しむくれているのが気になった。

もしかして、幼稚なのは喋り方だけで、考え方は大人という事なのか？

「い、いえ、気にしないで下さい」

「…そうか？なら、良いんだが…」

表現しがたい微妙な空気が流れた。風が吹き抜ける。

「そ、そうだ、朗報があるんだ」

それを合図に漸く、此处に帰った理由を思い出したクロードは、この空気を変えるために吃る事も気にしなかった。

その朗報は確かに喜ばしい事であつたが、シンには微妙な心境に成らざるを得ない内容だった。

「MSの修理が完了したんだ。これでミネルバとも合流できる」

合流できる事は確かに嬉しい。ふかふかのベッドでゆっくり出来るし、周りを警戒しなくて済む。

「ステラの事はどうするんです？」

アーモリーワンでのMS奪取と、これまでの戦闘。ザフトに確かな被害を与えてきた。

それに敵対した勢力の兵なのだから、聞き出したい事が上層部には沢山あるだろう。

「然るべき対応はしなくちゃいけないかもな」

表情を一つも変えないで告げるクロード。敵兵だからといって、一日を共に過ごした娘をこんな冷たい言葉で片付けるつもりなのか。

「で、でも！こんな女の子を裁くなんて…」

「お前だって若い兵卒だろ？捕まれば扱いは同じ筈だ」

「けど…」

わかっているからこそ、シンは言い募りたいのだ。ステラを守るとあの湖で誓った。

もし上層部にステラが渡れば、貴重なエクステンデッドとしてモルモットと同じ扱いをされるだろう。

そんな事許せやしない。

「…わかっている。俺だってステラを死なせたくはない。だから俺に任せてくれ」

クロードの表情の自信は確かな物だと、シンには思えた。狼に囲まれた時も、ステラを庇いながら命懸けで救ってくれたのだから、みすみす渡しやしないだろう。

「わかりました。クロードを信じます。良いよね？ステラ」

「…うん」

そうと決まれば、一先ずミネルバとの合流が優先事項だ。

三人はそれぞれのMSに乗り込み、OSを立ち上げた。機器の調子は上々で、レーダーもぶれも歪みもなく作動してくれている。

この場所から東北東に、ミネルバを示す母艦の反応がある。距離はさほどでは無いようで、半日もあれば到達できるだろう。

だが、一つ時間がかかる懸念があった。ステラが乗るガイアだが、航空能力を備えていないのだ。

一応、スラスターを利用して海の上を滑るように移動出来るみたいだが、空を飛ぶ二機に追い付ける程の出力は無い。

「シン、ガイアの左腕を持てくれ。俺は右腕を持つ」

両側から敵だったMSが迫る。もうステラの中に、二機への恐怖は無くなっていた。

ラグナロク、インパルスに拿捕されたかのように見えてしまうガイア。

この格好も、クロードの作戦の内なのだろうか？

『じゃあ、ステラは俺達に任せて、何もなくていいから』

『…うん』

疑問に思うが、今は質問より機体を動かす事が先決だ。捍を前に押し出して、バーニアを点火する。

そして一夜を過ごした島を飛び立った。シンにかけがえない宝物をくれた、転機の島を。

インパルスの操縦は実に快適だった。墜落の衝撃で、かなりの損傷を被っていたらしいのだが、バーニアもスラスターも問題無くスムーズに動いていた。

ただ、流石のクロードも武器までは直せなかったようで、ビームライフルはお釈迦になっていた。

『…インパルスもこうなるとダメだなー。換装できないと、普通のMSと大差ないし』

三つの形態を最大限に活かしてこそ、インパルスは真の価値を発揮する。だが、こういう風にミネルバから離れてしまえば、武器の少なさも災いして、そこらのMSより少々高性能なだけの機体になってしまう。

こんな無援な状態に陥らないとも限らないのだから、それに対処できる何かが必要な所だ。

「それでも無いだろ。ヴァジュラだってあるし、両脚に収納されたナイフだって、十分に強いぞ」

機体のコンセプト上、次世代の礎となるための装備は積んでいる。

一つ一つは、シルエットの絶大な兵器の前で霞んでしまうが、それでも量産されたMSより威力の高い物を施されている。

これ以上をねだるのは、メカニック泣かせな注文だ。

『でも、こんな状態じゃ牽制もろくにできないですよ』

「…確かに一機で戦わなくちゃいけない時は、ビームライフルが無いのは痛いかな…」

もう一つ遠距離用の装備を付加しても良いが、及第だけで解決はできないだろう。

何故なら、インパルスは高機動を保ってこそその機体だ。重量武器を装備したソードシルエットでさえ、ザクより機動性が高いのだ。

そんな機体にこれ以上の装備を着けるには、インパルス用に改造した武器でなきゃー。

「シン。良いアイディアが浮かんだぞ」

(……怖っ……)

通信画面に映るクロードの顔がに笑みが浮かぶ。どこか黒い雰囲気を感じたのは、シンの勘違いなのだろうか。

オーブでの滞在が許可されて少しの時間が経った。

昨日のごたごたの後でも、休めるというありがたい状況には変わり無いので、今はクルーほぼ全員が骨を休めている。腕を脱臼したマリクは文字通りの状態で、医務室へと引っ込んでいった。

(それにしても、ミネルバの人員不足は何とかならないのかしら……)

管制官もぎりぎり。メカニックも余裕が無く、医務室にいるのは看護士のみ。唯一の強みは最新鋭のMSが充実している事ぐらいだ。

だが、今はそのMSを二機失っている状態だ。歴戦の艦長であろうとも、この状態ではタリアと同じように頭を悩ますだろう。

『艦長』

外のパネルからの呼び掛けだ。映り出たのは敬礼を象るアーサーで、先程までの疲れた表情は無くなっていた。

「何？そんなに急用にも見えないけど」

『はい。急用、とまではいかないんですが、代表からの通信が入りまして』

「代表から？」

まだミネルバから降りて、二時間も経っていない。そんなに早く通信が来るなんて、何かあったのだろうか。

『ええ。内容は、《今までの礼と、先程の無礼のお返しとしてミネルバの修理と補給は、オーブ首長国が負担する》と』

為政者には珍しい、義理堅いお方のようだ。国家の予算を他国の軍に割くなんて、余程の事が無ければできない。

今回の件が代表にとって、それだけ大きな出来事だと、印象づけられた。

『艦長』

今度は通信での呼び掛け。アーサーへの労いを告げて、タリアは回線を開いた。画面が切り替わり、タラップ近くの映像とルナマリアの顔が映し出される。

『モルゲンレーテ社の方々がお見えです。どうやらミネルバの修理に来たようですが』

一瞬、呆然としてしまった。アーサーからの報告後、数分も経たないうちに派遣されれば、普通は驚く。

やはり国家代表の一声は、絶大な威力を誇るという事だろう。

「わかったわ。対応は私とアーサーでやります。来て頂いた方達は、そこで待って頂いて」

ルナマリアは敬礼を象り、短く返事をする。その後画面が暗転し、タリアの顔を映し出す。

自分でも酷く疲れているのが、表情だけでわかってしまう。

そつと頬に手を当てる。そして吐き出す溜息は、艦の長として相応しくない物であった。

しかし、それも致し方無い。FAITHであり、ミネルバの方針を語り合える唯一の相手であるクロードが、今だに行方知れずなのだから。

大抵の事に口を挟み、自分の意見が通らなければ権力を振り翳す。そんな上司はやはり居るもので、クルーの尊敬も信頼も集められない。

結果、いざという時の連携が上手くいかずに、大惨事を引き起こす。

大袈裟に聞こえるかもしれないが、信頼の置けない上司の命令なんて聞ける訳も無いし、聞こうとも思えないのが心理だ。

その点、若いという事もあるだろうが、クロードは柔軟さを持っている。

艦の方針は私やアーサーに大筋を立てさせ、その判断があまりにも外的で無ければ、何も言わずに従ってくれる。

だが、一度検討違いな見解を出せば、説明と共にきっぱりと否定してくれる。

普通、直属の上司がいる艦はやり辛いと言われるが、タリアにとっては、クロードが居てくれた方が艦の運営をかなりやり易い。

一刻も早く戻って欲しいのだ。

「…全く、どこで何をしているやら」

頬に当てた手を机につつかえて立ち上がる。通信でアーサーへの呼び出しを済ませ、タリアはタラップへと歩む。

モルゲンレーテと言えば、武門の名家サハク家が管理している国家企業だ。

オーブの艦、MS、MAに於ける開発、製造を一手に担っている大規模な機関のようなものだ。

ザフトの技術転用の疑惑があったため、タリアもモルゲンレーテに関して少しの知識を備えている。

だから警戒しなければいけないのだ。

眩しい陽射しが、海の反射でより鮮明になる。アーサーと合流し、タラップへと差し掛かると、ルナマリアともう一人茶髪でつなぎの女性が立っていた。どうやら彼女が現場責任者のようだ。

あちらもこちらが近付いてくるのに気付き、歩み寄ってくる。

柔和な笑みを浮かべ、手を差し出してくる女性。つなぎが似合わない、何故かそう思えた。

「モルゲンレーテ社、造船課所属、マリア・ベルネスです。今回の現場を取り仕切ります」

綺麗な人だ。こんな女性が、油臭い汚れる仕事を熟している事に感心しつつも、警戒は怠らない。

前大戦では、油断したその結果ガンダムを開発され、急遽、奪取作戦が決行される事になってしまったのだから。

「ミネルバ艦長、タリア・グラデイスです。こちらは副官のアーサー・トライン」

差し出された手を握り、真っ直ぐに見詰めてみる。

特におかしな挙動も無く、あちらも真っ直ぐ見詰め返してからミネルバを見上げる。

「良い艦ですね」

「ええ。ここまで我々を守ってくれた、頼もしい艦です」

眺める瞳が回顧しているように見える。懐かしい物を眺めているように、悲しい記憶を思い出しているように、憂いを含む横顔は隣のアーサーを釘付けにしていた。

数秒の間の後、彼女はハッとしてこちらに顔を向ける。瞳は柔和に戻っていた。

「では作業を始めます」

「ちょっと待って」

ミネルバへと歩み寄るマリアを止める。前と同じように自分達の技術が敵対するのは、やはり後味が悪いものだ。

「悪いのだけど、外装の修理だけで十分なの。内部や武装なんかの修理や点検は、私達で行うので問題ありません」

毅然と放たれた言葉は、アーサーに驚きを、マリアには訝しさを与えた。しかし、彼女はすぐに合点がいったようで、挑むような瞳を向けてきた。

「あら、本当に外装だけで良いのですか？ユニウスセブンでの作業による疲弊は大きい筈では？」

的確な返しだった。確かに武装の疲弊は酷いもので、イゾルデの一番砲はあの艦との交戦で起動不能に陥っている。

だが、こちらのメカニックを嘗めて貰っては困る。二日もあれば、外装以外は修理できるぐらいの技量はある。

「大丈夫ですよ。資材の提供は頼むかもしれませんが」

皮膚を載せて返してやる。その言動には大した反応を示さなかったが、笑顔のまま了解の意を告げて、現場の指揮を取るために去っていった。

「綺麗な方ですねー」

アーサーの脳天気さが、今は羨ましかった。モルゲンレーテ社との関わりによって、ザフトへの被害が出れば、我々の判断は軽率扱いされて、懲罰が待っているかもしれない。

それに行方不明のクロードが、個人的な感情を差し引いてもあまり良い顔をしないだろう。

個人資料から察するに、クロードとモルゲンレーテ社との関係は因縁と呼ぶに相応しいと、タリアには思えた。

あれから十時間近く、ただ海が続く景色を眺めていた。

青と蒼が混じり合う光景は、見ていて飽きないと最初は思えたが、今は集中力は散漫だし、欠伸は出るしで、退屈の一言で状況の説明がついてしまう。

『そろそろ休むか？ステラはもう寝ちゃってるし』

通信の映像がラグナロクからガイアへと移る。金の房が下へと垂れて、シンからはつむじしか見えない。

暢気に眠っているのが、少し妬ましい。

休みたいと、脳は訴えているが、レーダーの反応はもうすぐそこで、ミネルバに着いてからゆっくり休んだ方が健全だろう。

「いえ、ミネルバに帰る事を優先しましょう。みんなも心配してるだろうし」

『そうだな。それにしても、良くそんなに懷かれたもんだな。お前の腕の傷とかを見たら、とても普通に触れ合えるとは思えないんだが』

シンのノーマルスーツも、素肌も、ステラに切り裂かれた後が生々しく残っている。深々と刳られた傷後は、瘡蓋になっても痛々しい。

「それでも無いですよ。この娘も、エクステンデッドといったって、普通の女の子なんです。それに、そんな偏見みたいな言い方、止めて下さいよ」

どんな薬や改造をされていても、ステラの心はちゃんとあって。それがあれば、ステラはステラのままの筈だ。

『いや、そう意味で言ったんじゃない。こうやって寝てくれるって事は、周りの人間を信用しているって事だろう？』

改めてステラのつむじを見つめる。どうやら本格的に眠っているようで、体勢が崩れてシートベルトのお陰で、前に倒れないで済んでいる。

『それはお前が居るからだろうな、って思ってたな』

そう言われると照れてしまう。それにした事といえば、ただ《守るから》と言っただけなような気がする。

ステラにとって、特別な言葉という事だろうか。

「そう…なのかな。俺にも良くわかんなくって」

『ま、そんなもんだよ。人間関係なんて、時間と共に色々変化していくしな』

少しずつ、少しずつ。刻一刻と変わっていく事が、憎しみに囚われていない事が、悪くない気分へと誘う。

その気持ちに便乗してか、遠くに陸地が見えてきた。ミネルバの反応もそちらにあるので、あそこの何処かに居る筈だ。

だが、シンには既視感があった。昔、何処かから見た記憶のある形の島だ。

『…やっぱりか』

クロードの落とした言葉は酷く辛辣に聞こえて、シンも脳裏に蘇る姿で、あの島の名前を呟く。

自分を地獄へと堕とした、悲劇の始まりの地。その名は――。

「…オノゴロ…」

そう。見えたのは間違いなく、オーブの軍備が揃うオノゴロ島の姿

で。シンの消えかけていた紅い炎が、燃え上がるのを止められる筈もない。

また、クロードの脳にも思い出したくない会社名が浮かんできた。

オーブの国営会社で、前大戦ではガンダム五機を地球連合と共に開発した、クロードにとって悪魔にも等しい存在。

その会社が、ミネルバの修理を行っているとは、何たる皮肉なのだろうか。

二人にとって、あまりにも予期せぬ里帰りとなった。

PHASE-14 結ばれて欲しいけどね…（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

やはり二つの場面を進めようとすると、長くなってしまいますね…。次にはシンとクロードがミネルバへと合流しますが、クロードにとってはあまり気持ちの良いものにはなりそうも無いです。

では、お疲れ様でした。

PHASE-15 苦しいの? (前書き)

今回はかなりオリジナル色が強い話になっております。

それでもよろしければ、お付き合いお願い致します。

PHASE-15 苦しいの？

目の前に広がる木々が、昔はあったらしい。今は焼け野原の中に苗木がぽつんぽつんと植えられているだけで、前の大戦の爪痕を残していた。

そう言えば、カガリも自身で苗木を植えてたっけ。

彼女の顔が浮かんでも、今の心情では齒痒さが内から溢れ出て、カガリの助けを求める瞳とか、自分のふがいなさとか、先程の光景が脳裏に焼き付いて離れてくれない。

また顎が軋みを上げた。

（くそっ、くそっ！）

カガリを助けたくて、オーブへと身を寄せた筈なのに、結局俺は昔と何も変わっちゃいなかった。

周りの意見に流されて、保身や身分を考えて、本当にやりたい事も見出だせずに、父の操り人形になっていたあの頃と。

やっと自分の意思を出せたかと思えば、時は既に遅くて。あんな後味の悪い終焉を迎えてしまった。

そんな自分に嫌気がさして、父の行った非道な兵器の開発が許せなくて、あの時俺は死ぬつもりだった。

だけど、それを許さなかったのは彼女で。

《生きる事の方が戦いだ!》

涙を流しながら、必死に訴える少女に胸を射たれた。それに、生きて贖罪を果たせと言われていたようで、嬉しさが込み上げてきたのだ。

あんな父から生まれた自分に生きていて良いと、そう言ってくれた気がしたから。

「だから、俺は…」

暗く沈んでいく。それはアスランにとって、闇の深淵にも似ていた。表情に陰が射す。

「アスラン？」

呼ぶ声がした。目の前には見慣れた自分の車。その運転席から現れたのは、小さい頃からの親友。

「…キラ? どうしてここに？」

茶の髪に紫苑の瞳がこちらに歩み寄る。前大戦の英雄がこんな場所に訪れただけでも反響は計り知れない。

ただ自分に会いに来たにしても、用事があって訪ねてきたにしても、軽率な行動だ。

「ちょっと、アスランと話したくて」

「わ、わかった。話をしたいのは俺もだが、ここではマズイ！取り
敢えず乗れ！」

キラを助手席に詰め込み、急いで運転席に乗り込む。アクセルはベ
タ踏みで、バックから一気にギアを高め、絶妙なクラッチ捌きでそ
こを急速で離脱した。

一先ず溜息を吐き出す。自分もサングラスを掛けていないので、人
の事を言えないかもしれないが、キラは変装すらせずに現れるのだ。
一瞬、心臓が止まったかのように思えた。

「全く、お前はそこまで顔は割れていないにしても、こんな白昼堂
々……」

英雄の顔を知る者がその容姿なんかを、ネットにばら撒いているの
はほぼ間違い無い。

その英雄が、オーブの軍備が集中するオノゴロに現れれば、民衆は
不安を抱える。

大戦後に姿を消し、そしてユニウスセブンの件やラグナロクの武装。
そんな話題が集中し、尚且つ終戦の英雄が行動を見せれば、開戦す
るのではないかという世論は高まる。

それが公にされてないからといって、普通に暮らしている人々には
大した事になってしまいうのだ。

「…ごめん。わかってはいるんだけど、一刻も早く君に会わなきゃ
と思って」

横目でキラを伺う。伏せられた瞳が、心配事を抱えているようにアスランには見受けられた。

キラが憂う事。アスランにはわかった気がした。

世界を焼き払うかもしれない恐怖。

「あ、あれは!？」

いきなり大声を上げたキラは、海の方を眺めていた。

アスランも運転の片手間に見詰めてみると、その理由がすぐにわかった。そして、憂いの理由も確信出来た。

「ラグナロクにインパルスか。：どうやら奪われた機体も捕縛したみたいだな」

無事に降下していたようで、一先ずは安心出来た。無事ならそうと、連絡を入れられなかったのだろうか？

二機に腕を掴まれているのは、奪われた内の黒い機体、ガイアのようだ。損傷は激しくないのも、パイロットごと拘束したようだ。

もしかしたら、そのパイロットと一悶着があって、通信機能が使えなくなったのだろうか。

少し心配になる。

「アスランはあの機体を知ってるの!？」

焦る表情を隠しめせず、キラはバツと隣のアスランを見遣ると同時に腕を掴み、詰め寄ってきた。

思わずハンドルを右に切りすぎて、対向車線にはみ出す。

「キラ！危ないから離してくれ！」

すぐに元の車線に戻したが、対向車が居なかった事にホッとする。

こんな無茶な事をしない奴が、ここまで取り乱すとは、ニブルヘイムに余程恐怖を覚えたという事か。

「あつ、ごめん…」

左腕を掴んだ手を離し、キラはまた瞳を伏せた。やはり不安なのだろう、再び戦争が起きる事が。

「…ユニウスセブンの欠片を消し去った、あの機体の事を知りたいんだろう？」

キラは下を向いた顔のまま頷いた。窓の外を流れる雲が、車の中とは違い穏やかだ。

「あの機体はラグナロクという。そして、あの兵器の名前は『ニブルヘイム』」

「……ラグナロク、ニブルヘイム…」

繰り返された言葉には、やはり憂いが籠められていて。キラの立場だったら心配したであろうが、アスランには憂う意味はない。

「キラ、あれの事はあんまり心配しなくていい」

「なんで？ あんな危険な物、放って置けない！」

普段大人しいキラが、ここまで感情を表に出すとは、やはりニブルヘイムは誰から見ても危険な物なんだと、改めて思う。

だが、それでも懸念を持つ必要はない。

「ラグナロクには俺の友人が乗ってる。あいつも戦争を嫌っている人間、だから大丈夫だ」

登り坂がきつくなり、ギアを落とす。バックミラーには後続車は映っていない。

対向車も殆ど確認出来ないこの状況は、世界を争いに巻き込みたくない二人の心境を如実に表しているような気がした。

「その人は本当に信頼できる人なんだね？」

キラの瞳がこちらを見据える。疑いを持っている訳では無いが、確信が欲しいといった所か？

それに対しアスランは、正面から瞳を離す訳にもいかない。

本心で心配無いと思っている事を伝えるために、普段通りを心がける。

「ああ。それとも俺は友人を選べてない、とでも思うか？」

口元に浮かぶ笑みが見え、キラはホツとする。もしかして不機嫌にしたかと、心配になったのだ。

「そうじゃないよ。だけど、君の見る目はそんなに確かじゃないかもね。僕なんかの友人なんだからさ」

自分も軽口を乗せてみる。やはり友達同士で話す事は、心に安らぎを与えてくれる。

「それは流石に言い過ぎだ。お前は良い奴だよ」

キラの顔にも微笑みが浮かぶ。頻繁に会う訳でも無いのに、普段通りのやり取りみたいに見えるのは、お互いをわかり合っているからの芸当だ。

そう言えば、とキラは切り返す。ドックに向かう道中で擦れ違った車の中に、自分の見知った人物が居た気がしたのだ。

「カガリはどうしたの？一緒にプラントに行ったんだよね？」

すると一気にアスランの表情が曇った。思い詰めるような表情と、悔しそうに食い縛るのが同居していた。

暫しの沈黙が流れる。聞こえるのはエンジン音だけで、余計な事を聞いてしまったようだ、と思い始めた時、アスランはぽつりと一言漏らした。

「…ユウナに連れていかれたよ」

「えっ…?」

連れていかれた、という事はカガリの意思に反して強制的にという事なのか?

そうならば、アスランの中に残っている感情が外に出てくる事は必然で、今の表情にも納得がいく。

「ミネルバに保護されていたのは、お前も知っているだろ?」

黙って頷く。ユニウスセブンの件で、地球は大騒ぎでテレビはずっとその模様を中継していた。

その特集の中で、ミネルバに乗艦したアスハ代表がデュランダル議長に、ユニウスセブンの破碎を頼んだと報道されていた。

「俺達がここに入港した時に、閣僚達が迎えに来てな。それでカガリは、ユウナに肩を掴まれて連れていかれたんだ」

肩に腕を回されて、困惑したカガリの表情。助けを求めるような瞳は自分に向けられていて、腕を伸ばそうとしたのだ。

だが、愚考だと自分を制止してしまった。

「あの時俺が助けたとしてもいざこざで、結局はカガリを困らせると思ったんだ。だけど、やっぱり後悔する事になった。

どうしてカガリ触れるなと言えない!

どうしてカガリを渡さないと言えない!」

ドン、とハンドルを殴りつけてしまう。物に当たっても仕方無い事

だと、大人で保守的な自分は言うが、身体はそれと正反対だった。

とにかく、甲斐性の無い自分への苛立ちで、カガリを悲しませているのだと思うと、涙が出そうになる。

「自分を責めないで。カガリだって、わかってくれている」

彼女の立場を考えれば、そんなのは当たり前的事。だけどそう割り切れないのが、年頃の女の子としての彼女の本心。

それを受け止める相手がアスランなのだが、身分を考えると不釣り合いで、しかも許婚に近い存在が自分の意思とは違う事を強要するのだ。

なら、無理だとわかっていても、助けを求めて、縋るような瞳を本心を受け止めて欲しい相手に送るのは当然だ。

やれるか、やれないかは別として。

「今は無理かもしれないけど、チャンスは来るよ」

(…チャンス、か)

もう最大の機会を逃している。

ミネルバで彼女に逃げだそうと言ったのは、こんな事になるのが嫌だったからだ。ただの権力を固めるために、カガリを欲するあんな奴に渡さないために。

だが、カガリは断った。国を捨てる訳にはいかないと。

そんな正義感も含めてカガリなのだが、やはり好きにされている彼女を見ると、心が悲鳴を上げるのだ。

「……あんなチャンス、もう来ないだろうな……」

「…何か言った？」

「いや」

登り坂が終わり、ギアを元に戻す。こんな簡単に昔へと戻り、カガリの代表就任を止めて、どこか知らない場所で一緒に暮らせていたら、悩みなんて必要ないだろう。

だが、転げてしまったボールは中々止まらない。増して、下り坂に差し掛かってしまえば、後は成り行きに任せるだけ。

それを止めるには、やはり受け止めるしかない。

ボールを止めるには攫うという方法しか、アスランには思い浮かばなかった。

漸くオーブの領海へ差し掛かった三機は、あまり喜べない歓迎を受けることになった。

オーブ海軍の巡回船が、少し離れた場所に見える。

入港しているミネルバのクルーだと証明しないままに進入するのは、国交問題にまで発展しかねない。

そこで巡回船がこちらにやって来るのを、クロードは待つ事にしたが、中々やって来る気配を見せない。それどころか、どんどん戦闘艦が集合していた。

『クロード、これって…』

「…ああ。どうやら熱烈なお出迎えをしてくれるみたいだな」

ジリジリと迫ってくる艦の数は目視できる限りでは六隻。MS三機に対する数では、無い。

緊張が高まる。

『ステラ、戦闘になったら海に落とすから、どこかに隠れてなよ』

『ステラも戦う。シンのこと守る!』

『ダメだ! 君は大人しく隠れてて――』

二人の惚気は放っておいて、クロードは状況把握に努める。

ガイアは海上での戦闘が確かに不利だ。しかも今はライフルを失っている。

ラグナロクとインパルスも条件は同じだが、空中を高機動で飛び回るるので、ガイアよりはマシな戦い出来るだろう。

(だけど、そんなに持たないだろうな…)

半日の移動でMSの燃料は尽きかけている。

クロードもシンも身体に溜まった疲れがあり、長い時間戦ってはいられない。

「さあ、どうでる？オーブ軍」

ややあって、展開した六隻が海域のギリギリ内側で停まる。そして拡声器での呼び掛けが飛んでくる。

その声はシンには懐かしくなるような声で、どこかで聞いたように思えた。

『そのMS二機、ラグナロクとインパルスだな？』

その通りだと返答する。どうやらこちらの事を知っているらしい。大方、ミネルバから情報が提供されていたのだろう。

（だったら、どうして艦を六隻も出したんだ？）

クロードが謎に思うのはそこで、ミネルバ所属のMSだったら入国手続きだけで済む筈だ。

その疑問はすぐに解ける事になるのだが、オーブの軍人は中々に手強い事がわかった。

『ラグナロク、インパルスの確認は出来たが、その抱えられているMSはアーモリーワンで強奪された機体と見受ける。』

腕に抱えられたMSの説明と、あなたがたの名前と情報を引き出す許可を」

既にMSを強奪された事を掴んでいるらしい。理念のお陰で平和ボケしていると思っていたのだが、反してかなりしっかりと教育されているようだ。

クロード、シンの順に名前と情報を引き出す了承を告げる。

そしてガイアの説明は、簡単に省略しつつ、ある事ない事を色々とでっちあげて、クロードが話した。詐欺のような話法を駆使して。

そして数分後、無事にオーブへの入国が許可された。

ミネルバが修理を受けているドックへと案内すると言われて、嫌な予感が現実になる事は避けられない事を悟った。

ドックへと進入し、ミネルバの隣へと降り立つ。ここでも通信機能は使えないようで、そのまま外へ出た。

勿論、ステラは緩い拘束具を後ろ手にさせて。シンは嫌がったが、しょうがない措置なのだ。

しかし、ドック内は何やら騒がしい。あちらこちらで鳴っていた修理音がぱたりと止み、殆どの修理工がこちらを観察しているようだった。

「クロード…？ シン…？」

ミネルバのタラップを降りてきた赤髪の少女は、驚きの余り言葉を失う。

降下後、一生懸命に捜しても見つからなかったのだ。心配が募って、嬉しさを通り越して信じられないのも致し方無い。

「ただいま、ルナマリア。遅くなって悪かった」

「ごめん、ルナ。色々あったんだ」

何だか頭がパニックだ。帰りが遅くて怒りたいのと、無事に帰って来て嬉しいのと、何処で何をしていたのかという疑問と。

それに奪われた筈のガイアと、拘束された金髪の少女。

聞きたい事、言いたい事が絡まり過ぎてパンク寸前だ。

（落ち着け、落ち着け。とにかくここは…!）

「あ、あの…。…そうだ! か、艦長を呼んできます!」

もの凄い勢いでミネルバの中へと駆け入ってしまった。クロードとシンの頭には? が浮かんでいる。

「…シン」

呼ばれた事により、浮かんだ? を打ち消す。隣で窮屈そうに前屈みになっているステラは、訴えかける瞳でシンを見つめる。

「キツイよ…。早くとって…」

胸が痛むがしょうがないのだ。ここまでの移動中にクロードと話し合った計画では、ステラを捕虜として扱う事が必須だ。

今は我慢して貰わなきゃ…。

「ごめんね、ステラ。もう少しだけ待って」

「…シン？ 苦しいの？」

痛んだ心が表情に反映されていた。こんな儚い少女に、拘束具を着けているだけでもこちらが悪のような気がしてくる。

そんなシンを気遣ってくれるステラの優しさが胸に染みる。

「…大丈夫。ありがとう、ステラ」

髪を梳きながら頭を撫でた。気持ち良さそうに目を細めている様は、まるで大人しい猫のようだ。

（シンが居れば、ステラは大丈夫かな）

心が温もるやり取りを横目で見ながら、クロードはミネルバの外装に取り付くエンジニア達の繋ぎを見つめる。

（予想通り、か）

出来れば関わりたくは無かったが、オーブに居る限り、無理だろうとは考えていた。

こちらが修理を頼めば、国で運営されている会社が来るのは必然で。また、プラントの技術も持ち合わせているこの会社が、派遣要請を断る訳も無い。

前のように、今度も技術を流用するための調査も兼ねているのだろうか。

そして、エンジニア達の中に一際目立つ華奢な身体と、帽子を被っているが、それでもわかる長い茶髪を見つける。

全身の血が熱くなる。

：あいつが、あいつが開発に携わらなきゃ、俺はオーブを捨てなくともよかったのに：！

「クロード！シン！無事だったのね」

燃え上がりそうな炎を消してくれたのは、たゆたう水のような声。

歪みの表情を元に戻して、タラップから降りてきたタリアへと身体を向ける。

「ご心配をおかけしました」

軽く会釈をして、クロードは笑みを浮かべた。大きな安心に包まれている。ミネルバへ戻って来たそれだけで、充足した気分を味わえるのだ。

前の居場所が嫌だった訳じゃないが、素の自分でいられるというのは、心を軽くしていく。

そして、その居場所を更に良くするために、シンを悲しませないために、行動を開始する。

「艦長、報告が」

「わかってるわ。よくガイアを奪回したわね。で、その娘がパイロット？」

少し怯える瞳を見据える。赤紫が揺れて、まるで小動物のようで、庇護欲が湧き上がる。

だが、どんなに幼くても敵である事には変わらないのだ。

宇宙に上がってから出された報告だが、アーモリーワンの三機が格納されていた倉庫は屍の山が築かれていたそうだ。

それを行ったのは、ほぼ間違いなく目の前の少女なのだ。これを報告すれば、上層部は引き出せる情報を集めたら、見せしめとして処刑する筈だ。

犠牲者の家族の為に、プラントの過激なナチュラル排斥派を刺激しない為にも、それが最上の対処だろう。

「ええ。驚く事に、この者は噂に聞くエクステンデッドである可能性が高い」

「何ですって!？」

メカニックと言えど、軍人であるには変わりない。その集団をたった三人組で壊滅させる。

そんな能力を与えるために、連邦が行ったらしい改造や薬品投与。

タリアは想像もしたくなかった。

「だが、私の個人的な判断で本当の所はわかりません。専門的な知識を持つ者を、ここに呼びたいのですが」

それに反対するつもりはない。本質を見極めずに、プラント本国へ送って、エクステンデッドじゃありませんでしたでは、クロードが居ても顰蹙を買うだろう。

「で、誰を呼ぶつもりなの？」

「はい。ラルス・スペレルを」

「ラルス・スペレル先生を！？」

医療に興味が無い者でも、その名前を知らない者は居ない。現にシンも名前と実績を知っている、数少ない医者だ。

細胞のあらゆる可能性を模索し、その理論を元にして安全かつ斬新な医療を提案してきたらしい。

それをまとめた論文が医療に革新を促して、百年以上の歳月が掛かると言われていた、細胞の破壊を食い止めると言われる PCC 理論を提唱。

その活躍もあって、三十という若さで軍医としてかなりの地位を築いているのだ。

幾らエクステンデッドの事だからって、そんなお偉いさんが地球に

降りてくるとは、シンには思えなかった。

「…あの人が来るはず無いわ。プラントを離れる事を、上層部が許さないでしょうし」

今、彼はジョージ・グレンの研究をさせられていた。

あの当時の技術で、グレンのような完璧なコーディネイターを創れるのか？

グレンは何故、自分の遺伝子を弄ったのか？

それ以前に、何故そんな事を告白したのか？

そんな研究を上から押し付けられて、悪戦苦闘していると聞いている。

クロードだって知らない訳ではあるまい。

「いえ、上層部が認めさえすれば必ず来ますよ」

クロードの自信のある表情が、こんなに胡散臭く感じたのは初めてだ。自分の思考が来る筈ない、と訴えていた。

「……クロード、本当に大丈夫なんですか？」

隣でステラの後ろ手に着けられた拘束具を、忌ま忌ましげに眺めていたシンが耳打ちをしてくる。

ラルス知らない者はやはり不安なのだろうが、知る者の立場としては、心配自体が徒勞過ぎる。

「あいつは必ず来るよ。必ずだ」

こういう悲しい宿命を撃ち滅ぼすために、あいつは軍医へと進んだのだ。

確かに存在する、非人道的な行いによる犠牲者を救い、その行為を潰すために。

本国の上層部へと通信をいれるために、クロードは艦橋へと入る。

ステラはカガリ達が使っていた部屋に軟禁状態になっている。素敵な事に、シンの見張り付きで。

本当なら営倉で監禁すべきなのだが、そもそもクロードにはその気は無いし、タリアにはシンが必死に訴えかけていた。

《こんな娘を、冷たい牢の中に放り込むのかよ!!》と。

甘い考えかもしれないが、非常事態で人員も少ない状況だ。営倉に常時見張りを付けるだけの余裕も、この艦には残っていない。

なら、目に見える場所に置いておく方が、何かが起きた時に対処しやすい。それに――

（シンが傍に居れば、何も起きない気がするのよね…）

意味のわからない自分の思考を信じていいのかはわからないが、シンの瞳に宿っていた焼き付く炎症が、今は優しく人を温める焚火のように感じるのだ。

それが彼女との出会いで齎された事であれば、喜ばしい事であろう。だが、彼女が処刑される事は避けられない。そうなれば、復讐の炎は地獄の業火にも似る。それがプラントに向けられるのだ。

それは共に戦ってきた者を討たねばならない、という事。そこまでの覚悟を、タリアには持てずにいた。

「ミネルバから本国へ。私は特務隊 F A I T H 所属、クロード・タクス。応答願う」

クロードはインカムを着けていた。よって本国からの通信は、タリア達にはわからない。

彼の横に立つメイリンも、少し不安げに見詰めていた。

「報告は後で上げる。ニブルヘイムの使用は、事前に議長の下承を取った」

どうやらニブルヘイムの使用にお冠らしい。あの兵器は戦略兵器としても使える。それをこんな早いタイミングで使用した事が、上層部は気に入らないのだ。

隠しておいて敵の集まる場所に撃ち込む。そして恐怖を植え付けると同時に、敵勢力を削ぎ落とす。

そう思惑していたのだろう。

「あの状況でそちらの許可を待つのは無理だった。だったら、近くに居る権力者に頼るのは当然です」

インカム越しにも怒鳴り声が聞こえてくる。そんな大声を受けても、クロードはインカムを外さずに、毅然と言い放つ。

「ザフトは軍です。軍は民間人を守るのが仕事だ。それが例えナチユラルだとしても」

怒鳴り声が沈む。通信の相手が誰かは知らないが、クロードの言葉にはぐうの音も出ないようで、現場を知るものからすれば良い気味である。

だが、それでも言い募るのが頭の固いお上の軍人様だ。

クロードも嫌気がさしてきたのだろう、露骨に表情が崩れ始めた。ついでに言葉遣いも。

「俺は不毛なやり取りをするために連絡したんじゃない！ 用件は一つ、軍医ラルス・スペレルをミネルバへ派遣して頂きたい」

『……………っ……………』

「…そうか、なら仕方ないな」

やはり断られたようだ。上層部も大切な人員を失いたくないだろうし、地球への派遣など、やらせたい研究が滞る可能性が高い。

そんなお粗末な事、やはり上層部は認める訳もなかった。

そんな相手には破天荒な考え方で対抗するのが一番だ。だが、クロードの破天荒は度が過ぎていた。

「今後ミネルバは単独行動を取らせてもらう。本隊からの命令も支持せず、こちらの意思を最優先に動く」

「ちょ、ちよつとクロード！」

流石にそれを聞き逃す訳にはいかなかった。ミネルバ全体を統轄する身からすれば、そんな勝手な発言はクルー全員の意見と受け取られかねい。

「なお、この発言は俺個人の意見と権限に於いてのもので、ミネルバクルーの総意で無い事を付け加えておく」

タリアは驚くしかなかった。

自分が懸念していた事はクロードに取って、考慮すべきものであり、既にクルーに対する粛清をさせないように手を用意していた。

そしてインカムを掌で包み、クロードは振り返る。

「大丈夫です。クルー達に迷惑はかけません」

不敵な笑みを浮かべていた。上層部に盾突いているというのに、なんて余裕な顔をしているのだろう。

上訴を交渉のように捉え、楽しんでいる感さえあった。

「…好きになさい！」

それにしても解せない事があり過ぎる。

クロードは、ただステラという少女をエクステンデッドと判定するために、専門知識を持つ者を欲したんじゃないのか？

そうだとすると、何故高名なラルス医師を呼ぼうとしているのか？

そして特にわからないのが、どうして地位を犠牲にするような事をしてまで、ラルス医師にこだわるのか？

普通の軍人なら、手に入れた地位を捨てるような行動はしない。それは一般企業でも同じだろう。

ただの愚か者として、蔑まされるような行動を目の前の若者はしているのだ。

『……………』

「損得などを考えているようじゃ、ザフトも堕ちる所まで堕ちたという事ですか？」

クロードの発言が危険を孕み始めた。中々首を縦に振らなくて焦れ始めたのか、それともやけになったのか。

どちらにせよ、良い兆候とは言えない。

『……………っ！……………！！』

案の定、怒鳴り声が漏れてきた。少し離れたタリアの位置では、はっきりと聞き取れる訳ではないが、努力が溢れているのがわかるくらい声色だ。

しかしクロードの顔色は涼しげで。瞳は虎視眈々と獲物を狙う猛獣のようだ。

「餓鬼で結構。目の前にある問題から目を背けて後悔するよりは、行動して後悔する方が遥かに良い」

そう言ってクロードは、キーボードを叩き出す。まだ声はインカム越しの籠ったものであったが、人差し指がエンターを押し込むと、艦橋に声が響き渡った。

『――まのような阿呆は、儂の権力で潰してくれる！本気になれば師団全てを動かせるのだからな！』

タリアにも聞いた事がある声だった。確か、人事を司るレイモン・バルクウだったか。

ニヤツと厭らしい笑みがクロードの口元に浮かぶ。

成程、とタリアは納得すると同時に、クロードの末恐ろしさに寒気さえし始めた。

隣に居るメイリンも、やり口の狡猾さに絶句してしまったようだ。口元に手を当てて震えている。

「レイモン殿、今の発言録音させて頂きました。軍法に反する危険思想をね」

軍法では、軍の私的利用を固く禁じている。特にザフトは師団を動かすのに、議会及び議長の了承が必要で、その手続きを踏まなくて

いいのは、特務隊にのみ許された特例なのだ。

そしてレイモンは特務隊ではない。

「しかし、あなたの態度次第では、この事は私の中だけに伏せておきますよ」

『し、しかし、儂が本当に言ったとはわから――』

「証人は私だけではないのですよ。さっきの発言の所から、艦橋のスピーカーに出力を変えています。ミネルバの艦橋に居る者が、あなたの危険な発言を聞いているんです」

見ている、レイモン閣下が可哀相に思えてきた。自分で口を滑らせたのだから自業自得なのだが、クロードの誘導の巧みさが詐欺師を彷彿させて、明らかに悪役だ。

『……わかった。ラルス・スペレルの籍をミネルバへと移そう』

もう折れるしかなかったのだろう。苦々しげに呟かれた言葉には、完全敗北の臭いが漂っていた。

そこにクロードの声が入る。勝利を掴み、満足そうな弾む声で。

「すみませんが、ラルスに伝言を頼みます。《救うべき者、あらわる》と」

インカムを外したクロードの顔には充実感があつた。それが何に対してなのか、タリアには計れなかった。

それでも一つだけ確かなのは、自分を投げうってでも、ラルス医師を呼ぶ事が自分達に有利に働くと、クロードが考えているという事だ。

先程までのやり取りの後で、驚きと戸惑いが飽和していた。だがこれも、新たな騒動の前の静かな序曲に過ぎないのだった。

PHASE-15 苦しいの？（後書き）

お読み頂きあらがとございます。気に入って頂けたでしょうか？

今回の話に出てきたラルスは、かなり活躍するオリジナルキャラになる予定です。今度ネタバレにならない程度に、紹介したいと思います。

また、PCC理論は勝手に作ったもので、現実には存在しません（たぶん）。

後、最後の方に出てきたレイモンですが、話の都合上考えた名前であり、これ以降登場する事はないと思います。

では、お疲れ様でした。

PHASE-16 生きたい筈だ! (前書き)

引き続き、オーブでのお話です。

では、お付き合い頂けるのならお願い致します。

PHASE-16 生きたい筈だ！

人とは元来自分の感情を制御するのが苦手で、ストレスやらの心に負担を掛ける存在には大概弱い。

その中でも特に制御が難しいのは、恋愛に関する感情の類だ。

時に幸福を、時に淋しさを、時に怒りを、時に妬みを。喜怒哀楽全ての感情が用いられ、人の精神を本人でも抑えられない程に高めていく。

そしてここに、その心に惑わされる一人の少女が居た。

彼女が眺めているのは、先程同僚が拘束を解かれた金髪の女の子と共に入室した士官室。

地球に降下するまでは、オーブの代表とその随員が使用していた一室だ。

そんな中に親しげに、しかもシンに至ってはルナマリアでさえ見た事の無い、柔らかな笑みを浮かべていて、女の子も花のように笑いながら廊下を歩いていたのだ。

気にならない訳が無い。

それにその光景を見てから、ルナマリアの中の何かがおかしい。上手く頭と心が噛み合っていない、そんな感じ。

（何にイライラしてるのかしら？）

苛立ちを覚えるような事は、自分で思う限り起きていないと思う。

シンは養成所からの付き合いってだけだし、女の子は敵兵だったのだから知っている訳も無い。なのに何故か巻き上がる感情の渦。

そこでハタと気付く。苛立ちの原因を探るために思案し、最初に浮かんだのがシンであった事に。

「…もしかして私、妬いてる？」

声に出してみても、自分の感情は定まらなくて。

でも、デブリ帯での交戦でラグナロクが落とされたと思った時に湧き上がった悲しみは、他のどんな感情よりも深かった筈なのだ。

それがルナマリアの中でクロードの存在が大きいものだ、証明しているとは確信したのだが、シンを見てからの嫉妬も同じだけ悲しくて、深い。

自分がわからなくなっていく……。

士官室の中から笑い声が響いてくる。やっぱりそれは恋人同士特有の甘いもので、ルナマリアの心を引っ搔き回していく。

シンへの想い、クロードへの想い。どちらも同じ物のように思えて、自分の醜さが浮き彫りになっていく心地。

笑い声を聞きたくなくて、耳を塞ぐ。

これ以上ここに居たら、狂ってしまいそうだった。

瞳を閉じて駆け足でその場を離れる。何処へと言われてもわかる筈も無い。自分の部屋では鬱屈に引きこもるだけで、解決には程遠い。宛もなく、ただ走り出していたのだ。

そして何かにぶつかり、抱き締められる感覚に漸く瞳を開けてみた。目の前には、自分と同じ軍服の色である赤。レイなら顔にぶつかっている筈。なら――。

見上げた青紫の瞳が見つけたのは、柔らかな榛色。それが深い緑色との相乗効果でより優しげに見えて、ルナマリアは暫し身体を委ねてたいと思った。

だが、これは許されない事だ。迷い惑う心が自分の気持ちが定まらない事を責め立てる。

何より、優しく包み込んでくれるクロードに申し訳なく思えたのだ。

「おいおい、大丈夫か？いきなり飛び出してくるからびっくりしたぞ」

降ってくる声さえ、今のルナマリアには痛かった。

どうしたらいいのかわからず、ただ駆け出した脚が崩れる。気付けばクロードの胸を借りて泣き濡れていた。

クロードはどうしていいのかわからず、取り敢えず落ち着ける場所

を考える。

自分の部屋？ 却下だ！ルナマリアが嫌だろう。

甲板？ 今日には晴れてはいるが肌寒い。あまり良い選択ではないだろう。

(…なら)

暖かく、誰もいない解放的な場所。今の時間ならあそこがいいだろう。

暖かい空気と、観葉植物が心の保養を促してくれる。仕事に疲れたクルーの憩う場所。

そこへ隣を歩きながら肩を包み込んで、支えながらクロードは導いてくれた。

「…落ち着いたか？」

休憩室のベンチに座らせてくれて、クロードは背中を摩ってくれた。冷めていた心が温もり出した。

嗚咽はもう収まったが、冷めきっていた感情が溶け出して涙は中々止まらない。

それでもこれ以上は心配を掛けられないと思った。

「…だ、大丈夫…夫…で、す」

声に出してしまうと嗚咽は再び漏れた。そんな状態の少女を心配するな、という方が無理がある。

クロードは立ち上がり、自販機へとコインを投入する。

（落ち着くにはこれが一番だよな）

自販機が吐き出した缶を拾い上げ、クロードはルナマリアへと差し出す。

伏せていた瞳が見た物に、ルナマリアは目を丸くするのだった。

「これ…」

ルナマリアは、手元にある缶を見つめるだけで受け取ろうとしない。

クロードの顔に怪訝な表情が浮かんだ。

「あれ？ココア嫌いだったか？あの時に飲んだのって、これだったと思ったんだけど…」

差し出された缶は、確かにルナマリアが好んで飲むココアだった。ただ、吃驚したのだ。自分の好きな物を知っているクロードに。

それにあの時というのも気になった。ここで休憩している時にクロードと会った事なんて――。

「うーん、見間違ったのかな？代表の事を気にしなきゃいけなかったな…」

腕を組んで唸り出したクロードの漏らした言葉に、漸くピンときた。ユニウスセブンが安定軌道を外れて、その対処や私達がその作戦に参加するのかを話していた時の事を言っていたのだ。

ヨウランの一言が代表に火を付けてしまつて、付き添いをしていたクロードも休憩室に入つて来ていたんだつた。

あんな大変な状態でもクロードはちゃんと見ていてくれて、しかも憶えていてくれた。

それが気持ちを安らかにしてくれて、漸くルナマリアの顔に笑みが戻つてきた。

そして未だに唸っているクロードの手からココアを貰う。端から見れば引っ手繰つたようにしか見えないが、そんなの気にする必要も無い。

「ありがとう、クロード」

涙混じりだがいつもの表情を見せてくれて、クロードは安堵の息を吐き出す。ルナマリアを促して、再びベンチに腰を下ろす。

温かいココアを飲んで浮かべた笑みが、クロードの胸を跳ねさせる。ルナマリアの顔から瞳が離せない。

そんなクロードを見て、今度はルナマリアが怪訝な顔をする番だつた。

「どうしたの？ 顔に何かついてる？」

バツと顔を逸らす。多分顔が赤いが気にしない。こんな事、正直に言える筈もない。

「いや、やっぱりルナマリアには笑顔が似合うと思って――」

（…待て。俺は今何て言ったんだ!?!）

時間が凍った気がした。自分の言った事を思い返したくない。間違はなく恥ずかしくなって、首を吊りたくなること請け合いだ。

やけに隣が静かなのが気になった。またあとか、からかってとか、そんな軽い受け取り方をしてくれれば、この空気を変えるのも簡単なのに。

ギリギリと固まった身体をルナマリアへと向ける。少し下へと傾けられた顔のせいで表情が窺えなかった。

「……そう?」

やられた、とクロードは観念する事になった。

少し上気した頬とか、恥ずかしそうに俯く仕種とか、ココアの缶を両手で包んでちびちび飲む姿とか。

とにかく、胸の高鳴りが煩くてしょうがない。

抑える方法も自分には無くて、顔を真っ赤にして隣に居る少女から目を背けるしかなかった。

妙な沈黙が流れる。聞こえてくるのは、外装を修理している音とコアを飲み込む喉鳴りだけだ。

夕焼けが外から差し込み、部屋中を赤く染めていく。窓の外を眺めると、暮れていく夕日が海に半分沈んでいた。

「そう言えば、昔は太陽が海に沈むのを見て、何で火が消えないんだろうって思ってたな」

「あつ、私も思ってた。それをお父さんに聞いても、良くわかんない事言われただけだったし」

嬉しそうに昔の話をするルナマリアが羨ましかった。

昔を思い出すと、一番最初に浮かんでくるのはあの飛行機事故で。

身を呈して守ってくれた父親の最期の姿が鮮明に映し出されてしまふのだ。

「クロードのお父さん、お母さんってどんな人なの？」

ルナマリアからすれば、ただ興味が湧いたから聞いてみただけであつた。

なのに、目の前のクロードの表情が暗く、そして歪んでいく。そう言えばメイリンが飛行機事故に遭った、と言っていたのを今更思ひ出す。

「……聞いちゃいけない事だった…？」

恐る恐る問い掛けてみる。発せられた言葉が少し震えていたのを気にする余裕は、今のルナマリアにはなかった。

「…いや、そんな事無いよ」

弱々しい笑みを見せて、クロードは天井を仰いだ。まるで冥福を祈るような体勢に見えて、ルナマリアの予感確信へと変わった。

「…父さんは飛行機事故で三年前に。母さんは声すら知らないんだ。小さい頃に病気で死んだって父さんから聞いている。ただ、写真はあ
るんだ」

思い出と言えるのは母さんが残してくれた、ロケット付きのペンダント。それを胸元から取り出し開いてみせる。

若い二人の男女の切り抜きが収められていて、幸せそうに微笑んでいる。

「良い写真ね…。まるで結ばれた事がこの上ない幸せって感じで」

「俺もそう思うんだ。お前はちゃんと愛されて生まれてきたという、証明みたいなものなのかもなって」

愛という言葉がルナマリアにのしかかる。先程までの心の寒さが蘇る気配がした。

「だけど、母さんは父さんの他にも結婚を考えた人がいたらしいんだ」

「えっ…?」

どういう偶然なのだろうか。今の自分の心境とぴったり合うような話だ。

凍てつき始めていた心が、その状態で滞った。

「訳までは聞けなかったけど、父さんは母さんに好きにしろって言ってたんだ」

「：どうしてなの？それって浮気みたいなものでしょ？」

普通なら許されないことだろう。誰だって、好きな人には自分だけを愛して欲しいし、愛して欲しいと思う。

クロードのお父さんの考え方は稀過ぎる。本当に奥さんを愛していたのだろうか？

「まあ、ね。俺も最初は、母さんの事を本気で考えてないんじゃないかないかと思ったんだ。だけど違ったんだ」

立ちがって窓際まで歩く。夕焼けは少しずつ紫色に塗り潰されて、夜の帳が降りようとしていた。

「父さんは母さんにこう言ってたんだ。《お前の気持ちに決着がついてないなら、俺はお前と結ばれても嬉しくない》ってね」

解釈の仕方が違えばただの我が儘にとも受け取れるが、写真と合わせて見れば、信じていたからこそその英断ともとれる。

答えは当の本人しか知らない訳だが、ルナマリアは深い愛情を感じ

ていた。

二人の間で揺れ動いているからこそ少し距離を置いて、自分が本当に大切に思える相手を見極めさせる。それで他の男を選ぶなら、潔く身を引く。簡単な事ではない。

そして信じられる方も、容易な考えで選択出来るようなものではなく。懸命に懸命を重ねた決断が、二人の恋人を納得させるために必要だ。

自分の気持ちはそんなに重い物ではないが、誰かを一人に絞り切るのは簡単でないことは共感できた。

そして、少し自分の気持ちを理解できたような気がした。

「父さんも思い切った事をする、子供心ながらに思ったよ」

振り返ったクロードの瞳に映ったのは、再び涙を零すルナマリアだった。

だが、先程までの悲壮感はない。寧ろ何かを吹っ切り、決意したかのような表情だ。

「…もう大丈夫みたいだな」

「…はい。お蔭さまで」

外では夕陽が水平線へと消え、下から上へ紫のグラデーションが掛かっていた。今の自分の気持ち例えるなら、こんな感じになっていたのかな、とルナマリアは変わりゆくものを受け入れていた。

長い。艦長室へ向かうだけなのに、こんなに足取りが重く感じられたのは初めてだった。

勿論それには理由があった。どうしても艦長に上訴しなければならない事が、レイの中にはあった。あの少女の事で。

境遇が似ている同士が引き合うというのは、やはり本当のようだ。

養成所で初めてシンと会った時、自分と同じ物を感じたのだ。許してはならない物があり、討ち倒さなければならぬ存在があると。

あの存在が馬鹿な人間を思い上がらせ、生まれずに済んだ不幸な者を戦いの渦へと巻き込んでいった。

業深き者達に思い知らせるためにも、やらねばならないのだ。

そしてあの少女との共通点は、特にレイを苦しめている自分という命に関しての問題であった。

少女の力が造られたというのなら、レイは全てを造られたと言っても過言ではない。

境遇の似た者だからこそ、生きているより死ぬ事ではなく、生き抜く事が大切だと思うのだ。

永遠と続くような廊下をやっとの思いで踏破した。ちょっと大袈裟だが気にしない。レイにとってはそれ程に重い意味を持っている。

「…艦長、お時間大丈夫でしょうか？」

『ええ、大丈夫よ』

扉を潜り、中へ入ると机に座るタリアと隣に立ち、一緒に地図を眺めているアーサーも居た。大方、最寄りの基地への移動ルートの確認をしていたのだろう。

レイは敬礼を象り、入口で二人を見遣る。タリアが手を上げてくれたのを見て、手を横に付けて背筋を伸ばす。所謂、気を付けの姿勢だ。

「どうしたの、レイ？あなたが訪ねてくるなんて珍しいじゃない？」

タリアから見ても、規律を重んじ、普段から真面目なレイだ。呼び出しをする事も無く、報告も艦橋に居る時にしてくれている。

一人になれる時間をくれる、本当に気が利く子供なのだ。

「…はい。あの少女の件でお話が」

「少女って…、あのガイアに乗っていた娘のことかい？」

不思議そうな顔を、アーサーは浮かべる。一般兵である自分達が、あの捕虜に関して言及する事は許されない。

敵の技術を解明するための貴重な存在だ。上層部からの命令でエクステンデッドと断定できたら、オーブのマスドライバーを使用して本国へと届けろとの御達示をさっき貰ったのだ。

まだこの事を皆に伝えていない筈なのにレイの顔を見ると、もう知っているようで、それを止めに來た気配がした。

「はい。あの娘を殺さないで欲しいのです」

はっきりと告げられた言葉は重みを伴って、二人の心を押し潰す。

あの娘が本国に送られる＝死、というのは誰が考えても明らかだ。良ければ死刑、最悪の場合、実験動物のように命を弄ばれる事も考えられる。

それを止めようとするレイの言葉は、大人になってしまった二人の気持ちを深く沈ませた。

それでも現実には情け容赦無く、落ち込む暇さえ与えてくれないのだ。

「レイ、軍に籍を置く限り、こんな事は日常茶飯事なの。敵兵を捕まえたとしたら、情報を引き出す以外に利用価値は無いのよ」

知っている事を吐かない場合、どんな鬼畜な仕打ちをしても良いと上層部は言う。

その光景は正に地獄と例えるしかない。拷問が終わった後の身体には、切り刻まれた皮膚の傷、くり抜かれた片目、削ぎ落とされた耳、そして斬り落とされた指達。夥しい出血を伴い、生臭く目眩を覚えるような空間に包み込まれる。

艦を統べる者、それに準ずる者はその現場に立ち合わされ、それを強要されるのだ。

震えながら、その目をくり抜いた感触と絶叫を、タリアは未だに忘れられなかった。

「しかし！まだ幼い分、利用価値はそれだけでは――」

「そんな訳にはいかないんだ。自分達を危険に晒さないためにもね」
言い募るレイに割り込んだのはアーサーだった。何時に無く真面目な表情を作った彼は、レイの前へと歩む。

「考えてもみろ。敵兵を殺さずに軟禁したとして、見張りを殺害して逃走する事になれば、捕まえた側は大混乱に陥る。
それだけなら良い、そこから被害が広がれば失う筈のなかったものまで無くすんだ」

レイは俯く。わかっているんだ、二人の言っている事が正しい事だ
って。

だけど、正しいからって誰かが幸せになると言うのか？
人が死んでいくのが、悲しいと感じられなくなっていくのは幸せだとでも言うのか！？

「酷かもしれないけど、自分達が居るのは、悪く言えば殺しあつて憎み合う世界なんだ。情けがお礼で返ってはこないような所――」

「だが！生まれたからには生きたい筈だ！」

アーサーを真っ直ぐに貫く瞳からは、深い悲しみが読み取れた。

深い悲しみは姿を変容させ、やるせない憤怒へと移りゆく。

「生きるからこそ何かを得られるんだ。死んでしまえば、何も感じられない、何も考えられない」

人間として、踏み越えてはならない物を無視して造り出されてしまった彼女。その責任は頭の悪い連中にある、彼女に罪は無い筈だ。

人外な能力を植え付けられた事が罪だとしたら、俺は存在自体が罪だ。

たくさんの同じ命の失敗の上に立っている。それでも完全ではないのだ。

発達した科学は、どうしてもこんなにも罪を塗りたくるのか？

不幸な存在を産み落としても、平然とまた新たな不幸を生み出していく。

それが世界の発展のため？ 知の探究？

…ふざけるな。

「だから生きなきゃならないんだ！…ただの人として、生き抜かなきゃいけないんだ！」

普通の人と同じように生きられないのは、痛い程にわかってはいる。だからか、レイの瞳からは小さな雫が零れていて、二人を神妙にさせるには十分だった。

「…………ふう…」

タリアは一度息をつく。気持ちを落ち着けたかったのだ。アーサーと共に説いた正論は、あまりにもレイの心を引き裂いてしまったように、指導者としては最低な事だと思う。

「…わかったわ。少し時間を頂戴。上への報告の仕方を考えてみるわ」

まだ少女がエクステンデッドと決まった訳ではないが、もしもの時のために対策は講じておくべきだ。

タリアもみすみす殺したくはないのだ。シンの心を解してくれたあの少女を。

「…あ、ありがとうございます！」

涙に濡れた瞳を明るくして、レイは頭を下げた。その様は本当に子供で、未だ年端もいかない少年である事を今更ながらに思い出した。

「但し、これだけは覚えておいて」

顔を上げ、タリアの瞳を見れば中々に厳しい表情である事に不安が現れる。

レイはあまり見た事のない顔だった。

「私達が言った事は、こんな争い事の絶えない世界の基本よ。人が死ぬのを悲しめるのは大切な事だけど、それに囚われちゃいけない。

「わかるわね？」

「…はい」

「よろしい、下がちなさい」

敬礼を一つ。そしてレイは退室していった。大きな溜息が自然と外へ出た。

「良いんですか？あんな事言っ…」

上への報告を改竄すれば、ミネルバは不正を働いたとして追求されるだろう。間違はなく、タリアは刑に服すし、アーサーだって無事では済まない。

「…しようがないでしょ？子供をあんなに追い込む事を良しとできる程、落ちぶれちゃいないつもりなんだから」

大人の対応としては間違っているだろう。

本来なら出来ない事は出来ないと教えてやらなきゃ、子供はいつまでたっても世界の仕組みを理解できない。

だが、諦める事だけを教えるのはもっと間違っていると思うのだ。

目上の者に歯向かうな、命令は絶対だ、権力者の言う事は決して間違っていない。そんな思想じみた教えを尊重するのが、軍人としての責務である。

一応、個人の権利を守る法規は存在するが、文章だけで効力なんて

物はない。正に絵に描いた餅なのだ。

だからといって、これからの未来を生きる子達から考える事を奪うような軍人ではありたくない。尊重されるべき主張も、反論も踏み潰して、正しさだけを振りかざすのは、上で踏ん返り返る輩だけではない。

実際に戦場を駆け抜けていかなければならないのだから、理屈だけを信じていては、いつか大きな落とし穴が待っているだろう。

それに落ちないためにも、子供達を落とさないためにも、落ちぶれてはいけないのだ。

「…それもそうですね。上の命令に忠実なのは確かに美德ですけど、反面考える事を放棄しているとも取れる」

珍しく真面目な顔を見せたアーサーが、今度は神妙に考え事を始めたのだった。何か薄気味悪い。

「まあ、軍人の自分達が考えても仕方ないですね。哲学じみてますし」

今度は哲学ときたか。段々とアーサーが二重人格者のようにタリアは感じ始めていて、多分露骨に顔に出ていたのだろう。

「…艦長、今失礼な事を考えていたでしょ」

咎めるような瞳でアーサーはタリアを睨む。居た堪れなくなり視線を明後日へと逸らしたのだが。その行動でバレバレなのに、ちよっとしてから気付いた。

「まあ、良いですけど。取り敢えず、自分は艦長に着いていきますよ」

また急に真剣に戻る。普段からこうしていれば、もっと早くから信頼のおける副官だと思えたのだが。

「…ありがとう。でもあなたが間違ってると思った時は言うのよ。それも副官の大事な仕事なんだから」

持ちつ、持たれつ。連携を大切にこそ、真の絆が生まれる。

「わかりました！」

「な、何だって！？本気で言っているのか！お前達は！」

オーブ議会の最高峰、閣議場に少女の怒号と戸惑い混じりの声色が響く。他の議員達は一様に閉口し、宰相であるウナト・ロマへと視線を送る。

「勿論、本気でございます。我々は理念の前に国を守らねばなりません」

カガリの顔に悔しさが浮かぶ。やはり離れるべきではなかったのだ、と無理矢理に覚らされた気分。

議員達を信用し過ぎたのか、それともウナト・ロマの力を見縊っていたのか。

とにかく、自分の愚かさが恨めしい。あの時に浮かんだ、甘酸っぱい思いを。

そんなカガリの様子を確認してウナトはほくそ笑む。そして、小娘にとって重々しい意味を持つ言葉を放つ。

「オーブは大西洋連邦へと組みします。これは議員の総意である」

（総意だと！？）

見え見えの建前だ。間違いなくウナトは自分の地位を利用して、議員を傀儡したに決まっている。

そうでなければ、私から瞳を逸らす議員が居るのが説明をつけられない。

「お前達はこれがどういう意味か、わかっているのか！？
連邦が企んでいる事がわからない訳ではないだらろ！？」

プラントを降す事しか考えていない連邦だ。今回のユニウスセブンの件が起きてしまい、宣戦布告の礎が築かれてしまった。

ザフトの必死な破碎作業も殆ど無駄である事は、地球に住むカガリが一番わかっていた。

それでも人が死に過ぎるあの事態を、指をくわえて見ている事なんて出来なかった。

デュランダルへと直訴した時、カガリは気付いていたのだ。

議長もそれをわかっていると。

ただ無闇に沢山の人が命を亡くしていくのを、同様に許せなかったとカガリは思っている。

そして、世界を憂いての行動であった筈最終手段。その光景さえ開戦への糸口にされてしまったのだ。

ラグナロクという存在が。

「代表もミネルバに乗っておられたのならお気付きでしょう。あのラグナロクというMSが、地球にどれだけの恐怖を与えたかを」

ミネルバの艦橋から見たあの映像。未だ碎けきっていない隕石群を撃ち込まれた閃光は、大きさ等関係無く呑み込み、跡形もなく消滅させていた。文字通り、呑み込まれた物は塵一つ残さずに。

恐怖で足が震えた。がくがくと身体が揺れる心地さえしたのだ。

だが、不安の大きさは変わらなかった。乗っている人物の人柄に触れ、闇雲に力を奮いたくてあの兵器を持っている訳では無いと思えるのだ。

「…確かに怖かった。あれが地球を焼き尽くす場面さえ想像できた。だが、ラグナロクとニブルヘイムがなければ、地球は復讐の炎に沈んでいた。私達だけでも、この惑星を救ってくれたザフトに感謝せずにはどうするというのだ！」

第一、地球側はユニウスセブンをどうにかしようとしなかったではないか！」

「それは対応が遅れただけでしよう。安定軌道を辿っていた筈の物が、突然落下してくるなんて思わぬでしょう」

そのまさかで地球は滅びの一手手前の危機に瀕していたなんて、どんな笑い種なのだろう。

地球に存在する国家のくせに、自分達に降り懸かるかもしれない火の粉を払うのに、守るべき民を盾にするようなものだ。

「馬鹿にしているのか？そんな建前、誰が信じると思う！

どうせ碌な事にならない考えでもあったのだろう。あいつらの母体はロゴスなのだからな」

「カガリ、そこまでだ。この場にその名前を出すのはマナー違反だよ」

斜め右前で傍観していたユウナが立ち上がる。そして耳元へと口を寄せて、こう言ったのだ。

「…あまり彼らを嘗めない方がいい。この会議場に潜んでいるかもしれないんだよ？」

やたら顔が近いのを置いて、ユウナの言葉には説得力があって、カガリも口を噤むしかなかった。

それに満足したように薄く笑みを浮かべて、父親を一瞥する。

ウナトの眼鏡が妖しく光った。

「代表の発言からは臍履を感じざるを得ない。まるでプラントに組

みして、地球上にあるこの国を孤立させようとしていると思える節がある」

「どう解釈すればそうなるのだ！？私はただ、父上が守り抜いた理念を――」

「ほう？あなたは国民の安全より、父親の意思を尊重するというのですね？

大戦時のように、オーブを焼くのも致し方ない」と

ハツとする。浮かんできたのは、ミネルバであった紅い紅い瞳を復讐に染めた少年。

シンが叫んだ言葉が、今宰相であるウナトから紡がれた。大きくカガリの心がぐらつく。

「そ、そうは言って無い。…理念は民を守るためのものであって、それを侵せばこの国は前より大きな戦火に見舞われる」

苦しい言い訳のような響きだった。だが、これはカガリの本心であり、彼女の信ずる依り代のようなものだ。

しかし、それも粉々に碎け散る羽目になる。

「ならオノゴロを落とされて、あなたを逃がしたウズミ氏は良き為政者とは言えないですな。理念を優先するという閣議をひっくり返せずに、オーブを戦場にしたのだから」

「何！！？」

腸が煮え繰り返ると同時だった。カガリはウナトの胸倉を掴み、締め上げていた。

「お父様を…お父様を悪く言うな!! お前達に何がわかるというのだ!? あの時の悲しそうな顔を憶えていない、とでも宣うつもりか!?!」

ぎりぎりとなつていく力。カガリにとっての父親は、アスランと同じ重みを持つ言葉であつた。

為政者としてウズミ・ナラを知っている筈のウナトが、カガリの揚げ足を取るためとはいえ、あの閣議を引き合いに出すなんて。

「…お前達があの時言つたのは何だ。理念を守るべきだと言つたのは、お前達の方じゃないのか!?!」

更に強くなる力にウナトとの表情が歪む。戦場を生きた事もある彼女の力は並ではない。大の大人でも敵わないぐらいなのだから、老体のウナトでは振りほどく事も儘ならない。

「カ、カガリ! それ以上やったら死んでしまう!」

一生懸命に割り込もうとするユウナであるが、哀しい哉、腕力でカガリを御せる訳もなく。

その間にもカガリの瞳は鋭さを増す。

「地位や保身ばかり考えて、降伏を嫌がつたお前が時間が経つた後に、そうやって侮辱するのを私は許せない!」

「いい加減にしろ！誰か、誰か手を貸すんだ！」

そう呼び掛けても、乗り気な者等居ない。議員にとってもウナトの物言いは気に食わない事ばかりだった。

大戦時からの閣僚でさえ、彼の意見には首を傾げるしかなかったのだから、この場に居る者がウナトへ手を貸すなんて御免だった。

「…へえ。良いのかい、君達の立場がわかっていないって判断して」
背筋の凍るような戦慄が、言の葉となって襲ってくる。

閣僚総出でカガリの滾る怒りからウナトを救い出す。何とも言えない、薄汚い気持ち心が占めていた。

そして会議は小休止と相成った。あんな状態で続けても、ただの喧嘩になるだけで議論とは程遠いものになるのは明白だった。

それにしても、カガリの行動は傍から見れば悪い事に見えやしないが、彼女は為政者なのだ。それも宰相であるウナトへと暴行を働いた。

これが、この先どういった結末に行き着くのか、議員達は不安で仕方無かった。

PHASE-16 生きたい筈だ！（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

今回の最初のルナマリアとクロードの絡みは、結構苦勞しました。多分ルナマリアの心の無意識な所では、シンの事を好いていて、でも頭では養成所からの付き合いだからと、心に無理矢理理由をつけていたら、ステラという存在が現れて。

そこでクロードへの思いも確かな筈だと悩み、板挟みになる彼女を描きたかったのですが……残念な結果になっているような気がします。いつかりベンジしたいです！

それでは、お疲れ様でした。

PHASE-17 期待した私が馬鹿だった（前書き）

漸くオリキャラ二人目が本格的に登場します。苦手な方はお戻り頂く事を推奨致します。

大丈夫だ、という方はお付き合いお願い致します。

PHASE-17 期待した私が馬鹿だった

暗闇の空間。煌めく星々だけがその彩りを担い、神秘的な雰囲気を漂わす。

心に余裕が無ければ、そんな光景にも何も感じれずにただただその心に喰われてしまう。感情も精神も。眺めれば広がっていく感動が、余裕を与えてくれるかもしれないのに。

その点では、ミネルバのクルーは不幸と言えるのかもしれない。戦闘に次ぐ戦闘で、力を奮う事を余儀なくされた心の余裕の無さが、彼らの精神を追い詰めて冷たい金属のような感情を齎されてしまった。

（クロードも大概不幸だな…）

余裕だけでなく、破碎作業の責任を自分のせいだと追い詰めてニブルヘイムを解き放つ事になったのだ。

三年間と長くない付き合いだが、あいつの本質はわかりやすくて、悟られにくい。

上辺のわかりやすさで、奥底の難しさを隠していく。そして自分を追い詰めてしまう。

（そろそろ危ないかもな）

シャトルの窓際で散りばめられた星の海を眺めて頬杖を付く女性が居た。その窓に映っている自分が憂鬱そうに、気怠そうにしている

のに気付き苦笑が漏れた。

これからの事を考えれば仕方ないかもしれない。溜め込み過ぎたストレスやフラストレーションが爆発すれば、普段を知らない奴らでは対処しきれない。

何をすれば落ち着くのか、何を求めているのか、何がそうしたのか。わかりたくても、内面を気取られないようにしているあいつを宥める奴は、多分ミネルバには居ないだろう。

深い溜息を一つ。考えれば考える程に面倒になっていく。だが、面倒がってもいられないのだ。

「…救いたいものもあるしな」

落とされた呟きは使命感に満ちていて、覚悟の強さと固さが滲み出ていた。

「先生、もうすぐでオーブに着きます。下船準備をお願いします」

緑服の一兵卒が敬礼と共に座席の横に現れた。少々緊張しているのが手に取るようにわかり、クスッと微笑が漏れた。

「わかった。ありがとう」

「は、はいっ！」

緊張なんて可愛いぐらいにガチガチに固まってしまった一兵卒。女性の艶やかな容姿のせいであろうが、流石にこれだけ目に見えてしまふとからかいたくもなる。

「ねえ、着替えたんだけど」

「…えっ？」

呆けて口を開けてしまった。からかい甲斐があり過ぎて、笑みが深くなる。

「着替えたいのよ。それとも一緒に着替える？」

妖艶な瞳と仕種、そして表情で言われてしまえば赤面して飛び出すしかなかった。

ふふつと笑い声を漏らし、再び窓際に頬杖を付いた。目の前に浮かぶ青い青い地球を見つめてみた。

因果が絡み合い、復讐と憎悪が溢れ返るあの地を。それを生み出すために造られ続ける、罪を背負わされる命の灯を吹き消させないためにも。

「救ってみせる…」

彼女は誓いを立てたあの日、あの場所を思い出していた。

会議室の外、二階のスペースには休むためのベンチと灰皿が置かれている。会議に息詰まったり、気を取り直したり、自分の意見が通らない憤りを煙草の紫煙と共に吐き出したり。

そんな憩いを求める者と鬱屈とした思いを抱える者が集う場所の筈

に、今はたったの二人。

金髪の少女はこの壁に染み付いた臭いに相応しく、ベンチに座り腿に肘を添えて俯いてしまっていた。先程、会議場で見せてしまった失敗を悔やんでいるのだ。

その横に立つのは薄く笑みを張り付けた青年。この場にあまりにも不釣り合いな表情で、隣で項垂れるカガリを見下ろして父のようにほくそ笑むのだった。

「大丈夫かい？ カガリ」

優しく語り掛ける。上辺の愛情を込めておく事も忘れない。形だけとはいえ、自分の元へと嫁いでくる娘だ。優しくしておいて損はない。

それにカガリの中に醜く蔓延る、あの軍人崩れの悔しがる表情を見れる喜びと共に、その存在をカガリの中から少しずつ消していければ、それだけでも自分の中に蠢く、気持ちの悪い感情を清算できるだろうと思うのだ。

「確かに父の言い方には配慮が足りなかったのは事実だけど、手を出してしまっただけは君への信憑より父への労りが優先されてしまう」

言外に為政者としてやってはいけない事だと含ませた。これだけでも、思い詰め易いカガリには効き目絶大だろう。

「……わかって、いるさ。だけどあの言い種だけは許せない。お父様を悪く言うだけでなく、自分の行動を顧みてないのが目に見えてしまっただけ……」

父を侮辱するだけだったら、まだ我慢をする事が出来ただろうと思う。オーブを焼かれたあの時に、為政者として失格だと父は言っているような気がしたから。

だが、責任追及から逃れるために理念を優先する旨は、議員の満場一致で決まった筈。

背負うべき事を棚に上げてのあの発言には、血が沸騰する心地がした。あのまま議員達が動かなければ、あの激情のままウナトを締め殺していても不思議ではなかった。

その点ではユウナの行動に感謝している。

「だけど君達が脱出したあの後、オーブは大変だったんだよ？戦争責任は、亡くなったウズミ氏が引き受けてくれたお陰で議員達が裁かれる事はなかったけど、国民からの非難と地球連合からの要求で板挟みにされて、父も処理に大変だったんだ。

文句の一つも言いたくなるさ」

隣に立っていたユウナは語りながら正面に移動していた。

俯けていた顔を上げると、目の前には口元があって、流石のカガリにも堪えてしまい身体を引いた。しかしユウナもそれに追隨して、顔を近付けてくるので性が悪い。

「だけど憶えておいて。僕は君の味方さ」

「あ、ああ…」

そんな訳も無い事は承知しているが、カガリは上辺だけの返事をし

ていた。

邪険にしないのは大人のマナーだし、それ以上に危険を孕んでしま
う気がするのだ。

彼女が頷いたのを満足げに見送って、ユウナは振り向いた。そして
会議室の中へと戻ろうと歩き出す。少し重みを感じる扉を開くと、
中に詰められていた湿気の籠った空気が流れ出る。少し不快に思っ
たが、構わずにいつも通りに中へと入る。

そこには数人の議員と父親が居て、何人かが振り返ってユウナを確
認する。

「遅かったな」

ウナトは振り返らずに窓際から外を眺めている。何を考えているか
なんて、ユウナには手に取るようにわかってしまう。

「済みません。お姫様のご機嫌窺いも苦勞するんですよ？」

苦笑を張り付けた顔で肩を竦める。それをガラスの反射で見ている
であろうウナトは、大きく舌打ちをした。

「ふん、何が姫だ。あんなものは只の飾りに過ぎぬのに、余計な知
恵をつけおって！」

不機嫌を含められた言葉は辛辣で、カガリの考え方を真っ向から否
定するものだった。

締め上げられた事を加味しても、流石に言い過ぎな感が否めない。

「そう言わないであげて下さい。カガリもカガリなりに世界を考えているのですから」

ユウナは引き続き肩を竦めた。彼女の考え方全てを知っている訳ではないが、完全否定するまでに現実を見ていない訳ではない。

根底にある黒く蠢く思惑を、断片的に気付いているからこそその言動のような気がするのだ。

「考えた所で、所詮は浅知恵。世界を動かしているものの本質も計れぬ愚か者よ」

「…そうですね。世界の安定に最も必要な事を理解していないでしょう」

ユウナは他の者達に目を移す。皆一様にウナトの発言に頷くだけで、正直吐き気がする。

そして内心で舌打ちを盛大に鳴らしながら、その輪の中へ入っていく。

胸の中に持つてはいけない感情を抱きながら。

夜の闇を塗り潰すように朝日が昇る。人間はそれと同時に活動を始め、それが沈むと同時に身体を休めてきた。

科学が発達する前は間違はなくそうやって暮らしてきた筈なのに、電気が発明されてからの目覚ましい進化のせいで、人間は夜さえも

働く事になったのだ。

(ふぁゝっ…。眠い…)

メイリンは大きな欠伸を、手で押さえて噛み殺した。

管制官は二日置きに夜勤が待っている。本来なら四人でローテーションを回す筈なのだが、ミネルバにはメイリンとマリクしか管制官が居ない。

お陰で夜休む事さえ儘ならず、昼は仮眠すらも許されない程に切迫した人員不足なのだ。

その模様に心を痛めてくれたのがクロードで、補充の管制官がやって来るまで二人の間の夜勤を買って出てくれたのだ。

(ほんと、優しい人よね)

気分が盛り上がってくる。不思議とタイピングも軽くなるというものだ。

そして呼び出したのはクロードの個人情報。流石に証明写真では詰め襟を一番上まで閉めていて、新鮮な雰囲気纏っている。

「何にやにやしてるの？ 気味悪いわよ、メイリン」

「きゃ！」

いきなり後ろから降ってきた声に、流石に驚きを隠せなくて小さな悲鳴が漏れた。

振り向くと、さも悪戯を成功させて喜んでいる悪ガキのような笑顔の姉が居て、一気に脱力していく。

「お姉ちゃんか……。もう！びっくりさせないでよー」

頬を膨らます妹を見て、更におもしろく感じるルナマリア。勿論、悪びれるつもりなどこれっぽっちも無い。

「ごめん、ごめん」

誰が見ても謝っているように見えなくて、メイリンは全然面白くない。

姉の笑顔が恨めしくて、でも何も反撃を思いつかなくて、そのまま前の画面を眺める事にしたのだが、クロードの情報を開いていた事に気付いて、慌てて画面を閉じようとした。

「……あ！メイリン、またやってるー」

その焦り様が姉にはわかり易かった。身体を捻る要領でメイリンとパソコンの間に割り込むと、映し出されていた物に小さな驚きと、間違いなさそうもない確信を覚えた。

（ああ、この子もそうなんだなあ）

薄々わかっていた事だけに、大きく動揺せずに済んだがこれはどんな因果なのか、と問い掛けてみたくなった。

姉妹で同時に同じ人を好きになるなんて、何処かのドラマぐらいでしか観たことがない。そんな世界に立たされているのだ、今ここで。

「良いでしょ、別に。お姉ちゃんには関係ない事よ」

むくれたままキーボードを叩いて、クロードの情報を更に引き出していく。

こんな簡単にハッキングをしてその痕跡を残さないなんて、我が妹ながらに末恐ろしい。そしてメイリンは好きなもの以外で、ハッキングをしたりしないのだ。

妹だけに、その想いが確かである事に気付いてしまう事が複雑だ。

「関係ない、ね」

ルナマリアは後ろに立ったまま呟く。その節に何かが含まれているようで、思わずメイリンは手を止めて姉を見上げた。

「メイリン、あんたクロードの事好きでしょ？」

臆面もせずにそんな事を言う姉が恥ずかしいのと、気取られてしまった事が迂闊過ぎて、メイリンの頬に紅が乗る。

真っ直ぐに見下ろしてくる視線が、メイリンの瞳を捉えて離さない。逸らしたい筈なのに、どうしても姉の瞳が許してくれなかった。

「そ、そんな訳ないでしょ！ あんな良い人に彼女が居ないとは思えないし」

とにかく言い訳を試みる。だが姉の事だからそれさえも見抜いているようで、居心地が悪かった。

漸く視線を外せて、安堵の溜息を吐き出した。だが、そんなのは束の間だった。

「私は好きよ、クロードの事」

トクンと心臓が悲鳴を上げた。再び姉の顔を見上げると、今度こそ瞳を動かせなくなった。

「えっ…？お姉ちゃん…？」

否定しようと頭を巡らすが、いい考えは全然浮かんでこなくて。壊れた人形のように、ただ口を開けている事しかできなかった。

そんな妹を構わずに姉は静かに移動して、艦長席で脚を組んだ。

計器類の放つ光がルナマリアの表情を鮮明にする。

「メイリンはどうなの？」

「……………」

沈黙が流れていく。二人の間に言葉はなく、ただお互いに見詰めあっているだけ。

それでも伝わったり、わかったりする事がある。癖だって姉妹なんだから、一通り知っているのだ。

「好き、なんでしょ」

確信がある。仕種も表情も、見慣れたメイリンだからこそその確信が。恋する少女特有の甘い雰囲気もその要因にしている。

とにかく、自身の口から聞きたいのだ。クロードをどう思っているのかを。

好きだ、という言葉を。

「…お、姉ちゃん。私は…」

重く閉ざされていた口が開き始める。その声が奏でるのは正直な答えか、それとも強がりの嘘か。

「クロードさんの…事、」

落とされていく言葉、途切れて聞こえてくるメイリンの声。その全てが彼女の心境を表していた。

「…好、き」

それは確かな響きを持って、ルナマリアの耳に届く。そして立ち上がり、メイリンの傍へもう一度歩み寄った。

メイリンの中の何かが漸く吹っ切れた。キッと目線と眉を上げて、挑むような瞳を姉へと向けた。

「私はクロードさんが好き！相手がお姉ちゃんだからって、諦めたりしないから！」

立場は違うし、一緒の戦場に立てる姉には及ばないかもしれない。

それでもこの想いをそのままには出来ない、と心が告げる。

「良し！これで私達はライバルって事ね。姉妹どちらがクロードを射止めるか、勝負よ！」

クロードが他の女性を好きになるかもしれない事を考慮しない辺り、ルナマリアらしさが出ていて、メイリンは思わず苦笑していた。

まあ、姉らしさ全開で良い事だとは思うのだが。

「…何よ。なんか変な事言った？」

「ううん、お姉ちゃんはお姉ちゃんだなんて思っ

て？マークを頭に浮かべる姉を放って、メイリンはパソコンの画面を見遣る。するとタイミングを見計らったように、通信を告げる着信音が鳴ったのだった。

『クロード特務兵、クロード特務兵。至急、艦橋へお越し下さい。繰り返します――』

突然闖入してきた声で、クロードの脳は覚醒する。目覚めは悪くなく、カーテンを開けると柔らかな朝日が部屋中を包み込んでくれた。鏡を見てみると、寝癖が跳ねている自分が映っていた。呼び出しの艦内放送になったというのに、寝癖が気になってしまい濡らしてみる。

元々の弱い癖毛のせいで、髪形がいつもと違うが気にする事も無い。

クロードは部屋を飛び出し、艦橋へと全速で駆け抜けた。それにしてもあんな艦橋放送があったというのに、誰も起きていない事に疑問を感じた。

艦橋への扉を開ける。中に居るのは夜勤のメイリンだけかと思いきや、姉のルナマリアまで居て少し驚いた。

「メイリン、どうした!」

艦内放送を使う程の大事だ、声が大きくなるのも致し方ない。その声に振り返った二人は固まってしまいう事になる。

クロードにとっては只濡らして寝癖を取っただけなのだが、他の人から言わせればそうは見えない。特にこの二人には。

濡れて艶を纏った深緑の髪。ゆるくウェーブがかかり、それが顔を覆って綺麗な顔立ちが余計に際立っていた。

(ヤバいわね…)(クロードさん、イメチェンかな)

「ん? 姉妹揃って黙ってちゃ状況がわからないんだが?」

そこでメイリンは漸く報告をしていない事に思い至る。だが、これも報告を入れるべきかどうか悩んだのだ。

「す、すみません。ですが、ちょっとおかしいんです」

「おかしい?」

「はい。ザフト所属のシャトルからの入電なのですが、聞き取り難い音声とそれに加えてクロードさん呼び出せ、とそれだけを」

確かに妙だ。普通なら艦の責任者であるタリアを呼び出す筈。特務隊であるクロードを呼び出す事も無い訳では無いが、途切れた音声が見事に不審だ。

「メイリン、インカムを借りるよ」

間近に迫り、両側にある手と目の前にある顔にドキリとする。顔に血が集中して、熱くなっていくのがわかる。

そんなメイリンを余所に、クロードはさっさとインカムを着けていた。

確かに、流れてきたのは途切れ途切れと言わざるを得ない、意味不明な通信だった。

だが、クロードはそれを知っている。誰が、何の為に、そして何を考へての隠したいが為の揺れる入電かを。

クロードは発信源に向け、二人には理解不能な言葉を唱え始めた。

「カスルラ、ダブウヨジイダウモ。イイテシガナフンシウツニウツフ」

理解不能な上に早口で、二人には聞き取れもしなかった。そもそもこの世界に存在する言語なのだろうか。

「…全く。用心深いのは良いが、あんまり回りくどいと誰も気付い

てくれないぞ？」

訳がわからなくて困惑する二人にも、やっと理解出来る言葉が聞けて安心したのか、ホッと溜息を吐き出したていた。

「誰からのの？」

通信相手を言ってもいいのだが、余り知らせるべきではないかと思う。

彼女の事を前もって知っていたのは、あまり良い先入観を得られないし、クロード自体にも危害が及ぶ。主に精神的にかつかつと削られるのだ。

「：知らない方が身の為だ。下手に関わると、大変な思いをする事になるぞ」

からかう為に隠している訳ではない。クロードの表情は至って真面目で、本心から氣遣ったの事であった。

「でも、気になりますよ。そんな風に隠されると」

無垢な瞳を向けてくるメイリンに、たじたじになる。そして詰め寄ってくるのだ。

それを見たルナマリアはムツと表情を変え、メイリンと共にジリジリと寄る。

近づく度に同じ距離を保って、後ろへと下がっていくクロードの顔は、どうしていいのかわからないと、素直に表れていて二人の加虐

心を攪った。

一步また一步と足を踏み出す度に、一步また一步と後退る。そんな鼯ごっこはいつまでも続かない。また後ろへと下がったクロードの踵が、何かに当たる。何に当たったかの検討もついているが、確認する事までは出来ないのだった。

「ど、どうしたんだ!? 二人共!」

女性の接近、しかも美人姉妹に迫られてしまえば、免疫の足りないクロードにとっては天国にも増して地獄だ。

情熱を持て余すし、何より上司として部下に手を出すのは褒められた事じゃないからだ。

そんな状況を知ってか、知らずか、インカムから流れてくるのは楽しいげな笑い声。脳天気なそれは、クロードの頭では悪魔の高笑いに変換されていた。

「笑ってんな!」

思い切りの八つ当たりは、肩透かしを喰らったように手応えはなくて。そんな間にも二人は真剣な顔付きで迫る。

うつ、と漏れた声。顔と顔の距離が近付く。高鳴る鼓動。心なしに紅潮した頬。

その雰囲気が見し、導く結果とは――。

「ふあゝあっ…。おはよう…」

全てをぶち壊された。二人のやるせなさは頂点で、空気も読めない黒を纏った上官が、持ち場へと移動している間も冷たい瞳で睨む。

それに気付いたのは歩き始めて五歩目を踏み出した時。寒気が右手方向から漂ってきて、今朝はそんなに冷えなかった気がした。不思議に思いそちらを確認すると、絶対零度の瞳を向けている二人を見つけて、慄いてしまった。

一気に覚める寝惚け眼。欠伸なんてものも同時に引っ込んで、今のアーサーの中にあるのは二人への恐怖。

（助かった…）

殺気を放つ二人の横で安堵の溜息を深々と吐き出した。あのまま状況が変わらなければ、間違いを犯してしまう可能性が高かった。

据え膳喰わぬは男の恥なんて良く聞くけれど、時と場合に因りけりだろう。

こんな機械だらけの場所というのもあんまりだろうし…って何を考えているんだ！！

これは後戻りが出来ない情事であろう事はわかってるし、二人が迫ってきた経緯も測れない訳だから、俺が手を出してしまって二人を傷付けてしまうのは間違っている。

そこで思考を打ち切り、可哀相なアーサーを見遣ると同情を禁じえない状態だった。

ガチガチと歯を鳴らし、ビクビクと震えて、自分の身体を抱きしめて、目が死んでいるのが極めつけだ。

「ほら、そろそろアーサーさんを虐めるのは止めな」

クロードが間に入った事で、二人の冷たい瞳が少しは和らいだが、今度は眼で批難を訴えてくる。

流石にそれに動じる訳にもいかず、内心の冷汗を隠しながらメイリンへと顔を向ける。

「すまないが艦長を呼んでくれ。思ったより早く着きそうだ」

「えっ！それって――」

復活したアーサーが声を上げる。クロードの言葉はその事態を如実に表していて、ホーク姉妹にもわかり易かった。

それは世界的名医の登場を示していた。轟く名声、ゴッドハンドと名高い一分の無駄もない手術。

それだけでは無い。人の心理面にも精通していて、著名な代議士達も良く診て貰っているらしい。

その名は――。

「ええ、ラルス・スペレルはもう地球の大気圏内に居るんですよ」

言葉は合図になり、一気に慌ただしさを増していく。

メイリンは艦内放送を使えばいいのに、走って艦橋を飛び出してい

くし、ルナマリアは皆を叩き起こす為にそれに続いた。残るアーサーは、

「ど、どうでしょう！？ 歓迎の準備もできてないのに！」

と頭を抱えて、これまた飛び出してしまった。

残されたクロードは頭を掻いた。ラルスを知る者からすると、あまり良い傾向には無いように思える。

「絶対、喜ばないよなー……」

虚しく艦橋内に響いた声は、機械類達の放つ声によって掻き消されていった。

この湿気の不安定な空気を体感したのは何年振りだろう。コロニーのように管理された環境にない大気は、疲れもするがありがたみのままの自然を堪能出来る、確かな質感を伝えてくれる。

追憶に浮かんでいる光景は、あまり良い思い出とは言えないが、それが無ければ今の自分は居ない訳だ。

それが嫌であり、思い出させる青き地球に降り立つのも本当なら避けたいのだが、他ならぬあいつの頼みだ、聞かない訳にもいかない。

それに大西洋連邦の行う非人道的で、鬼畜を通り越した実験の正体を掴めて、しかもその被験者を救えるというのなら、断る理由等無い。

一機の連絡用シャトルからオーブの大地へと降り立つ一人の女性。

グレーストライプのセットアップスーツを着こなし、片手に旅行用のキャリーケース、もう片手は強い陽射しを遮る為に眼の上を覆っていた。

大地を踏む。カツツと渴いた靴音と共に、彼女は周りを見渡す。迎えに来ると思っていないが、気を利かせるのが男というものだろう。

しょうがないか、と一步を踏み出す。するとポートへと急速で駆け入ってきた一台の車。それは女性の目の前で停止し、運転席の窓が降りた。

女性にとって久し振りに見る憎たらしい笑顔があった。

「ごめん、ちょっと遅かったな」

深緑の髪が日光に煌めき、榛の瞳が優しげに細められる。会えた事を喜んでいようだが、残念な事に女性の方は苛つきの方が強い。

「遅い！お前は年上を、しかも女性を待たせて恥ずかしくないのか！」

いきなり怒鳴られてしまった。不機嫌を覚悟で来たのだが、これ程までとは。予想を上回る怒声をどういなししていくか、男性には謝る以外に選択肢はなかった。

「悪かったって…。色々あったんだよ、道中で話すからさ」

此処に立っていてもしょうがないので、女性は助手席へと乗り込む。勿論、荷物はトランクへと投げ込んで。

ゆっくりと進み出した車の中は、外の陽射しに負けない程の熱気だが、放たれているのは怒りの感情による、エネルギーの爆発だ。

運転する男性は涼しげだが、一般人が同乗していたらすぐに音を上げてしまうだろう。

「それで、お前はそいつに任せてそのままにしていたのか？」

腕を組み、脚を組み。女性の不機嫌さを顕著に表すその仕種は、言葉の男勝りを補って余りある程に艶っぽい。

しかし言葉の棘は鋭すぎて、彼女を知らぬ者なら昇天ものであるう。

「ああ、二人一緒に居る方が安定しているみたいだし、無理に引き離す事もないだろうと思って」

はあ、と吐き出される溜息。呆れてしまい、言い募ってやるのも面倒臭い。こいつには説明するだけ無駄だ、労力の無駄だ。

「何か間違ってたか？」

純粹に聞いてきているのだから素晴らしい。勿論、皮肉的な意味で。

「いいや？お前にその方面を期待しただけ、私が馬鹿だったと思い知らされただけさ」

車は快調に進んでいく。曲がりくねる道も何のその、車体の軸を把

握しきったステアリングを見せる。

また女性は溜息を吐き出した。

「何だよ、その方面って。確かに俺は至らない所ばかりだけどさ」

やっぱりわかってない、と女性は思う。自分がどれだけ頼りにされて、どれだけ好かれているのかわかっていない。その癖他人の事に関心しては勘が働くのだから、始末に終えない。

「全く…。MSや車みたいに自分をわかってれば、そんなに苦労しない筈なのに…」

そう言っても変わりやしないのは目に見えているのだが。

貧乏くじを引きたがるのはいいが、それによって溜まっていくものを吐き出す事さえ拒んでしまう奴だ。しかし、今回はそんなに溜め込んでいない印象を受けた。

「…お前、あんな大事があったのに何処で掃き出したんだ？」

……まさか、艦の誰かで欲求を満たしたんじゃない？」

「んな事するか！そんなに鬼畜な上司じゃない！」

本気で返ってくるツツコミに少し安堵する。やはりいつものこいつだ。なら、何故こんなに落ち着いているのだろうか？

「まあ、思い至る事は一つある」

女性は運転する男性の顔を見詰める。首を傾げた拍子に、亜麻色の

髪がひらりと流れた。

「守るべきものがあれば、溜め込む量も大した事ないってことだな」
真面目に聞いたのが馬鹿だったようだ。確かに守るべきものの為にやった、というのなら傷付くのも小さくて済むが、決して無くなるものじゃない事を見落としている。

「いい加減、自分の身体を安く思うのは止める。ただでさえ傷だらけだっていうのに――って聞いているのか！クロード！」

助手席をちらりと見遣り、クロードはアクセルを強める。勿論聞いているが、如何にも説教な事を言われるのが好きではないのだから仕方ない。

「はいはい。本当にラルスは母さんみたいな物言いが好きだよなあ」

そう、この女性こそ、クロードが待ち望んでいた医師、ラルス・スペレルその人なのだった。

腰まである亜麻色の艶を湛えた髪、すらりとしたスリムシルエットのスーツを着こなすプロポーション、そして整った顔立ちが余計に美人度を加速させるのだ。

周りの評価は異常なまでに高いのだが、普段を知るクロードにとってはあまりにも評価が違い過ぎて驚くぐらいだ。

「母さんにしては歳も容姿も若いだろう？」

「はいはい。その言い方はお婆さんの証拠」

「な・ん・だっ・て!？」

もの凄い剣幕で迫られて、ハンドル捌きをミスりそうになったが、何とか堪える。瞬間、対向車が擦れたがって冷汗が流れてきた。

「おい、今は運転中だ。大人しくしていてくれ」

返事がない。どうやら拗ねてしまったようで、クロードにとっては好都合なので、そのまま放って置く事にする。

次のカーブを曲がるとミネルバが見えてくる。鋼鉄でできた女神は、ラルスを歓迎するかのように陽光を跳ね返していた。

アスハ家に用意して貰ったプラント行きの宇宙船。こじんまりとしていて、三人ぐらいが乗れば良い方では無かろうか。

それを待たせて、アスランはカガリと向かい合っていた。

確かにプラントの動きと考え方、そして今後の対策等も気になる所だが、今カガリの傍を離れてはいけない気がするのだ。

議会の上でも危うい立場にあって、話を聞く限りではウナトに役割を喰われてしまうのではないかと、心配になるのだ。

それに地位だけでは無い。彼女が誰かに取られてしまう気がしてならない。虫の知らせというものだろうか？

「心配か？ あたしだけじゃ議事を止められないと思っているのか？」

アスランは素直に頷く。プラントとの極秘会談の間に、セイラン家は他の議院達と強く結び付き過ぎた。

絆とは言えないが、時間の関係上、それを断つのは難しいだろうと考えている。

「…そりゃウナトに対向する手段もまだ見つからないけど、お前はお前の知りたい事を知るべきだ」

「でも、お前を放って行くななんて出来な――」

「大丈夫だ。いざとなれば、キラもキサカも居る。何とかなるもんさ」

強気な瞳。だが、揺らいでいるのが丸見えだ。この二年一緒に居たというのに、ごまかせると思ったのか、それとも自分に言い聞かせているのか。

どちらにせよ、アスランの不安を煽るには十分だった。

「ア、アスランっ!？」

ジタバタと暴れようとするカガリの恥ずかしささえ包み込むように、優しく抱きしめる。

少しずつ強くなる力にカガリの顔は歪むが、嫌がっている訳ではない。背中に廻された腕がその証拠だろう。

「…あまり強がるな。見ているこっちが辛い」

キュツと背中
の布を掴まれる。やはり国家を背負っているとはいえ、少女には重過ぎる荷物なのだ。

「…でも、私は決めたから。お父様の愛したこの国を、間違わせないから」

そうか、と呟き身体を離す。

わかっているのだ。カガリが責務から逃げ出す筈がないと。ただ知っていて欲しい。守ってやりたい事を。

「ちょっと手を借りるぞ」

右手で左手を取る。左のポケットをまさぐって、取り出したのは翡翠を中央に配した、細かい装飾がそれを引き立てている指輪であった。

それをアスランは躊躇いもなく薬指へと嵌め込む。

「……えっ…?」

カガリは戸惑うしかなかった。こんな嬉しい事がある訳もないし、信じられるような状況でもない。

だが、掲げてみた自分の左手の薬指には確かに指輪が煌めいていて。

「カガリの誕生石はエメラルドだからな。結構苦勞して見つけたんだ」

小振りながら形の整った宝石。今の時代じゃ珍しいものだが、どうにか手に入れたのだ。

「…やられっぱなしじゃ、面白くないからな」

紅潮する頬、引き寄せられる唇と唇。

長いようで短いキスは、どこか切ない味がした。

「じゃあ、言ってくる」

宇宙船へ乗り込んだアスランは、すぐに浮上して飛んでいってしまう。

カガリは左手を包む。抱きしめるように胸の中へ収められた指輪が、淋しげに光を反射する。

そして振り向くと、そこには丹精に引き締まった代表の顔があった。勿論、向かうは閣議場。過ちを繰り返さない為に、カガリは指輪に誓いを立てて歩み出した。

後にアスランは思う。この時やはりオーブを離れるべきではなかったと、近くに居てやれば良かったと後悔する事になるのだった。

PHASE-17 期待した私が馬鹿だった（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

さて、ラルスについてですがもう少し書き進めてから、オリジナルキャラクター設定にて詳細を書こうかと思っています。

今の所何時になるかまでははっきりしませんが、次か次々回辺りになると思います。

では、お疲れ様でした。

PHASE-18 唯一のそして最高の事だ(前書き)

今回は繋ぎの話になります。

では、お付き合いの程よろしく願います。

PHASE-18 唯一のそして最高の事だ

海風が心地好い。太陽の光も穏やかで、人口物だらけのこの港でも安らげるような気がする。

しかし、不安な物があればそれだけで風景を見回す余裕も持てなくて、ただただそれを処理するために動かなければならなくなる。

そう、ミネルバの中は騒然としているのだ。理由なんてシンには知らない。未だに眠気が醒めなくて、布団の中で寝返りをうつ。温かなこの場所から抜け出すのは辛いのだ。

しかし、そんな願いも一瞬にして瓦解する。隣にもう一つの温もりを感じて、脳が急激に覚醒する。

酷いデジャヴを感じる。昨日の目覚めは、解放的な大自然とクロードの存在があったからこそ我慢出来たと言うのに、今のこの状況はマズイ、マズ過ぎる！

いや、待て。俺は確かに自分の部屋で寝た筈だ。

かなりごねられたが、眠るまで一緒に居ると言ったら安心したように寝てくれたんだ。だから部屋の外に出て、外からロックしてこの部屋まで移動した筈なんだけども…。

考えれば考える程に訳がわからなくなる。そんなシンを余所にもぞりと動く、隣の温もり。

慌てて飛び起きて、布団から飛び出す。空気の冷たさに身震いがしたが、あの中に居るよりは何倍もマシだ。

起きるのかと思ったが、緩慢に布団の膨らみが動くだけで顔が出てくる気配が無い。

おかしい、と思った。

「ステラ…?」

近付いて呼び掛けてみる。もぞりと動いたのだが、返事は無く出てくるようなそぶりも感じられない。

いよいよ怪訝に思えて、シンは布団を捲る。それと同時に部屋の扉が開くのだから始末が悪過ぎる。

「シン！大変、早く着替…えて…!!?」

シンは慌てて身体を引く。そして流れ出す脂汗。

今飛び込んできたルナマリアにどう見えているかなんて想像したくも無いが、冷静な部分が勝手に解析を始める。

この部屋は勿論シンに与えられた士官室。自分のプライベートな空間だ。そして、そこに朝方の今、中には若い男と若い少女。

――結論、間違いなく誤解されるに決まっている。

「な、な、な、何やってんのよ!？」

入口で固まっていたルナマリアがもの凄い剣幕と勢いで詰め寄ってきて、思わず身体をのけ反る。彼女にはそんなの関係無いようで、

のけ反った分の距離を身体を乗り出す事で補う。

「こ、この娘は仮にも捕虜なのよ！それに手を出すなんて…ザフトの恥よ、汚点よ！あんたなんか！」

「ルナ、誤解なんだ！俺は確かにステラの居た部屋にロックを掛け
――」

「言い訳なんて無用よ！現にこの娘、ぐったりして動かないじゃない。い。あんたが無理矢理に――」

「何だって！！？」

言い訳を考えていたシンがその言葉に飛び付く。

そして駆け寄ると、ステラはぐったりとしているというより、息すらもしていないように見受けられ、その上顔は血が通っていないように真っ青だ。

シンの中に焦りが溢れ出して止まらない。クロードの見立てによれば、ステラは普通の医者では診察できないという。

その上生命維持を薬に頼っていたらしく、専門的な知識を持つ者を近くに置いておかないと、いつ急変するかわからない危うい存在なのだ。

（くそっ、まだ到着していないっていうのに…！）

その為にクロードはラルス医師を呼び寄せたのだ。

あの人の専門は細胞。全ての生き物に共通するものだからこそ、活路を見出だせるのではないかと思った。

だが、肝心な時に間に合っていない。ステラの症状の進行の早さを見誤っていたのか、それとも油断していたのか。

どちらにしても、ステラの命を危険に晒してしまっているこの状況が許せなくて、壁を思い切り叩く。状況が変わる訳でもないのだけど。

「ああ、もう！どうなってんのよ！ラルス先生が来たのに、何でこう余計な事ばっかー」

「先生が来てるのか！？」

正に天啓にも等しい知らせだった。絶対に何とかなるものではないだろうが、ラルス医師に診て貰うだけでも状態は変えられるかもしれないのだ。

「え、うん。さっきクロードが迎えに行ったから、そろそろ帰ってくる頃だろうけど」

「ルナ！ステラを頼む！」

その言葉はシンの発火剤となった。夢中で艦内を駆け抜ける。タラップまで遠いがそんな事は関係無い。

今のシンの中にあるのは救いたいという確固たる意志。誰も止められやしないのだ。

今日は朝から大騒ぎだった。ゆっくり寝ている暇は、あの三機が奪われてからは無いに等しかったが、オーブへと入港して一日目は休めて然別だと思っていたのだが、現実には実に厳しかった。

それは夜に冷えた空気の温度が高まってきた頃の事。

自分の部屋でまだ布団に包まっていて、この三日の間に溜まり過ぎた疲れを取る為に、泥のように眠っていた。

艦が港に停泊しているので、目覚めるのが少し遅くても気にしないでいいのが、タリアの中に安心を施して眠りは深い。

そんなだらけきった精神を、数十分後には張り詰めなければいけないなんて、夢の中では想像出来る筈もなく。

「艦長！」

飛び込んで早々に叫び声を上げる。勿論、中でタリアが熟睡しているのに構う事も無く。

だが、流石のタリアもそれだけでは起きなかった。気苦労も絶えなかったのだからしょうがないとは思うが、この艦のクルーにとってあの通信は一大事で、艦長が寝ているのは非常にマズイのだ。

「艦長！艦長！！起きて下さい！！」

声を張り上げ、身体を揺らしてみる。しかしそれだけで起きてはくれないで、目の前には穏やかな艦長の寝顔があった。

宇宙に居る間、艦長が殆ど眠っていなかったことをメイリンは知っていた。それを考えれば起こすのに気が引けるが、今優先されるべきはこの艦長としての責務で。

「クロードさんが艦長を呼んで来いと！何でも、ラルス・スペレル医師がもう地球に到着したんだそうです」

メイリンの声が耳に入り脳が理解した瞬間、ふわふわとしていた意識が急激に浮上した。定まらない形が一気に固まり、脳へと直撃する。

「…何ですって？」

そして揺れ動き過ぎて、立ちくらみを覚えたがそんな事は今のタリアには小さな事だった。

メイリンの告げた事を反芻する。そして昨日を冷静に思い出すと、有り得る筈が無いと思えた。明らかに対応が早過ぎて不自然なのだ。

確かにプラントから地球まで一日で移動する事は可能だ。

ザフトで所有しているシャトルを使えば、片道半日程度で移動出来る筈だ。

そして、昨日クロードが上訴した時間を考えると、どう考えても到着が早過ぎるのだ。

タリアの中では上に立つ者になる程、出立が遅くなっていく傾向があると思っていた。

面倒臭がる事もその要因だろうが、上に行けば行く程、立場に縛られるものなのだ。何処かへと出張しなければいけない場合でも、書類による監査を受ける事になり、自由など皆無なのである。

そんな訳で、ラルス医師がミネルバへ着任するのはまだ先だと考えていた。

でも、クロードがこんなついてもしょうがない嘘を言う訳も無いし、メイリンの焦りようも裏付けとなる。

途端に噴き上がり出すメイリンと同じ感情。寝起きのお陰で化粧もしていなければ、軍服にも着替えていない。

こんな状態を見たらどんな気持ちになるか。間違いなくやる気を感じられない、ふざけた艦だと怒りを買う羽目になる。

「クロードはどうしてるの？まだ艦橋に居る？」

急いで着替え始めたタリアは、横に居るメイリンへと問い掛ける。

昨日の通信の言動から考えても、クロードとラルス医師は知り合いであろう事は検討がついている。それならば艦橋に居るとは思えない。

律儀な彼の事だから、年上の者を放っておく訳もない。何処に居るか把握しておかないと、一緒に出迎える事も出来ない。

「あ、確認してみます」

タリアの自室にある通信機を使って、艦橋へと呼び掛けてみると、

通信を受けたのはアーサーであった。

朝の事もあり、メイリンは少し不機嫌になるを自覚した。

「なんだ、アーサーさんですか」

辛辣な物言いが堪えたようで、画面に映るアーサーはがくりと項垂れている。

『…まだ怒ってるのかい？悪気があった訳じゃないんだけど』

そんな事を言ってもメイリンはまだ許す気にはなれない。

あんなチャンスが、これからまた訪れるかなんてわからないのに、失敗するのならともかく、邪魔されてしまったのでどうしても悔しさが強い。

そんな理由でもう少し反省して貰う事にする。

「そこにクロードさんは居ますか？」

『ああ、クロードならもう居ないよ。ラルス先生を迎えに行くって、車でシャトルの発着場に向かったよ。』

それと伝言で、艦長と僕はタラップを降りて待っているのだそうだ』

「わかりました。ありがとうございます」

『えっ！ちょー』

有無を言わせずに通信を切る。報いを受けて貰わなきゃいけないの

だ、姉の分も含めて。

「…何かあったの？」

問い掛ける言葉が背中から聞こえて振り向くと、タリア着替えを済ませていて化粧を始めていた。

ファンデーションを塗る手を止めている所を見る限り、尋常じゃない雰囲気を感じとって、気になってしまったのだろう。

「いえ、何でもないんです。それより、クロードさんはラルス先生を迎えに行ったようで、艦橋には居ないようです。それと艦長とアーサーさんはタラップを降りて待っているとの事です」

「そう…。良かったわ、まだ到着してなくて…」

深い溜息を吐き出す。艦を統べている者が出迎えにも来ないなんて、例えような無い最低の失礼だろう。

それが寝坊だなんて、弁明のしようもない。

「知らせてくれてありがとう、メイリン」

お礼を述べて、タリアは急ぎ足でタラップへと向かう。

艦内はいつも通りの光景が流れていて、それで良いものかと考えてしまう。

大概、大物に成れば成るほどに盛大な歓迎を好むもので、しかも歓迎を喜ばない人は少ない。

ミネルバに気持ち良く着任して貰う為に、何かを用意すべきではないのか？

しかしクロードは二人だけを出迎えに指定し、自分は迎えに行くだけの待遇を催した。先生を知っているからこそその考えなのだろうが、どうしても不安に思えてしまう。

これも軍という縦社会に毒されてしまった結果という事か。

数分後にはアーサーも合流して迎える準備は整った。今日も陽射しは強くて、日和は悪くない事だろう。

向こうの道を見慣れた車が通った。艦に積んである備品の車だから間違えようがない。

そして車は二人の目の前で停まる。運転席から降りてきたのはクロードで、なら助手席に乗っているのがラルス・スペレルなのだろう。

だが、おかしい。降りてきたのは腰まである薄い茶髪を靡かせた見目麗しい女性。

タリアとアーサー、二人の中に戸惑いと疑いが生まれている。もしや……。

「…クロード、あなたの彼女を呼ぶ為の口実だった、なんて言わないわよね？」

二人が並ぶと明らかに美男美女のカップルにしか見えない。アーサーも同意を示し、クロードを見詰めるが、当の本人は良くわかって

いないようで、瞳を白黒させていた。

隣の彼女は俯いてふるふると震えていて。こんな手を使ってしまった後悔している、といったところか。そう思いきや。

「はっはっはっ！クロード、お前の所の艦長は面白いな！」

いきなり笑い出されてしまって、こちらが面喰らう番になってしまった。

豪快に笑い声を上げる女性は、いよいよ腹を抱えてしまう。

クロードはその光景を見て、漸くタリアの言葉の意味を咀嚼出来たようで、呆れたように溜息を吐き出した。

「何でそうなるんですか？こいつこそ、ラルス・スペレル本人ですよ」

「えっ！えええっ！？だ、だって、ラルス・スペレルは男じゃあ…」

そう、タリアが勘違いし、アーサーが驚愕したのはラルスという名前から男性を想像していたからだ。その上、医学の権威としても有名なのだから、お歳をめした方かとも思っていた。

…とにかく、目の前の女性がラルス・スペレルだとはどうしても信じられないのだ。

「はっはっはー…。まあ、勘違いするのもしようがないよね、男みたいな名前だし。初対面の時は良く間違われるしな」

やっと笑いが引っ込んだようで、女性は涙を指で拭き取りながら二

人へと近付く。

見た目が若すぎるせいか、ちっとも威厳を感じられてないのは仕方無いのかもしれない。

「私がラルス・スペレルだ。よろしく、タリア・グラデイス艦長。それにアーサー・トライン副艦長」

まだ戸惑いの抜け切れてない二人の手を順番に握る。それでも握り返してくれるのだから、歓迎されていない訳ではないらしい。

「え、ええ。こちらこそよろしくお願いします」

気を取り直して、タリアは身体を開いてタラップを指し示す。勿論、柔和な笑みも忘れない。

「では艦内を案内し――」

「クロード!!」

タラップを全速力で駆け降りてくる影。それは隣に居る赤服の軍人の名前を叫んで、こちらに向かってくる。

その者も赤を纏っており、乱れきった紫がかった黒髪も気にしないで、クロードの目の前で止まる。

絶え絶えな息、肩を上下に動かす呼吸、そして手を膝へと当てる体勢。典型的な走り疲れの様相だ。

そして掠れて聞き取り辛い言葉を放つ。そこに籠められているのは

焦燥。

「ステラが…ステラが…！」

瞳に浮かぶのは懇願で。クロードの顔にも焦燥が浮かぶ。どうやら一大事のような感じが…。

「…まさか、ステラの容態が！？」

急を要する患者が居るようだ。そうならば自分呼び寄せた意味も理解出来る。と、いう事はそのステラというのが、例のエクステンデッドという事か。

考えている間に突然右手を掴まれて、走り出したクロードのスピードに驚く。

余程の重患のようで、クロードもヒールを履いているラルスを気遣う余裕は無いようだ。

「ま、待てクロード！急ぐのはいいが、少しスピードを緩めてくれ！」

突き上げ感が酷い。足裏の感覚が吹っ飛びそうだった。

その事に漸く気付いたクロードの顔は、申し訳なさそうに歪んでいた。別に責めている訳でもないから、あまり気にする事もないのだが。

「わ、悪い…。ちゃんと気遣うべきだったな…」

歪んだ顔を俯けてしまう。顔を覆う前髪で表情が隠れてしまうと、余計に落ち込んでいるように見えて、ラルスもバツが悪くなってしまう。

「…まあ、気にするな。お前が他人を気遣うのを忘れる程の大事なのだろうか？」

その通りだからこそ、クロードは急ぎたいのだ。しかし、ラルスに痛い思いをさせたくないのも事実。

そして悠長に歩いてもいられない。先に行ってしまったシンは既に姿が見えなくて、もしかしたら俺達の到着を待っているかもしれない。

その待たせる時間も可哀相で、一瞬、一秒も今は惜しい。

さて、どうする…。

「まあ、私が靴を脱げば良いんだが、艦内を裸足で走るのはちょっとな…」

確かににはしたない事だろうし、それ以上に危険なのだ。

掃除を欠かしていないとはいえ、普段ブーツで通っている道に何か落ちていても気がつかないだろうし、ガラス等を踏ん付けて、更に細かくなっているとしたら、余計に危ない。

そこでクロードは気付く。危険な道をわざわざ自分で通る事もないだろう。誰かを足代わりに働かせればいいのだ。

目と鼻の先にクロードが突然立っていて、ラルスは不思議に思って小首を傾げる。

「ラルス、大人しくしててくれよ？」

クロードの瞳は至って真面目で、ますます不思議に拍車を掛けた。

そんなラルスの心境等完全に無視して、体勢を取り易いようにしゃがんだ。

そして、腕を膝の裏と背中の中へと差し込み、一気に持ち上げる。所謂、お姫様抱っこというやつだ。

「ちょ、ちょっと待て！流石にこれは…」

恥ずかしいとかそんなの抜きで、ずっと年下の男に抱え上げられるのは何となく背徳感があった。

申し訳の無い気持ちになる。

しかし、クロードにとっては栓無事事だ。やるべき事が定まっているというのに、一番の重要人物が早く到着出来ないのは後々に響いてしまうものだ。

「大丈夫。お前は軽いから、抱えて走るのも苦じゃない」

そして走り出す。うわっ、と小さい悲鳴めいた声が聞こえたが、そんなものは今は無視だ。

とにかく、一秒でも早くステラの元へ。運命を呪うのも仕方無い少女を救うために。

しかし、クロードは気付くべきだったのかもしれない。この事態が、後にもっと精神を擦り減らす出来事を連れてくる可能性を孕んでいた事を――。

薬品の臭いと消毒された清潔な雰囲気的空間に、二人の男性と三人の女性が居た。

一人は椅子に座って何かの紙を眺めていて、三人はその様子を固唾を呑んで見守る。

そしてもう一人はベッドに寝かされており、心なしか顔色が青いが先程から考えればかなり良くなった。

そして座った女性は椅子を回して三人へと向く。長い薄茶色の髪は後ろで一つに括られ、グレーストライプの上から羽織った白衣が、より清潔さを醸し出していた。

「結果……聞きたいかい？」

三人に問う。表情は何一つ変わっていないのが、クロードには気掛かりだった。

しかし、聞かない訳にもいくまい。シンの事を考えれば結果を濁す方が、精神的には楽だろうが、事実を知らないのも後で堪える事になる。

それにこいつは、頷けば包み隠さずに話すだろうし。

「：聞きます。いや、聞かなきゃならないんです！」

決意の強さの滲む返事だった。

「あんたはどうなんだい？聞くのかい？あんまり興味なさそうに見えるけど」

少年の思いの強さは伝わった。だが、部屋でステラの様子を窺っていた赤髪の少女は、どうにも気持ちいが定まっていないうように見えた。

「前もって言うておくけど、患者に思い入れを持たない奴に結果は聞かせらんないよ」

思う力は時に患者の強さになってくれる。だからこそ話すべき者と、話さなくても良い者が出てくる。

この少女はそれに値するのか、どうか。

「……私も知りたいです」

「……まあ、いいだろう」

ラルスは一度背凭れに寄り掛かる。ぎしっと音を立てた椅子が何を暗示するとか？

そしてその口から告げられたのは、無情な世界を顕著に表していたのだった。

「ステラは、長く持たない。持って二年、もっと短いかもしれない」

覚悟はしていたが、周り全てが闇に囲まれてしまった心地。絶望で膝が崩れそうになるが、ぐっと踏ん張りラルスへと詰め寄る。

その顔は悲しみを塗りたくったような表情、だった。

「な、何とかならないんですか！？まだこんなに幼いのに、二年も生きられないなんて可哀相過ぎます！！」

それでも告げられるのは非情な答えだけで、不甲斐なさを感じてしまう。

「何とかしたいがな、情報が無さ過ぎるんだ」

ラルスは振り返り、結果が示された紙をもう一度見詰め直す。浮かび上がるのは不可思議な数値。

「細胞が死んでいくスピードが早過ぎる。特に脳は顕著で常人の何十倍だ。

多分戦争が終わるか、その途中で死んで貰うつもりだったんだろう。ご丁寧に解析できないように、薬でミトコンドリアに細工してある」

ただの使い棄てられる駒。それがステラの存在価値だっていうのか、連邦は…。

世界に狂気をばら撒いて、戦争を引き起こして、人がたくさん死んでいく。その惨状の舞台にただ人を殺す為に上げられ、そして用済みになった役のように死んでいく。

何も残さず。

「…………ざけるな…」

「シン…?」

「ふざけるな! そんな道具みたいに使われる為に、ステラは生まれてきたんじゃない!!」

二年間、オーブへと向けられていた激情は更に燃え上がり標的を変えた。

憎いとか、そんな生温いものではない。連邦の全てを破壊しても有り余る感情が、シンの中で暴走を始めていた。

「落ち着け、シン! ラルスはまだ手が無いとは言っていないだろう?」

「……えっ? た、助かるんですか! ?」

一筋の光が閉じられた闇に差し込んだ。確かな光ではないけれど、信じられるかもしれないもの。

「まだ何とも言えん。一先ずこの娘に投与された薬を示したカルテがあれば、禁断症状を緩和できるし、身体への反応も抑えられるんだが…」

「なら、俺が潜入して――」

「無理だ。第一、そのカルテがある場所を知らないんだ。今はラルスに任せるしかないだろう」

手が届きそうになってもひらりと躲され、光は何処までも遠くに逃

げてしまう。

「何もできないのか……、俺には…」

力無い自分に嫌気がさしてしまつて瞳を閉じてしまう。その暗闇の中で手を伸ばしても、確かな物は手につかなくて。

佳日に消える泡沫のように儚く消えるものなのだろうか。

「それは違う」

俯き拳を震わすシンへと向けられた否定は、ステラの眠るベッドの方から聞こえてきて。

そこに居たラルスは、すやすやと安心した顔を見せているステラの髪を梳きながら、見えないシンの顔を見詰める。

「お前がこの娘に優しくしてやった事が、お前に出来る唯一のそして最高の事だ」

納得の出来ない感情が広がるが、これ以上自分の頭で考えていても何も思いつかないのは明白だ。

だったらシンは、出来る限りステラと一緒に居てもっと情を注ごうと思う。そう心に留めた。

決意は力へと変わるが、憎悪は決して何か違う物に変わる物では無い。

それを世界は知っているようで知らない。世界の根幹を担う者達は、

力を呪わしい存在を生み出し続ける。

それでも、世界は肅正出来ずに居るのだ。軍を保持する国は、その者達から少なからず恩恵を受けているからだ。

その判断が世界の全てを暗くしていくものである事を、世界は後悔して知るのだった――。

PHASE-18 唯一のそして最高の事だ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けましたでしょうか？

あまり実のある内容ではないですが、必要な話になります。

では、お疲れ様でした。

PHASE-19 好きになってもいいのね! (前書き)

遅くなって申し訳ありません。中々暇な時間が取れませんが、筆が進みませんでした。

では、お暇な方はお付き合い下さいませ。

PHASE-19 好きになってもいいのね!

バーニアの描く軌跡が宇宙の闇に一筋の光を走らせながら、その黒の中に浮かぶコロニーの一つに吸い込まれていく。

用意をして貰ったシャトルの中は、操縦士と副操縦士以外に居なくて、そんな中に聞こえる声は無い。それがこれからの緊張を予期しているようで、アスランは窓の外に広がる、無機質な鋼色の港を眺めていた。

議長に聞かなきゃならない事がある。そう考えてプラントの首都、アブリリウス市に赴いた訳だが、心ここに在らずな心境なのだ。そんな自分に嫌気がさすと共に、カガリの顔まで浮かんできてしまうと余計にどうしようもなくなる。

こんな心境で議長と面会するなんて失礼を働きたくはないが、今の気持ちを切り替えるのは難しい。

本当なら此処に居るべきではないのに加えて、オーブの政治の不穏な動きも気になったからだ。

カガリの話では、ウナトの謀略によって良くない方向に議会が動いてしまっていて、それを食い止める為に言い募るのも高圧的な態度により議員賛成を得られず、黙する事を余儀なくされてしまう。

そんな独裁を呈したウナトの態度が、アスランに不安を齎したのだ。

カガリがプラントへ赴いている間に手を回していて、しかも会議中にも関わらず手段を選ばない所を見ると、彼女を一人にするべきで

はないと考えるのは当然の事だ。

その旨をカガリに伝えようとしたのだが、言葉を紡ぐ前にカガリは毅然とした表情で、アスランが口を開いた瞬間に割り込んだのだった。

《確かめなければならない事を放って置くような奴に、心配される憶えはない》

こちらが何と言うか既にわかっていてそれを咎める。しかし、そんな事を言うカガリの声は、気付き辛いぐらいの微妙な感じに震えていて。やはり気持ちが揺らいでしまう。

しかし、次のカガリが放った言葉に渋々了承する羽目になったのだ。

《プラントに行かないんだったら、お前なんかと一緒に居られないな》

本当にきつい言葉だった。アスランにとってすれば、生き地獄にも等しい処遇だ。

あの滑らかな肌にも、さらさらと流れる煌めく金髪にも触れられないなんて、考えるだけでもゾツとする。

ある意味中毒にも似た感情のせいで、結局ここまで来てしまったのだ。

「あの…、着きましたよ」

そこまで考えて、操縦士の声によって現実に戻された。先程まで脳

裏に描いていたカガリが消えてしまった事で、また一抹の不安が湧き上がる。

（ここまで来て、考えても仕方ないか…）

出発前にも言われてしまった信用の件が蘇り、改めてカガリへの思いを掻き消す。

アプリリウスの宇宙ステーションの中、アスランは階段を上がる。一つ一つ丁寧に上がるのにも、彼の性格が表れていた。その作業一つ一つで気持ちを少しづつ紛らわせる。

それと共に現れてくる議長とクロードへの猜疑心。キラとの会話で信じているような事を言ってはみたが、やはりあの兵器に関しての不安は拭えなくて。

破壊力、効果範囲、何よりその戦略兵器としての価値。鑑みれば、地球を争わずに滅ぼす事も可能な程ではないか？

直接は無理だとしても、何かを挟めばどうか。廃コロニー群を落として、その場所から反対からニブルヘイムを構える。双方に戦力を割いてしまえば、どちらも対処しきれずに地表を荒野の世界へと落としていく。

そんな世界を想像は出来ないが、こんな兵器の存在すればこんな将来が訪れてしまうかもしれない。

そうなれば、オーブは島国である事と中立が仇となり、疲弊した国土の修繕と食糧の配給等当然でなくなる。

地球が減びてしまつては元も子も無いのだが、考えてしまうのだ、

オーブが迎える食糧難による消滅を。

階段を昇り終える。どこかから聞こえてくる会話が脳天気な物に思えて、アスランの感情を逆撫でする。

混沌とした世界が眼前に広がっているというのに、それを直視する事もせず、無関心なこいつらを守る為にザフトがある。

そう考えると、何ともやり切れない場所に居たんだな、と思えてしまつてやるせなかった。

そして、その声がどんどんと近付いてくる。階段の上から女性にしても高く、明るい声が降ってきていて、アスランは思わず顔を上げる。

そして驚愕を覚えて、しかも疑惑をもっと深める結果になる。

ちらついたのは懐かしさにも似た桃色の髪。有り得る筈も無いのだが、上のフロアへと続く階段の先、手摺りの奥の方を注視していた。

そして見えた物に時間が止まった心地と、心臓をも鼓動を聞こえなくなっていた。

瞳孔は開きっぱなし、口の中は渴いて声も出せそうにない。それでも目の前の信じられない現実には思考はどんどん奪われていく。

「アスラン！」

こちらを見つけた彼女は嬉しそうに笑顔を見せ、階段を飛ぶように降りて、腕の中へと目掛けて文字通り宙を舞ったのだ。

柔らかい感触が煩惱を刺激する。何故か豊満な胸が自分の同じ場所に当たり、戸惑う脳の中でも大きいと認識――いや、その前に考える事があるだろ！？

彼女はキラと一緒にアスハ家の別宅で過ごしている筈だ。勿論、素性を隠しているから事情を知る者しかわかる筈も無い。

それなのに彼女はプラントに居て、しかも自分の首筋に顔を埋めているのだろうか？

「ちょ、ちょっと待ってくれ！何故、君がここに？それに、何でこんな事を」

混乱する頭の中で捻り出した言葉がこれだった。聞かなきゃいけない事ではあるし、知らなきゃいけない事でもある。

しかし、彼女の全てに違和感を憶えていた事だけが、アスランの中に燦ってはいたのだ。

「どうしてって…婚約者同士が抱き合うのは当然ではありません？」

「……………はい？」

茫然自失という言葉がこれ程に良く似合う場面は、生涯出会うことはないだろうと思えるくらいのもので。

それと同時に、アスランは目の前の彼女がラクスでは無い事を悟るのだった。

口まで開いてしまったアスランの顔を見つめる無垢な瞳。彼女と同じ色をしてはいるが、顔の雰囲気はより幼い印象を与えていた。

逆に身体付きは完全に大人で、先程より強く押し付けられるものは、本物より確実に大きい事を本能で感じとる。

「君はだ――」

「アレックス君」

色々と問い詰める為に口を開いた所に、他の誰かが発した声が割り込んだ。聞き覚えがある声に顔を上げると、にやけ顔を見せる黒の長髪がそこにあつて。

それだけで事実を推察を出来てしまうのだから、この人物の力はある意味偉大なのだろう。

「…議長」

デュランダルは階段を降りてきて、アスランの腕に収まるラクスらしき人物を見遣る。その瞳は優しいものではあった。

「ラクス様、婚約者と久しぶりの再開を果たしてお喜びなのもわかりますが、公の場所ではお控え下さい」

耳打ちで、アスランに聞こえるくらいの声音をもって諫める。一応、本物としての対処の仕方なのだろうが、その扱い方が議長の思惑だという事を、アスランの中に強く植えつけた。

「だって…」

拗ねた表情を見せる。本物の彼女から見た事もないその顔が、アスランの中に訳のわからない蟠りのような物が生まれて、思わず目を逸らしていた。

それにしても、彼女と似ても似つかないと思うのは自分だけではない筈だ。

高いハイヒールに、露になった長く綺麗な脚、上半身を被う衣服も露出は少ないとはいえ、ぴったりとフィットしたインナーが卑猥にも思えてしまう。

こんな影武者なのか、単なる偽物なのかわからない存在を見たら、ラクスはどう思うのだろうか？

「今は我慢下さい。後でいくらでも会えるのですから」

「はぁーい…」

どうやら諦めたようで、肺に溜まりきった澱んだ空気を吐き出す。一気に心労が積み上がった心地がした。

そして瞳を開けると、目の前、唇が触れ合いそうな距離に彼女の顔があって、思わず身体を少し引く。これ以上引くのは体勢的に不可能だった。

「…ミィアよ」

耳で囁かれたのはどうやら彼女の名前のようだ。小悪魔な笑みを浮かべて、カツッ、カツッとハイヒールだというのに駆け出したミィ

アは、入口付近で振り返り手を大きく降り出した。

「アスラーン！また後でねー！」

満面の笑顔で大きく手を振るミーアの姿は、すぐに外に停まっていた黒の車に消えていったのだった。

酷い頭痛がしてきた。考える事が多過ぎるのと、次々に出てくる問題がアスランにのしかかってくる。

「済まないね。君が来る事を彼女に言ったら、会いたいと言って聞かなくて」

ミーアを見送ったデュランダルが近付いていて、アスランはその顔を注視する。表情は飄々としているのせいか、苛立ちが募ってしまいうのかもしれない気がする。

「…議長、これはどういう事ですか！」

「……こちらにも事情があるという事だよ」

議長の言葉の端には苦渋が滲んでいた。やはり、クラインの家筋には勝てないという事なのだろうか。

しかし、そんな事を言ってもいられないだろう。政治の範囲にもラクスが残滓が残っているというなら、それを取り除かなければプラントの治世は、彼女無しの安定以外有り得なくなってしまう。

「なら――」

「君の言いたい事はわかる。だが、ここではまずい。そこで食事でもどうかね？」

生憎、まだ仕事が片付かなくてね」

「：はい、わかりました」

こちらにも断る理由等無い。確かに、こんな誰が聞いているかわからない場所では下手な事は言えないし、デュランダルも議長という立場上、発言の制限も強すぎる。

「では、後で連絡を入れるよ」

デュランダルの後ろ姿が一つの部屋に消えていく。どうやらここで仕事のようだ。待っていてもいいのだが、折角連絡をしてくれるというのだ、滞在するホテルで待っている方が得策だろう。

しかし、胸の中に渦巻く疑いや惑いは余計に強くなり過ぎて、クロードの顔すら苛つきの対象になってしまっていた。

こんな心境で問い質してしまえば、恐らく言葉を選ぶ余裕は無くなってしまうだろう。

それに聞きたい事も増えてしまった。聞き届けるのがカガリとの約束である以上、多少乱暴な手を使ってでも吐いて貰う必要があると思うだ。

ステーションから外へ出る。人口の光と空気が、不快感等感じられないように調整されているのだが、今のアスランにとってはそんな些細な事でも心を掻き乱す原因にしかないのだった。

家に帰ったのは深夜に近い時間帯だった。着慣れた筈のバーガンデイのスーツでさえ窮屈に感じて、部屋で早く着替えたかった。

閣議は全く進展せずに、ただ平行線を辿るだけで、ただの烏合の衆と化していた。そんな現状を打破出来ない自分と、裏を見せないウナトに苛々としてしまった。それに、自分の意見を言おうとしない議員達にも。

疲労困憊というよりは心労困憊といった表情で玄関を開く。そして、静か過ぎる家屋に違和感を覚えた。

いつもなら出迎えてくれる侍女が最低一人はいる筈なのだが、それもなく。

どんなに忙しい時間でも明るく出迎えてくれるのが、父親を亡くしたカガリにとっての支えになっていた。それを皆知っていて、一日も欠かさずに元気をくれたというのに。

一步を踏み出して自分の部屋へと向かう。場所は三階、階段を廻り込んだ右側で、然ほど歩く距離でもないのだが、今のカガリの心境ではそれも大した距離に感じられていた。

とにかく寂しいのだ。閑散としてしまった、ただ広い家の中では帰ってきたという安らぎを得る事が出来ない。誰かと笑い合えればこそ、ただいまという価値が生まれるのだ。

俯きながら階段を上がる。敷かれた絨毯に足が沈む感覚が、自分の心をそのまま表している気がして、俯くのさえ嫌になってしまい、階段を昇りきった先を見据える事にした。

そこに誰かが居た。

明らかに見た事はあるのだが、家に仕えてくれている者達の中には見当たらない人物であつたが為に、カガリは警戒を強める。

足が沈む絨毯が幸いして、足音を消しながら徐々に距離を詰めていく。

全身が見えた。怪しい人物ではなさそうだが、見た目で判断してはいけないのが世の理。

取り押さえる為に身構える。あまり乱暴したくはないのだが、知らない奴が家に居たのだからしょうがない。

数歩で手が届きそうな距離まで近付いて、手刀を首筋に一撃見舞えば安全に終わりに出来るだろう。

一歩踏み出した時だった。

「お帰りだったのですね、カガリ様」

振り返った男性にギョツとさせられる。顔を注視すれば何て事は無い、見た事があると思えばセイラン家の付き人だった。

それにしても、内の家人は何処に行ったのだろうか？

他家の者が滞在しているというのに、付き人に嚮を行えと迄は言うつもりはないが、こんな風に静かでは失礼に当たると思うのだが。

「どうしたんだ？ 閣議は既に終わっているぞ」

迎えに行かなくていいのか？と言外に含ませてはみたが、動じる事は無く。まして、

「ウナト様の命により、お迎えに上がりました」

紡がれたのがこんな意味もわからない言葉だったのだから、カガリは面を喰らうしかなかったのだった。そんな混乱の中では考えることぐらいしか出来なくて。

迎えに来た？何の冗談だと言うのだ？

確かにアスハ家とセイラン家が結び付けば、オーブの経済、政治、そして治安までもが安定する事になるだろう。それに関してはあたしだって反対はしていない。

だけど、こんな急に事を運ばれてしまえば、誰だって戸惑いを抱える事になる。それにあたしにはもっと大きな理由もあるのだ。

「な、何を言ってる――」

「あなた様にはセイラン家にお越し頂き、我が家のしきたりを学んで貰います」

有無を言わせるつもり等なさそうだ。言葉を挟む余地さえ与えずに、次に口から出てきた声には、カガリの頭を真っ白にしてしまうのだった。

「二日後にユウナ様と結納を果たして頂く為に」

……この目の前に居る男は何て言ったのだ？言葉を心が飲み込んでくれない。いや、言葉を殻で跳ね返しているのかもしれない。

ユウナとカガリは婚約者という単語に縛られてはいるが、こんな物は世論の高まりが招いた事であり、当人達からすれば大した効力もないものだと思っていた。

しかし、今突き付けられた言葉は強制力を伴って、カガリの意思も無視して迫っていた。そんな繋がりも希薄は関係では、決意なんて固められる筈もないというのに。

「ふざけるな！お前達にそんな権限等あるものか！」

ただただ流されて連れて行かれる訳にはいかない。セイランが考えている事なんてわかりきっているし、それに利用されるのは嫌だ。

政治は安定するのではなく牛耳りによる独裁が往来し、民衆は搾取の対象になるばかり。その上繋がりは大西洋連邦のものになり、オーブは戦場の一つとなるのだろう。

そんな思惑を見抜けない程愚かではないが、あるものを盾にされると途端に弱くなってしまふ痴れ者ではあったのだ。

「ほう、そんな事をおっしゃっても宜しいのですか？」

厭らしい笑みを執事は浮かべていた。その前にカガリも気付くべきだったのかもしれない。セイラン家がとくに彼女の弱みを握っていた事に。

「オーブの国力によって身を庇っている、アレックス・ディノの処

遇を考え直さなければならぬかもしれないかもしれません？」

「ア、アスランとこの問題は関係無いだろう！」

「関係無いですって？」

明らかな嘲笑を執事は高らかに上げた。さも可笑しげに歪んだ顔に一抹の不安を覚えたのだが、そんな生温いものではなかった。

「まあ、いいでしょう。とにかく、貴方が大切に思うアレックスの正体を曝してしまえば、彼がどうなるか……わかりますよね？」

凄惨な現実がそこにはある。アスランは誰の子で、どんな確執があったのか、それを啓示された国民は、何を考えていたのかを邪推し、扇動されて行動を起こす。

そうなればアスランの身には死の影が忍び寄る。彼の父が行おうとしたナチュラルへの肅正は、オーブ国民にも満遍なく恐怖を与えたのだ。

考えれば考える程に、カガリが取れる行動は一つきりしかない事に気付く。しかもそれは、愛する者を守る為の道である事をわかつているからこそ、彼女の瞳には決意と絶望の色が浮かぶのだろう。

「……わかった……。セイラン邸に連れていけ」

カガリの頭の中は、アスランへの謝罪に溢れ返っていた。

貰った指輪のエメラルドを覗いて見る。その輝きは心を映し出しているかのように、鈍く光を跳ね返していた。

滞在するホテルのラウンジは光に溢れて、明るい雰囲気醸し出していた。

客を迎える為には当然の事であるのだが、今のアスランにはあまり嬉しくないものであった。逆に暗い雰囲気醸されてもお断りなのだ。

チェックインを済ませる。部屋は特に派手でもなく、地味でもなく寛げる空間というもののなかもしれない。

サングラスを外して、ドアに凭れ掛かる。疲れもあるが、考え過ぎて頭が熱い気がして、眉間を指で抑えつける。ズキンと痛みが走った気がした。

(……考える事が多過ぎる……)

オーブの事、カガリの事、ニブルヘイムの事、ミリアの事。

あちらこちらに悩みが散らばって、一気に解決する事が出来ない事も相俟って、考えるのがどんどん億劫になる。

ドアがぎしりと音を立てる。余計に寄り掛かったせいか、少し後ろに傾いた気がした。ドアに隙間が生まれていた。何かを捻る音が聞こえて、ノブを見遣った。

その瞬間、景色は反転した――。

「アスラン！大丈夫？」

背中と後頭部に痛みが走り、思わず瞑ってしまった。ズキズキと痛みを覚える箇所が増えてしまって、アスランの悩みもまた痛みを伴いだした。

勿論、上から降ってきた声が主な要因なのだが。

「……どうして俺の居場所を…？」

閉じていた瞳を開く。上から見下ろしているピンク髪の少女が映ったが、アスランの体勢だと眼の遣り場に困る羽目になる。

レオタード調のインナーから伸びる脚とその付け根が、煽情的に目の前に広がり、脳内はオーバーヒート寸前だった。

「どうやって…普通にフロントで聞いただけよ？」

「普通につて…簡単に教えてくれないと思うんだが…？」

守秘義務が存在するので、ホテルの従業員が口を割るのは相当な事だ。ラクスとしての地位を利用したのか、それともSPが脅したのか――。

「フィアンセだって言ったら喜んで教えてくれたわよ？」

頭痛が酷くなった。この娘はいつの話をしているのだろうか？

ラクスと婚約関係にあったのは、両方の父の話で決まった事であり、当の二人はまだ五、六歳ぐらいの子供であった。

どんな人でも友達か、友達じゃないかで判断しているような時期に、婚約だ何だと言われても理解できる筈も無いし、新しい遊び相手が見つかったくらいにしか思っていなかった。

けど、一つだけ確かな事があった。それはラクスによくわからない淡い感情を抱いた、という事だ。

「…ミィア、だっけ。残念ながら、俺とラクスはそんな関係じゃない」

昔に感じたものを、今のラクスには感じていない。彼女が自然でいられるのは、キラという存在があつてこそだ。悔しい、という思いはした気がする。ヤキンドゥーエ終戦直前に、二人で語らうキラとラクスを見た時は、ちりちりと胸の奥で燻るものを覚えた。

しかし、それも長く続く事は無かった。隣にカガリが居てくれたからだ、と後に今なら素直に思える。

「…えっ？でも、世間じゃそんな事言っていないわよ？」

世論では、この縁談を喜んでない方が圧倒的に少数派になる。政治での大きな発言力を持つ二人、シーゲル・クラインとパトリック・ザラの家柄が結び付くのだ、プラントの安定は確実視されていた。

しかし、それも叶わぬものになる。原因を作ったのは、アスランの父であるパトリック。

退いた身でありながら発言力が衰えないシーゲルが疎ましくなり、フリーダム強奪事件を切っ掛けに指名手配をザラ派に伝えて射殺させた。また、同時に平和を訴えるラクスをも邪魔に思っていたらし

く、同じく指名手配を掛けていた。

しかし、そんな事を世間に規制なく大っぴらにする事は、自分の立場を悪くする。情報操作が行われる事で、アスランとラクスの関係が打ち切られた事は、国民に知らされていなかったのだ。

その反動が今頃になって息子に降り懸かるとは、因果なものである。

「とにかく、俺とラクスは婚約者じゃない。だから――」

君と関わる意味はない、と冷たくあしらうつもりだった。ラクスとして自分の周りを彷徨かれるのは、俺にもミーアにも危険だ。

立场上、クライン派に命を狙われかねないし、ミーアを巻き込みたくもない。彼女にしても歌姫と名高いラクスの名を貶る事になるやもしれない。

しかし、アスランの言葉は紡がれる事なく、無理矢理呑み込む結果となった。――腕に絡まる彼女の腕によって。

「じゃあ、私があなたを好きになってもいいのね！」

喜色満面で身体を押し付けてくるミーア。それにしてもストレートに感情を表現する娘だ。このくらいの性格なら、カガリを攫う事にも躊躇わないのだろうか…。

「ねえ、食事に行きましょう！このホテルのお料理、結構美味しいのよ」

落ち込んだアスランの気持ちも返事がこないのもどうでもいいのか、

嬉しそうな笑顔を崩す事なく、ミアはドアの外へと引っ張っていく。

しかし、アスランには部屋にいないければいけない理由があるのだ。引かれる力を拒み、力づくで腕を引き抜く。

「待て！俺はここで待たなきゃいけないんだ」

腕を引き抜かれて、きよんとした表情を見せる。

多少のショックで、顔が歪んでもおかしくない仕打ちをしてしまった事に顔を背けたのだが、ぷっと吹き出した音が聞こえてもう一度見遣ると、本当に笑っているのだから困惑するしかなかった。

「ごめんなさい、言ってなかったわね。私、議長に頼まれてあなたを迎えに来たのよ」

「…む、迎えに来た？」

「そうよ。だから早く行きましょう。議長が待ってるわ」

頭痛薬が欲しくなってきた。ミアが居る前で、議長に踏み込んであれこれ聞くのは、彼女の身の安全を考えると憚れた。

俺が聞きたいのは国家機密に関わる事象だ。そんなものを知ってしまえば、情報に縛られて真面な生活を送れなくなー。

（いや、既に真面な生活は送れていない、か）

よく考えれば彼女自体が国家機密であった。その事に、目の前で明

るく笑い声を上げている少女は気付いているのだろうか？

「さ、早く早く！」

再度腕を絡めて引っ張り始めたミーアに、抵抗する気も起きなかった。

とにかく議長と面会して、彼女のいない場所で話が出来るように取り計らって貰わないと、オーブに帰れそうにもない。

困った表情と呆れた顔をごちゃごちゃに混ぜたような、それこそどうしようもないと言いたげな青年を、楽しみに引っ張り回す少女――しかもどちらも一際美形――という組み合わせが、嫌でも目立ってしまう事をアスランは失念していた。

ミーアに連れていかれたのは最上階にある、所謂正装以外お断りなレストランだった。しかしスーツ等持っている筈もないのだから、アスランは入店出来ないだろうと思ったのだが、

「ラクス様、お持ちしておりました。既にデュランダル議長は中にお入りになりましたよ」

恭しく片腕を前にしてお辞儀をした支配人らしき人物。明らかに礼節を弁えていない格好のミーアを普通に通し、あろう事かアスランすらも普通に礼を持って出迎えたのだから、ラクスの影響力は計り知れない。

ウェイトレスの案内で一つの扉の前に立つ。店内の装飾品は高級だと一目でわかるものばかりだが、この扉は中でも際立っていた。

開け放たれた扉を潜る。本当に食事をする場所かと疑いたくなるような調度品に溢れていて、流石のアスランでも気圧される雰囲気を醸していた。

そんな中に平然と歩を進め、ミィアは真ん中に置かれたテーブルへと踊るように駆けた。そこには既に議長がお座りになっていて、彼女が視界に入ると共に立ち上がり、入口で立ち尽くすアスランへと振り返った。

「よく来てくれたね」

柔和な笑みのように見えた。しかし、今のアスランの頭の中では、その笑みすら邪推の種になってしまう。

この食事にも何か裏があるのではないかと、疑いが絶えてくれないのだ。

「そんな顔しちゃダメよ！折角議長がお食事に誘ってくれているのに」

「いいのだよ。アスランくんの考え方は至極当然の事だ」

アスランを咎めたミィアを宥めて、議長は再びアスランへと顔を向ける。どうやら疑いが表情に影響しているらしく、自分でも目上の人物に向けるべき顔ではない事はわかっていた。

だからといって辞められるものではない。気を抜くには、聞くべき事を深く突き詰める事が必要だ。

「ニブルヘイムもラクス・クラインの事も、君の中に深く根付いて

しまっているだろう。大戦を終焉に導いた英雄なら当然だな」

あっけらかんと言いつつデュランダルに対して募るのは、やはり怪訝な感情で。

その思いは爆発寸前だった。

「……よくそんな軽く言えますね。あなたが許可した物が地球を混乱に陥れ、ラクスの偽物が俺の心を掻き乱す。あなたは何がしたいんだ！」

ミーアが居る事など、アスランの中には既にどうでも良いものになっていた。

この現状を見て、目の前で飄々としているデュランダルの存在がとにかく大きかった。

「…一先ず食事にしよう。既に前菜は用意されているのだ、食さないのは失礼だろう？」

「そんな事は二の次だろう！！世界が再び戦火に覆われようとしているのに、暢気に――」

「君は何か勘違いをしていないかね？」

勘違い？俺の考えの何処が的外れだというのだ？

完全に虚を突かれてしまい、押し黙ったアスランにデュランダルは続けた。現実はその簡単なものではないと、子供に言い聞かせるように。

「君は確かにヤキンドウエを終結させた。自分が救った世界をもう二度と焼かせたくないのもわかる。だが、争いを求めるものが居る限り、戦いの無い世界等創れやしない」

経験してきた無情が、デュランダル脳裏に蘇る。鮮明に映り過ぎて吐き気を催す程だ。

「まして、目の前にあるものを処理出来ない者達に、そんな事を言う資格等無い。君はどんな立場でそんな事を言うのだね？」

ぐうの音も出せなかった。議長の言う通り、アスランは自分が持ちえた力を捨て去っていた。

統べる立場も、制する力も手中に無いというのに、今の俺は水に映る自分に吠えるライオンくらいに滑稽だ。

その事に漸く思い至り、アスランは席につく。しかし、心ここに在らずだった。

それからは何を話し、何を聞いたのか憶えていない。いや、もしかしたら何もかも拒絶していたのかもしれない。

目の前に出される料理に手を出していた事ぐらいいは思い出せるのだが、ミィアの表情だとか、デュランダルの言葉だとか、殆どを自分でわからなくしていた。

「君にはもう少し時間が必要かもね。よく考えて、決心がついたらもう一度訪ねてきなさい」

そう言ってデュランダルは、会計を済ませて部屋から出ていった。
まった。

深く気持ちは沈んでいく。

確かめたい事がある？自分の気持ちも思いも定まらないのに、何を
聞こうというのだ？

目の前の大局にばかり瞳を向けて、もっと大切な事を忘れていたの
だ。カガリの顔が霞んで見えていた。

「――ねえ、アスラン。ねえったら！」

隣で話しかけてくれるミーアに気を回せる程の余裕は無い。あるの
は自分の矛盾を悔いる、どうしようもなくやる瀬ない感情だけだっ
た。

PHASE-19 好きになってもいいのね! (後書き)

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

さて、一週間も更新が出来なかったのだから、さぞかし練った内容なのかと思いきや、そうでも無かったりします。流石に年始は忙しさにかまけてしまい、中々アイディアが浮かんできませんでした。

……言い訳はこのくらいにします。本当に申し訳ありませんでした。それと更新なんです、今度からは五日に一回のペースにしようと思っております。何卒、ご理解の程をお願い致します。

では、お疲れ様でした。

PHASE-20 もう大丈夫だ（前書き）

また繋ぎの色が強い話になります。

あまり進んでいませんが、お読み頂けるのならお付き合いお願い致します。

PHASE-20 もう大丈夫だ

静かに流れていた時間が俄かに活気づく。漸く朝を迎えたミネルバのMSデッキは盛り上がりを見せていた。

それが仕事でのものでは喜ばしい事であるのだが、メカニック達が集まっているのはテレビで。そこに映る歌姫に夢中なのだ。

唄が盛り上がる度に上がる奇声が、無骨な壁床を晒すデッキ内で反響する。仕事を黙々と熟しながら、マッドは注意する気にはなれなかった。

ここまでの間、娯楽に時間を割く余裕等ある筈もなく、あまりにも切迫した緊張を味わい続けてきた。しかも戦闘となれば、艦にもMSにも損傷は付き物で、その整備に迫られる始末。

オーブに入り、調整も修理も一段落ついたのだ。これくらいのご褒美がなければ、人は精神的に疲弊してやっていけない。

「それにしても、本当にかわいいよな！ラクス・クライン！」

テレビの真前、最前列で声を上げるヴィーノが叫ぶ。声を張り上げなければ、隣に居るヨウランにさえ聞こえない程の熱狂なのだ。

「ああ。でも彼女、雰囲気変わったよな！」

画面に向けていた視線を隣へ移したのだが、ヴィーノは彼女の動きに釘付けにされているようだ。

(…まあ、いつか)

ヨウランはまた目の前にある画面を注視する。

明るい曲調に合わせて踊り、動きに従うように舞うピンクの髪。やたらと強調されたボディラインといい、記憶にある彼女と復帰した彼女とでは、印象どころか本物か疑いたくなる程に劇的な変化を遂げていた。

しかし、彼女は彼女だ。どんなに変わろうとも、プラントの人々の心を癒してくれて、荒んみ昂ぶった気持ちを沈めてくれるのだ。

それには、証明も核心もいらない。ラクス・クラインは《ラクス・クライン》なのだ。それ以上も以下も無い。考えるだけ無駄だ。

そんな光景を見て、うんざりしたような顔をする者が居た。ラグナロクの整備をするマッドの反対側、ザク・ウォーリアの装備の点検をしていたクロードだった。

露骨に浮かべられた反感の感情を画面へと向け、陽電子砲の出力調整イフリートをしていた手は止まっていた。

そもそも、MSに陽電子装備を取り付けるのは理論的に不可能だと言われていた。それを可能にしたのが、この砲身の先に追加する事に因り、強力な陽電子の光を放つ狙撃用の武装となるイフリートだ。

ガンダムといえど、大抵の機体では出力が足りずに操る事が出来ない。しかも、数発撃つだけでエネルギー残量を大幅に削ってしまい、行動不能となってしまう。

しかし、ガンダムを超える汎用型を目指したこのザクなら、それが可能であった。

ブレイズ、ガナー、スラッシュといった出撃時に応じた換装が出来る機構を利用し、クロードはガナーウィザードに陽電子の砲身を追加したのだ。

そうする事によって、MSのエネルギーを喰わずに砲撃する事が可能となり、ガナーウィザードを外部パックへと改装してあるので、ある程度の弾数をも確保出来るのだ。

しかし、問題も当然ある。

一つは追加した陽電子砲の砲身も相俟って、かなり巨大な装備となってしまう事だ。中々長距離ならどうと言う事もないのだが、近接戦では邪魔にしかない。

そこでレイの機体への装備は断念した。彼は平均的に好成績を残しているが、それは近接戦ありきのものである事が養成所のデータから推測出来た。そんなパイロットが操る機体に、狙撃用の武装を追加したらあまりにも拙い。

シンという選択肢は始めから無い。インパルスの換装機構は機体との連結を必要とする。そこに外部パックを別途用意すると、その重さで機動力を失ってしまう。

それならブラストシルエットに追加するのも良さそうに思えるが、今度は先程のエネルギー関係の問題が浮上する。

やはりルナマリアしか居ないという訳だ。

尤も、クロードは最初からルナマリアのザクへと武装させるつもりでいた。

最初は女性を最前線に立たせたくないという思いが強かったのだが、MS搭乗時は射撃の才能が遺憾無く発揮されるようで、ここまでの戦いでは敵を分散させたり、逆に纏めたり、戦略性をより高くしてくれていた。

良い意味で裏切られたのが、クロードには嬉しかった。

……そう言えば、問題はこれじゃなかった。ステラの事だ。

今は細胞の死滅を防ぐ薬と鎮静剤で、普通に会話したり、歩いたり出来るようになってはいるが、その薬ですら寿命を縮める要因となる。

流石のラルスでもカルテが無ければどうしようもないらしく、今はこんな延命措置しか出来ないという。

早い所、エクステンデッドに関する情報が引き出せる基地か何かを見つけるか、ステラ達の上司と思しき、あの仮面の男を次に出てきた時に捕まえるか、現状では二つの方法しかない。

それに深く傷付いているのはシンだけではなく、ルナマリアも同様だった。いや、もしかしたらより深く刳られていたのかもしれない。

あの後、ベッドを眺める瞳は驚愕一色に塗り潰され、淡い光を湛える瞳も暗く沈んでいた。

世界の酷さを改めて痛感し過ぎたのだろう。自分と同じ、それより幼いかもしれない静かに寝息を立てる少女を、戦争の為の駒へと改造するという残酷さ。

新米の兵卒では堪えてしまうのは当然だ。

そして、今はシンと一緒にステラと居るだろう。多分ラルスの言葉に触発されたのだろう。

周りとの関係が充実すると、生きたいという感情がどんどん強くなる。その気持ちは下手な延命治療よりも効果が高い。

……いや、これでもなかった。

今の問題はそう、目の前に映し出されているラクス・クラインの事だ。

クロードはラクスの名を、クルーゼ隊でメカニックをしている時に知った。いや、知ったというよりは初めて見たという方が正しい。

アークエンジェルの捕虜――ザフト内部ではこう処理されている――となってしまったのを、返してくれるというのでアスランが迎えに行つて、連れ帰った時に紹介されたのだ。

初めて対面での感想は、衝撃的と表現するのが正しいのかもしれない。

惹き付けられる雰囲気、全てを委ねても悔いは無いと思わせる圧倒感。彼女の青い瞳に抗う事が出来ずに、真っ直ぐに見詰める事しか出来なかった。

そして彼女はやりわりと微笑んで、隣に立つアスランへと顔を向けていて。婚約者同士とは思えない、遠回りな会話が始まったのだ。

しかし、クロードは何を話していたかを、一切記憶に留められていない。

目の前の存在に底知れぬ恐怖を覚えると共に、年端のいかない少女に畏敬の念を抱いてしまっていた。

それが、今日の前で繰り広げられているような、偶像としての憧憬なのか、或いはその圧倒感を放つ地位や名誉に眩んだのかは、あの時の自分には判断出来なかったが、今ははっきりと言える。どちらも違う、と。

止めていた手を再び動かす。大気圏での調整を失敗すると、陽電子は恐ろしい事故を起こしかねない。

ある一定の出力を超えている場合、宇宙と違い電子が溢れている大気圏では、電子へと変換されたビームから少しづつエネルギーが漏れ出す。

放たれるビームは、外から電子を取り込む訳ではない。そして空気中に存在する電子の量は決まっている。

つまり、飽和を迎えた大気中の電子が暴走を始めて、下手をすれば敵味方全てを巻き込んで爆発を引き起こす。それも反電子も相俟ってしまい、被害は拡大するばかりだ。

だから、クロードはステラが心配でもこうして調整に赴いている訳だ。

本来ならメカニックに任せてもいい仕事だが、ルナマリアへ換装を進めたのは自分自身だし、何より昼夜問わずに修理を行っていた彼等に休んで欲しかったのだ。

まあ、目の前の光景は休んでいるとは程遠いものであり、上げられる声には絶叫にも似たような響きを印象づける。

クロードは溜息を吐き出す。疲れたからじゃない、画面に入り込もうとしているようにも見受けられる、内のメカニックに対しての憐れみが籠められたものだ。

「クロード！」

その喧騒を切り裂いて鼓膜を震わせたのは、凜とした響きを残す少し低い声。

ザク・ウォーリアの腕部分から下を覗く。やはりそこに居たのは長い金髪の少年だ。

「レイ！どうしたんだ！」

殆ど叫ぶように声を搾り出す。そのくらいしないと、距離的に一番近くに居るレイにさえ聞こえない始末だ。

「艦長が呼んでいる！至急、艦橋に向かってくれ！」

「わかった！」

それだけ伝えて、レイはMSデッキを去って行く。

イフリースの調整パネルを一度確認する。どうやら上手く出力を抑えられたようで、それを閉じて、機体を伝って無骨な床へと飛び降りる。

ガンッ、と勢いを示すような音が足元で鳴ったのだが、それに反応する者は誰一人と居なかった。

それ程に彼女を心酔し、半ば敬っていると思うと、再び口から吐き出される深い溜息を止める気にはなれなかった。

「…シン？どうしたの？」

ハッとして、隣から見上げてくる赤紫の無垢な瞳見詰める。

先程まで死んでしまいそうな程に青褪めていた顔は、今では健康な状態そのものだ。ラルス様々な訳だが、それさえも命を縮めるものである事を知っているシンにとっては、不甲斐なさに打ちのめされる要因にしかならなかった。

「…何でも、ないよ。俺は大丈夫」

弱々しい笑みが浮かんだ。誰が見たって心配するような顔をしているというのに、そんな顔を作ってしまったえば余計に印象を強めるだけだ。

「どこが大丈夫なのよ。そんな顔で言われても、説得力無いわよ？」

目の前の椅子に座ったルナマリアが呆れ顔を見せる。

太腿に肘をついて、合わせた両手の上に顔を乗せて半眼で睨めつけてくるのだから、シンはたじたじになるしかない。

「な、なんだよ……」

「：別に～。こんな可愛い娘を襲わないなんて、シンみたいなお子ちゃまには無理だったんだなーって思ってる」

「だ、だから！俺はそんな事してないって！」

必死に反論をする。誤解されたまま気不味く過ごしていける程、シンの神経は太くなかった。

横に座るステラは訳がわからないらしく、キョトンとした表情で首を傾げていた。

それを見てルナマリアの半眼は疑うのをより深めていた。ジトーツとした視線を向けられて、居心地が悪くて仕方ない。

「ふうん、へえ～。同じベッドで寝ていたのに言い訳するんだ？ステラも可哀相に」

「ぐっ……！」

それを言われてしまうと反論の余地を失ってしまう。

あの夜、確かにロックを掛けて部屋を後にし、そのまま自室のベッドに飛び込んだ所迄は憶えているのだが、ユニウスセブンの件からの忙しない日常で溜まった疲れのせいで、そのまま寝てしまっていたのだ。

ステラと居る時も、時々船を漕いでいたのだから、全ての記憶に曖昧さがある訳だが、ロックをした事だけははっきりと断言出来る。

それでも同じ部屋で、同じベッドで、しかも軍服は既に脱いでしまっている場面を、いきなり入ってきたルナマリアが誤解するのは当たり前ではある。

「何、言い返さないの？」

ルナマリアの険のある言い方にふっと浮かんだ疑問があった。

シンは怪訝な表情を浮かべて問い掛けた。

「なあ、何でそんなに突っ掛かってくるんだ？」

一瞬、ルナマリアの表情が固くなったのを、顔を見ていた筈のシンは見逃していた。

「そりゃ俺の不注意か何かで、ステラとそういう関係になったとしても、ルナには関係無い事だろ」

「……た、確かに関係無いわ。で、でもミネルバの風紀が乱されるのを黙って見ていられないのよ！」

「それを言ったら、ルナのスカートだって風紀を乱してるんじゃないかな
いか？」

「う…」

今度はルナマリアが反論の機会を失う結果となった。履いているピ
ンクのミニスカートを、見つめるように俯いてしまって、シンもど
うすれば良いかわからなくなる。

沈黙が静寂を齎す。

「…大丈夫？ シンもルナも苦しいの？」

ステラの言葉は、二人の心に出来た蟠りを打ち払った。事情を知ら
ないからかもしれないが、素直に心配を口に出せる事が和やかにさ
せてくれた。

「…大丈夫だよ。俺もルナもちよつと考える事ができちゃっただけ
だよ」

「そ、そうよ！ 心配してくれてありがとう」

何故か慌ててしまっているルナマリアの様子を、ステラは疑問に思
わなかったらしく、大丈夫だという言葉だけで顔が綻んでいた。

そんな風に感情を表に出せるのが、ルナマリアには羨ましかった。
それにそんなステラを見守るような、優しい瞳を向けるシンすらも。

「…うん！ 二人は仲良し。ステラも仲良しだね？」

ステラには驚かされるばかりだが、ここまで打ち解けられるとシン
は思ってたなかった。

初めて会話らしい会話をした時なんて、いきなりの警戒と暴走で困
惑するは、渋々追い掛ける事になるは、湖に落っこちて溺れている

は、それを助けようとする抵抗されるは大変だったのだ。

しかし、今のステラからは警戒という言葉が剥がれ落ちたように、ルナマリアを信頼しているように見える。

それは先程と呼んだ事にも表れている気がする。ただシンの真似をしただけでも物凄い進歩に思えてならない。

「…そうだね。三人は仲良しだ!」

何だか気分が軽くなった気がする。それと同時にステラを救いたいという気持ちは、急速に凝固していった。

考えるのはクロードとラルスに任せて、作戦の実行等の動いていられるような事をしていた方が自分に合ってる。

頭を使ったって高が知れているのだから、助けるために行動出来るようにしておかねば。

「……………」

ルナマリアの気持ちは複雑だった。シンに問われた、どうして突っ掛かるのが引っ掛かっているのだ。

(…自分でも良くわかんないのに、答えられる筈無いじゃないよ)

そう、ルナマリア本人にも良くわからないのだ。そんな中でも感じているのは、嫉妬にも似た羨望。

上手くいっているように見える二人が、擦ったいような気もするのだが、何か釈然としないものを覚えてしまうのだ。

それはどうしようもなく溢れてきて、とめどなく脳に何かを訴えてくるのだ。

それは不確かな水のように、掴もうとすると摺り抜けてしまうのだが、放って置くといつの間にか思考を満たしてしまう、制御のしようが無い思考だ。

「ルナ？どうかしたのか？」

曖昧な思考から声を掛けられた事で抜け出すと、目の前には紅の瞳があつて、一瞬どぎまぎとしてしまいそうになる。

しかし、気取られたくないルナマリアは慌てる感情を無理矢理に押し込む。それが却って不自然に見えてしまう事を気にもせず。

「な、何でもないわよ。いきなり目の前に出てこないで！」

返答への一瞬の歪みが、シンに不信を植え付けるのは当然の事で、ぐっと見据える瞳から、何故か目を離させてくれない。

（……ああ、まただ…）

心が揺れて仕方が無い。やはりこの不確かな思考は、嫉妬と同じような感情なのだろうか。

あの夕暮れの休憩室で軽くなった気持ちだが、また重量を増してのしかかってくる。

定まらない自分の感情は決まったと思ったのに、少しの変化で自分

ですら理解出来ない感情へと移り変わる。

朝方にメイリンに明かした気持ちだが、本物である事を祈りたいときえ考えてしまう。

弱気が口から漏れそうになったその時だった。

「ここに居たのか、二人共」

チクリと心臓に小さな痛みが走る。入室してきた人物がそれだけでわかってしまったのは、ある意味良い事かもしれない。

「クロード？何かあったんですか？」

怪訝そうに、半ば嫌がった表情をシンは浮かべた。ここ数日の密度の濃さに疲れが出てしまったのだろう。だが、今回は悪い報せではないのだ。

「ああ、滞在が長引きそうなんでな、オーブへの上陸許可が下りたんだ。勿論、遊んで来ても構わない」

ミネルバのクルーには、とにかく喜ばしい事だ。

疲れもあるが、長い航行と度々の戦闘での疲弊から戴いてしまった、ストレスを発散する絶好の機会だからだ。

しかし、シンは手放しに喜べなかった。

「けど、やっぱりステラは出れないよな…」

捕虜として扱っている者を連れて遊びに出掛けるなんて、前代未聞

過ぎて艦長が聞いたら、開いた口が塞がらなくなってしまいうだろう。

「ああ、その事ならもう大丈夫だ。ステラは捕虜扱いじゃなくて、保護されたナチュラルって事になった」

「……そうですよね、やっぱりだ――。えっ!？」

シンの表情から驚愕以外の感情が抜け落ちる。

そんな様子を見て、クロードは不敵な笑みを浮かべる。

「あの後ラルスはまだステラの身体の事を調べててな、どうやら記憶操作もされているみたいで、ザフトにとって有益な情報を引き出せ無い事が判明したんだ」

元々の性格は知らないが、この処置のせいでステラの人格は幼いまらしい。ある意味、不幸中の幸いなのかもしれない。

人を殺すという事は、正常な精神を持っていれば少なからず良心を痛める。

しかし、幼いままの人格と犯した罪を忘却する事によって、呵責が起きる事は無い。これは死ぬ迄戦えと同義だが、精神崩壊を防ぐには有用な行いだ。

それにクロードが考えていた、ステラを死なせない為の計画にとって、大きな布石になってくれた。

「それを上に報告してきた。ステラの身体情報も一緒に送ってやったら、流石のお偉いさんもぐうの音すら上げなかったよ」

と言っても、身体能力に関する項目は軒並コーディネイターを凌駕していたので、ラルスと一緒に改竄した事以外をだが。

それを聞いたシンの表情に変化が見られた。

綻んだ口元とは対照的に、潤んだ光を湛えた瞳。その瞳をステラへと向け、思い切り抱きしめる。流れ落ちた雫の一つが、ステラの肩を濡らした。

「…良かったな！良かったな！！」

ステラも嬉しそうに顔を緩めた。多分シンとは違い、クロードの話が喜ばしいのでは無く、シンの温かな両腕が何よりの褒美だと思っているのだろう。

そんな二人を見て、やはり嬉しく思えるのが自分の中の良心を癒してくれる。

隣に居るルナマリアも嬉しそうにして居るといいな、と思い窺ってみると、俯いてしまった顔には影すら感じられた。

「…失礼します」

そう残して部屋を出ていく。あまりの雰囲気しに声を掛けそびれたクロードは、呆気にとられてしまい、伸ばした手も空を彷徨うしかなかった。

傍で何かを言っているシンが居るのだが、少しもその言葉が入ってこない。奇妙な感覚に支配されて、暫く動こうとも思えなかった。

――あまりにも悩む事が多くなるとどうなるか？

人によってはそのまま鬱になったり、開き直って他のものに打ち込んだり。酷い場合には、訳もわからずに狂ってしまったりもする。

ルナマリアはその内の二番目に属し、そのストレスを解消する為に買い物を楽しむことにしている。

とは言えど、今回の悩みは経験してきたものとは正反対のもので、そんな事で発散出来るものとは思えなかった。

それでも、オーブに上陸して始めたのが妹と一緒に買い物する事なのだから、習性というものは恐ろしいものである。

今は服を見る為に、目に付いた店に入ってみた所だ。

モノトーンの物からパステルカラーの物まで、色々と取り揃えられていて、普段の心境であれば、あれこれと手に取って身体に当ててみたり、試着してメイリンに感想を聞いてみたりしたのだろうが、そんな明るい気持ちで湧いてこない。

それはメイリンも同じようで、暗い顔でマネキンが来ている喪服と間違えるような、全身黒のコーディネート眺めている。

普段なら原色系のパステルカラーを好んで手に取ったり、財布と睨めっこをしている筈なのだが…何かあったのだろうか？

「ねえ、メイリン。何かあったの？」

ルナマリアはグレーの中折れハットを手に取りながら、さりげなく聞いてみる。自分だって心に余裕がない筈なのだが、落ち込んだ妹

を見ているのは、やはり堪えるのだろう。

「……うん…」

なんと言うか、心ここに在らずといった表情で曖昧に頷いたメイリンは、今度は黒のバルーンスカートを手に取った。

どうも、自分と大して変わらない事を悩んでいるような気がしてきた。

「あんた、クロードの事で悩んでるんじゃないの？」

「ど、どうしてわかったの!？」

(ビンゴ、か)

何ともわかり易い妹だろう、と苦笑が漏れた。それは自分にも向けられていて、姉妹二人して同じ悩みを同時に抱えるものだから、ある意味超能力にでも目覚めた気がしてきた。

「あんたは顔に出し過ぎなの! そんなんで良く管制官が務まるわね」

「そういうお姉ちゃんだって顔に出てるわよ。クロードさんに何か疚しい事でも隠しているみたい」

凶星を突かれてしまい、ルナマリアは被ろうとしたベージュを基調としたハンティング帽を落としてしまう。

ぱさりと床に落ちてひっくり返った姿が、呆然とメイリンを見詰めるルナマリアとシンクロする。

抱えてしまっていた気持ち、バケツをぶち撒けるように散らかってしまい、收拾がつかなくなりかけていた。

バルーンスカートを掛け直して、珍しく何も言い返してこない姉を見遣る。すると、そこにはぎょっとせざる得ない光景が広がっていた。

「……………」

静かに頬を流れ落ちていく雫を見付けて、メイリンは慌てて姉の手を引いて店を飛び出した。勿論、床に落としてしまった帽子は元あった場所に戻して。

少し歩いた場所に小さな公園を見付けて、姉を白いベンチに腰掛けさせて、その横にメイリンを座る。公園は小さな子供達の格好の遊び場のようで、楽しそうに騒ぐ声が時々耳を劈いていく。

そんな中でもルナマリアは俯いてしまっていて、天気と正反対の心模様のようだ。

こちらだって朝からあんな光景を見てしまって、憂鬱になっているというのに。

それから数十分後、ルナマリアは漸く落ち着いたようで、手で涙を掬いながら、ゴメンと一つ落とした。

「どうしたの？　なんかお姉ちゃんらしくないよ？」

自分が言葉のせいで、奥深くに封じたかった思いが溢れてしまった

等と露知らず、メイリンは尋ねていた。

しかし、それも姉を心配する故の気遣いなのかもしれない。

「…あんたになら話してもいいかな」

ぽつりぽつりと告げられていく事は、メイリンにも良くわかる事だった。しかし、それに対する答えは持ち合わせていなかった。

その絡み合った柵のような思いを断ち切るのは、人生経験の浅い者には不可能なのかもしれない。

「そう、シンと捕虜だったあの娘が笑い合っていると、無性に悔しく思えてしまうのね」

それは嫉妬だとメイリンにも思えたのだが、何に対してなのかがはつきりしない。

考えられるのは二通り。

シンとステラの関係が羨ましくての羨望に近いものか、それともシンを取られてしまったと妬んでいるのか。

それを知るのはルナマリア自身だけだし、解決出来るのもルナマリア自身だ。

そう考えると、自分の悩みがどうしようも無い事だとわかるので、暗い気持ちに陥っていつてしまう。

「それはどうにかできるかもしれないけど、クロードさんには思いが伝わらないかもしれないよ」

「…えっ？」

俯けた顔を上げてメイリンへと視線を向ける。不穏過ぎる響きが妹の放った言葉にはあって、次の言葉が出てくるまで顔を注視する事を止められなかった。

「朝さ、見ちゃったんだ。クロードが誰かをお姫様抱っこして走っていくのを」

ルナマリアは言葉を受けて、何を示すかの検討がついてしまって、込み上げるものを抑えられなくなってしまった。

それが思いが伝わらないと繋がったのだろうか？だとしたら、やはりメイリンは相当に早とちりをしている事になる。

「なんかお似合いの二人って感じで、話し掛けるのも躊躇うくらいだった…」

尚も続くメイリンの独白に、とうとう吹き出してしまった。文字通りに。

「…ぷっ…あははは！」

突然隣から聞こえてきた笑い声に驚いたメイリンは、とうとう壊れてしまったのかも、と憐れみの視線を向けたのだが、次のルナマリアの言葉に心境が少しだけ変わったのだった。

「それあたしも見たけどさ、抱えてたの誰だか知ってる？あのラルス・スペレル先生よ」

「えっ！そうなの！？」

メイリンもラルスという名前で男だと思っていた口で、成程と納得した部分もあるが、また新たな疑問が浮かんできたのと同時に、また気分が落ち込んでいく。

「でも、ラルス先生だったとしても、あの二人が恋人同士でもおかしくないじゃない？見た目はかなり若かったし」

：そう言えばそうだ。その事を見落としていた事に、ルナマリアは驚愕を隠せなかった。

思い返してみると、二人は妙に通じあった気がしてきて、不安が気持ちを覆っていく。

そんな二人の感情とは裏腹に、先程まであった雲すらも掻き消えた、突き抜けるような青空が頭上に広がっていった。

PHASE-20 もう大丈夫だ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

今回の話は色々な事に対する補完の意味合いが強い話になりました。ルナマリアのザクに陽電子が装備されている事が主ですが、これは最初の方でガナーウィザードと陽電子砲を間違えていた為の措置です。

今後はこのような事のないように致しますので、ご了承の程を。

では、お疲れ様でした。

PHASE-21 ある意味の保険だ（前書き）

アクセスして頂き、ありがとうございます。

では、お暇でしたらお付き合いをお願いします。

PHASE-21 ある意味の保険だ

風は凪いでいて、海は静かに波打つ。偉大な海と言えど、風の力無くして荒れ狂う事等出来ない。自然の力は互いに干渉しあって、より偉大な姿を見せる。

そんな関係は人間にも当て嵌まり、一人では自然程の強さを持てないが、数人集まるだけで世界を変える力を手にする事が出来る。

ヤキンドゥーエは、そんな関係性の典型的な例だろう。

ザフト、地球連合軍、物量差が圧倒的な二つの勢力をたった二つの旗艦と、数機のガンダムだけで終戦へと導いたのだ。

信じられないような事実を聞いた。脳幹を揺さ振られ、目眩まで起こしそうになった。

普通なら数の暴力の前には、どんな力だって押し潰されるのがオチな筈なのに、そんな定説を覆しただけでなく、それをやってのけたのが、あの時オノゴロ上空を飛び回ってた奴らだと知った時は、余計に怒りが込み上げてきたのだ。

八つ当たりだって事はわかっている。あの時のオーブが揺れていたのが原因だし、そんな愚かな国家を守る為に戦ってくれていたのだとわかるからだ。

しかし、本能は無意識に怒りを復讐へと変えていく。敵う筈無いとわかっているのに。

「……何だ？あれ」

沿岸を歩いていたシンが見付けたのは、小さな岬にぽつんと建てられた石。

その雰囲気には不思議な感覚が襲い、引き寄せられるように近付いていく。

視認出来る位置まで歩み寄るがそれが何で、何の目的でここに建っているかを理解すると、消えかけていた怒りが燃え上がりそうな気配が訪れる。

「……慰霊碑……！」

こんな簡単な労いで、死ぬ間際の苦しみが癒せる訳が無い。霊が化けて出たり、その地に留まる大半の理由は死に際の苦しみが、身体を失ったのに無くならないからだという。

そんな痛みを抱えたままでは、天国も地獄と同じだろうし、地獄は更なる地獄へと化してしまう。

…そう言えば、

（あの時のマユは苦しんでなかったな…）

そう考えると、急速に怒りが萎んでいくのがわかった。こんな慰霊碑でも、死者の魂を癒してくれているのだったら、無駄なものでは無いと感じられ、ごつごつとした表面に触れてみた。

目の前で飛び散った家族の最期が浮かんできたが、目を背ける訳に

はいかない。

――今迄の怒りに任せた戦い方を改める為にも。

「……よし」

瞳を開き、現実を見据える。今自分がしたい事、いやしなければいけない事が示された気がして、シンの顔には強い決意が浮かんでいた。

過去と決別するように振り返ると、そこには人が立っていて、こちらをじっと見据えているように見えた。

「…君はいつもここに？」

初対面だというのに、少しの変化も見せずに問うてきたのは、茶髪で紫苑の瞳を持つ青年だった。

見た所、クロードやアスランと大して変わらない年齢だと思うのだが、何故かシンにはそれよりずっと幼いような印象を受けた。

「…いえ」

短く、素っ気ない受け答えをしてみる。

話し掛けられて返事をしない程失礼では無いが、知らない人とすぐに打ち解けられる程に外向的でも無い。

「そう」

素っ気ない返事には素っ気ない返事を、という訳ではないだろうが、呟くように短く言葉を残すと、シンの横を通り過ぎて、青年は慰霊

碑の上から下の方へと一回撫でた。

その雰囲気、シンの中に不思議な感覚を齎す。石碑を見下ろす青年の瞳に、例えようなない感情が溢れた。

「…あなたはここに来るの、始めてじゃないんですか？」

気持ちの良くない感覚を紛らわせたくて、シンは青年へと言葉を掛けていた。

石碑を見下ろしていた瞳がシンへと向く。それだけだと言うのに、このそわそわと落ち着かない感覚はなんだ？
まるで逃げ出せと急かしているようにも思えるし、この人から話を聞かなきゃならないとも思えてしまう。

「ううん、僕も始めてなんだ」

向けられた視線が次に向かったのは水平線で。いつの間にか夕暮れていた朱い海の向こうに、シンにはまるで誰かを見ているように思えた。

「来なきゃいけないとは思ってたんだけどね」

そう一言だけ理由とは言えない補足を加えて、青年は石碑の周りを見回した。何か気になる事でもあるのだろうか？

「ここに花を植えたって聞いてたんだけど、潮風で萎れちゃったみたいだね。また種を蒔かないと」

ここはあまり高くない岬だ。少し海が荒れてしまえば、打ち寄せる

波の飛沫を受けて、花は枯れるし種は萌えない。

それは、この世界で再現なく続いていく争いを象徴している気がしてならない。

「…ごまかせないって事かも」

「えっ？」

「いくら木を育てたり、花を咲かせたとしても、人間は平気で焼き払う。ちよつとの諍いや軋轢で」

自然を破壊する事なんて、ずっと前から懸念されてきた事だろうが、この構図に考えるのは、海と風の争いによって被害を一方的に受けている関係が、ザフトと地球連合、或いは大西洋連邦による飛び火をまともに受けてしまっている大衆のように見えてしまうのだ。

その萎れが示すのは、戦争に必要な金を捻出されてしまい経済的にも、精神的にも追い込まれてしまったという事。

「君…？」

ただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、怪訝そうな瞳をシンへと向けた青年は、躊躇いがちに距離を詰める。

この少年が何を見て、何を聞いて、何を考えているのかを確かめておかねばならないと思ったのだ。

「でも、また植える事も大事だと思うんです。そしてそれを守る事も」

(……守る事……)

目の前の少年が、青年の中で先程より大人びて見えてきて、今の逃げ回っている自分と比べてしまった。

守りたかった世界は、たった一年という月日でまた愚かな争いを起こそうとしている。それが悔しくて、情けなくて、ここで犠牲となってしまうた人々に謝りにきたのだ。

そんな簡単なものではないとわかってはいるが、この地で眠る人々があまりにも可哀相な結果になってしまった。抑止力すら封印してしまった、自分の弱さが呪わしい。

「……君は格好良いね、ちゃんと自分がしたい事を見失っていない」

「格好良いって……。俺はただステラと生きたいだけで……」

照れながら、頭を二、三度掻いたシンだったが、青年の動きはどこか虚ろで、実体を伴っていないようにも映る。

「それに比べて僕は……。やるべき事から逃げているのかもしれない。もう、あんな思いをするのは嫌なのに……」

戦争で人が命を散らすのは道理であり、一々傷付いたり、悲しんでいたりにしている暇等無い。次々と迫りくる敵勢力を落とさなければ、散るのは自分の命なのだから。

だからと言って、人を殺してしまう事に慣れてしまっただけは、ただの殺人鬼と変わりはない。

心の奥に戦う為の信念があるからこそ、戦場に立つ人間は負けられないのだ。

だが、今の自分にはその信念が定まらずに居た。この力が存在するだけでも罪深いというのに、守るという名目で《自由》を解き放つてもいいとは思えなかった。

「それがどんなものか知らないけど、ここで眠る人間を参れるあなただったら、大丈夫だと思いますよ」

やりたい事を見失っていないのではなくて、また見付け出したというのが正しいシンにとって、それは自然と着いてくるものである気がするのだ。

そうでなければ、怒りに支配されていた自分がこんな心境になるなんて考えられない。

人の切っ掛けなんてそれぞれであり、その個性こそが色とりどりの世界を見せてくれる要因だろう。

「…君にそう言って貰えると心強いよ」

「そ、そんな。買い被り過ぎですよ」

謙遜するシンから視線を外し、青年は手を合わせて祈りを捧げる。思うのは、弔いの念か、労いの言葉か、それとも誓いを立てたのか。何となく、シンは話し掛けてはいけないと本能が感じていた。

アプリリウス市は今日も晴天が広がっていた。天気予報によれば、午後から曇り空に変わると言ってはいるが、人工的に調節された天候なのだ。

地球で過ごしてしまったアスランにとって、それが虚しい物であるように感じられていた。勿論、昔の自分ならそんな事で悩みはしなかっただろうが。

あの頃は、軍に入って地球連合を潰す事ばかり考えていた。母さんを殺した、あの血のバレンタインの復讐は、エイプリルフル・クラシス程度では満足出来ていなかった。

それによって起こる地球の異常気象や、電気系統の故障、エネルギーの供給不足。その事態が何十億という人を殺し、ザフトに対して憎しみを抱く事を失念していたのだ。

しかもクロードも犠牲者の一人となり、唯一の肉親である父親を亡くし、サバイバル生活まで余儀なくされた。

本来なら地球軍に組みして、プラントを討っていてもおかしくなかったのだが、あいつはこちらへ亡命を果してザフトへと入隊した。

何故か迄は知らないが、相当な決意と覚悟があったと考えいいると思う。

点けていたテレビの天気予報は、あまり意味のない言葉を並べ続けている、アスランは少しうんざりした。

手配しておいた朝食を口に放り込んで、これまた手配していたコーヒーで流し込んだ。

苦くもなく、酸味も少ない。コーヒーとしては中途半端な味だった。少し背凭れに寄り掛かり、瞳を閉じた。昨日の議長との食事が思い出されて、知らずに溜息を落としていた。あ後のミーアの積極性に、だ。

議長との会談で打ちのめされた気分を味わったのを引きずっていた。重い足どりで部屋へと向かっていて、ちょうどレストランを出た辺りだった。

《アースラン！》

名前を呼ばれたかと思うと、いきなり腕に飛び付かれてぎょっとしたと同時に、違う意味で頭痛がし始めたのだった。もう持病の欄に頭痛、と書きたくなる程だろう。

《部屋へ帰るのでしょうか？ わたくしも一緒に行きますわ！》

周りに人が居る場合、ミーアの口調はやはりラクスのものになるのだが、満面の笑みで他人の腕を取るような事を、彼女は絶対しないだろう。

まあ、普段の姿を知る者は少ないのだから、バレる危険性は低いけれど。

それは置いておいて、自分の頭痛はある意味予知能力のように思えてきた。そう、嫌な予感がするのだ。

何をしに来るんだ？ とそのまま聞いてみた。それが、もの凄い苦労を生むなんて知らずに。

《何って…。公衆の面前でおっしゃれと言うのですか!? アスラン
って以外と S——》

いや、そうじゃないだろう、とツツコミを入れておく。これ以上喋
られと何を口走るかわかったもんじゃない。

《…冗談ですわ。それにしても以外です。あなたがこんなに鈍いな
んて》

ミーアは絡めていた腕を解いて、アスランの目の前へと踊り出る。
その表情は小悪魔にも似ていて。

《婚約者同士が同じ部屋でする事なんて、昔から決まっているでし
ょう?》

囁かれたのも小悪魔の誘惑だった。誘われる程に飢えている訳でも
なく、心に浮かぶ人が居るので自然とブレイキは効く。

だが、どうやって躲せば良いのだろう。ある意味、MSでの回避行
動に似ている気がした。こちらの方が遥かに難しいけれど。

まずは強めに否定してみた。長旅で疲れてると突っぱねて、耳元で
付け加える。もう婚約者じゃないと言っただろう、と。

《まあ! 久し振りにあった許婚に、そんな冷たい態度をお取りにな
さるのね!》

瞳が潤み出し、それを両の手で隠すように泣き出してしまったのは、
これ以上強く否定するのは憚れた。

それに先程ミーアが言った通り、ここは公衆の面前、レストランの

入口なのだ。

これから食事を取ろうと中に入っていく人も、食事に満足して出てくる人も通っていく訳で、彼女の様子を窺う周囲の視線が痛かった。泣かないように宥めてみるのだが、意味はあまり無いようでそのまま泣き続けている。

…しょうがない。人の目が痛すぎるて胃がキリキリと痛みを上げそうで、あまりにも堪え難くなってしまったアスランは、ミィアの手を取ってその場を後にした。

そして辿り着いたのは勿論アスランが泊まる部屋。迂闊だという事はわかつてはいるが、あの場の雰囲気拒否をし続けてしまうのは、あまりにも無茶で憚れた。

そして、その後も必死の説得を試みては見たのだ。けどどれも効果は薄くて、帰ろうともしてくれなくて。

終いにはシャワーを浴びて、部屋に一つしかないベッドに入ってしまったのだから始末に負えない。

額に手を当てる。あまりにも苦労が積もり過ぎて、熱を出して倒れてしまいたいぐらいだ。

もう疲れてしまったアスランはベッドに背を向けて、近くのソファーに寝転がる。寝心地は悪いが、今日会ったばかりの女性と一緒に寝るなんて、デリカシーの無い事をするつもりは毛頭ない。

すると、布擦れの音が背後から聞こえてきて、本能的に欲望がむくりと起き上がる。駄目だと自分に言い聞かすが、あの魅惑的なミィアの身体が押し付けられた感触が妙にリアルに思い出されて、鼓動

は早まるばかり。

そんな生殺しの状態に見切りをつけたくなって――決して本能に負けた訳じゃない――、思い切って身体を立て直すと、目の前の光景に安心したような、がっかりしたような形容したくない感覚を持て余した。

《ねえ、そんなに帰って欲しいの?》

いつの間に用意したのか、先程迄の衣装ではなくなっていて、これまた煽情的なネグリジェ姿で立っていて、少し拗ねたような表情を見せていた。

《なら、一つ言う事を聞いてくれたら帰るわ》

あまりにも突拍子の無い事でなければ、平和に寝れるなら今のアスランに受け入れない理由は無い。

聞いて上げると伝えようと、一気に嬉しそうな表情に早変わりして、少しドキリとしてしまう。

《じゃあ、ここにキスして?》

彼女の細長い指が示した場所は、普通の人であれば絶対に渡したくない場所であり、アスランもカガリにしかしたくない箇所であった。

そう、それは勿論唇だ。

瞳を閉じて待っているミィアを見ると、持て余した面倒な感情が霧散し、またソファアに寝転がった時のものを持て余してしまう。

しかし、それでも。

(……俺は、カガリを、ミーアを傷付けたくない……)

両方を同時に愛するなんて器用な真似は、自分には出来そうに無い。それに好いてくれるのは嬉しいが、今はミーアの気持ちに答える事はできない。

それに、朝二人で部屋を出る場面を誰かに見られてしまい、ネットに撒かれてしまえば、今度はカガリを傷付ける羽目になってしまう。

――どうすれば良いのか？

意を決した。これ以外の選択肢を辿る訳にもいかない。

アスランは瞳を閉じた。ミーアの肩を掴んで徐々に距離を詰めていく。その時ビクリと固まったミーアを感じて、どうしようも無いものを味わったが、既に止まれやしない。

自分の鼓動が聞こえてくる。少し早いぐらいだろうか。距離を詰める毎にミーアの鼓動が伝わってくるようで、期待からか早鐘を打っている。

顔の角度を傾けて、ちょうど良い高さに顔の位置を修正した。そして次の瞬間、二人の距離はゼロになった。

二人の距離が離れる。ミーアは驚きに瞳を丸くし、アスランは悪戯に成功した事を喜んだように見えた。

《…全くも…。意地悪…》

ミーアは柔らかい感触があった額に触れる。そう、アスランは彼女の要求を半分だけ呑んだのだ。

キスをおでこにする事によって満足するとは思わなかったが、行動してくれた事が嬉しいと言う良く聞いていた。ただ、それを実行しただけだ。

疚しい感情も、やらしい下心も決して持っていない。

さて、目の前の少女の様子を窺う。最初は少し紅潮して拗ねていたようだが、秒単位に表情は柔らかく変わっていった。

そして、漸く部屋を後にしてくれたのだった。あの後脱力と共にベッドに身を任せ、すぐに寝てしまったのを萍かに憶えている。

長時間の移動もあり、考えなければいけない事も増えてしまった。その上、オーブ議会の不穏な動きも気になる。カガリが無事で居るかも。

そんな事を虚ろに浮かべていたせいも、悩みが実体を持ったかのように襲ってきて、朝早くに一度目を覚ましていた。

(……あの嫌な予感は何だったんだ…?)

気味の悪く、実体を伴う事のないものが擡げてきて、脳に直接叩き込まれたかのような、頭痛を齎すような予感。

白い天井を見上げて、小さく深呼吸を行ってみても、結局は募る不

安が心を占めていくのだから効果な皆無だ。

気分を変えたくて、アスランがバルコニーに移動しようとした時だった。二度、ノックの音が室内に響いた。

（…来たか）

アスランは、今日の朝早くに外出したい旨をギルバートに伝えていた。訪問者としてこちらに来ている身なので、どうしても行動に制限が付くのだ。

もしかしたら変装したスパイだったりするかもしれないので、当然の措置ではある。

綺麗な光沢を放つ茶色のドアを開け放つ。そこに居るのは、今回の外出の護衛兼見張り役の方々の筈。しかし、そこに立っていたのは、アスランの見知った顔だった。

「よう!」

手を顔の横まで上げて、気軽に挨拶をしてくれる短い金髪の男と、

「……ふん!」

無愛想に外方を向く銀髪のおかっぱ頭が、二人共にスーツ姿で待っていたのだ。

それにしても変わらないな、と感慨に耽りそうになってしまう。たぶんこの二人は一緒の隊に居て、一緒に行動するのが当たり前なのだろう。見た感じに違和感を全く感じさせない。

「二人なのか？今回の見張り役は？」

「今回？」

ディアツカは不思議そうに首を傾げた。横に居るイザークは、あまり興味が無さそうに腕を組んでいるが、ちらちらとこちらを窺っているのがバレバレだった。

「ああ、アーモリーワンに議長と面会に行った時は、クロードが案内役って事で来たんだ」

「アーモリーワンだと……！そうか、だからミネルバの連中とユニウスセブンに居たのか」

妙に納得したようなイザーク。少し雰囲気が変わったかな？と注視すると、キラに付けられた傷を消したのだとわかった。

「それにしても外に出たいなんて、結構面倒な事を頼むね」

「全くだ。何を考えてるんだ？お前は」

「……墓参りに、さ。こんな時じゃないと行ってやれないからな」

アスランの言葉をすぐに呑み込んで、二人は押し黙る。その意味があまりにも重く、まだ引きずっているのだとわかると、アスランの繊細さが垣間見えるのだった。

「……そういう事だったら早く行くぞ。多分、あいつも寂しがってる」

「……お前からそんな言葉を聞く事になるなんてなく。熱でもあるのか？」

「うるさい！行くと行ったんだから行くぞ！」

ディアツカの軽口にイザークが照れを隠す。何とも平和な光景だ。

しかし、アスランの心境は穏やかでは居られない。あいつを死なせてしまったのは間違いなく自分で。怒りが頂点を振り切って、親友まで殺そうとしてしまったのだから。

(……それに家族の方々にも謝ってない……)

ニコルの家族と面会し謝る。これだけはどうしてもしたい。受け取り方にもよるだろうが、姿を消した事で、息子の命等どうでも良いものと考えていると思われるかもしれない。

それだけは弁解しておきたいのだ。だが、その前に本人に会いにいつておきたかった。惑う自分の心に答えてくれるかもしれない。

「おい、アスラン。何やってんの？置いて行くよ！」

「……済まない、今行く」

覚悟も定まらぬままの心を隠したくて、アスランの表情は固く緊張していた。これから会う友達に見せられるような顔では無いが、簡単に緩められるものでない。

心優しいニコルなら、あんな思いをした戦いが終わったというのに、また争おうとしているこの世界に呆れてしまうのではないかと思うと、自分の齒痒さに腹が立つ。

ギリツと食い縛った歯が悲鳴を上げる。しかし、そんな事は些細な事であるのだ。今のアスランの気持ちでは。定まらない気持ちだが、本当に腹立たしいと思いが空回りを始めていた。

見上げる蒼いガンダムが、自分に早く暴れさせろと語り掛けているようだ。

ユニウスセブンから帰ってきてからは、ますますそう感じられてきて、単独で飛び出そうと日に何回思った事か。

だが、それを許してくれる程一緒に居る連中は甘くはない。特に色々世話焼いてくれるユリは、どうやって知るのか、出ようとする度にやって来てそれとなく注意していくのだ。

「この馬鹿。また出ようとしたな！」

誘惑から意識を断ち、声がした後ろに振り向くとやはり居るのは黒いショートヘアの女性だ。

「うるせえなー。別に良いじゃねえか！俺が行って、あいつらを叩き潰せばいいんだからさ」

この二日の苛々の募り具合は、もう我慢出来ない次元にまで達していた。あの黒と銀のMSを思い出すだけで、簡単に頭は沸騰し、痛めた右手が疼くのだ。

それは、叫んでいるようにエリミオには思えた。早く殺させろと、それか絶望を与えろと。

「…全く。だからあんたに教えなくなかったのよ。こうやって暴走するのが目に見えてるんだから」

呆れたように手を額に当てて溜息を吐き出したユリに、エリミオは険悪な瞳を向けたのだ。そして、彼女の胸倉を掴んだ。やってはいけない事で、どうなるか理解はしているのだが、衝動が抑えられなかった。

「ふざけんな！！俺はマジで苛ついて――」

エリミオの言葉が最後まで紡がれる事はなかった。胸倉を掴んだ右手を取られたかと思うと、次の瞬間には宙を舞っていて、鉄の床に叩き伏せられていたのだった。

「…いい加減に学習しなよ、エリミオ。これで何回目よ？」

そう、エリミオは出撃しようとして止められる度に、ユリに投げ付けられていたのだ。

それで頭が強制的に冷静に戻されるのだが、身体が無事なのは自分が丈夫なのか、それともユリの手加減が絶妙なのか。多分後者だろうけど。

「あんたの苛立ちはわかるよ。自分の憎い相手の居る場所がわかっていて、それを討てないのは相当ストレスが溜まるだろうけど、今は動かない方がこちらとしても都合が良いのよ」

今、ナチュラルの間では開戦への気運が高まっている。そんな中で中立であるオーブに攻撃を仕掛けるのは、第三の勢力が存在する事

を印象付けてしまう。

二つの勢力が凌ぎを削りあっている影で、確実に作業を行うのが我々にとっては一番効率が良い。

「…わかつちやいるさ。だけどそれとこれとは話が違う。あいつがのうのうとしていると思うと虫酸が走るんだよ！」

この子の気持ちは痛い程に理解出来るのだ。しかし、その復讐に傾けられた感情を爆発させる訳にはいかないのだ。

復讐、とは少し違うのかもしれない。事実本人が何かをしたという訳では無いのだが、希少な存在であった事から、エリミオは不幸に陥ったのだ。

それが逆恨みも良い所だとわかってはいるのだが、人間には割り切れない気持ちというのも存在するのだ。

「…私だって、出来るならこんな所で油を売ってたくないわ。けど、まずは愚かな争いを起こして貰うのが、組織の第一段階だった筈よ」

「…くそっ！」

歪んだ表情が、更に怒りで歪みを増す。見ていて痛々しいぐらいだ。それを少しでも癒してあげたくて、ユリは手を伸ばした。

「二人共、こちらにいらっしやいましたか。ガジル様がお呼びです」

突然現れた闖入者に思わず手を引っ込めた。連絡をくれたのは、普段は見回りを主として担当してくれている兵で、この伝言の重要性を暗示していた。

「わかりました。あなたは持ち場へ戻りなさい」

「はっ！」

短く返事と敬礼を象り、兵は足早に去っていった。そしてユリはエリミオの手を取って、これまた足早に司令室へと向かっていく。

今度の任務に一抹の不安を憶えながら。

「来たか、少し遅かったな」

司令室へと入る。相変わらず電気を付けていないので、パソコンから漏れる光ぐらいしか光源が無い。

物も殆ど置かれていないというのに、異様な圧迫感がこの部屋にはあれのだ。

「…今度何だよ？また面倒な暗殺か？それとも、ユニウスセブンみたいな物を気付かれないように動かすのか？」

うんざりした様子で、エリミオは半ば自棄糞気味に吐き捨てた。

そんなエリミオの気持ちを察してか、ガジルは不敵な笑みを口端に浮かべた。

「いや、今度は違う。暗殺の方には新型のアッシュに向かって貰う

として、お前にはオーブ首長の結婚式に乱入し、来賓共々一網打尽にして欲しい」

こんな時期という事は、やはり政略結婚なのだろう。オーブの首長はまだ若い娘の筈だ。早い内から結婚させられるとは、かなり同情の余地があるとユリは思った。

だがそれも少しの間だけ。結局はフェンリルの牙によって、跡形も無く消されるのだ。将来を心配するだけ損、だ。

「やっと好きなだけ暴れられんだな。ついでにオーブも壊滅させてやらあ！」

燃え滾らせた復讐の炎に、更に燃料をぶち込んでしまったかのような錯覚を覚えた。

その様は正に意気揚々と形容するに相応しく、その勢いのまま扉を潜っていつてしまった。

「…何を考えてるんです？後は開戦まで待つはずじゃ」

「なに、簡単な事だ。エリミオをこれ以上燻らせる訳にもいかなかった。それに、オーブは早く叩いておきたかった。都合が重なれば、こうなるのは必然だろう？」

してやったりな表情を向けてきても、ユリは賛成出来ない。エリミオの復讐心の暴走が、どんな結末を呼ぶかわからないのだから、もっと慎重に事を運ぶべきだ。

「納得してくれなくても構わない。ただ、向かわせるのはある意味

保険でもあるのだ」

「保険？」

「そう。アッシュ隊がしくじったとして、彼らの事だ、式に乱入して代表を連れ去ろうとするだろう。その時に、エリミオなら『自由』を潰してくれるんじゃないかと、期待を持てるんだよ」

「…そう簡単にいくでしょうか？」

相手は歴戦の戦士だ。この一年姿を消したとはいえ、腕が落ちているとは考えにくい。

「そう、簡単じゃない。だから憎しみを爆発させられるエリミオが適任なんだ。そうするば、邪魔な者を一気に排除できる」

厭らしい笑みがガジルの顔に浮かんだ。ユリの奥底から寒気が沸き上がってきた。

「…では、プラントの彼女はどうするんです？」

「あちらは利用価値がある。本物はどうしても強情で扱いにくいからな」

動き始めたのは、何も世界だけではない。その狭間を行き来する存在だって、密かにその目的を達する為に行動を始めていた。

この思惑が、今後どのような混沌を呼び起こすのか。世界の混迷はまだまだ深まりそうな気配を見せていた。

PHASE-21 ある意味の保険だ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。気に入って頂けたでしょうか？

今回からオリキャラの名前がかなり出てきたと思いますが、予定しているのはガジルさんで最後です。オリキャラの家族や大切な人たちらっと出すだけで、後は原作のキャラを大切に扱っていかうと思っています。

では、お付き合い頂きありがとうございました。お疲れ様です。

PHASE-22 何故力を捨てた？（前書き）

かなりあちらこちらに話が切り替わっています。

読み辛いかもかもしれませんが、宜しければお付き合い下さい。

PHASE-22 何故力を捨てた？

真夜中、丑三つ時を既に過ぎた虫すら鳴くのを止める頃。アスハの別邸では、子供の悲鳴と銃弾が発砲された音、そしてその銃弾によって命を落とす者の断末魔が響いていた。

それは正に奇襲と言っても良い戦法だった。夜の闇に紛れて、マシンガンを構えた集団が襲ってきたのだから。

大戦を経験したマリュー・ラミアスや、アンドリュー・バルドフェルドといった兵が居なければ、一瞬にしてこのアスハ別邸は血の海と化していたのかもしれない。

キラもラクスや大戦で孤児となってしまった子供達を庇いながら、銃爪を引いて命を奪って、漸く要人用に用意されていた奥のシェルターへと逃げ仰せたのだった。

「奴ら、動きに無駄がなかったわ、ね…」

肩で息をしながらマリューが、隣に居るバルドフェルドを見上げた。歴戦を生き残ったこの女性の息を上げさせ、しかも何発かの弾丸が掠っているようで、二の腕や太股に一筋の紅い傷が付いていた。

「ああ、奴さんら動きの質も、考え方も、それに銃の腕前も合わせ持ってる。これはやはり――」

バルドフェルドの脳裏に考えたくもない事が浮かび上がる。しかし、その答えが正しければ、この襲撃の理由には納得がいくのだ。

突如現れた偽物、そして未だに政治や軍力に与える影響力の大きさ、極めつけはそのカリスマ性。

「…狙いはわたくしなのですね？」

頭が切れるラクスの事だ。自分で思い至るだろうとは思っていたが、こうもあっさり自分の身に降り注ぐ危険を断言するとは思っていなかった。

避難した全員が沈黙する。泣き出しそうだった子供達でさえ、ラクスの毅然とした態度に当てられて静かになってしまったのだから、本当にこの娘は凄いと改めて思わせる。

「ラクス…」

隣で彼女を庇うような位置取りをしていたキラが、悲しそうに呟いた。その声はラクスの耳にも届いてはいるようだが、気持ちまでは晒してくれない。

その時、突如として爆音が響き渡り、シェルターがもの凄い勢いで揺れたのだった。

「何!？」

「…くそっ!ここをMSで破壊するつもりだ!」

マリューが上げた声と同時に、パネルを操作したバルドフェルドが半ば叫ぶように注意を促すが、このままでは手詰まりが確定してしまう。

それをわかっているからこそ、声は大きくなる。正に風前の灯といった状況だ。

この様子を見て、キラはあの慰霊碑で会った少年の事を思い出していた。

(…守りたいものを、守る…)

あの決意を秘めた、しかし柔らかい光を湛えた瞳がこんな状況でどうするか。いや、自分ならどうするかなんて、決まっているのだ。

「ラクス、鍵を開けて」

子供達に動揺を見せまいと、毅然とした態度を貫いてはいるが、内心では不安で震えているのだと、キラには確信があった。

大戦を終わらせると決意したあの時も、こんな瞳をしていた事と、それと反対に内在する不安を吐露してくれた事。

皆は強いと彼女を言うけれど、キラから見れば普通の女の子に過ぎない、いや、巷に溢れる女の子よりよっぽど傷付き易い娘なのだ。

大切に繊細な彼女を守る為に、力を解き放つ事はいけない事なのか？いや、そうじゃない。誰かに聞いて答えを出しても、それは流された結果でしかない。自分の中に生まれたものから、キラは既に目を逸らすのを止めていたのだった。

「いけませんわ、キラ」

不安を一杯に溜めた瞳で見上げてくる、彼女の華奢な身体を抱き締め。まるで泣き出しそうな子供をあやす、お兄ちゃんのように大人二人には写った。

「…大丈夫。僕は決めたんだ、皆を、この世界を守るって。それが僕の義務だって気付いたから」

ギリギリと音を立てていたシェルターの入口が、厭に静かになったかと思えば、エネルギーが弾ける音が外から響いてきて、それと同時に内部を揺らす。

――もう猶予は一刻も残されていない。

「ラクス、お願い！君も皆も死なせたくないんだ！」

「…ラクス、キラの言う通りにさせてやれ」

バルドフェルドが、爆音による衝撃でバランスを崩しながらも二人に近付いて、ラクスへと笑みを送った。

もう力を禁忌として封じておく事も出来る筈がない。恐れている事で、自分を取り巻く環境が劇的に変化してしまえば、それこそ後悔の念は尽きない。

大切な人を失ったからこそ、こんな思いをして欲しくはないのだ。

「…ラクスさん、あなたが怖いのはわかるわ。実際私もまだ誰かを亡くす恐怖が拭えていないわ」

第二次ヤキンドゥーエ最終局面で、マリュー・ラミアスは大切な命

が目の前で散るのを見てしまった。

ムウ・ラ・フラガ。エンデュミオンの鷹と称され、マリューと想いを通わせた男は、ストライクで墜とされそうになったアークエンジェルを庇って、宇宙に散ったのだった。

あの時の衝撃と溢れ出して止まらない悲しみは、未だにマリューの心を弱くする。しかし、それじゃいけない事にも気付いている。

振り切る事が出来なくとも、未来を見据える為にも少しづつでも過去にしていかなければいけない。

「だけどね。多分、戦う時に戦わないと、後々守れなかったと後悔する事になるわ」

あの人も多分それが嫌で、その身を呈したのだと思う。私だって大事な人が乗った艦が墜ちそうになったら、同じように行動していただろう。

心から思う守りたいという気持ちは、頭で考えるより先に身体が動いてしまうものだ。

「バルドフェルドさん、マリューさん…」

ラクスも理解はしているのだろうが、戦うという事は命を削るという事だ。キラがそんな命のやり取りに敗れ、帰って来ない事になるのを、彼女は何より恐れているのだ。

「ラクス、お願いだ」

もう一度紡がれた言葉。その瞳に映し出された真摯な光が、ラクス
の心に染み入っていく。その温かな気持ちを信じてもいいと思えた。

「…わかりました。あなたを信じます」

外からの攻撃は激しさを増す。水陸両用の新型、アッシュの放つビ
ームが的確にシエルターの一画を捉え続け、もう殆ど煤これた物体
でしかなくなってしまった。

後は力づくでこじ開ければ、中に居る者どもを確実に殺れるだろう
と思った。

しかし、アッシュ六機の動きは一瞬の間停止する事になった。

シエルターのすぐ横にハッチが出現したかと思うと、目にも留まら
ぬスピードで飛び出してきたものがあったからだ。

それは殿に位置していた一機の武装を瞬く間に破壊し、シエルター
を庇うように地面に降り立った。

そして、アッシュ隊の隊長は戦慄を覚える事になる。

聞きしに勝るその機体のスピード、卓越した操縦技術、そして何よ
り圧倒的な威圧感。目の前の白と青のMSを知らない者等、殆ど居
ないのだ。

カラカラに乾き、張り付くような感覚の喉を無理矢理に開いてその
名を紡ぐ。敵に回した場合は恐怖の代名詞とも言える、そのMSの
名前を。

『フ、フリーダム…』

呟いたのも束の間、夜の奇襲の為に集められた視力の高い者達が集まった筈のアッシュ隊の誰もが、目の前からフリーダムを見失ったのだ。

しかし、次の瞬間には隊長機の目の前に出現していて、腰に収められたビームサーベルを居合抜いていた。

狙われた隊長機は、寸での所でそれを躲したが、右上腕部を斬り落とされてしまい、攻撃力も防御力も半減してしまう。

それを庇う為に他の四機は段幕を張るが、フリーダムの前では無意味である事に気付かされる羽目になる。

フリーダムはバーニアを吹かして、一瞬空中に浮かんだかと思うと、また目にも留まらぬ速度でその場から消え去り、カメラを回して確認しようとする前に、次々とカメラや武装を破壊されてしまう。

どうにか武器やカメラを守りたいのだが、動きが視認出来なければ、そんな事は夢幻を掴もうとするようなもの。

やはり浮かぶのは絶望を伴った恐怖。隊員達の士気は下がっていくばかり。

一機目が行動不能に追い込まれてから、ほんの数分で二機目も戦闘続行は不可能になってしまった。しかし、その時隊長は気付いたのだ。フリーダムは、何故か弱点であるコックピットを故意に狙っていない事に。

(…ふざけるな！不殺でも唱える気か！！)

MSを爆発させないで行動不能にするには、並大抵の腕では無理である。その点ではフリーダムのパイロットは関係は無い。あのヤキンドゥーエを圧倒的な技量で制圧したのだから。

しかし、このパイロットは本当の不殺の意味を理解しているのだろうか？

もしも只の情けで命を奪わないだとか、殺してしまうのが可哀相だとか、そんな甘い考えでを持っているように思えて仕方ないのだ。

「全機に告ぐ！私が囷になりフリーダムに止めを刺させる。その瞬間を狙って、コックピットを狙い撃て！」

『しかし！』

隊員の一人が非難を上げる。本来なら死にに逝くようなものであるが、隊長には確信があるのだ。フリーダムはパイロットを殺そうとしない。

「これは命令だ。いくぞ！」

隊長機がフリーダムへと突っ込む。その瞬間に残った手足を両断され、バラバラになった機体を見送って、偵機達はコックピットを狙う為に標準をつけたのだが。

『う、うわああああっ！？』

武器を向けた瞬間に残った三機全てが、エネルギーの奔流による爆

発が起きたのだ。

それは正に、人機一体という言葉を創っても良い機体捌きだった。同じ機構のMSを操っているというのに、スペックの違いとか、開発コンセプトの違いとかそんなものは関係無い。

とにかく圧倒的なのだ。動きの質が鬼神の如き断ち筋と、針の穴を通すような精密な制御。感嘆の溜息が漏れそうになるが、それより感じる事がある。

それは屈辱と憤り。戦場に出るという事は、そこで散るのを覚悟している者が殆どだ。

フリーダムはそれを弄ぶようにカメラを破壊し、手足を斬り裂き、武装を無力化はするが、命を奪おうとしない。

ギリツと歯が軋む音がした。

『フリーダムのパイロット、これだけは憶えておけ！』

隊長機から叫び声にも似た声で全方向通信が上がる。

それを確認し、キラはそれを視認する。あれだけの動きをしたというのに、息一つ切らしていない始末だ。

『お前のその情けだかよくわからない甘さは、いつかお前の身を滅ぼす！そしていずれ思い知るだろう、力のあり過ぎる事の弊害を！』

そう告げ終わると、次々と爆散していくアッシュ。その光景はキラの中に深い悲しみを植え付けた。

（…死ぬ事より、生きる事の方が大事な筈だ）

決意はやはり固いようで、アッシュの隊長の言葉はキラの奥には届いていなかった。

しかし、不吉と称してもおかしくない言葉を遺した事を、少しは気に掛けるべきであったのかもしれない。

失ってから後悔しても遅いという事だ。

「ありがとうございました、先生」

「………」

「ああ。体調が悪そうだったら、無理矢理にでも連れてきてくれ」

恭しく一礼して、シンは医務室を後にする。その右腕には眉尻を下げたステラを伴って。そのステラを一瞥してから、ラルスは細心の注意を彼女に払えと言葉に込めた。

明らかな不機嫌さを表しながらも、両の腕でシンから離れようとしていないステラに、苦笑が漏れるのを我慢出来なかった。

この表情には理由があった。

昨日クロードが言った通り、ステラは外出が出来る立場になった事を、シンに飛び付きながら喜んでいたのだ。

…その時のルナマリアの冷たい視線は思い出したくもない。何か恨みを買うような事をした憶えは、脳内には皆無だった。

それは置いておいて、意気揚々とタラップを下ってミネルバを降りようとした時だった。慌てたように駆けてきたラルスを見つけたのは。

シンは何事かと艦内へとステラの手を引いて戻ったのだが、これが今のこんな状況に結び付くなんて、思いもよらなかった。

《ステラはまだ安静にしてなきゃ駄目だ。検査も定期的にしないといけないしな》

そう言われてしまえば、ステラの身体が心配なシンが彼女を連れ出そうとしない事は目に見えている。

しかし、それに不服を挙げる者もまた目に見えていた。

《やだ！ステラもシンと一緒に出掛ける！》

駄々をこねる子供のように、繋いだシンの手をブンブンと振り回して、自分の感情を精一杯に表すステラ。

その姿は見るだけであれば和んでいられるが、力は人並み以上にある訳だから、手首が悲鳴を上げるのを我慢しなければならなかった。

自分の憐れな手を救う為にも、ステラの身体に無理をさせない為にも、シンは必死に説得する羽目になった。

それにラルスは参加するつもりはなかった。多分、薬の臭いがする自分をステラは怖がると考えたからだ。

エクステンデッドに使われている薬品はまだ特定出来ていないが、

相当に強い薬である事と、組み合わせの複雑さを思わせる節はある。という事は、この娘はそんな環境に閉じ込められていた事になる。記憶を操作されているとしても、身体に染み付いた恐怖による拒絶は消せないものだ。

ようやくと宥めすかし、シンと一緒に医務室へと歩き始めてくれて、ラルスは安堵の溜息を吐き出していたようだった。

その後、シンはステラが眠るまで傍に居て、久し振りのオーブへと降り立ったのだ。

そして慰霊碑を見付け、そこで不思議な雰囲気的青年に会ったのだった。

そして時間は現実へと戻る。横で未だにむくれているステラの機嫌を何とか取るため、食堂へと足を向けた。

朝食を取る為にこの時間の食堂は、ミネルバのほぼ全員が集まっている。しかし、未だに補充員は来ておらず、テーブルには疎らに空きが見られる。

入口で辺りを見回してみる。

：ヨウランとヴィーノの姿は無く、二人で一緒に座るのが一番かなと思った時に、それは目に留まった。

すたすたと三人に気付かれないように歩み寄って、吃驚させてみようと思ったのだが、やはりというか相手が悪かった。

「…お前さ、そんな事して楽しいのか？」

すぐ後ろに陣取って、クロードの眼の前に手を翳してみようと思ったのだが、あっさりと見破られた挙句、もの凄い呆れ顔で振り返られて、少しバツが悪そうに頭を掻いた。

「…おはよう、クロード、ルナ、レイ」

一人一人の顔を見ながら朝恒例の挨拶を交わす。皆も笑顔を見せて（一人はいつもの無愛想だったが）、挨拶を返してくれていた。少しづつ世間の常識を知っていくステラを見ると、どうにも幼い妹を見守る心境に似ている気がする。

しかしそれは、胸の奥にある表面を覆っている気持ちに過ぎない。包まれた本当の気持ちをシンは未だ自覚はしていない。

「…そう言えば、クロードは珍しいですね。こんな時間に食事してるなんて」

いつもならシンが食堂に現れる前に、クロードは朝食を済ませて仕事を始めているのが普通なのだ。

それに注意深く見てみると、目の下には隈も浮かんでいる。

「ああ、ちよつとな。インパルスの機構変更案を纏めた見取り図を作ってたら、いつの間にか朝になってたんだ」

その言葉に一番驚いたのはパイロットのシンではなく、クロードの正面でロールパンをつまんでいたルナ MARIA だった。

「えっ！？それって狡くない？私とレイなんて汎用型なのに、新型

のインパルスがパワーアップする訳？」

ルナマリアの言いたい事はシンにも良くわかる。前までの自分だったら、気持ち等汲み取らずに自慢げに踏ん返っていたのだろうが、今のシンにそんな考えは浮かんでこない。

「ルナ、これには理由があるんだよ」

クロードの隣の椅子に座りながらシンは、やるせない感情を向けてくるルナマリアの方を眺めた。

シンの腕を掴んでいたステラは隣に椅子が無い事を確認すると、ペタンと地べたに座り込んでしまった。

「無人島に漂流してわかったんだ。インパルスはミネルバが居ないと、どの機体よりも中途半端だって」

ザク両機はウィザードの変更という点ではミネルバを必要とするが、他の戦闘に関する機構は汎用型の為に応用が利く。

しかし、インパルスはそうもいかない。ブラストシルエット以外で一つの武装を失う事は、無力というレッテルを貼られる事と同義だ。

「しかし、その機構のお陰で汎用型より長く戦闘を継続出来るのは良い点だろう？」

シンの隣で冷たそうな床に座るステラが不憫に思えたのか、レイは他のテーブルから椅子を拝借してきて、シンとレイの間の空の一角にステラを座らせてくれていた。

それに対して、ステラは笑顔で「ありがとう」と告げていて、レイは満更でも無さそうな表情を浮かべていた。

そして座り直したレイの発したのが、先程の正論だった。

「その通り。あの機構とデュートリオンビームとの相性は良いからな。

ラグナロクだとニブルヘイムとの関連上、エネルギー変換に少し手間取るんだが、インパルスは機体が分離する事から、全てに燃料を注ぎ込める事になる」

クロードの説明に相槌を打つレイとルナマリア。シンは微妙に着いていけず、ステラに至ってはいつの間に取りつてきたのか、アイスクリームを掬って満面の笑みで口へと放り込んでいた。

「しかし、問題が二つ程あるのも確かなんだ」

設計図に目を通してすぐに一点目は発見出来ていて、クロードは人差し指を立てた。

「まずはコアスプレnderに戦闘力が皆無な事」

核を担う場所は嚴重に装甲に守られるものである為、他の部位と違って武装に手を掛けないのもわかるが、コアスプレnderで帰艦を余儀なくされる可能性だって捨て切れないのだ。

それに、他部位を破壊されて換装を行う場合、コアスプレnderはミネルバから替えが届くまで無防備になる事になる。

「その上、機動力もシルエットのバーニアに頼っているから、単独

での突破力に欠ける」

コアスプレnderに搭載されているエンジンは、並のMSより少し劣るくらいのも、良くも悪くもないものだ。

MS程の重さもない為、これで大丈夫と軽く見ているのかはわからないが、軽率な設計だとクロードは思った。

「二つ目。これが一番の問題なんだ」

立てられていた人差し指に、中指が仲間入りする。そしてクロードの表情は一層の固さを呈していた。

「それは、シルエットの換装が他のシルエットに全く対応していない事だ」

「…それって当然じゃないの？機械にだって組み合わせによる相性がある訳だし、なんにでも換装出来るように造ろうとしないんじゃない？」

「ルナマリアの言う通りだ。他のシルエットの武器を使えるようにしたとして、それが上手く機能するかなんてわからない。その上誤作動まで起きたら、それこそ目も宛てられないぞ」

冷静な指摘を赤と金の二人が行う。しかし、それは盲目的に信じてしまっている事で、クロードの言いたい事とは食い違っていた。

「…確かに二人のは正論だ。だがそれは既に覆ってるだろう？ルナマリアが一番わかっている筈だと思うが」

皿に乗った最後のハム一切れを口へ入れ、咀嚼した後、クロードはルナマリアへと視線を向けた。

思い至らなくて、暫し逡巡したルナマリアは漸く答に辿り着いたように、飲んでいたカフェオレを置いた。

「…《イフリート》ね！」

それを聞いて、満足そうにクロードは笑んだ。

「そう、普通は新しい兵器を開発した場合、旧品にも使えるように造るのが当たり前なんだ」

強力なものを創造したとして、その度に新たなMSやMAを造っていたんじゃない、どんな軍であっても経済的に破綻する。

だからこそ、インパルスの機構はおかしいのだ。相互に武装を変えていけないように造り出す事は、それこそ汎用性を完全に無くす行為なのだ。

「……確かにな。そう考えるとインパルスは欠陥を抱えている事になり、再度、一から造り直す必要がある訳か…」

途方もない時間が掛かりそうだと、レイは思った。そうなると戦力が大幅に下がる訳だが、クロードに考えはあるのだろうか？

「えっ！そうなんですか？クロード」

ショートを始めていたシンの頭も、レイの言葉には無理矢理覚醒を促された。

守りたいものの為に戦う筈が、インパルスが出撃不能な時に襲われでもしたら、三人に全てを任せる事になってしまふ。それは心理的に許せなかった。

「いや、そんなに時間はかかんないぞ」

今度に驚いたのは、ステラ以外の同期三人だった。時間が掛からないと言うが、初めから造り直すのなら、開発と同じ程度の時間が掛かる筈だ。

一様に同じ顔を向けてくる三人に、クロードは余裕な笑みを浮かべた。

「任せろ」

その言葉は説得力に溢れて、大丈夫だと本気で思えた。

その後は和んだ雰囲気で食事は進んだ。

シンはステラの分の食事も運んできたが、「アイスを食べたからいらない」と子供みたいなお話を言うのに対し、「アイスが食べれるなら食べれるだろ?」と母親みたいな言葉を使ったり、それにルナマリアが「なんか口煩い母親みたいよ」と嫌味を放ったり――。

とにかく、食事が終わった三人も会話に参加したり、強制的に参加させられたり、楽しく過ごせていたのだが、点けていたテレビのニュースが全てをぶち壊したのだった。

『――そ、速報です!この度、真しやかに噂されていた、カガリ・ユラ・アスハ首長国代表とユウナ・ロマ・セイラン議員の婚約が正

式に発表されました』

クロードの思考全てがそれに注がれる。あまりの報せに、脳が理解するのを拒んでいるようにも思えてくる。

「ど、どういう事よ、これ！」

ルナマリアも信じられずに荒げた声を上げた。幾ら何でもおかし過ぎると、あの二人を見ていた自分が叫ぶのだ。

医務室にお連れした時だって、互いの事を心配しあっていた訳で、想い合っていたのは一目瞭然だった。

それがどういう心境の変化で、こんなふざけた事態になるというのだろうか！？

他のクルーの平常と対比され、浮かび上がる二人の困惑と判然としない怒り。何も変わらないミネルバの一日が過ぎていこうとしている事が、この時程場違いに思えた事はなかった。

「…ここに来るのも久し振りだな」

人工の陽光に煌めき、風にはためく髪を気にもせず、海を横に眺める墓地でイザークはいつもの雰囲気潜めて呟いた。

ディアツカは自分が運転してきた車から降りて、眩し過ぎる太陽に手を翳しているが、その表情は窺わなくともこの場に居る二人には理解出来る。

三人の気持ちは間違いなく一致しているのだから。

駐車した場所から少し歩いた、正面に海を望める列の中にかつての戦友、ニコル・アマルフィの墓はあった。

特別な大きい訳でも、華美な装飾が施されているとも言えない墓なのだが、三人には妙に重々しく感じられる。

それはやはり同じ戦場に立っていて、みすみす死なせてしまったアスランが一番責任を感じているのだろうが、他の二人も神妙に為らざるを得ない。

ニコルはとにかく甘かった。そしてどこまでも優しく、戦場でも自分の身を心配よりも、仲間に気を配る程であった。

そんなニコルをイザークとディアッカは、憚る事なく馬鹿にしていたのだ。

あの頃はザフトレッドを受けた事で、どちらも天狗になっていたのだ。

成績優秀なアスランに牙を向け、自分より劣るニコルを足蹴にして、自己本意に隊を乱していたとイザークは顧みる。

風紀を無視していたくせに、今は隊を束ねる長になっているのだから、世の中も人も変化を止めていない証拠なのかもしれない。

しゃがみ込んで、合掌と黙祷を捧げるアスラン。その後ろで今もプラントを守る為に戦っている二人が、神妙な顔付きで《二人》を見下ろす。

今まで見舞ってやれなかった贖罪、というには些か虫が良い気がするが、アスランはたっぷり数分間、黙って昇った世界での幸せを願っていた。

「お前も律義な奴だよな。：確かにニコルを死なせちゃったのは事実だけだよ」

「：いや、俺がニコルを殺したも同じさ。

あの時の俺はキラと争いたくなくて、MSを行動不能にするか、あいつを説得する事に躍起になった。その甘さが、悲劇を生んでしまったんだ」

（冷静に分析したと思っているのだろうか、こいつは）

イザークは未だに膝を折っているアスランを眺めて、重たい溜息を吐いた。

その様子を見たディアッカもまた、同じように呆れた表情を浮かべて、アスランの紺色の髪を見下ろした。

後悔をしているというなら、こいつの行動には矛盾が孕む。イザークがそれを口にしてやる。

「ニコルを殺したというなら、何故力を捨てた？お前一人が捨てた所で、世界は争いの為の力を捨て去るなんて、高尚な事をする訳ないと、お前は知っている筈だ」

コーディネイターだから、とかそんな軽い理由で物事を捉える事を止めたイザークには、アスランの言葉は苛立ちの原因にしかならなかった。

ここには大局を覆す力があり、それを駆使する事が平和への早道だと信じているから、軍に籍を置き続けているのだ。

それはディアッカも同じで、アークエンジェルで過ごし、経験した事が今のザフト軍所属の自分を存在させてくれているのだと思う。

「それにオーブだって、危なくなれば代表の威厳なんとそっちのけになるのがオチさ。幾らアスハの威光が強くても、所詮は飾り立てているだけに過ぎないんだから」

ディアッカの言う通りになるのは、アスランにも予期出来てはいるのだ。だから本来ならこの訪問を中止し、安定しない世情を傍に居て、少しでも担いでやれば良いと思ったのだが。

「…現状のオーブは確かにそうだ。だから他国、とりわけ友好国と言える、プラントに来たんだ。

…それにクロードが何故あんな兵器を開発したのかも、議長が何故認可したのかも気になったんだ」

そこで二人は思い出す。決意を浮かべた表情の議長と共に見た、青とも白とも銀とも言えない光を放ち、その奔流でユニウスセブンを包み込んでいった光景を。

「…あれの存在は俺も知っていた」

「えっ？ そうなのか！？ 初耳だぜ？」

「お前が知らないのも無理はない。あれは隊長格以上の者だけに知らされた、秘匿の招集会議で認可されられた兵器なんだ」

「……じゃあ、あれが存在するのを軍全体が認めたという事なのか……？」

呆然とイザークを見上げるアスラン。やはり不安事をオーブに残してきたのが大きいのか、イザークの言葉にある違和感には気付いていない。

「《認めさせられた》と言っただろう。会議なんて名ばかりだったんだからな」

思い出すのも嫌で、イザークは知らずに溜息を深く吐き出していた。その時だった。

「あら、あなた達は……」

三人同時に声がした方へと顔を向ける。

そこに居たのは、今アスランが会わなきゃいけない人間の一人。特に恨み辛みを吐き出されても仕方のない、受け止めるしかないと覚悟していた人。

ニコルの母、ロミナ・アマルフィだった。

「……おばさん、お久し振りですね」

「ええ、本当に。一年振りかしら？ ディアツカ君も元気そうね」

「ええ。……おばさんは少し痩せたんじゃないんですか？」

終戦後、プラントに戻った二人は彼女と面識があった。先ずは弔いの為に家を訪れ、一緒にこの墓の前で祈りを捧げたのだった。

その時に泣き崩れ、漏れる嗚咽と共に吐き出される心境の吐露を二人は甘んじて受け入れたのだ。

「あら、そちらの方はもしかして――」

「……アスラン・ザラです。申し訳ありません、私と私の父親とで、あなたの家族を無茶苦茶にしてみました……」

アスランは瞳を閉じていた。どんな暴言や暴行、それに物を使った殴打だって、受け入れなければいけないだろうと思っていたのだ。

ニコルの父、ユーリ・アマルフィはクライン派の穏健な議員であった。だが、息子の死が銃爪となり、急進を促すザラ派へと寝返り、ニュートロンジャマーキャンセラー（NJC）の開発に携わってしまったのだ。

パトリック・ザラの死後、後ろ盾を失ってしまったユーリは NJC 開発に関わった罪で捕まってしまい、アマルフィ家は全てを失ったに近い母親だけが残ってしまったのだ。

だから、自分を殺してしまいたい程に恨むのも道理だと、アスランは考えていたのだが、

「……あなたのせいじゃない」

優しい響きに自然と俯けていた顔が上がり、目の前の妙齡な女性を見詰める。その瞳には嘘、偽りを感じなかった。

「…ニコルはあなたを守れて幸せだったんです。

知ってますか？あの子が軍に入った時に、嬉しそうに話してくれたのがあなたの事だったんですよ」

優しい笑みと声の響きは続く。しかし、それが強がりである事をアスランは唐突に理解した。

「…そして、ニコルが庇ったあなたが連合最強と謳われたストライクを討った。これを…聞いた…ら、どれだ…け、ニコルが喜…んだか……」

漏れだした嗚咽に乗じて、崩れていく肢体。その光景があの時とフラッシュバックして、イザークとディアッカは思わず目を逸らしていた。

そして、その心境をまともに共有する事になったアスランは、力を捨てた自分の甘さに、一晩中苛まれる事となった。

PHASE-22 何故力を捨てた？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。お気に召して頂けたでしょうか？

一つ質問なのですが、ニコルの母親の名前って何と言うんでしょうね？このSSでは適当に名前を付けましたが、本当の名前をご存知の方がいましたら、情報をお願いします。

作中の何話に出てきたぞ！という感じでも構いませんので、よろしくお願い致します。

では、お疲れ様でした。

PHASE-23 偽らないでよ! (前書き)

漸くオーブ編も終盤に差し掛かりました。

もう少し続きますが、出来ましたらお付き合いお願い致します。

PHASE-23 偽らないでよ!

ミネルバの艦長室、そこで先程届いた指令書に目を通したタリア・グラデイスは、今朝の衝撃をそのままもう一度脳髓に叩き込まれた気がした。

文書の発行者は確かに議長名義だが、その隣にはもう一人、今回の騒動の重要人物が署名されていて、タリアはやる瀬のない気持ちを抱く事になった。

「…本気みたいね」

指令の内容はクルーに、特にMS隊にはいち早く伝えねばなるまい。何せ予定よりは遅れているようだが、明後日という急仕様だ。こちら準備を怠る訳にはいかない。

そしてこの申し入れを受諾した人物を脳裏に描き、睨み付けてやる。ユニウスセブンにおいての艦橋で行ったやり取りを、あの方は忘れた訳ではないだろうから。

勢い余って握り潰された書面には、こう書かれていた。

――この度、めでたく挙式をされるカガリ・ユラ・アスハ、ユウナ・ロマ・セイラン両人の式中の護衛をMS隊に命ずる。

そして最後に記された名は二つ。ギルバート・デュランダルとカガリ・ユラ・アスハ。これの意味する所を、タリアは考えたくも無かった。

アスハ邸からそう遠くない小高い丘の上、そこに豪華絢爛な装飾を為されたセイラン邸は拔群の存在感を誇示していた。

その一室、鍵を外側から念入りに施された、不可思議な部屋があった。

その中に俯きがちな、薄幸の美少女然とした金髪の女性が普段着る事のない、ドレスを纏って使用人の一人にセイラン家における指導と教養を、身体の内芯に叩き込まれていた。

「そうです、カガリ様。セイランの女性は、普段から気品を漂わせる服装を心掛けるのです」

別段、変わった服装をしていたつもりは無かった。いつもと同じように閣僚の証である、バーガンディのスーツに脚を通しただけだったのだが、目の前のメイドの劈くような声に注意されて、今の薄い翠色の生地を何重に織り重ねたドレスへと着替えをさせられたのだ。

「良いですね？これから朝の礼法を一から、丁寧におさらい致します。間違っていたら厳しく注意しますので、そのつもりでお臨み下さい」

「何を言ってるんだ…？今日も閣議があるんだ。格好は気にしないが、そろそろ会議場に向かわなければ――」

「いえ、それには及びません」

カガリが言い募るのをぴしゃりと断ち切って、メイドはさも当たり前のように言葉を紡ぎ出す。カガリにとって残酷とも言える内容を。

「セイラン家にその身を置かれる限り、あなた様は既に政治に携わる意味を無くしているのです」

全ての物から色素が奪われ、時間は急停止を齎した。カガリの中のイデオロギーは崩壊し、変わりに訪れたのは絶望にも似た感情。

（……私が甘かった…）

カガリの権力を吸収する事が目的だったのだ、入邸さえさせれば後は家柄だとか、女だからとか理由をこじつけて家に縛り付ける。そうすれば、代表という立場を利用する事も、盾にする事も自在だ。

これからも政治に携われるだろうと考えていた、自分が呪わしかった。

（やはり、彼女を使いに出したのは正解だったか…）

国の力で庇ってきた弟も、その仲間達もアスラン同様に取引材料と成りかねない。

向けられる切っ先が増えれば増える程、カガリの権力の傘全てを奪われ、国民からの叱責を、表立って受け止めさせられる事になるだろう。

それを防ぐ為に、正体を暴かれて戦いの矢面を強制されないように記した文書が彼らに届く筈だ。

あれを見れば、私の立場を理解してくれているラミアス艦長が遠くに逃げおおせてくれるだろう。

「カガリ様！そのような顔をしてはなりません！
このセイラン家に嫁げる事を喜ぶ表情をお浮かべ頂かないと」

言われた通りに、カガリの顔に気品に満ちた笑顔が浮かぶ。しかし、
見てる人が見れば間違いなく貼り付けられた偽物の感情であると理
解するだろう。

その笑顔を余所のもののように切り離して、左薬指に嵌られたエメ
ラルドを握り締めた。アスランとの決して断ち切れない絆を信じて。

閣議が滞りなく過ぎていく。一人の若く青い代表という名の小娘が
居ないだけで、ここまで円滑になるとはな、と小さく歪んだ笑みを
口端に浮かべた。

そしてこの閣議で一つの大きな案件が可決された。それは、

「では、賛成数三分の二以上をもって、大西洋連邦への加盟を決定
する」

カガリが頑なに流し続けた問題が一つ解決した、とウナトは満足そ
うに微笑む。しかし隣に座る息子、ユウナの顔に笑顔はなかった。

確かに国力の充実は急務だ。何年と中立を謡った国であるが故、軍
備にも経済にも、他国に劣る箇所が目立ってしまったているし、それ
による開きも一気に詰めなければならぬ。

連邦に加盟するという事はそういう事だ。地力が足りなければ、た
だ付き従う腰巾着と何も変わらない。

隣でほくそ笑んでいると思われる父親は、きちんとした対応を頭に浮かべて、この議決を行ったのか些か疑問なのだ。

それでなくても、カガリの存在と権力に苛立ちを覚えて、軟禁同然の扱いを強制した父親だ、寸足らずで物事を台無しにしてしまうかもしれない。

「…それにしても、代表も英断致しましたな。この世情が安定しない状況で結婚だなんて」

一人の議員から挙がった声は、ウナトを不機嫌にした。

「英断だと…！ふざけた事を吐かすな！我々がどれだけ煮え湯を呑んだと思っておる！」

ウナトの激昂に少し身を引いてしまって、立場が悪くなるのを恐れたか、議員はご機嫌取りに懸命になる。これもまた現在の腐敗した政治の形態を如実に表していて、ユウナは態と溜息を吐き出した。

その溜息にはもう一つ意味があり、ユウナの中ではこちらの意味合いの方が強かった。

「……全く、悔しいのは父上だけだよ…」

誰の耳にも届かないように、自分に言い聞かせるように囁いた。

父の行動は全てブルーコスモスへと回帰する。地球に存在する国家であるのだから、連邦に組する事は不自然ではない。しかし、それが意味する所は、コーディネイターは造り出された、人で非ざるものであるとする思想が父の中で大きいからだ。

ユウナはそんな思想じみた考え方は嫌いだ。とにかく権力を高めへと導き、それを決して話さない。それが出来れば他に考える事などない。

そしてその悲願ももう少しで達成される。カガリという少女もおまけに。

ユウナは厭らしい笑みを浮かべて、絡ませて手と肘をついて作った止まり木に顔を埋めた。今の表情を悟られぬように。

ホテルの素っ気ない天井をいつまで見上げていたのだろうか。いつの間にか仰向けになっていて、身体は少しだけ休めたが、脳は少しも休んじゃくれなかった。

（あんな顔を、あんな涙を見せられちゃ…な）

墓参りから帰ってから、アスランの思考はロミナの言葉で一杯で一睡も出来ていなかった。

《息子が嬉しそうに話してくれたのは、あなたの事だった》

そんな事を言われてしまえば、嫌でも意識は死んでしまった友人へとベクトルを向ける。

あんなに戦う事、殺し合う事を嫌っていたあいつが、軍の事を母親に嬉しそうに語っていただけでも驚きだし、その話題が自分だった事には更に驚きは深くなる。

友達の話題で父親と語った事等アスランの記憶には無い。それ以前

に、母さんを失ってから父さんと笑顔を交わした憶えすら無いのだ。

それがどんな風に人から見えるのかは知らないが、物心が固まった頃にはそれが普通で、笑顔で会話をする事だって忘れていたと言える。

そしてそこまで行き着くと、次は嗚咽を交えたロミナの声が勝手に再生され、新たな思考が生まれる。

涙を零す事で、内に溜めた思いを吐露せざるを得ないあの姿が焼き付いて離れないせいで、残った命が自分で良かったのか？と愚考してしまうのだ。

それがどれだけ無駄で、実りの無い事である事は理解出来てはいるが、止まってはくれないのだ。

あの時、庇われる事無く残ったのがニコルであつたなら、この世界はもっとより良く姿を変えていたのではないか？

フリーダムとジャスティスという過ちが生まれずに済んでたのではないか？と過去を振り返ってしまうのだ。

そして思考は、ニコルの墓の前で泣き崩れるロミナの言葉へと回帰する。強い力が生まれる事によって、あのように悲しみを噛み締める者が増え続ける事実にぶつかる事で。

（病んでるな…、俺）

手の甲を目の前に翳して、思考を遮断してみる。暗闇の中に浮かん

でくるのは、心配な愛しい者ではなく、泣き崩れる友人の母親の姿だった。

この無限とも言える回廊から抜け出したくて、枕元の備え付けの台に載せてあったリモコンでテレビを点けてみた。

しかし、そのニュースはアスランの中に深き絶望と、愛しい者への不信をこびりつかせる結果となった。

『おめでたいニュースが飛び込んで参りました。中立国家オーブ首长国の代表カガリ・ユラ・アスハ氏と、同議員ユウナ・ロマ・セイラン氏の婚約が発表されました』

額に乗せていた手の隙間から覗いていた映像が、意味のわからない言語を流していると勘違いするかの如く、脳が全ての情報を虚勢で掻き消していく。

結婚？カガリ？ユウナ？

理解している筈の、いずれ訪れると予期して未来がこんな形で提示されるとは予想外を超えていて、先行して顕れたのは拒否を示す揺れ動く感情。

眠っていない事も気にせず、身体をベッドから叩き起こし、ニュースを読み上げるキャスターへと詰め寄る。

何の意味も為さない事は勿論理解しているが、気分はそう簡単に割り切れるものではない。

『これは宰相である、ウナト・ロマ・セイラン氏が先程メディア向けに発表され、現在のオーブ国民は喜びに満ち溢れているとのこと

です』

そんなアスランを放って、無情にも告げられていく事実、頭の中は一杯で溢れそうになっていた。

そしてふと気付いた。オーブを発つ時に漠然と感じていた不安は、この事態への虫の報せであった事に。

指輪を渡せた充足感に浸っていたのかと問われれば、そうだと返事するしかない。あのエメラルドが二人の絆を確かな物にしていると、断ち切れない感情の糸を強く結び付けてくれたと勘違いをしていた。何かを使って脅されでもしたら、カガリはあっさり受諾してしまうとも、性格を考えれば推測出来た筈なのに、今のアスランにはそんな事も失念してしまう程に取り乱していた。

『尚、式は明後日に行われる予定で、披露宴も兼ねて一般公開もされる予定です』

他国のトップのめでたい話を淡々と抑揚なく告げて、ニュースは次の廃棄コロニーの有効活用を提唱が、という内容はアスランの内に入ってこない。

テレビを点けっぱなしで部屋を猛スピードで飛び出していたからだ。

先程まで苛まれていた思考は、今や脳の片隅に押しやられていた。酸素を要求する脳の中にあるのは、結婚式が明後日というキャストの声。

（議長に……！議長に会わなければ……！）

身分違いの恋であったと自覚はしているが、この情熱をただ燻らせていたくない。しかし結婚式に乱入して、何をするかまでは考えていない。

ただ叫び声高らかに、カガリへの思いを吐き出すとでもいうのか？

それとも映画やドラマみたいに、突然現れて花嫁を搔っ攫うとでもいうのか？

……ごちゃごちゃと浮かんでくる言い訳に、アスランは自分に嫌気がさした。身分や世間体を捨て去りたくて、何もかもを捨ててオーブへと渡った筈なのに、結局はこの有様だ。

理由も理屈もいらない。結局は廃れてしまうのだから。

今必要なのはオーブへ戻る事。

その為にも議長へと面会しなければならない。朝早い事もあって、まだ定期便は動かない。しかも直通という訳ではなく、他のコロニーを点々と通過するので、明後日までに帰れない。

今の切羽詰まったアスランが頼れるのは、議長ギルバート・デュランダルだけなのだ。

プラント最高議会所、その立派な建物にデュランダルが詰める部屋がある。そこへ通され、アスランは切羽詰まった思考の中でも辺りを見回していた。

部屋は脆弱な明かりだけが頼りで、軍人としての警戒と、随員としての察知が相俟っていて、あまりに気が休まらない。

いや、気を落ち着けている場合ではない。早く、何とか、どんな手を使ってでも、オーブへとカガリの元へと帰りたい。

しかし、朝も早い事とアポイント無しで直接訪問なのに、議長は二つ返事で秘書にここに通せと仰った事が唯一、支配された思考でも浮かび上がった疑問だった。

もしかしたら、何かの罠の可能性もあるが、アスランの頭の中にはそんな思考は存在しない。安易で安直ではあるが、議長の力無くして、明後日までにオーブへと辿り着くのは不可能だと理解しているからだ。

「済まない、待たせたね」

にこやかな表情を彷彿とさせる明るい調子の言葉だ。こちらはどうしようも無い状況に陥ったというのに、暢気に口端を上げているであらう議長を睨もうと、扉の方へと身体を向けて、アスランは驚愕した。

そこにピンク髪の女の子が居たからだとかは、アスランの中ではそんなもので、目の端で存在を確認したくらいの認識だ。

なら、何に驚愕したというのか？

それは、

「君がここに来た用件なら、検討がついているよ」

まるで誓いを立てた戦士のような、固さの中に決意を混ぜ込んだような、その目と眉のコントラスト。

結ばれた口の一文字は、きつくきつく縫い付けられたかのように、血の巡りを妨げてしまっているのかのように、白く変色していて。

まるでアスランと同じ思いを共有しているかのような、そんな憤怒に近い表情をデュランダルは浮かべていたのだ。

「議長、お願いしたい事があります」

その表情に気圧されそうになるが、アスランは思いの強さを武器にデュランダルへと食って掛かる。

本来なら目上の者が所定の位置に着くまで待つものだが、生憎そんな余裕も気配りも出来ない程に追い込まれていた。

それを承知しているのか、デュランダルは表情を変えないまま、アスランが座っていたソファアールより少し距離のある机へと向かい、立派な背凭れの椅子へと腰を落着けた。

そして前屈みに肘を付き、重ねた手と手で口元の表情を隠す。自分の本心を悟られぬように。

「何かね？遠慮無く言ってみたまえ」

ソファアールから立ち上がりっぱなしのアスランを見据える。一瞬躊躇うような揺らぎを顔に見せたが、次の瞬間には強い意志を垣間見る事が出来た。

「…身勝手に傲慢な申し出である事は承知しています。…俺をザフトへ復帰させて頂けませんでしょうか？」

紺色の髪が頭を下げた事によりだらんと頬を隠した。綺麗な姿勢で腰を折った事もあり、懇願の念がより強調されていた。

その言葉が耳を打ち、議長の口元に笑みが浮かんだ。

「ザフトへ復帰…ね」

凭れていた背中を起こし、椅子を回して立ち上がる。それに倣って成りを潜めていたミーアも、アスランへと笑顔で歩み寄る。

「やはり貴方はこちら側で力を奮うべき人間です。さあ議長、彼にあの勲章を」

まるでラクスのような物言いに、少し身を引いてしまいそうになった。しかしそれは許されない事。

この決意を持った時から、逃げ出す事は自分への冒涇に似ていた。

「いえ、まだです」

議長の言葉で因縁の軍人へと逆戻りか、と思っていたのだが、小さな笑みを浮かべていた口はそれに待ったを掛けた。

「アスラン、その決意は本物なのかね？ 私にはそうは思えないのだが」

「……………」

アスランは顔を上げた。そこに移ったのは、決意に燃えた瞳ではなく、惑いを湛えた揺れる瞳であった。

それを見たデュランダルはもっと笑みを深める。

そこに見えている本当の思いを、アスランの内から引き出す為に言葉が続けていく。

「ザフトへ戻る、という事は別に許可する事は出来る。君は信頼に足る人物であるから、FAITHの勲章を与えてやる事で、君の思いを叶える事も不可能ではないだろう」

しかし、それは自殺に近い行為である事を、目の前の彼は失念していた。

「では復帰を果たしたとして、君が守りたいといった代表やオーブが存在する地球はどうするのかね？ユニウスセブンで見せてくれた、あの強い意思はどうしたのだい？」

「……………」

閉口するしかなかった。それ程に自分の内側を剗られて、帰ることばかり考えていた自分の浅はかさに気付かされた。

そんな様子を見せて俯いてしまったアスランに、デュランダルは笑みを更に深める。

しかし、口調は更に厳しく更に激しく内側を刳る。

「今の君は目の前の事態に、内に抱いた思いが暴走するのを制御できていないだけだ。証拠に君が守りたいものを守る立場を捨てようとしている」

デュランダルは脳裏に浮かぶ愛しい人。子供が欲しくて、しかし相性の合わないコーディネイター同士では、決して叶わない願いだと知っていて。自分から離れていくのを見送ってしまったあの日があったらついた。

彼女の意志を尊重することを優先した事に後悔は無いと、あの時は思えた。しかし、それは虚勢でしかなかったと後になった思い知らされたのだ。

「アスラン、君はそれでいいのか？

立場や柵なんて考えず、一番愛おしいものを守る為の答えは、敵対するかもしれない軍に復帰する事かね？」

《調整された者》だからなんだというのだ。

出生確率の低さがなんだというのだ。

お互い愛しあっていたというのに、一緒に過ごせないなんておかしい関係に満足出来る程、諦めの悪い性格なら良かったのかもしれない。

なまじ理解を示してしまった事が、結局は後にやるせない気持ちを連れて、膨れ上がって帰ってくるのだ。

そんな気持ちを彼に味わって欲しくない。結ばれなくて結ばれない、

もどかしい気持ちを共有出来た、しかし若さでどうにでも出来そう
な、目の前で揺れ動く気持ちを定めようと懸命になる青年には。

「…議長、俺は」

見透かされた心が痛みを訴えて、少しの間を欲しがった。そしてそ
の間を埋めるかの如く、アスランはまだ定まらぬ気持ちを吐き出し
始めた。

「…俺は本心からザフトへ戻りたいとは思っていません。あまり良
い思い出もありませんし、何よりカガリの傍を離れる事になるから」

デュランダルの中で、悲しそうに表情を歪めるミーアの姿を視認し
た。しかし、今のアスランにそれを氣遣う余裕など欠片も無かった。

ちくりと痛む小さな良心を無視して、心を占める迷いを目の前の《
大きな》人物に投げかけてみる。

「しかし、カガリとの関係はこれ以上進む訳にもいかない。進めた
くても、代表と一般人という隔たりは思うよりも高い壁なんだ」

しかも、カガリは拾い子とはいえ、オーブの歴史に連なるアスハ家
の一人娘である。その立場も相俟って、兩人とも踏ん切りを付け辛
い。

議長やクロードが言うように、簡単な話だったら、カガリを無理矢
理に攫う事だって厭う事は無いだろう。

「…なら、せめて、結婚へと踏み切った経緯と思惑を問い質すだけ
でもいい。それさえ出来れば俺は――」

「嘘よ！それ以上自分を傷付けちゃダメよ！」

ミーアの声にハツとして、現実へと戻る。無意識に紡がれた言い訳は、脳裏に染み付いたカガリを諦める口実である事に思い至り、自分への失望を抱く羽目になっていた。

驚きと絶望を混ぜたような表情のアスランの正面に、ミーアは肩をいからせて歩み寄った。

ミーアの表情は、複雑に入り乱れて如何ともしがたいが、一番に表したい気持ちは叱咤。

「あなた、誰かのせいにして自分の中の気持ちに蹴りを着けるつもりでしょう！？？」

そんな事したら、誰が一番塞ぎ込んだじゃうかわかる？気持ちを通わせた相手なのよ！」

呆気にとられるアスラン。それを放って、ミーアは抱えた不満を曝け出していく。自分の表情が崩れていつているのを知らずに。

「身分や柵ですって？そんなものに縛られたら、諦めるぐらいにあなたの中でその人は小さな存在だったって事ね！」

「な、何！」

「だってそうでしょ！？諦めきれないんだったら、理由を作る事自体がおかしいのよ！」

大切なものだったら、絶対離さないぐらいの気概があるものだわ！」

アスランは絶句して、ミーアを凝視する事しか出来ずに居た。今の自分に堪える言葉を投げ掛けているというのに、涙を見せたのは叱咤を繰り返したミーアの方だったのだから。

それがどんな涙であっても、自分の不甲斐無さがこの涙を誘った事は明白で。

不自然な気持ちが膨れて、止まらなくなったのは、アスランの精神が正常でないからか。はたまた、叱咤してくれたミーアに誰かを重ねてしまったからか。

「自分の気持ちを偽らないでよ！」

涙が彼女の頬を伝っていく。それを拭う資格が自分には無い。目の前の少女が思い起こさせてくれたからだ、カガリへの情熱を。

他の女性を思いながらでは、この綺麗な涙を拭ってはいけないと思える程に、ミーアの気持ちは純粹にアスランの心へと響いたのだった。

「…そうだな。《自分のしたい事を、あたしのせいで我慢されたくない》、と言われていたのを忘れていたよ」

優しくに呟いたアスランに、ミーアは涙を拭えずに微笑んだ。それを確認して、アスランはキツと表情を引き締めた。

惑いに揺れる瞳が焦点を定め、デュランダルへと向けられた。その双眸はユニウスセブン前に見せてくれた、偉大な光を湛えていた。

「議長、改めてお願いがあります。明後日までにオーブへ帰れるよ

うに、シャトルを用意頂けませんか？」

翠の瞳が見据えてきて、デュランダルは今度は嬉しそうに口元に笑みを浮かべた。

この若者がこの答えを導き出すのは確信していたが、随分と無理をしていたみたいだったのが気掛かりだった。しかし、心配は杞憂に終わった。やはり彼の本来の強さが表に出れば、元の鞘に収まるのが当然だ。

「…良い瞳だ。君にならあれを託せる」

返答のちぐはぐさにアスランは怪訝を顔に見せた。シャトルを用意する云々ならわかるが、あれを託すとはどういう意味か計りかねた。

「着いてきたまえ」

議長室の扉を開け放つ事で、外の光源に目が眩むアスランからすれば、デュランダルは光の中に消えていったかのように見えていた。

それが示すのは吉か、はたまた不吉なのかは今の段階では判断出来なかった。

取り敢えず着いていかなば、シャトルを用意して貰う事は不可能だ。今は従うしかないと意を決して、パネルを軽く触る。

そして、自分の気持ちを定めてくれた少女に顔を向ける。始めてあった時や、食事の時とは違い自然と柔らかい表情を向けられた。

「ありがとう、ミーア。…出来れば次に会う時は、《本当》の君に

会いたいな」

そう残して、アスランも光の中へと消えていった。

弱々しい光源の中に佇む彼女が抱えた気持ちには、嬉しさ半分、戸惑い半分。難解な感情を閉じ込める事になった。

デュランダルに導かれた場所は地下の格納庫で、真っ暗な闇がそこには広がっていた。

一歩中へと足を踏み入れた事に呼応して、備え付けの電灯が明かりを発する。鉄筋で造られた道の先に何かある事が見留められ、アスランも黒髪の後ろ姿に続いた。

前を歩くデュランダルとの距離は詰まる事無く、離れる事なくを保っていたが、最奥に見えるものが視認出来てしまった時、アスランの歩みは強制的に止まる事になった。

それを余所に、デュランダルの歩みが止まる事はなかった。段々と光は強まり、その正体を燦々と照らし出す。

それはアスランに馴染みの強い色彩に彩られ、そこに異様な存在感を放ちながら聳えている。その懐かしさにも似た感情が、議長が託すと宣ったものが目の前の存在である事を告げる。

しかし、驚愕が上回っている今の状態では、冷静な判断を下せるとも思えない。目の前の存在感は、アスランの全てを狂わせていた。

「……ガンダム……！」

辛うじて呟かれた声に力は無くて。どれだけアスランの心を憔悴させたかは容易に計れた。まだ知らない新型が開発されていたのだ。取り乱すには十分過ぎる理由である。

しかし、デュランダルはそんな事は意に留めなかった。

「これを君に託したい。守る為の翼、《セイバー》をね」

「…し、しかし、他国の者に自軍のMSを与えるなんて前代未聞です！」

こんな事が議会に知れば、議長の椅子に座る事はもう適わないだろうし、議会に居られる事も難しい。そんな危険を冒してまで、自分にこれを託す意味はあるのか？

「前代未聞？前にもこんな事があった筈だが。忘れてしまったのかい？」

「……フリーダム強奪事件の事ですか？しかし、ラクスとあなたでは責任の重さが違い過ぎる！」

「しかし、あの時ラクス・クラインが彼にフリーダムを託したから、ヤキンドゥーエは終戦を迎えられたと私は思っている。そんな風に君も今にも始まりそうな争いを、終結する力を持っていると信じているんだ」

そんな事を言われても、今のアスランの中にあるのは、世界を焼きたくないという思いでは無い。

そう言い募ろうとしたのだが、議長の牽制の方が早くて、結果口を

際む事になってしまった。

「それに嫌な予感がするのだ。結婚式に上じて、何かを企む輩が居ないとも限らない。」

「尤も何も起こらないのが一番なのだがね」

議長の見解には賛成出来る。しかし、再びガンダムに乗る事は憚れた。やはりあの力は使わないに超した事は無いだろう。

「…議長、やはり受け取れません。こんなの非常識過ぎる」

断りの言葉を受けても、デュランダル表情は少しも変わらなかった。いや、少しづつ変わりつつあるが、浮かべるべき表情とは真逆なしたり顔を向けてきて、アスランは訝しいと思い議長の言葉等待った。

そして紡がれた言葉に、アスランは渋々了承を告げるしかなくなるのだった。

「シャトルは用意出来んのだよ。点検やら修理やらで、今日の定期便分しか運航しないのだから」

ミーアの時より酷い頭痛に見舞われて、思わず眉間を押さえていた。

それにわかっていた筈だ。目の前の人は、自分の決めた事は絶対に貫こうとする、不屈不撓の性格だと。

「…わかりました。乗らせて頂きますよ」

覚悟するしかなくて、もう殆ど開き直ってしまった。議長の立場と

か、自分が他国の者であるとかはもうどうでも良い。
帰る手段がこれしかないというのなら、しょうがないと割り切ろう。
愛しい者の待つ場所に戻るのだ、これぐらいの代償など軽いものだ。

何故か用意されていたノーマルスーツに身を包み、コックピットへと乗り込む。懐かしさにも似て、恐怖にも捉えられる感情が押し上がってくるが、それを少しづつ集中で消していく。

立ち上げたOSを確認すると、整備は行き届いているようで後はパイロットの認証を施すだけ。

右手だけとは思えない、もの凄いタイプスピードで設定を終えると同時に、上を覆っていたハッチが開く。

「…アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

一気に襲う懐かしい重力を振り払い、セイバーは宇宙港を通り抜けた。広がる星の海を切り裂いて、向かうは地球、愛する者が愛する惑星へと全速力で向かうのだった。

PHASE-23 偽らないでよ！（後書き）

お読み頂きありがとうございます。お気に召して頂けたでしょうか？

さて、この作品ではミリアに独自の解釈が成されていて、ラクスとして過ごさなければいけないという事は、過去の間係を全て捨て去らなければいけないという事です。

最初はラクスに成れる事に喜んでいたが、後から考えると友達の大切さや、恋人の温もりをも無くしたのだから、SS内でアスランを説得した時のように考えるのではないかと。

では、お疲れ様でした。次回もお読み頂けると嬉しいです。

PHASE-24 永遠に愛する事を誓うか？（前書き）

タイトルの通り、結婚式がメインの話になります。

それでは、お暇でしたらお付き合い下さい。

PHASE-24 永遠に愛する事を誓うか？

昨日の雲天が嘘のように、水蒸気の塊が空に一つもない、所謂快晴の天気がクロードの心を反対に曇らせる。

本来ならこの良き日が一番適しているとは思うが、この式自体が誰にでも受け入れられると、セイランは本当に考えているのか些か疑問だ。

そもそも結婚式までの準備期間が、たったの二日というのがあまりにも非常識だし、それ以前に新婦には想い人が居る事を知っているクロードからすれば、好ましいやり方で丸め込んだとは到底思えなかった。

『クロード、そろそろ始まりますよ』

「……わかってるよ」

豪華絢爛と言えば褒めて聞こえるが、クロードからすれば厭らしいぐらいに飾り立てた屋敷が見える小高い丘の上に、ラグナロクとインパルスが佇む姿があった。

任務を受けたのは一昨日の朝の事。あの衝撃的なニュースから未だに立ち直れていないまま、MS隊の四人は艦長室に呼び出された。

ステラにここで待つように告げるシンと、何事も無かったように歩いて行くレイには、影響も関係も皆無なようだが、目の前で狼狽えているルナマリアは、あの二人の絆を垣間見ているようだ。

かく言う自分も、人の様子を冷静に窺っていられる程の落ち着きは持ち合わせておらず、気が利いた言葉の一つも掛けられない自分に嫌気がさした。

ルナマリアを促して艦長室へと赴く。開いたドアの向こうに、思い詰めた表情で一枚の紙を眺めるタリア・グラデイスの姿があった。

どうやらぱっと見た所指令書のように、あの様子ではまたとんでもない内容が、あの胡散臭い笑みを浮かべる議長の名前で記されているのだろう、と軽く考えていたのだが、とんでもないを斜め上から崩すような衝撃を本日二度も味わう羽目になるなんて、誰が予想出来ただろう？

艦長が全員が居る事を確認し、躊躇いを覚えながらも指令書の命令を口にする。一つ一つの言葉が脳に浸透し理解を促していくが、半分もしない内に内容の予想がついてしまったクロードは、水を打たれたように心がざわめきさえも立てない程の驚愕を覚えた。

周りの確認が出来ないが、誰も声を発さない時点で理由は推測可能だ。皆一様に口を開けて、驚きを顔一杯に貼り付けているに決まっている。

思い詰めた表情のまま読み上げ終えたタリアは、珍しくも返事も質問も返さない四人を窺う。確かにこんな命令が下れば、代表を保護していたクルーが驚くのもしょうがないと思う。

代表は明らかに随員の青年に気持ちがあり、随員の青年も代表を想っている事は端から見れば明らかだった。

それが良くわからない内に結婚する事になり、その相手はやはり良

く知らない一議員で貴族のお坊ちゃまだと聞かされれば、耳を疑ったりするのが正常だろう。

しかし、その事実是指令書に載ったもう一つの名前が証明してしまっていて、あいつは何をしているんだと問い詰める為に、ミネルバを飛び出したくなる程に気持ちを掻き乱した。

それから二日はあつと言う間に過ぎていった。

指令を受けた次の日にラグナロクの整備を終えて、アスランに会う為に外に出たは良いが、姿も噂も皆目存在していなく、最後の頼み綱としてアスハ邸へと赴いてみたが、代表への面会は叶わなかった。

それに、こういう訳かアスハ邸は不気味な静けさを纏っていたのが気になったが、今日になってその理由は自然に理解する事になった。なんて事は無い。セイラン邸へと連れ去られていたのだ。侍従からすれば、主君を取られて士気が萎えてしまい、やる事為す事が虚しく感じてしまっていたのだろう。

その気持ちは痛い程にわかる。どんなに健気に振る舞ったって大切な人が居なくなるだけで、心にぽっかりと穴が空く事は必然とも言える。どんなに強いと言われる奴でも。

それにしても凱旋が始まる筈の時間になっても、一向に出立する気配が感じられない。鉄扉が開かれているだけで、肝心のリムジンの姿が見えてこなくて、クロードはシンにも聞こえるように舌打ちをした。

『…こんなんだったら、俺もレイ達と海岸線の警備の方が良かった

な〜』

腕を頭の後ろで組んでシンはぼやき始めた。確かにこんなに待たされれば、誰でも退屈に思い片方が良さそうに見えるのが人間の心理だ。

しかし、人間にも得手不得手が存在するように、MSにも能力を活かせる場所と全く使い物にならない場所とがある。

「…対水中用の装備も持たないインパルスが、どうやって海岸を守るって言うんだ？」

『…わかってますよ』

悔しそうに口端を歪めるシンを見て、理論の完成を急がねばならないだろうと頭を捻る。

シンはオーブで皆と合流してから、MSのシュミレーションを毎日、こちらが飽きる程にやり込んでいて、その操縦の質は見る見る内に伸びていった。

やはりステラを守りたいという決意が、この努力と才能を絶妙に交ぜてくれたのだろう。そう考えると、出航直後に叱咤した事が無駄にならなかったし、殴ったことも意味を齎してくれた訳で、クロードはある意味安心した。

が、今度は最新鋭のインパルスの性能が、シンの操縦についていけるかが疑問になる。正直、こんなに早くMS改造の対処しなくてはならなくなるなんて、ミネルバへ来た時は思いも抛らなかった。

(…嬉しい悲鳴だな)

この待たされる間にインパルスの改造案を考えておくか、と脳内に設計図を広げた時だった。

先程まで静かだったオーブ国民が、一斉に歓声を響かせた。カメラで門扉辺りを拡大してみると、白のリムジンが漸くお目見えになった。

(…代表、本当に結婚なさるつもりですか?)

広げた設計図を片隅に追いやり、考える事は紺髪の友人の事。他国の事とは言えど、国のトップの結納は速報でテレビや新聞で、はたまたラジオで放送されている筈だ。なら、この現実を突き付けられて、あいつは何を思うのだろうか?

『…それにしても、意外にあっさりとしたもんですね。こんな事でオーブが平和になるもんなのかな』

シンの意見は、多分プラント国民の総意みたいなものだろう。片方がまだ十代での結婚は、お互いに愛し合った結果だとは考え辛いし、政略による思惑がちらつく。その上でも、国が安定すれば良いとその純真を捧げているのかも、と推測するのが一般的だが、クロードの考えはシンとは相違していた。

「まあ、平和とは真逆になるだろうな」

『えっ!?!? どういう事だよ!』

「考えてもみろ、代表は一人でしかも内密にプラントへの会談を要

求した。内容や内情を少し知っているからこそ言える事だが、セイラン家がオーブの実権を欲しがっているのは目に見えていた。そしてセイランは大西洋連邦に属したい意向の筈だ」

会談中にそんな会話が合った訳ではないが、随員を一人、しかも一番の信頼を寄せるアスランを連れてくるのだ、執拗に迫られる婚約から逃げ出すように、プラントへ仕切り直しに訪れたと聞かされても納得出来る。

『それじゃ…』

「…ああ、再びオーブが戦火に焼かれる事も有り得る」

ガンツと、何かが蹴飛ばされる音が通信用のスピーカーから響いてきた。

中立を謳い国民の安全を保障してきたオーブを焼かれる事で、大切な家族を失ったシンにとって、どうしたって赦せる事じゃ無かった。以前のような抑えの効かない感情の暴走は成りを潜めたが、何かに当たる事までは止められなかった。

「…リムジンが移動を始めた。行くぞ」

ラグナロクのバーニアを吹かして宙に浮く。それに続いて、小さい舌打ちをしながらもシンはインパルスを浮上させ、それに続いた。

モニターの端に移る、二人の結婚を祝う国民達の様子は、商店街に入って、よりお祭り騒ぎの様相呈してきたが、こちらは一時も気を抜く訳にはいかない。

喜ぶに沸き立つ輩が居れば、その逆の輩も存在する。極端に例えを挙げるなら、国の重要人物二人を一気に葬るチャンスな訳だから、テロを敢行しようとする馬鹿が現れる可能性も高く、またそこまで行かなくても、この機会に目立とうする脳内お祭り野郎が現れるかもしれない。

そうこう考えている内に、白いリムジンの前に飛び出した一人の男が、警備兵に羽交い締めに使われていた。

通路を確保する為に路肩へと連行され、両腕を後ろへ回され、上で固定され動けなくされたのを確認して、クロードはカメラをリムジンへと戻そうてしたのだが、男が何やら叫んでいる様子が気になり、もう一度そちらを注視する。

集音機能を最大にしても、その言葉は周りの喧騒に掻き消されて、全く詳細は掴めなかった。そこで気付かれないように警備兵の無線へ繋ぎ、会話を拾ってみたのだが、それもまた衝撃的な内容だった。

『――ン！カガリ様を弄んだ罪は重い！手順も何もかも無視をして誘拐同然に御身を拉致し、挙げ句無理矢理に偽りの絆を創り出そうとでも言うのか！！』

どうやらこの男性は、アスハ家に仕える従者のようで、彼が吐き出す言葉が真実だと言うのなら、無理矢理に代表を連れ去る事により、無理矢理に結婚を迫ったと考えるべきだ。

しかし、そんな叫びが聞こえている筈の国民の一面は、ただただ喜びの声を挙げ続けるばかりで。それは第三者観ばかりを重視し、自分の意見を考えようとするしない、悪しき現代の醜態を如実に表して

いた。

目先に眩み、行く先を見据えられない事は、身を滅びへと向かわせているのと変わらない、とクロードは考えていた。

そうは言っても、セイラン家が何故、何の為に代表を一家に迎えようとしているか、それを知っている者がこの群集の中に何人居るのかもわからないのだから、文句を呟いた所でどうしようも無い事なのかもしれない。

『一一ド、一一ロード！クロード！！』

大音量で響いたシンの声で、漸く深く思考の海の中へ潜り込んでいた事に気付き、繋ぎ続けているインパルスの通信映像を見詰める。その顔には、驚愕と戸惑いに満たされていた。

「…どうした？」

『さっき捕まった男…、処刑とか言って射殺された…』

「……………そうか…」

考え事をしていた間に離れ過ぎてしまった、白いリムジンに追い付く為に、バーニアを少し強めた。

しかしそんなあっさりとした、一見では冷たいとしか言い用が無いクロードの態度に、シンは納得出来なかった。

『こんな事だけで殺されるのは流石におかしいですよ！
車の前に飛び出したただけだったのに…、処罰の為とか言って銃殺す

るなんて…。

もしかしたら人波に押されただけかもしれないのに…』

シンの表情が歪む。射殺された現場は路地裏の、誰も通りそうも無い暗い道。そのビルの合間には夥しい飛沫の後が、赤い滴りと共に未だに残っている。

死体は処理されているが、この凄惨な光景を目の当たりにしてしまえば、不快を催してしまうのが正常の証だ。

「いや、あの男は自分の意思で飛び出したんだ」

『な、何でそんな事がわかるんだよ!?!?』

「あの時、男を捕まえた警備兵の無線に気付かれないように回線を繋いで、叫んでいるのを拾ってみたんだ」

あの鬼のような形相で、口端が割けんばかりに叫び声を上げる男の姿が脳裏に浮かぶ。彼の言いたい事は、クロードの懸念と見事に一致していたのだ。

「あの男は言ってたよ。代表は無理矢理連れ去られて、しかも脅迫に近いやり方で結婚を迫りやがって——って」

『えっ!そ、それじゃ、あいつは自分の意思で結婚した訳じゃないのか!?!?』

「…ああ。あの男がどこまで本当の事を言ってるかを判断するのは難しいが、あんなやり方でセイランに非難を挙げるんだ、真実の可能性は高い」

そして、誰かを死に追いやった訳でも無いのに銃殺されるというのなら、余計に真実味が増している事に、警備兵達に指示を送るお山の大将は気付いているのだろうか？

『そうか…。アスハはまた綺麗事を並べて、国民を治めるのに使おうとしているもんだと思ってたけど――』

「それは違うって気付ければ、お前はちゃんと進歩してるよ」

怒りに我を忘れて牙を尖らせたままに、代表へと食い掛かっていた先日までとは、まるで別人のように思考が柔らかくなっている。

元々、心優しい少年だった筈が争いの狂気に抱かれて、面の色を変えてしまっていただけなのだろう。そうでなければ、人も寄り付かないし、上層部からすぐに見限られていただろう。

（……正直、ここまで変わってくれるとは……）

『何ニヤニヤしてるんですか？こっちは真面目に話してるってのに……』

柔らかい微笑みが知らず知らずに浮かんでいた。シンに指摘されなければ、このまま締まりの無い顔で警備を続けて、結婚式を祝っているトレイ、ルナマリアに勘違いされてしまうかもしれない。

「いや、悪い悪い！別に茶化してる訳じゃないから、勘弁してくれ」

『あっ、ちょっと、クロー――』

まだ言い募ろうとしていたようだが、インパルスとの通信映像を一旦切り、白いリムジンの横に着いている中継車の映像をモニターする。

先程の処刑から推察するに、やはり代表は、望んでユウナ・ロマ・セイランと結納を挙げようとしている訳ではないと考えられる。

映像は助手席側から撮影していて、その後部座席に金髪の少女の姿があった。その表情は一見すれば、喜びから訪れる柔らかな感情の結果としか取れない。

(…包み隠しているのか、或いは…)

判断が付かずに暫し周りの警戒をしながら耽っていると、車内で動きがあるのに気付いた。

代表がユウナの方へと顔を向けている。その表情は隠れて窺いようが無いが、わなわなと震え出した肩が悲しげだった。

そしてユウナから背けられた顔には、苦々しげに歪められた表情が浮かんでいた。良く目を凝らすと、瞳が潤み、うつすらと光り輝いているのが確認出来た。

その姿はクロードの胸を痛く締め付けた。悲しげに伏せられた瞳、今にも零れ落ちそうな涙、極めつけが噛み締められた唇。それらを見せられれば、この結婚で一番不幸になるのは花嫁という、皮肉とも何とも取れない哀れな結末になる事が目に見えていた。

しかし、そんな代表の姿を見ても国民の熱は冷めやらず、逆にまた盛り上がった気配さえするのだから、クロードは目を背けたくなっ

てしまう。

もしかしたら、国民の反応が正しくて、喜びを噛み締めて涙を我慢する為の歪められた表情だったのかもしれない。そして我慢出来なくて、泣き顔を見られたくない一心で顔を伏せたのかもしれないし、溢れ出す涙が止められずにある意味悔しくて、唇を噛んでいたのかもしれない。

『泣いてますね』

居た堪れなくなったのか、あんな表情を見せられて、手持ち無沙汰だと考え過ぎるのが嫌なのか、シンは通信を音声だけで繋いできた。

「…そうだな」

短く素っ気ない返事しか、今のクロードには用意出来ない。周囲の気配は探っているし、リーダーも視界に収まるようにモニターを見詰めているが、背けたいと思った瞳は未だに代表の姿を追っていた。

伏せられた顔がバツとユウナへと再度向けられる。そのやり取りの後、代表はゆるゆると顔を窓の外に向けたのだが、クロードはその表情をいつまでも見続けられなかった。

痛々し過ぎて――。

明らかに作った笑顔を貼り付けて、涙を零しながら歓喜を露にする国民へと手を振って応えている。

その瞳は光を宿しておらず、意思は希薄で。

「くっ…!…アスラン、何やってんだよ？お前の想い人があんなに苦しそうにしてるってのに…」

オーブに居るかさえわからない親友に向かって、届く筈の無い口を呟いてみる。こんな感情を内に溜めて吐き出さずにいるのは、クロードの心の嵩を超えていた。

『…クロード、今は任務を遂行しましょう。この現実が変わる訳無いんですから』

部下に諭されてしまい、暗く沈んだ気持ちを入れ替えた。このやる瀬ない気持ちが消える訳ではないが、現実を直視すれば、この結婚が覆るような出来事が舞い込む事は万に一つも無いだろう。

もし、ここでアスランが飛び出したとしても、身体能力の差により、その場で殺される事は無いだろうが、国家反逆犯として国外にも指名手配される事になってしまうだろう。

そうなれば、代表はオーブという高い頂に聳える城に囚われた姫君という事になるが、肝心の騎士はその頂を登ることすら儘ならない。

今はこの状態を保つ事が最善であろう。

「…そうだな。ありがとう、シン」

『いえ。それより終着点が見えてきましたよ』

（終着点、か。正にそのまんまなだけに、何とも言えないな）

白いリムジンが辿り行く道の先に、海に面した露天式のチャペルら

しきものが見えてきた。

海に近い方に大きな鐘が吊られており、その向かい側にシートが配された、見れば確かにチャペルだろうと思えるが、態々こんな変わり種な場所で誓いを立てる意味はあるのだろうか？

セイランの趣味だとしたら、些か乙女チック過ぎる気がして、変な想像が脳に浮かんできてしまい、振り払うよう左右へ頭を奮った。

周りを窺ってみると、流石に終着点に近い事もあって、盛り上がりは闌だ。

ここまでの盛況は、やはり国民が望んだ結び付きであるという証明なのだろう。ちらほらと老人の姿まで見えて、このまま事が運ぶ方が良いのかもと錯覚させるようだった。

たっぷり一時間と半程掛けて、漸く目的地までの走行を終えたリムジンから、純白の衣裳に身を包んだ二人が、陽の下にその姿を晒した。

やはり上質な生地を使用しているようで、滑らかな煌めきを放ち、特に女性をふわりと彩るドレスの、陽光を跳ね返す白の光沢は、まるで天使の羽と紛う程の清廉さだ。

衣裳だけでは無い。いつもは素面な代表も、多分成り行き上ではあるだろうが、薄く清潔さを感じさせる程度に化粧をしており、髪の毛も無造作に流すのではなく、所々にハネさせてアクセントが付けられている。

ミネルバで見えてきた代表とは大人っぽさが違う。しかし、その雰囲気は紛れも無くカガリ・ユラ・アスハで、隣に居る人物が違えばも

っと素敵なドレス姿になっただろうに、と悔しがる自分が居るのに気が付いて、思考の奥底へと押し込める。

雑念があれば、守るべき対象への感情が優先されてしまい、動くべき時に片方を態と守らない可能性もある。それは流石にマズい。

二人はチャペルへの階段を上がる。既に参列者は席に着いていて、二人が段々と現れ始める度に彼らに釘付けになる者が増えていく。

その視線の中、悠々とした雰囲気で歩き行くユウナと、伏せられた瞳と俯きがちな顔のカガリが、神父の待つ鐘の下へとゆったりとしたペースで向かう。

片方はまるで全てを手に入れ、充足な幸福を感じているかのように。もう片方は全てを失い、限らない絶望を感じているかのように。

クロードにはとても結納を挙げる二人には見えなかった。

式が始まる。クロードとシンも警備とは言えど、MSに乗りながらの観覧は憚れたので、小型のモニターを持ち出して機体の足元で見守る事にした。

「クロード、やっぱりこんなのおかしいですよ！」

横でモニターを覗き込むシンが突然大きめな声を挙げる。

今は式中。当然誰もが閉口し、物音も立てないようになっていると言うのに、普段のトーンで話せば嫌でも誰かに聞こえてしまう。

指を口の前で立てて、声量を落とすように促すと、周りの雰囲気気が付いたのか、バツが悪そうに頭を掻いて、隣に座るクロードに

だけ聞こえる程度にトーンとボリュームを落とした。

「…結婚式って、もっとう、華やかで幸せなイメージがあったのに、これはそんな雰囲気じゃない。策謀とか、そんな暗いものが張り巡らされてるような気がするんです」

シンの言いたい事は、この式典で最も判然としない、本能で感じ取れる危険な因子だった。

先程のような、代表を慕うからこそその行動とかそんな規模のものでは無い。確かにそこに存在していて、虎視眈々と獲物を駆る絶好の機会を狙う獣が潜んでいるように思えてならない。

予感めいた静けさが場を包む。モニターを注視すると、どうやら誓いの言葉を交わすようだ。

（…とうとう現れなかったな。後悔するぐらいなら、行動すべきだぞ）

『汝、ユウナ・ロマ・セイランは、カガリ・ユラ・アスハを妻とし、永遠に愛する事を誓うか？』

朗々と読み上げられた神父の言葉に、ユウナはいつものすまし顔に、勝ち誇った表情を付随させて応えを高らかに述べる。

『はい。誓います』

次は代表の番だ。ここで誓いを口にしてしまえば、もう後戻りは出来ない。一生、セイラン家に権力を齎してくれるお飾りとしての生活を送る事になるのだろう。

モニターに映し出されたのは悲しげに俯き、躊躇いを滲ませる代表の姿。そんな表情を咎めたいのだろう、ユウナは表情を歪めて、見えないように肘で小突いた。

上げた顔に浮かんでいたのは、小さな涙の粒。それは重力に抗えずに頬を伝い、純白の衣裳を濡らしていく。

そして、無理矢理作ったと目でわかる笑顔で、応えを紡ごうと口を半分開いた時だった。

ラグナロクからの警告がモニターに映し出され、クロードは一気にコックピットへと戻ると、レーダーの反応に視線を釘付けにした。

ここから北東の方角、ちょうどレイとルナマリア、そしてオーブ軍のMSが見張る場所へと、猛スピードで接近する反応が、一度も止まる事なく網を突破し、こちらへと向かっているのが確認出来た。

「くそっ、確かに好都合なタイミングだが、あの警戒を一気に突破するだど!?!」

急いでラグナロクを宙へ浮上させる。レイとルナマリアだけでも相当な戦力で、そこに十数機のムラサメが辺りを警戒していた筈なのだ。

そんな万全とも言える警備を易々と破るなんて芸当は、どんなに訓練をしたコーディネイネイターにも難しい筈なのに。

『来る…!』

太陽の光の中、そいつは青い翼を羽ばたかせて、地上に舞い降りた。一直線に向かうは、カガリ・ユラ・アスハの御前。

ユウナはその姿が降りて来ただけで、蛛の子を散らすように逃げていった。そんな姿を尻目に手を差し伸ばしたそれは、カガリの小さな身体をすっぽりと包み込む筈、だった。

『やらせるか！』

一条のビームに、手を引かざるを得ない状況を作られさえしなければ。

しかし、それで怯むようなものでは決して無い。一旦距離を置いたが、邪魔をした同系色の機体へと狙いを定め、まるで消えるように錯覚する程のスピードで一気に二機の間を埋めた。

インパルスも反応しているが、如何せん相手の方が明らかに素早い。ヴァジュラを抜き放とうとする前に、相手のビームサーベルが振られていて、その剣筋は柄を握り締めた右腕へと迷いなく下ろされていた。

(や、やられる…！)

瞳を閉じたシン。衝撃に備えたのだが、それは何時まで経ってもやって来ない。もしかしたら何も感じないままに、この世からおさらばしてしまったのだろうか？

こんな呆気なく、つまらない幕切れなんて望んじやいない。やりたいたい事もまだ沢山あるし、何よりステラともしっかりと色んな物を共有したかった。けど、それももう叶わな――。

「シン！何時まで瞳を閉じてるつもりだ！早く加勢しろ！」

クロードの一喝が脳内に覚醒を促す。瞳に光が差し込んで、辺りの様子がわかるという事だけで、今のシンには感動的なものだった。

しかし、ステラと生きれる喜びを噛み締めている場合じゃないのだ。カメラを回して周りを窺うと、自機のほぼ真上で攻防を繰り広げている、白と黒がモニターに映し出された。

白がビームライフルを放てばそれを躲し、ビームマシンガンで反撃を試みる。それを危なげなく避けると、白はインパルスに対して見せた、瞬間的に距離を詰める方法に移行する。

『や、やばい！』

居合抜かれたビームサーベルの一閃が、反応しきれていないラグナロクの右腕を襲う。先程までマシンガンを構えていたのだから、ガラディンを抜いて対応するにはもう致命的に遅い、

「甘い！」

と、シンは常識をなぞって考えていたが、ラグナロクはその攻撃を見事に防いでいた。腕に収められていた守りの刃、コダチで。

それでも、白は攻撃の手を緩めてはくれない。インパルスの影に隠れて見えないが、そこにまだ居る筈の姉を助け出す為に、目の前の黒を落とそうと力を引き出す。

それに、この機会にこの機体を破壊しておけば、後々の脅威を抑えられるだろうとも考えていた。

しかし、幾ら攻撃を加えても落とせる気配が一向に訪れない。サーベルを振れば、巧みな切り払いや腕に収納された刃で受け止められ、その隙に鋭い反撃まで飛んでくる。

（やむを得ない、か）

あの力を使うのは、やはり躊躇われた。どんな形であろうと素の自分である事が、贖いになるだろうと思うから。

その攻防に介入する事が出来ずに、シンはただただ見ているしかなかった。

「すげえ……」

呟くように落とされた言葉は、クロードへの感嘆をを具現していた。溜息を吐き出すように、シンは目の前の芸術的とも言えるやり取りに見惚れていた。だって、クロードが相手にしているのは、あの『フリーダム』なのだから。

「くっ……！シン、いい加減にしろ！こっちは手一杯なんだよ！早く加勢してくれ……！」

『は、はい！』

漸く攻防にインパルスが参加した。その光景を見て、ニヤリと嗤った影があった。

それは突然の出来事。三機がチャペルから離れながら、激しくなっていく攻防を繰り返していて、それを地上で眺めていたカガリの目

の前に一瞬の揺らぎが生じる。

そして一気に姿を現したのは、ユニウスセブンで暗躍していたと思われる、氷を思わせるカラーリングのもう一機の『フリーダム』。

『オーブ首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ。恨みは無いが…その命、貰い受ける!』

突き付けられたレールガン。威力を考えれば、直撃を免れたとしても衝撃波がある。

一気に冷えていく血液。蘇り消えていく記憶、ああ、これが走馬灯というものか…。アスランの温もり、怒り、やる瀬なさ、そして喜びが心に溢れてきてしまう。まるでこれから死ぬかのような、そんな情景。

光を帯びる砲口。次第に強く、禍禍しく輝きを増していく。

地上の異変に気付いたラグナロクとインパルス、そしてフリーダムが全速力で向かうが、無情にもレールガンのチャージの方が数段も早い。

『カガリーツ!!!!』 「代表おおおっ!!!」

チャペルの全てが赤い光に包まれたのを、クロードは茫然と見ているしか出来なかった…。

PHASE-24 永遠に愛する事を誓うか？（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。お気に召して頂けたでしょうか？

さて、中途半端な場所で終わっていますが、この話で賛否両論が出ると思います。

カガリの安否は？アスランはどうしたのか？クロードとシン、キラの戦いの行方は？

色々と思う所はあると思いますが、続きは次話という事で。

それでは、お疲れ様でした。次回もお付き合い頂ければ嬉しいです。

PHASE-25 …ありがとう（前書き）

閃光に照らされ、絶望に沈むクロード、シン、キラ。その頃、海岸線を守る二機もおかしな事に気付き始めていた。

一方、セイバーを駆ってオーブへと舞い戻ったアスランが見た物とは？

では、お暇でしたら、どうぞお付き合い下さい。

PHASE-25 …ありがとう

あまりにも赤い閃光が辺りを同じ色に染めていて、まるで夕暮れのようにだと、場違いな事をシンは思っていた。

憎くて、何も感じない訳じゃない。一瞬の出来事過ぎて、頭の回転が付いてきていないのだ。

突然出現した、ユニウスセブンでラグナロクと交戦記録のあるフリーダムに似た機体。それはいきなり腰のレールガンを構えて、代表の名を呼んで《覚悟》と全方位通信で叫んだ。

何故そんな危険な行為をするかはわからないが、これだけは言えた。

代表の身が危ない、と。

無我夢中で捍を握って、バーニアを吹かした。それも何故か自分でもわからない。ただその時に脳裏に浮かんできたのは、ミネルバで二人に与えられた部屋で、悔しそうにテーブルを叩くアスラン・ザラの姿。

その横で複雑な表情を見せる、代表も印象的だった。

そして同時に思い出すのは、ユニウスセブンへと向かう中の休憩室で、代表を守る為に国の事を貶しても良いが、本人のやっている事を鑑みないで貶すな、と毅然とした態度で代表を守るように立ち回る姿。

この二つがぐちゃぐちゃに混じりあって、ある思考が本能的に浮かび上がった。

それが代表を守らなきゃいけない、という前を考えると有り得ない考え。任務…という事もあるが、それ以上の判別出来ない感情が生まれてきて、とにかくフェンリルの所に向かわなきゃと、インパルスを全速力で駆けさせた。

しかし、離れ過ぎた距離を埋めるにはフリーダムとラグナロクの機動性でも不可能で、放たれた赤い一条のビームが代表へと直進しているのだけを、やけに遅く感じるながら茫然と眺めるしかなかった。

『カガリーッ！！！！』 『代表おおっ！！』

フリーダムのパイロットの叫びとクロードの叫びが調和して、赤く染まり、視認不能なチャペルを見詰める事しか出来ない自分の中へと染み込んでくる。

突き付けられた現実には、シンの心は痛みを通り超した傷を生じさせた。守りたいと思うものが守れなかったという事実。

目の前の赤が自分の瞳と同じ、紅に変わっていく心地さえしていた。少しずつ消えていく赤い光。浴びせられた場所は跡形もなくレールガンの餌食となって、残骸と瓦礫だけが残っていた。

戦う気力を失ったのか、フリーダムはだらりと力を抜いたように、茫然と現実を見据えたくないと拒否するかのように、カメラ部分の光さえ失っていた。

『……カガリーッ……！！』

漏れた嗚咽はフリーダムのものであった。嗚咽は泣き声へと昇

華し、誰もが茫然としているこの場へと嫌に響いて、シンの奥底にも悲しみを齎した。

そしてフェンリルは片付いたと判断し、次なる獲物を求めて辺りを見回す。誰もが散り散りに避難していく中、嫌に目立つ白いリムジンの姿が飛び込んできて、暗く狭いコックピットの中で嗤った。

急速で発信した為か、中に居るユウナの呼吸と心音は嫌に乱れていた。自分自身でわかるのだから、相当な恐怖を憶えたのだろう。

しかし、それもすぐに止まる事となる。落ち着ける場所に辿り着く等、最早夢物語としか思えない。何故なら道路を塞ぐように、あの蒼い機体が先程のようにレールガンを構えて佇んでいるのだから。

心臓の鼓動が聞こえない。身体が言う事を聞かずに、只々震えているだけだ。

運転手は奇怪な叫び声を上げながら、リムジンを疾うに脱け出していた。無礼者とか、置いていくなとか、陳腐な言葉すら吐けないこの臆病な口が、今以上に赦せない事はなかった。

「ぼ、ぼぼぼ僕が、な、何をしたっていうんだ…!？」

漸く吐き出せた言葉は、酷くしゃがれて自分でも何と紡いだのか判断出来ない程だ。しかし、自分自身を保身する為の言葉だった事だけは、脳が感覚的にそして本能的に憶えていて、更に嫌気がさすのだ。

本来ならこの車には自分とカガリが乗っている筈だった。あの場所から手を引いて、自分の男らしさを示すつもりはあった。だが、目

の前でレールガンのチャージを今にも終えそうなこのガンダムの雰囲気は圧倒され、淘汰され、そして、怖じ気づいて。

結局は竦む足を引きずるようにして、このリムジンへと一人で逃げ込んでしまった。

あの後、チャペルがどうなったなんて怖くて確認したくない。紅い閃光が背中を染めた気もしたが、気付いていない振りをしていたい。

カガリが死んだなんて、一片たりとも思いたくない。

しかし、直視出来なかった現実が無情な牙を剥くまでに、大した時間は掛からなかった。目の前に突き付けられた、光が増幅していく様を見せる砲口を、動かない身体と閉じてくれない瞳で見続けるしかないのだ。

「――――！！」

誰かの叫び声らしき雑音が耳を打ったが、そんな物は死の恐怖の前では、どうしても優先されて脳は聴き入れようとはしてくれない。理解しているのは、誰も助けにこないし、もう風前の灯程度の命という事ぐらいだ。

「――――ナ！！」

レールガンの砲口から光が漏れ始めた。そして数瞬の後、赤い光が真っ直ぐにこちらへと放たれたのを確認して、僕の意識は完全に途切れた。

「――ユウナ！！」

最後にカガリの呼び声が聞こえたような気がしただけでも、僕は幸せだったのかもしれない――。

時は少し遡る――。

「くっ！何だと言うんだ、この部隊は！」

一機の所属不明MSをビームトマホークで屠りながら、レイは苦々しげに叫び声を挙げた。

白いザク・ファントムは赤いザク・ウォーリアと共に、突破されてしまった海岸線を放棄し、クロードやシンと合流しようとした時だった。

突然海中から現れたMSによる足止めを食らってしまったのだ。どうやら新型のようで、レイの脳内にもこの機体に関する情報は存在していない。

いや、そうではないのかもしれない。脳の何処かには記憶が存在し、その残滓の糸が漂っているのだとしても、今の心裡では冷静に辿れないだけの可能性もある。

それは武器が破壊され、貧弱な装備で立ち向かわなければならぬとか、ムラサメ隊の統率が機体通りの動きを見せてくれないとか、そんな不安要素のせいじゃない。

あの《自由》を関する機体、正確にはそのパイロットのせいだった。

『レイ、マズイわよ！フリーダムを止めないと、クロードとシンだ

って危ない！』

ザク・ウォーリアがコックピット辺りに拳を叩き込み、MSを沈黙させた。ルナマリアはウィザードをやられているので、被害は甚大だ。

かく言うレイの機体も片腕とビームライフルを失って、本来なら近接戦さえ危ぶまれる状態なのだが、持ち前のセンスのお陰で二人ともそれなりの対処が出来てはいるが、ムラサメ隊はバーニアとスラストー、可変機構をやられたようで、こちらへ援護に来られる雰囲気では無い。

「わかってる！しかし、こいつらを放って行く訳にはいかないだろ！」

コックピットを狙った一条のビームを弾き飛ばし、防御に一役買ったトマホークで敵MSの上下に分けながら、レイは冷静な判断を下していた。

ルナマリアも周りの状況は把握している。海の中から湧き出てくるMS群は、有限の筈が心理的に無限のように現れてくるように感じているし、中々の戦闘力を誇る為油断も出来ない。

その上でも、チャペルへと加勢に行かなければいけないと脳が告げている。どんなに二人が優れていると言っても、あの伝説の機体の前では霞んでしまう。ユニウスセブンから地球を守ったラグナロクだって、フリーダムの前ではどうしても聞き劣りしてしまう。

それ程に、大戦の英雄の名は大きなものなのだ。

『けど、フリーダムを抑える為には四機でも荷が重いのも、確かな筈…よ!』

海の中から伸ばしてきた腕を確保し、引きずり出して地面に叩きつける。後はコックピット付近を踏み潰してやれば、また一機が行動不能になる。

確認が出来たら次へ移行する。片腕を失っているザク・ファントムじゃ、攻守のバランスは取り辛い。

片方に傾けば、片方は疎かになるのが道理だ。それを人間は両方に同じものを共存させて均衡を保っている。しかし、その片方を失えばどうか。

その状態にすぐに慣れる事が出来れば話は別だが、そうで無いのなら攻守どちらに移る時も僅かな隙を生じる結果になる。

戦場において、その隙は命取りになる。レイの操縦センスならそこまで心配する事ないとは思えるが、念には念を入れなければならぬ状態だろう。

そうこう考える内に、ビームトマホークを紙一重で避けられた事により生まれた隙を、後ろから迫る機体が突こうとしているのが目に飛び込んできた。

『やらせるもんですかっ!!』

今まで温存していたビームトマホークを、肩に直結しているシールドから引き抜き、思い切り投げ付ける。

それは回転しながら敵MSの直前で少しづつ左へと方向を変え、胴の装甲を切り裂き、そこに突き刺さる。

その合間にザク・ファントムに反撃を試みた敵MSは、ビームを放ってきたのだが、巧みに躲しつつ接近されて、振り下ろされたトマホークによって、文字通りに真っ二つになった。

「済まない、助かった！」

『お礼は後で良いわ。とにかくここを早く片付けなきゃ、手遅れになる事だって考えられるんだから』

「…ああ、その通りだ」

両のザクが斧を握り直し、また海から出現した瞬間に、ルナマリアは信じられないものがレーダーに映った事に、驚愕の声を上げた。

『な、何よ、これ！？』

MSの反応がこちらへ向かってきていた。別にそれには問題は無い…とは言いがたいが、有り得ない事では無い。

では、何が信じられないものなのか。それは――。

『何でこのMS、ザフトの識別なのよ！』

そう、識別は味方と告げているのだ。しかも、もの凄い速さでこちらへ近付いており、もしかしたらラグナロクよりも高機動性の可能性も浮上してきた。

しかし、そうなると解せない事が脳裏を掠める。敵MSの攻撃を避けつつ、考える事は反撃か回避し続けるかの選択肢ではなかった。

（誰なのよ、こんな大変な時に向かってくる奴は？）

オーブは理念の関係上、ミネルバのような非常時で無い限り、他国の兵器然としたものを国内に受け入れたりしないだろう。その上、今はフリーダムが結婚式に乱入して、司令部も行政府も混乱している筈だ。

どう言っただって国内に入る事は不可能だと思われた。

「…妙だな」

「えっ？何がよ？」

敵MSが放ったビームが足元で弾け飛ぶ。二体のザクがその場をジャンプして回避したからだ。その行程の最中、レイはぼそりと気になるような導入部を落としていて、ルナマリアも咄嗟に聞き返していた。

「ザフトの汎用型に、ここまで高機動のモデルは無い筈だ。それに機体名が表示されないのも気になる…」

言われてみれば識別はされているのに、機体の固有名は映し出されていない。

『うーん…。そうすると新型って事なのかな…』

ルナマリアが眩きを落として、目の前に迫ってきた敵MSをいなし、その時だった。

ザク二機に降り注ぐ太陽光が一瞬、本当に一瞬だけ遮られた。何事かとレーダーを確認してみると、先程までオーブ近海上を移動して

いた反応が、今やオーブ国内へと進入しているではないか。

『い、いつの間に！？』

同じザフト所属だし、自分達に情報か命令を持参したんだろうと考えていたので、挨拶の一つぐらいと援護をしてくれるものだと思っていたルナマリアの肩が沈む。本当に拍子抜けも良い所だ。

振り向いて、飛び去る機影を確認してみる。そこにはもの凄いバーニアを吹かした、ルナマリアのザクと近い色をした飛行機のような機体が、チャペル方向へ高速で向かっている様が視認出来た。

『ど、どうしよう、レイ！追い掛ける？』

「もし、あの機体が仲間だったすれば、ラグナロクとインパルスが居るんだ、フリーダムを抑えられる可能性は格段に高まるだろう」

気持ちちは昂ぶり、辛辣な思いに溢れているが、頭は幾分冷静なように、的確な判断がレイには出来ていた。

それにルナマリアはミネルバに帰れば、それなりの装備を整えてすぐに出撃出来るだろうが、ザク・ファントムは腕を失ってしまっている。事実、現在共に戦っている女性にさえ迷惑を掛けている。

信用が出来る保障は無いが、あの機体がザフト所属機なら、足枷と成り得るフリーダムにやられたザク二機よりも、クロードの役に立つだろうと思う。

「それに、目の前のMSが出て来なくなるまで、俺達はここを離れられないだろう？」

確かにそうだ。このMS達の目的ははっきりしないが、フリーダムが国内に進入してからこちらの邪魔をし始めた。

もしかしたらフリーダムの手助けをしているのでは？と最初は考えていたが、結局は有り得ないと頭の中から棄てた。

（たった二つの戦艦と数機のガンダムで終戦に導いた英雄が、こんな卑怯な真似、する訳無いもんね）

今のルナマリアは英雄という言葉に囚われていた。

プラントは、大戦がああ形で終わらないで、敗戦国にでもなっていたら、大変に重い罰を与えられる筈だった。

ジェネシスの建造を取り決めた議会は当たり前だが、それをサポートし、挙げ句にニュートロンジャマーまで開発してしまったザフトも、過激なナチユラル排斥運動を展開していた者たちも、ましてや一般人も。

地球連合の影であるブルーコスモスにより、完全に根絶やしにされていた可能性も捨て切れないのだ。

その危機を救ってくれたアークエンジェルやエターナル、フリーダムとジャステイスは本当に敬う価値があると、プラントの住人たちは思っている。

実際、ルナマリアもその一人であり、フリーダムをこんな形で見ていなければ、終戦直後のように無邪気に騒いでいただろうと思う。

しかし、対峙してみるとわかる事だが、あの圧倒的な雰囲気は何な

のだろうか？

たった一太刀で的確に武器の弱点を突き、その上でも、次にカメラを潰すMSの動きを完全に読み切っているとは思えないあの迷いのなさ。

あんな動きを目の前で見せ付けられれば、憧れや尊敬なんて引っ込んで、浮かび上がるのは絶望や嫉妬。同じコーディネイターであっても、これ程までに違う見えている世界が、本当に羨ましく思えてしまう。

『わかってる。だけど――ってレイ！これ！！』

一度状況のおさらいをしておこうと、レーダーを何気なく眺めてみたのだが、いきなり新しい反応が現れていた。

進入を許してしまったフリーダムや先程の赤い機体では無い。この反応はユニウスセブンでクロードがジュール隊と共に交戦して、その後データベースに登録したMSの固有名を表示していた。

その名は《フェンリル》――。

「くっ！何だと言うんだ、この結婚式には何か裏があるとでもいうのか！？」

レイは叫びながら敵MSの放ったビームを避け、一気に接近戦に持ち込もうとする。こんな強力な機体が入り乱れる、混沌とした結婚式なんて前代未聞だし、地球ヘコロニーを落とそうとしたフェンリルの目的は、恐らくオーブの要人辺りを抹殺する為だろう。

それがわかったから、レイは決着を急いだ。一瞬の隙だけでもいい。

とにかく、この場を離脱してチャペルへと向かわなければ、とんでもない事になると冷静な部分は告げる。

――反対に、昂ぶった部分は違った応えを見せていた。

しかし、先程までの足止めをするような行動を止め、今度はこちらに隙を与えないように、攻撃を避けたり、弾いたりして接近戦を保つ形を取り始めた。ルナマリアの方も同じようで、中々引き離せずに、二機共同じような状態で立ち往生した、その数秒後だった。

いきなり背中の方から赤い閃光が立ち昇る。それが何を示しているか、一瞬わからなかったのだが、すぐにそこが結婚式が行われているチャペルである事に至り、二人は瞠目し、二つのザクはほぼ同時に動きを止める。

その隙を狙ったの攻撃はやってこない。対峙していた敵MSは、赤き線条を確認した瞬間に海中へと逃げており、二人は思わずにこの戦闘を終了する事になった。

普通なら、すぐに見切りを付けてクロードとシンの元に向かうべきなのだが、そんなものは今の心境にはそぐわない。

瞳目は未だに続いており、その驚愕の深さを物語る。任務の失敗を悔いているのではない。この閃光が示しているであろう、一人の少女の命が散った事に、心が感情を燈してくれない状態だった。

短い時間だったが、確かにミネルバと一緒に過ごし、その志を身にかけて、その思いの深さに驚嘆したあの場面が蘇って、知らずルナマリアの頬を一筋の雫が濡らしていた。

プラントを出立した頃より続いている、頭を掠めていくような嫌な感じが、一向に収まってくれる気配が無い。

脳内からそれを振り払いたくて、スピードという一種の麻薬に近い中毒を引き起こす体感で、大気圏を突破してみたが、先程にも増して不安や予感めいた悪寒がどんどん増している事に絶望する。

こんなに沈み続けていく気持ちは、今のアスランにとって、最も縁遠い場所に追いやりたい感情であった。

思い浮かぶ彼女の写真は、今の状態では引き裂かれ、火が焼き付くそうとしたりして、笑顔の眩しさを歪んだ憎悪が食らい尽くしていく想像しか出来ずにいた。

それはアスランが楽天家で無い事にも由来しているが、それにも増して、あまりにも杜撰としか言いようが無い、警備の甘さも原因とも言える。

オーブ近海へと降り立ったザフト所属のMSにアプローチする事もせず、ただ一機の巡回機がのほほんと浮かんでいるだけで、高速で過ぎ去っていくセイバーの姿を視認すらしない始末だった。

もしかしたらレーダーすら確認せずに、他の何かに気を取られているのかもしれない。

例えば、アスハとセイランの結び付きによる、軍部に傾けられるであろう資金による、自分への配当等を。残念ながら、こんな場所を警備させられている時点で、それによる潤いは高が知れているが。

そんな事よりも問題なのは、国内だけでなく、巡回を行っている者達さえもお祭り気分である事だ。

騒ぎが大きければ大きい程、それに上じる事が目標を駆逐する最善の機会である事は、どんなに馬鹿な者達でも、脳髓に叩き込まれたかのように理解している。

だからこそ、細部に渡る守りの体制を整えておかねばならない。しかも、その騒ぎの中心が国のトップであったり、国民的なアイドルだったりすれば、事件発生確率は応じて上がっていつてしまう。

「くっ…!!」

脳内に展開する予期は、オーブを焼き払っていき、その延長線上に愛しい女性も居て、共に消滅していくような映像。

それがオーブ近海に入ってからというもの、リフレインし続けている。どんなに打ち払おうとしても、結局は無意識に思い出してしまふのだ。

（早く、早く！早く！！）

彼女の元へ。ユウナの手から掻っ攫うとか、御身を頂戴するとかそんな具体的な案は、今のアスランには無い。あるのは、カガリの無事な姿を確認し、この不安で不安定な気持ちにさせる元を断ち切りたいと思う、自分本意なものであった。

そして、漸くオーブが見えてきた。シャトルのような高性能で出力の強いエンジンを搭載している訳ではないので、ここまで一日とちよっと掛かってしまっているが、定期便ではもっと掛かってしまうのだから、これ以上の贅沢は言ってはいけないだろう。

しかし、オーブを拝む事によって齎されたのは精神的な安定でも、

彼女の無事の確信でも無かった。

「これは……!!」

本島の海岸線、その砂浜の上に近い場所。普段なら何も無い、穏やかな波が打ち寄せるだけの心休まるような情景。今の時期でも結構な人がデートやら、恋人の語らいやらに使っていたりするのだが、そんな羨ましいような、齒が浮くような光景の跡形は一欠片も存在していない。

あるのは、見憶えのある白いザクと赤いザクが、海中から湧いてくる見た事の無いMSを屠っている姿と、無惨にも散った警備用のムラサメ達であった。

しかもMS達と交戦し続けている二機のザクは、どちらも手負いのようで、見た目、レイの方は腕を失っているようで、片腕でビームトマホークを構え、巧みに攻撃を躲しつつ反撃を試みているが、バランスの取れない状態であるのは一目瞭然だった。一方、ルナマリアの方はあの大型砲をやられてしまったようだが、こんな状況なら逆に好都合かもしれない。

奇襲を掛けてくる敵であると、どうしても接近戦が主な戦闘になり易い。ガナーウィザードはそんな戦い方では、只の邪魔な筒でしかない。

戦況の把握は大体こんな感じだろうと、思考が告げている。勿論、そんなものはわかっているのだ。二人には悪いが、ここで援護をしている暇は無い。

不安を煽られてしまう、このオーブの惨状を確認してしまっただけは、余計に彼女の元へ急がざるを得ないだろう。感情と本能がそう脳髓

を叩く。

捍を握り締める力が強くなる。バーニアを最大に吹かし、一気に二人の頭上を通過する。レーダーの反応はザフトの物であるから、怪しんだりはいしないだろうが、不信感を抱く事にはなるだろう。心の片隅で謝罪を軽く述べ、こことは違う、もう一つのMSが集合している地点を旨指す。

議長から事前に聞いていたように、ミネルバのパイロット達が護衛に参加していた。となるとこの三つある反応は、共にミネルバのMSが放つシグナルという事になるのだが、あの艦には確か四機のMSしか搭載されていない記憶がある。どういう事なのだろうか…？

――そう言えば、帰還したラグナロクとインパルスに抱えられたガイアがあつた事に思い至つたのだが、確かアーマーモリオンで強奪された機体だった筈のあれが、護衛に参加している事に些かの疑問が残る。

それに、あんなギリギリのクルーしか乗り込んでいない艦の、誰がガイアに乗っているというのか？

まさか、拿捕したガイアに乗っていたパイロットを乗せているとは、流石のクロードでも言うまい。

そうこう考えている内に、MSの反応がレーダーの真ん中に重なった。低空を滑空するように、MA状態からMSへと可変して森の中へと着陸の態勢を取ったのだが、どうも様子がおかしい。

海に面したチャペルを護衛するように、ラグナロク、インパルス、ガイアが聳え立っているのかと思えば、地上にその三機の姿は無く。カメラを操作して辺りを見回してみると、上空遥か彼方に三機のガ

ンダムの姿を確認出来た。

しかし、その内の一機はアスランの予想を斜め上から虚仮威しているような、そんな心境になっても致し方無いと思ってしまう懐かしい面影であった。

美しい白と青のコントラスト、衆目麗しいあの機体捌きと、無敵とも思える武器の扱い方。共に戦場を駆けつけた時は、どれ程に頼りにした事だろう。

大戦の後、二度と見る事の無い世界を戦友と夢見たのに、その姿は今日の前を舞って、ラグナロクと交戦していた。

「キラ…？あいつ、何をする為に…？」

カメラを再び回す。チャペルを捉えた映像は、アスランの心に漸く平穏を齎してくれる存在が居て。

更に拡大してみると、白いドレスを身に纏い、うつすらとされどその美しさを十分に引き出すような化粧を施され、三機が交戦しているのを見詰める憂いた瞳が、神秘的な雰囲気醸す少女とは呼べない空気を放つ愛しい人、カガリ・ユラ・アスハが佇んでいた。

「ふう……」

少し脱力して、シートへと体重を預ける。空で戦っている親友二人が気にならない訳ではないが、今までの心労が飛んでいって、強張った身体を解す事の方が大事に思えた。

一つ大きな伸びをして、アスランの顔に漸く穏やかな笑みが浮かんだ。見守るようなその瞳はカガリから離れる事は無い。それが次に起きる悲劇のような出来事を、いち早く察知する要因となった。

三機がどんどん上昇して、肉眼でその姿さえも確認出来なくなった頃合いを見計らったかのように、カガリの目の前、海上の空間が揺らめく。

その反応に見憶えのあったアスランは、一気に血の気が冷めていく心地を味わった。

それは大戦の中期、自分達が連合からガンダムを奪取した時の事。その中の一機に、今起きている現象を最大の特徴とする機体があった。

ちらついたニコルの柔和な笑みと、海を望める墓の一面と母親が流す涙。一晩苛まれた記憶の奔流と、溢れ出す贖罪へと捧げた力の行方。それが、今日の前に集結していく心地。

拭った筈の予感めいた悪寒の復活と共に、その空間の揺らぎが消えていく。安定の後に、現れた姿はアスランに戦慄をもらたした。

どこまでも蒼い機体色と、溢れ出す殺気の塊。そしてカガリへと向けられ、構えられたレールガン。

「――――！！？」

声にならない声を上げ、アスランはセイバーをがむしやりに駆った。二人の間の距離は些程も無いが、どうにも遠く感じてしまうのは、やはり走馬灯と同じような原理か。とにかく、一人と一機の間割り込む事だけ考えた。

『――――』

フェンリルが全包围通信で、何かを外へと伝えたが、そんな物はアスランの耳にも脳にも届かない。今感じているのは視神経だけ。守ると誓った、初な少女の姿を映すだけ。

レールガンの砲口の赤い光が、今にも迸しらんと火花を散らしている。セイバーとカガリの距離は、庇えるまでの距離までもう少し、手を伸ばせば、チャペルの石壁に触れられる程度の距離。

無情にも放たれる赤い光。その絶望に目を取られしまい、もう一つの赤き閃光には気が付いていない。

瞬間、爆発。

周りを造った目的等わからない程に、無惨な形へと誘った蒼き機体は満足そうにレールガンを下ろし、次の標的へと牙を剥きにいく。

その反対側、レールガンで切り裂かれた森の茂み。そこにコックピット付近を吹き飛ばされた赤い機体が転がっていた。

まるでそのまま溶接でもされるかの如く、装甲を貫くと共に味わった灼熱が、未だに左腕を襲い続けてきて、アスランは左目を瞑る。

しかし、そんな痛みよりも確認しなければいけない事がある。

開いてしまった装甲の隙間から這うように抜け出し、セイバーの手へと痛む左半身を引きずりながら向かう。

どうにも言う事を聞かない足を叱咤し、力の入らない左手を無理矢理に働かせ、両手で包んだ筈の存在を確かめる為に、指の部分を引

きはがしていく。

両の手で作った暗き空間の中に光が差し込む。その光が映し出したのは、全身に煤を被った愛しき女性の姿。

「……………そ、んな……………」

空虚な、そして残酷に静かな時間が流れていく。それが示す所を、アスランは信じたくなかった。

あの眩しい笑顔も、柔らかで滑らかな肌も、さらりと流れる絹髪も、そして愛しいカガリという存在を、この身で感じられないという事を。

無我夢中で両の手の空間へ飛び込む。そして一生懸命に呼び掛けながら、変わらない姿のままのカガリを揺らす。

こんな現実には嘘だと。嘘を現実にするなど。

「カガリ！！？カガリッ！！カガリーーーーッ！！！」

哀しみと涙に彩られた、全てを震わすような叫びが、小さな空間の中で飴した。抱き締め、顔の横で涙と嗚咽を憚らずに上げた――その時。

「……………何だ？…そんなに、大きな、声を出す、なよ……………」

時が止まった心地がした。確かに鼓膜を震わせたのは、守れなかった彼女の生声で。恐る恐るピタリと添えた身体を離してみる。

そこには確かに彼女の息吹があつて。痛みで歪められた表情であるが、確かに命の鼓動が聞こえてくる。

「カ、カガリ……？」

しかし頭は追い付いてこない。混乱の極みを味わっているアスランの腕の中で、カガリはちょうど良く収まる所を見付ける。二年の付き合いともなると、自然とわかってきた居心地の良い場所だ。

そして、痛みを訴える脳に鞭を打って、カガリは小さく笑みを浮かべた。

「……ありがとう、助かった……」

その言葉だけで十分だった。アスランの中に、安堵とか、喜びとか、現実か疑う感情とか——とにかく抱えた色々な感情が緋い混ぜになり、そして彼女が無事という事実が脳に漸く到達する。

「うっ……うっ……、良、かつ、た……。死……んでしま……った……かと……！」

「……大丈夫。アスランのお陰でこうして生きてる……」

「……う、ぐっ……、ああっ……。生きてて、くれた……！」

涙は中々晴れる事はなかった。今までの曇り模様の長さが、そのまま現れてしまったかのように、彼女の胸に縋り、アスランは引かぬ涙を憚らずに泣いたのだった。

PHASE-25 …ありがとう（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

最後の場面は書き上げる直前まで、悩みに悩みました。

ここで愛する者を失う事で、自分を見失うアスラんと、それに胸を痛めるクロード、という構図も考えなくはなかったのですが、そうになるとアスランの感情は壊れてしまうような気がしたので、この形で落ち着く事になりました。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-26 どうして…ここに…? (前書き)

救えた愛しい女性。しかし、全てに救いがある訳では無いように、彼らに襲い掛かる現実。

その向こうにあるのは、絶望に沈みいく黒か、希望を見い出せた白なのか？

それでは、お暇でしたらお付き合いお願い致します。

PHASE 26 どうして…いつに…?

アスランは暫く（カガリからすれば数分だったが）涙を流し続けた。
いた。

全身で感じるカガリの体温が心地好くて、背中を撫でてくれる手がありにも優しく、包み込んでくれる両の腕から離れるのが億劫に思えて。

今は、只そこに彼女が居てくれるだけで、生きていてくれるだけで嬉しいし、幸せだったのだが、アスランは失念していたのだ。自分はMSに乗っていたからこそ、左半身の火傷や裂傷なんかで済んでいた事に。生身の人間が、あのエネルギーの奔流の近くに居たら、どうなってしまうのかを。

「痛っ……!!」

フェンリルがどうなって、キラがどんな目的で現れたのかなんて、今のアスランにはどうでも良い事に格下げされていた。それ程に、目の前の愛しき女性を腕の中から離したくないし、今までの我慢のせいでいつまでも二人切りで居たいとも思っていて、更に彼女を抱き締める力を強めた。

「どうした? どこか怪我したのか?」

その時に上げた悲鳴にも似た声に、漸く意識を取り戻したアスランは、腕の中の彼女を窺うように眺めた。

「…いや、大丈夫。ちょっと腕の辺りがズキツとしただけだ」

未だ二人はセイバーの両拳が作った空間の中に居て、一部アスランがこじ開けた指の間から漏れ入る光しか、確認する為の光源は無い。

いつまでもこんな不健全極まり無い空間に居る訳にもいかないと思い、アスランは暫く振りのような感覚で立ち上がった。

そして、彼女も一緒に陽の下へ歩き出そうと、手を差し延べたのだが、何やら様子がおかしい事に気付く。

伸ばされた手を取ろうと、必死に腕を伸ばすのだが、どうにも身体が動いてくれなくて、目の前で困惑を浮かべているアスランの顔が、今のカガリの心境にもそのまま当て嵌まった。

届いてくれなくても、何度でも手を伸ばす。セイラン家に軟禁された頃――いや、アスランがプラントへ向けて発ってしまったあの頃から、感じられなかった心地良い温もりが、これ以上離れて欲しくないから。

身体を前のめりにして、手を更に伸ばす。左薬指に嵌められたエメラルドの指輪が、陽光に照らされて煌めいたのが、更にカガリの身体を後押しする。

あの監獄のような家に閉じ込められ、家の仕来たりやマナーを教え込まれた二日間を、強い気持ちで乗り切れたのは、この指輪のお陰だった。

そのお守りのような存在が煌めいているのだから、大丈夫な筈なのだが、一向に左手がアスランの右手を掴む事は叶わない。

「…たく。仕方ないな」

見兼ねたアスランは、カガリを抱え込んだ。右手は太股と膨ら脛の間に、左手は背中を包み込むように。そして立ち上がればお姫様抱っこの完成、という訳だ。

瞬間、カガリは自分の身体の違和感の理由を理解した。その場から動けなかったのは、フェンリルと対峙した事が恐怖に変わり、腰を抜かしたなんて、軽い感じで済ませられる問題では無い。これからの生涯に、文字通り足枷となる事象が、自分の足に起こっているとわかってしまったのだから。

一方のアスランは、彼女を抱える事を楽しんでいた。他人の為に着ているウェディングドレスなのは気に入らないが、あの騒動の中でも純白を保ったその生地は滑らかで、その仕立ての美しさはカガリの持つ魅力を最大限に引き出していると、好いた者らしい感想を脳に浮かべて、未だ渦中に居る筈なのに、小さな幸せを噛み締めていた。

しかし、それは光が差し込まない拳の中での話。

一歩ずつ陽の下へと歩み行く。その度にベールを被るカガリ表情が浮き彫りになっていき、自分と同じように笑みを浮かべているか、初な彼女の事だ、照れて頬を赤く染めているかのどちらかだろうと、顔を覗き込むと、想像とは真逆という事実がアスランに困惑を齎した。

わなわなと震える瞳と、瞠目した双眸。意味する所を察せないアスランは、とにかく明るい場所に出る為に、自分がこじ開けた指の間を頭を下げて、彼女を包むように優しく屈んで、暫くぶりと感じてしまう、森の中の空気を味わう。

しかし、解せないカガリの表情が気になる訳で、暢気な事を言っている訳にもいかない。

上半身を窺う。わなわなと震えて、何かに怯えるかのような表情以外には、何も特筆すべき所は見当たらない。敢えて言うのなら、煤を少し被ったベールが気になることぐらいだ。

少しづつ視線をずらしていく。先程から顔か、腕と手ばかり眺めていたものだから、少し新鮮な気持ちでドレスのラインを辿っていく。そして、フリルがあしらわれて、流れるような曲線を描く裾部分に視線が向かった時、アスランの中の至福な気持ちは音を立てて瓦礫と化した。

彼女の瞳と同じようにわなわなと腕が震えて、彼女を抱えて立てられなくて、なるべくそっと、柔らかそうな草の上へと降ろす。刺激を与えてしまわぬように。

そして、少しづつ後退る。それは自分が賭けに勝って、勝負に負けたようなもの。大切な命という内枠を壊させなかった殊勲と、これからの人生を幸せに生きる為の外枠を守れなかった自己嫌悪。

「カガリ……！あ、足が……」

胸の辺りから続く純白は、腰から下、太股の中間辺りから消失しており、カガリの生足を晒してしまっていた。それだけなら自己嫌悪なんて起きやしない。

そう、その消失した理由はドレスが覆っていない部分の切れ目から、推測、いや、確信する事が出来てしまい、アスランは翠の双眸を瞠

き、頭を抱えて震え始めた。

両の足に刻まれてしまった、守れなかった証。皮膚は焼け爛れて痛々しいまでの様相を呈し、その上、カガリはこの痛みを感じていないという。

それが何を意味するかなんて、普通誰にでも想像出来るし、それ以外に考えられる可能性もある訳が無い。思い至ると共に、涙が零れ始めた。

内に溜め込んでいたもの。

覚醒と代償。

カガリを助ける為に、アスランは自ら封印したあの力を一瞬だけ解放していた。極限まで高められた集中と、繊細に、より大胆に捍擧きを伝えられる機動の質。

良い事尽くしのように感じるかもしれないが、強すぎる力には勿論代償もある。それは集中の余り、周りの把握を第一に優先してしまう思考にあった。

元々、キラとの弔い合戦で覚醒したこの力は、やはり敵対する相手を壊す為の力だ。そんな力の箍を外し、人を助けようとするなんて芸当は矛盾を含んでいたのだ。

そんな愚かな判断をしてしまった自分自身が憎くて、身体を無意識に掻きむしっていた。赤紫のノーマルスーツが、より深い赤黒へと変色していく。

「止めろ、アスラン！」

後退されてしまい、足の動かないカガリは必死に手を伸ばしていた。それに気付いて顔を上げる。涙と哀しみでぐちゃぐちゃな、自分の身体を傷ものにした愚か者の顔を覗き込んでくれて、またアスランの中に嫌悪が広がっていく。

大戦の折に失った大切な友人の灯と、その事実以身が痩せる程に思い詰め、墓石の前で涙を見せ付けられてしまったあの時の胸の痛み。それが嫌で、そんな世界の炎から彼女を守る為に、俺はオーブへと渡ったのではないのか？

結局は自分の情けなさど歯痒さで、ニコルの時と同じような状況を作り出してしまったのは、俺がここに存在する意義も意味もある訳が無い。

只々愛しい人と過ごすなんて幻想を、さっきまでの自分が脳裏に描いていた事さえ、現状を見れば痴がましいに決まっているだろう。

更に落ちていく思考が、自身に食い込む指の力を更に強めていく。ノーマルスーツは赤黒を通り越して、最早漆黒と変わらない程に、流れ出て、固まり、更に流れ出てを繰り返して、彼の哀しみと自身への憤怒に染められていく。

「…俺は…！俺は…！」

流れ出す涙は痛みを孕み、アスランの頬を白く染めていく。父と同じく、愛しい者、大切なものを守れやしない愚かなザラの血等、この際ここで断ち切ってしまうのも悪くない。

「もう…、生きてる価値も、生きていく気力も無いんだ…」

漸く爪を離したかと思えば、今度は腰のホルスターから銃を取り出して、こめかみに押し付ける。その姿をもどかしいこの身体の状態で見せられ、カガリの顔からも血の気が引いていた。

カガリにはアスランの嫌悪を分かち合う事は出来ないが、こんな馬鹿をやらかそうとする奴には、これだけは言ってやらなければならぬ。だから、もっと必死に手を伸ばす。這い擦りながら、手を伸ばす。

「カガリ…済まない…。さようなら――」

「ふざけるな!!」

銃爪を引こうとした瞬間に、身体を覆うように突っ込まれ、銃は宙を舞って深く茂った緑の中へ消えた。

「カ、カガリ…:…?」

こんな大馬鹿野郎を死なせてくれないのか？

これ程の火傷を負って何も感じないという事は、神経がどうにかなくなってしまっている筈だ。そうなれば、これからは自分の足で立つことも、歩く事も、走る事も儘ならない。

五体満足を奪い、その上これからの人生に障害を抱えさせてしまった彼女との幸せを妄想するような。どうしようもない痴れ者に生きていく居場所等無い筈なのに。

守りたくて、でも守れなかった人は、必死になって俺の胴にしがみついているのだ。

「死のうだなんて考えるな!! あたしの為に、自分を犠牲にしようとするな!!」

虚な瞳を彼女に向ける。

アスランがプラント行きを諦めようとしていた時に、彼女が後押しする為に紡いだ言葉が、心の中で反芻していく。

カガリは自分の為に我慢をするなどか、やりたい事を自分の為に諦めるなどか、そんな事を言っていた筈だ。しかし、これは諦めるとか我慢するなんて次元の話では無い。

愛しいと思う女性を守れなかった罪は、男の最大の罪であり、男からすれば決して赦せるものではない。

別に、死にたくて死ぬ訳ではない。償いは生きてするべきだと思っている。だけど、戦う理由であったカガリを戦いの渦中で傷付けてしまった事は、アスランの生きる氣力を完全に削いでしまっていた。

そして、今までに苛まれた様々な罪に関する後悔が襲い、彼をより深淵へと誘っていく。

「前にも言っただろう!!」

そんな虚な瞳を強い意思で見上げ、カガリは叫んでいた。痛みを感じない下半身を引き擦り、力任せにアスランに馬乗りになる。

アスランの視界から、自分の罪の証が消えていた。

「生きる事の方が戦いだって！生き抜く事がこれまでの贖罪だって！」

上から降ってくる叱咤の声。しかし、今の彼には心にも頭の中にも響いてこない。目の端に滴を浮かべて、強さを示してくるのが、今は只鬱陶しいだけだ。

何故なら、自分がどうして死のうとしたかわかっていないからだ。それは、自分に絶望したのだ。力を持っている筈で、しかも彼女を戦いから遠ざけられる筈の力が、結局は戦禍を彼女へ与えてしまう死神でしかない自分に。

しかし、カガリの訴えたい事はそれだけではなかった。未だに浮かぶ滴が零れ、アスランの頬を濡らしていく。

「それ以上に！…あたしはお前と一緒に生きていきたいんだ、どんな事があったも。もしお前が居なくなったら、足だけじゃなく、心まで動かなくなってしまう！」

光を失っていた瞳が僅かに煌めいた。腰の辺りから見下ろしてくるカガリの視線を確かめると、内に反芻する言葉の群れを手繰り寄せた。

オーブへ渡る切っ掛け、彼女を守りたい理由、オーブにあの過ちを繰り返させない為の二年間の軌跡、プラントへ非公式に会談へと赴いた結果、そして今。

全ての記憶の残滓が結び付き、カガリの笑顔を形造っていく。そして、心の中に浮かんだ言葉は――。

「お…俺も…カガリと共に…生きて、…いきたい…！」

身体を起こして抱き竦める。

赦してくれとは言えない。しかし、彼女が望んでくれるなら、傍に居させてくれると言うのなら、命尽きるまで添い遂げようと思う。

こんな駄目な俺を時に叱咤し、時に弱い部分を見せてくれる彼女の隣で。それが例えどんな立場にあらうとも。

護衛という役回りを上手く熟せずに、しかも対象を殺害されてしまうという、史上最低の体たらくを演じてしまったクロードは、躊躇いがちに黒煤の塊と化したチャペルの上に、同系色の機体で降り立った。

そして辺りを見回して、ミラージュコロイドを展開し、品定めをしているだろうフェンリルの次に狙う獲物を予測する。

まず代表の命を奪ったのは、これからの何らかの行動に障害を来す可能性が高いからだろう。そうなれば、次に狙いそうなのは、先程から隣で膝を付いているフリーダムだろうと思うのだが、どうやら違うようだ。

代表は大戦を終結させた英雄であるからこそ、世界に対する大きな影響力を有する。だからこそ邪魔だと思ふ組織は少なからず存在す

るだろうし、同じ力を有するフリーダムやアスランを狙うのが定石だと思うが、力無く項垂れるフリーダムを仕留めようとするのはかなり不自然だ。

ならば、何故代表を真つ先に狙ったのだろうか？

『クロード、平気なんですか？代表の事…』

心配そうなシンの顔は、その言葉をそのまま返したくなる表情を見せていた。

あれ程までの怒りと憎しみを、MSデッキでぶつけていた奴が持つ感情じゃない筈の哀しみを、表に如実に浮かべているシンの様子は若干の混乱を含んでいるように見える。

「……平気なように見えるか？そもそも、俺達がここに居る意味が無くなってるんだ。申し訳のしようが――」

努めて冷静になろうとはしているが、頭の中はぐちゃぐちゃと後悔に溢れ、自分の不甲斐無さを再確認させられる結果となっている。

それにここにMSに乗って居る理由は、代表とユウナ議員の護衛だった筈だ。しかし、片方のどうしても守らなければいけないと思っていた少女は、この黒いチャペルと同じく煤と化してしまっていて。

そこまでを考えついて、ある事に気付いた。

（まさか、こちらの護衛対象が狙われたのか？）

情報が何処から漏れていたとして、フェンリルにとってザフトは、

ユニウスセブンを地球に落とすのを邪魔した奴らだ。

復讐を兼ねて結婚式に乱入し、敵の大事な護衛対象を殺す事で哀しみと、こちらの戦意を削ぐ意味にもなる。

となれば、次に狙われる人は自然と絞られていく。そして確信にも至る。

ここまでパレードをしてきた道の向こう、商店街に入る前の海沿いの防風林ならぬ防風森が途切れる場所、そこに止まる白いリムジンと妨害するように、突然質量を現して代表を葬った時のようにレールガンを構えていた。

「くっ！シン、行くぞ！」

『は、はい！』

バーニアを最大に吹かす。燃料の底が見えてはいるが、気にしている余裕等ある訳もない。これ以上奴の好きにさせてしまえば、軍としての面子も丸潰れだし、それ以上に軍人でない者が狙われて消されていく、こんな状況に腹も立っているのだ。

暗殺や謀殺という裏でこそ重要なポストを担う者を闇に葬るやり方は、昔から気に入らなかった。小国が大国に勝つ為には仕方ない行為かもしれないが、寧ろこんな卑怯な真似をするのは大国の、最高権力より少し下で燻っていると勘違いしている、欲の塊みたいな奴らが殆どだ。

だから、嫌気が射すのだ。あんな機体やそれを十分に駆る能力を持ちながら、暗殺を行うあの魔狼の存在が。

何より、友人の大切な人を守れなかった自分も。

レールガンのチャージは既に始まっていて、白いリムジンから逃げ出す小さい影は見えない。距離は絶妙に間に合うか、間に合わないかの瀬戸際にある。

それにインパルスより機動力に優れ、間に合う可能性が高いラグナロクでは防御に入り、ガラディンを構えるタイミングを間違えば、逆に機体の爆発に巻き込んでユウナの生存率を落としてしまう。だが、インパルスの機動力では間に合う可能性の方が低い。

『間に合えーっ！』

しかし、状況はそんな心配を嘲笑うかのように、皮肉な状態を作り出していた。

インパルスのバーニアが悲鳴を上げるように、二、三度明滅を繰り返す。先程も限界までバーニアを酷使したのだ、それにまた最大まで出力を上げてしまえば、流石の新型の装甲でも耐え難いものがある。噴射口が溶解を始めていた。

「くっ…！エネルギーが…」

一方のラグナロクもフリーダムとの対峙、徒労に終わってしまった代表の元へと駆け付ける為のバーニア最大出力、それらが相俟ってエネルギーが危険域へと突入し、どんどんと推進力が落ち始めている。

『くそっ！！これじゃ間に合わない！』

近付いている筈の白いリムジンが、どんどんと遠ざかっていくよう

な感覚を味わう。それが意味する所は、またオーブの重要人物を守れないという失態。最も大きいのは、軍人では無い文官の死。

「ミネルバとの距離があり過ぎて、デュードリオンも使えないとなると…万事休すか…!」

ミネルバはオーブへと入港したままに待機している。流石に結婚式という舞台に、宇宙艦のような巨大な物体の出演は礼に反すると、議長が判断したのだろう。

その配慮が、花婿の命の危機を救える可能性を絶つ事になるとは、何たる裏目であろうか。

落ちていく速度と高度。チャージ終了寸前のレールガン。捍を握る手、汗。

そして無情にも砲口から迸しる赤い光が、チャージの完了を示していた。距離は未だに離れ過ぎている。どう考えても絶望的な差を、今の二機に埋める力は残されていない。

「あああああっ!」『畜生ーっ!』

無理である事は理解しているのだが、バーニアを吹かすことは止めない。諦めてしまえば、それで終わり。最後まで足掻けば逆転か起きる可能性だって、薄氷程度の確率は残されていた。

その足掻きに気付いたのか、フェンリルはチャージを終えたレールガンを構えたまま、二機の方にカメラを向けた。そして、獲物を見つけた時以上の嗤いを口元へ愉悦と共に浮かべた。

距離が少しづつ詰まるのを確認しつつ、愉しそうに笑みを深めていく。奴らの顔が、特にラグナロクのパイロットの顔が歪む姿を思い浮かべると、心が高揚していくのを禁じ得ない。

そして二機が本調子であれば、間違いなく間に合ったであろう時間を掛けて、フェンリルは迸しる閃光を再び解き放った。

リムジンへと迫り行く赤き線条は、肉眼でも確認出来る程の禍々しさを持って、二人の網膜に焼き付く。

どうしようもない状況を前に、クロードは捍を握る事を止めずに居るが、シンは半分諦めてしまっていた。

思い入れが深い訳では無いからか、適当に任務へあたっていた訳じや無いにも関わらず、結局はオーブという裏切った国を本気で守るつもりはなかったのかも。

しかし、本気で守ろうと必死になる者も居るのは事実で。新たな反応がレーダーに移る。

最初はムラサメであろうと気にもしていなかった、近くの森にあった反応が無くなり、いきなりザフトの識別反応を光らせてフェンリルとリムジンの間に割り込んだ。

閃光の奔流が立ち昇り、辺りを赤く染めていく。その中で割り込んだ機体の安否は確認出来ない。何故なら、同じ色だったからだ。この視界を染め上げた色と。

少しずつ引いていく、靄のような粉塵が消え、現れたのは盾を構えた腕が半壊した、赤いガンダムの姿。

クロードは整理仕切れない頭の中に、見覚えがあるという記憶の糸を見つけ出した。

インパルスとほぼ同時期に開発が進められ、ラグナロクの完成後には、パイロットを決めるだけになっていた機体だ。

基本的な装備はセカンドステージと同じで、MAに変形出来る事を考えると、アーモリーワンで開発されていたあの三機に似ているが、強奪されたものの開発コンセプトが破壊力や攻撃性であるならば、目の前でフェンリルの度肝を抜いた機体のコンセプトは、守護と防御の力。

その機体を示す固有名は、それを顕著に現していた。リムジンの前で仁王立つ、この機体の名前は？――

「セイバーが…どうしてここに…？」

これの所在は確か、アプリリウスにあった筈だ。議長の前で設計、デザインされた特機とも言えるべきものだが、搭乗者が居ないので地下の格納庫にしまわれていた筈が、今赤いガンダムは白いリムジンを庇うように立ち回り、フェンリルの攻撃をいとも簡単に捌いて見せていた。

『す、すごい……』

バーニアの限界がとうとう飛行不能に陥り、インパルスは地面に降り立ちながら、目の前で繰り広げられている赤と蒼が絡む様を感嘆と共に見つめていた。

そこで零れた呟きは、戦法にクロードと同じ匂いを感じとったから

だった。

フェンリルのビームライフルの乱射を、変形し、宙に飛ぶ事で危なげなく避け、反撃とばかりにレールガンを見舞う。寸でで躲されてしまいはしたが、MAの機動性を生かして突撃し、今度はMS状態に戻ると同時にヴァジュラを構え、勢いを保ちながら水平に切り込む。

しかし、流石フリーダムと同スペックというべきか、上手く体勢を制御してセイバーの下に潜り込み、ビームサーベルを右手に構えて上へと翳そうとした。

通り過ぎるセイバーに突き刺されれば、そのまま真つ二つになる寸法だったが、読まれていたのか、それともまぐれか、サーベルとヴァジュラが交錯し、思惑とは違う結果になった事に腹が立ち始めた。

『邪魔なんだよ！そんなボロボロの機体で、フェンリルに噛み付きやがって！』

左半身が焼け焦げ、黒煤が纏わり付いている。しかもコックピット付近が剥き出しになっていて、中の奴がどれ程酔狂なのか計りかねるぐらいだ。

しかし、先程からどれ程攻撃を加えても、かすり傷程度しか与えられていないのも事実で、腕に自信があるからこそ、壊れた機体でもフェンリルの前に立ち塞がった、という訳か。

『余裕たっぷり、って訳か？その慢心、嫌という程に後悔させてやるぜ！』

(…いや、そうじゃない)

集音機能が広ってきた、聞き憶えがある声に反応して考えていたことが弾ける。

確かにあんな状態で、核を積んだガンダムを相手にするのは無謀に近いが、それを補ってあまりある気迫を、クロードは赤い機体から感じていた。

まるで死なせたくない人を、同じコックピットに乗せているかのようだ。

後で知る事になるのだが、この予想が本当に当たっていた事に、クロードはある意味脱力と怒りを混合した、モヤモヤとする気持ちを抱える羽目になるのだが。

そして二つの色が重なり合う。ラグナロクとインパルスは見えている事しか出来ずに、クロードは既にリムジンで気絶していたユウナ・ロマを連れ出そうとしていた。

それに気付いた魔狼は、赤い咆哮ともいうべきレールガンを放とうとするが、放とうとした色のガンダムに不覚を取る事になる。

腰に据えたレールガンを前に迫り出させる為には、僅かな、ほんの僅かな隙を生じさせる行為なのだが、その一瞬を見逃さずに、セイバーの右手に握られたヴァジュラが、刹那の輝きを見せて、砲身を支える為の腕を肩口から切り落とす。

しかし、それだけでめげるフェンリルではない。今度は、ビームライフルを左手で構え、クロードを狙い銃爪を引こうとしたのだが。

『クロードは殺らせない!!』

目の前に闖入したインパルスの射撃が、ライフルの銃口へと直撃し、大規模な爆発が辺りの状況を覆い隠す。リーダーを頼りに索敵を行うにしても、四機ものガンダムが一同に介している場所では、リーダー等無意味に近い。それは他の三機も同じだろう、と高を括ったのがいけなかった。

突如目の前に影が過ぎった。見る限り、ラグナロクとインパルスはあれ以上の無理をすれば、フェイズシフトは落ち、フェンリルに勝てる要素はなくなるだろう。片腕を無くしていると言っても、機体の性能の高さで補って余りある程の余裕がある。

しかし、爆煙の中で待てど暮らせど攻撃はやってこない。本来ならこの上ない事だが、状況的には空振らせて、反撃で確実に落としていくのが、一人で戦う時の定石だろう。

晴れていく煙、現れ始める取り巻きの景色、切り落とされていない左腕。そしてガンダム三機の位置――。

(…やられた…!)

構えられたライフルとマシンガンに、流石に燃え滾る復讐の炎だけではどうもこうもいかないと冷静に判断出来たフェンリルは、煙幕変わりの粉塵を上げる為にレールガンをそのままの状態で射ち、その間にミラージュコロイドを展開する。

『おい、ラグナロク!』

粉塵の向こう側から聞こえてくる、何処かで聞き慣れた声。記憶の

最中にあるのだろうが、どうしても見つけられずに、訳がわからなくなっていた。

そんな声の主から入った強制通信。ソースを割り出そうと、キーボードを叩く。

『今度会う時、お前にはもっと大きな苦しみか、命の終わりを与えてやる…』

漸く明瞭になった視界に、あの蒼いガンダムの存在は欠片も見当たらず、インパルスもラグナロクも暫くぶりに味わった絶望に陥りそうになる。

（代表を守れずに、ユウナは守れた、か…）

友人の攻め立てる顔が、哀しみに歪む表情が、絶望に咽び泣く声が脳の根幹で展開され、少しも離れてくれない。

『クロード…、あれはしょうがなかったんですよ…。フリーダムの乱入があったなら、そっちに気が向くのが当然です』

心配してくれるシンの優しさと心配させている自分の情けなさが相俟って、余計に気持ち沈んでいく。

確かにあの時は、フリーダムを代表から遠ざける事が最優先だと思ったのだ。正しい判断だとも思ったし、間違いが起きないように距離を置く事は、戦う上では大事であると思っている。

しかし、結果はどうだ！？フェンリルの乱入と同時に暗殺を果たされて、しかもオーブのそこら中を破壊されてしまった。

これの何処が護衛だ！

何がアスランが帰るまで守ろうだ！？

そんな落ちて、堕ちてしょうがない状況の中、新しい回線から通信が入ってきて、ほぼ強制でモニターに相手の画像が展開された。その相手を見て、クロードは驚きと戸惑いと嬉しさと申し訳なさが入り乱れて、大変な顔になってしまっていたのだろう。

目の前で確かに生きている、死んだと思っていた女性が笑いを堪えながら、そして、合わせる顔が無い思っていた青年が、何もかもが吹っ切れた柔和な笑顔で映し出されているのだった。

「…アスラン…！！…代表…！！」

『無事だったんですね！』

これで一応の解決が見えたような気がしたのだが、そうは問屋が卸してくれない。この問屋はとにかく陰湿で、人権なんぞ屁とも思っていない節がある。

その動きは不穏一辺倒。今も敵国を完全に葬る為に、禁じられた手を使おうと荷物を運んでいるのだった――。

PHASE-26 どうして…ここに…？ (後書き)

お読み頂きありがとうございます。お気に召して頂けたでしょうか？

今回の話では、原作以上にアスランをへたれにしてみました。

格好悪いアスランが嫌いな方はごめんなさい…。

ですが、これくらい落ち込んでくれた方が、二人の絆がより深くなってくれると思うんです。

では、お疲れ様でした。良ければ、次回もお付き合い下さい。

PHASE-27 非道い仕打ちだよ（前書き）

オーブを焼いた魔狼は、煙を撒いて逃げ仰せた。一国の一応の平和を取り戻した訳だが、一方プラントでも局面は大きく動いていた。

では、お暇でしたらお付き合いお願い致します。

PHASE-27 非道い仕打ちだよ

「議長！この度の勝手な見解と判断が、今の状況を作ったとは思いませんか！？」

声高らかに上げられる批難。政治家として、そんなものは馴れ親しみ、そしてさりと躲さなければいけないものである。

「では、貴方は地球を見殺しにしろと、ナチュラルなんて滅びてしまえという、危険な思想をお持ちだと考慮しなければいけない、と捉えて宜しいのですかな？」

反撃とばかりに口上した言葉は批難を上げた議員の閉口を促して、反論の余地を少しづつ奪っていく。

最高議会と言えども、所詮は高尚とも取れない醜い腹の探り合いと、出した尻尾を掴んで離さないように必死に追撃を行おうとする、下賤な会議なのだ。

はつきりと言ってしまったえば、ここに居る連中は世界、いやプラントの平和すら考えていない。頭の中にあるのは、自分の立場の保身とそれを利用した賄賂や脱税なんていう、汚いお金をそれこそ必死になって集める事ばかりだ。

「ザフトを使った事、進水式が済んでいないミネルバや、極秘開発していたカオス、アビス、ガイア、インパルス、ラグナロクを実戦投入した事は致し方無いとして諦めよう。

しかし、何故ミネルバをユニウスセブンへと向かわせたのだ？あそこにあの艦さえ現れなければ、こんな気運が地球に蔓延る事もなか

ったのではないか？」

尤もな意見だとは、デュランダルも考えている。

アーモリーワンでの件は、どう考えてもあれに勝る対応策は無いだろうし、あそこでミネルバを動かしたからこそ、こうして無事な自分がここに存在しているのだと思っている。

それに、後半部分も一部を納得せざるを得ない。ミネルバがユニウスセブンで破碎を手伝い、その作業がザフトの旧モデルのMSに邪魔された事により、思うように行動出来なかった結果、あの《地獄》を冠する兵器を解放する羽目になった。

しかし、デュランダルに後悔等ある筈も無い。あの時、レイとルナマリアに言い放った言葉が勿論本心だからだ。

「確かに、ニブルヘイムの許可は私が出しました。それが地球に於いての開戦へ、という気運の高まりを招いてしまっているとは思いますが」

一度、言葉を切る。丸いテーブルに着いた議員達の顔を見回して、表情を引き締めた。

「ですがあそこでニブルヘイムを撃たなければ、即開戦も有り得た筈です。それ程までに大西洋連邦はこの世界を、いやコーディネイターを焼き払いたいのだ。理由なんて何でも良い。とにかく、遺伝子を弄られた人種が根絶やしになる事を望んでいるのですよ、彼らは！」

連邦の軍が動いていなかったのが何よりの証拠だ。地球に住む何十

億という人口を犠牲にしても、連邦の上層部、ログスと呼ばれる集まりは、新たな血を欲しているのだ。

その理由は単純明瞭、下賤極まった愚行。権力という魔物に振り回されて、椅子にしがみついているここに居る輩より、よっぽど性が悪い。

奴らの狙いは武器を売る事。大金を手にする為には、民族紛争のような小さな戦いでは不満なのだ。必要なのは、世界を巻き込み、憎しみを連鎖させ、復讐を果たそうとそれぞれが動き出す、ヤキンドウーエのような争いなのだ。

たった一年半という期間で、奴らはあの争いの愚かさを忘れ去り、肥えて太る為に新たな大戦を引き起こそうというのだ。

その矢面に何も知らずに立たされてしまった、地球に住む全ての人々を守る為に下した判断は正しくなくとも、間違っていたとは思っていない。

ただ成り行きを見詰め、人が儂く散っていく様を黙くしていられる程、完璧な為政者にはなりたくないのだ。

「何を言うかと思えば、地球人類を救う為か！
なら、今プラントの立たされている立場は一体どうする？ あんな非人道的な兵器を開発し、使用した反響は国民の間でも凄まじいのだぞ！」

国民は不安に思っているのだ。あんな兵器を背負うMSが開発されたこと、それはまた戦争が始まる事の暗示であり、あの凄まじい威力が猛威を奮う事で、連邦がプラント本国を強襲しようとしなにか、

と。

それに前回の繰り返しになるのでは？とも考えられたのだ。

「確かに、あの兵器を目にしてしまえばジェネシス開発時のように、ブルーコスモスがコーディネイターを滅ぼす口実になるやもしれません。ですが、守るべき国民が在るからこそ、ザフトではないのだろうか？」

デュランダルは將軍を見詰めてみた。だが、案の定視線は外されしまい、心の中に渦巻く苛立ちが募りに募り始めていた。

軍の存在意義は、とにかく国民を守るの一言に尽きる筈。しかし、今の將軍然別、上層部の連中然別、議会の輩と同様に保身と権力を守る事に固執し、本来担わなければいけない役割を完全に忘却している。

「そ、それより！報告を受けたのだが、議長は他国の者に機密である筈のガンダム、セイバーを渡したという話じゃないか！これをどう弁明するのかね？」

立場が悪くなったら、相手の揚げ足取りを行って話題を逸らそうとする。どんな国でも將軍のような、自分を正当化し、他人を貶すような輩はやはり後を絶たない。

自分の非を認める事は確かに難しい事だ。その後に行き渡る悪い噂と罵倒、それに巷に行き渡る悪い噂。

自分の座る椅子の座り心地の良さに、悪い噂が流れる事での国民からの弾劾が怖くて、椅子から転げ落ちる事が恐ろしくて、簡単に出て、しかも自分の噂が立つのを未然に防げる、他人になすり付け

るという行為に走るのだ。

この人は、本当に軍を代表出来る者なのか、近頃の言動から推測するに甚だ疑問だ。

「セイバーを渡したのは、確かに他国の――オーブの者ですが、そのどこに問題があるのでしょうか？」

「なっ！？開き直る気か！！」

「そもそも兵器は動かさなければ意味を為しません。それなのに、やれ機密だ、やれ搭乗者が居ないと機動させる事を避けていては、プラントを守ること、引いては世界を守る事なんて叶いません」

セイバーが格納庫に眠っていた理由はただ一つ。搭乗者が居ないとか、そんな尤もな理由を掲げてはいるが、本当の思惑は下らないと吐き捨てたくなるものだった。

プラントが襲われるとすれば、行政の中心であるこのアプリリウスか、兵器や艦を開発しているアーモリーワンあたりが予想としては妥当だ。

そんな予想が立てられるから、議員の緊急脱出ようにセイバーは、地下で力を解放出来ずに眠らされていたのだ。

アスランに渡すあの時、セイバーにのみライトを当てたのは、隣にある脱出専用のコンテナを見せたくなかったからだ。あんな醜い生きる為への執念、国民への配慮さえ忘れた国民の代弁者の愚かさを、誰かを守る為に動いている彼には見せたくなかった。

そして、セイバーと名付けられた理由もここにある。単に議員を危

険から守る為の移動手段でしかなかったのだ。

その理由を国民に知られないように、自分達が民を蹴落とし、他の安全であろう場所へ確実に移動する事が出来るように、口外しようとしなかったのだ。

「お前は何を仕出かしたか、事の重大さがわかっているのか！我が軍の技術を、セイバーを通して奪われたらどうするつもりなのだ！？また前回のように、そして今回の謎の独立軍のように奪えば済むと思っ——」

「貴方が信用に足ると、《守護者》の名を冠する機体を預けるのに相応しいと思った者に、託したと考えて宜しいですか？」

激昂する將軍と真っ向から見詰め返すデュランダルの上に、一迅の冷涼なる風が吹き抜けた。そして同時に声を放った者を見遣る。

この議会という柵の中で、唯一の信頼を置ける者と言っても良い、初老とはとても思えない男性の声。

「……エドワード・ガジル」

デュランダルにとって、彼は昔馴染みで気が許せる相手であると同時に、共にプラントを良くしていこうと誓い合った仲であった。

近年の二人は国民の支持を二分にする同士で、デュランダルが最高議長として、ガジルが副議長として、二人で支え合うように議会を進めてきた。

端から眺めれば不穏に、そして怪しく見えるデュランダルのそつな

いフォローを毎度の如く行い、誤解されやすいデュランダルを引き立て役といった所だろうか。

「議長が無闇に他国の者へと我が国のMS、しかもガンダムを渡すとは思えません。そんな方だとしたら、誰も最高議長としてこの場を任せていませんよ」

ガジルの言い分は、彼の性格を知っていて、その上長い付き合いであるからこそその見解だが、將軍はこの言葉にやや詰まるように押し黙る。

彼もわかっているのだ。戦後の混乱した政治形態を諫め、破綻した経済の活性化の為に税の緩和を敢行し、不安を訴える国民に出来る限りの物資を配すると決めた事。

その全てが上手く絡み合い、議会の損得を無視する事により、混乱へとひた走るプラントの軌道を修正したのは、間違いないこの二人あつての事だと。

「ぐっ……！しかし、貴重なガンダムをみすみす他国へと流してしまふのはどうなのだ？」

汎用性に重点を置かず、ただ敵の恐怖に成り得る力を持たせる事を、ガンダムという機動兵器の概念と化してしまっている。

確かに、ラグナロクを例として考えれば、敵国への牽制の意味合いはかなり色濃いいし、やはりガンダムという言葉も存在も、戦の上では欠かせないものとなってしまうている。

將軍はそこに反撃への一抹ばかりの可能性を見出だした。

議員達の緊急脱出用に残されていた、守備と機動性に重点を置いている、敵国への牽制には使えないと思われる機体ではあるが、性能の高さは確かなものである。それに、自分達の安全を省みない議長への不信は、先程から募り始めているだろう。

「流したではありません」

いつもの、特にアクセントも語尾も強くなっていない口調だった。強く否定しようとしている語調でも無いのに、この寒気は何なのだ！？

「あの若者はこの世界を愚かな争いに巻き込まないように、同じ志を持つ方と尽力している。私はその手助けをただけだ」

將軍は知らず知らずに圧倒されていた。真っ直ぐに見据えてくる、あの絶え間無い意志を宿す双眸に。そして、上に立つ者の覚悟が放つ雰囲気。

「それが裏目に出たとしたら、私は彼の国を容赦無く討ち落としします。それだけの覚悟を持って、他国の者に《守護者》を託したのです」

募っていた不信が少しだけ和らいでしまった。それ程の覚悟を先の言葉で、嫌というぐらいに感じてしまったのだ。

大概、上に立つ者は揚げ足を取る事に長けていなければ、忽々自分の立場を守っていけるものではない。それともう一つ、持っていなければ、養っておかなければいけない技能があった。

それは場の空気を読む事。

今の流れは完全に議長と副議長へと味方している。その上、あんなきっぱりとした意見を言われてしまえば、覚悟の程を見せ付けられてしまつては、反論の余地は殆ど残されていない。

他の不満を口にしていた議員達も閉口していた。頼りにならない頭でっかちだらけだ、と内心で毒づき、苦虫を噛み潰した表情を憚らずに曝して、將軍はドカリと椅子に凭れ掛かった。

ラルス・スペレルの件といい、今回の件といい、軍の最高権力を握った筈なのに、思い通りにならない事象ばかり発生し、將軍の苛々は絶頂に達していた。

その為、軍の状態なんて大して把握していないし、誰が何処に配置されているかの報告書も漫ろな気持ちで、本当に眺める程度にしか確認していなかった。それが、この場で仇になるなんてこれっぽっちも思っていなかった――。

『大変です!!』

突然、後ろのモニターに映像付きの通信が入る。見た所軍部からのようで、緑服を纏った男性が物凄い剣幕で悲鳴に近い声で告げる。その事に顔を顰めた將軍は、苛立ちの掃け口を見付けたと言わんばかりに罵りを上げた。

「会議中に通信を、しかも映像付きで入れる事がどれ程失礼に当たるか、軍部の貴様はわかつている筈であらう!!」
降格なんて生温い!今すぐに除隊してやる!!」

『そんな場合じゃありません！議長、先程偵察用の衛星が捉えた映像に、とんでもない物が映っているんです！』

立場を気にしている場合でも、自分の立場の危うさを憂いている場合でもない。そんなもの全て、跡形も無く消し去られる可能性を、この事態は孕んでいるのだから。

『今映像を送ります！』

数秒後に大型モニターに映し出された映像に、死への恐れに青褪めていたり、顔色を変えないこの事態を引き起こした張本人へ非難の瞳を向ける者等、様々な様相を見せているが、デュランダルとガジルは至って冷静だった。

「とうとう動き出したか…」

「ああ、しかも厄介な事に危ない代物を背負ってな…」

ガジルは映像に移るダガーの背中に装備された、ミサイルランチャーの側面を拡大して、デュランダルの落とした眩きに最悪の事態である事を付け足した。

刻まれた紋章、それは大戦の折に結ばれた条約の禁断へと踏み込んだ事を示す証。それが悲しみを味わい尽くした筈の世界規模の悲劇、コロニー群と地球への大災害の銃爪となった事件を嫌でも脳内に蘇らせるもの。

あの凄惨な状況を生み出した兵器を、連邦はまた宣戦布告もしない内に持ち出したのだ。

扱い方を変えれば、人の恵にもなってくれる物質。使い方を誤れば、世界全てを焼き尽くす炎と為り得る凶刃。

――核ミサイルを。

「それにしても…」

息を吞んで、ガジルはモニターの光景を見据える。目を逸らしても変わる筈の無い現実が、ここまで恐ろしく感じられたのは久しぶりだった。

「…ああ。非道い仕打ちだよ、これは」

デュランダルも正にそう感じていた。見詰める事以外許してくれない、この凄まじい映像が確かなら、プラントは数時間後には消滅している。

偵察用の衛星が設置されているのは、ちょうどアプリリウスから十時間程、シャトルで航行した辺りにある。

その場所を通過したのが、どうやら数分前。明日の朝日を拝めるかどうかの瀬戸際が、勝負という事になりそうだ。

「將軍、今動かせる小隊の数はどのくらいだ？」

デュランダルの当然の問い掛けに、睨み付ける視線を明後日の方向に背ける。その前に一瞬見せた、何やらわなわなと震える表情をガジルは見逃してやらなかった。

「い、いや…あの…」

しどろもどろの口籠り、泳ぐ瞳の黒、両の手を拱いているこの姿。間違いないだろう。

「…もしかしくなくても、貴方、軍の配備が今どうなっているか知らないのでしょうか？」

丁寧な語尾が余計にプレッシャーとなって、ビクリと將軍の肩を揺らす。どうしようもない職務怠慢を働いていた事が、こうにも状況を混乱させるとは考えていなかった。

「…はあ…。わかりました、もう良いですよ…」

ガジルは顔を完全に背けた。既に見切りを付けたようで、視線に將軍を入れないで高らかに宣言して見せた。

「これより、ザフトの指揮権限は將軍に代わり私が持ちます。幸い、《將軍様》と違って一応上がった報告はチェックしておりますので」
ぐっ、と息を飲み込む音が聞こえるくらいに、会議場は静まりかえっていた。それ程までにガジルが放つ雰囲気の高さが、ここに座っている議員連中にも伝わったのだろう。

「済まない、ガジル副議長。頼んだ」

デュランダルもその柔軟に対応していく。昔から知るガジルに任せれば、一応の安心は出来るだろう。

しかし相手は核装備、しかも無数のMS部隊だ。撃墜はなるだけ遠くで、部隊もあまり近接武器を使用しないようにしないと、核爆発

に巻き込まれる可能性が高い。

（一応、準備をしておくか…）

けたたましくガジルの指示する声が響くのを聞きながら、デュランダルは廊下を急ぐ。手遅れになるのだけは、避けなければいけないのだ。

「…くそっ！やはりこういう道を進むのか、結局」

プラント首都、アプリリウスコロニーから少し離れた場所を、非道極まりない奴らを向かえ討つ為に、ゴンドワナ級戦艦ボルテールは全速で航行していた。

その艦橋で、イザークは一人吐き捨てるようにごちた。隣に居るシホも神妙な、そして愚かな選択しか出来ない連邦のお偉いさん方への軽蔑を禁じえないようで、いつもなら明るい光を見せるその瞳は、暗く澱んでいるように思える。

先程から苛立ちを隠そうとしないイザークの様子を窺い、そして諫める手立ても思いつかなくて、ディアッカは宇宙の黒へと向けていた視線を主の居ない艦長席へと向けた。

（ホント、結局は血を血で洗うような事しか出来ないのかね、人間は…）

――ナチュラルとコーディネイター。根本は変わらない筈の二つの人種は、遺伝子操作という隔たりを以って、互いにいがみ合い、互いに傷付け合ってしまったている。

ただ先天的な処置で、ナチュラルより優れた肉体を得ただけの筈なのに、その差に驕り高ぶってしまった自分達は、《普通》に生まれ、た彼らを見下し、絶対に越えられる筈のない壁として存在し、所謂支配する権限を持っていると、過激なナチュラル排斥派は語っている。

排斥とか言っても、全てを滅ぼそうというのではない。彼らを奴隷同然の、人間として扱う事のない身分へと置いて、コーディネイターがそれを支配しようという考えが、過激派の中では常識のように語られている。

そんな考えは本当に馬鹿げていると、ディアツカは思っているのだ。ヤキンドウエで身を寄せていたアークエンジェルで世話を掛けたのは、連合に所属するナチュラルの軍人達だ。

最初は激昂し、我を忘れた女の子に殺されそうにもなったが、少し時間が経つと、ナチュラルもコーディネイターもそこには言葉として存在するだけであって、実体が伴っていない印象をいつの間にか持っていた。

コーディネイターであるフリーダムのパイロット、キラ・ヤマトへの言動、扱い、そして向けられる気持ち。周りの連中は殆どがナチュラルの筈なのに、コーディネイターである彼への扱いは大して変わりない。大きな信頼で繋がっているように思えた。

最初、彼がどんな成り行きでアークエンジェルへと搭乗し、そこでどんな仕打ちを受け、どんな思いであの戦いを生き抜いてきたかは知らないが、あの艦の最終的な雰囲気こそが、この世界を纏めるのに必要なものであるように思えるのだ。

（考えても仕方ない、か…）

とにかく、今は世界がどうの言っている場合ではない。核の脅威が迫るプラントを守らなければ、たくさんの命を失う事になるばかりでなく、帰る場所さえ無くしてしまう羽目になるのだから。

視線を椅子から宇宙へと再び戻す。星はこちらの気も知らないで輝き、いつもなら綺麗だなと思えるものも、切羽詰まりかけている現状じゃ精神を乱す要因にしかならなかった。

「あの…隊長…」

外へ向けていた視線を少し離れた二人へ向ける。イザークはずっと宇宙へと、正確には連邦のMS隊が現れると予想された方向へと視線を向けている。

一方のシホは、先程までの沈んだ表情が崩れていて、何やら不安に思う節に当たってしまったようで、イザークの方へと顔を向けて口を開いた。

「敵の数もわからないのに、ゴンドワナ級三隻で本当に対処出来るのでしょうか？」

現在、ボルテールは艦隊の旗艦として先頭をきっている訳なのだが、後ろに続く艦の数はたったの二隻。MSやMAの総数は、合わせても十五機にも満たない。

本来なら、防衛線を張る時の艦隊の総数は敵を覆い隠せる程の数を要するのだが、敵の総数を把握出来ずに出撃する場合、今の三倍程

の艦と四倍程のMSを必要とするだろう。

「…仕方なからう。他の艦は殆どが任務で出払っているのだ。本当なら俺達も任務地へ向かう筈だったのだが、まだ出立していない事が幸いしたんだ」

アーモリーワンを始めとして、現在プラントのコロニーは様々な問題が生じていた。

突然何者かの襲撃を受けてコロニーに穴が空いたり、制御用のコントロールユニットがいつの間にか故障していたり。トラブルが連続しているのだ。

エンジニアだけでは修理が捗らないという事で、上層部は軍のメカニックを派遣し、作業の効率化を図る事にしたのだ。

そしてその故障が故意の、しかも破壊された形跡があるのに気付いたメカニック達は、上層部にこれを報告。中々返答がされなかったらしいが、副議長であるエドワード・ガジルの指示を受け、派遣された艦はそこに留まる事になったのだ。

「…そう言えば、その故障って何かのエネルギーの塊が衝突したような感じになってるって聞きましたけど」

「ああ。密度の濃い、陽電子のような強力なエネルギーでは無いようだが、頑丈な筈のプロテクト毎破壊されていたそうだ」

「へえ〜。良く知ってるな！さすが、隊長様って所？」

「煩い！そんな軽口を叩いている場合か！」

「おー、怖い怖い」

正面きつて怒鳴り声を上げたイザークは、すぐに窓の外へと顔を向けてしまったが、さっきの嫌味のような言葉は本心から出たものであった。

実際、ユニットが破壊されているという噂ぐらいなら聞いていたが、そんな指示が通達されたという報せは、軍内部に全く浸透していなかった。

シホのように真面目に、毎日報告の一件一件をチェックしていたるようなら知る事も可能だろうが、イザークはそこまで殊勝な心掛けをするような奴では無い筈だ。

……まさか…。

「お前さ、もしかして今回の件に一枚噛んでる、訳じゃないよな？」
あまり考えたくない事ではあるが、あまりにも詳しい事が引っ掛かる。

そもそもユニットが破壊されている、という噂が流れ出したのは二日、三日前からの事だし、軍の情報網も何故か滞っていた為、本来通達という形で知らさなければ、出無精な自分のように報告の隅々まで確認する筈のないこいつが、ここまで詳しい訳がないのだ。

「ふ、ふざけるなっ！誰がこんな意味のわからない事に協力するか！」

「じゃあ、何でそんなに詳細な情報を知ってんだ？」

「……確かにそうですね。隊長が端末の前でじっとしている所なんて、見た事ないですし」

シホにまで言われてしまえば、怒りどころか言い返す気力さえ削がれて、苦い顔のままで一瞬静止する。それがある意味イザークの降参の表れである事を、ディアッカもシホも知っているから、彼の口から理由が語られるのを静かに待つことにした。

「……二日前に電話があったんだ、《つまらねえ》とな」

「はあ？そのどこが理由になるんだよ？」

話始めた出鼻を挫かれたイザークは少々ムスツと表情を顰めたが、隣で興味津々に聞いているシホの姿が視界にちらつき、舌打ちを一つ打って話を続けてやる事にした。

「…話は最後まで聞け！そいつは議長の勅命で、エンジニア達の護衛に向かったと言っていたが、敵がくる気配もないと嘆いていた。そしてそのついでに、さっきの情報を聞かせてくれたんだ」

「…議長の勅命？まさか――」

軍人である我々が従うべきは、軍の最高権力者の將軍である。しかし、それを無視して議長から受けた任と、自分の意思に基づく行動を許される者がいる。

それが FAITH。そしてそんな議長のお気に入りの中で、イザークと仲が良い奴で想像出来るのはたった二人。

一人はクロード・タクス。しかし、こいつの可能性は完全にゼロだ。理由を挙げるのなら、ミネルバと共に地球へ居る筈だし、その上今は議長の指令でオーブの代表、カガリ・ユラ・アスハの結婚式で護衛をしている筈だ。

（そう言えば、アスランは大丈夫なのかな？）

あの後、あいつはすぐに居なくなっていた。お婆さんの涙から逃げ出した訳では無いだろうけど、そうなれば、愛しいハニーの所に向かったと考えるのが妥当か。

あの戦いの後、アークエンジェルへと帰艦した時に見たのは、カガリと寄り添うアスランと、キラの生還に喜ぶラクスの姿であった。一応、彼女も駆け寄ってきてくれて、目の端に涙を溜めて喜んでくれたのだけど、結局はこうして離れ離れになってしまっている。

それを考えると、アスランのように守りたいと思える存在と居られる方が、軍に復帰するよりよっぽど良かった気がする。

「∴それって、もしかして」

少し高い声に、ディアッカは変な方向に向かっていった頭を切り替える。

一方、頭の中を絞るような表情で知識を捻り出したシホは、漸くイザークが語ろうとしている人物に思い至った。

「ああ、ハイネだ――」

「…艦長！！敵の反応捉えました！！…しかし、これは…」

その名前が紡がれた直後に、突き抜けるような叫び声に近い声で、管制官がレーダーに映った反応を知らせる。急いで示される点の数を、目視で大体を捉えてみたのだが、その結果は瞳を睜いて驚愕と絶望を味わう羽目になった。

隣から覗き込んだディアツカもシホも、イザークと同じ表情で固まってしまっている。

「…こ、こんな数を、どうやって対処しろというんだ…？」

無数に迫り来た点滅する光の粒は、レーダーの上半分、殆どを埋め尽くすように帯状に広がっていた。この反応全てに核が積まれて、全てがプラントコロニーに降り注ぐのだとしたら、全ての守るべき人々と帰る場所を無くす事になる。

しかし、いくらコディネイターとナチュラルの差があるうとも、ゴンドワナ級三隻とMS十数機で対抗出来る数ではある訳もない。

艦橋の空気が一気に冷え切り、流れていた時間が完全に止まったかのような錯覚さえ覚える程に、誰の声も、電子機器の音も聞こえてこない。

これこそが絶望に沈みいく空気なんだろうな、とディアツカは場違いな事を考えて、精神を保つ事しか出来なかった。

PHASE-27 非道い仕打ちだよ（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

今回は本当に捏造たっぷりになってしまいました。議会の部分では、ザフトのお偉いさんとして將軍に登場願ひ、ボルテールの艦橋では自分の勝手な、過激派の見解をつらつらと書いてしまいました。これからも、こんな風に捏造満載になると思いますが、それでも大丈夫であれば、これからお付き合い下さい。

では、お疲れ様でした。

PHASE-28 共に滅びて貰うのだよ！（前書き）

苛まれる罪の意識。それは本当に友を思う為の感情なのだろうか？
友から浴びせられる言葉に、クロードは本当の自分の気持ちを自覚
する。

今回の話は本当に暗いです。苦手な方はご注意ください。

PHASE-28 共に滅びて貰うのだよ!

こんなに罪悪感に苛まれた事など無い。護衛としてガンダムに乗っていたというのに、突如出現した二機の同型のガンダムに翻弄され、本来するべき事を失念していたのかもしれない。

確かにフリーダムは代表へと手を伸ばしていた。しかし、それを払いのけるぐらいで済ませ、追撃を行わないのが最良の手であった筈だ。

だが、自分は追撃を試みてしまった。あの行動こそが、今回の悲劇を招いた最大の要因であったと、頭の中では冷静に分析してはいるが、外ではそんな冷静さなんて一欠片も存在している筈も無い。

項垂れた二つの頭が、ある部屋の前のベンチにあった。その姿はまるで、不治の病に侵された家族の無事を願うような印象を受け、容易に話し掛けられそうな雰囲気ではない。

その二人に連なるように、違う影が何対か広がっていた。或いは下を向き、或いは涙を溜めて潤んだ瞳を見せ、或いは腕を組んで壁に寄り掛かって、各々違う行動を見せているが思う所は一緒だ。

「…中々、終わらないね」

暗く沈んだ雰囲気でも言葉を発していなかったからか、一言喋るだけでも場違いのように響いてしまい、メイリンは慌てて口を塞ぐ。しかし、それが弛緩剤となったのか、次の句をタリアが引き継いだ。

「…そうね。あれだけ爛れて、しかも急に倒れんですもの。中々難しい手術になっている筈よ」

「アスハ代表…、大丈夫でしょうか…？」

アーサーの呟きに似た疑問に、また誰も言葉を発せなくなってしまった。

フエンリルを追い返した後、通信で代表が生きていると確認出来た訳だが、アスランの腕の中で眠るように気を失ってしまったのを、クロードは微かに憶えているが、その後は気付いたらミネルバの医務室へと代表を担ぎ込んでいて、ラルスの手術が必要だとの言葉を受け、今のように待ち続けるしか出来ない状況になっていた。

アスランもまた同じようなものだった。腕の中で眠るように意識を手放したカガリの姿に、どうしても死という一文字が頭を過ぎり、気が動転してしまっていた。その上今日は即席の休日になっており、病院は一つしか開いていないのだが、オーブを離れてしまっていたアスランには、どう対処すべきか全くわからずに、右往左往するしかなかったその時、通信から天啓にも似た情報が告げられたのだ。

『ミネルバに向かいましょう！今ならラルス先生が居る！』

その声に聞き覚えがある。オーブへの、そしてアスハへの暴言を吐いていた少年のものだ、忘れる筈も無い。

そして、その中の名前にアスランは縋る思いで飛び付く。あの有名な医師であるラルス・スペレルがミネルバに居るのなら、こんな状態に陥ってしまったカガリも救ってくれる気がしたから。

その後は現在の状態が示すように、手術中を現わすランプが燈る医務室の前で、生きて戻ってくる事を祈る他無いという、歯痒くてし

ようなない気持ちを抱えて項垂れているのだ。

隣で同じように頭を下げているクロードも気にはなっているのだが、今はカガリが何よりも優先されて心の中を占めていた。

「それにしても、フェンリルは何の為に現れたのかしらね？」

長く続いた静寂を次に破ったのはタリアだった。代表が襲われた時、ミネルバはオーブへ入港したままにドッグへ留まっており、第一に気付いたのは凄まじい轟音が響いた事だった。

その音に嫌な予感が走ったタリアは、急いで明日挙げる報告書を保存し、端末をテレビへと切り替えると、そこには凄惨な状態に陥った結婚式の様子が、ちりちりとした画面の乱れと共に映し出されたのだった。

そして確認した直後に部屋へと飛び込んできたアーサーも、この放送を観ていたようで、すぐにミネルバはドッグを離れ、現場へと向かおうとしたのだが、出港許可を得ていないとか何とかと、入口を開いてくれない管理者をどうにか説得し、漸く辿り着こうとした時に、こちらへと向かってくる三機と合流したのだった。

最初、ザフト所属のMSからアスランと代表が降りてきた事に驚いたが、それ以上に代表のお姿に血の気が引いていく思いで一杯になった。

焼け爛れた腿から下の下半身、白く血の気が感じられない顔色の酷さ。これではザフトが護衛に付いた意味も、任務を失敗した事による立場も危うさすらも孕む事になってしまう。

そう、軍に関する悩みに苛まれる寸前だったタリアの耳に、相当慌てたアスランの声が届く。それこそ、本当に継るような悲痛な声で。

「ラルス・スペレル医師は今何処に!？」

そして悟る。アスランはラルスに代表を診て貰おうとしているのだと。

その尋常じゃないアスランの雰囲気と、抱えられた代表のあまりにも酷い傷を感じ、タリアは相手がこの艦に少しの間身を寄せていた事を抜きに、アスランを医務室へと案内することにしたのだ。

その時のクロードの様子ときたら、今にも魂を亡くした抜け殻にでもなりそうな程の落ち込みようで、あまり直視出来るような状態ではなかった。

落ち込むな、という方が難しいとは思う。親友とも言えるアスラン・ザラの大切な人を守る為の任務で仕事を全うする事も出来ずに、フェンリルに無茶苦茶にされてしまったては仕方無い事なのだと理解してはいる。

しかし、そうやって落ち込んでいるクロードを見てやっている暇も無い。急いで医務室へと駆け出そうとしたタリアの視界の端に、崩れ落ちそうなクロードを支えるシンの姿が確認でき、一先ずの安心を感じながら、人一人を抱えながら必死に走るアスランの前を走ったのだ。

そして今に至り、少し考えてみるとフェンリルの行動には矛盾が生じている気がしてなくなってしまうた。

「何って：オーブの要人暗殺って所じゃないですか？」

「そうだとしたら、代表一人を狙うより式へ出席した他の来賓を狙った方が効率的よ」

そう、代表一人を最初に狙ったのがどうにも解せないのだ。彼女の持つ影響力は確かに強大だし、英雄と呼ばれる肩書きは世界共通のものだ。

しかし、誰もが知っているように、オーブの中で彼女は苦しんでいた。理想と現実のギャップや、宰相や一部議員達の怪しげな噂。これらを考慮すれば、代表一人を消した所でオーブは傾く所か、何か良くない方向に行き先を修正しそうだと思うのだが――。

「もしかしたら、今度の戦争を一番望んでるのが、フェンリルに乗っているパイロットなんじゃないですか？」

アーサーが放った言葉の抑揚は明らかに冗談の響きだった。しかし、それを当て嵌めてみるとタリアの脳の中でカチリとピースが絡まり、疑問が音を立てて回り始めた。

「そうか…。大戦を引き起こす事が目的と考えれば、納得出来る部分は多いわ」

「えっ！？嫌だなー、冗談ですてば――」

「考えてもみて。国を代表する者がザフト製のMSに暗殺されたとしたら、オーブの国民も黙って居られないわ。

そういう風に世論が流れていく事を目論んだとすれば、代表とユウナ・ロマを一人ずつ狙った説明にはなる」

「じ、じゃあ、ユニウスセブンを地球に落とすのを失敗したから、オーブを襲った、って事になります…よね…？」

アーサーの声は掠れていた。自分達が必死で破碎し、最小限の被害に食い止められたと思っていた出来事が実は裏目に出ていて、その上議長へミネルバをユニウスセブンへ向かわせる為に直談判をしたカガリの行動は、自分の命を狙われてしまう死神との取引のように思えてならなかった。

こんな皮肉な結果は、ドラマの中だけで良いというのに…。

二人だけの声が響く空間が暫く続いた。アスランとクロードは勿論、シン、レイ、ルナマリアの同期三人も今の空気の中で会話を交わす事は憚れたのか、赤いランプと扉を交互に眺める行動が続いていた。端から見ればそわそわと落ち着きなく映るかもしれないが、一人の命が懸かっている状況でドンと落ち着いていられる方がおかしいだろう。

それも本来なら自分達が盾になっていなければいけない立場だというのに、生身には傷一つ負っていないのが余計に罪の意識へと引き擦り込む要因になっていた。

「けど、あの状況でユニウスセブンを破壊しないという選択肢は無いわ。代表の決断こそ、世界を憂う者の鑑とも言うべきものだったと、私は思うわ」

タリアが毅然とカガリの言動を支持すると宣ったと同時に、赤く燈っていたランプが消える。

バツと立ち上がるアスランとクロード。どちらも焦燥した表情を見せている。しかし、扉はすぐには開いてくれない。その間がとにかく那由多に続くかのような感覚を味わう。

合間の空虚な時間は他の六人にも焦りを催させる。組んだ腕を指で叩く者、ブーツの爪先で地面を定期的に蹴る音、意味も無く向こうの廊下を確認する者。様々な姿があるが、アスランとクロードは扉から双眸を逸らそうとしない、否、離そうとしない。

ランプが消えて数分後、手術着を脱ぎながら扉を出てきたラルスに二人は一気に詰め寄る。そのあまりの必死さに一瞬ぎよっとさせられたが、すぐにそれがカガリを大切に思っているのだと彼女の中に植え付いた。

「医師！カガリは、カガリは大丈夫なんですか！？」

掠れ気味の声の調子が、心配でここから一步も動かなかった事を物語っている。ラルスはその事に感心したと同時に、結果を話す為に集まった八人の顔を見渡す。

誰もが引き締まり、覚悟とこれから話す結末を受け入れられる準備が出来ていると判断して、ゆっくりとした動作と共にマスクを外し、ラルスは結果を告げる言葉を紡ぎ始めた。

「結論から言えば、手術は成功した。幸い、命に関わる程の放射能を浴びた訳ではなかったのが救いだっただけ」

一先ず胸を撫で下ろす。どうにも呼吸を忘れてしまいがちになり、脳が酸欠で考える事を放棄し始めていた。だからこそ、次の一言は文字通りの《衝撃》を八人に、特にクロードとシンに与えたのだっ

た。

「しかし、足の神経は完全に機能していない。もう動かせないだろうな……」

帽子を外しながら苦々しげに知らされた事実。クロードの中で物凄い勢いで渦巻き、思考を占領し、先程までのとは比では無い程の押し潰されそうな罪悪感に、呆然と立ち尽くすしかなかった。

その顔に浮かぶは無表情。まるで世界全ての者から怨まれ、追い掛けられた挙げ句精神を崩壊させてしまったかのようだ。

それを確認してはいたがラルスは話を続ける。残酷な事しか言えない現状をどうにか出来てしまう程、医療は完璧では無いのだ。

「それに神経が連鎖的に崩壊を始めそんな兆候がある。それが心臓に達してしまえば――」

「えっ！？ 命に別状はないんじゃないですか!？」

我を見失っているクロードの横で悲鳴に近い声が辺りに響く。ルナマリアの言う通り、ラルスは最初に命の保障はしているのだから、今告げようとしている言葉には矛盾が生じる。

しかし、全てを救えないまでもあらゆる手を尽くして消えそうな灯を守るのも、医者 of 勤めなのだ。

「あのな、話は最後まで聞くものだぞ？」

その進行を止める為に強い薬が必要になりその副作用は強烈だ、て事をアスラン・ザラに覚悟しておいて貰わなければならない」

「：どれくらいの症状が顕れるんですか？」

声のトーンは落ち着いていて先程詰め寄った時とは違い、冷静に振る舞おうとしてはいるのだが、如何せん目は瞠かれ、瞳がわなわなと震えていれば、そんなものは只の強がりではないのだ。

隣で首を擡げられないクロードの方が、よっぽど普通な印象である。

「第一にまともに喋る事が出来なくなる。しかし、これは一時的な作用だから安心していい。問題は神経をどうこうしようとする薬だから、どうしても定期的に身を引き裂かれるような痛みに襲われる」
普段なら外から感じる痛みの類が、内側から怒涛のように押し寄せ、生きている神経に勢いを増して打ち付ける。

それが、あの瘦身で受け止められなければいけないのだ。それを想像するだけで、アスランに絶望が降り懸かる。知らず膝が崩れ、視線はラルスの爪先辺りに落とされる。そのまま倒れてしまいそうな、そんな体勢。

「しかしその痛みを乗り越えられれば、神経の侵食しようとする放射能を取り除ける。そしてその痛みに堪えるには、周りの人間の愛情と気遣いが重要なんだ」

ラルスは膝を折ってアスランと視線を合わせた。そして柔和に微笑んで、告げた。

「だからお前が傍に居て、生活を支えてやれ。どんな事があるうとも彼女から離れるな。そうすれば、彼女はきつと乗り越えられる」

尋常で無い雰囲気から、アスランがカガリを愛している事は容易に想像出来た。そして、多分彼女またそうなのだろうと。

それならばお互いを想い合う気持ちで、そんな障害等吹き飛ばしてしまえばいい。足が動かないハンデを背負う事になるが、支えてくれる人の存在一つで景色は違って見える筈だ。

「……はい…、…はい…！」

泣き崩れるアスランの両肩を、ふわりと覆うラルスの両手。その優しさが母親に似ていて、溢れる涙がとめどない。

そんな彼を見詰める十二の双眸の色は、溢れそうな涙を堪えようとする四つと温かな視線を送る八つに別れ、取り分け四つの瞳はラルスの言葉と、アスランの背中の決意と大きな愛情に、感動と同時に羨望の色も含まれていた。

これ程までに想われて居られるのなら、自分が障害を抱えたとしてもきっと大丈夫だろうと思えてくる。

そこで、その想いを注いで貰いたい相手の背中を確認する。見てみた瞬間、その異常な程の雰囲気に圧倒されてしまう。

辛うじて立っているのかぐくくと震える膝、がくりと落ちた肩とだらりと力の無い腕、そして極めつけはぶるぶると小刻みに震える身体全体。

「…クロード…？」

気遣いの含まれたルナマリアの声が、その場全員の視線を名前を呼ばれた人物へと注視を促した。肝心の本人はその場から動かず、ただ異常な程に重苦しい空気を辺りにも撒き散らすだけだった。

「――」

辺りの静けさから、クロードが何かを呟いている事を際立たせる。気付いたメイリンが近付いて顔を覗いてみたのだが、その顔色の悪さに一歩後退してしまう程に酷い顔だった。

蒼白の顔面は勿論、色を失った榛色の瞳、ぱくぱくと開閉を続け、音とも言えぬ何かを紡ぎ続ける唇が、クロードの全てを不気味にしていた。

「お、おい、クロード？ 大丈夫な――」

「俺の…せいだ…、俺の…。俺のせいなんだ…」

メイリンの様子もあり、あまりにも心配になったアーサーが肩を叩いた時、呟きはいきなり人の鼓膜を震わせる程の大きさを持ち、クロードが何に苛まれているかを白日に晒していく。

「俺の…俺のせいなんだーっ！！！」

絶叫一閃。静寂の中にあつた医務室前を、クロードの罪の意識の表れが占めていた。そしてだらりと力の無かった腕に、苛まれる意識に押し潰されぬように自身の身体を抱きしめるのだが、そのあまりの力に掴んだ二の腕から、黒のノーマルスーツを更にどす黒く染める紅が溢れてしまっていた。

その場に居る殆どの者が、クロードの豹変に着いていけない。悪く言えば、軽く引いていると表現するのが正しいか。

今までのクロードに持っていたイメージは、冷静沈着で大胆不適と
いったプラスともマイナスとも取れる形容だ。しかし、ガタガタと
震えているこんな姿なんて誰も想像だにしていなかった。

「…俺が…おれが…」

友の想い人を自分の判断ミスで傷付けてしまい、その上一生背負
っていかねばならない重荷まで括り付けてしまったのだ、冷静
で大胆でいられる筈も無いのは承知だが、これ程までに人目を憚ら
ずに変わってしまうのは、優しさと自分に厳し過ぎる代償なのかと
シンは考えていた。

しかし、圧倒的異常が身体の自由を奪う。声を掛けようにも豹変し
たクロードの様子が、誰も近付けようとしていないのを本能が感じ
てしまっているともいうのか？

「…おれがフリーダムをおいかえすために、だいひょうのそばをは
なれなけレバー」

「それは違う！フリーダムの事だって護衛の仕事だろ！？それを見
逃して代表が攫われでもしたら、それだって後悔する！」

正論の響きはクロードの中に届かない。それぐらいは理解している
のだ。しかし、理由が、自分の中に生じてしまった気持ちに許せな
いのだ。

あの時の感情は、代表を守る為なんていう高尚なものではなかった。

ただ、あんな力をあんな甘さの残った戦い方で奮え続けるフリーダムに、小さな対抗心が頭の隅を過ぎったのだ。

その対抗心は少しづつ膨らんでしまい、任務を忘れて戦いに身を投じてしまっていた。チャペルの上で見詰めている代表の姿を確認出来ていなかった。

「あのとき…あのときはなれたから、フリーダムをたおそうなんてしたから…」

機械のように呟かれ続ける自虐の唄は、精神が狂い始めてしまったのか裏返る箇所まで現れていた。このままでは心が跡形も無く崩れ落ちる事すら容易に想像出来る程で、その場に居る者達の胸が締め付けられた。

「…それは本心なのか、クロード」

泣き崩れていたアスランの顔に別の感情が宿る。白目は泣き過ぎたせいか赤く充血していて、それが今の表情をより一層に強調しているように見える。

つかつかと今にも崩れ落ちそうで、儚げに消え去りそうなクロードの前に歩み寄り、胸倉を掴み顔を上げさせた。

そこにはまるで生氣を感じられない何も映さない瞳と、半開きに自虐を垂れ流す口があるだけで、クロードという意味をそこから見出だせない。

アスランは腕に力を込めて、目の前《物体》を持ち上げる。そして反応を見せない事に苛立ちは一気に沸点を迎えてしまう。

次の瞬間、クロードの身体は宙を舞っていた。それを呆然と見詰める他の面子。あまりの出来事に反応すら不可能だった。

痛々しい程の音を立てて壁に激突し、そのまま崩れ落ちるクロードの身体。

ルナマリアとメイリンの叫び声が聞こえたような気がするが、定かでは無い。痛い筈の左頬も背中も全く何もわからない。身体が違う何かに取って替わられたかのような錯覚。

そんな状態でも両目は機能を滞りなく果たし、歩み寄ってくるアスランの顔を捉えていた。その無表情さは、今まで見た事も無い鬼のような冷たさを垣間見せていて、これから自分は地獄で裁かれるのだろうと納得していた。

「もういいでしょう！クロードを殴ったからって、代表の身体が治る訳じゃないんですよ！」

赤い服が立ち塞がって、自分を庇ってくれている。しかし、そんなもの鬼には関係無い。裁かれる事こそが、そして贖罪として身を捧げる事が、今自分という矮小な存在が出来る精一杯なのだから。

「…退け」

全く温度の感じられない、抑揚の無い言葉がレイの心に突き刺さる。成り立てと言えど自分だって軍人だ、恫喝や脅迫に近い物言いに屈する程、軟な精神でない筈なのだ。

なのに、何故こんなに怖いと感じてしまっているのか？アスランは

顔にも声にも感情を燈していない。その《無》に怯えているとでもいうのか？

「い、いえ、退けません！これ以上殴られたら、それこそクロードが壊れてしまう！」

搾り出すように上げた声は微かに震えていた。それを自覚しながらでも、レイは懸命に見栄を張り上げる。自分の中の恐怖を否定すると共に、クロードの身を守る為に。

しかし――。

「退け、と言っている」

選ばれた者しか纏えない雰囲気とでも形容すればいいのか、アスラの放つ異様なまでの空気が本格的な恐怖をレイの中に、いや、その場に居た殆どの者に齎していた。

こうなればレイに対抗手段等、欠片も残されていなかった。アスラの腕で無理矢理に退かされてしまい、ぴくりとも動かないクロードの目の前に、無言で立ったアスランはただ見下すだけで、何かをしようとはしなかった。

音の立たない空間が数分間続いた。アスランもクロードもそして固唾を吞んで見守る他の者達も、電池の切れた玩具のように動く事は無かった。

「：お前はカガリの事は全部自分のせいだと、フリーダムを倒す為に護衛を疎かにした事が招いたと言ったな？」

「……………」

沈黙を破ったのはアスランの静かな疑問文だった。その内容は先程何かに取り憑かれたように呟いていた、クロードの罪の告白そのままであった。それを受けてクロードは認めるように頷くやら、返事をするやらするのかと思ったが、しかし、殴られて壁にぶつかったそのままに動く事は無かった。

「その罪はあまりにも重いと、カガリを苦しめてしまったと考えているんだな？」

アスランの言葉を受けてもぴくりとも動こうとしないクロードに業を煮やしたか、段々と語調が強くなり始めていた。

とうとう怒りが頂点に達し、恨みを晴らす為に鉄槌を下そうとする体勢、つまり再び胸倉を掴み上げたのだ。

流石に止めるべきかと思ったシンとレイだが、それをアスランの声によって思い留まる事になる。

「だったら！なぜそうやって自分を責める！いつまでも落ち込んで、自分自身を見失っている場合じゃないだろう！？」

今までの冷たい口調が嘘のように、アスランの語尾は力強くクロードの心に打ち付ける。

「なぜ…って…俺の…俺の…せいだから…」

まるで声を忘れてしまったかのように、クロードの紡いだ言葉は唸るように繰り返された。掠れてしまって、いつものような強さも優

しさも全く感じられない。

「そうだと思うなら、贖いの為に動こうとするのがお前じゃないのか！？本当に罪を感じているとしたら、こうやって項垂れているより行動する事の方が大事じゃないのか！！」

どうしようも無く情けない自分に向けてくれる叱咤。

辛い筈の、オーブを離れた事を後悔している筈のアスランが向けてくれた本物の感情。それに応えずに何が友か、何が裁かれる事だけが自分に出来る唯一の贖罪だ！

俺はただ逃げ出したいだけだったのだ。こうして、弱く脆い内側の気持ちを詰られるのを。友の大切な人を傷付けたという事実を認め、しかし、その許しを乞う恐怖を、受け入れる覚悟を持ってない自分の心を、それらのどうしようもなく軟らかいのを否定したいだけだったのだ。

「アスラン：ごめん、本当にごめん：」

榛色の瞳に漸くクロードが戻ってきた。そして今までは涸れていた涙が溢れて、崩れ落ちたそのままに自分の腕の中で泣き濡れた。

「そんなに気に病むな。：本当なら、俺だってお前を責める事なんて出来ないんだから」

廊下へと膝をついて、ずっと下にあるクロードの肩へと手を掛けてやる。それがクロードの涙腺を更に刺激するだろうとはわかっていたが、今は涙を流しきった方がこいつの為だろう、とアスランは考え、クロードの腫れた瞳と情けない顔を拝むまでそうしていたのだ

った。

そんな光景を見て、二人の深い友情を感じとった七人は、医務室で眠っている代表を見舞うのを口実に、二人を廊下に残して中へと入っていった。

これで、漸く結婚式からの騒動が終息したのだった。

暗く、嚴重に隠された戦艦の底部分。そこに今二人の軍服を纏った者が、通信機器の光源の中に怪しく浮かび上がっていた。一人は仮面を付けた上官らしき男、もう一人はどうやら副官といったところだろうが、椅子に座った仮面の男の後ろにびたりと張り付き、直立不動でその場に佇んでいた。

その通信の画面に浮かび上がっているのは、薄い色素の髪に血色でも悪いのか唇が真っ青な、あまりお近づきになりたくないと思ってしまう人が映し出されていた。

『この際エクステンデッドの一人や二人失ったのはどうでも良いのだ！』

血圧の低そうな外見の割に、怒り心頭を表す為に真っ赤な顔を見せる直属の盟主に、ネオ・ロアノークは憐れみの感情と、エクステンデッド如きと宣い、まるで物を見るかのような眼に苛立ちを抱いていた。

本来なら、今頃ユニウスセブンの件を盾にして開戦へと向かっていた筈なのだ。しかしミネルバの活躍、取り分け、あの生意気な口を聞いた青年が乗っていたガンダムが使用した、ニブルヘイムという

悪魔の兵器によって、地球に住む多くのナチュラルが救われるという皮肉をまともに感じてしまった。

そしてそれは、目の前の箱の中で憤怒しているロードⅡジブリアルも同じなのだろう。

『今すぐにフロントムペインと連邦の戦艦を動かし、オーブへ滞在しているミネルバを叩くのだ。このままでは腹の虫が収まらない!』

「しかし、オーブは中立を謳う国です。ミネルバがそこにあるというのなら手出し出来ませんよ」

正論で返してやる。どうにも昔の記憶が無いからか、この方に従うようになった経緯は思い出せないが、その時の自分は相当に気が触れていたのだろうと容易に想像出来て、何だか情けなくて涙が零れそうだった。

『そんな事は関係無いのだよ』

「:~と言いますと?」

『あそこは度重なる連邦への参加を拒否し続けた。その代償としてミネルバのと共に滅びて貰うのだよ!』

これ以上、本物の外道という例えがぴたりと嵌まる奴は居ないだろうと思える。

今すぐにでも、暗にステラ等どうでも良いと口に出したこいつの口を縫い付けたいと思ったのは、自分だけじゃない筈だ。

『とにかく、早く目障りな奴らを始末しろ！その為の部隊だろう、ファントムペインは！』

自分の内側に溜まった鬱憤を晴らすかのように怒鳴りつけ、一方的に通信を切りやがったジブリールは、相当に嫌われているのだろうと感づいた。

「…さて開戦もしていないというのに、どうやってオーブ近海に軍を張る口実を作ろうかねえ…」

椅子から立ち上がったネオが、仮面が覆っていない下顎に手をやり考え込む。そこに後ろに律儀に付き従う副官が、この部屋に入ってから漸く口を開いた。

「それならば心配いりません。我が軍は既にプラントへと進行を始めています。宣戦布告はしていませんが」

イアン・リー。律儀にこんな適当な指揮官に付いてきてくれている、忠義に篤い男だ。普段からMSを駆る俺に変わって、ファントムペインの母艦であるガーティールを取り仕切っている、実質上の艦長だ。

「うへえ、ホントにえげつないね、内の軍って」

えげつないと言うよりは卑怯と蔑むレベルであるが、何処で監視し、盗聴しているかわからない以上、自重しておく事に損は無い。

「大佐、ふざけている場合ではないです。盟主の言う事に逆らうのだけは止めた方が——」

「わかってるよ」

入ってくる時も、出ていく時も面倒極まりない程のロックを施された扉を、慣れた手つきで解錠しながら、ネオはイアンの意見に割り込んだ。

「罰とか言って、簡単に殺される事なんて嫌に決まってるんだからさ」

命令に逆らえば死。それがファントムペインの暗黙の了解。

「さて、一先ずオーブへとちゃっちゃと行きますか」

偶然と必然。二つの織り成す物語が、少しずつ全貌を現し始めている。それが一つの方角へと収束しているのが、世界を統べる者にはわかっていた。

世界を巻き込む、戦う術を持たぬ多くの民間人が命を落とすであろう、大戦の薫りが鼻先を掠めていた。

PHASE-28 共に滅びて貰うのだよ！（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

今回の話は書いている側もかなり暗い気持ちにさせられてしまいました。しかし、友人の大切なものを壊してしまったとして、それを馬鹿正直に話せる人の方が少ないと思うのです。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂ければ嬉しいです。

PHASE-29 俺だって同罪なんだ（前書き）

刻々と近づく敵に対処すべく、先を急ぐボルテールではあったが、次々と浮かび上がる疑問に艦橋は飽和していた。そこにディアツカの不穏な言葉が舞う。

一方罪の意識に苛まれ続けるクロードは、自分が唯一出来ると思われる事をしようと決めたはいいが、心は惑いの渦中にあった。

では、お暇ならお付き合いお願いします。

PHASE-29 俺だって同罪なんだ

人の心はいつでも二つの色に揺られている、といっても過言ではない。黒と白、それこそが人間である証拠でもあるし、また醜いと感じてしまう原因でもある。

その黒を象徴するような大事こそが戦争であり、人を数多殺めたとしても、統べる者が諦めなければ属する者は戦い続けなければならない。それがどんな圧倒的な絶望に襲われても、絶対的な恐怖に苛まれても。

「お、おい、いくらなんでもこの数を相手には出来ないぜ！」

切迫したディアッカの声が艦橋内全ての者に行き渡る。イザークもシホも同様に心の中だけで思うに留めていたが、声に出されてしまえばもう隠している意味は皆無だ。

「…しかし、こいつらを止めなければプラントが滅びる。あの核の量からすれば、十数機が生き残れば、コロニーは全て焼かれるだろう」

「…はい。やはり迎え討つしか無いようですね…」

イザークの眉間に皺が寄る。どう考えてもこんな少ない戦力では、遅れを取る事はないだろうが、確実に仕留め損ねる数が嵩んでいくだろう。我ら防衛線を突破されれば、プラントを守る部隊はたったの一個小隊。

炎に沈むアプリリウスを見る羽目になってしまうのだ。

シホもそれを見るのは勿論嫌だった。だったら最後まで足掻いてみるしかないだろう、と覚悟を決めたのだが。

「何か良い策は無いのかよ!? ただ闇雲に突っ込んだって、摺り抜けられる数が増えるだけだろう!」

ディアツカの言う事は、まともで考えずにはいられない、自然で当然の思考だ。何の策も持たずに力の差にだけ頼れば、間違いなく慢心が災いし、目的であるここで食い止める事は叶わないだろう。

しかし――。

「たった三隻の艦で何が出来るんだ? たった十数機のMSで策など練れるのか?」

苛立ちを含んだ声だった。どう考えても、どう戦力を割いたとしても、結局脳内に映し出される結果は、核に焼かれるプラントコロニーの姿。

簡単に諦めている訳ではないのだが、諦めざるを得ないのだ。

「…せめてニブルヘイムや、ジェネシスのような広範囲に照射出来る兵器があれば、何とかなるんだろうけど…」

「そうだな…。けど、今はどちらも手には加えられない。ニブルヘイムは地球だし、ジェネシスは機能してないし」

大戦後、ナチュラル殲滅用とも言えるべきジェネシスは、壊れたままプラントが回収していた。今は外見こそ修繕されているが、中身には手を付けていない筈で、頼りにしてはいけないカードになる。

しかし縋りたい気持ちは、こんな状況に置かれている者達にはわかる。精神の依り処とも言うべき、コーディネイターとしての尊厳、ナチュラルより全てに於いて勝るといふ思想では、この状況は打破出来る筈も無い。

そして気付かされるのは、個々の力を頼りにザフト軍は邁進してきてしまった事だった。

確かに量産型を開発したり、装備や装甲を強化してきた訳なのだが、実際の所、主力と目される部隊にはあまりパイロットが配属されていないのだ。少数精鋭と言えば聞こえは良いが、結局はナチュラルなどに人数を懸ける必要は無いと、軍上層部の慢心が招いたのが、今の最悪の結果であるだろう。

それに、イザークにはどうしても解せない事があった。そのせいで、兵器の名前が鼓膜を揺らすだけでも、それを発したのが気の置ける奴らだとしても、湧き上がる苛立ちは隠せない。

「ニブルヘイムの話をするな！名前が出るだけでもむしゃくしゃする！！」

理不尽な怒りを受けて、シホとディアッカは顔を合わせる。どちらも訳がわからずに？を頭に浮かべているのがわかり、宇宙を見詰め続けているイザークの後ろ姿に視線を送る。

窓越しに映ったイザークの眉間に刻まれた皺と、釣り上がった口端に剥き出しになった軋みを上げそうな歯。

相当頭にくる事がニブルヘイム認可の渦中にあったのだろう、とデ

イアツカは後ろ姿から伝わるオーラから感じ取った。

「…そう言えば」

ニブルヘイムにイザークで思い出した。ロミナお婆さんの登場によって話が流れてしまったいたが、あの時もこいつは何かを言い掛けていたな。確か――

「ニブルヘイムは隊長職以上だけは知っていて、無理矢理認可させられたって前に言ってなかったか？」

「えっ！？ そうなんですか？ 初耳です」

シホの脳裏にあの時の光景が蘇る。まずは議長が艦橋に居る事に驚き、次にそれを平然と認めていた隊長に呆れたのだった。

しかし、そんな無駄な思考は目の前の光景に塗り潰される。

銀色に輝く背中の中のと、宇宙の闇に溶け込む黒の機体帯び始めた、白とも青とも銀とも似つかない光。それを柄にも無く綺麗だと思ったのを、今でも憶えている。

しかし、一瞬にして戦慄に変わる。放たれたMS駆動用のエネルギーが凄まじい奔流となり、全てを、大袈裟な表現では無く本当に廃コロニーの全てを飲み込んでいったのだ。

そしてその射軸上に存在する破片は、エネルギーに触れた瞬間に正に蒸発するように消え去っており、長かった照射の時間の間に、地球へと降り注ぐと重力に乗る事で急ごうとする砕かれた欠片達すらも、ほぼ跡形も無く塵と化していた。

戦術兵器に収まらない、戦略兵器としての威力も抜群な力を誇るであろうニブルヘイムの存在を、隊長以上が無理矢理認可させられたとはどういう事なのだろうか？

「……………」

外を眺め続けるイザークは口を開こうとしない。窓に映し出される顔は、先程までの様相を潜めており、今は神妙に表情自体も潜めているように見える。

沈黙が流れ続ける。聞こえてくる電子音すら耳障りで、レーダーの反応が少しづつ近付いてくるのを睨むように確認したシホが、モニターから視線を外した時、漸くこの静寂の空間にイザークの音が確かな響きを持って行き渡った。

それが何故か印象的に心に残っているのは、内容の凄さのせいに他ならない。

「…あの日、極秘で招集された会議によってニブルヘイムの開発が認可された。まあ、会議なんて名前だけで一方的な提案の挙げ句、質問も非難も一切聞かずに承認の決議と共に、半数以上の賛成によりニブルヘイムが生まれる事になった」

「な…、何だよ、それ…。あのクロードがそんな卑怯な真似をしてまでも、あんな危ないもんを開発したって事なのか…？」

ディアツカの声は掠れて、戸惑いから途切れ途切れに聞こえてしまう。それだけ動揺が大きいのだろう。

クロードを保護した時から知っていて、養成所を卒業と共にクルーゼ隊のメカニックとして配属されてきたあいつとの付き合いは、もう相当に長いといっても良いだろう。

それだけにあいつの性格も習性も把握している自信があった。とにかく自分の周りの為に自身を犠牲にし、周りの苦勞を嫌うといった、典型的な自己犠牲精神の固まりのような奴だ。特に女性には顕著で、知らず知らずの内に落としている事もしばしばあった。当の本人は全く気付いていない様子だったが。

そんな外に優しい奴が、あんな世界を滅ぼしかねない兵器を、汚い政治のようなやり方で押し切ったとは信じ難い事だった。

「いや、あいつも議長も会議にすら来ていなかった。それが一番気に入らないし、気にもなる事なんだが……」

「何だよ、それ！ 開発を志願したのは確かクロードで、それを認可する為に会議を招集したのは議長じゃないのか？」

隊長格を集めるという事は非常に骨が折れる事で、その上、危険を伴う行為でもある。

隊長が居ない間、副隊長が指揮と指導を行えば良い話ではあるが、軍人にだって休暇という癒しが必要であり、招集に当たって副隊長の苦勞は嵩んでいく事になる。

それに、隊長となる者は人を動かす事に長けていなければならないが、それ故に戦いに於いても力を保持していなければならない。何故なら、付き従う者達が尊敬出来なければ、隊長の指示は空回りして誰も動こうとしてくれないからだ。

よって、隊長の戦力を欠いた状態のまま、攻め入ってきた敵と交戦となり、全滅する可能性だって捨て切れないのだ。

そんな危険を孕んでまで招集しておいて、当の本人、ましてや文書を送った者すらも現れないなんて、前代未聞の失礼劇であろう。

「それはそうだろうが…、ああもう！俺にも良くわからない事を、どうやって答えろというのだ、お前は！」

どうやら考え過ぎによる癇癪を起こし始めたようだ。こうなれば冷めるまで待つのが一番だろう。どうせ、敵の姿が見えれば一気にクールダウンするんだろうから。

「…それにしてもおかしい話よね。本人も最高権力者も居ない会議が、過半数以上の支持を集めるなんて」

シホの言う通りである。議会というものは所詮人気のある議院か、どうしても通さなきゃいけないと思われる議案の場合は一日で可決される事もあるが、こういった慎重を期さなければならぬ議題の場合、一ヶ月や半年、はたまた一年以上の月日を有する場合もある。

それなのにたった一日で、しかも議長というカリスマが存在しない状態での可決なんて想像する事も出来ないぐらいに異常な事態だ。

こうなると、最悪の考察をせざるを得なくなる。

「…もしかしたら、ニブルヘイムの開発が仕組まれた事だったりしたら――」

「仕組みまれたって、誰に？」

「あくまで予想だがな、クロードはオーブに少なからず恨みを持つてる。しかも、プラントに亡命する前は連合に拉致られそうにもなってた。こういう事実から照らし出すと、クロードが過激派と結託して地球を滅ぼそうとニブルヘイムを開発したとも考えられる」

「…それは無いわよ。だってクロードさんは地球へ落下するユニウスセブンを、そのニブルヘイムで綺麗さっぱり消し去ったのよ？」

白とも青とも銀とも呼べない光のデッドラインから逃れて、地球へ全体から見れば少量の隕石は降り注いってしまったが、あれは決断までに要した間から生じたものだろうし、機密で開発したあんな兵器を撃つには相当な葛藤があるに決まっている。

「あれを撃ったのが、他の連中に獲物を横取りされない為だったりしたら、どうなる？」

シホの背中を冷たい汗が流れていき、途中で黒のインナーに吸収された。しかし、戦慄によって溢れ出した冷汗は中々に止まる気配は無い。

もし、そうなれば、どうなる？

仮定の話でしか無いのに、現実感を伴ってシホの脳に焼き付いてきた。ユニウスセブンと一緒にフェンリルを追い払ったクロードの顔が蘇る。厭な笑みが浮かんでいた。

「やばいわよ！今ミネルバは確か――」

「…ああ。クロードもラグナロクもニブルヘイムも、オーブにある」
集束された考察や予想、結論に最悪の結末が用意されていた。もやもやとする表現し難い気持ちをどうするか、決め兼ねていると、索敵担当の管制官が叫ぶように注意を喚起する。

「敵MS群との距離、危険域に入ります！」

核ミサイルの射程圏内に入ったという事は、相手もこちらを捉えているという事に他ならないのだ。早々に出撃なり、待機なりの支持を艦隊全体に行き渡らせなければいけないのだが…。

「くっ！早過ぎないかい？まだ対策も立てられてないのに！」

明確な指針も、敵を一網打尽に撃墜する方法も考えついていないし、そもそも手駒不足は否めないし、クロードの件も頭の中に残っているし…。

考える事ばかり増えて、解決出来ずに消化されていかない案件ばかり手元に残り、艦全体が辟易とする空間に様変わりしている気がしてきた。

しかし、艦橋で成り行きを見守っている訳にもいかない。遠い距離から着実に数を減らしていかなければ、圧倒的にこちらが不利になる。相手は多数の中から少数でもいいから、核の射程にプラントコロニーを捉えれば良いだけなのだから。

「……ディアッカ、シホ、出るぞ！」

一瞬の躊躇いの後、イザークは決意を固めた表情でMSデッキへと

歩み出した。それに着いては行くが、作戦も引ったくれないこの状況に不安を隠せないシホと、余計な事が頭に浮かんで離れないデИАツカと、絶望に立ち向かう為の心境とは掛け離れていた。

――ミネルバ、MSデッキ。

冷たい鉄に囲まれた空間で、作業に没頭する若者が一人、夜の冷たい空気の中でもその熱を絶やす事なく、身体と頭を動かし続けた。

今日起こった忌まわしい事件。護衛が付いていながら、国家の代表が一生涯に渡って苦しまなければならない傷を負った、有り得てはいけない事態。

クロードはその負い目から、精神から病みかけていた。責任はフリーダムに對抗意識を持った自分にあると。

あそこで優先すべきは代表の御身に關わる事象であり、危害を加えようとはしないであろうフリーダムではなかったのだ。

わかっていた筈なのに、結局自然と身体が反応してしまった。判断とかでは無く、身体の芯が熱くなっていく感覚があった。

それは多分嫉妬。あれだけの戦闘をコックピットを狙う事をせずに熟し、その上相手の戦意を完全に刈り取る。クロードからすれば、あんな甘い戦い方を肯定しなければいけない事になる訳で、あまり持ち合わせていない小さな矜持に、いつの間にか傷を負っていたという事か。

「……また、か。本当、自分に呆れるよ…」

作業に熱中していた筈の手がいつの間にか止まっている。それが何回続いただろう。アスランに叱咤されて、考え過ぎないようにと切り替えを行った筈が、ひよんな事で頭の片隅から顔を出して、思考だけが働き、身体が動きを持て余すといった事を繰り返していた。

だけどこれが正常なのかもしれない。どうしたって友の大切な人を傷物にした罪悪感が拭えるものではないし、時間と共に消え去ってしまっただけではないものだ。

そう、これはクロードが背負う十字架なのだ。愚かな自分への辱めであり、優先順位を見誤る事がどれだけ大きな失敗を生むかの教訓なのだろう。…その為に犠牲になったものは、限り無く大きなものであったが。

(……そう言えば代表に謝らなきゃな…)

皆が消えていきアスランも中に入っていく医務室へ、クロードは扉を潜る事が出来なかった。

代表に頭を下げて、オーブが突き付けてくるどんな罪にも耐え忍ばなければいけない。そう考えてはいたが、身体は畏れをなしたかのように固まり、パネルを弄る事も出来なかった。

そして、誰にも声を掛ける事無く、MSデッキへと駆け込んでいた。その時には既にがらんどろになっていて、幾分精神的に落ち着いていた。

そして考える。自分が贖罪として何をすべきかを。代表の為に何が出来るのかを。

しかし、そう簡単に浮かび上がってくるものでは無い。増して乱れきっていた精神が、少しばかり整ったからと言って、名案がいきなり飛び出してくる筈も無い。

暗く、無駄に閑散と感じてしまうこの空間に居ると、先程までまでの罪悪感と後悔とが、また怒涛の勢いで押し寄せてきそうで、気分がどんどんと沈んでいってしまう。

「本当、情けねえ……」

眩きは空間を跳ね返る事無く、鉄の壁に消えていった。反芻するのは脳内だけで十分だから好都合ではあるが。

しかし、その空間にもう一つの心臓が存在している事に、クロードは全く感じられずに居た。気配に敏感な筈の彼が少しも警戒を見せないのは、やはりそれだけ自分を責め立てて、ズタボロの精神をどうにも持て余してしまっているのだろう。

コアスプレnderの装甲と武装案を解決しようと知識を巡らしている。中核を担う場所に大型の武器を取り付ける訳にはいかないが、単体でも十分な戦闘を熟せる程の火力は欲しい。

そうになると、バルカンでは物足りない。やはり並のMSであれば沈められるぐらいの威力は欲しい訳で、そうになるとビームライフルの出力は確保しなければならない。

しかし、そうになるとコアスプレnderの力不足に陥り、ミネルバに帰る事も、シルエットを待つ事も儘ならないだろう。

そうなることややはり機動力に重点を置くべきか。敵の攻撃を避けつつ、帰投もしくは待機が出来る程の腕は、既にシンは体現しているように思える。

「……やっぱり、武装は実弾で機動力しか手はないか…」

あまりやりたくは無改造である。威力も範囲も乏しい決定打に欠ける武装、一撃でももらえば撃墜確定の脆い装甲。

博打の要素が強い機体に、まだ若いシンを乗せるつもりにはなれないのだ。

「…頑張ってるな」

背後から聞こえた声に一瞬萎縮しそうになる。励ましと自分は取ったが、本当の意図は本人しか知らない訳で。絶対に許してくれない可能性だってあるのだから。

「…ああ、俺にはこれ以外には戦う事しか出来ないからな」

想像ではしかめっ面で怒りを顕わにするアスランが居た。しかし振り返ってみると、穏やかな笑みを浮かべてこちらへとゆっくり歩み寄ってくる姿があり、少し拍子抜けを感じると同時に大きな安堵も味わえた。

「それにしても、こんな夜中にMSを弄る必要はないんじゃないか？」

「いや、シンの腕に機体の性能が追い付き始めてるんだ、あまり時間を掛けてもいられない。それに…」

「それに？」

たった数秒の沈黙でさえ、重苦しい雰囲気傾いてしまいがちな心に鞭を打つ。アスランに嫌われてしまうのは、やはり確実に間違いの無いのだ。

「何かしてないと飲み込まれそうなんだ。お前にとっては俺が鬱になったり、塞ぎ込んでる方が気味が良いのだろうけど」「…はあ…」

此れ見よがしに溜息を吐かれ、クロードは戸惑いを憶える。

睨め付けられたり、罵倒されたりするのを覚悟していたのだ、それなのに呆れたように肩を竦めて首を振るアスラン。

あまりにも以外過ぎて、躊躇いがちにアスランの顔を窺うと、また唐突に真剣な、眉尻が上がってはいるが怒りを感じさせない顔を作った。

「…お前はいつからそんなに卑屈になったんだ？確かにカガリは大怪我をしたさ、その上一生背負わなきゃいけない障害も、投薬による苦しみも味わう事になってしまったさ」

大怪我、負わせた起因。

障害、背負わせてしまった行動の責任。

投薬の苦しみ、守ると誓った筈の自分が見せてしまった油断。

「…全部俺の責任に違いないだろ。そもそもフリーダムを追い返す意味なんてそんなに無いのに、自分の中に生まれたエゴを満たす為

に動いたんだから」

エゴを否定出来ずに、自分の思うままに行動するというだけでも、軍人としての素養を疑うべき事態であり、そんな危ない資質が他国の代表を守る任務の時に発現してしまったのだ。

本来なら軍法会議もの、FAITH剥奪は確実だろうと思っていたのだが、プラントへと通信を入れても受け取る通信官が居ないのか、呼び出し音が短く聞こえるだけで、すぐに切れてしまうのだ。

プラントに何かあったのだろうか…？

「それは違うだろう」

アスランはクロードの言葉を否定する。しかしその意味も意図もわからない、自分のせいであると決め付けているクロードにとっては、否定をまた否定しなければならぬと考えた。

…しかし、目の前の問題だけじゃなく、他の場所へと思考を送ってしまうのが癖になってしまっている。どうにかして修正した方が良さだろう。

「キラがどんな思いでここに現れたかはわからないが、やろうとした事は国家代表の拉致だ。それを食い止める為に動いた結果、フリーダムを倒す事に意識が向く事は間違っではないだろう？」

「…そう考えると簡単に思えるがな、そんな過程なんてどうでも良いんだよ！大事なのは、代表の身に一生付き纏う怪我をさせたっていう結果だろ！？」

アスランの言葉が慰めにしか聞こえなかったクロードは、苦しそうに叫び声に似た悲痛な思いを紡いだ。

完璧に自分が悪くて、それを認めない程に薄情では無いクロードにとって、下手な慰めは増々自分への戒めへと変えていくだけだった。

「…そうだな」

「えっ？」

突然、脈絡を無視してクロードの言葉を肯定するアスランに困惑を憶えた。表情は少しづつ下に傾いていく頭の角度のせいで確認出来ないが、大体の想像が出来て、それが余計に戸惑いを助長していく。

「結果が全て、というなら俺だって同罪なんだ」

くると身体を歩いてきた方向に向けて、アスランは震える両の拳を隠そうともせずに、そして何かに押し潰されそうになっているかのように、笑い続ける膝を鼓舞して無理に立っているかのように映った。

「心配事を放り出してオーブを出て、プラントでは定まらない決意を議長に諭され、漸く想いが固まったのがカガリの結婚が報じられた時だ。

そして一応救い出せたのは良いが、あまりにも大きな傷をオーブにもカガリにも与えてしまった」

空気が止まる心地。あまりにも沈黙が似合う空間に、クロードもアスランも声も、物音すらも発せない雰囲気を感じていた。

それがあまりにも自分を滑稽に映し出しているようで、アスランは溢れてくる嘲笑を禁じれなかった。

「はははっ、考えると過程も結果も散々だな、俺は……」

「…それでも無いさ。確かにプラントへ行った事は褒められた事じゃないけど、大事なものを守る為に帰る決意を持てるのは良い事だろう?」

コアスプレnderの装甲の上から飛び降りたクロード。地面が甲高い金属音を立てて、まるで悲鳴を上げたかのように聞こえてきて、アスランは思わず瞳を逸らしていた。

まるでクロードの心の悲しみを表しているかのようで――。

「その決意が本物だったからこそ、議長はお前にセイバーを託したんだ。《守護者》の名に相応しいお前を」

アーモリーワンからユニウスセブン、そしてオーブでのアスランの戦い方は、守りたいという願望の力が作用して、元々群を抜いていた強さに拍車を掛けたように鋭さを増していた。

その戦いぶり、気迫、そして何より性格を見抜いたからこそ、セイバーは今アスランの愛機となっているのだ。

「だから、お前は自分を責めるな。プラントからここまで帰ってくるのに、たった二日で敢行したお前を責められる奴なんて居ない。勿論、自分自身も」

アスランは振り返る。掛けてくれる言葉の優しさが傷付いた心に染

み入って、涙が溢れそうになってしまう。

しかし、それもすぐに顔を潜める。優しさをくれる当の本人の顔は、今にも先程の医務室前みたいに崩れ落ちそうになっていて、どうしようも施しようが無い。

そう言えば、こいつはカガリ本人がどう思っているかを知らないのだった。彼女の言葉に救われた自分と同じように、クロードも立ち直れるだろうか？

いやー。

「クロード、ちょっと来い」

立ち直れるとかじゃない。こいつは誰かの不幸が、自分の引き起こしたと思われる事態で傷付くのが嫌なのだ。

フリーダムを討とうとする事より、こっちの方がよっぽどエゴだ。

「お、おい。どこへ行こうとしてんだよ！」

腕を掴まれ歩きづらそうに、いや、強制的に歩かされて窮屈そうなクロードの問い掛けに、アスランは振り向く事も、歩みを止める事も無く短く告げた。クロードにとっては、とてつもなく顔を出し辛い場所を。

「医務室だ」

息を呑むのを感じた。抵抗しようとする力が手に伝わってきたが、そんなものは完全に無視を決め込む。力に反比例するかののように、

上がっていくアスランの歩く速度。

（クロード、お前が抱えた卑屈の意味がどんなに意味が無い事か、
思い知らせてやる）

PHASE-29 俺だって同罪なんだ（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

この話はオーブ編から次に移る導入部分のような話で、殆ど話が進んでいません。しかし、こういう部分でこそ、人物の描写に力を入れたいので、もう少し話の速度が落ちる事をご了承下さい。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂ければ嬉しいです。

PHASE-30 皆を信じろ（前書き）

強制的にカガリの元へと連れてこられたクロードは、自分の罪の意識を洗いざらい吐き出す。その告白を受け、カガリが出した答えとは？

そして、メイリンとルナマリアの気持ちが大いに揺れてしまう事態も待っていた。

では、お暇であればお付き合いをお願いします。

PHASE-30 皆を信じろ

心の中では、謝罪をしなければならぬと、アスランと同様に罵倒でも貶める言葉でも甘んじて受け入れなければならぬとわかつてはいる。

しかし簡単に心を決められる程強くも無いし、女性が泣いてしまう姿を見る事は、自分の心が軋みを上げて顔を歪めてしまうだろう。

そして、本当に苦しいのは自分では無い。今からアスランに無理矢理会わせられる、オーブ首長国代表カガリ・ユラ・アスハなのだ。一国のトップの人物だけに、どんな事を言われるかはわからないが、禁固刑でも死刑でも躊躇い無く頷くしか、自分には選択肢は存在しない。

（覚悟を…決めるしかない、よな…）

代表から呼び出しが掛かれば、どちらにしても逃げられないのだ。それに本来ならMSデッキに向かわずに、すぐにでも医務室で頭を下げるなり、地べたに這い付くばるなりして、過ちの誠意を見せなければならぬ筈であった。

その戒めにも似た感じで、アスランに引っ張られながら医務室はもうすぐな場所まで来てしまっていた。

「ア、アスラン、自分で歩くから引っ張るのはそろそろ止めてくれ！」

抗議に近い響きを含んだクロードの声が、夜の誰も居ない、電灯によって照らされた廊下に否が応にも響いた。

「……………」

しかし、聞こえている筈のアスランは手を離そうとはしない。歩く速さもいつものクロードのペースとは明らかに異なり、いつ足を縛れるかとある意味場違いな恐さも味わいつつ、危なげな足取りでバランスを保ちながら、漸く医務室前へと到達したのだった。

アスランがパネルで呼び出しを行う。中からの応答はクロードに聞こえていないが、どうやら入室許可が下りたようで、開閉用のボタンを押せば、薬品の臭いに満ちた空気が廊下へと流れ出した。

「…何をやってる？早く中へ入れよ」

腕から手を離し先に医務室へと入り、振り向く事なくアスランは言う。やはりこちらの事はどこまでもお見通しのようだ。

「……………」

足が竦んでしまう。いや、それだけじゃない。膝はがくがくと震え始めるし、厭な脂汗は止めどなく流れ続ける。

軍人なのだから、多少の文句もお叱りの言葉にも慣れていて、平然と聞き流せるぐらいの度量は必要になる訳だが、そんな裁量が今の自分には許されている筈も無い。

この事態を招いたのは間違いなく自分で。今日だけで何回繰り返した問答かも忘れてしまう程に、反芻し続けるあの光景とあの時の気

持ち。

申し訳無いのは当たり前、裁かれるのが必然。でも、それでも怖いのだ。

「まさか《恐い》なんて、言うつもりは無いよな？」

言外に罪から背を向け、咎を投げ出そうとするな！と含まれているように受け取り、いよいよ小さな覚悟を持った。

と言っても、代表の叱責や涙を見てしまえば、脆くも崩れ去るのが目に見えている、馬鹿げた覚悟だが。

廊下より明るく感じる部屋へと一步踏み入る。多分壁が白で統一されているからだろう。今更にながらに気付いたのは、自分の心の色がこの部屋とは真逆に位置するもので染まり、後ろ向きな気持ちを溢れさせているせいであろう。

「お、漸くお帰りか！ 姫様が寂しがってだぞ」

机で何かしらの資料を纏めていたのを中断し、椅子を回転させてアスランを確認した後、口から紡いだのが、この失礼極まり無いラルスのこの言葉。

アーモリーワンの件が頭にあるクロードにとって、代表を姫と呼ぶ事は禁忌にも似た響きである気がしていたのだが、それはあまりにも杞憂で、まるで躍らされたピエロのようだった。

「ラルス、お前――」

「医師！からかうのは止めてくれ！」

聞こえてきたのは、確かに代表が上げる非難の声。しかし声の響きに決定的に掛けているものがあつた。

それは真剣さ。

議長へと向けた非難の言葉が持つ力は、他者への拒否を顕著に表現していた。だが今の代表の言葉は間違ひなく違ひ、と断言出来る程の自信が自分の中にあつた。

本当に照れたような口調、ラルスに向ける頬を赤らめて口を尖らせた拗ねた表情。いつもは封印している筈の、素の女の子としての顔がこれなのだと言ひてもわかる程だ。

「医師、あまり面白がつてからかわない方が良いでしょう？こう見えても、カガリは国家の代表なんですから」

ラルスの言葉に乗るアスランの顔には、穏やかな笑顔があり、それは見るからに幸せを感じさせてくれるものだった。

大事な人が傷付き、それを起こした張本人が居るといふのにどうしてなのか？

「クロード？何で入口に突っ立ってるんだ？早く中に入れよ、冷たい空気は姫様の身体には毒なんだぞ」

ラルスの忠告に慌てて中へと、カガリからも見える位置に移動すると、先程までの和んだ空気が一気に萎んでいくのがわかつた。

やはり俺はこの場を乱す闖入者であり、邪魔者でしか無い訳である。

「クロード特務兵」

自分と呼ぶラルスより一階音高い声が耳を、いや、脳全体を打つ。
堪えねばならない試練の時であり、その後にどんな審判が下されるかはわからないが、せめて真っ直ぐに向き合おうと顔を上げた時、クロードの顔は戸惑いと驚きに満ちていた。

「今回の護衛ご苦労だった。こうしてここに居れるのは、あなたの存在無くしてはなかったと思う」

見えたのは笑み。眩しいくらいに輝き、心を掻き乱す程の、覚悟を見事に消え去らせてしまう程の光を放つ、ベッドから上半身だけ起こした姿だった。

「えっ！！いや、そんな理由…私は代表の御身を気遣う事を忘れてフリーダムに――」

「あの時、フリーダムに攫われていたら、フェンリルはもっと好き勝手に暴れていただろう。オーブが減んでいたかもしれない事態を、私の下半身だけで食い止められたのだから、これ以上の贅沢は言えないさ」

代表の国を思う心が伝わってくる。ウズミ・ナラもこんな為政者だったとしたら、国を捨てた自分は何と愚かだったのか。

しかしいくら立派な考えであろうとも、何かしらを犠牲にした平和、しかも障害と一生付き合っていかなければならない身体となったのだ。悲しく無い訳があるまい。

「しかし！私がいまだ遠くに行かず、フリーダムを牽制するだけに留めているか、インパルスを残しておけば代表の盾となれた筈です！……この判断ミスは咎められるべきかと」

裁かれない事に納得出来ないのだ。言葉では矛盾しているような響きを感じるが、心からそう思っているのだから仕方ない。

そう、要するに辛いのだ。罵りなんかより、優しい言葉を掛けてくる代表のソプラノが妙に痛々しい。心中にある罪の意識が包み込まれて、凝り固まった感覚を解かしていくような、日溜まりで身体を休めているような不思議な感じ。

しかし、それに甘えてしまう訳にはいかない。こんな事で消えてしまふ程犯した罪の重さは小さくないし、自分自身でも無くしてはいけない思いであると考えるのだ。

代表の優しげな表情の後ろに見えている、彼女を慕う仲間達やオーブの国民の姿が、幻想である事を自覚しているのに、厳しい顔と鋭く睨め付ける瞳が浮かんでいるように見えてしまう。

それが語りかけてくるのは、彼女の不幸が自分のせいである事と、そしてそんなお前を赦さないという、被害者を良く知る者が抱くであろう当然の思い。

それを意識する事で、クロードは日溜まりを捨てて、暗い暗い血塗れの一本道を辿るべきなのだと沈んでいく。

――不断の闇へと身を捧げる深淵へと。

「何を言ってるんだ？私がフェンリルに撃たれたのは、私自身の判断ミスのせいだろうか？」

どんと引き擦り込まれるように、心の闇へと飲まれていく意識の中で、不思議そうな顔を見せる代表の表情に、戸惑いを憶えられる感覚が残っている事に驚いた。

感覚も表情変化も自分自身で確認出来やしないが、先程までの確実な無表情が潜んだのは、わかり辛い感覚の中でも掴めた。

そして素面の顔に張り付いたのは、心を表す困惑の表情。

「あの時、私がすぐに避難していたとしたら、こんな風にベッドに座ってはいなかった」

「それは違う！避難していたとしても、フェンリルはどこまでも追いつけていた筈です！あの口上からも、すぐにそう判断出来るじゃないですか！？」

魔狼が狙っていたのは、明らかにオーブのこれからを担うであろう人物。その中にユウナが含まれていたのは甚だ疑問ではあるが、概ね間違いは無い筈だ。

そして、あのMSが放つ執念は凄まじいものだ。パイロットが冷静な判断を下していなければ、今頃牢の中に拘留された、何故か聞き覚えのある声を持つ者が居ただろう。

そう考えると、フェンリルが判断を誤った場合、こちらの拘束力が弱かったならユウナを殺害した後、他の若い閣僚級、主要な建物や閑静な住宅街等を破壊して回っていた筈だ。

相手がミラージュコロイドで姿を隠していたにせよ、危険極まりない存在に気付かずに、小高く造られたチャペルに一人残すなんて冒涇を働いてしまったのだから、十分に代表が自分を裁く権利を持っているのだ。

「私はフリーダムを――キラを信じている。だからどんな真意で私の元に來たかを知る為に、あそこに居なきゃいけないと思った。：確かにフェンリルが何を狙って來たかは、ユウナが襲われた事によって判断出来るが、それは結果論に過ぎないだろ？あの時のあなたはとにかく突然乱入したフリーダムを、護衛対象である私から遠ざけようとしただけだ」

結果論という言葉が響く。先程までアスランと話していた時に自分も考えていた言葉が。

先程までの自分は結果論というと、代表が怪我をして一生ものの障害を負った事に帰由していた。しかし、代表の考え方は一つの事象を何個かにわけて考えていた。そう考えてみると、ユウナが襲われるまでフェンリルがオーブに身を潜めていた理由は想像出来ない。

だが、フリーダムの件はそんなに綺麗な理由ではない。ただ自分の満たされない心が、いつまでも絶大な強さを誇れる存在に嫉妬したとでも言うか、倒して努力の強さを証明したかったのだと、今冷静に分析してみるとそう内心が語り掛けていた。

そんな大きなエゴを抱えている自分が護衛を勤めてしまった事が、こんな結末を招いてしまったとしか考えられないのだ。

「……いえ。フリーダムを追い掛けたのは、そんな高尚な理由では

ありません。俺は小さな自尊心を満たしたかっただけなんです。そんな事の為に国家を代表する者を危険に曝した。……赦されるものではありません……」

「……………」

四人の間に沈黙が流れる。緊張の糸が張り巡らされているかのよう
に、誰一人動こうとはしない。唯一動き続けている時計の針の音だ
けが響き、この空間の静寂さを如実に表していた。

「下らないな」

「……………はい？」

ラルスの口から飛び出した突然の貶す言葉。その意味する所を少しも理解出来ないクロードから漏れた素っ頓狂な声が、他の二人にもラルスの意図する思惑を伝えていき、

「全くだ。下らないぞ」

「良い加減に気付いた方がいいぞ、クロード」

なんて口々に周りから言われてしまえば、心の深淵に引き擦り込まれている精神が馬鹿をみているとしか思えなくなり、無だった顔にも色が戻ってきた。困惑というない混ぜの色調ではあるが。

「ちょっと待ってくれ。俺が要らない自尊心を持った事が、こんな結末を招いたってわかってくれてる…よな？」

「わかってるよ。変な風に考え混むお前の癖も、責任感の強さから

くる罪悪感の大きさも。

だけどな、人は誰でもその場で最高の対応が出来るようにできてはいない。誰しも過ちを繰り返して成長していく。それはわかってるな？」

コクリと頷く、先程より困惑の色を強めたクロード。ラルスが言いたい事の意図をまだ掴めていないのだから仕方は無いのだが、余程自分に向けられる意思には鈍感なのだろう、とカガリは今にも？マークを頭の上に飛ばしそうなクロードの表情を見てそう考え、少し吹き出していた。

「今回はそれが重なっただけ。そして色々な因果が絡まってしまい、お前の精神は病んで、姫様の身体は傷付いた。それ以上でもそれ以下でもない。責任なんて追求する必要なんて、どこにも無いのだ」

「だけど――」

「私の怪我を心配してくれるのは嬉しいが、責任を感じて病まれてしまつては、今度は私が重い気分になってしまう」

代表の言葉により、更に加速していく困惑。理解しようとしても話の根底からにっちもさっちもいかない状態なのだから、頭の中が思考の残滓で混沌としてしまっている。

「お前の身近な人を守り抜けなかった悔しさはわかるが、それ後に塞ぎ込む事は周りの人達に迷惑をかける、と少しは理解するべきだぞ？」

アスランの言葉も、今のクロードには意味不明だった。冷静でない事も災いしてはいるが、それ以上に三人の心が一つになっているよ

うな気がして、どうにも疎外を感じてしまっている事も、脳内を掻き乱している原因なのかもしれない。

「とにかく、私達が言いたい事は」

凝り固まった思考に投入された色々な言葉。深く考えるにも、容量を軽く罪の意識に支配されてしまっているのだからどうしようもない。そんな様子を晒すクロードを無視して、トーンを落ち着けたラルスは瞳を真っ直ぐに見詰め、決定的な言葉を紡いだのだ。

「お前は望まれてここに居るという事だ。誰もお前に罪を負って欲しく無いし、それ以上にお前が居なくては皆が悲しむ」

「あたしが護衛を頼んだのだって、あなたなら何かあった時にどうにかしてくれると思えたからだぞ？ 必要であるからこそ、あなたは生きているんだ」

「お前とは結構な付き合いになるが、知り合えて、そして話せて良かったと思ってる。俺にとってもお前は必要な存在なんだよ」

次々と掛けられるクロードの心を解きほぐし、深淵の闇を打ち払い、光を見せてくれる言葉達は、瞳を潤ませるには十分な威力を持っていた。

先程も医務室前で泣き腫らした瞳を、また張れぼったくしてしまうのは憚れるのだが、心の隙間に優しく滑り込む三人の気持ちを受けてしまえば、そんな悠長な事なんて言ってもいらなかった。

「うっ…くっ…」

結局、立っている気力なんて無くなってしまい、膝を折って肘を床について腕に顔を埋めてしまった。泣き顔を見られたくないというのもあるだろうが、剃れ以上に身体が言う事を聞いてくれないのだ。追い詰めていた心の反動とでも言うべきか、無理矢理にこちらに呼んでしまい、恨まれても仕方ないと思っていたラルスから貰った必要という優しさ。

あんなに面会を畏れて、護衛に失敗した筈の代表から掛けられた必要という価値。

大切な人を傷付けられ、本来なら自分を嫌悪してもおかしくないのだが、変わらずに友として接してくれるアスランの必要という言葉。全てが嬉しくて、思いがこそばゆくて、クロードの心を大いに満たしていく。

隙間を埋めてたのは赦してくれてた、という軽々しい気持ちではない。必要だと本人の口から紡がれ、トーンに偽りの音が一切含まれていない事が心の闇を打ち払う魔法となって、いきなり光で目が眩んだ自分を導いてくれた事が、とにかくクロードの全てを軽くしてくれたのだ。

暫くの後、流す涙も涸れ果てたクロードが顔を上げ、膝をしっかりと立ててカガリを真っ直ぐに澱み無く見詰める。

その瞳には罪悪感からくる自虐ではなく、責任感からくる決意の光が宿っていた。

「今回は本当に《ありがとうございます》」

深々と頭を下げるクロードを見て、カガリは両手を振って困惑を表して頭を上げるように促すが、中々止めようとしないのを確認して、助けを求めるような眼差しをアスランへと送る。

しかし、アスランは首を振って肩を竦めるだけ。こうなったらお手上げという事らしい。

確かに礼節を重んじる事は大切ではあるが、相手が困惑するようなやり方は、社会性に欠ける事をアピールする事になるのだが、先程までの彼を思い浮かべると、この行動も仕方ない事に思えてしまうのだから不思議である。

しかし、このままでは居心地が至極悪い。今度救いを求める瞳をラルスに向けると、彼女は厭らしい笑顔を浮かべて頷いた事に、カガリの背筋に戦慄が走ったのは言うまでも無かろう。

「なあ、いい加減に頭を上げたらどうだ？ 律儀な事は良いが、迷惑をかけるのは筋違いだと思わないか？」

多分、これが最後通告のようなものなのだろう。歩み寄っていくラルスが掛けた言葉は、凄みとかそんなんじゃないくて、機械的な響きに聞こえていた。

「：いや、こんなに良くして貰っておいて、おめおめと頭を上げる事なんて出来な――」

ラルスが至近距離で見下ろすように立ち止まる。クロードの言葉が途切れる。カガリの思考が固まる。ついでにアスランの脳内も混沌としていた。

ラルスは顔を両の手で掴んだかと思うと、そのまま自分の右腕を首筋に巻き付けて、頭を胸へと包み込んだのだ。

「…全く。大概不幸なのもここまでくると病気だな」

「ちよっ、ラルス！何考えて、んだよ！」

目の前の柔らかい感触に不覚にもどきまぎしながら、苦しげに声を上げる。

抗議の声ではあったが、如何せん顔の大部分が胸へと埋められてしまい、上手く喋れないのが影響してしまい、あまり強く非難出来てはいなかった。…それにクロードだって男な訳だ。感触を味わい続けたいとも、奥底の下心が思ってしまったのかもしれない。

「少しは周りに背負った荷物を預けてみたらどうだ？

何もかもを自分自身で解決しようと、周りの人間に迷惑を掛けまいとするのは立派な事かもしれない。だが、お前を見て信頼されてない、考える者だっているかもしれないじゃないか」

「……………」

上から降ってくる声が光の中に痛みを生じさせる。FAITHという立場に就いてからの自分は、確かに周りに気を配る事はするが、周りを活かそうとはしていなかった気がした。

第一に、自分で処理した方が早く仕上がるであろうと考えていた場合。

第二に、周りの人間に自由な時間を作ってやりたかった事。

意識的にやっていた訳ではないが、上に立つ者が下の者をこき使う様を、クロードは特務兵となって実態の酷さを垣間見たのだった。

本人でなきゃ出来ないような、例えば申請の内容を確認し認印を押す作業なんかも、適当に下の者にやらせている輩だって存在する。

クロードはそんな風になりたくなくて、出来る仕事の殆どを自分で片付けるようにしていた。書類への捺印は勿論の事、搬入の手伝いや、報告書作成に関する手伝い、始末書ものの行動への注意と書類作成の補佐等々。

本来ならそこまでしなくても良いと思われる箇所にまで気を回して、下の者の負担を軽くしていた。

しかし、それも只のエゴであるというラルスは言う。

「直属の上司に仕事を任せられない悲しみは、結構堪えるもんだぞ？お前がどんな考えでこうしているかわからないが、相手が迷惑になる程の行き過ぎた行動は止めるべきだ。下手をしたら、お前を慕う者ですら愛想を尽かす事になる」

「…そうだな。ラルス、お前の言う通りだ…」

優しい胸の中、強張っていた心が解けていくのが自覚出来た。それ程にラルスの存在は自分の中で大きくて、確かな情を抱いている事もわかっていた。

だからこそこの状態はこそばゆくて、それでいて安らいでいられるのだ。

「大変です！クロードさ——」

突然、しかも前触れもなく部屋に飛び込んできたメイリンは、言葉を途中でぶつ切ってわなわなと震える瞳と、口を覆い隠すように手を翳し、少しづつ後ろへ退いていく仕種がクロードの視界に映っていた。

そして、今の状況はマズイと悟る。勘違いをされるパターンである
と、脳の中が理解しているが、あまりの闖入に身体が中々復活を果
してくれない。

しかも悪い事は連鎖するとは良く言ったものだ。メイリンの後ろか
らひよこつと現れたのは、同じ色の髪を持つ赤服を纏った少女。

「どうしたのよ、メイリン。クロード居たの——!？」

瞳を睨いて、メイリンと同じ体勢に移るルナマリア。流石は姉妹と
感心している場合では無いとわかつてはいるが、既に取り返しので
かない展開に突入してしまっているのがわかって、半分諦めムード
だった。

しかし、ずっとこのままでは余計に話が拗れるのは目に見えている
ので、クロードは取り敢えずラルスの抱擁から抜け出したのだが。

「な、なな、何やってるんですか!？」

驚愕を表す体勢から立ち直ったと思えば、今度はこちらに詰め寄り
つつ叫ぶような声を上げたルナマリア。その表情は怒っているよう
に見えるが…。

「ここはそんな淫らな行為をする場所じゃないでしょ！仮にも隊長、しかも FAITHのあなたがこんな――」

やはり完璧に勘違いされてしまっている。どう見ればラルスと俺がそんな関係に映るというのだろうか？

何故か今はその事が一番気になってしまって、ルナマリアの声がどんどんと遠ざかっていく。目の前で眉を吊り上げている表情も、いつの間にかぼやけてしまっていた。

「聞いてるんですか！！？」

「うおっ！」

目の前一杯に広がるルナマリアの顔。部品の一つ一つが鮮明に浮かび上がり、やはり綺麗な顔立ちだなと場違いな事を考えていた。そうでもないかと、顔面に身体中の血液が集中する事になっていただろう。

「とにかく！今後艦内でいちゃいちゃするのは禁止よ！いいわね？」

こんなに怒る意味もわからないクロードの中には、この強気な態度を崩してみたいというサド心がむくりと顔を出していて、頭の中に思わず屁理屈がどんどんと溢れていく。

「へえー。そうなるとシンとステラの仲も裂かなきゃいけないよね？」

「あれは別でしょ！？ステラにはシンが必要で、シンも昔が嘘のようになんか幸せそうにしてるんだから」

「じゃあ、不公平じゃないか？ステラの治療に人の慈しむ気持ちが必要だとしても、他のクルーの恋愛事情に踏み込んで、愛の語らいを禁止するんだろ？」

「……そ、そこまではしないわよ……。人の目に付かない所で何をしようとも、見えないなら関係無いんだから」

「だったら無理じゃないか。」

考えてみろ、艦内の秩序が乱れるからとルナマリアが考えるから、恋人同士がベタベタするのを禁止するんだろ？それなのに陰で許すのだったら、禁止の意味があまり成り立たないぞ」

ルナマリアの吐き出す言葉に、理論的な返しを続けていくクロードの顔には笑みが浮かんでいた。余程からかうのが楽しいのだろうと思えていたが、それも彼が使った何気無い一つの単語で瓦解する事になる。

「……恋人……。やっぱり、そうなんだ……」

「お、おい？」

突然俯いたかと思えば、良く聞こえない声量で何かを呟き、雰囲気陰を落とすルナマリア。

そのあまりの急変を心配になって近付いてみると、バツと振り向いたかと思えば医務室をもの凄い勢いで出ていってしまい、クロードは手を伸ばし呆然とするしかなかった。

「……それでメイリン。何を言いかけたんだ？」

手持ち無沙汰になっていたラルスが、未だ入口で驚愕を浮かべたまま固まっているメイリンへと問い掛ける。

それに反応してメイリンはわなわなと震えるのを止め、また慌て出して早口に告げた。

「…そ、そうだ！大変なんですよ！！プラント宙域に無数の連邦所屬MS反応。偵察用の衛生から送られてきた映像によれば、それらは核ミサイルを積んでいる模様」

「な、なんだと！」

ラルスの行動に絶句していたカガリが漸く声を上げる。開戦を告げる声明も宣告も上げていない今の状態で、物量をもってプラントを滅ぼそうと動く事は、人として踏み外してはいけない道であると思う。

それをいとも簡単にやってのけるのだから、信じられない気持ちで一杯だ。

「くそっ！動き初めてしまったか…」

アスランが悔しそうに壁を叩き付けた。一度諫めた争いが、二年も経たない内にまた始まってしまうのだから、その悔しさは想像出来る程生易しいものではない。

「おい、クロード。いいのか、何もしなくて」

そんな様子を余所に、クロードは誰とも言葉を交わさず医務室を出

ていこうとする。すかさずラルスが呼び止めると、クロードは少しだけ振り向いた。

「オーブに居て、本国を心配しても仕方ないだろう？そんな事をするんだったら、俺は自分の出来る事をしようと思う。それに――」

そして廊下へと出て扉が静かに閉じゆく。完全になるその寸前に落としたクロードの言葉が、彼の内が変わった事の証明だった。

「皆を信じる、と言ったのはラルスだろ？」

振り向いたクロードの顔は、清々しい程に開き直っていた。

PHASE-30 皆を信じろ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回の話はクロードメインとなっていますが、本当なら他の場所の描写もしたかったんです。なのにどんどんと長くなってしまって、結局一話丸々使う事になってしまいました。

うーん、もう少し文を削るべきなのでしょうか？

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-31 歴とした人間よ（前書き）

味わった敗北の味を噛み締めながら、エリミオは拠点へと帰還を果たした。込み上げる思いの強さに、歪んだ心の弱さは堪えてくれない。

また、ユリとの関係にも小さな亀裂が見え始めていた…。

今回は短めです。では、良ければお付き合い下さい。

PHASE-31 歴とした人間よ

「くそっ！くそおっ！！」

狭く暗い空間に苦々しげな悔恨が飮する。機器の光に照らされた顔は、正に声の感情を写し出したような、そして憎しみまでも含んだ鬼のような形相をしていた。

名も無き廃コロニーを拠点としている訳だから、帰還の際にもミラージュコロイドを展開して身を隠さなければならぬ訳だが、今はそれすら歯痒さを加速させる要因にしかなくなっていなかった。

「…くそ…」

激昂が収まり、弱々しく吐き捨てた二文字の言葉が、今の彼がどんな心境かを如実に表しているように思えた。

蒼く、冷たいカラーリングを施されたフリーダム、それがフェンリルだ。MSの性能は全く変わらず、ミラージュコロイドがある分、フェンリルの方が有利に局面を展開する事が出来る筈なのだ。

しかし、エリミオはミラージュコロイドを解除出来ずに、チャペル近くにある森に身を潜めていた。見えない筈なのに。

確実に任務を熟したいというのなら、彼の隠密に徹しようとする態度は大いに賞賛されて然るべきだろう。だがオーブに到着した時、彼の中にあったのは破壊の衝動。結婚を吉兆として騒ぎ立てる、道端の国民を撃ち抜きたい衝動だった。

しかし、それは自重されるべき事柄であると、冷静に判断する思考能力も備えているので、すぐに切り替えて森の中へと移動したのだ。

そして数十分後。待ちに待った獲物が、暢気な速度で走行するリムジンに乗って、しかも上空にラグナロクという葱を背負ってやってきたのだ。エリミオは愉しくて仕方無かった。

一度に仕事と私事を片付ける事が出来、国を混乱に陥れるという任務も、クロード・タクスに恨みをぶつける事も可能なのだから。

リムジンがチャペルの前で止まり、中から薄い青髪の男と金髪の少女が、白の衣装に装飾されて衆目の前に現れた。その姿に感嘆する者、嬉しそうに声を響かせる者、一方で歎きを身体一杯で表す者。

とにかくたくさんの反応があって、エリミオは嗤い声を高らかに上げたい気分になった。

今、一気にこの雰囲気をぶち壊しにしてもいいのだが、もっと良い場面を血に染めてやるのが良いだろうと思案する。

勿論、任務を遂行するタイミングなんて決まっている。式の盛り上がりが最高潮になるであろう、誓いの言葉から一連する口づけへの移り変わりだ。

それまでは疼いて疼いて仕方無い、湧き上がる気持ちを抑える事に意識を集中する事にしたのだが、それは失敗だったと今になって思うのだ。

純白を纏った二人に運命の時が迫る。先に誓いの度合いを試されたのは男の方で、胡散臭い響きの声で宣誓した。さて、残りはオーブ

代表様が男と同じ言葉を宣言するだけ。

しかし、次の瞬間に会場は混沌の坩堝と化し、誰もが逃げ惑う中でカガリ・ユラ・アスハだけが壇上に残されていた。

エリミオの心は表面上悔しさで一杯だったのだが、本当は違う感情がその内を支配していた。

それは戦慄。純粹に強い者と対峙した時に感じる、圧倒的な気配。空から舞い降りる、まるで全てが人と一線を画く存在のように感じてしまうそのMSは、自分が駆る機体と同じ筈なのに、何もかもが違く見える。

そのMSが冠する名は《自由》。正にその通りに空を駆け、また代表を攫おうとするのだから、殺そうとしてここに乗り込んできた自分より性が悪い。

確か代表はフリーダムのパイロットと共に、ヤキンドウエを戦い抜いたと聞いている。そうなれば間違いなく顔見知り、それ所か気の置ける仲間内の可能性だってある。

そんな関係だったら、余計にこんな暴挙に出る事は避けるべきだったと思う。そんな事をしなくても、力があるのだからもっと効率的なやりようがある。

結婚式が気に入らないのであれば、それ事態をぶち壊しにすれば良いのだ。元が無くなれば、それ以上何も続かないのが道理だ。それなのに回りくどい事をして、仲間を傷付ける事にでもなったら目も当てられない。

しかしそこら辺の奴らは、やはり回りくどいやり方しか出来ないのか、助けたい人が傷付いてから行動を起こす事が当たり前でどうにもじれたい。

本当に守りたいのであれば、脅威と成り得るものを全て排除してしまえば良いのだ。勿論、これは人並以上の力を有している事が最低条件であるが。

そして力が無いのならその身を捧げるでも、呈すでもして降り懸かる火の粉を払ってやるのが男というものだ。その結果燃え尽きたとしても、後悔しないのもまた男である証拠であろう。

しかし、そう言った所で今のエリミオは偉そうに出来やしないのだ。同じスペック、いやそれ以上の潜在能力を秘めたMSに乗っていたというのに、フリーダムに完全に気圧されてしまい、結局カガリ・ユラ・アスハ一人だけを仕留めるに成功しただけだったのだから。

「…あの赤い機体…」

任務に支障をきたしたのはフリーダムのせいではなく、突如乱入したガンダムタイプだった。最初は核も積んでいないMSに負ける筈が無い、と高を括っていたのだが、しかし油断していた事を抜きにしても、相手の技量は凄まじかった。

一つ一つの動作に無駄が全く感じられず、その上攻撃を仕掛けてきた時の気迫が半端ではなかった。

均衡状態の時間が嵩張り、ラグナロクともう一機のガンダム、三機に囲まれてしまった。フェンリルに留めを刺されなかったものの、煙幕を張り、ミラージュコロイドを展開して逃げ出すのが精一杯だ

った。

そして今の気持ちに至るのだ。悔しさの中に混じる恐怖にも似た感情。怖い、というよりは凄まじい気迫に圧されたというべきだろう。それをフリーダムに感じたのは自分でも理解しているが、あの赤いガンダムにすら感じてしまったのはどうしてなんだ!?

「くそっ!」

感情の中に少量含まれる、この何ともし難い小さな綻びのような、軋轢のような、自分の中に存在する事が許せないものが、主張するのを何とか押さえ込む事で、エリミオは強がる自分を保っているのだった。

漸く拠点としていた廃コロニーに到達出来た。ミラージュコロイドを中に入れてすぐに解除する。流星に仲間達に帰った事を示さないのは、この基地全体に不安を齎す事になってしまうからだ。

所定の位置に着陸させ、暗く狭いコックピットのハッチを数日振りに開け放つ。気持ち悪い空気が流れ出し、変わりに人口の窒素と酸素、それに二酸化炭素の化合物が鼻から入ってきて、エリミオは大きく深呼吸を一回ついた。

気持ちが落ち着く、訳も無く、いつでも変わらないこの格納庫の空気に苛々とさせられて、コックピットをワイヤーを使わずに飛び降りたエリミオは、整備にやってきたメカニックの胸倉を掴み上げ、数メートル離れた壁へとそのまま叩き付ける。

「くはっ……!」

肺の中に溜め込まれていた、生きる為に必要なものが一気に吐き出される音を聞いたが、エリミオの絶頂に達した悔しさと怒りが、目の前の人間が感じている死への警告は完全に排除されていた。

ただ、満たされたい。苛つきの原因は、この渴ききった心の感情が齎す、ひび割れのような裂傷のせいだ。それを満たすには今、一番に思い浮かぶ悔しさに変わる愉悦で塗り潰すのが一番だ。人の死と、噴き出す血飛沫によって。

掴み上げた衣服がぶちりと音を立て、繊維同士が引き離れていくのがエリミオの手に伝わる。このまま力を加えては、こいつが死ぬ前に胸倉が敗れて、落ちるに留まってしまう。

「たく…、しょうがねえな」

腰のホルスターに収めた、光を放つ程の鋭さを魅せるナイフを右手に構える。そして喉元、完璧に捉えた頸動脈に宛がう。

「血で穢れるけど、洗えばいいだけだしな」

どしゃっと、柔らかさと固さを合わせ持つものが崩れ落ちる音が聞こえた。

しかし、エリミオの心は全く満たされていない。それ所か、余計に悔しさが増す結末に落ち着いてしまっていた。

いつの間にか吹っ飛んで、横の壁に激突して横たわる自分の身体。視線の先で苦しうに咳込み、身体すら起こせないメカニックの前に、この事態を起こしたであろう人物が、屈み込んで介抱しているのが痛む左頬のせいではやけて見える。

その忌ま忌ましい女性は、取り敢えず落ち着いたメカニックに一声掛けてから、こちらに靴音を響かせながら近付いてくる。それは正に鬼のような、いや多分閻魔すら逃げ出したくなるような形相で。

「…エリミオ。あんた何をしようとしていたか、自分でわかってるのよね？」

目の前に立つて見下してくる視線は酷く冷たい。しかしそれに負ける程、心に渦巻く悔しさは弱くない。その視線に挑むかのように、エリミオはキツと意思を乗せた瞳をユリへて向けた。

「煩せえな…。俺が何しようとしてユリさんには関係無いだろ」

「むしろくしゃして人を殺そうとする事が褒められる事だとも思ってるの？ あんたがやろうとした事は人間として、最低な事だよ」

眉を吊り上げ怒りを表すユリではあるが、いつもエリミオは思う。これ説教は自分の為に行っているのだと。

意識が定まった頃、俺は周りのものが自分の思い通りにならない事に苛々を募らせていた。

そして、どうしようもない程にストレスが溜まると、様子を見る為に入室してくる兵士を片っ端から殺す事で、壊れそうな心を繋ぎ止めていた。この事に対してガジルは何も言わなかったし、これが当たり前で良いのだと理解してしまっていた。

しかし、ユリさんが俺の世話に関わるようになってから、考え方を変えざるを得なくなった。

人としてあまりにも外れた行為は痛みを伴う罰を与えてきて、その威力に少し怯んだ俺はユリさんにだけは逆らわない方が良さだろうと、その時確信していた。

そして、そこからの生活は一変する事になった。

ユリさんが世話に付いてから二週間程たった頃、普段入れられていた牢屋のような一室ではなく、窓もあり、宇宙の黒さを覗ける部屋へと移動出来たのだ。扉の辺りに配置されていた見張りも居なくなり、一気に信頼されてきたと気持ちが高ぶってきたのを、今でも憶えている。

自分は必要なのだと、消えてなくなって当然の存在ではないのだと、そう思えてきたからだ。

そして、その功労者であるユリさんはその後も相変わらず俺の世話をしてくれて、あまり行き過ぎた行動は体罰で止められ、その後は長い長い説教が待っていた。

だけど、それが苦に感じた事は無い。ユリさんの言葉の端々に溢れている、温かい感情が浮かんでいるのがわかったから。それは俺が感じた事の無かった、愛情というものであり、隙間だらけの心に染み入る大きなものであった。

しかし、今回の件では釈然としないものがエリミオの中に生まれていた。その小さなしこりのようなものが、逆らうまいとしていたユリへも牙を剥く羽目へと誘われた。

「…最低、ね。だったら、今まで俺がしてきた事を考えれば、俺はこの宇宙で史上最低の人間にでもなるのか？」

「そ、それは…」

組織が命じた任務だとして、人の命を奪ったり、コロニーの動力炉を停止させたりと、人間として褒められたものでない事は火を見るよりも明らかだ。

それなのに、目の前に居る組織の人間を殺そうとするのは咎められる。エリミオにはその違いがいまいち判然としていなかった。生きて動いているものであれば、心の渴きを癒す為に弄んで良いものだとしか、彼の中の意識に植え付けられていた。

「なあ、俺が殺す事によって組織に利益があるんだったら、最低な事をしてでも許されるだろ？こんな役にも立たないメカニックの一人や二人、殺したって支障は——」

ドガンと、身体の痛覚全てが反応するような鋭い蹴撃が、エリミオの腹のど真ん中に突き刺さり、衝撃でまた壁へと背中から叩き付けられる。

先程は味あわせた、今回は味わった肺に溜めた空気全てが抜けていく感覚。それは脳の鈍行に繋がり、痛みによって保っていた意識が少しづつ刈り取られていくのがわかった。

こんな形で気絶したくはなかったが、しょうがないだろうと意識を手放そうとしたのだが、そうは問屋が、いや憤怒のユリが許さなかった。

瞼が落ちていくエリミオの胸倉を掴み上げ、壁へと立て掛けると、今度は左頬に張手が飛んでくる。次こそは確実に意識が飛ぶだろう

と、寝る覚悟をしていたのだが、左頬を襲った痛みは酷く弱々しい。瞑った瞼を開く。目の前のユリはいつの間にか、憤怒の表情を潜めて、目の端に今にも零れ落ちそうな大粒の涙を溜め、それでも眉尻を吊り上げて、こちらを睨み付けている。

「……何が役に立たないメカニックよ、何が殺しても支障はないよ……。自惚れるのもいい加減にしなさい！」

格納庫中に響き渡ったユリの叫びと共に、我慢しきれなくなった雫が流れ落ちる。その様子はエリミオの心を大いに掻き乱す事となった。

「確かに、あんたとメカニックは接点が少ないわ。あんたはフェンリルを降りるとすぐに部屋に引っ込んでじゃうからね。

でもね、皆あんたと同じくらいに辛い思いをして、この世界に失望してここに居るの！恨みの大ききなんて関係ない、あるのはこの人達だって仲間だって事実よ！」

どんと溢れる涙と、ユリの言葉。それが自分の発言のせいだと今更に、そしてこの雫も自分が失望させたせいだと漸くに気が付いた。

「……………」

沈黙が落ちる。当然気まずい雰囲気の流れるが、悔しさそして殴られた事を鑑みると、どうしてもユリの涙に共感が持てなかった。

「…離せよ」

嗚咽を嚙み殺していたユリの耳に届いた言葉は、謝罪でも反省でもない。冷たく突き放してくる、普段のエリミオが使う口調で紡がれたあまりにショックなものであった。

しかし、ここで引き下がる訳にもいかない。軋みと痛みを訴える内側を叱咤し、目の前で冷めた瞳を見せ付けるエリミオに睨みを利かせる。

「…エリミオ！ ちょっとは反省し——」

「離せっってんだろ！！」

胸倉を掴んでいた左手に電撃のような痛みが走る。静電気とかそんな軽いものではない。まるで漏れた高圧電流に不意に触ってしまったような、それ程の痛み。

エリミオからすれば、邪魔をする手を払い除けただけに過ぎないのだろうが、ユリの心が上げる悲鳴はそんな何気ない行動にも軽く影響を受けてしまい、効果は何倍にも増していた。

「エリミオ…？」

「いい加減うぜえんだよ！ 母親面して、お節介ばかり焼いて！ 俺は一人でも平気なんだ、ちよろちよろと周りを付き纏うんじゃねえ！
！」

吐き捨てた言葉を残し、エリミオは自室へて向かうべく、廊下を肩をいからせながら歩いていく。

そして残されたユリは、力の入らない膝に任せて格納庫の冷たい床

にへたり込む。下から伝わってくる冷たさが、今のユリが感じている気持ちと同調しているような気がして、先程まで我慢出来ていた涙がボロボロと流れ始めてしまった。

「ごめん…な、さい…。ご…めんなさ、い…エリミオ…」

嗚咽が止まる事を知らない。とめどなく溢れてくる涙が、ユリの深い悲しみを表している、そんな光景に見える。

「飼い犬に噛まれた、か」

突如上から降ってきた恨みに満ちた声に、身体が勝手に反応してしまふ。へたり込んだまま首を擡げると、そこに居たのは冷たい瞳をした指令様で。

「…犬ではありません。彼は歴とした人間です」

その吐き捨てるような言葉にあった、本当に気に入らない部分を否定してやる。未だに膝が言う事を聞かないが、立ち上がって非難の瞳を投げるより、効果的な気がしなくもなかった。

「情が移るのはわかるが、あまり思い入れ過ぎない方が良い。いざという時に足枷と成り兼ねん」

冷たい口調に温情の欠片もない物言い。これこそがこの組織を束ねるリーダー、ガジルの本来の姿だ。エリミオがオーブへと出立する前に見せたあの気味の悪い笑顔は、やはりあの国に何かがあれば現れるであろう、フリーダムを討つ事だけを期待した表れなのだろう。

しかし、この言葉に同意する訳にはいかない。

ユリが《あの子》に構うのは、贖罪であり愛情であるのだ。不幸という気持ちしか知らなかった彼に、温かい優しさや強さを教えてあげたいのだ。

「：良くそんな事が言えますよね。エリミオが居なければ、私達の野望なんて一つも進展なんかしてないというのに」

彼を拾って、ここまで強く育てあげたのは他ならぬガジルだ。しかしその育て方が異常だったせいも、相手を倒すという事には長けているが、心がそれに反比例するように見る影もなく弱くなってしまっていた。

まあ、生い立ちやここまでの道程を鑑みれば、仕方ない事のように見えてはしまうのだが。

「その点に関しては感謝してもしきれない。だが、あいつには今回の件で失望させられたよ」

「えっ？ 失望？ オーブ代表のカガリ・ユラ・アスハを討ったって聞きました、それ自体に問題なんか無いと思いますけど」

エリミオの報告書にもその旨は書かれていたし、国家を代表するものが殺害されたとあれば、オーブと言えど中立を謳って等居られなくなる筈だ。

そうなればこの世界は我々が望んだ愚かな争いへと、本格的に突入するのだから、思惑と違う箇所なんて一つもないのだが。

「私が命じたのは、《要人の始末》だった筈だ。あんな小娘一人倒

れた所で何の足しにもならん」

そう表情を変えずに言うと、ガジルは振り向いて自室がある廊下へと歩いていく。一言だけ残して。

「《血肉を食る商人》達を引きずり出すのには、もっと重要な人物を消して貰わなくてはいけなかったんだがね」

さも失望したように、横顔だけをこちらに見せて、大きな溜息を吐き出したガジルは、今度こそ自室への廊下を辿り行ってしまった。

言葉に含まれたその感情を読み取ってしまったユリは、近くの壁に横向きで寄り掛かる。流れ出す自分への失望と、エリミオへの情。どうしたって止められないこの気持ち、どうやって抑えろというのだろうか？

せめて彼にしてあげられる事と言えば、歪んだ性格の修正と愛情を注ぐくらいだ。

ユリの頬を雫が濡らす。殴った右手と、蹴りを見舞った右足、そして行動を引き起こしてしまった自分の心が痛い。

「ごめんなさい……」

この一言には彼女の感情がどれ程籠められているのだろう。重く切ない響きが、フェンリルの整備する音に弱々しく掻き消され、それでも確かな思いを乗せて空を舞ったのだった。

PHASE-31 歴とした人間よ（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

話があちらこちらに飛んで解り辛いかもしれません…。申し訳ありません。しかし、敵として現れている役にもちゃんとライトを当ててやりたい、というのもありまして、今回の話はこういう形になりました。

では、お疲れ様でした。次回もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-32 手伝いにきたぜ! (前書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした。今日から通常通りに更新致しますので、よろしければお付き合いです。

PHASE-32 手伝いにきたぜ！

プラントコロニー群が点在する宙域から大分離れた、星の煌めき以外には何も存在しない宇宙の片隅。今、そこは地獄のような様子を呈する戦場と化していた。

「うおおおおおっ！」

ガナーザク・ファントムが放つ光線が敵MSのコックピット横を貫く。エネルギーの奔流が全てを飲み込むのを避ける為、この戦場でMSを駆る全てのザフト兵は神経を擦り減らしていた。

とにかく爆散だけは避けねばならない。それが出撃してすぐに入った、イザークの全機へ通達された事項であった。

爆散させるという事は、同時に核を巻き込む事になる。

しかも大西洋連邦のMS達は一個大隊を組んでこちらへ向かっているのだ、一機が爆散するだけでも、周りの全てを巻き込んでこちら一体を数十年、いや、数百年は通る事すら儘ならない汚染宙域と化するのには目に見えていた。

「くっ……。これは精神的に辛いねえ……」

大戦を生き延びたディアッカですら、ここまで精神力が必要な戦場等体験した事もなかった。核という脅威を思い知らされたプラントが、核兵器を使用しないのは当然だし、地球連合にも再びの使用を許さない為にも、ニュートロンジャマーを散布したのだから当然ではある。

現在、核を超える汚染兵器は無い。それを鑑みれば当然ではあるが、これ程の核兵器を所有している連合は外道で下衆で、今後を何も考えていない馬鹿の集まりなんだろうと、ディアッカは思うのだった。

『弱音を吐いてる場合じゃないでしょ！こいつらを通す訳にはいかない、のよっ！』

鳳仙花がワンポイントが印象的なスラッシュザク・ウォーリアが、ウィザードを振り翳して敵MSのバーニア部分を器用に斬り落として動きを止め、コックピットを拳で潰す。絶妙な力加減が出来ている証拠に、バチバチとショートした火花は散るものの、機体そのものが爆発する事は無い。

この一年とちよつとで、シホは本当に成長したと感心する。

最初の内は、ザフト・レッドとしては物足りないという感想を抱かざるを得なかった。連携に入るタイミングを見謝る事も多々あったし、何より格闘方面の能力がどうしても低かった。

その事にいつも悩んでいたシホであったが、ある日それを吹っ切る出来事が起きた。

それは宇宙での三度目の演習の時、敵役を引き受けたディアッカの格闘に格闘で抗ったシホであったが、やはり少し振り回されただけで容易に隙を見せてしまう。

ここで一度落とすのも経験か、とディアッカが思い始めたその時、スピーカーを大いに震わす音量でシホへの叱咤が飛んだのだった。

《脇が甘い！敵の動きを良く見ろ！お前の力はそんなものか！これ以上、俺を失望させるんじゃない！》

失望があるということは、期待がある事が前提だ。これまでの演習では、少々ぶっきら棒な優しさで慰めてくれていたイザークからの檄。

その期待に応えたい、それには目の前の事象を片付けるのが一番だ。動きの固かったシホに変化が起きた。

それまでどこかなかった動きがディアッカですら目を瞠く程の進展を見せ、メインカメラを狙った拳をひらりと躲し、その拳に合わせたカウンターがこちらのメインカメラを逆に捉えたのだった。

多分無我夢中だったのだろう。その一撃を見舞ってすぐ、シホが操るMSはぴくりとも動かなくなり、急いで回収すると共にボルテールへと帰還してコックピットを開けると、気絶したノーマルスーツ姿の肢体を晒していた。

そんな事があったのを知っているディアッカにとって、今日の前で爆散させられない敵を的確に刈り取るシホの姿は、成長を見守る上官として物凄く嬉しいものであった。

『何をぼおっとしている！さっさと援護せんか！』

聞き慣れた不機嫌な声が気持ちの切替を促す。確かにどれ一つ取りこぼす事もないこの戦場では、一秒も無駄にしてはいけけないのだと脳内に叩き込む。

「悪い、いますぐ援護するよ」

ガナーウィザードを構え、水色のザク・ファントムが暴れる方向へ

と一筋の光線が、敵のMS群を切り裂くように走り抜ける。

それはどれにも着弾する事なくエネルギーの道筋を描いただけだったが、それがディアツカの思惑だった。

回避行動の後、方向を変える為のスラスターが働いている状態では咄嗟の行動変更は至難の技だ。増してや、ナチュラルの操縦捌きではそんな事をやってのける奴等居る筈も無い。

隙を見逃さずに、先程と同じようなコックピット横を掠めるように、装甲が剥がれるくらいの損傷を与える。そうすればあら不思議、コックピット内に存在する気圧のせいで、装甲を突き破ってパイロットが外に飛び出すのだ。

こうすれば間違いなく核を無効に出来る。しかし、これには相当な射撃精度を必要とし、撃ち抜く場所を少しでもずらされてしまえば、そこら中が核の爆発に巻き込まれる事は必至な訳だが、ディアツカにはやってのける自信があった。

格闘とスラッシュウィザードで敵を無力化する、シホとイザークの存在。それが何より彼の中に安心感を与えてくれている。二人が居れば、射撃に集中出来ると全幅の信頼を抱いているのだ。

「ほら、まだまだいくよ!」

銃爪を引く度に動きを止めていくダガーの集団。切り裂かれて沈黙するものも、ライフルによってバーニアとスラスターを破壊されるものもあり、着実に行動不能へと追い込めているのだが、如何せん数が多過ぎて、一向に終わりが見えてこない。

切り裂いても、撃ち抜いても、コックピットを潰しても、次々と出現するダガーに辟易とさせられる頻度が高まってきた頃、それは起きた。

『しまー』

他の隊に所属するザク・ファントムが、擦り減らした精神の隙を突かれ、二筋の光線に貫かれて爆散する。

今まで出撃した全機が揃っていたからこそ、保たれていた均衡が一気に崩壊する音が聞こえた気がした。

取り囲むように突破を許さない布陣を組んでいたのだが、一機分開いた穴がこれ程の大きさだとは思わなかった。その連携の隙間を狙い、全速力で突破を試みるダガー達。

こうなってしまうえば、核を爆発させないように戦うなんていうやり方では食い止められない。多少の汚染を覚悟で、片っ端から落としていくしかないだろうと全機に通達しようとした時。

摺り抜けようとしたダガーの集団が、正確にコックピットだけを撃ち抜かれ、それでも爆散する事なく次々と沈黙していく。撃ち零しも多少あり、突破したダガー数機がプラントコロニーへの航路を辿ろうとしたのだろうが、今度は数瞬の内に切り裂かれて真っ二つになる。それでも爆発しないのだから、敵のMSの構造すら知っているとって良いだろう。

これ程の腕を持つ者は、幾らコーディネイターの軍であるザフトであろうとも、そうは存在しない。そしてイザークは、ダガーの残骸を抜けてくるザク・ファントムの色を見て、推測が確信へと変わった。

た。

あのどんな場面でも主張の強い性格を表した、オレンジ色のカラーリングが全てを物語っていた。しかし、同時に疑問も生まれる。

奴は確か、動力をやられたコロニーの護衛をしていた筈だ。通信で詰まらないとぼやきを聞いたのも憶えているし、その時の渋そうな顔もしっかり記憶の中にある。

それが何故ここに居るといふのだ？

『よう、イザーク。手伝いに来たぜ！』

前画面に映しだされたのはやはり、特務隊 F A I T H 所属、軽薄な物言いとは裏腹に思慮深く、決めた事は何がなんでも貫こうとする頑固者、ハイネ・ヴェステンフルスだった。

『なっ！？お前、いつこっちに来たんだ？』

驚きを隠せないイザークと不適な笑みを引っ込めないハイネ。対比されて双方の感情が、より濃く浮き彫りになっているというのに、この二人はそんな事は関係無いと言いたげに、ダガーを爆散させずにどんだん落としていく。

『つい数時間前に議長から連絡があつてな、出来ればここに向かつて欲しいと言われちゃったんだ、来ない訳にも行かないだろう？』

『…議長がお前を頼ったのはわかった。で、率いてる本隊はどうした？こんな状況だ、戦力は幾らあっても足りないんだが』

突破を試みたダガーを落とす、穴になっていた先程落とされた者が守っていた陣の一角に就いたハイネは、たった一機でこちらに来たのだ。

戦局は確かに変わらずに済んだが、一向に楽になる気配は存在しない。少しでも補強が出来れば良いと思つての発言だったのだが。

『本隊は置いてきた。警護の手を抜く訳にもいかないしな。それに議長には何かお考えがあるようだし、多少の時間を稼げれば良い』

意味深な笑みがハイネの口元に浮かんでいて、反対にイザークの眉間には皺が寄っていた。勿論、その笑みの真意が計れ無い事に対する苛立ちの現れだ。

『考え：だと？お前、何を知っている？』

ハイネは特務隊所属な訳なのだから、議長が何を考え、何をなさろうとしているかを把握出来るのは当然ではあるが、隊長格である自分が何も知らずに部下を動かし、無駄に命を散らさせてしまう事は多々ある事で、それを防ぐ手立てを用意している事を知っていれば、先程散った彼も救えたのかもしれないと思うとかなりやる瀬ない。

そんな心境が顔面に反映されていたのか、ハイネはいつも浮かべる薄い笑みを引っ込めて、真剣な瞳を見せていた。

『…あんまり気落ちするな。確かにお前達が知らなくて、俺達が知っている事は少なく無い。だからと言って、戦場では同じ命、同じ価値のある戦力なんだよ』

ハイネの見解はかなりの外れではあったが、その逸れ具合が却って

イザークの凝った思考を柔らかくしてくれた。

それに上の者が隠し事をしたがるのは今に始まった事でも無いし、知って身動きが取れなくなるよりはマシだと思う事にしよう。

『わかってる。しかし、どんな対応をする気なんだ？お前は知っているから、そんな顔をしてるんだろ？』

したり顔と表現するのが一番ぴたりと嵌まる顔は、一瞬歪みというか、困惑というか、表情に小さな陰りが見えた。ハインはそれに気付かれていない気で、いつもの飄々としたスタンスを崩していないように振る舞ってはいるが、どうにも違和感が強く残り過ぎた。

『ん？…ああ、俺の口から話せる事じゃないんでね。もう少し待てばわかるって』

『………』

追求は自重しておいた。こんな状態の自分達が言い争うのもおかしいし、何より負けず嫌いを自覚しているイザークが控える事が、この場を凌ぐのに一番有効な事象であろう。

『おい、二人共！』

ディアツカの声が響く。それは二機の目前に迫る四機のダガーの存在を知らせる者だった。

明らかな危機、絶体絶命に見える状況。

しかし、二人にとってそんなものは大した問題にもならない事であ

った。

『…一先ず、ここを食い止める事に集中するぞ！』

『ああ、それでいい。思いっ切りいくぜ！』

確認。敵の軌道。爆散させない方法。武器の選択。行動。

この五つの行程を、しかも四機に対しての判断となれば迷いも生じるものであるが、オレンジと水色のザクに淀みは無い。

バーニアの点火と同時に、手前のダガーの武器を削ぎ落とし、オレンジのザクは後ろのダガーを巻き込んで、ビームトマホークで胴と脚を二つに斬り離す。

一方、水色のザクは威嚇射撃を一発、一気に距離を詰めてカメラとコックピットを潰す。そして二機目に向かう時、相手のビームライフルが向かってくるのに気付くと同時に、高速で機体の向きを入れ替え、攻撃体勢から移行する前にバーニア毎コックピットを貫いた。

『ヒュ〜。やるね！てか、お前らホントに凄過ぎ』

『…あなたも人の事言えた義理じゃないわよ。良く余所見しながら射撃出来るわね…』

二人に迫る機影を確認して注意を促しながらも、ディアツカは遠方から迫るダガーの武器破壊や、スラスターやコックピット付近を掠めるように撃ち抜き、行動不能へと陥れていた。

端から見れば、そんな有り得ない光景を信じたくはないが、実際に

やっつてのけるのだから始末に終えない。

これが大戦を生き延びた歴戦の戦士の實力なのだろう。

『ほら、雑談はそれぐらいにしてさっさと散開しろ！一気に押し返すぞ！』

幾ら的確にダガーを落としていると言えど、一向に数が減る傾向に移らない。持久戦の様相を呈してきたが、出来ればそうならないようにしたい。

数の暴力の脅威もそうだが、相手は虎の子とも言える核を全機に搭載しているのだ、下手に長引かせれば核による攻撃で全滅なんて、悪夢にも近い結末が訪れるかもしれない。

そうならない為にも、余裕のある今の内に出来る限りの火力を集中して、相手をどうにかして全滅させねばならない。

そう決意して、目の前の敵に集中しようと精神の統一を始めた時、イザークはスピーカーから響いてきた切羽詰まった声に、心を掻き乱されてしまったのだった。

『隊長！大変です！』

『…どうした？』

短く取り次いだのは、敵の数に辟易したのと集中を乱されてしまった事への小さな恨みが原因だ。子供みたいだな、という自覚くらいはあるが、性癖みたいなものだから簡単に治るものではない。

管制官が可哀相ではあるが、我慢してくれろとありがたい。なんて馬鹿な事を考える余裕は一気に瓦解し、小さな瓦礫の山へと変貌する。

『本国より入電！レーダーに反応あり、アプリリウス周辺に突如として表れた大量のMS群がこちらに向かっている。応援されたし！』

『…やられた』

ハイネの声が小さく落ちる。そしてイザークも同時に理解していた、俺達はデコイに引き付けられていたのだと。

試しにビームライフルを核が搭載されているであろう、ミサイルランチャーに撃ち込んでみたのだが、エネルギーの奔流すら起きず、ただ穴が開いただけ。

核が起す独特な光を放つ爆発なんて、微塵の可能性もある訳が無い。こいつらも時間稼ぎが最大の目的だったのだから。

『た、隊長！マズいですよ！』

この防衛線を突破されない事を前提に配置された、たった一つの小队。そんなものだけで凌げる程の量を、本国が大量なんて言葉を入電に使う筈がない。それに――。

『どういう事だ！？索敵担当は何をやってたんだよ！』

アプリリウスは首都であり、政治の中枢を担う重要なコロニーである。よって、索敵用のレーダーも広範囲を探れるものを搭載していた筈だ。それなのに敵の接近を見逃すとは、少々考えられない事だ。

『そ、それが突然表れたんだそうです。それまでは、まるで何も無いようになっただけ』

『…そうか！ミラージュコロイドか！』

ニコルが奪ったガンダムに搭載されていて、ユニウスセブンに現れたフリーダムに良く似た謎のMS、フェンリルが使用していた光学迷彩による、敵に察知されない為の機能。それが大隊全てに搭載された事に、イザークは戦慄を覚えた。

察知出来ないとは言え、確かに存在する訳だし感覚で見付ける事も何とかなるらしいが、そんな特殊な事が出来る奴なんて極一握りの人種だけだ。

それでは、そんな特殊な奴が隊に居なかったらどうなる？

ミラージュコロイドは制限として、消えたまま攻撃が出来ないと、装甲に施された特殊防御機構が無効化されるのだが、使い方を見誤らなければ気配も無く近寄れるので、工作も諜報も思いのまま、暗殺だって楽に熟せる筈だ。

そんな物騒なものを大量のMSが使用して、戦場に現れたらどうなるのか？

間違い無く敵に回した方が危機的な状況に陥るのは間違いなし、機体を捕捉出来ない事による精神的疲弊により悲鳴を上げるに決まっている。

眉間に皺を寄せていたイザークがふと、こんな事に思い至る。

何故、核を撃ち込む寸前にだけミラージュコロイドを解かなかった

のだろうと。

『まさか……!』

思考の中に浮かび上がった結論が結び付いたのは、核に焼き付くされるアプリリウスではなかった。

重要人物が揃い踏み、潰せば一気に戦局が変わるであろう首都を落とせば、それは間違い無い終局への欠片ではある。しかし、そんな大事な拠点を守る為に隠された機構なんて良く聞く話であり、連邦がそれを警戒しているとすれば、アプリリウスの近くでミラージュコロイドを解く理由は一つ。

『これもデコイか!』

ハインもイザークと同じような意見のようだ。不自然過ぎる発見のされ方と、如何にも核武装をしていると思わせる為の巨大ランチャー、それにこの目の前に漂い、未だに襲い掛かってくるダガー。

これだけのピースが揃い、戦略を練る隊長格が二人寄ればこんな結論に至るのも当然で、そして標的を逃れたアプリリウスから、どこへと核の脅威が照準を変えたのだろうか？

『…そう言えば、お前の隊が警護しているのってアーモリーワンだよな?』

前、ぼやきを延々と聞かされた時にそんな事を言っていたのが記憶にある。

こんな場面で発言するような事ではないのだが、あのコロニーは敵

から狙われる理由が大いにある。

『ん？ ああ、そうだぜ。 あそこはミネルバ所属のパイロットと強奪犯がの奴らが暴れ回ったせいで、酷い有様に――』

言葉が途切れる。ぶつ切れになった続きなんて考えるまでも無いし、今更興味も無い。 重要なのはあそこで秘密裏に開発されていたガンダムが奪われた事、そしてその有用さをあの独立隊が知っているという事実。

『…まさか、連邦の狙いは…』

『…ああ、ザフトの戦力を削ぐ気だろう』

辿り着いた空想は明らかな現実味を帯びていた。二人の会話を聞いていた筈の者達は一つも声を出そうとしない。

あまりにも突拍子が無い結論の出現に戸惑っているのか、それとも二人の思考能力の高さに興味してしまったのか、はたまた今から対処のしようが無い事に絶望しているのか。 いや、全てが当て嵌まるのか。

とにかく、どうしていいのかわからない状況には変わらない。 呆然とする一人一人の目の前に迫るダガーの集団をいなしながら、殆どの者が考える事を放棄していた。

考えるだけ無駄なのだ。 この場を凌ぐのに精一杯の自分達が、この状況をどう変えられると言うのか。

『…せめて超長距離狙撃が出来て、広範囲に効果のある武装さえあ

れば…』

呟かれた言葉は、望みのない状況でも光を懸命に探すシホの姿勢が聞いて取れた。

しかし、現実には非情で冷酷だ。大戦の最中にザフトがばら撒いたニュートロンジャマーのせいで、核出力を用いた武器は一斉に使用不可となっている。そのせいで、単機で拠点を守り抜く火力を擁した武器を作れなくなっている。

核により滅びたユニウスセブンの報復として行った作戦が、また核の脅威に対抗出来ずに、手を拱くしかないとは何たる皮肉か。

『報告します！アーモリーワン宙域に連邦のMS群を確認！数20！』

二人の予想が的中を迎えてしまった。それが示すのはアーモリーワンの消滅。例えヴェステンフルス隊が残っていると言っても、隊長であるハインがこちらに居る時点で戦力はかなり落ちてしまっている。核の長距離発射等されてしまえば、もう目も当てられない状況に陥る。

そして、消滅と共に訪れるのはザフトの完璧なる弱体化。武装や船は勿論のこと、量産型MSや戦艦等の生産効率の著しい低下を齎し、残存の戦力で戦わざるを得なくなってしまう。

『くそっ！ラグナロクとニブルヘイム、どっちも地球にあるつのに！』

ディアッカの上げた悲痛な叫びに含まれていたのは、あの訳のわか

らない招集と、会議開始と同時に可決された武装開発の認可。

いつ聞いてもその言葉は苛立ちを伴って神経を逆撫でし、こんな状況でも抑え切れない程の憤怒を脳内物質の発生によって引き起こされてしまうのだ。

『その話をするな!!』

最高潮の苛立ちと自己嫌悪。大戦時、ストライクにやられた傷の疼きを思わせる昂ぶりを感じて、イザークは我を失いそうになっていた。

その様子を見たディアッカ、シホは口を閉ざすしかなかった。事情も裏も知らない二人が口を挟む余地等、欠片程も無い事を自覚しているからだ。

それでも、乱れた気持ちを落ち着けて欲しいシホの顔は泣きそうに崩れていて、それがイザークの目の前に現れている筈なのに、彼の言葉は鋭さを増していくばかりだった。

『意味も意義も何も知らない兵器等、俺達に扱われる資格なんて無いんだよ! あんなただの大量殺戮兵器の存在と、それを開発しようと考えたクロードの考えなんてわかりたくもない!』

『イザーク……』

ハイネの呟きが落ちた。酷く伝わってくる焦燥にも似た、怒りの感情。

何で戦う者達だけが理由を知らずに振り回され、上で胡座をかいて

いる奴らだけが全てを知ってそれを利用するのだろう。

強力な兵器、必要もない火力、そして権力を振り翳したあんな会議の終結をまざまざと見せ付けられれば、不信が募るのも仕方ない事だ。

そして、その事態に拍車を掛ける出来事が起きてしまうのだった。

『……た、隊長……』

『何だ!!?』

掠れ気味の管制官の声が辛うじて聞こえて、イザークは苛々を隠す事なく、いや寧ろ増した勢いをそのままにぶつけるような言葉をぶつけたのだが、相手方の反応は希薄だ。

それが何を示し、何から引き起こされているのかなんて、今の激熱した頭の中では勿論考えなんて付かない。

『…ア、アーモリーワン周辺に出現したMS反応20個が一瞬にして消滅しました…』

『何!?!?』

誰もが驚きを隠せていない。

MS20機が消滅?

それも一瞬にして?

そんな広範囲に有効な兵器は今のザフトにあるなんて、この場でダガー全てを沈めた彼らの中に知る者は居ない。

いや、知っているが《わかっていない》と言うのが正しいか。

プラント国民であれば誰もが知っているのだ。その存在を、その意義を、それを造った者が何を願い、何を成し遂げようとしていたかを。

その狂気が、再び蘇った。

『隊長、アーモリーワン周辺の衛生から映像記録を取得しました』

『…流せ』

映し出されたものが齎したものは、重過ぎる沈黙と混迷を極める困惑。

溢れ出す疑問の中で、核を積んだダガーが一瞬にして消え去るのが流れ込んでくる。それも核ごと飲み込んで、無効化して。

『ジェネシス……？』

誰の呟きかなんてわからない。誰もがそう言葉を落としたかったからだ。

映像が途切れる。最後に映し出されたのは、確かに見覚えのある機械の塊。

呆然とする兵士達を余所に、プラントコロニー攻防戦は混沌の中で終わりを告げたのだった。

PHASE-32 手伝いにきたぜ！（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

今回の話では、原作中で疑問に思った事を突き詰めていく為にジェネシスの存在を否定しました。

プラントコロニーを守る為とはいえ、地球に住むナチュラルを滅ぼす目的で造られたジェネシスを使った事に、何の疑問も持たないイザーク達に少々困惑を覚えていたので。

では、お疲れ様でした。次回もお付き合い頂ければ幸いです。

PHASE-33 異議を唱えます！（前書き）

敷かれたレールを辿る事が、どれだけ楽で詰まらないものだと気付いているものは少ない。

ユウナは葛藤にも似た感情を抱いていた。カガリとアスランの言葉、それらが彼に救いの光を与えるってくれるとは思ってもみなかった。

PHASE-33 異議を唱えます！

「大西洋連邦から要求書が届いた」

静まっていた会議室が、黎明の光を浴びたかのように俄かにどよめき始めた。

招集された理由も特に挙げずに数分過ぎた頃、手元の端末を操作していたウナトが紡いだ最初の言葉がこれだった。

どよめかない筈が無い。謎のMSの来襲によって大怪我を負ったアスハ代表が、この場に出席して居ないというのに、こんな極めて重大な議題が連邦から突き付けられたのだから。

その中に例外もあった。じっと俯き、その身体からは以前のような自信は全く伺えないような状態のユウナ・ロマだ。

フェンリルと対峙して気絶した後の事は勿論わからない。死んだと思っていたのに、気が付けばあの独特の消毒臭が鼻について、次に清潔感を強調する白の天井が、徐々に開いていく重い瞼に射し始めた光が網膜に焼き付けてきた。

その眩しさに堪えられず目の前に手を翳そうとするも、鉛のように重い身体が中々に言う事を聞いてくれなくて、ユウナは億劫に思っ
てそのまま瞳を閉じる事にした。

しかし、そうは出来なくて。

隣に座り、舟を漕いでいた従者が瞼が開いている事に気付き、大騒ぎしながら医者と看護婦を呼び付けに行くけたたましい音の中で眠

れる程に、ユウナの神経は図太くなかった。

そして少しずつ削られていく思考の中で、今回の襲撃がどんな意図で行われたものなのか、と考えを巡らせてみる。

あの真っ青な機体が暴れ回っていたのは、間違いなく要人殺害が目的なのだろう。真っ先に狙ったのがカガリだった辺り、プラントや大西洋連邦の可能性を否定する材料になる。

奴らの頭の中では、カガリは代表の器ではないと貶す思考しか存在していない筈だ。そうじゃないとしても、小娘一人を消そうとするのに、あんな派手な事をする意味等皆無だ。

しかし、そうだとすれば矛盾してくる箇所があるのも否めないのだ。

フェンリルという、フリーダムに似たMSを所持しているという事は、プラントが誇るニュートロンジャマーが搭載されているという事だ。そして、これを造り出せるのはプラントだけ。

こう考えれば、オーブを襲わせたのはプラントのように思わざるを得ない。が、プラントに回し者が潜入していて、未だに発見されていないと仮定すれば、ニュートロンジャマーを入手、又は設計図を送る事で連邦がニュートロンジャマーを造り出していたとすれば、フェンリルを生み出す事は可能だ。

そこまで考えて、ユウナは思考を止める。堂々巡りと貸しているのに気付いたからだ。

そして瞳を閉じる。何もない暗闇に身を沈めているのが、今の気分が一番似合っていると安易に考えていた。しかし、それはまやかし

で幻想だ。

恐怖の残像が網膜に焼き付いている事に気付いていないユウナは、
瞼を下ろした事を後悔する羽目になる。

「――！！」

急いで現実へと戻る。それが今感じた未曾有の恐怖に対する最上の
答えであった。

「はあ、はあ…、はあ……」

少しづつ落ち着く気持ちとは裏腹に、顔面はどこまでも正直に心境
を表している。隣に据えられた卓に立つ鏡が視界に入ったユウナは、
映し出された人影に驚きを隠せなかった。

元々健康的とは言えない自分の顔色が更に悪くなり、もはや真っ青
ではなく真っ白といった様相であり、双眸の周りに刻まれた隈と皴
が更に不健康さを増幅させていく。

その姿があまりにもこの心境に当て嵌まり過ぎていて、ユウナは言
うことをきかない左腕を思いつ切り振り回して卓を吹き飛ばしていた。

普段でも出す事が出来ない力が発揮されて驚いたのは、ほんの一瞬
の事。後に残ったのは盛大な音を立てて倒れた卓と、割れた鏡の枠
と破片。その破片に移る自分すら見たくなくて、ユウナは頭から布
団を被る。

しかし、それも焼き付いた記憶をまざまざと見せ付けられる行為で
ある事を、動転している頭では少しも気付ける筈はなかった。

小さな空間に出来た暗闇の中に浮かんでいるのは、手に入るとばかり思っていた金髪の少女と纏った純白のドレス。彼女の全てを委ねさせる事が出来たと、ほんの小さな高揚感とどこまでも強い支配欲。何の表情も見せていなかった彼女の顔に浮かぶのは、あまりにも悲痛な感情。口から吐き出されているのは、切実な助けを求める言葉。しかし、身体は動かない。まるで重力にすら逆らえない、小さな小さな弱い生物のように。

そしてカガリの前に舞い降りる真っ青なMS。その姿に恐怖が一段と加速を始める。とめどなく湧き上がるものを制御出来る訳もなく、ユウナの足は鉄のように動かない。腕を上げることすらもままならない状態だというのに、事態はどんどん進行を続ける。

構えられた腰の辺りに付いた砲門が彼女へと向けられる。やばいという直感はある。だが、やはり身体は動こうとしない。臆病な自分の心が、保身に走るのは当然の結果であった。

そして放たれた赤い線条によって、カガリは存在した場所から跡形も無く消え去ってしまっていた。

曲がりなりにも好いた人が、何かに消される事を受け入れられる者等この世に存在するだろうか。増して、そいつが次の標的として選んだのが自分であったのなら、植え付けられる恐怖の底は知れない。被った布団を吹き飛ばして、ユウナを自分自身を抱きしめた。腕に爪が食い込む程に慰めているというのに、身体の震えは一向に止まる気配は無い。それ所か、どんどんと酷くなっていてるのが感

覚でわかった。

その絶頂とも言うべき叫び声を上げそうになった時、開け放たれた扉から入ってきた医者が慌てて近寄ってきて、注射を打たれた記憶まではあるのだが、その後は夜遅くになって目覚めた箇所からしか憶えていない。

しかし、その後の記憶こそが今の俯く自分へと繋がっているのは間違いない。

ガチャリ、とドアノブを捻る音が聞こえて、ユウナは扉の方へ目覚めたばかりの定まらない眼を向ける。静かに開いていく扉の隙間から見えてきたのは、車椅子と足に掛けられた黄色の毛布。

殆どの障害を治せてしまうこんな御時世に、車椅子を使っている知り合いなんて居ない筈のユウナは訝しんだのだが、身体が見え始めてきた事により目を限界まで睜く事になる。

そこには赤い光に飲み込まれ、チャペルごと消滅したとしか思っていなかった彼女が、後ろで車椅子を押す気に入らない奴を伴って入室してきたのだから。

これは夢なのか？頬を抓ってみる。……痛い。

「これは夢じゃないぞ」

響いてきた声は、間違いなく彼女の持つソプラノで。無造作なカットであるが綺麗に光る金髪と、意思の強い青色の瞳を持つ大きな目、横一文字に閉じられたその口でさえも愛着を抱く要素には十分な容姿。

確かに存在しているのだ、フェンリルに消されたと思っていたカガリ・ユラ・アスハが。

安堵した心とは真逆な考えが頭の中を占めていく。あの場から一目散に逃げ出した自分が、カガリが味わった筈の恐怖を少ししか知らない自分が、心配したただの死んでなくて嬉しいだのと並べ立てたって、ちっとも説得力が生じる訳もない。

増して、最後まで自分自身を守る事だけに執着していた事に、今まで感じた事のないぐらいの後ろめたさが孕んでいた。

「……これは夢なんだ……。僕の矮小な心が創り出した幻想なんだ！」

そう声を上げて、自己暗示を掛けてやらなければ、後ろめたさに押し潰されそうだった。目の前で車椅子から見上げてくる双眸と、その後ろから見下ろしてくる瞳が感情を加速させてしょうがない。

どんな対処法があるだろう？と逃げる方へと気持ちは傾いていく。

布団をもう一度被ろうか？

そして、そのまま瞳を閉じて全てから瞳を逸らしてしまえば楽なのか？

それとも、いっそ開き直ってしまうのも悪くないのかもしれない。

「ユウナ」

何故か優しい響きが耳朶を打った。恨まれている筈の自分へと向けられるべきではない、包み込むような光が後ろめたさを払拭していく。

ふるふると顔をカガリが居る方へと向ける。もしかしたら優しさを餌にした罠ではないかと、卑屈な自分は彼女を疑ってしまっていた。が、そんな感情を恥じてしまう結果になるなんて、少しも思えていなかった。

「何に怯えているかは知らないが、お前が無事で良かった。アスランが帰ってきていなかったら、私もお前も今の時間に存在してなかっただろう」

カガリから視線を切り、どうしても見上げる形でアスランの表情を確認する。

釣り上がった眉に、少し瞋いた瞳、口角が下がった口元が彼の感情を如実に伝えてくれる。

半強制的に結婚を迫り、挙げ句脅しを絡めた汚いやり口で丸め込んだのが自分の愛しい人であれば、その主犯格を許せないのは男として当然であり、アスランにはその資格がある。そして自分には、その怒りを受け入れる義務があるのだ。それぐらいの配慮ぐらい、のさばってきた自分でも出来る。

「夢ついでに、君の言いたい事を言わせてあげるよ。勿論不敬罪だとか、そんなつまらない事を言うつもりはないよ」

「……じゃあ一つだけ」

夢、という単語に少しだけ眉をぴくりと動かしたアスラン。何を思っているかまでは知る由も無いが、それでも予想ぐらいは出来る。

罵倒や嘲笑、その他の類。

「ユウナ、お前が無理矢理カガリを嫁入りさせようとした事を許そうとは言えない。だけど、政治でのウナトの息子であるお前の発言力は十分に高い筈だ」

最初に放たれた言葉の中に含まれていた、《許そうとは言えない》がアスランの気持ちを顕著にしていた。

言葉にするまでも無く許すつもり等ないと、そう告げている。軍人ではないユウナにすらわかるぐらいの殺気を感じるのだから、この見解で間違いはないだろう。

しかし、その後に続けられた言葉の意図が全く読み取れない。

政治に関する発言力がどうしたというのだろうか？

確かに宰相の息子であり、議員であるのだから会議上の権力は確かに高い、のだが、これに関してはアスランに係わりが無いと思うのだが――。

「だから、公の場ではカガリを支えてやって欲しい」

その言葉にバラバラで纏まりの無かったパズルが、かちりかちりと嵌まり始めた。ユウナは思わずアスランの双眸を見詰めていた。

「アスハ家とセイラン家。結婚という強固な絆では無いにしても、双方が手を取り合えれば、それだけでも十分にオーブを良くしてくれると、俺は思う」

僥倖とも言うべきか、ユウナの脳は流れくる感情の渦に飲み込まれ

そうだった。あんなヘタレな自分を許さないまでも、制裁として全てを奪う事をせず、挽回の余地を与えてくれている事は、自分の思考の中には全く存在していなかったのだ。

あったのは、真っ先に逃げた自分に対する怒りで、一方的な言い分を押し付け、父上の権力でも庇いだて出来ない程の権限を駆使した鉄槌を与える、という負の方向に強い考えだった。

カガリ・ユラ・アスハの力と人望があり、本気を出したとすれば強固に造り上げたと思うセイランの土台ですら、脆い木板のように崩れ去るだろう。

しかし、彼と彼女は当然の報いである筈の罪の宣告を与える事をせずにいる。

邪魔者を蹴落としてきたユウナには、到底理解出来ない言動だった。

「どうし――」

「どうして罪を咎めないんだ、って顔をしているな」

割り込んできたアスランの言葉に、ユウナは閉口せざるを得なかった。言葉の選択とニュアンスは微妙に違えども、同じような内容を問おうとしたからだ。

そしてアスランは、冷たい表情のまま淡々と語り始めた。

「さっきも言ったように、《俺は》お前を許すつもりはない。無理矢理に上げた結婚に愛などないだろうし、カガリは下らない権力固めの道具でも無い。

……それに、あのチャペルにさえいなければ、カガリが足を不自由にする事もなかっただろうと思うとな……」

「……えっ！？カガリ、それは本当なのかい？」

気落ちしていた気分追い撃ちを掛けられたような、脳髓に響く重い一撃を叩き込まれた感覚を味わい、ユウナの目の前は真っ暗にやりそうになっていた。

そんな状態でカガリへと向けた顔はどんなものなのだろうか？

想像するのも嫌になる程、酷いものである事は間違いないだろうと確信しているが、視線を彼女の瞳から逸らす気にはなれなかった。

今まで、不都合なものは全て父上に片付けて貰っていたというのに、どういった心境の変化なのだろうか？自分自身でも全く判然としない。

「本当だ。だが、気にする事はない」

五体満足でなくなった原因を作った相手に、この娘は笑い掛けてくる。この年代なら、いや、どんな年代であろうと聖人君子であろうと、一生涯付き纏う障害を負ったとすれば、優しくしてくれる者にさえ当たり散らす事だってざらであろうに、二十歳にも満たない女の子が無理に作れる訳もない、柔らかな表情でカガリは笑みを浮かべているのだ。

ユウナの頭の中には、更に訳のわからない事象の発見に知恵熱寸前だ。

「足は動かないが、支えてくれる人達が居れば何とかなる。アスランやユウナのような」

まだ夢から醒めていないのだろう、とユウナは思う。今までのカガリとアスランへの仕打ちを考慮すれば、間違いなく嫌われていて当然くらいにしか思っていなかったし、実際カガリが自分から距離を置きたがっているのは微妙にわかっていた。

それなのに、目の前で微笑む彼女は自分を頼ってきている。どういった意図があるのだろうか、と勘繰ってしまう。

「……ははっ、どうやら僕は死んじやたみたいだね。君達から嫌われる理由は思い至るけど、頼られる訳には辿り着けないんだからね」自分の抱いた妄想と片付けるのが、何より手っ取り早いと思った。こんな茶番を望んでしまう程、フェンリルの脅威は凄まじいという事か。

「……確かに、今までにされた事を考えるとお前にカガリを任せようとは思えないさ。出来るなら俺がずっと傍に居て、どんな時でも支えてやりたいさ。

だけど、代表としてのカガリを支えられるのは俺じゃなく、権力を持ったお前なんだ」

最初、苦々しげに呟いたアスランだったが、少しづつ真摯な瞳へと変わりゆき、最後の言葉を放った時の表情は真剣そのものだった。

「…僕はセイランだぞ？ いつ、どんな状況で掌を返すかわからないよ」

ずっと父親の言う通りに生き、逆らった事など記憶にない自分を頼る愚かさを教えようと告げた事であったが、あまり効果は無かった

ようだ。

それ所か、自分の震える内側を見透かしたように紡がれたアスランの言葉に、悔しいが感嘆の念を感じてしまうのだった。

「…お前は仮初めだとしても、愛しい者を失う恐さを味わった筈だ。あんな事が二度とごめんだとしたら、人を裏切るのは難しいさ」

「……そうだね」

先程まで暗闇で浮かび上がっていた、カガリが消える映像への恐怖を再確認していた。

カガリが生きている事を知ったからか、焼き付いてしまっていたものは少しづつ無くなり始めていたが、あの戦慄するには十分な恐怖は簡単に忘れられるものではない。しかし――。

「でも、僕にも立場はある。すぐに意見や主張を翻す事は出来ない…」

ウナトを裏切る＝居場所を失うと同義な訳だから、ユウナが怯むのは当然である。アスランにだって、同じ思いをした記憶が鮮明に残っているのだから。

「………」

カガリにだって、その気持ちを汲み取るぐらいのものを乗り越えてきた経歴がある。例え、血の繋がりが無い父だとしても、その存在の大きさに敵うものは母親ぐらいだ。

辺りは沈黙に包まれ、その後どんな言葉を交わしたかは曖昧だ。ただ、自分に決意を抱かせる程の出来事がなかったのは、現状を鑑みれば明らかだろう。

「要求は二つ。オーブの大西洋連邦への加盟が一つ。もう一つは、我が国に滞在しているプラントの最新鋭艦ミネルバの引き渡し、若しくはオーブからの追放」

淡々と読み上げられ続けた要求は、オーブからすれば簡単であり、国に損害が無い条文に見えているが、相手はブルーコスモスを母体とした組織だ。

オーブに住むコーディネイターをどうするかなんてわからないし、手荒な真似をしないと限らない、とこの場にかガリが居れば突っ張ねたのだろうが、生憎彼女は療養中につき出席していない、と議員達には説明されている。

だが、そんなものは父上の嘘っぱちなのだ。出席出来ない尤もらしい理由があるからこそ、この会議で一氣に大西洋連邦への加盟を取り決める腹なのだ。

ユウナはそのやり口に辟易として、呆れ返っているのだが、意見を上げるつもりにもなれてはいなかった。

地位を失う事も、権力を振り翳せなくなるのも、親の驕をかじる事が出来なくなる事も、今のユウナには捨て難い甘美な代物なのだ。

「…ミネルバを引き渡す、とはどういう意味なのですか？」

恐る恐る手を上げた若い議員の発言は、周りの者達に更なるどよめ

きを与えた。

こんな酸いも甘いも強要され、時には残酷な出来事に吐き気さえ催す事もあるこの世界に、染まりきっていない者が未だ居た事に驚いているのだ。

「引き渡せ、と言われたら引き渡すのだよ」

キラリと光る色付き眼鏡の奥にある瞳は窺えない。しかし、うつすらと浮かぶ厭らしい笑みが次に紡がれるであろう言葉を、容易に想像出来る要素となる。

「ミネルバ《だけ》を引き渡せば良いのだ。何も中に居る奴らがどうなっていようが、彼らには関係の無い事だ」

顔面蒼白。この言葉が手を上げていた若い議員に一番似合う形容詞だろう。驚愕に染められた顔のまま手を下ろして、顔を俯けてしまふ。

どんな事を期待し、目標にしてこの地獄に飛び込んできたのかは知らないが、これが現実なのだ。非常に冷酷なのが当然なのだ。

「さて、この件は多数決を取るまでも無いですな。国を守る為には、この選択が一番なのだから」

どこから取り出したのか、国家代表の印を承諾書に捺そうと朱肉へと押し込んでいくウナトの姿に、ユウナはどうする事も出来ずに居る自分が齒痒かった。

昨日の夜、彼らが帰った後にも迷い続けていたのだ、こんな場面に出くわした時にどうするかを。しかし妙案も名案も浮かばずに、家

から遣わされた迎えの使用人と共に、惑う気持ちのまま座ってしまっている。

だからという訳だけではないだろうが、何も出来ずにずるずると気持ちを引き擦り続けているだけなのか？

「……小娘が倒れたお陰で、漸くここまで漕ぎ着けられたな」

隣に座るユウナにしか聞こえない程の声でほくそ笑み、ウナトは調印を果たそうとした。

押し付けられる朱肉に染められた、オーブ国家代表の印。それは大西洋連邦へ、いや、表だってブルークコスモスへの加入を果たす証となるものである筈――だった。

「……ユウナ？」

ウナトの口がぽかりと開かれたまま紡がれた名前は、実の息子の名前。その息子の手の甲には朱い代表の印が刻まれていた。

「……父上、大西洋連邦への加盟に異議を唱えます」

「なっ、何!？」

ウナトには信じられなかった。今まで大した反抗も反発もしてこなかった我が息子が、こんな重大な場面で親の言う事をきかないと言うのだ。

自分の意見等、殆ど主張した事のない息子がだ。

「この場に代表が出席なさっていたとしたら、こんな事は認めない筈です。」

そしてこう言う筈だ。あくまでオーブは独立を保ち、行き場を失った人々が頼る、最後の砦であるべきだと思う、とね」

ナチュラルとコーディネイターが、唯一共存していると誇れるこの国が、反コーディネイターを掲げてしまったら、それこそ戦争が加速する原因にも為り兼ねない。

そうならなかったとしても、戦争が嫌な者達が理念を信頼して移住してくると言うのに、加盟を果たしたとしたら酷過ぎる裏切り行為だ。

「馬鹿が。そんな理想論で生きていけない、と会議で何度言ったと思っている！もしこの話を蹴ったとしたら、海を隔てて全ての国家が敵となるのだぞ！」

周りは敵だらけ、独立を貫く国家が邪魔になったとしたら、簡単に潰されるぐらいの国力差がある。それに歯向かう事は、即ち国の消滅にも繋がる。

「しかし、父上はただコーディネイターが憎いというだけで、国を利用しようとしているのですよ！」

「違う！本当にこの国を守るには独立を保っては不可能だからだ！」

「そんな言い訳誰も信じない」

「もういい！お前と意見を交わしていても埒があかん！」

ユウナは油断していた。意識が完全にこちらへと向かっていた事に慢心し、印がウナトの手の中にある事を失念していた。

ウナトの目の前には承諾を促す文章と、それを受け入れる事を示す為の空白。

そこに今度こそ捺されそうになる印。手を伸ばしても届きそうになり微妙なタイミング。

その時。

「そこまでだ、ウナト」

ボタンと開いた両開きの扉から聞こえてきた毅然とした声。そして固まったウナトの身体。もう少し遅かったら、間違いなく承諾書が出来上がっていただろう。

車椅子の車輪が転がる音だけが妙に大きく聞こえ、押されてきた彼女は父上の掌に包まれたものを見て、やはり毅然とした表情で見上げた。

「宰相であるお前が、どうしてそれを手にしているんだ？」

いつもの父上なら、何か取り繕う言葉も容易く口八丁で並び立てられたのだろうが、今日のカガリの雰囲気吞まれてしまったねか、脂汗を流して固まってしまっていた。

そんな父上に愛想が尽きていたのか、カガリは投げっ放しの疑問をそのままに、会議室に集まった者達へと顔を向ける。その間に、ア

スランがウナトから印を奪ったのは勿論の事だ。

「オーブはどこかに属すつもりはない。戦争に協力するつもりも、戦いに参加する意思も。

しかし！相手がこちらの領域を侵すというのなら、我々は容赦しない。大西洋連邦が向かってくるというのなら、《他国に侵略させず》を貫く！」

車椅子に座っているのに、堂々と宣言するカガリは今までで一番大きく見えた。

国家を代表する者の顔、もしかしたらそれ所ではない決意を込めた力に気圧されたユウナは、心を動かされていくのを感じていた。

PHASE-33 異議を唱えます！（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回もミネルバ組に出番を作れませんでした。ここ三話の間空気がでしたが、次話では思いっ切り彼らを描こうと思います。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-34 ……勝手にしろ！（前書き）

不穏に過ぎ行く外の世界とは逆に、ミネルバのクルー達は束の間の休息を味わっていた。

しかし、世界の流れはそんなものをもろともせずに巻き込んでいき、全てを流してしまうだろう。

そんな理不尽に対抗する為の力が、クロードによって造られつつあるが…。

PHASE-34 ……勝手にしろ!

訪れた危機は去った、本国からそう連絡が入ったのは丑三つ時を少し過ぎた当たりの事であった。

皆一様に安堵を表し、溜息を吐き出す者、家族へ通信を入れる者、崩れ落ちる者等、十人十色にそれぞれの溜まり過ぎた心配を労った。

「ホント、良かったわね…」

休憩所のベンチに腰掛け、溜息を吐き出しながらルナマリアは頭を垂れた。昨日の取り乱しからどれだけ心配しているのかは容易に想像出来る、と隣に座ってオレンジジュースを飲んでいるメイリンは、姉のつむじ当たりを見下ろしていた。

核の攻撃を受ければ、コロニーなんて大した装備も装甲も皆無な、宙に浮いているだけの居住用の箱庭なのだから一堪りもないのは誰にだってわかる。しかしどうやって守られたかとか、どんな経過を踏んだとか、そういった類の情報が一切伝わってこない事に、メイリンは小さな猜疑心を育てていた。

「本当だな。現存の戦力だけで良く退けたと思う」

レイも深く心配していた事がわかる。定期的に艦橋にある端末を弄って、戦況の移り変わりを調べていたようだったから。

だが、思ったように情報を引き出せずに苛立っているようだった。やはり本国が今回の攻防戦に関しては、上の者だけで片付けると決めてしまったのだろうか。

「えっ？地球に駐屯してるのって、基地に居る奴らと俺達だけじゃないのか？」

シンの上げた疑問に、レイは呆れたような瞳を見せ、ルナマリアは明らかに変な物を見る視線で軽蔑の意思を見せているし、メイリンに至っては肩を竦めて首を横に振る始末だ。

「…シン、定期報告ちゃんと見てないの？」

嫌味な言い方が癪に障るが、シンは凶星過ぎて反論する余地は見つけられない。ぐっ、と息を詰まらせる声を漏らしてしまえば、もう言い逃れも出来ない。

そんな素直な反応を見せるものだから、本来なら自分で溜まった定期報告を読んで理解しろ、と突き放す所だが、レイは仕方無いと呆れの溜息を吐き出して説明を始めた。

「シン、今回は説明してやる。だが、次は無いぞ？」

ぶんぶん頭を二回縦に振ったシンを確認し、レイはさも面倒そうに言葉を紡ぎ始める。これもシンにちゃんとして貰う為の布石だ。

「今、姿勢制御や小規模移動のようなスラスタが、アプリリウスを除いた殆どのコロニーで故障してるんだ」

「へえ。でも、それが少ない戦力とどう繋がるんだ？」

口を挟んできたシンに、ぴたりと寄り添ってベンチに座るステラもレイを見上げる。そのキョトンとした表情が今のシンと似過ぎてい

て、この似た者カップルは…、と小さく溜息を吐きたくなったが、今は自重した。

「…話は最後まで聞け。その故障を直す為にメカニックスを派遣する事になったんだが、その輸送を行うシャトルの台数にも限りがある。全てのコロニーに回す程の余裕が無いから、今回は艦を持つ小隊ごと派遣する事になったんだ」

説明を終えて、レイは一息つく為に手に持ったコーヒーに口を付けた。程良い酸味と、ほろ苦いカフェインの風味が広がっていき、ザフトレッドの自覚が足りない同期に対して抱いた苛立ちも少しずつ消えていく。

昔から勉強やら、報告やらにとことん弱い奴であったが、流石に酷すぎではないだろうか？

「で、どうやって連邦のMSを追っ払ったんだ？」

夜中に通信を受けたのがメイリンである事をシンは知っていたから、ツインテールの彼女へと顔を向けて尋ねた。

するとどうだろう。定期報告を閲覧していない、と答えた時より更に場の空気が滞ったのをシンは感じてしまった。

「……あんだ、まさかまた寝坊したんじゃないでしょうね？」

「そ、そそんな事ないって！」

手をぶんぶん振る慌て様、揺れに揺れ、焦点の定まっていない瞳、そして噛み噛みの言葉。…間違いなく凶星だ。

「……シン、昨日は夜遅かったから、起きるのも遅かった」

シンの顔から血の気が引いていく。ぎりぎり、かくかくと右隣に座っていちごオレをちびちびと飲んでいるステラを視界に収めて、それ以上首を動かすのを本能が拒否した。

頭の後ろから突き刺さってくる殺気が痛い。すぐにでも振り返って弁明したい。声を大にして高らかに誤解だと叫びたい。だが、目の前でコップから口を放して、小首を傾げている少女を傷付けるのは憚れた。

「ステラもがんばったけど、疲れちゃっていつの間にか寝ちゃった」

どんどんと爆弾を投下していくステラに、シンは心底戦慄させられていく。この言い方だと間違いなく誤解を招く、と冷静な部分が告げてくるが、本能はやはり否定する言葉を並び立てるのを許してくれない。

「シン……！ あんた……」

地獄から響いてくるような、地響きすら伴って、全てを飲み込んでいく地割れの淵を片足飛びで移動されているかのような感覚を味わいつつ、シンの身体は漸く本能に打ち勝って、左隣へと引き攣る横顔をどうにかして向けた。

気絶したくなるような形相が、そこにはあった。

「……ラルス医師が来た時の朝といい、今日といい、いやらしいにも

程があるわ!」

ラルスという名前を口にする時に若干躊躇ったのに、気付いた者は誰も居ない。まあ、それどころではないのだから。

レイは特に興味もなさそうに壁に寄り掛かり、温くなりつつあるコーヒーを口に運んでいるから良いが、隣のベンチに腰掛ける姉妹がとにかく問題だ。

片方は顔を赤くして興味津々といった感じで何とかなりそうではあるが、もう片方はどちらの意味で顔を赤くしているかわからない程であり、既にシンの手に負える状態ではなかった。

「……シンって意外と大胆なのね……」

「か弱——くはないけど……女の子を襲うなんて、最低よ!」

頭が痛い。

「ね、シン。……ステラ、ちゃんと文字を書けるようになったよね」

「「……はい?」」

姉妹の声が重なり合い、少しユニゾンした。眉尻を下げた表情に浮かんでいるのは、明らかな戸惑いと理解不能と言いたげな疑問。

「えっ……と、シンが無理矢理部屋に連れ込んで、行為を強制したんじゃないの?」

殺気が緩んだお陰で、シンは漸くルナマリアを正面から捉える事が

出来るようになり、彼女の口から出た思った以上の誤解に怒りを顕にした。

「そんな事するか！俺はこの前の朝に、ルナ達の会話についていけないのが悔しくて、MSの構造とか設計の勉強をしていただけだ！」

正に勘違いの典型とも言える展開のオチは、やはりベタに落ち着くものだ。

良く考えれば、目の前のヘタレな同僚が女の子を無理矢理手籠めにする姿なんて想像出来ないし、そんな奴だとしたら既に縁を切っていただろう、と今更ながらにルナマリアは思った。

「……あはは、ゴメンゴメン」

喝いた笑い声を上げて、ルナマリアは後頭部を掻いた。素直に謝る事にはしたが、何かが引掛かっているのが気になり、漫ろな感情が浮ついていた。

「ゴメンゴメンじゃないよ…。あんな事言うなんて、ルナ、そっちの方がやらしいんじゃないか？」

「なっ！？どういう意味よ、それ！！」

シンの問題発言は流石に聞き逃せなくて、ルナマリアは思い切りベシから立ち上がり、シンへと詰め寄ったのだが、彼もそのままやられる訳にはいかないといった加減に逃げ出し、メイリンを挟んだり、他の迷惑そうにしているクルーを盾にしたりしながら、子供みたいにはしゃぎ回っていた。

その光景に軽い頭痛を覚えたレイは、冷めきってしまったコーヒー

を一気に飲み干した。普段なら落ち着く筈の味も、こんな馬鹿騒ぎが目の前で繰り広げられていれば、コーヒーの効力なんて高が知れていた。紫煙を吐き出すコックの一人が巻き込まれて、ルナマリアに蹴り飛ばされてしまった。

そろそろ止めるべきかと思い始めた時、ベンチの隅に腰掛けたステラが羨ましげに二人を眺めている事に気付いた。

「どうした？」

自分でも驚く程に優しげな声が出た。やはり、境遇が似ている者に対する共感を覚えているのだろう、艦長へ上訴した時の気持ちの乱れも、やはりこの娘に対する確かな同情によるものであったのだろう。

「…うん。シンとルナ、仲良さそうだなんて」

小さく浮かんだ笑みが儚げに見えたのは錯覚ではないだろう。その姿はまるで、二人を通して他の誰かを見ているように、レイには映っていた。

その目の端に、ルナマリアにまた蹴りを入れられてしまっている、哀れなコックに同情の念を抱いてやるのも忘れない。

「…養成所からの付き合いだからな、昔からあの二人はあんな感じだ」

遠い昔のような記憶に思いを馳せているレイの視線は、天井と壁の継ぎ目を見詰めているかのようにステラには映っていた。

それが悲しそうにしているように感じて、声を掛けようかと思ったがやめておいた。

それより大事なものが、知らず知らずのうちに抱いてしまった訳のわからないものを、自分の中から追い出すのが先決だ。

見詰めてみても、ステラの中にあるものは判然としない――いや、こんな感情を知らないだけなのだ。

シンと一緒に居れないと落ち着かない。シンと話していると気持ちが跳ねる。シンに触れると、身体全てが嬉しいと感じる。

この全てを、今感じているのはルナマリアで。湧き上がる感情の高まりに、思わずいちごオレを零してしまう。

「あっ……」

床に飛び散ったピンク色が、今の心に痛い。わからないが、この色は今自分とは遠い気がして、思わず眉尻を下げて外方を向いてしまった。

「あっ。ステラ、ダメじゃないか。零したらちゃんとふかなきゃ！」

頭の後ろから聞こえた声に、先程までのどうしようもない感情なんて綺麗さっぱり消え去っていた。

綻んだ顔で振り向くと、しょうがないと言いたげなシンの顔があり、笑顔な自分が少しだけダメだと思った。

「派手に零したわね……。レイ、ティッシュ頂戴」

シンは適当に見繕った雑巾で床を拭き始め、ルナマリアは飛び散ったせいで脚に掛かってしまった方を拭き取ってくれた。

「仕方ないな…」

「あ、私にもティッシュ頂戴」

そしてレイまでもが床に膝を付いて、ティッシュにいちごオレを染み込ませ始めた。メイリンは姉に倣い、ステラの服に飛び散ってしまった雫を優しく叩きながら取り去ってくれた。

その様子に、自分が悪いんだとわかってはいたが、上手く身体は動いてくれなかった。

ネオと一緒に居る時にしか感じられなかった満足感が、一緒に居てくれる人それぞれから貰えているとわかり、多過ぎる満足がステラの身体に染み渡ったせいで、彼女の思考は謝るとか、後始末をするとかそんな方向には向かわなかった。

重くなり過ぎた心の容量が、ステラの全てを鈍くする。だが、一つだけするりと出てくる言葉もあった。

「…みんな、ありがとうっ！」

小首を傾げたその姿に、シンは見惚れて手を動かすのを止めてしまい、ルナマリアは感謝への返事をウインクを混ぜながらに返し、レイは一瞬目を合わせた後、すぐにピンク色の雫を処理すべく床へと向き合ってしまった。

「ほらほら、シン。ステラばかり見てないで手を動かさないよ

！」

「そ、そんなんじゃないよ！」

何がそんなんじゃないのか、意味のわからない言い訳を發してしまっていた。呆けているのを見咎められ慌てていたせいで、シンはステラの寂しそうな表情に気付いていない。

それを不憫に思いながら、床に零れた雫を拭ききったレイは立ち上がってごみ箱へとティッシュを捨てた。

恋愛感情というものを理解してはいるが、興味があまり湧かない自分にとって、ステラの様子もシンの態度もルナマリアの嫉妬もメイリンの羨望も、表面上知っているだけなのだ。

レイにとって、世界の全ては一人の男性を中心に回っていた。感情的には大好きというのが当て嵌まるだろうが、恋愛とかそんな邪なものでは無い。

小さな頃から良くしてくれたあの方が居なければ、今の自分は存在しなかったろうし、亡くなってしまった《もう一人》の自分も仲が良かったのだから、因果な関係なのだろう。

しかし、今回の情報統制に関しては盲目に信じる訳にはいかなかった。それだけは避けねばならない、と心臓の早鐘が警告を發しているようだ。

（ギル、何を考えているのですか…？）

「どうかしたの？天井なんて見詰めて」

ハッとして振り返ると、そこに居たのはメイリンで、ティッシュを捨ててから動かないレイの行動が不信に思えてしまったのだろう。

「…いや、なんでもー」

否定する言葉が最後まで紡がれる事はなかった。休憩室に飛び込んできた上官の、上擦った息遣いによって齎された情報が、オーブに入ってから溜まっていた心労を洗い流したいクルー達に再びの不穏を与える。

「た、大変、だ！」

いつもならきっちりと詰襟を一番上まで閉めているアーサーなのだが、そんな事を気にしている余裕などない程に取り乱していた。

しかし、あんな事を世界に向けたニュースが取り上げているのだから、慌てるのは人間として仕方ない事だ。

「…どうしたんですか？やけに息が上がってますけど」

到着早々に、アーサーは膝に手をついて息を整える為に深呼吸を繰り返している。中々上下に動く肩が収まらず、駆け込んできた理由を知らせようとしないうちに業を煮やし始めた頃、漸くまともに言葉を発せるようになったアーサーは顔を上げる。

表情は複雑だ。

「オ、オーブが大西洋連邦からの同盟への参加要求を拒否したんだ。それも徹底抗戦も辞さない構えでね」

シンの中の何かが音を立てた。

オーブが抗戦する？大戦での惨敗を忘れたとでもいうのか？
連邦との戦力差を考えれば、敗退どころでは済まない。もし敗戦したとすれば、今度こそ全てを焼き払われる可能性だってあるというのに。

「そ、それってアスハ代表が決められたのですか？」

驚きでひっくり返りそうな声をどうにか抑え込んで、ルナマリアは尋ねた。まだ宇宙に出たばかりの頃、手を取り合う事を考えるべきだとMSデッキで悲痛な叫びを上げていた筈の彼女が、交戦の構えを見せる等とは信じ難い。

それに、休憩室でシンと対峙した時の毅然とした態度から、好感を持っていたからこそ疑いたくもなる訳だ。

「…ああ。どうやらウナト・ロマにも口を出させなかったらしい」

余計な口出しが好きそうだと初対面の時感じたように、宰相という立場を使って何かと国の大事に関わっているらしい、とは聞いているたせいもあり、アーサーは不信感と不穏な気持ちを抱く事になった。

「なあ、おかしくないか？」

酷く落ち着いた声にそこに居た全員が驚いた。オーブ国民だったシンが、戦いを避ける為に移住した彼だったら、一気に沸点を迎えて、今すぐにアスハ邸にでも突っ込んでいく事も有り得ない話ではなかったのに。

「えっ…と、何が？」

少し途切れた声が出たのは、驚きが引いていない状態で無理矢理に言葉を探して、紡いだからだ。メイリンの姉より少し高い伸びやかな声も、こんな突然降った驚きの飽和のせいで掠れてしまっていた。

「何がって、ウナト・ロマの名前が出てくるのに、その息子のユウナが出てこない事さ」

あの親子の名前は二つの一つと勘違いする程に、ほぼ確実に一緒に聞こえてくるものだ。それがオーブの政治を牛耳っているのが、セイラン家だという事を他国に印象づける最大の要因なのだ。

「…そう言えばそうね。あの気色悪い男の名前を聞かないのは良い事だけど、何か企んでそうで不気味ね」

「ああ。汚い事を考えるのはセイラン家の十八番だしな。先日結婚式も代表の弱みを使つての事と、専らの噂になつてる」

もの凄い失礼な事をルナマリアとレイは宣っているが、オーブに住む者等居ないミネルバの中で話ているのだから、大した問題にはならないだろう。

それより。

「ユウナ・ロマなら父親と縁を切つて、代表側に付いたらしいぞ」

「「「えっ!?!」」」」

再び空間を支配した驚きのせいで、妙に空気が重い。先程休憩に訪

れたバートも、紅茶を購入して取り出そうとする体勢のまま固まっ
てしまっている。

ユウナ・ロマがウナト・ロマと縁を切る。それがどれだけ有り得な
いと思われるか、バートの反応が如実に表していた。

「…あのファザコン野郎が大好きな父親じゃなくて、アスハ代表に
付いたのか…？」

先程から皆に驚きを齎してきたシンも、流石にこの内容だけはオー
ブの事情を少し知っているからといって、鵜呑みにする訳にはいか
ないと思った。

ルナマリアも、レイも、メイリンも、そしてアーサーですらもシン
と同じだ。どんな裏があるかわからない奴だ、この交戦の宣言も
何らかの策略が張り巡らされているかもしれない。

そしてここで戦うという事になると、ミネルバはどうすべきなのか。
驚きの飽和した空間に疑問まで溢れてしまい、正直気が滅入ってき
ていた。

そんな中、ステラのいちごオレを飲むコクコクという音だけが浮き
立って、何ともシュールであった。

ばらばらなパズルのピースをの一つをそこだと頑なに譲らなければ、
柔軟に対応する事が出来ないように、よりややこしい作業をする羽
目になるのは、最早日常の一部になっている確信があった。

ミネルバに降り懸かった様々な災難と呼ばれるべき出来事は、昔か

ら知る者を歪める切っ掛けになったと言われても不思議ではない。

しかし、やるべき事を片付けた後は皆と集まり、親交を深めるのが当たり前であったクロードが、義務感に駆られてMSの改造を行っている姿を見せられていると、違和感を覚えるのだ。

しかも、この二日程彼はデッキから出て行った気配すらないのだ。食事を取る事すら忘れて、インパルスの変型機構と武装の相互利用の為の基礎、そしてコアスプレnderのバーニア交換と、シルエットファイヤーの改良、挙げたら最初から構築しているかのような途方も無い作業の量を、殆ど一人で行ってきたのだ。

手が空いた時にこうして点検くらいはしてやれるが、何をどうするかなんてのは、シルエットの武装を引っぺがしている本人にしかわからない。

「クロード、そろそろ休んだらどうだ？身体、きついだろう？」

夜、睡眠しているのかはわからないが、こいつの性格を考えると、ずっと作業が続けている姿しか見えてこない。それがそのまま当て嵌まるとしたら、クロードの身体は既に限界を迎えていてもおかしくない。

「大丈夫ですよ。疲れたんなら手伝う必要はないですよ、マッドさん」

まるで平然としていない顔色でそんな事を言われても、納得してこの場を去れる筈もない。まして、このデッキで働くメカニック達を束ねている者として、こいつの昔の上司として、これ以上の無茶な作業は見過ごしてやれなかった。

「いいから休め！確かにインパルスの性能がシンに追い付いてないのは傍目でもわかるが、お前の身体が壊れでもしたら、それこそ目も当てられない事になるぞ！」

懸命に説得出来るような言葉を並べてみる。だが、一つも効力を得る事もなく時間は過ぎる。

クロードはこちらを振り向かない。ソードシルエットに端末を繋いで、プログラミングを弄っている時にふらりと彼の身体が傾いた事で、マッドの我慢も限界を迎えた。

「いい加減にしろ！無理矢理に脳を働かせ続けてるから、身体に力が入らないだろう？」

シルエットに寄り掛かって倒れるのを堪えたクロードは、それでも返事をしない。元々気が長い方ではないマッドは、無理矢理にでも寝させる為に彼の肩を掴んで連れていこうとした時、クロードは近くに転がっていたドライバーを徐に掴んだ。

そして。

「ぐううっ！！」

痛みに耐え切れず上げた呻き声と、ドライバーの先が突き刺さった太股。鮮血が少しづつ湧き出してくる様子は、その傷から伝わるシナプスの電撃が最大の力を持った事を伝えている。

「お、おい！」

そんな行動に走られてたなら、非難の言葉を掛けるのが当然である

う。マッドも例に漏れず同じように行動した訳だが、クロードは痛みが残る脚を引きずって、先程まで居たソードシルエットの側面部分に戻っていた。

「……クロード、お前……」

ここまで彼を変える出来事なんて一つしかない。それが真実で変えようのない事実。完全に贖う方法を知らずに、自分へと様々な枷を取り付けていく。正に自分を許せない者の鑑。

「まだ代表の事、引きずってるのか？」

友が愛する者を守れなかった罪悪感は、そんな事を経験していないマッドに想像出来ない。

それに、ここまで自分を追い込む事も出来ないのが、ごく普通の人間の姿であろう。

「……守るべき国家の代表を傷を負わせ、その上護衛役だった俺が無傷で帰ってきてしまった。それだけの事ですよ」

……どこをどう聞けば、それだけになるのだろうか？ 思いつ切りひきずっている口調と表情。

「だからあれは――」

「それよりマッドさん、見てもらいたいものがあるんだけど」

話の腰を叩き折られてせいでマッドは不機嫌になったが、クロードが突き出してきた端末は反射的に覗き込んでしまう。これは職業柄

仕方ないのだ。

しかし、除いた次の瞬間には怒りの近い感情は綺麗さっぱり消え去っていた。残ったのは端末を覗いた時に追加された戸惑いの感情。

「こ、これは！こんな設定、誰も乗りこなせやしない！」

見た瞬間にわかる。この案は完全にボツにすべきものだ。しかしマッドの無理発言を聞いても、クロードの意思は全く揺るがない。逆に先程までの虚な瞳に、確かな光が宿っているのだから始末に終えない。

「いや、そんな事はない。今のシンになら扱える筈だ」

根拠のない自信程、無意味に思えるものはない。シンは気性が豹変するという問題を抱えながらも、エース候補として艦に配属されたのだから、確かな操縦技術を持っている事はわかっている。しかし――。

「この形態の時に感情を抑えられなくなったら、それこそそこら中が血の海に変わる！」

「いや、そんな事は起きない。シンなら絶対に乗りこなしてくれる筈だ」

「……勝手にしろ！」

振り向いたマッドは複雑な気持ちを抱いて、デッキを後にする事になった。あれ程に決意の強い純な瞳を久しぶりに見て、考えを変えらるつもりはないと悟ったのだろう。

こうなっただらもう良い。あいつの好きなようにやらせるしか無いだろう。

マッドの去ったデッキに響くタイピングの音。端末の画面にはプログラムの構成と、そのプログラムの名前、インパルス^Yと映し出されていた。

PHASE-34 ……勝手にしろ！（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

今回の話の前半がほのぼのとしているのは、人間関係による人の心の変化は、どれだけの影響を与えるかを、前回までの話と対比する為に描きました。

こう行った少しづつしか進まないであろうSSですが、どうぞお付き合下さい。

では、お疲れ様でした。

PHASE-35 地球へ!?(前書き)

愛する者の気持ちが変わらない不安、取り留めのないふわふわとした、掴みどころのないカガリの放った言葉。それらがアスランを苛む。そんな彼の前に現れたのは…?

また、イザークも議長の意味がわからずないが為に苛まれ、ある決断を固めるのだった。

PHASE－35 地球へ!?

アスランは驚いていた。

会議室でウナトが勝手を働いていると知らせがあり、それを咎める為に向かった筈なのだが、大胆にもカガリは大西洋連邦との徹底抗戦を宣言してしまったのだ。

高が小国であるオーブが国の集まりである連邦に勝てる道理等無いし、勝てたとしてもまた同等以上の戦力を送り込んでくるに違いなく、疲弊した戦力を駆使して戦ってはいけない。

つまり、宣言と同時に敗北を喫した気分には陥っているのだ。

二つの感情が絡まり合い、更に混沌としていく頭の中が辛くなり始めた頃、アスランは病室にカガリを送りとどけた帰りであった。

「アスラン」

俯けて歩いていたせいで、前から誰かが歩み寄っている事に気付いていなかった。ぎよつとして顔を上げると、そこには少し前まで忌むべき相手と称してもおかしくない人物が居て、眉間に皺、目付きは多分睨む形になっているだろうと思う。

「…そんな怖い顔しないでよ。確かに、君からすれば僕は許せない奴の筆頭だろうけど」

薄い青色の髪をわしゃわしゃと弄りながら、ユウナはバツが悪そうに表情を歪めた。

しかし、そう簡単に許せる程アスランの怒りは甘くはない。無視を決め込んで横を通り抜けようとした時、右腕を掴まれ脳内に苛立ちが生まれた。

「…離して下さい。あんたと会っている場合じゃない」

「それはオーブの問題を君の友人に、例えばあのクロードというザフトの軍人や、フリーダムでカガリの身に危険を齎した、キラ・ヤマトに相談するという事かい？」

「……それは…」

思わず視線を斜め下に逸らしてしまう。こんなごたごたとした内容の相談を他国の者、そして国の保護下にあった者に相談する等もつての他だし、国の一大事を広めてしまう原因にも成り兼ねないだろう。

だが、アスランはわからなくなっている。

カガリの判断は本当に彼女自身が出したのか？

あれ程戦う事を避ける為に全力で外交を行っていたのに、どうしてあんな無茶な選択をしたのか？

また頭がこんがらがり始めた。心が乱れて、冷静に物事を見れていない事はわかっていたが、これ程に酷い状態だったとは思ってもよらなかった。

「…この問題はカガリの独断と見て良さそうだね。僕等の預かり知

らぬ所で、何かが動いていたとしか思えない」

コツリ、コツリとこちらに近付いてくる足音。

「お互い大切に思うからこそ、厄介事に巻き込みたくないのはわかるけど、大切だからこそ全てを話すべきなんだけどね…」

ユウナ自身も人の事を言えた義理では無いと理解している。大きな家柄であるから、女性関係で苦労した記憶は無いが、やはりお坊ちゃんの典型とも言うべき、本当の恋愛というものを経験していなかった。

そんな自分が、目の前の男から愛しい人を奪おうとした自分に言われたくはないだろうが、憧れを抱いていた少年時代があったからこそ、落ち込みつつあるアスランに言いたいのだ。

大切なら隠すな、と。

「……そうだな。俺とカガリの薄い絆じゃ、こうなっても仕方ないのかもな…」

しかし言葉は逆に作用する。自分で思ったようには、中々上手く誘導出来るものではないだろうが、余計に落ち込ませるつもりはなくて、無駄に焦りを感じてしまいうようになったが、アスランの落とした言葉には間違いがあった。

それはユウナからすれば、本当に悔しい事であった。

「……君とカガリの繋がりが弱い、ね。それは本心で言っているのかい？」

「…どういう意味だ」

再び俯けていた顔を上げて見えたアスランの瞳は、うるうると水の膜を纏い、ゆらゆらと黒目が動いていた。

自分で放った言葉の威力に、自爆した形になったのだろう。自分を貶ること自体には強くなれるだろうが、想像の中に浮かぶ大切なものに、本当にそう言われてしまったとしたら、どんなに慣れていたとしても傷心しないのは難しいだろう。

昨日までの自分だったら、間違いなくここでアスランを馬鹿にするような態度と言葉を並び立てたのだろうが、今は敗北を認めざるを得ない格好になっている。

この前のリムジンの中を思い返して、改めてそう思うのだ。

「チャペルに向かう車の中、本来なら代表と次いで権力のある家が結び付くめでたい日に、笑顔すら見せずに俯いて、僕が注意するまで嵌めた指輪を握り続けてたんだぞ」

「指輪って…」

普段から飾り気のないカガリが身に付けているアクセサリーは少ない。そして、その中には指輪はアスランが贈るまで含まれていなかった。

と、いう事は――。

「君が贈ったエメラルドの指輪さ。カガリはあの指輪で繋がった君

を想ってた。こんな事実があるのに、まだ絆がどうか言うつもり？」

「……………」

結局、カガリの心に住み続けていたのはアスランで、自分が入り込める隙間なんて無いに等しかった。

オーブ国民誰もが望んだ筈の結び付きはフェンリルに潰されてしまい、簡単に諦めるつもりはなかったカガリの気持ちに、一分にも満たない隙間を見出だしてやる事も出来なかった。

「君達が想い合っているからこそ、カガリは障害を背負うだけで済んだんだぞ？」

もう少し自信を持ってもいいんじゃないか？」

昨日まで躍起になってカガリを手に入れようとしていた奴が言える科白ではない、とアスランは浮かび上がらない脳内でそう思った。

間違いなく昨日まではカガリを権力を不動にし、大西洋連邦に加盟する為の障害を取り除く意図しかなかった筈だ。

しかし、フェンリルに襲われ、クロードに助けられ、病院に運ばれたと聞いて会いにきた後からのユウナはまるで別人だ。

毛嫌いしていた自分と普通に話すようになったし、カガリとの仲を邪魔するような言動も成りを潜めていた。

人は経験と共に内側から成長するものだと言うが、昨日の出来事で彼をここまで変えるものなんてあっただろうか？

「…ユウナ、一つ聞きたい」

「なんだい？」

「カガリの事を、本当はどう思ってたんだ？」

普通、こんな事を聞かれると羞恥や矜持なんかが邪魔をして、慌てたり、取り乱したりするものだと思うのだが、目の前の男はそんな様子等微塵も見せなかった。

「…好きだったよ。いや、まだ好意を抱いている」

ユウナは静かにそう紡いで、アスランに背を向けた。背中から伝わってくる感情は、哀愁。

「いつでも真っ直ぐで、希望を捨てようとしなない強い意思、綺麗な金色の髪に、それに際立たされた青色の瞳。けど、それだけじゃない。時々見せる弱い女の子の素顔が、より良い部分を強調するんだ。好きになるな、という方が難しいだろう？」

アスランもこれには同意するしかなかった。

惹かれた理由は間違いなくユウナと同じで、まるでもう一人の自分と対面しているかのような錯覚を抱く程だった。

これはカガリに対する想いだけじゃない。父親に反抗した事とか、その後に憑き物が取れたかのように敵方に味方する部分など、大戦時に自分が経験したそのままのような気がする。

「……そう言えば、ウナトの様子はどうなんだ？あの時の静けさは異常な程に不気味だったんだが……」

会議室への扉を開け放った時にウナトが浮かべたのは、間違いなく驚愕だった。それはカガリがこの会議に気付いていないだろう、と高を括っていた所へ現れたからだだろうが、その後何もせずに固まっていた事が気になるのだ。

反論なり、連邦への加盟で得られるものを説いたりすれば、少しはカガリの中に響く可能性もあっただろうに、ウナトはそう出来なかったのか？

いや、敢えてしなかったと考えるべきなのかもしれない。

糸口を掴んだだけでは全ての謎を解けないように、ウナトには逆転に賭ける切り札があると仮定して、その後の反論が状況を悪化させるというのなら、彼の判断は正しかったのだろう。

「……実はあれから一度も会っていないんだ。……なんていうか、その……所謂勘当された身なんだよ、僕」

なんて言うカミングアウトを、病院の廊下という声が響き渡る場所でするのだろうか。こんな風に耳に残る状況でそんな事を言われたら、何となく浮かんでしまう罪悪感に、ユウナへの同情が禁じ得なくなってしまう。

「父上に上訴して、あの後家に帰る為に車に乗ろうとした時に執事に止められてね、伝言とか言って宣ったのが――」

「勘当、って事か……」

申し訳なさそうに頭を掻いているユウナを見ると、更に強い罪悪感が心を支配していく。

二人の仲を良く知っているわけではないが、俺と父さん程に微妙な関係という訳ではないだろうから、失敗した自分達を重ねてしまい少し悲しい気分になり始めていた。

「…そういうこと。だけど後悔はしてないよ。実際すっきりとした気分なんだ」

言葉の響きは軽やかだった。多分今まで親に逆らう事なく生きてきて、初めて自分の意思を優先する事が出来たのだろう。やはり昔の自分にそっくりな気がする。

「抑圧されてたとか、束縛されてたとかそんな事はなかったんだけど、やっぱり堅苦しいとは思ってたのかもしれないね。そうでなければ、こんなに悩まないではいられないだろうし」

「…そうか」

妙に納得出来たアスランは、ユウナの目の前に歩み寄り手を差し出す。

許す訳にはいかないが、覚悟を持って親と対峙していた事に共感が持てたからだ。

お互い無言だったが、言葉少なでも理解はしていた。親に反抗した同士、気持ちを共有したかのような錯覚に言葉は不要だ。

そして、握り合った掌から伝わってくるものは無い。敵意が先行し

ていた二人に、これ以上が通じる事はなかった。

あの後味の悪い攻防戦を終えた後、ボルテールはアプリリウスに帰還していた。そしてイザークは更なる訳のわからない状況の発生に、最高潮な苛立ちを抱えてしまっていた。

戦って、戦って、戦って。神経を擦り減らしながら、やっとの思いで落としていた核装備であろうMS群が実はデコイで、その後アプリリウス周辺に現れた、ミラージュコロイドを装備した数体まで囷。本命はアーモリーワンへと核攻撃を仕掛けようとしていたのだが、それは閃光に包まれて一瞬で消滅した。

その光に見覚えがあった。前議長がナチュラルを滅ぼす為に開発した戦略兵器、ジェネシス。

威力も射程距離もお墨付きの力であるが、あまりにも憎悪の念が強すぎる為に、プラント評議会で使用を禁止すると共に、宇宙に浮く只の機械の塊のままにしておく筈だった。

しかし、再び命の息吹を与えられて稼動した殺戮兵器は、アーモリーワンの絶望的な危機を救った。その事実があるだけでジェネシスを肯定する民衆も出てくるだろうが、そんな樂觀できる事態ではないのだ。

目の敵に成り得る兵器なんてニブルヘイムだけでも十分に余る程だというのに、前大戦で猛威を奮う筈だったナチュラル殲滅用の兵器まで登場してしまうとあらば、連邦に加盟していない国々も一つに纏まり、プラントは完全に地球という惑星一つを敵に回す事になる。

それだけじゃない。あの状況でジェネシスが改修され、それを使用する決断を下せるふざけた人物など一人ぐらいしか想像出来ない。

あの飄々とした笑顔で今回も議會を撒いたのだろうか、もう我慢ならない。

「イザーク！待てって！少し落ち着けよ」

イザークは肩を怒らせて議長室への廊下を突き進む。後ろから迫るディアツカの声と足音は耳に入っていたが、今はそんなものは些細な事だ。

いつもなら隠し事なんて政治では在り来りなものと割り切れるが、プラント議會最高議長本人が、暮らしているその場所を自ら破壊しようとしているとは思えないのだ。

「待てって言ってるだろ！」

いつもより高い位置にある肩を掴んで、どうにか沸騰寸前の頭を冷やさせようと試みる。

普段のイザークであれば、多少の暴走を起こしていても誰かの意見で我を取り戻したり、自分で冷静な部分を引き戻したりするのだが、如何せん今回はそんなに甘い環境にはない。

「今議長の所に行ったって何も話しちゃくれない！

お前も知ってるだろ？報告にジェネシスのジの字も載ってない事は」

やはりザフト全体に良くも悪くも多大な影響を与える事象だ、情報統制を上手く使って混乱を招かないようにしているのは立派に思え

るが、結局は自分が行った事を正当化しようとしているのでは？と疑問が湧き上がってくる。

プラントを守る為と言えば聞こえは良いが、思慮深い人からすれば短絡的に映るだろう。

大切なものを守れるだけで良いのか？
その為に他を犠牲にしても良いのか？
そもそも地球を攻撃する為の兵器が、守る力に確実に還元されていくのか？

信じたくても、疑い深い自分は信じられない。議長は地球の壊滅を望んでいるのではないか？とうたぐってしまうのだ。

「離せ！ディアッカ！俺はもう我慢ならん！」

問い詰める、とにかく問い詰めてやる。一兵倅にしか過ぎない自分だが、これ以上の隠匿行為を見過ごしてはいけない。

正義感とかそんなじゃない。何も知らずに散っていく同胞が可哀相過ぎると思うからだ。

「我慢しろ！上がどんなに腐っていたとしても、指示を受けて動くだけの俺達が意見してはいけないんだよ！」

「……知ってるさ」

「えっ？」

「俺達の上に立つ者達の操り人形で、都合良く使える駒だってわか

ってるさ。…だが、俺はただの操り人形や駒で居るつもりはない」
知っているから、理解しているからこそ止めなくてはいけない事だ
つてある。それがどんなに無謀で、越権で、不遜な事であっても。
それが小隊を束ねる者の役目であると自負している。

「……仮に、仮にだ、議長に会えて話をしたとして、意見を受け入
れてもらえなかったらどうするんだ？
お前の態度次第では、除隊処分だって有り得るんだぞ！」

議長は人の意見を聞かず、自分の意思が全てと思っている方ではな
いが、上に立つ者は自分のプライドを傷付けられる事を極端に嫌う。
熱くなりやすいのがイザークの性だ、いつ癪に障る物言いをするか
もわからない。

こんな下らない事で、折角復帰してこいつの隊に配属され、また一
緒に戦っていきえると思った気持ちを消されてしまうのは嫌だった。

「そんなもの、覚悟の上だ！」

一切振り向かないイザークの態度が、どれだけの覚悟を固めている
かを物語っていた。

今から向かう死地のような場所へ、イザーク一人を送り込む訳には
いかない。ディアッカも覚悟を決めた。

「…わかった。お前がそこまで言うなら止めない。だけど、俺も一
緒に行くぜ」

「何？」

掴んでいた肩から自動的に手が外れた。それはイザークが、漸くデ
ィアツカの方へと向き直った事を表していた。

色素の薄い瞳が揺れている。やはり自分がしようとしている事が、
どれだけのリスクを孕んでいるかを把握している、という事か。

そしてイザークの事だ、自分を巻き込みたくないとかそんな下らな
い事を考えているのだろうか、そんな訳にはいかない。

「お前一人を犠牲にさせやしないさ。それに、出来るなら軍に残っ
て貰わなきゃいけないからな」

ディアツカの口元に、にやりと浮かんだ笑みがイザークに嫌な予感
を降らした。あの顔は、餓鬼が好きな女の子がいると言った友達を
からかう時に浮かべるものと、非常に良く似ていた。

「隊の奴ら、その中でもシホの為にもな！」

やはりそう来るか。こいつがさっきの顔を浮かべる時は、最近の傾
向として、シホの話題を上げる時の予兆のようなものになりつつあ
った。

それが嫌な訳ではないが、こいつの魂胆丸見えのやり口がどうしても
も気に入らなくて、

「……あいつとは別にそんなじゃない……」

反論を口には出してみるが、全力で否定するのは何故か憚れるので、子供のパンチを態と痛がる親のような態度で、ディアツカは大袈裟に反応を示すのだ。

「あーあー、そうだった。シホとの絆は切れないから、辞めさせられたとしても大丈夫って事か？」

何と言う誇大妄想。親友とと思っているこいつとの関係も、ただの白日夢として片付けてしまえたらどんなに気が楽か。

「……言ってる！」

どっちにしろ否定の言葉を否定し合ういちごっこが展開されるだけの話。だったら早々に打ち切ってしまうのが得策だ。

「ちょっと！反応してくれなきゃおもしろくないじゃん！」

歩みを早めたイザークに追いつく為に、小走りで駆け寄ってきたディアツカ。その脳天気映る姿が、緊張の糸を張り巡らせてしまい、ぐちゃぐちゃに絡まりつつあった脳内を綺麗に纏めてくれていた。

やろうとしていた事の明瞭化による効果は、イザークが思っていたよりも高いようだ。事実、あんな馬鹿なやり取りも役に立つ事を教えられるという、僥倖とも言えるべき流れが形成されたのだから。

「馬鹿なやり取り、はないじゃない？」

どうやら思わず口から出してしまったようだ。しかし、そんな事は全く以ってどうでも良いのだ。

「ディアツカ」

先を歩いていた筈が、いつの間にか並んでいたこいつに浮かべる感情なんて決まっている。

「済まない、ありがとう」

気持ちは落ち着き、議長の元へと突入する準備は整った。今からする事は、多分軍の中では異例中の異例だ。政治的隠匿に軍の関係者、それも大した地位に居る訳ではない、高が小隊長が意見しようというのだから。

議長の詰める部屋の前、仕切られた扉の前でイザークは深呼吸を一つ吐き出す。落ち着く為とかそんなものじゃない。気持ちを完全に切り替える為だ。少し後ろに立つディアツカを窺い、互いに頷く。

「失礼します！」

ノックを二つと共に入室する。中が取り込み中でも、状況的にはこちらが抱えている用件の優先度が高い筈だし、議長お得意の飄々とした態度で躲す事を許さないよう、この程度の方が好都合だろう。

真っ先に飛び込んでくる机に議長はいらっしゃらない。そこで部屋を見回してみると、議長は備え付けのクローゼットの前に居た。どうやら着替えていたらしく、いつもの衣装ではなく他国へ赴く際に纏う、デザインがいつものより少しだけ豪華になったものをお召していた。

「議長！」

考え込んでいるようで、議長はこちらに気付いていない。クローゼットの前で立ち尽くしているようにしか見えないし、もしかしたら大変な事があるのかもわからないが、今はこちらの話を聞いて貰わなきゃ腹の虫は収まらない。

「議長!!」

今度は近付きつつ言ってみる。そうしたら、漸くこちらに気付いたようで、声のした方向を向く為に上半身と首を左へと向けた。

そして捕捉した二人を見て、デュランダルは静かにほくそ笑んだ。わざわざ呼び出す手間が省けたと。

「やあ、イザークにディアッカか。今回の攻防戦は良くやってくれた、お陰で一つのコロニーも落とさずに済んだよ」

いつもの胡散臭い笑顔で対応するのは、既に当たり前の事であるので慣れている。余程の事態でなければ、この顔が崩れる訳もないだろう。

しかし、こんな事を気にしている場合ではない。気にしても仕方ないのだ。

「…議長。この度の事はどう弁明されるつもりですか？」

イザークの表情は固い。揺るぎない意思を乗せた言葉は、その決意と相俟って表情を際立たせていく。

隣で後ろ手を組んでいるディアッカは、いつものおどけた性格を潜ませて、イザークの雰囲気強める手伝いをしているように見受け

られる。

「どう、とは？」

しかしデュランドルに変化は無い。飄々としたいつもの顔で二人を交互に見て、口から発した言葉は惚ける為の布石としか取れないものだった。

その一言に不快を露にしまいそうになって、イザークは中から込み上げてくる感情に箍を嵌めた。

だが、いつ我慢の限界を迎えるかはわからない。それはイザークの眉間に刻まれた皺が何よりの証拠だ。

「逃げられるなんて思わないで下さい。どんな事があってもあなたに問い質すと、今日は決めてここに来たんだけ」

本気を滲ませる雰囲気を感じ取って、デュランドルの表情は一気に引き締まる。

確かにあの兵器を引っ張り出した瞬間に、軍内部から非難する者が現れるだろう事は予想出来ていた。それが欲に塗れた者であったなら、それなりの代償を払う事でどうか解決しただろうが、今回ここに現れたのは地位に溺れた者でなく、望むものの少ない一兵卒で。

この二人のなら、話しても大丈夫だろうと思った。

「…ジェネシスの事だね？」

導入は兵器の名前で行われた。それに食いついたのは、勿論説明を

切に願っているイザークであったのは言うまでもないが、先に口を開いたのはディアッカだった。

「今回の戦闘で、私達は核に細心の注意を払いました。それは一体を確実に破壊し、核による誘爆を防ぐ目的が主に上がったからです」

「そのせいで、精神を擦り減らしきった者は墜ちました。それもザフトがプラントコロニーを守る為にも致し方ない犠牲であると割り切れたから、悲しむ事より誇りに変えていく事が出来ました」

イザーク、ディアッカ双方に浮かぶはやる瀬なさ。この後にくぐりあろう話の続きが、デュランダルには容易に想像できてしまい、小さな刺が突き刺さる。

「だがジェネシスが使えるのなら、犠牲者を出す事なく敵大隊を退けるのも不可能ではないでしょう!？」

それと、本来なら破棄される筈だった兵器が稼動した事は、ザフト内部も、大西洋連邦も黙っちゃられない」

尤もな意見を連発されて、流石のデュランダルも舌を巻く。ここまですべて考えている一兵卒も、ちゃんと軍内部にもいるのだと思うて嬉しくなってくる。

しかし、喜んでいるだけではないけないのだ。

「確かに、ジェネシスの存在を明かさなかった事により生じた犠牲者には、哀悼の念を捧げたいと思う。しかし、いくら軍に所属しているからと言って、全ての情報を与えてしまう訳にもいかないのだ」

隠匿主義といった奴か。政治家の得意技であるが、議長もその一人であると再確認する。

都合が良く、しかもイメージアップにしか繋がらないものだけを選びすぎている輩と変わらないと。

「中には君達に与える影響が計り知れないもの、所謂タブーのようなものがたくさんあるからね。ジェネシスもその一つだ」

「そうだとしても、下で犠牲になっていく者達が少なくなるのなら、積極的に情報を公開しても良いでしょう!？」

隠し事、知る必要のない用件、上層だけで共有されている重大な案件。良い加減にうんざりしてしまう。

「それとも、俺達は補充が簡単な戦力ではないのですか……?」

「……」

デュランダルは何も言わない。黙って、少し俯いたイザークの頭頂部を見詰める。これに何の意味があるかディアツカには理解出来なかったが、次に出てきた議長の言葉が更なる困惑を二人に持たせる事になる。

「君達が求めているものがわかった。なら今からジュール隊の旗艦、ボルテールに出航準備をさせて貰おう」

意味も訳も何もわからない。唐突過ぎて、二人の頭の中は真っ白に塗り潰され、からっぽになってしまった。

しかし、一つだけ理解出来た箇所もある。議長はボルテールに乗ってどこかへ行くつもりなのだと。

「……それとこれがどう繋がるんですか？」

当然の疑問であろう。先程まで宇宙に居たというのに、帰ってきた次の瞬間にはまた新たな航海に出なければなくなり、クルー達は大した休憩を与える事も出来なくなる。

その上、言い募った事に対する返答がこんな感じでは納得出来る筈もない。

「話は艦に乗ってからでも出来るだろう？それに時間は待ってくれない。急いで地球へ降りなくてはならないのだ」

「地球へ!？」

ディアツカが驚いたのも無理はない。議長は敵だらけの陣地へと、たった一つの武器だけで飛び込もうとしているのだから。

「今やほぼ開戦した状態です！地球への降下はあまりにも危険です！ザフトが駐屯する基地があるにしたって――」

「誰が基地に出向くと言ったのだ？」

二人は同じ表情を浮かべる。検討違いを驚く顔じゃない。何処に行かかわからないが為の困惑した表情だ。

「向かうのはオーブ首長国だ」

「「……えっ…?」」

茫然とする二人に、確固たる意思を見せる一人。互いに存在するが為に浮き彫りとなり、対比と対称がより濃く描き出されていく。

そしてこのデュランダルの決意こそが、これからの世界に大きな影響を及ぼす等、運命の因果すらも想像出来ないだろう。

PHASE-35 地球へ!?(後書き)

お読み頂きありがとうございます。

ミネルバ組と違って、書き進める度にシリアスになっていく他の面々。

元々おもしろい文章を書く才能がない自分ですが、あまりにも笑いに欠けた話で泣けてきました。こんなのばかりで皆さんは楽しめるのでしょうか…。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-36 親友ですもの（前書き）

揺れているのは、何もオーブやミネルバ、プラントだけでは無い。
これ程に複雑な世界の中では、揺れるなと言う方が難しい筈だ。

しかし、世界は無情にも彼らの思いを押し流してしまう。争いという業火の渦で。

PHASE-36 親友ですもの

深海の底は青なんて生易しい色彩ではない。陽の光なんて差し込む気配の無い、ひたすらに真っ暗な空間。生物の目は退化して、音や感覚によって敵から逃げ出し、獲物を捕食する盲目の空間。

そこにひっそりと息づく一柱の天使。本来なら宇宙を颯爽と駆け抜けている筈のそれは、環境適応力の高さを遺憾無く発揮して、本来息づく場所とは逆な物凄い圧にも耐えている。

（全く、地球連合の技術には驚かされる一方だ）

アークエンジェルの士官室の一つで、自前のコーヒーを一口含んでバルドフェルドは小さく溜息を吐き出した。

隠れる場所としては最適な場所を見つけ出し、艦長の責務をきちんと果たしている。その上、艦を動かす最低人数以下でも仕事を熟せるのだから、極めて優秀な採点を与えるしかない。

そして少しゾツとするのだ。大戦中はどうだったかは知らないが、敵の戦力だけを分析して、それに乗る人物の調査を疎かにしていた事に。

勿論、幾度この艦を救ってきたストライクのパイロットは調べをつけていた。まだ十六そこの少年で、我々と同じコーディネイターである。本当に戦争というものの、愚かさや憎らしさを改めて痛感させられたのを今でも憶えている。

そして調べが付いたのだから、ぶつかり合うのは必然だ。最初は経

験に勝るこちらが勝つのが当然で、心の中は申し訳のなさで一杯だった。

しかし、不確定の要素が少年に含まれている事までは調べられていなかった。地の利と経験を生かし順調に追い込んで、ストライクのフェイズシフトが落ちた時だった。エネルギーも底を尽き、慣れない場所での戦闘で体力的にも限界の筈。だが。

ストライクの動きが一段と良くなったのだ。

これがクルーゼ隊の報告に上がっていた事で、自分が狂戦士と称した本当の理由だったと気付いたのは、バクーを墜とされアイシャを失っても尚生き延びてしまった時だった。

そう考えると本当に因果な関係という訳だ。大戦の末期はエターナルとアークエンジェルで別れてはいたが、共に戦う同士となっていた。

そしてその関係の延長線上で、今の深海に潜むアークエンジェルと共に居る状況へと帰納するという訳だ。

そこまで思い返してコーヒーを含むと、既に舌がより苦く感じる程度に冷めてしまっていて、小さく苦笑を漏らす。

（思い出を共有したとは言えないのに、これ程に溜まっているとは全く以って凄い奴だよ）

香りの立たなくなった冷たいコーヒーを一気に飲み干す。熱い時よりも身が引き締まるような気がして、バルドフェルドは次に起きる事態への対策を少しづつ練り始めた。しかし、それは徒労に終わる

可能性が非常に高い。

世話をかけていた国の大事を見過ごすのは薄情ではあるが、今オーブはアークエンジェル並びにフリーダムを味方と区別する事はないだろう。

幾らかガリが代表を務めているといっても、全面的にフリーダムが悪い訳ではないにしろ、結婚式の最中にMSで乱入しておいて、敵じゃないと現れたとしたら拙いを通り越してしまう。

しかし、オーブが現存の戦力で連邦と戦える筈もないのが現実だ。オーブをひとすれば、連邦は十、いやそれ以上。

結果も結末も見えている状況で抗戦を宣うとは、国を守る気概を無くしてしまったのか、はたまた気が狂ったのか、どちらにせよ良くない傾向にあるのは明白だ。

「…全く、難儀だねえ」

また込み上げてきた苦笑を漏らした時、ドアを二度ノックする音が聞こえて、バルドフェルドは中に居る事を告げる為の返事をする。

入室してくる御脚は見覚えのある黒いストッキングを履いていて、それだけで誰か特定出来るのだから、男の性がどれ程馬鹿なものか思い知らされた。

「ごめんなさい。ちょっと良いですか？」

控えめな感じがそそられる仕種を見せ、身体半身を隠しながら右足と顔だけを見せるマリューに構わない意を告げる。

入った彼女に備え付けの椅子に案内し、落ち着かせると表情が曇っている事に気付いた。

「…まだキラは引きずっているのかい？」

「……ええ。アスラン君に言われた事が相当堪えているみたいです。親友ですもの」

セイランとアスハの結び付きはオーブを悪い方へと向かわせるだろう、との結論がアークエンジェルクルーの総意であった。

そこで実行する事になったのは代表の拉致。オーブ国内の世論を敵に回し、首脳陣の思い通りになる可能性もあったが、セイランの力が強まり過ぎる方が危険であろうと思われた。

だから、確実に攫えるであろう作戦。フリーダムによる強襲を企てたのだが、護衛についていたザフトのMS、ラグナロクとインパルスに阻止されてしまい、挙げ句、フェンリルというフリーダムに非常に良く似たMSに、一時はカガリを殺されたとも思われた。

しかし、アスランの駆るセイバーにより難を逃れ、今は下半身を不自由にしてしまったが、議会に顔を出せる程度には回復しているようだ。

フェンリルを追い払ったのは、ラグナロクとインパルス、そしてセイバーのセカンドステージに属する三機。キラは、カガリを失ったあまりのショックに動けなかったと本人から聞いている。

仲間を、姉を失ったとあらば、本能が拒絶反応を起こすのは人間として当然であり、アスランもそれを咎めた訳じゃない。

「…《お前が出て来なければ、こんな事にはならなかった！》か…。
言い方はお粗末だが、確かな事実なんだよねえ…」

仮にキラが現れなければ、フェンリルがカガリを狙った時に、護衛についていた二機が身を呈してでも守っただろう。彼女が障害を背負う羽目にもならなかっただろうし、国内に大きな混乱も起きなかっただろう。

しかし、キラが現れたからこそカガリは自由なままで居られるのだ。もし、セイラン家に嫁いでいたとして、彼女がその身を快活に動かせる時なんて一生無かっただろう。

どちらも真実。どちらを選んだとしても、カガリは一方の自由を失うのだ。

なら、今の方がよっぽどマシなようにバルドフェルドには思えた。

「けど、キラ君がカガリさんを思っただけの行動なんだから、そこまで言う必要は無いと思うんです」

「……それは一概には言えんだろう」

人を想うからこそ、人は誰かの為に強くなれる。そう偉大な先人達は残しているが、それがまた真理とは限らない。

人の性格は様々だ。他人を思い遣れる奴も居れば、自分自信で精一杯の奴も居る。そしてこれらは、どちらも人一人の中に共有されている思考だ。

どちらを失ったとしても、人は命を紡いでいけなくなる。

「人なんぞ適当に自分に利益があれば、少なからずの報酬だとしても行動出来るもんだ。

そこにあるのは損得、誰かの為に自分を犠牲にし尽くせる奴なんで居ないのさ」

「……キラ君もそうだと言いたいんですか？」

垂れていた眉は釣り上がり、瞳は非難の色を強めた。仲間内で仲間を貶しているようなバルドフェルドの見解に、カガリを想うキラの思いが馬鹿にされているような気がした。

「そうだよ」

「…えっ!？」

バルドフェルドは一切の否定を見せなかった。何の躊躇いもなく肯定を示し、カップを二つ持ってコーヒーマーカーへと向かっていく。

「カガリを想う、という建前があるけど、結局はオーブの独立を保って欲しいという、僕達の我が儘が一番の理由だと思うんだがね」

「………」

その通りだと、マリューは怒りを引っ込めて俯いた。オーブが独立を保ってくれなければ、自分達の居場所を失う。ただでさえ、大戦の英雄と称される事の喧騒が嫌で身を隠していたというのに、アーケエンジェルで飛び回れば、いやがおうにも目立ってしまう。

だから、この艦は帰る場所にはなりえないのだ。有名過ぎるのが仇になるなんて、まるでアイドルにでもなった心地の悪さをマリューは感じている。

「…キラだけじゃない。僕達も同罪なんだ。オーブという唯一安らぎを感じられた、《帰れる場所》を失いたくなかった為の行動だったんだから」

同じ十字架を背負っている。そのプレッシャーは果てもなく大きいようで、そうでもないのかもしれない。曖昧でふわふわとした感覚を伴って、罪悪感を縮小させている気さえした。

それがどうしてなのか、自分達にも判断出来ない。掲げた大義名分があるからなのか、それとも最悪のケースである、命が失われていないからなのか。

戦争を経験してしまうと、命を失わない事が最大の幸福にも思えてくる感覚の麻痺。

「…結局、人間なんて自分本位なのが当たり前ですものね」

マリューが俯く。伏せられた瞳に映るのは、こんな自己犠牲に走れない自分への不甲斐なさだろう。

優しい性格をしていて、誰とも気持ちを共有してしまう事が災いし、マリューの精神はあまり良い状態とは言い難い。特にムウ・ラ・フラガを失った時を境に、その症状が顕著になっていた。

大事な人を亡くす悲しみを知っているバルドフェルドだからこそ、

掛けられる言葉があるのではないかと自問自答してはみるが、浮かんでくるのは陳腐でそこら辺に有り触れたものばかりだ。

二人の間に沈黙が落ちる。気まずいというよりは、空気が重たいせいで動くのが億劫になるそんな空間。

そんな静寂を破ってくれたのは二回響いたノックの音。扉が開け放たれて姿を見せたのは、背筋がピンと伸びた、流石の気品を見せ付けるお嬢様。

「やはり、ここにいらっしゃいましたのね」

上品な言葉遣いが雰囲気と相俟って、口元に緩い笑みを浮かべた表情を彩る。

「どうしたんだ、ラクス？」

どうしても圧倒されてしまう雰囲気を漂わせる彼女に、付き合いが他の者より長いバルドフェルドは普通に接している。

別に普通に話したり出来ない訳ではないが、どうしてもぎこちなさが残ってしまう事をマリューは自覚していた。

「ええ。バルドフェルドさんもラムias艦長もキラの部屋へ来て頂けませんか？」

「キラの部屋に？」

部屋を移動するのは客かではないが、いまいち理由が推測出来なくて、バルドフェルドは渋る表情を彼女に見せた。

「はい。大事なお話があるんです」

大事な話の予想は全くつかないが、ここで渋っていても仕方ないと判断し、バルドフェルドは立ち上がった。それに倣うかのように、マリューも椅子から腰を上げた。

そしてラクスは歩き出す。それに続く二人の構図が、何かを暗示しているかのように思えて仕方なかった。

言い付けられた遠征の為の準備は全て整った。後は海を渡り、戦うべき国を屈服させるだけである。

「……ちゃんとした休暇が欲しいもんだよ……」

大西洋連邦の宇宙艦である、ガーティ・ルーの艦橋でネオ・ロアノークは愚痴を零していた。顔の表情は顔の上半分を隠している為に窺えないが、疲れた瞳をしている事は想像出来た。

まあ、当然の反応である。宇宙へ上がったのは二週間程前、その間は休みみたいなものではあったが、毎日の定期報告や上からの要求に終われる始末。そしてあの子達の状態を見極め、どんな処置をしてどんな状態に持っていくか、等など――。

心労が取れず、擦り減った精神は全く回復していない。そんな感じに疲労が溜まっているものだから、艦長席に寄り掛かり溜息を思いつ切り吐き出してやった。

「何老け込んでんだよ？」

後ろから声が聞こえた。この重厚な雰囲気漂うこの艦の中で、明らかに合わない幼い声で、この行動を咎めるような事を言ってくる。まあ、面白半分の印象が強いのだが。

「そうだぜ。俺達より歳だからって、溜息は吐かない方が幸せが逃げないって聞けぜ」

艦長席から立ち上がり、ネオはスティングの放った言葉に衝撃を受けた。幸せという単語がこれ程の威力を持って、心に突き刺さるとはちっとも思っていなかった。

「何だよ、それ。お前こそ考え方古臭いんじゃない？」

「なっ!?! 大して歳は変わらないのに、なんて言い様だよ!」

じゃれ合う二人。楽しそうに笑っているこの雰囲気に、もう一人の女の子の姿はない。

人に懐く事はなかったが、俺には心を許してくれていた。それを利用するかのような言動や言い回しに心を痛めた時もあったが、戦う事しか能が無いと言われて渡されたこの子達に情けは無用だと言い聞かせた。

しかし、ステラを含めた目の前にいるわけではない三人は、普通の子供達と何ら変わらない和やかな雰囲気を見せるのだ。

（ステラ…。お前が居ない違和感は今中々消えてくれないよ…）

ネオの中に燦る感情は、完全に子供のいる親の心境で。そうならば、

ステイングは勿論面倒見の良い一番上の兄さんで、自由に気儘なアウルが次男、一番下の構いたくなる可愛い妹がステラだろう。

しかし、妹を失った兄貴達はそれを忘れていて、娘を亡くした父親だけが憶えている。共有出来ない感情を持って余し、苦しんでいるのは自分だけなんて、罪を表しているかのように何とも滑稽だ。

「二人共、そろそろMSの調整に戻れ。オーブまでは二、三日掛かるが、準備は疎かにするな」

イアンの重い声が聞こえて、思考の海へと沈んでいた意識を浮上させた。そしてじゃれつき合っている二人を見てみると、渋々といった表情で頬を膨らませるアウルと、バツが悪そうに緑の髪を掻きむしるステイングが映った。

「次からの戦闘は今までの比ではないぞ。互いに譲れないものをぶつけ合い、不条理な行いだって勝てば許されてしまう戦争なんだ。油断していると死ぬぞ!」

叩き上げの軍人であるイアンにとって、死ぬなんて言葉は日常茶飯事に使っていて、この言葉で上司に叱咤された経験もあるのだろう。だからすんなりと口から滑り出してくるが、ネオにもステイングにもアウルにも、それは意識しなければ紡げない言葉になっていた。

「ん?」「あれ?」

そして言葉は思考の隅に漂っている、小さな傷痕に染み込んでいく。瘡蓋になっていた場所を刺激され、そこに傷があった事に気付くように、二人の頭の中には何かが存在した記憶が蘇り始めていた。

「《死ぬ》って言葉ってさ、使っちゃいけないんじゃないかなかったっけ？」

「…ああ。なんか、そんな気がするよな…」

イアンはしまったと心中で毒づき、極力顔面に出さないように無表情を造った。周りの反応の仕方、これ以上二人の記憶を刺激してはいけないのだ。

エクステンデッドの精神状態はいつでも揺れていて、安定させるには特殊な処置が必要になるのだが、それだって中々に大変な作業だと、担当の者に聞いた事がある。

必要で無い記憶の一切を消し去る事で、戦う以外の選択肢を消していくのが最大の目的で、考える事なんてタブーに近い。

増して、消した記憶を蘇らせてしまうなんて、以っての他だ。

イアンも艦橋に居るクルーもそれを理解して、そして枝を揺らさない事を意識していたが、一人どうしようもなくなってしまっている事に気付けなかった。

「ネオ？どうしたんだよ、いつもと雰囲気違うけど」

二人の記憶に娘が、二人の妹の残滓が存在している事が嬉しくて、本当なら涼しい顔をしていなければならぬのに、全く反対に近い感情を持ってしまったせいで、顔に浮かぶ表情は微妙なものになってしまっていた。

それに気付いたのはアウルで。やはり観察眼は拔群な子であるという印象を更に強めた。

「い、いや、何でも無い。ちょっと考える事が溜まり過ぎたんだろう」

イアンは早口にそう告げると、艦長席のすぐ側で立ち尽くしているネオの腕を掴んで艦橋を飛び出した。しかし、そんな行動も更に疑問の念を二人の中に植え付けるだけであった。

艦長室へとネオをソファアールへと放り込む。らしきの消えているこんな状態を見せ続けられ、アウルもステイングも引っ掛かっているものを思い出してしまいうだろう、とイアンが考えた末の行動だった。

「…大佐、お気持ちはわかりますが、二人に見せて良い顔ではありませんよ」

「……………」

普段なら《おいおい、仮面を付けてるんだから、顔なんて見えないじゃないか》とおちゃらけたツツコミをいれてくる筈なのに、座った状態のまま両膝に両腕を乗せて俯いてしまっている状態だ。

あまりにも芳しくない。

「…ステラの事を思い出させてしまったのは確かに私のミスです。しかし、二人はまだ記憶の残滓に触れたぐらいで掴んだ訳じゃない。しかも、ステラは我々の判断を無視してユニウスセブンに残ったが為に――」

「…そうじゃないよ」

小さく呟いた程度の言葉であったが、イアンの耳には嫌に残る響きであり、言葉が続けようと口を開いたまま、言葉を飲み込みという器用な真似をする羽目になった。

そんな状態のイアン等気にしていないように、ネオはソファアールから立ち上がって机へと向かった。引き出しの二段目、大切そうに仕舞われた写真立てを取り出した。

映っているのは四人の姿。左から笑顔でピースをしている水色の髪の少年、真ん中の上段に腕を組んで薄く笑みを浮かべている自分、すぐ下に屈んでいるやはり笑顔の緑髪の少年、そして左側に自分の腕に腕を絡めている金髪の少女。

正に母親の居ない家族写真のような感じに見えてしまい、更に気持ちが悪くなっていく。

「…あいつらがさ、ステラの記憶を少しでも残していて、しかもあの娘の《word》までちょっとだけ覚えてるんだぜ？
上官とかそんなじゃないかって、保護者として嬉しかったんだ」

「…しかし、ステラは――」

「わかってる。あの娘はここに居ない」

眺めていた写真立てをまた大切そうに引き出しにしまい、漸くネオはまともにイアンの顔を見た。軍人らしく、あまり感情を見せてはくれないが、それが自分の安定に繋がっている事を、ネオは自覚していた。

「…落ち着いたようですね」

「…すまんね。取り乱す隊長に付いてくるお前達には、正直足を向けて眠れないよ」

この艦を支えているのは、仮初めの艦長の自分ではなく、艦橋で頑張ってくれている者達だ。いざ戦闘となれば、ネオはMS隊の隊長として外へ飛び出さなければいけない訳で、艦長として指揮力を試される場面は、イアンと比べると相当に少ない。

事実、艦の安全よりもあの《三人》の安否を最優先にしていた気がするのだから、はつきりとしているのだ。

それでも役職から外されないのが、ファントムペインという部隊の実体なのだ。

「いえ、大佐じゃなかったら付いてきてませんよ」

ネオは他の上司達とは違い、周りに壁を作る事はなかった。上に立つ者は、とにかく降格しないように、そしてもっと上の立場に就く為に、部下との関係を強くしない傾向が、大西洋連邦内にはあった。

下のミスは下に肩代わりさせ、並ぶ者のそれには付け込んで立場を弱め。上には媚び諂い、出来る限りのフォローをする。

そんな上辺だけの繋がりがかりを見てきたイアンにとって、ネオのやり方は衝撃的で、好感を持てるものであった。

上への対応はやはり他の者達と何ら変わらないが、下との繋がりを

深める行動、例えば、部下達の誕生日なんかに贈り物をしたり、任務を終えた後に何かを奢って労ったり。気色の違い過ぎる戸惑いが最初にあった。

しかし、そんな人徳を持っている者も、仮面の下に隠しているものがあるのだろう。特にいつも浮かべている薄い笑みが、今の追い込まれ過ぎた状態の為に引っ込んでおり、アウル言う通り、いつもの雰囲気は全く感じられない。

「口が上手いね…。ま、今の俺にはそんな事はどうでも良いんだけどね…」

大佐が抱えているもの、それは多分。

「…ステラの事ですね」

イアンの言葉を受け、一瞬の空白を挟んだ後に、机の角に身を預けたネオは天井を仰ぐ。その能率に浮かぶのは、穢れ無き笑顔。

「…：もし、ユニウスセブンで死んでなくて、どこかに保護されたとしたら…」

「…：そうですね。そろそろ危険でしょう」

機密を守るという事は、外部にその情報が如何なる形であれ、伝わる事を防ぐ事だ。

エクステンデッドは連邦の機密中の機密。もし捕虜や、何らかの形で戻ってこないとしても、その情報を引き出せないように細工すると共に、一定の周期である薬を摂取しなければ生命維持が出来ない

ように、脳内神経に刻まれている。

その症状は軍人が惨いと感じる程で、常人には堪えられるものではない、と科学者達が宣っていた。

生きていたとして、その苦しみをステラが味わっているのかもしれないと思うと、本当にやる瀬なかった。

艦が微妙に揺れて、オーブへと出立した事がわかった。艦長も副艦長も艦橋に居ない状態でも判断を下せる逞しさと、少々の寂しさがネオの中に現れたが、ほぼ一瞬で霧散していた。

思い出さないようにしていた記憶が穿られ、それだけが思考を占拠する。軍人としては欠点だろうが、人としての性格はこの歳になつては治せる筈もない。

渦巻く心の中で混じり合う感情を制御するのは難しいが、態度に表さないようには出来る程になった。

「行くぞ、イアン。取り敢えずオーブを叩く」

オーブは連邦への加盟を断り、徹底抗戦の構えを取ったと情報が入っている。何を血迷ったかは知らないが、この感情を晴らせるのなら何でも良い。

とにかく、一つの事に集中する事をネオは望んでいた。

誰も近寄らない廃コロニー群の一つ。その中でひっそりと存在する人々の気配。普段なら波もない機械のような気配を漂わせているの

だが、今は俄かに起伏する感情を伺わせていた。

その原因が殺気だった少年で、下手をしたら次の瞬間には絶命している可能性まであるのだから、始末に終えない。

「くそっ！何が介入を許さないだよ！俺は殺りたくてうずうずして
るってのに！！」

近くに積んであったコンテナを蹴飛ばして、滾々と湧き立つ苛々を
発散しようとするが、全く意味をなさない。

その原因は先程ガジルが告げた言葉にあった。

大西洋連邦とオーブの争いは静観する。この組織の指令であるガジ
ルがそう決めたのだから、ちょっとやそつとじゃ揺るがない事な
だ。

しかし、それじゃエリミオの腹は収まらなかった。とにかく自分を
追い払ったあいつらに制裁を加えたくて、特にクロード・タクスは、
ラグナロクから引きずり下ろし、泣き叫ぶ様を眺めながら、流した
血がフェンリルにこびりつくまで痛めつけてやりたい。

それでも気は晴れないだろうけど、この募り募った感情の歪みをど
うにか出来るのならそれで良い。

「エリミオ！」

後ろから声がする。しかし、振り返るつもりは全く無い。

「エリミオってばー！！」

肩を掴まれた。無理矢理に振り解く。話す言葉も掛けられる言葉も必要無い。

「……………」

固まってしまったユリを置きざりにして、エリミオは歩みを止めない。今の彼の頭の中にあるのは、どうやってここを抜け出すかだけだった。

PHASE-36 親友ですもの（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

毎度毎度話の進行が遅くて済みません。しかし、こうやって登場人物を掘り下げていけるところが、二次創作の良いところだと思うので、これからもこんな感じに進んでいくと思います。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂ければ嬉しいです。

PHASE-37 聞いてくれ!!!! (前書き)

自分の意見を表明する事は、なんて面倒で厄介なのだろう。

わかり合えるか断定出来やしないし、否定される事もざらだ。しかし、意見を示さなければ、誰も認めてくれやしない。

それはどんな立場にある者であろうと同じであろう。

PHASE-37 聞いてくれ!!!!

国を治めるとは何と難しい事なのか、身近な人物がそんな立場に非ざれば、想像する事だって出来ないだろう。

経済と政治の兼ね合い。政治的見解と軍事的見解のぶつかり合い。司法権の独立を完全に保つ為の手回し、等々。

国に住まう人々の為に出来得る全ての事象を行い、円滑にそして正確に判断を下さなければいけないのが、トップに立つ者の務めだ。

オーブを代表する病院の一室。車椅子に座り、太陽の光が燦々と降り注いでいる窓の外を眺めている、金髪の女性の瞳は微妙に揺れていた。

出来る限りの根回しはしたつもりであるが、それだけじゃ不安なのもある。相手はあの大西洋連邦なのだから、どんな仕打ちを用意しているかもわからないし、どのように攻め入ってくるかもわからない。もしかしたら強襲してくる事だって有り得るかもしれない。

しかし、カガリの瞳が揺れている原因は他にある。

(……あの時の判断は正しかったのだろうか……?)

会議室で放った抗戦宣言。議員達に浅慮な印象を与えているのかもしれないが、あれでも考えた末の結論なのだ。

もし、大西洋連邦に加盟したとして、それが意味する所は属国になるという事実だけでは済まない。

連邦に属している国は、ほぼナチュラルだけが住まう。オーブは中立を謳う事で、プラントから移住してきているコーディネイターも沢山存在する。

その者達の処遇がどうなるかも気になる。もしかしたら、追い返すしかなくなるかもしれないし、場合によっては連邦から命令が下るかもしれない。

《処刑せよ》と。

確固たる証拠がある訳ではないのだが、背筋を凍らせるような予感がする。

コーディネイターというだけで憎悪を抱くナチュラルは少なくないし、現にそんな集まりであるブルークコスモスが存在している。

今は目立った行動を起こすそぶりは見せていないが、戦争やそれに関わる事象が起きれば、それに乗じて行動を開始するだろう。

それがどのようにオーブに影響するのか、はっきり言えば、身震いする程に怖い。

前大戦だってそんな事の連続だったのだ、今回の戦争だってどんな非道で残虐な行いが引き起こされるか、想像するだけで嫌になる。

しかし、想定し的確に判断する事が必要となろう。

窓の外はいつの間にか曇り始めていて、カガリの心も思考もどんどん曇っていく。

ユニウスセブンへ向かうミネルバの中で、自分はどんな風に考えていたのが突如として脳裏に蘇り、瞳は伏せられてしまった。

閣議で抗戦が決まった時の、ウズミ・ナラ・アスハの顔に浮かんでいたものがあの時は理解出来たと思ったのに。

自分の判断は父親と全く逆の、保身を考えて議員達と何ら変わりないのではないか？

国に住むコーディネイターを想っての判断だと考えていても、結局は自分の身がかわいいからではないのか？

わからなくなる…。

コンコンとノックの音が部屋中を満たして、カガリの沈み始めていた意識が元に戻る。

窓の外を眺めていた瞳を扉へと向けて、どうぞと一言。本来なら警戒を怠るべきではないのだが、ノックの仕方や磨りガラスに映り込むシルエットで誰が来たか等、一目瞭然だ。

「カガリ、体調はどうだ？」

入室早々、挨拶も無しに心配そうな顔を見せるのは、心の底から信頼を寄せられる男性で。

浮かび上がる心に箍をして、いつもの自分を演じる。今はそれが一番の得策だろう。

「…アスラン、人に会ったらずどうすべきだ？」

「あ、すまん…。おはよう、カガリ」

「おはよう、アスラン」

しかし、浮き上がるものを我慢し続けるのは容易ではない。それは挨拶をかわしたただけでも漏れてしまう、幸福の響きに彩られた微笑みが物語る。

大切な人が目の前に居る。少し前の軟禁状態では考えられない程の幸せを、カガリは噛み締めてしまっていた。

「それで、身体の具合はどうなんだ？痛んだり、違和感があったりしないか？」

アスランもカガリ同様に浮かべていた微笑みを引っ込めて、入ってきた時と同じ顔に戻っていた。本当に心配してくれる人が居る、という事もまたカガリの幸福感に変わっていく。

「ああ、何ともない。心配してくれてありがとう」

素直に感謝を告げた時の自分の顔は、間違いなく笑みが浮かんだ入院している人らしからぬものであったろう。

それはアスランも自分と同じように感じてくれて、一緒に笑い合えると思つての事だった。

しかし――。

「……ああ…」

先程までの柔らかな表情とは全く逆の、固く引き攣った顔をアスランは覗かせた。それが意味する所を、抑圧された後に爆発してしまっている感情に振り回されている事の自覚を持てていないカガリには、全然想像出来ていなかった。

「…どうしたんだ？何かあったのか？」

この言葉を境に、二人の間を奇妙な沈黙が支配した。アスランは中々口を開こうとしないし、カガリはそんな態度のアスランにそわそわするばかり。

そんな二人の間の空気が固まっていたのは、どのくらいだったのだろうか？

数分だったのかもしれないし、数時間かもしれない。はたまた数十分かも。感覚が曖昧になるぐらいの時間をたっぷりと使って、アスランは漸く言葉を発してくれた。

しかし、内容は浮き上がる心を萎ませるばかりでなく、自分の浅はかさを思い知らされる事になるのだった。

「…カガリ、これは詭弁でもないし、増して冗談でもない。真剣に聞いて欲しい」

あまりにも真面目な顔を見せるアスランが訝しく思えたが、性格上、歪曲した論説とか勝手な作り話をするような奴じゃないと、一番理解しているのはカガリ自身だ。

面を食らいながらも、一つコクリと頷くと、躊躇いがちだったアス

ランも普段から真面目な顔を更に固くして、真っ正面からカガリを見据えた。

「お前が徹底抗戦を伝えたのは昨日だったな。その事で国民の不信が募ってる」

覚悟している事態だった。

国民、特にプラントからの移民は、戦争を避けたいという意思が何より強く、それを裏切った形になってしまったのには申し訳のしようもない。

領土に戦争の傷痕を残さない為の策もあるが、それはこれからの展開次第だから、不確定な要素が絡んでくる。国民の不安を取り除くには、まだ時間が掛かるだろう。

「それなら想定済みだ。…それじゃないのか？」

「……ああ。もう一つある。お前の代表の地位を剥奪すべきだという、クーデターにも似た活動が活発になってる」

「それも仕方ない事だろう。私の判断で死の恐怖に苛まれてしまったとしたら、当然の反応だと思う」

毅然と言い放ったつもりだ。脳内にあるものとは少し違うが、結局は自分を責める事で精神の安定を図れるというのなら、それは歓迎すべき事象であろう。

「いや、問題なのはその内容なんだ」

ベッドの横に立っていたアスランは、窓際に居るカガリのすぐ傍に歩み来て、外を、いや病室の真下を覗いた。

すると、次の瞬間。

「カガリ・ユラ・アスハの横暴を許すな!!」

ガシャンと窓ガラスの割れる耳障りな音が響いて、その原因を作った手頃な石が火傷を負っているアスランの左腕へと直撃した。

「アスラン！」

苦痛に歪む顔。黒いジャケットの袖の部分に赤い染みが浮かび上がっているのがわかり、しかも自分を庇ったせいで、右腕にもガラス片が突き刺さって、左腕同様の染みを数箇所を作り出していて。カガリの感情は昂り始めた。

「カガリ・ユラ・アスハはこの国を滅ぼすつもりだ!!」

クーデターの声はどんどん大きくなる。窓が割れたせいで、飛んでくるものは部屋に直に届いてしまい、鶏卵やらトマトやらで真っ白な壁がどんどん染まっていく。

またアスランもカガリを庇う為に覆い被さっているのです、全身傷やトマトやらで、着てきた服は真っ赤に染まっていた。

「大丈夫か!アスラン!」

階下から響く怒声の中では、密着している人にさえ張り上げた声でなくては届かない。

悲痛な意味合いも相俟ったカガリの声に、飛んでくる物を背中受
け止めていて、その痛みに堪えている為に俯けていた顔を漸くカガ
リに見せて、その表情にカガリは目を睜いて絶句するしかなかった。

「カガリ……。これがお前が下した判断の結果だ」

下がった眉尻と少し潤んだ瞳、それとは逆に口角は上がっている。

アスランの抱いている感情を完全に読み取る事は出来る筈もないが、
これだけは理解している。

アスランは自分が下した判断を計りかねていて、それでも自分が受
けるべき痛みを肩代わりしてくれているのだと。

涙が溢れそうになるが、この場面にそれはあまりにも不釣り合いだ。

カガリは決意を固めた。

「アスラン、どいてくれ」

「だが――」

「大丈夫だ。……お前の気遣いは本当に嬉しい。守ってくれてあり
がとう」

まだ納得した訳ではないアスランはこうとしなかったが、踏ん張
りの効かない弱々しい腕の力で、アスランを払い除けようとする。

彼も抵抗するつもりはなかったようですがすぐさま道を譲ってくれたが、
その瞬間に待っていたのは飛来する物々の雨。

鶏卵やトマトは大した痛みは無いが、精神の奥底に響くし、時々混じる石や缶は国民の痛みを如実に表している気がカガリにはした。

傷だらけのアスランの背中を見届け、カガリは車椅子を進ませる。

こめかみ付近に石がぶつかり、左目に血が滲む。そこにトマトの追いつきがくるものだから、視界は真っ赤に染まっていく。

しかし、カガリは怯まない。寧ろ腕に籠る力が強まり、先程よりも移動が速くなっている気がアスランにはした。

缶が腕に当たる。鶏卵が髪を汚す。トマトがアスラン同様に衣服を染めていく。しかし、カガリは怯まない。

病室のベランダに滑り出ると、部屋の中に居た時の比ではない程の音量が耳を劈く。思わず耳を塞ぎたくなったが、今の自分にそれは許されない。

そう、許されないのだ。

物々の雨を突き抜けて、漸く階下を見下ろせる位置まで来て、カガリは自分の判断の影響の凄まじさを、改めて思い知らされた。

数百人の人波が、広いとは言えない病院の駐車場を埋め尽くしながら、尚も唸りを上げてベランダから覗く自分に襲い掛かってくる。

物を投げる行為は、憎しみをぶつける相手が現れた事により激しさを増し、どこから調達しているのか知りたいぐらいだ。

睨み付けてくる二倍の瞳。その光景に、脳裏に蘇る記憶があった。あれは、そう、ミネルバに逃げ込んだ後、議長に連れられて艦内を案内されていた時だ。

MSデッキへと引ける気持ちのままに入室し、そこに広がった光景に我慢できなくなって、議長に抗議を投げ掛けた直後。

もの凄い憎悪と怒りを込めた瞳がこちらを睨め付けて、自分の心を締め付けたのだ。

その時はその理由がわからなかったが、直後に知った事実からすぐに思い至った。

そして今、階下で唸りを上げるクーデターも同じなのだ。前の戦争で心に深い傷を負って、それでもオーブは変わると信じて残った者達なのだ。

シン・アスカも、クーデター達も思いは一緒だ。

《戦争なんて望んでない。これ以上傷付きたくない》

それが痛みを知る者達の総意である。

カガリは暫く振りにそんな当たり前の事を思い出していた。忘れていた訳ではないのだが、仕方のない事だと奥底に仕舞い込んでしまっていたのだ。

そんな自分に嫌気がさしてしまっただが、それでも抗戦する気は萎んだりしない。

大西洋連邦に属するという事がどういう事か、戦争にどう関わってくるかを、目の前で怒声を上げ続ける者達は知らない。

「皆さん、聞いて下さい！」

腹の底に力を入れて、出せる精一杯の大声を響かせようとしたのだが、怒涛のように押し寄せる声は全く衰える事がない。

不満をぶつけたい人物が矢面に立っているのだから、これが当然ではあるが、カガリは少しだけ自分の不甲斐なさが恨めしかった。

国を治める為政者には特別なオーラがあるものだ。自分の父親であるウズミ・ナラ・アスハ、現在のプラントの最高議長であるギルバート・デュランダル、知り得る権力者には不思議な魅力があった気がする。すぐにその者だとわかる、特別な雰囲気だ。

それは国民にも勿論伝わるものであり、轟々と唸る非難の前でも、それを飲み込んでしまう力を有するものだ。

しかし、まだ十代の自分にはそんな力などある筈もない。同い年でカリスマ性の塊みたいな女性を知っているが、あれは例外だろう。

なら、国民に自分の声を届けたい時にはどうするか。決まっている。

「皆さん、聞いて下さい！！」

更に力を強めて、声が掠れる程の声で呼び掛ける。国民達からはどう見えているかは判断出来ないが、ちっとも鎮まってくれない所を見る限り、小娘が言い訳を宣ってやがる、そんな風に受け取ってるのだろう。

「――聞いてくれ!!!!!!」

言葉に丁寧な装飾を付けるのは止めた。こっちの方が自分らしいだろうし、皆にも響くだろうと思ったのだ。

案の定カガリの声は、響き渡っていた怒声の間を擦り抜けて、集まったクーデター達の口を噤ませた。

声の質感、顔の表情、どんなにぐちゃぐちゃにされてもベランダに立ち続けた精神力、それらが国民達に本能に、黙らなきゃならないと呼び掛けたのだ。

「私は今回も大西洋連邦の同盟参加を拒否致しました。それが皆さんの不満なのでしょう」

凜とした声が明瞭に広がる。少し高い所から、全体を眺めるように首を回しながらの演説を始めたカガリ・ユラ・アスハを、先程までの鎮まらぬ怒りを湛えたクーデター達は静かに聞いていた。

「確かに、連邦に参加すれば仮初めの平和を夢見る事は出来るでしょう。しかし、泡沫のように消えてしまう夢でもあるのです」

調べは付いていたのだ。主にキサカの働きによって、大西洋連邦の裏にある組織と、それを支配する者達が何と呼ばれているのかを。

会議室でユウナに咎められたその名前は、世界の根底を簡単に揺るがす程の力を持ち、武力を持つすべての国との結び付きもある。

連邦なんて可愛く見えてしまうぐらいに、凶悪な繋がりを持っている

るのだ。

「大西洋連邦が国を中心として纏まっていると、皆さんは思いますか？ただプラントに対する為に、組織されたものだとは本気で思っていますか？」

額についた傷から血が滴り落ちる。瞳の中に入ったように思うが、そんな事は気にしない、気にしていられない。

再び周りを見回す。投げ掛けに対する答えはどこからも上がってこない。

憎しみの対象である相手が明確であるなら、人は纏まる事により勇気を手にする出来ようが、不明瞭な敵に対しての反応なんて、希薄どころか、寧ろ不可能に近い。

わかってはいた事だが、集まった人の中から一人ぐらいい意見が出るものだと思っていたカガリは、残念に思うのだった。

「……すぐに思い至るには難しい問題かもしれませんが。一市民である皆さんが、詳しく知る必要の無い問題でしょう。

しかし、考えてみて下さい。大西洋連邦は、この度の加盟を断れば武力行使を辞さない、と示された文書を送ってきました。おかしいとは思いませんか？」

今の狂った世界の感覚では、普通に感じてしまう内容である。しかし、カガリはこんなふざけた要求は無いと判断していた。

剥き出しの憎悪が、一文一文に込められている気がさえしてしまう、一方的な内容。

「……あの！」

また返答は無いかと諦めかけていた瞬間、カガリから見て左の方から、静まり返った人の波を掻き分けて、中年の女性が控えめに手を挙げていた。

カガリは勿論すぐにそちらを見る。そして答えを待つ。自分の意思を見せてくれる、ありがたい国民の姿を。

「それって…、連邦はオーブを滅ぼしたいって事になるんじゃない？」

駐車場中がどよめきに包まれていく。偏見の少ない、情報が乏しく判断材料が多くない者が辿り着いた結論は、真理に当て嵌まり易い。

それをここに集まった大半の人は知っているようで、どよめきにざわめきが加わって、いよいよ人波が復活を果たした。

「そうと決まった訳ではありません。しかし、そう判断せざるを得ないのも事実なんです」

カガリは一度天を仰ぐ。これを告げるという事は、今まで保たれていた均衡を、ミネルバで保つべきものだと言長に告げたものが、一気に崩れる可能性だってある。

だが、ここで明かさずにいつ明かすのか。この機を逃すと、どんな力のぶつかり合いによって潰されるか、わかったもんじゃない。

「大西洋連邦が何を中心に纏まっているか。それは、反コーディネイターの集いであるブルーコスモス。そして――」

どよめきとざわめきの合わさりが昇華していく。次々と上がる国民達の信じられない、といった内容の言葉。まだ本当に重要な事を告げていないのだが、これ程の混乱を目の前にして、カガリは一旦区切る事にした。

頭の中の整理が国民達には必要だろうし、カガリ自身も一息吐いて、これからの事に思いを馳せておきたかった。

父が愛したこの大切な国を、抗戦とは言え戦争に巻き込んでしまうと思うと、やはり後ろめたいものがするりと心の中に忍び込む心地だ。

しかし、抵抗せずに一方的にやられるつもりは皆無だ。それこそ、オーブが大西洋連邦に属したと変わらない結末になってしまうだろうから。

カガリが口を噤んで数分経った頃には、国民達の様子が落ち着いてきたのがわかった。

では、告げるとしよう。この世界の裏に存在する、戦争の絶えない世界を望む者達の事を。

「ブルーコスモスの盟主こそ、この世界を血塗れにするものを売買するもの、ロゴスと呼ばれる武器商人なのです」

しん、と駐車場は鎮まってしまった。あまりの内容に頭がついていないのか、それともカガリが伝えたい事が出来ていないのか、はたまたロゴスの存在自体を知らないのか。

想定出来るあらゆる事態、例えば、国民達が大混乱を起こし、怪我人を出す可能性だとか、そんな作り話みたいなものは信じないとして、物投げを再開するだとか。

しかし、国民達の反応は全くの無。

「…彼らは大戦だけでは飽き足らなかったのです。懷を潤わせるには、平和な日常なんて必要無い。彼らにとって一番大切なのは、地球と宇宙、全てを巻き込んだ動乱が続く事なのです」

これが当然の反応か。あまりにも唐突で突拍子した内容では、頭の中も身体も反応出来ない。増して、告げられた事実は凄惨過ぎる現実を突き付ける内容である。

多分、議員達ですら困惑するばかりの事象であり、意見を述べようとしてくれないだろう。

「だからこそ、私は徹底抗戦を宣言しました。オーブに住むコイデイネイターが惨殺させない為に、いや、全ての民を戦争という因果から守る為に！」

決意の滲み出したその声に、後ろで聞いていたアスランの魂は震えていた。

誰かに影響されて、あんな力ガリらしくない答えを出した訳ではない。国を、民を、そして大切なものを、ロゴスという恐怖から守る為に。

どんなに国民から責められても良い、と覚悟して宣言していたのだ。

それがわかると、つい先程まで疑っていた自分が恥ずかしく、そして申し訳無かった。

決意があるからこそ、守るべきものが明確に見えているからこそのカガリの行動に、自分はあまりにも馬鹿な推論をユウナとして語ってしまっていた。

浅はかだと罵られるかも知れないが、カガリに正直に話してみようと思う。もう極力隠し事をしたくも無いし、されたくも無かった。

「――表！」

考え事や集中し過ぎると、周りの音を絶ってしまう悪い癖がまた出てしまったようだ。そんな癖に割り込んできたのは、俄かに活気づいた外から聞こえてくる声。

もしかして――。

「カガリ！大丈夫か！？」

夢物語のような内容を告げられて、一切が信じられなくて、カガリが存在がそれを齎したと考えたとすれば、国民達の次の行動なんて決まっている。

その混乱に上乗せわれていく不信を、目の前で語りやがった奴にぶつけて、存在自体を否定しようとする自己防衛行動に走るだろう。

それらから守る為、病院内へと侵入しカガリを襲おうとする悪漢から守る為、ベランダに飛び出してカガリを早く安全な場所に避難させようとした。

しかし、それは杞憂。取り越し苦労なんて言葉で片付けられもしない、あまりにも飛躍してしまった思考。

「アスハ代表！オーブを頼みます！」

「代表！ブルーコスモスにもロゴスにも屈しないで！」

クーデターだった者達は、カガリを代表として再認識してくれた。上がるのは励ます言葉。先程までの罵倒やら、蔑む言葉は既に跡形も無い。

歓声、と称しても差し支えないであろう響きの中で、カガリは小さな安堵の溜息を吐いて、飛び出してきたアスランの方へと振り向いた。

「私はこの国を、住まう民を、そして大切に思えるものを守りたい。協力してくれるか？」

「…ああ、当然だ」

このカガリの演説は、正に飛び火するように広がり、一晩もかからずにオーブ全土に伝わっていた。そして、不信を募らせた者はそれを和らげ、信じていたものは代表の成長振りを感じている。

それは一つ一つの小さな結束に繋がり、それらが更に繋がる事によって、オーブはカガリの決意の元に立ち向かう準備を整えた。

後は、最後のピースが揃うのみだ。カガリは宇宙から訪れるものの到着を、今か今かと待ち侘びていた。

PHASE-37 聞いてくれ!!!! (後書き)

お読み頂き、ありがとうございます。

一話丸々カガリに費やしてしまいました。しかし、連邦との戦闘前にこれを挟まないと、カガリがただの愚かな指導者に見えかねないので、気合いを入れて描きました。

まあ、デュランダルのお株を奪ってしまいましたかね(笑)。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-38 ステラッ!!? (前書き)

平穏で幸せな日々、いつか崩れると知っていながら、いつまでも微睡んでいたいその感覚。

しかし、現実には夢、幻の如くそれらを刈り取っていく。誰もが望む筈の心安らかなものだというのが…。。

PHASE－38 ステラッ!!?

抗戦の宣言が出されてから、太陽の浮き沈みが二回程繰り返されていた。

その間にオーブの状況は目まぐるしく変わっていったのだが、シン達の状況は何一つ変わりはしなかった。

平和と表するのはおかしい気がするが、朝の陽射しを受けて漸く覚醒する意識だとか、それでも起き上がるのが億劫になって二度寝を決め込むだとか、時々隣にある柔らかい温もりを感じる事だとか――。

（またか……）

ガバツと布団を吹き飛ばして、シンは腕に絡み付いている細腕の持ち主を見遣る。やはりというか、何というか、そこに居るのは短い金髪の少女で。

この事でもう何度溜息を吐いたのかわからない。夜中に違和感を覚えて目を醒ますと、ほぼ確実に布団に入り込んでるのだ。

そしてその度に起こして、専用の部屋に戻るように説得し、くずるのを何とかいなしで、また自分に与えられた士官室に戻って眠る。

低血圧なシンには大変な二日間が続いたのだ。しかし、嫌だとか面倒だとかは思わない。

それだけ自分を信頼してくれている証拠だろうし、何もしてこない

だろうと安心もあるのだろう。

しかし、それはそれで男として見られていないような気がするのだが、どうなのだろうか？

胸が締め付けられる感覚を心の底に押し込んで、シンは隣で丸まっている少女の身体を揺すった。

「…ステラ、ステラ」

シンの寝惚けて掠れた声がステラの上に振る。ノースリーブの腕の柔らかさに驚きつつ、何故か沸き上がる幸福感に充足しつつ、丸まる事を止めない彼女を更に強く揺する。

「ステラ、ステラってば」

徐々に掠れが無くなっていくという事が、中々ステラが目覚めてくれない事を示していた。それも別に構いやしない。こんな些細なやり取りでも至福を感じられるのだから、人間変わるものである。

しかし、そんな幸せな空間も長くは続かなかった。

外から聞こえてくる靴音が激しくなっている。忙しく駆け回る理由に思い当たらないシンは、ステラを揺するのを無意識的に止めた。

（もしかして、もう連邦が来たのか？ いや、そうだとしたらこれより忙しいだろうし、誰かが俺を起こしにくるよな。

…でも、こんな所を見られる訳にもいかないし――）

ルナマリアに勘違いされてしまった時と同じような、それより疑われてしまうような状況にあるシンには、これ以上心労が溜まってしまふのは流石に嫌だった。

まあ、そんなに上手くいかないのが世の常なのだが。

「…シン、お盛んなのは結構だが、そろそろ着替えろ」

「うわっ!!?」

いつの間にか開いていた扉付近に、呆れた顔を見せるレイが立っていて、被害が酷くならなそうでちよつとだけ安堵を心に浮かべた。

ここでルナマリアが現れたら、デジャヴュも良い所だし、今まで以上に大変な思いをする羽目になっただろう。

「何だ、レイか…。驚かさないでくれよ…」

そういう問題ではないだろうけど、女性が入ってこなかっただけでも良しと出来てしまっていて、シンは色々と失念してしまっていた。ステラの身体が全く動かなかった事を。

「何だ…じゃないだろう。お前はこんな大事にも寝坊出来るのだから、ある意味大物なのかもな」

「…大事…? 何が？」

昨日の今日、いや、次は無いと言ったのは二日前の事だが、報告を閲覧しろと言ったのに、三日坊主ならぬ二日坊主では全く仕方が無

い。

レイは溜息を吐きたいのを我慢して、着替えを始めたシンを睨み付けてやった。ジャケットを羽織って第三釦を閉めようとした手が止まり、引き攣った表情と渴いた笑いをシンは漏らしていた。

「さっさと端末を立ち上げて、情報を確認しろ！」

こうなれば癖が付くまで教え込むしかないだろう。毎朝起床後に、MSの調整が済んだ後に、夕食前に、そして就寝前に。最低でもこれぐらいは情報を頭に入れる時間は取れるだろうし、取らなきゃいけない。

それに今回の事でいつも身に沁みるだろう。あのお方が直々にこの国にやってきて、我々を労ってくれるのだから。

「は、はいっ！！！」

シンは急いで端末のスイッチを入れる。ちょっと慌て過ぎて、音楽プレーヤーを起動してしまったのはご愛嬌だ。

一層睨む目付きがきつくなったが、それをまたレイに渴いた笑いを向けて受け流し、手元が狂いそうにならながらも、漸く閲覧すべきページを呼び出す事に成功した。

そして溜まりに溜まった報告の数を見て驚くシンを傍目に確認して、聞こえるように大きく溜息をついてやった。

それにしても、同期である自分がシンを注意している事があまりにも馬鹿らしい。本来なら、だらし無いこいつを指導するのはクロー

ドの仕事の筈だ。

だが、今はMSデッキに籠りきりでインパルスの改良に性を出している。オーブがこのような状況になってしまい、ミネルバも同行をそろそろ決めなければいけないだろうに、FAITHであるクロードがあんな状態では、艦長が気の毒に思えてしまう。

（気持ちにはわかるが、本来の仕事を疎かにしてはな…）

「な、なあ、レイ…。これってマジなの…」

端末に映し出された文字の羅列が伝えてくるものに驚愕し、シンはわなわなと震える指先を画面に向けていた。

覗き込んで確認してみると、一昨日の日付で挙げられている報告で、今日の大事が示された、レイにとって唯一無二の名前が記された文字列が、そこにはあった。

「ああ。もうすぐで到着なさるだろう。ボルテールは既に大気圏を突破したようだからな」

ぎしぎしと錆びたしまった金属が擦れながら回るように、シンの顔が端末からレイに向けられた。

どうやら身に沁み過ぎて、どうにも上手く身体を操れなくなってしまったようだ。

「どうだ？報告を読んでおかないと、大変な事になるとわかったか？」

ブンブンと勢い良く頷くシンの姿は、休憩室の時と同じに見えてしまうが、今回は完全に信用して大丈夫だろう。

紅い瞳の様子が必死になっている事を、こちらへ伝えてくれていた。

「なら詰め襟を一番上まで閉めろ。議長の前に出るには、それぐらいは礼儀だ」

「そ、そうだな…」

軍人は礼節を重んじてこそ、という事か。窮屈だから詰め襟を一番上まで閉めた事なんて、養成所の卒業式で赤服を受けとった時ぐらいだ。

ベッドの横に備え付けられている鏡に映して、慣れない手つきでフックを引っ掛けようとするが、直接視界に収められない事が災いして、中々二つ目を引っ掛けられなかった。

「なあ、レイ。おー」

お前なら慣れてるだろう、やってくれよ。と、脳は発するように伝達していたのだ。しかし、振り向こうとしてベッドがある方向に身体を回した時、シンの時間を真っ白に塗り潰し、完全に止めてしまう出来事が待っていた。

いや、表現が少し正しくなかったかもしれない。先程まで健康的な肌色を見せていて、柔らかで滑らかだった肌の色は真っ青に変わり、息すらしていないのではないかと思う程、顔から伝わってくる生命力は希薄だ。

要するに、シンの時間が真っ白に染まったのは、真っ青になったステラの肌が視界全てを占拠したからだ。

「ス、ステラッ!!?」

中途半端な詰め襟なんかどうでも良かった。急いでステラの元へと寄って、手首を軽く握りながら口元に耳を寄せた。

小さな鼓動と絶え絶えな息遣いが感じられ、まだ手遅れではない事はわかったが、誰が見たって危険な状態と判断出来る程の症状だ。

「どうした?こ、これは…!」

普段、狼狽える事なんて稀なレイが流石にステラの状態を目にしてしまえば、崩す事のないらしさを取り払ってしまうのも仕方ないだろう。

しかし、それだけじゃなく。

動かして良いかわからず、取り敢えずラルス医師に来て貰おうと考えて、医務室へと通信を入れようとした時、ベッドが軋みを上げる音が聞こえて振り返ると、シンは心底ぎよつとさせられた。

あの冷静沈着なレイが必死な表情でステラを抱え上げ、今にも走り出しそうな形相を見せているのだから。

「シン、何をしている!早く医務室まで運ぶぞ!」

「落ち着けよ!動かして良いのかわからないんだからさ!それに、どうしたんだよ?いつものレイらしくないぞ?」

何故ここまで取り乱しているのかなんて、レイには理解出来ていたが、そんなものは陳腐で取り留めのない事だ。今大事なのは、腕に抱えている少女を助けたいと弾き出した、本能の答えを実行する事だ。

「そんな事はどうでも良い！急がないと、本当に手遅れになってしまう！」

「あ！おい！？」

シンの士官室から飛び出してきたのが同僚のレイで、彼の腕に抱えられているのが保護した民間人という扱いになった少女、しかもいつもシンにべったりな彼女だ。

それを目撃しているミネルバクルーが、二人と擦れ違ったら、どんな痴情の纏れだ？と面白がるだろう。現に、レイを追い掛ける間も前から歩いてくるバートが変な顔をしてたし、マリクに至っては心配そうな顔を向けてくるからやる瀬ない。

だが、そんな些細な事は流してしまえば良い。今大事なのは、大切だと思える少女が苦しんでいるという事だ。

「ルナマリア、クロードを呼んできてくれないかしら？」

艦長室に呼び出されたルナマリアに告げられた命令は、遂行不可能に近いものであった。

二日前から決まっていた、議長がオーブを訪れるという事実。忠実

なクロードの事だから、情報の確認ぐらいはしているだろうが、MSデッキから出て来ようとはしなかった。

しかし、現行でそれは許される事ではなかった。自分達が所属する国の最高権力者が、滞在している国へと赴いてくるという事態が、一兵倅にはどれ程重大な事か。

それに、特務隊である彼が、組織の長とも言える人物を出迎えないなんて失礼な事を、艦を預かる者としてさせる訳にはいかなかった。だから、親しいであろうMS隊の紅一点であるルナマリアに、連れてくるように頼むのが適任であろうと考えたのだ。

付き合ってみてわかった事なのだが、クロードはフェニミストの嫌いがあると、タリアは判断していた。

女性と話す時の姿勢だとか、言葉遣い、重い荷物を持つメイリンの手伝いやら、一杯一杯の自分のフォローに至るまで。とにかく彼の性格が際立っているのは、女性と対峙している時なのだ。

そんなクロードが、親しい女性であるルナマリアの頼みを無下にしたりはしないだろう。

「艦長……。あんな状態のクロードをどうやって連れて来いと言うんですか？」

ルナマリアだって近付きたいのだが、雰囲気吞み込まれてしまつて、声を掛けるまでも至っていなかった。

いや、ルナマリアだけでなく、シンもレイもメイリンもステラも、

マッドを除いたメカニック達も近寄るのすら躊躇われる程の空気が、クロードからは発せられているのだ。

「…どうにかならない？彼の性格を考えれば、あなたなら何とか出来ると思うのだけど」

「…無理ですよ。今のクロードに見えているのは、インパルスの改造案だけなんですから」

言葉にしてしまうと、何とも悲しい響きになってしまって、ルナマリアは自分で自分の傷を刳ってしまった。

そう、あの夜の事が思い起こされてしまうのだ。

ラルスの胸の中に抱き締められて、嬉しそうにしていたクロード。あの安堵した表情が頭の中から離れてくれなくて、それも声を掛けられない要因になっていた。

やはり、メイリンの予想は当たっていたのだ。クロードとラルスの関係は深く、入る隙間なんてこれっぽっちもないと見せ付けられてしまった。

「確かに、何かに取り憑かれたようにMSをいじっているように見えるけど、多分見ているのは改造案じゃないわ」

オーブに滞在を始めた時から、クロードの様子はあまり良い状態と言えなかった。彼がオーブ出身で、一度手痛い裏切りを経験しているのは知っている。

しかし、それは既に振り切った筈の事。根に持っているといっても、

表面上は既に萎えてしまっているように、タリアには映っていた。少し前までのシンのように、怒り狂ったりする訳でもなかったし、恨みを口にしたり態度に示したりもしていなかった。

そして、ミネルバにアスハ代表とその随員が滞在している時なんて、二人の傍に居たのだから問題なんてない。

やはり、代表の身が傷付いた事を責めているのだろう。と言うよりは、今のクロードの思考はその事で埋め尽くされているのだろう。

「代表の御身に障害を残してしまった事、その時に感じた痛みや恐怖、現在の不自由な生活や未来の不便な生活。そんな全てが自分の責任だと、自分自身を責め続けてるんでしょね」

タリアの言葉が意味する所は、ルナマリアも理解している。

医務室の前で代表の手術が終わるのを待っている時、クロードは全てが自分のせいで、どうやっても許されないと思っているかのような、そんな態度を取っていた。

クロードの悲痛な叫びは、あの場に居た全ての者に同じ感情を抱かせていた。

それは仕方ないという事。

人間は万能では無いし、優先するのは自分の安全の筈だ。他人の為に犠牲になれる者なんて、本当の意味ではこの世の中に一人として居ない。

それが当然で、それが真理。だけどクロードにとっては、それでは納得出来ないのだろう。

だからこうして、自分の身を削ってまで、自分の出来る精一杯の事を続けているのだろう。自分を責める事と一緒に。

そしてルナマリアは気付いてしまった。クロードの視界にはもう――。

「……私は映ってない……」

「……ルナマリア？」

落とされた眩きの意図する所を計りかねて、タリアは俯いてしまっているルナマリアを覗き込む。

それを感じて、ルナマリアは取り繕うような弱々しい笑みを顔に貼り付けた。誰が、どうみても無理をしていると答える表情を。

「……いえ、何でもないんです。とにかくやれるだけやってみますけど、期待はしないで下さいよ？」

呼び止める間も無く、ルナマリアは扉を潜って廊下に出てしまった。いた。

空に浮いたままの腕が虚しく感じられ、タリアはすぐに力を抜いた。そしてルナマリアの後ろ姿が、いつの日かのあの人と重なって、余計な事を会う寸前に思い出してしまったと、心中で毒づくしかなかった。

廊下に出たルナマリアの目の前を、正に一迅の風のように誰かが過ぎ去っていく。遠ざかっていく後ろ姿を確認すると、何て事はない、男性の中では長めな金髪を振り乱し、医務室方面へと駆けていくレイだった――。

「レ、レイが廊下を全力で走ってる…？」

普段から品行方正、同期が手本にする鑑ともいべきレイが、平時には走る事を禁じられている場所で、それを破っている場面を、ルナマリアは長い付き合いの中で始めて見た。それも両の腕に誰かを抱えて、という珍妙な格好で。

それに驚き、数瞬の間呆けていると、新たな足音が急速に接近してくるのに気付いた。振り向くと、やはりというか何というか、予想通りの奴がレイと同じく医務室方面へ駆けて行こうとしている。

事情を聞くには打って付けだろう。

「シン、待った！」

レイの後ろ姿しか見えていなかったシンの視界に、突如として現れたルナマリアに驚き、スピードを緩めようとしたのだが、車が急に止まれないように、勢いの余った脚も止められないのだ。

「うわっ!？」 「きゃっ!!！」

派手な音を立てて正面衝突をした二人は、数メートルを纏れ合いながら転がり、漸く勢いを殺せたようで、シンの視界は真っ白な壁を見詰めていた。

「……痛ててっ…。気を付けろよな、ルナ！——！！」

痛む後頭部を摩りながら、態勢を整えようと身体を起こすと、何やら手に伝わってくる、柔らかい感触がある事に気付いた。それは至極柔らかではあるが、適度な弾力を持ち、手に吸い付くような、そんな男の性を擦る感覚。

「ど、どこ触ってんのよ！！」

左頬に広がる痛みが、シンの心にこの世はどこまでも理不尽だと語り掛けてきているような気さえして、ぶすくれた表情でルナマリアから視線を外した。

しかし、現状を考えれば悠長な事は言ってられないので、医務室へと走りながら手短かにレイについて説明はしてやった。朝の出来事は丸ごとカットしたが。

「それってかなりまずいんじゃない？ラルス医師が来た時よりも、ずっと症状が進んでるようね…」

顎に手を当てて考え込むルナマリアの姿に、彼女もまたステラを心配してくれる一人になっていたとわかり、シンは浮かんでいた納得出来ない痛みを忘れ去っていた。

「そうなんだよ！だから俺は医務室へ急ぐ。出来ればルナも来てくれ！」

「……いえ、すぐには行けないわ」

「えっ！？どうしてだよ？」

急に立ち止まったルナマリアに合わせて、シンも少し離れた位置で立ち止まった。

見遣るとルナマリアは既に踵を返していて、そのまま駆け足で背中が遠ざかっていくのが見て取れた。

「私は先にMSデッキに行くわ！シンはステラの傍に居てあげて！」

声が遠ざかりながら聞こえてきて、シンはその意味を咀嚼してみた。そしてすぐに意図に気付いた。ステラの事を捕虜ではなく、保護された一般人扱いにしてくれて、今は自分のMSを改良してくれている男呼びに言ったのだと。

不思議な事に、それだけでも安心感が湧き上がってくるのだから、自分がどれだけクロードを信頼しているかがわかって、小さく苦笑した。

そして、全速力で駆け出す。そこに待つ残酷な現実を全く知らずに。

剥き出しのフレームが形造っているのは人型。後は装甲で全てを覆えば完成である。

既にクロードの不眠不眠は四日目に入っていた。二日目までは大した事はなかったが、三日目に入った頃から身体が時々言う事をきかなくなり、節々は悲鳴を上げ始めていた。

しかし、その苦勞を補って余りある喜びが今はある。完成したという事もあるが、連邦がオーブ領海に現れる前に、シンへと手渡せる

事が何よりだ。

「…駆動も問題無し。OSの調整も…大丈夫！

クロードさん！後は俺達に任せて、早く議長を出迎える準備をして下さい！」

肩の部分で確認作業をしていたヨウランが叫ぶ。結局、誰にも頼る気は無かったのだが、オーブの状態を考えると完成を早める必要が出て、メカニック総動員の大袈裟な作業になってしまっていた。

最初こそ遠慮がちに手伝ってくれていた皆だが、次第に意見や指摘をしてくれるようになり、ヨウランとヴィーノというシンを見抜いている二人がくれた意見は、特に貴重だった。

クロードも気付いていなかった操縦の微妙な癖は、新生インパルスによりシンに扱い易いように仕上げる為の、最高の材料となっていた。

「…ああ。そう、させて貰う」

くらつく頭とふらつく脚。流石にこれ程に心身を削った事はなかったので、今すぐぶっ倒れてしまいたいぐらいの心境だ。

しかし、あの議長がオーブにやってくるという不安要素を、みすみす見逃す訳にもいかない。

途中で大西洋連邦に襲われる危険を承知で、しかも、敵国と対立を示した国に議長自らが赴くなんて、余程の理由がある筈である。

しかもその余程は、確実に誰かの頭痛を誘発する困ったものなので

ある。

しかし、頭は少しは働くが身体はちっとも言う事をきいちゃくれない。

MSデッキの出入口に向かうだけの、大した距離もない平坦な道すらも、急勾配で岩肌剥き出しの道を、登山道具を使わずに昇っているような感覚。

空気が薄く、どんどんと意識を刈り取られていくようで、クロードは近くに積んであった小さめのコンテナに突っ込んでしまっていた。ガッシャーン、とド派手な音はデッキ内に響き渡っていて、装甲の取り付け作業の騒音で聞こえない筈の、ヴィーノの耳にまで届く。だから相当だ。

「大丈夫か!？」

ラグナロクの装甲のチェックをしていたマッド・エイブスが駆け寄ってくる。勿論大丈夫な訳がないのだが、心配を掛ける意味は皆目無い。

「∴大丈夫。ち、ちよつと工具箱に躓いただけだからさ」

確かに散乱したコンテナの下になっている、スパナやドライバーが目につくが、絶対にそれだけじゃない確信がマッドにはあった。

勝手にしろと突き放した夜から手伝いはしなかったが、様子は時々見にくるようにしていたのだ。いつ倒れて、身体を壊すかわからなかったから。

しかし、クロードはいつまでも眠ろうともしないし、うつらうつらと舟を漕ぎ出すと、あの時と同じようにドライバーを腿に突き刺す事で、気合いを入れ直していたのだ。

脚の一部は、赤服のせいであまり目立ってはいないが、赤黒く変色しているのが見て取れて、その痛々しさにマッドは堪えられる気がしなかった。

「ちょっとじゃないだろ……。医務室に行った方が良いんじゃないか？」

「……議長が来られるなら、それをちゃんと迎えるのも軍人の務め。それが終われば、少しは休めるからさ」

散在する一つのコンテナを支えに、クロードは立ち上がるとまた出入口へと覚束ない足を進めていく。

少しずつ、ゆっくりと。普段のあいつからは考えられないペースなのが、無理矢理に身体を動かしていると印象付けられて、メカニツクの殆どが心配そうに見詰めていた。

そう、無理をするという事は、他に迷惑を掛けると同意となるのだ。それをクロードは未だにわかってくれない。マッドの瞳は寂しげだった。

漸く出入口に到達し、一先ず安心の溜息を吐き出そうとしたその時、もの凄い勢いを保った誰かがMSデッキへと進入を試みようとした。そうになると、入口に立っているクロードと衝突するのは必至だ。

「痛っ!?!」「おわっ!?!」

足腰がしっかりしていない状態のクロードに、受け止める力なんてある筈もなく、走ってきた奴に馬乗りされる状態に陥っていた。

少し痛む後頭部とかなり痛む脇腹。しかし、腹上に乗られてる感覚がある訳で、本当に痛む場所は押さえられず、仕方なく後頭部を摩りながら瞳を開ける。

すると、そこには扇情的な光景が広がっていて、クロードは思わず凝視していた。

ピンクのミニスカートから伸びるすらりとした脚が、折り曲げられる事によって出来る腿と膨ら脛のコントラストが眩しく、その上、腿を覆い隠すような黒のストッキングがより魅惑的に映していた。

「だ、大丈夫？」

上から降ってくるソプラノに、漸く我を取り戻したクロードは見上げて、そこに居る人物を確認する。まあ、着ている制服とミニスカートで誰かなんてわかっていたのだが。

「……お転婆も良いが、周りは確認しような、ルナマリア」

その言葉で恥ずかしくなって頬を染めたルナマリアなのだが、多分この体勢の方がよっぽど恥ずかしい気がするの、クロードの勘違いではなからう。自分の顔も火照っているのはわかっていて。

「で、どうしたんだ？随分慌ててたようだが？」

ときまぎする内心を押し隠すように、冷静な部分を押し出して質問

してみると、ルナマリアの顔色が一変した。朱に交わると赤に変わるというが、彼女の顔は真逆に染まる。

「そうだ！クロード、大変なんです！ステラが！」

「ステラが！？」

それを聞いただけで、大体の状況を把握出来たクロードは、ルナマリアを抱えて降ろし、一目散に医務室へと駆け出す。

一瞬の事に惚けてしまったルナマリアも、今までの疲れを微塵も感じさせないクロードに付いていく為に走り出す。

残されたメカニック達の戸惑う表情等知らずに。

横たわる姿が弱々しさを更に際立たせて、ステラの儂さが増しているような気がして、シンの表情は悲しさで歪んでいた。

「…シン、レイ。芳しくない事しか告げられないが、覚悟は良いか？」

クロードを呼びに言ったルナマリアは未だ到着していない。必然的に、クロードもこの場には居ない事になる。

そもそも議長を迎える為の準備に忙しい他のクルーを犠牲にする形になり、余り褒められた事ではないのだから、他に人が増えるのを待つのは、半分お門違いなのだ。

しかし、それを咎めようとする心の寂しい奴は、多分この艦の中には居ないだろう、とラルスは願う事にした。

一人は何も反応を示さず、一人は静かに頷いた。

こんな状態を見せ付けられてしまつては、予想を外す方が難しいだろうが。

「細胞の死滅が加速度的に進行している。特に、生命維持に関わる筋肉や内臓の反応は、最早どうしようもない。…持つて、後一週間が良いところだ」

部屋中を沈黙が覆う。重苦しい空気が肺に入るのを拒んでいるかのように、呼吸をする度に身体が重くなっていく。

「…多分、これも情報漏洩を防ぐ為の手なんだろう。こればかりは、何の薬品でこれを食べ止めているのかわからない以上、手の施しようもない」

絶望に沈むシンの表情。そしてラルスも、自分の力が及ばない事に絶望していた。

この娘を救う為、クロードは自分の評価が下がるのを顧みず、ミネルバへて自分を招いたというのに、エクステンデッドの余りの複雑さに、延命措置ぐらいしか出来やしなかったし、この症状が現れる兆候さえ感じ取れていなかった。

あまりにも不甲斐ないなく、お粗末としか言えない自分の浅学さに、普段表情を崩さないラルスも、流石に顔を悲しみに歪めていた。

そこに駆け込んでくる二人分の足音。

「どうなんだ、容態は!？」

息の上があった、独特な高さの声でクロードは尋ねてきた。それだけでラルスは気付いてしまっていた。もう限界が近いと。

「……お手上げだ……。ステラが元いた場所なら治療出来るだろうが、奴らがどこに居るかもわからないのだから」

「……いや、それなら大丈夫だろう。奴らはきつと、オーブに現れる筈だ」

もう考える力までも限界なのだろうか、クロードにしては非現実的な事を言う。

戦場で同じ敵と見える可能性なんて、本当に極僅かだ。敵味方関係なく、いつ散るかもわからないというのに、ステラの乗っていた艦が都合良く出現する筈がないのだ。

「あいつらはユニウスセブンから離脱するのも早かったし、ザフトが追っ手を差し向けたという情報も無い。それに、ミネルバと相対している連邦の小隊はあそこだけだ。なら、奴らがここに来るのは当然だろう？」

「……そうだな」

そんな理想論を信じられる程、ラルスは夢見がちではないが、今は藁にも縋る思いを抱くしかない状態だ。

「それに賭けるしかないんだ、せいぜい来てくれる事を祈るとしよう」

ステラに心配の目を向ける二人と、絶望に打ち漣がれる者。その様子を垣間見て、クロードはある手段を脳裏に描く。

しかし、そのビジョンはぐにやぐにやにくねり、どんどんと暗闇が支配していく。

「クロード!？」

何かが崩れ落ちる音と、ルナマリアの悲鳴だけが耳に残り、クロードの意識は完全に暗転したのだった。

PHASE-38 ステラッ!!? (後書き)

お読み頂き、ありがとうございます。

さて、長かった前振りも漸く次回で最後になります。ここからは、少し話の進行のペースを早めていきたいと思います。

宜しければ、次回もお付き合い下さい。お疲れ様でした。

PHASE-39 大切に思うものがあるから（前書き）

激動を迎えた世界。その真ん中で抗戦を宣ったオーブの会議の不穏は、代表と宰相の醸し出す雰囲気が誘ったもの。

そもそも変わる筈はないのだ。人は、口でも腕でも争う事を止められないのだから。

PHASE－39 大切に思うものがあるから

「これはどういう事かね？アスハ代表」

カガリの国民への宣言から、毎日のように招集されている内閣会議の最中、用事があって遅れると告げてきていたウナトが、もの凄いらしい顔で入室してきた。

その顔はユニウスセブン破碎から帰還した時、何か裏を持っているなど予感させたものと同じで、カガリは最後のピースが到着した事を確信した。

「どう、とは？主語が抜けていては答えようがない」

あくまで平静を、いつもの態度で振る舞う事を意識し、本当に何も知らないと惚けている事を強調してやった。それだけでうっすらと口の端を上げたのだから、カガリは内心で小さく嘲笑してやった。

「昼頃にやってきた宇宙艦、あれはザフトの識別信号を放っておりました。確か名前はボルテールとか言いましたな」

「別に不思議はないだろう。ミネルバもそろそろ出立すべきなのだろうから、本国からの補給が来たと考えれば、入国を許すのは当たり前前だと思うが？」

尚も惚けるカガリの魂胆が少しづつわかってきたユウナは、末恐ろしさに身震いしそうになっていた。

そして勘当された身であるが、父親の不憫さに同情を禁じえなかつ

た。それ程、カガリのやり方は狡猾に映るのだ。

「それがですね、ボルテールにはギルバート・デュランダル最高議長が搭乗されているようでしてね。私はてっきり、代表が呼び出したのではないかと思ひましてね」

愉悦に歪んでいくウナトの顔とは正反対に、カガリは無表情を貫いている。こんな所でボロを出す訳にもいかないし、この件が失敗すれば、大戦の時のように連邦の圧倒的な武力に、オーブは陥落するだろう。

それだけは避けねばならぬ。

「そうだが？何か問題があるのか？」

素直に肯定を示したカガリに、浮かべていた笑みをそのままに態とらしく驚いたような仕種を混ぜて、ウナトは科白がかった物言いを始めた。

「ほう？代表もおかしな事を言う。我が国の理念をお忘れにでもなられたのですかな？」

《他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない》。貴女はこれの一番目、侵略を許す事になる」

プラントから力を借りるという事は、関係上、属国になるも同義だ。確かにオーブも主に地球で取れる資源の提供などで、プラントへの借りを作ってはいるが、それは極めて小さな要因でしかない。

ザフトを動かして貰う、との釣り合いは遥かにプラント側に比重が集中するだろうと天秤も示すだろう。

「それだけじゃなく、その後に続くであろう関係で、三番目は確実に侵す事になる」

プラントが敵対するのは地球に存在する組織、大西洋連邦。地球に属国が存在すれば、その国を前線として戦争するのが利に適っている。

自分の統治する国が疲弊する事は無く、その上領土が荒れる事も無い。上に立つ者からすれば願ったり叶ったりな、最高の防衛線となるのだ。

それだけでなく、どんどんと消費される弾薬やMS等も需要が高まり、しかもそれを属国に買わせれば、経済ももの凄い勢いで潤っていく。

これは代表が敵対を宣言したロゴスと同じやり方だが、どんな国でもやっている事象だ。世界の情勢を知っていれば、なんら不思議は湧いてこない。

「貴女は御自分が大事だと宣った理念を、貴女自身で穢しているのだよ！」

追求する言動だというのに、ウナトの顔には先程までは薄く浮かべていただけの笑みが、より濃く、より深く皺として刻み込まれ、相手を追い込んだとうすら笑う。

しかし、追い込んだ筈のアスハ代表の顔は少しも変化なく、無表情が貫かれている事に、ウナトは漸く疑問を抱き始めた。

そして、その隣に座る馬鹿息子は、こちらに憐れみの視線を向けている事にも気付き、自分を取り巻く様子がおかしい事に至った。

「何を言うかと思えば……。セイラン宰相、貴方がここまで述べた事を考慮していないと、本当にそう思ってるのか？」

カガリの鋭い視線が見上げてきて、見下している筈の自分が気圧されているのを不思議に思うと同時に、悔しさまでも溢れてきて、ウナトは何故かわからず唇を噛み締めていた。

（そうだ、まだ小娘は反論を口にすらしていない。根拠になる論を述べてもいないのに、こんな気持ちになるのはどうしてなんだ！？）

「オーブの理念は貴方が述べてくれた通り、他国に屈しない為のものだ。なら、国単位で取引をしなければ良い」

会議室全体が一気にどよめきを発して、車椅子に座る少女然とした代表に目を向ける。

国単位で取引しない？ という事なんだ？ 視線を向けてくる全員がそれを聞きたがっていた。

「国を相手にすれば、思惑を巡らす者がその内部に居て、そいつらが暗躍する事による被害を出さない為に、《他国の侵略を許さず》がある。

逆も然別だ。オーブが侵略すれば、今度は被害を受けた国がやり返そうと躍起になり、余計に被害が広まる。それを食い止める為に、

《他国の侵略せず》がある。

そして最後に、敵対する間に入るという事は巻き添えを喰らうという事であり、いらない損害を国に齎す。だから、オーブの理念は《

『国』という部分を強調しているのだ」

今述べられたのはカガリの歪曲した考え方である。そう解釈せざるを得ないのだ。

この国で防衛出来る以上の侵攻を、大西洋連邦は仕掛けてくるであろう。

決め手となる戦力が欲しいからこそ、痛む良心に鞭を打って、父が遵守し続けた理念に対する曲解を披露したのだ。

そう、完璧なる決め手となるものの為に。

「：ふん、詭弁だな。そんな馬鹿げた解釈を支持する者等、一人もいる訳があるまい」

一瞬だけ驚愕しそうになった顔を繕って、ウナトは先程と同じようになうすら笑いを再び浮かべていた。

曲解に辿りついたり、賛同するような奴らは、世の中の現実を見据えられない愚か者だと相場は決まっている。

この小娘が愚かだとは知っていたが、これ程までとは心底驚かされた。

「詭弁で結構。それに、貴方がそんな事を言える立場にあるとも思ってるのか？」

「何!？」

愚か者と決め付けた奴に、愚か者と決め付けられる言い方をされれば、良い顔をする訳もあるまい。

しかし、世の理を考えれば、詭弁等有り触れた日常でしかないのだ。

「貴方にも経験があるのではないか？法律や条約に極限まで触れないようなやり方を模索し、それを追求された場合、どのように回避するかを。それは詭弁とは言わないのか？」

政治において、公約やら国際条約やら法律やらで雁字搦めにされてしまう。それらの間隙を狙って自分に対して、そして自国の為に振曲げたと表されてしまってもしょうがないぐらいの答えを導き出すなんて、オーブ首長国の政治家のトップであるウナトが行っていない筈がないのだ。

元々、クリーンなイメージなんて無いし、裏でどんなあくどいやり方をしているのか、と時々不安になるようなそんな人物なのだから。

「そ、それは…」

「何も吃る事は無いだろう。ここに居る者達、全員が経験しているであろう事なんだから。それとも、何か疚しい事でもあるのか？例えば――」

「私達の到着を邪魔する為に大西洋連邦に報告を行った、等かね？」
短くノックが二回舐したと同時に、両開きの扉が開け放たれていて、そこに立っている人物を誰もが見遣った。

黒のウェーブがかった長髪と、内心の読めない飄々とした表情を浮

かべている者。

ウナトは驚くと同時に非常にまずいと判断し、カガリに向けて糾弾を行おうとする。しかし、それは叶わなかった。

「父上、他国のトップがいらっしゃるこの場で、取り乱した態度を見せる事はお避け下さい」

ユウナが間に割り込んで、カガリが車椅子で移動するのを助けたのだ。そして痛感する。こいつは本当に馬鹿者だと。

「……アスハ代表。報告で知ってはいましたが、この度の貴女の怪我は我が国のミスです。

……本当に申し訳のしようもない……」

頭を深々と下げ、カガリの視線より更に低い場所で固定する。誠意を伝える方法は多々あるだろうが、デュランダルはこれ以上に効力のある行動は他に無いと考えていた。

後ろに控えている二人も、一人は作った無表情で、もう一人は悲痛な表情で頭を垂れた。

「謝罪は通信で頂きましたし、彼らが居なければ、私はフリーダムに攫われていました。だから頭を上げて下さい」

躊躇いがちに頭を上げたデュランダルの顔に浮かぶのは、後ろの銀髪と同じ無表情に見えて、ユウナは小さな猜疑を覚えた。何故かは自分でもわからないのだが、何か違和感がある。

「それに私が至らなかったが故に、貴方達に本来被らなくても良い

損害を与えてしまった事を謝らなきゃいけない……。
本当に申し訳ない」

今度はカガリが頭を下げた。ボルテールはイザーク達の活躍により、大した事もなく地球へと降下出来ていた。

それに議長が口に出した事は推論として、この会議室へ入る為の切っ掛けにしか過ぎない。

だからという訳ではないが、カガリが謝る事は筋違いに思えて仕方がない。もし、ウナトがそれを手回しした証拠を掴んでいるのなら、話は別だが。

「いえ、お気になさらずに。それより、大西洋連邦の大隊がこちらに向かっているという情報があります。早々に対策を練る必要があるでしょう」

「ああ、そうだな」

自然と進んでいく会話に不審感が湧き上がる。

対策を練る？他国のトップと一緒に？この小娘は本当に狂ってしまったというのか？

「ちょっと待て！プラントの最高権力者と共に対策を練る、だと！
？貴女の宣ったオーブの理念を自ら踏みにじるつもりなのか！？」

もの凄い勢いで二人に詰め寄ったウナトは、焦りを全面に表していた。大西洋連邦との同盟を押し進めていた事を考えてみれば、はっきりとプラントの協力は拒否したいところではある。

「：踏みにじる、という部分を否定するつもりは無い。だが、議長には協力して頂く」

「だからそれが愚かな行為だと何故気付かぬ！？他国に介入されてしまい、その借りを返す宛もなければ、我が国は属国になり下がるしかないのだぞ！！」

ウナトの声に悲痛な響きが加わっていた。もしかしたら、大西洋連邦に加わる事でオーブを守ろうとしていたのかもしれないと、カガリ思えた。

「だが、理念自体に背くつもりはない。理念は守られるからこそ、理念として効力があるのだから」

意味がわからない、とウナトの表情が語っていた。議員達も一様に頭の上に？を飛ばし、ユウナも不安げな顔を浮かべているのを確認し、カガリはデュランダルを窺う。

デュランダルは小さく頷いて、薄い笑いを口の端に浮かべていた。

「今回の協力はプラントでも、増してザフトからでもない。ギルバート・デュランダル最高議長個人のお力添えを頂く」

喝いた笑い声が響く。それを発したウナトは掛けている眼鏡等気にせず、手を目を覆うように被せていた。

そして喝いた笑いはずいぶん加速し、とうとう狂ったような笑い方を始めた。

「クッククッ…。詭弁なんて生温いぐらいの、本当に道理が通っていない答えだな！」

そして弾かれたように大声を発したウナトは、今度こそカガリの目の前に顔を近付けた。怯む様子も見せない事に腹は立ったが、別段気にするようなものでも無いと思った。

「個人の力だと？王国の王様なら可能であろうが、プラントは民主主義だろう！軍力を動かすには議会の承認も、ザフトの承認もいるのだよ！承認するという段階を踏んだ時点で、オーブの理念は守られて等しい！」

議会場が俄かに活気を帯びた。代表の披露した理念に対する曲解の妙と、ウナトが反論に使った正論の筋の通り方。

どちらの意見にも納得出来る要因が含まれ、しかし、代表の曲解は多少無茶な解釈も混じっている。

代表と宰相、どちらの意見を取り入れるべきか。どちらの意見がより自分に利益を齎すか、判断を仕切れないながらも、議員達はどう所を吐露し始めたのだった。

「国からの援助を受けず、かつオーブの戦力を強化するには、議長としての立場についていらっしゃる、ギルバート氏に力を貸して頂くのが最善だ」

「有り得ない空想を現実には持ち込まないで頂けるか？どうやって圧倒的な戦力を有する連邦の大隊を、議長の立場を利用して退けるつもりなのですか？

そんな仰天な方法が存在するのなら、ご教授願いたいものですな！」
確かに普通に考えれば、カガリの言う事は夢想でもしているのでは？と疑われて然るべきである。

しかし、プラント最高議長には一つだけ、ザフトに干渉されずに軍を動かす権限が存在した。本来は承認を必要とはするが、緊急時、或いは議長が必要であると判断した時、それらは承認を必要とせず、議長権限で動かす事が可能なのだ。

それは――。

「特務隊 FAITHを使うのです」

言い合いをする二人の間に凜とした声が割り込む。思わず言葉を止めてしまうそれは、ウナトにとって不穏極まりない響きを伴って、脳内に叩き込まれた。

「彼らは言わば私の直属の隊員です。その者をどう扱おうと、干渉を許されるのは自分自身だけ。そうでしょう？」

「な、何がそうでしょう？だ！そんな勝手な解釈で、良くプラントの最高権力を把握出来ているな！？それに、こんな事を聞いてしまっっては、お前達二人だって黙ってはおれまい！」

ウナトに浮かぶ感情は混沌としていて、多分自分自身でも判別出来ていないだろう。そんな不安定な心だからか、自身の論述を駆使するのではなく、デュランダルに付き従っている銀と金の二人に話を振った。

：そう言えば、ディアツカが纏っている軍服が違っている。ミリアリアとも疎遠になってしまったようだし、女性問題で降格させられたのかもしれない。

「……………」

そして二人は何も発しない。口を開こうともせず、横一文字に閉ざされて、決して言葉を紡がないと誓っているかのように。

「お前達はこんな横暴な指導者を何とも思わんのか！？自分の意見も持たずに、よく軍に籍を置いているな！」

命令に従う事は大事だし、軍人にとってそれ以上に優先されるべき用件は無い。しかし、考えるべき時も決してないとは言えない。

それは、今ウナトが言ったような状況に立った時だ。

従うべき人物が、私利私欲の為に自分達を動かしている事を知ってしまい、それが軍の正義を無視しているとしたら、弾劾すべきなのか、それとも上に立つ者が絶対だと諦めるか。

他に考えられる解決法はあるだろうが、最初に思い浮かぶのは大概こんな単純な思考だ。

しかし、最後に残るのも結局は単純な答えでもある。

勿論、イザークにもディアツカにも思う所はある。答えがわかると言って連れてこられた場所が、こんな空気の重苦しい目眩がしそうな場所で、その上オーブの宰相がこちらに問い掛けようとしているのだから、堪ったものではない。

だが、彼らは口を開こうとしない。否、開けないのだ。

「文官の対するのは文官です。よって、彼らは口を開こうとはしませんよ」

シビリアン・コントロール。民主主義の国であるならば、議員達が理解し、導入されていて然るべき制度である。

内容は政治的見解は軍事的見解より優越し、国民の代表たる議員達の意見を無下にしてはいけない。と言った所だ。

簡単に表せば、軍は戦争をしたいが、国民の選挙で選ばれたであろう政治家達が反対したら、それは国民達が戦争を望んでいないという解釈になり、軍の意見は承認されない、とすればわかり易いか。その何処にイザーク達が黙っている理由になるかと言えば、政治を司る場所で、自国の評価を下す事は憚れるし、国民の圧倒的人気を擁するこの人に意見する事は、国民の意思を無下にすると同義だ。

「確かに大事なものではあるだろうが、こんなふざけた権力の使い方をするのに、文官も軍人もなからう！」

「おっしゃられる事は百も承知してますよ。しかし、これは私なりに世界の行く末を案じた結果であり、ここで連邦を叩いておく事は今後のプラントに大切な事だと思ったまで。これに軍からの干渉を許す気はない」

確固たる決意を持って、そして裁かれるという恐怖を受け入れる度量を見せ付けて、デュランダルはウナトを真っ正面で捉える。

何かをする時に、何かを犠牲にしないで結果を得るのは虫の良い話だ。そんな甘い世の中だったなら、誰も苦勞をしないし、悩みだつて持っていない。

それが理。不変に続いてきた因果の輪廻。

「…ふん、そこまで言うのなら見届けてやろう。泣きっ面を拝むのがオチだろうがな」

片方の扉を開いて、外で待っていた執事を伴ってウナトは会議室を去っていく。意見があった訳ではないが、引いてくれた事で完全に迎え討つ体勢は整った事になる。

しかし、カガリの中には小さなさくれが立っていた。ウナトの性格を考えれば、この国から亡命し、大西洋連邦側に寝返ってもおかしくないのに、彼はオーブに残って見届けると言う。

敵としてしか見ていなかったウナトの中を、カガリは少し知りたいと思ひ始めていた。

「…議長、お疲れ様でした」

ボルテールへと帰還する際に立ち寄ったミネルバで、最初に迎えてくれたタリアが掛けてくれたのは労いの言葉だった。

心身共に疲れてしまっていたデュランダルは、素直にその言葉が嬉しいと感じた。

最近の動向が激しい故に、疲れは溜まっていく一方で、立場上仕方のない事だとわかってはいるが、愚痴の一つでも零したいくらいだ。

「ありがとう、タリア。今回の強行軍は流石に堪えたよ」

「…そうですね、こんな急に地球圏とアプリリウス間を往復するなんて、本当にジュール隊長には同情しますわ」

デュランダル言葉は素っ気なく受け流され、タリアはイザークへと話題を振った。イザークも態とらしく肩を回し、首を左右に動かす。

「本当、無茶苦茶な権力者を持った下っ端が、どれ程苦労するか、本人に教えて上げたいですよ」

軽口を叩いたイザークではあったが、正直な部分はこの言葉に滲み出していた。

オーブへ渡れば議長がジェネシスを使用した理由がわかるというから、ボルテールを駆ってここまで来たというのに、未だその答えには至れていなかった。

見せられたのは、互いの間隙を狙います三人のやり取り。決意の固さだけは理解出来たが、無茶苦茶過ぎて頭の中は混乱に満ち溢れていた。

「…隊長」

ディアツカが少し後ろから耳打ちしてくる。少し抑えろ、と。

だがそんなつもりは毛頭無い。会議室では制限が強過ぎて何かを追求するには不向きだった。今はそんな枷等必要ない、ザフトの上層部も居ない本音を聞き出せる唯一の場所。

「議長、私はやはり理解できなかった。あなたはここに答えあるとおっしゃりました。会議室でも、勿論来る途中も考えましたが、一つもわかりません。

それに軍の私物化は軍法で許されていません」

早口でそう告げたイザークはデュランダルを睨みつけた。それは答えを求めるものでは無くて、こちらの意図を探る為の政治家が良く見せる瞳。

デュランダルは仕方無いと観念し、溜息を吐いた。少し気恥ずかしいが、大事な我が国の民の問い掛けだ、無下に等しない。

「会議室で何に対する言い争いをしていたかは、わかっているよね？」

「はい。大西洋連邦に抗う為の対策を立てていた、といった所でしようか」

そもそももうすぐで目の前に現れる事を知っているのに、無策で迎え討とうとする奴は、多分議員なんかになっても役に立つ訳がない。

「そう。どちらも引く気はなかった。片やオーブの独立を守ろうと必死になり、またもう一方はオーブを連邦に加盟させる為に躍起になっている。

どちらもこの国を守りたいが為に、互いの意見をぶつけ合う。これが何を示すか、君にはわかるかい？」

顎に手を当てて考えてみるも、ふわふわとした感覚の中では確かなものを掴めそうにない。わかりかけてはいるが、いまいち整理がついてくれない。

「それは《大切に思うものがあるから》という事だ」

響きが内に入り込んだ瞬間、ふわふわした感覚は急速に塊に変わり、心の奥底にするりと納まった。そして妙にじっくり来る感触を確かめるように、イザークは口を開いた。

「そ、そうか。国に住む民、国に根付く文化、そして国に息づく植物や果ては風景まで、大切に守りたいものがあるから、人は法を犯してでもその為に行動するし、強い意志を保っていられるのか！」

デュランダルは苦笑する。確かに答えは間違っていないが、少し極端に考え過ぎではなからうかと。別段、取り越す程では無いだろうと、イザークが自分で出した答えを否定するのも憚れて、小さな訂正の言葉を飲み込んだ。

それがどう言った結末を齎すかを、この時点で知るには無理があり過ぎた。

その原因となる種は確かに芽吹き、心底に巣くう蟠りとなって存在を誇示している。しかし、その小さな鼓動を感じている筈もなく、四人の労いやら、敬いやら、皮肉やらを会話に交えた雑談は、どこにも居ないクロードに気付く事で、漸くの終焉を迎えたのだった。

PHASE-39 大切に思うものがあるから（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

無茶苦茶な内容になってしまいましたが、自分の貫きたい概念は詰め込めたと思います。

何がどう、とかは考えて頂けるとありがたいです。

それでは、お疲れ様でした。次回もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-40 新しいインパルス（前書き）

大切な者が苦しみ、死の淵に瀕しているというのに、シンにはしてやれる事が限られていた。

それも不可能に近い確率しかなくて、絶望に打ちひしがれるしかない時、彼の耳に届いたのは新たなインパルスの鼓動であった。

PHASE-40 新しいインパルス

目的の為に動いていたとして、その努力や尽力が無駄に終わった時の脱力感は相当なものである事は言うまでもないだろう。

今朝から慌ただしく動いていたミネルバクルー達は、議長を迎えるという命題を満たせず、訪れる前に送られてきた指令書に記載されていた文章で、他の仕事を熟さなければいけなくなっていた。

それは――。

「……結局、俺達もオーブ防衛に加わるのか……」

レイが落とした呟きが全てを物語っており、皆の気持ちを代弁しているかのような、そんな感情が込められているかのようにだった。

確かにオーブには義理立てする理由が、この艦にはある。補給も儘ならない所を代表の勧めで救われたり、装甲を直す為の人材も材料も提供頂いた。そして極めつけが、結婚式の護衛の失敗。

これだけの要素が揃えば、ザフトの上層部も重い腰を上げるには十分だろうが、レイの中では引っ掛かるものがあつた。

「そうよね。私たちは本来、カーペンタリア辺りに移動する筈だったのよね」

これは議長が訪れる事がわかっていなければ、今日にでも出航する筈であつた。

既にオーブへ滞在して、一週間は経ってしまっている。これ以上ここに居座る事は、こちらとしても憚れたし、オーブからしても迷惑であろうと考えての艦長の判断だった。

クロードがあんな状態だったから、正式に伝えられてはいなかったが、それでも情報はどこから漏れるものだ。今回はアーサー辺りが怪しいか。

「…オーブを守る為の戦いか。シン、大丈夫なのか？」

問い掛けられたシンは、前を向いて歩くだけで、こちらを振り向く気配は一切ない。寧ろ、ずんずんと目的の場所へと進んでいくので、一緒に居る二人としてはやりにくい事この上ない。

「一度裏切られた国、しかも大戦の時と変わらない状況じゃ、シンが怒るのも無理はないけどさ」

オノゴロ島で家族を失った時、オーブの理念を守る為の戦いで惨敗した時、プラントへと亡命する宇宙艦に収容された時、あんな惨めで悲しい思いは二度とごめんだと思った。

それは今も変わっていない筈なのに、シンの中には全く別の感情が溢れていた。

「シン、幾ら不機嫌だとしても人の話は――」

レイが肩を掴むと漸く振り向いたシンの顔に滲んでいたのは、二人の予想とは掛け離れた表情で。

「あんた、何で泣いて…」

頬を一筋の粒が伝って、その跡は鮮明に残っていた。二人は押し黙るしかなかった。どうして良いかわからず、手を拱く事すら許されず、目の前で鋭い視線のまま涙を流す同僚を見詰めるしかなかった。

「…俺はステラの為に何も出来ないし、クロードが言った通りにあの部隊がここに来たとしても、どうすれば良いかなんてわからない」
流れる粒を隠すそぶりも見せずに、シンは二人を見詰める。いや、二人の居る方のずっと向こうを見据えていた。

「ステラを渡したとして、また争いの道具として使われるだけかもしれないし、最悪、記憶を操作されて、また俺達の前に立ち塞がると思うと、怖くて仕方ない…」

鋭さを見せていた目尻は下を向いた。拳は握り締められ、ぎりぎりと擬音が聞こえてきそうな程に食い込み、シンの気持ちを代弁しているかのようだ。

「だけど、このままじゃステラは手の施しようもなく死んでしまう！まだ俺達と変わらない女の子が、惨めに死んでいくなんて辛過ぎるよ…」

救いたい、救われて欲しい。気持ちはいくらでも湧いてくるというのに、肝心の方法がどこにも見当たらない。

そんなジレンマの中にほうり込まれ、左右を見渡しても絶望しかないこの状態では、涙を隠す意味なんて全く無い。

「…カルテを手に入れば何とかなるが…」

「どこにあるかなんて、どうやって知るって言うのよ？」

こちらに向かっていると言っても、今どこを移動していて、どのくらいの戦力を周りに侍らせているかも確認せずに飛び出すのは、戦場に立つ者であるなら愚の骨頂だ。

シンもそこらへんを理解してしまっているが為に、飛び出したい気持ちをしつかりと抑え込んでいられた。

「それにあわよく潜入出来たとして、持ち帰る時に背負うリスクが大きい。発見されてしまえば、流石に勝ち目はない」

ナチュラルとコーデイナーに差があるからと言って、あまりにも掛け離れた頭数の前ではどうしようもない。

一応、乗り込んだ時に場所を目指してMSがやって来てくれば、何とかならない事もないだろうが――。

「それを解決出来るであろうインパルスは、未だ改造が終わっていない。俺とルナマリアのザクでは、搭乗口を押さえられたら終わりだからな」

冷静に解析するレイだって心苦しいのだ。表情はいつもと変わっていないが、逆にそれが内にある感情を際立たせて、ルナマリアにもそれは飛び火してしまっていた。

「：ステラを助けたいのはわかるわ。私もどうにか出来るならしたいけど：」

軍という枠に縛られている限りは、勝手な行動を自粛しなければいけないし、潜入したとして敵側の捕虜になるような間抜けな事をしてもいけない。

軍のこれからの動きやMSの情報等、漏れては困る情報は山のようにある訳で、捕まりでもしたら何をしてでも持っている情報を引き出そうとするだろう。

ちょうど、ステラを上層部が欲しがったように。

「…わかってる。勝手に動けば皆に迷惑をかける」

シンの言葉を聞いて、レイとルナマリアは本当に変わったんだな、と再確認した。

これも守りたい存在であるステラが居て、それを最優先で念頭に置いているからこそ、シンの力へと変わっている。

喜ばしい変化ではあるが、危うい印象を今は抱かざるを得なかった。

もしも、このままステラが息を引き取るような事になったら。もしも、ステラを引き渡したとして、彼女とまた戦場であったとしたら。もしも、そんな彼女を討たなければならなくなったら。

暴走するのか、それとも悲しみで動けなくなるのか。想像は出来るが、どれが正解かなんて本人にもわからないだろう。

一つだけはっきりとしているのは、シンの周りの世界の彩りは急激に冷めていき、オーブを恨んでいたあの頃の顔が再び戻ってくるかもしれない、という事だけだ。

「だけど、ステラを救えるなら俺は何だってする。…その時は邪魔しないでくれよ」

悲しげな笑みを浮かべて言うものだから、二人の心をギュッと締め付ける。縄で拘束された時のような窮屈さよりはきつめだが、手錠を嵌められた時よりもゆとりがある。

微妙なその締め付け具合が、この世の無情を知って達観してしまっている自分に対して、余計に虚しさを齎すのだ。ほぼ間違いなく救えない、と知ってしまったているから。

三人を包む静寂は、居心地の悪い雰囲気を漂わせて、ルナマリアはどうかにか新しい話題を探してみたが、この場面にそぐわないものばかりが浮かんでしまうので、すぐに脳内で消し去っていた。

もう少しで顔が百面相を初めそうになった時、向かっていく廊下から走ってくる二つの影を見つけた。

「おーい、皆！」

前髪の一部が染められ、特徴の少ない彼の存在を確固たるものにしてているのは、誰もが気付いている事だ。そんな彼が手をぶんぶんと振り、こちらの雰囲気なんてお構い無しに振る舞うものだから、隣に居る浅黒い肌の少年は苦笑した。

「よう、三人共。よろしい雰囲気じゃないみたいだけど、ちょっとMSデッキに来てくれよ」

ヨウランの言葉に首を捻るルナマリア。自分達が向かっていた目的

の場所に、わざわざ呼び出されるといのは、確かに不思議な感覚かもしれない。

「とうとう完成したんだよ、新しいインパルスが」

シンの沈んでいた顔が少し持ち上がった。新たな戦う力を手に入ればどうにかなる、と安直な考えは出来やしないが、ステラを救う為の礎にはなると思い込める程には、良い知らせであると思える。

無骨な金属が剥き出しになっている床や、機械類に注される油の独特の臭いがいつもより強くなったMSデッキ。

その空間の最奥、ハンガーに固定された装甲に色が灯っていない、本来なら分離状態にあると思っていた愛機が、堂々と聳え立っているのだ。

「……これが、新しいインパルスなのか……？」

歩み寄りながら見上げる角度を変えていく。分離状態でない事に違和感を感じるが、特筆して表す程の違和感でもない。普段から乗っているシンから考えれば、そんな感じであったのだけど。

「な、何て言うか…、随分前衛的な感じね…」

ルナマリアが落とした言葉は、レイの気持ちと同じものであった。

総じて、ガンダムタイプの機体はゴテゴテとしたデザインになりにくい。二人が乗るザク等の汎用性が高い機体には、コスト面を削減する為に、フェイスシフトを採用せず、装甲の厚さと微妙な角度の調整により、攻撃が当たった時に分散されるように計算されている。

よって、ゴツゴツとした雰囲気仕上がる事が多いのだが、ガンダムタイプはフェイズシフトを搭載している訳だから、ザク程の装甲を必要としない。

開発のコンセプトにもよるの違いもあり、これが一般論なのだが、今のインパルスは本当にゴテゴテとしていた。

しかし、機体自体が大きくなっている訳ではない。背面部についた武器類が、その印象を強めている事は間違いない。

「……エクスカリバーに、ケルベロスまで付いているのか……」

レイの落とした言葉に反応する者は居ない。二つが並んだ光景が、とにかく異様なのだ。

ソードシルエットの大型対艦刀であるエクスカリバーが左側の肩から垂れ下がり、右側にケルベロスの猛々しい砲身が、エクスカリバーと対照に垂れ下がっており、その対照のアンバランスさが、このインパルスの印象を更に悪い方向に加速させていた。

「まあ、見てくれはカッコ悪いかもな」

ヴィーノまで肯定してしまっただけは、最早立つ瀬がなくなってしまうだろう。

ルナマリアは後ろに居るであろう、メカニック二人を確認する為に振り向いた。クロードが倒れたのはついさっき。それにも関わらず、目の前の機体が完成しているのだから、仕上げはメカニック皆に託したという事であり、このインパルスの本当の性能を知っているであろう二人の表情が、全てを語ってくれるだろうと思ったからだ。

「……………」

少しでも眉尻を下げているのなら、すかさず文句を言っても良いだろうと考えていたが、二人の浮かべた表情はひたすらに明るかった。

見詰める先にあるインパルスの姿に相当な自信を持っている事を、ルナマリアは漸く咀嚼出来た。

「だが、操作性も反応速度も前のインパルスより遥かに優れているんだ」

この事に二人の意見が組み込まれているなんて、今のシンでは全く気付けないだろうけど、搭乗した後に気付いて驚いた顔を想像するだけで笑えるから、ある意味楽しいと思えている。

「それに――」

「それに、このインパルスにも二つの形態がある」

最後列に居るヨウラン、ヴィーノより更に後ろから聞こえてきた馴染みの声に、一様に全員が振り向いた。

そこに居たのは想像通りの人であり、その人物は真っ直ぐにシンを見詰めていた。

「マッドさん…?」

「何でマッドさんがそんな事を知ってるんですか?」

眩きを落としたシンの表情を確認してから、その左後ろから疑問の声を上げたルナマリアに視線を変える。

そして、その右隣りからも疑問の視線を感じて、マッドはレイもちらりと確認してから口を開いた。

「知ってるも何も…。俺はここの責任者だぞ？」

責任者の義務。それは任された地域や場所にある人材や物資、そしてそこで行われている催し等を統轄し、そして円滑に進められるように配慮する事が主だった内容だ。

この一つでも欠けると、MSデッキという現場は簡単に混沌へと陥ってしまう。だから、毎日の確認は怠っていないのだ。クロードがどんなに偉くなったと言っても。

「二つのタイプがあるという事は、やはり改良したといっても欠点は消えなかった、と解釈しても？」

マッドの立場を理解したレイから次に出た質問は、この機体の本質に繋がるものであった。

クロードには悪いが、《あれ》を除いた説明をさせて貰おう。

「ああ。機体が元々持つ欠点や弱点は補いきれない事が多い。インパルスに関しては、コアスプレnderが最大の弱点なんだが、ここは独立した箇所にならないと、わざわざ分離式にした意味を失ってしまう。

だから、小回りの利く真ん中を守る為の盾を腕に固定した」

そう言われると、確かに左腕の部分に見慣れない縦長な流線型の盾が取り付けられていた。それは一腕の半分程度まで覆っており、左手は自由に動かせるようになっていた。

「これはエクスカリバーを扱う為に両手を空ける必要があったからもある。最初は盾の感覚が前と違うから使い難いだろうけど、こればかりはシンに慣れて貰うしかない」

「……そう言えば。マッドさんはこの形態の名前って知ってるんですか？」

マッドは困り果てた。というのも、開発の手伝いを少々はしたが、クロードに詳しく聞こうと思っていたのは、この開発が済んであいつを休ませた後であった。

オーブに連邦が進行してきているのはわかっていたが、交戦する理由もないから、この場を離れて地球の駐屯地に向かうのだろうかと思っていた。

「…すまん、詳しい名称やらは聞いて――」

最後まで紡ぐ前にある事に思い至る。それは三日前の夜の事。無茶な武装を付けるというクロードを咎めた時に見せられた画面には、機体の名前も一緒に表示されていたのだ。

多分、あれは仮称であろうが、便宜上の名前があった方が説明もしやすい。

「…まあ、仮にこの形態の名前をインパルスαとしよう」

いきなり言葉を切ったと思ったら、仮の名前を付けたマッドは何かを隠しているように、レイには思えた。機体の説明が最優先であるこの場で、詮索をするつもりはないが、心の隅の方に留めておく事にした。

「こいつのコンセプトは圧倒的な火力と、臨機応変に戦える武装の豊富さだ」

マッドの言葉は続く。特に目立つエクスカリバーとケルベロス以外にも、腰にはヴァジュラが二本、右足の収納部分にはビームライフル、そして隠し武器として左手に付いた盾の中にビームナイフ、そして左脚の収納にはビームブーメランが装備されている、と。

「他にも、水中にも対応出来るように、ケルベロスにミサイルだけでなく、魚雷を籠められるようにしてある。これで宇宙、地上、水中も熟せるようになった」

対応出来る場所も増え、万能型に仕上がったのがインパルスαという事か。しかし、改造には改良もあれば、改悪も併存する訳で。

「武装の質は上がって、エネルギー効率も大幅に改善されてはいるが、その分機動力は犠牲にしている。それに大型の武器が多いから、小回りが利きにくい事も頭に入れておけ」

シンは黙って一度頷いた。無人島からオーブへ向かう際にクロードに告げた部分が改善され、その時に特化してたスピードを犠牲にした。

ある意味理に適ったものである事、そして望んだ事の裏に存在する事象もシンは理解出来ていた。

「さて、ではもう一つの形態、…そうだな、仮にインパルスβとする」

マッドはすたすたと歩いていくので、シン達はそれに続く。そこにあるモニターに映し出されたのは、インパルスαのデータであろうもので、βへの可変がどのような過程を踏むかを表示していた。

基本となるMSはそのままに、ケルベロスが外されて、代わりにフォースシルエットの追加スラスタが背中に付く。エクスカリバーはそのままに、ヴァジュラがもう一本追加スラスタに不随されていて、背中に二つの刀を背負う形になる。

そしてαでは白と緑を基調としていた機体色が、白と赤に変化していた。

「βはαとは逆に、とにかく機動力に重点を置いてある。フォースシルエットの追加スラスタも改良してあるし、エネルギー効率が上がっているお陰で、コアスプレnderのバーニアの性能も遺憾無く発揮出来るようになってる」

どちらかと言えば、βの方が自分には合っているだろうとシンは思った。火力で圧倒するのも良いが、毎日の日課になったシュミレーター訓練のお陰か、相手を翻弄する戦い方が好きになっていた。

相手に無駄弾を使わせたり、エネルギーを消費させたり、旗艦を襲って同様させたり等々。

目の前の倒すべき者をただひたすらに屠るのではなく、相手が嫌がる戦い方を考えるのが今のシンの進化だ。

養成所を卒業し、ミネルバに配属された時の時にしていた、無謀に突っ込む事や、正面から当たる事だけの突撃兵とは、もう別れを告げたという事だ。

「ただ、aと違って防御面は殆ど考慮していない。機動力を活かして攻撃を避けるのが当たり前の機体だから、半端な技量では扱いきれないぞ」

マッドの視線が貫いてくる。その試すような目の色に答えるように、シンはまたも一度黙って頷いた。

それは自信の表れだろうとマッドも解釈した。隣を固めているパイロット二人も、その様子を見ても何も言わないのが何よりの証拠だ。

ふと、ルナマリアの表情に変化が見られた。何かに気付いたように目が開かれ、インパルスの左側を見詰めていた。

「：そう言えば、何で防御機構の殆どが左側に付いていて、武器は右側にあるんですか？

普通なら均等に振り分けるんじゃないのかな？」

「ああ、それはな、俺とヴィーノの提案なんだ」

答えをくれたのは左後ろに居たヨウランだった。同時に三人の前にメカニック二人が歩み出てきて、ヨウランがモニターを操作して、何かのデータを呼び出した。

「これって：インパルスの戦闘データよね？」

流れ始めたのは、これまでのシンが操ったインパルスの戦う様だった。最初に使ったソードインパルスにしろ、すぐに換装したフォースインパルスにしろ、デブリを碎く為に使ったブラストインパルスにしろ、今の姿と比べると随分洗練されて見えてしまう。

「で、これがどうしたんだ？」

次に声を発したのはレイで、画面を流れ行く敵を撃破、もしくはカオス、アビス、ガイアに手痛い損害を与える光景を見ている、流石に気付きにいくかもしれない。

当の本人も気付いていないようで、軽く顔を顰めていた。

「じゃあさ、この場面見てみてよ」

ヴィーノが表示したのはユニウスセブンでの戦闘。黒く塗られた特異なジン二体を、右側から向かってくる方をヴァジュラで一刀に伏せ、次いで振り返ると共に横に難いで、そのまま方向転換してきたもう一機を真っ二つにした。

その後もインパルスは向かってくるジンを屠り続ける。右手の武器をビームライフルに変えても、打ち落とすのは《右側》から向かってくるのが殆どで、左側の相手を落としたのはその三分の一にも満たない。

「そうか…。シンは右利きであって、左側への攻撃と右側への攻撃にばらつきがあるのか」

レイが出した答えに、他の二人も納得すると同時にシンの顔には影が生まれた。左側への攻撃が下手という致命的な弱点に気付かず、

それを克服しないままにここまで来てしまっている事が、どうしても心の奥にまで突き刺さってしまったのだ。

「……俺って、そんな酷い欠点があったのか……」

「ねえ！気付いてたんなら、何ですぐに言ってあげないのよ？それでも親友なの？」

ルナマリアの感じた所は尤もであろう。友人の欠点を指摘せずに、その駄目な行動を咎めないのは、本当の友情とは呼べないと誰もが理解はしている。しかし、口にするのは簡単だが、実際に目の当たりにしたとしても確実に行えるかは疑わしい。

誰もわざわざ嫌われるような選択はしないし、面倒な言い争いやぶつかり合いを避けるのが当然であり、相手を思い遣るより先に自分の損得を優先する傾向がある。それが人の性である。

しかし、それは欠点だけでなく利点に繋がるのなら、黙っている事も美德になるのかもしれない。

「何勘違いしてるなさ、ルナ」

「別に、俺達はシンを傷付けたくないから黙ってたわけじゃないぞ？」

「えっ……？どういう事？」

戸惑いに染まるルナマリアの表情に呼応するかのように、シンの表情も同じく灯る。

しかし、左側への攻撃への歪みがあるのだったら、それを改善しないままにしておくのは、あまりにも拙い気がするが。

「そもそもさ、利き腕、利き足がある僕達が左右の対応にばらつきがあるのは当たり前だろ？そりゃどっちも使える方が便利だろうけど、そうできないなら片方ずつに役割を決めちゃえばいいのさ」

ヴィーノの明るい口調が、暗く沈んでいたシンの心に染み入ってくる。ステラの事でどうすべきか決められない迷いも、またむくりと顔を出そうとした。

「シンは別に左側が不得意な訳じゃない。確かにデータでは右側での撃墜が多いけど、左への攻撃だってそつなくこなしているし。第一、インパルスの武装は右側に集中してるし、フォースインパルスの時には左手に盾を持つんだから当たり前なんだよ」

そう言われれば確かに、とシンは納得する。特に左側に苦手意識があった訳じゃないし、それに左側で無意識に行っていたのは防衛行動の方が多い――。

「ああ！そうか！」

思い至ればシンプルな考え方だが、実には的を射ていて、本質に気付くには、シンプルだからこそ時間が掛かってしまう。

それでも、飲み込んでしまえばなんて事はない。

「左で守り、右で攻める。それでも駄目なら左で試してみる為に、盾が固定されてるのか！」

「そうさ！出来る方で出来る事をしていくのが一番なんだよ」

するりとシンの中に二人の言わんとした事が入り込んで、更にヴィーノの言葉が染み渡っていく。

《出来る事をするのが一番》。ステラにしてやれる事なんて限られていて、それは難しいかもしれないが、重要なピースさえやってくれば出来ない注文でもない。

シンの中で、曖昧な形をしていた決意が、急速に固まり始めたのと同時に、この国での過去がまた少し薄れていた。

「俺、ステラを救う次いでにオーブ防衛に参加する！」

「…良いの？」

「…ああ」

不安そうなルナマリアの瞳を見詰めて、大きく一つ頷いた。

決めた心が本物である事、清算できた訳ではないが、オーブへと向ける気持ちたちが完全に変わった事、それがルナマリアの中に深く焼き付いた。

「…オーブ防衛は議長を通して出された、特務隊であるクロードからの勅命だ。最初からお前は参加するのが当たり前だ」

「…人が意気込んでるのに水を注す事は無いだろ、レイ…」

どっと和やかな笑いが空間に溢れ出し、暗い気持ちとおさらばした

シンもそれに加わる。

しかし、そんな空気も長く続きはしなかった。

『コンディションレッド発令！総員、所定の位置で待機せよ！繰り返します！――』

メイリンの声が告げた開幕。皆の表情は引き締まり、パイロット達はブリーフィングルームに消えていく。

そしてシンは新たな力を手にして、守るべき者の為に舞う。助けられる術がある事を、あの小隊が握っていると信じて。

『シン・アスカ、インパルスa行きます！』

PHASE-40 新しいインパルス（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

新しいインパルスの名前はまた今度に出すとして、武装を書き出してみましたが、まだ形態があるのは、皆様お分かり頂けてと思います。

それがどのように登場し、シンに何をもたらすか。それはもう少し後の話。

では、お疲れ様でした。次もお付き合い頂けると嬉しいです。

PHASE-41 フリー…ダム？（前書き）

とうとう始まってしまったオーブ防衛線。隊長であるクロードを欠いた状態で、シン達はどこまでやれるのか？

また、圧倒的な差を埋めていけるのだろうか？

PHASE-41 フリー…ダム？

カタパルトから飛び出す、という初体験を今更にしてしまったシンは、後ろに付いた二人と共に戦場を見回してみたのだが、敵の機影は遙か彼方、オーブの領海ぎりぎりにしか見えていない。

どういう事だ？と首を捻る。確かに宣言上は抗戦としか聞いていないが、戦争に美德も尊厳も存在しない。戦いが始まってしまったのなら、どんなに卑劣な手段だとしても、勝てば官軍と昔から聞いている。

しかし、領海より内に侵入しようとする敵だけを、何機かで集中的に攻撃し、確実に抵抗を許さずに落としていた。

（こんな戦い方、いつまでも続けられないぞ…？）

今こちらに居るダガー隊は、多分様子見をする為の捨て駒という位置付けであるだろうから、現在領海を守っているムラサメよりも増えてしまえば、数の前に易々と敗北してしまう。

そして、この防衛線が破られてしまえば、オーブの領土は焼き払われてしまう。別に発狂する程に嫌な訳ではないが、トラウマに近い傷があるシンはそれを許したくはなかった。

『レイ、ルナ、急ぐぞ！敵の本隊が来る前に合流する！』

『ああ』『ええ』

バーニアを更に吹かし、インパルスαは宙を駆ける。そのフォーム

からは宙を飛べる事すら想像出来ないのに、フォースインパルスより少し遅いくらいの感覚で操作出来ていて、しかも元々の操縦機構は変わっていない為に、自然と手と桿が馴染んでくれた。

これならイける！と確信を得られた時、モニターに映し出された、一度だけ見た事のある機影がムラサメ隊の最後尾に居て、そこへ向かうように方向を転換した。

『アスランさん！』

通信コードはザフトのもので簡単に繋がった。セイバーもザフト製のMSであるから、当然の事ではあるのだが。

モニターに映るアスランはオーブの軍服を纏い、胸には勲章が輝いていた。それがどの階級を示すかはわからなかったが、相当な場所に収まったんだという事だけは理解出来た。

『君達か。この度は本当に感謝してる。特に：シン・アスカ、君には』

アスランの瞳に映るのは、今の穏やかな紅ではなく、始めて見た時に見せていた激しく猛々しい紅。

オーブへの恨み、アスハへの復讐を誓ったような瞳は、今や影も形も存在していない。

本来なら彼がこの戦いに参加してくれるなんて、これっぽっちも思っていなかったのだ。オーブで失った大切な家族を、ここでMSに乗って戦えば確実に思い出してしまう。

そんな辛い過去を穿り出してしまうのは、どんな権力を使ってもしたくはない。

こんな時代だからこそ、誰にでも言いたくない過去も、思い出したくない後悔もある。アスランも同様に、脳裏に焼き付いてしまっている過ちを、本来なら思い出したいくないし、この力の代償を鑑みればMSにも乗りたくはない。

だが、そうしなければ守れないものがあるのなら、そんな過去を犠牲にしても現在を守る。そう誓ったのだ。

それに、問い詰めなきゃならない事も生まれてしまったし…。

『…いえ。オーブの為だけだったら、多分命令だとしても背いていたかもしれません。』

俺はこの戦場でやらなきゃならない事があるから、ここに居るんです』

『そうか…。その為のMSも完成したんだな』

セイバーの向きを調整し、改めてこちらへ来てくれた三機を確認する。新しいインパルスの外見は、お世辞にも洗練されているとは言いが、逆にそれがシンの決意とクロードの信念を表しているような気がした。

そこではたと気付いた。周りを見渡してみても、先程思い起こした人物が、正確にはそいつが駆る黒い機影がどこにも見当たらないのだ。

『…役割をちゃんと熟したというのに、何であいつは出てこないん

だ？まだあの事を引き擦ってるなんて言わないよな…』

アスランは言葉を紡いだ後に画面に再び顔を向けた時、自分の発言が的外れである事と、口にしなければ良かった事であるのを自覚した。

先程まで見せていた決意に染まった紅は影を潜め、その左隣に映る少女の表情は沈み込み、あまり感情を表に出さない少年も微妙な変化を見せていた。

『…クロードは、今医務室で治療を受けてます』

『…どういう事だ？』

真っ先に浮かんだのは驚きではあったが、戦場で、しかも指揮官である自分が取り乱している所を味方に聞かれては、士気の低下に繋がりがねない。

冷静な口調を作って、精一杯感情を抑え込んで問うた答えは、あまりにもクロードらしく、そしてあまりにも愚かしく、お粗末なものであった。

『……はあ…。本当にあの馬鹿は限度を知らないな…』

呆れた溜息を吐き出す。その行為がどうやらルナマリアの逆鱗に触れたようで、彼女のソプラノが甲高くスピーカーを震わせた。

『そんな！頑張った人に対してその物言いは無いじゃないですか！』

ルナマリアもあまり構って貰えない事が不満ではあったが、アスラ

ンの見せた態度はあまりにも酷いものであった。

努力を嘲笑うのも最低だが、頑張りを否定するのも嫌な事だった。

『何が頑張っただ』

『どういう意味よ！？それ！』

ルナマリアの激昂の合間に、アスランはムラサメ隊に指示を飛ばした。増え始めてきたダガーの集団への注意を喚起し、取り囲んで落とすのではなく、遠目から翻弄するように全機に伝えた。

『どうもこうも無い。下らない事で身体を壊して、上の命令を遂行出来ない時点で、そいつは軍人失格だ』

アスランの放った言葉は正に正論で、それに怒る理由なんてルナマリアには見付からず、押し黙るしかなかった。他の二人も同様に沈黙を守り、レイに至っては最初からアスランと同じように感じていたらしく、表情をいつも通りに戻していた。

しかし、言葉の一箇所、アスランがどういった気持ちで紡いだかは知らないそれを、シンはどうしても許せなかった。

『……確かに、クロードは軍人失格かもしれませんが。でも、インパルスを改造してくれた事を下らないとは言わないで欲しいです』

ビームの閃光が迸しり、戦いの激しさが増した事を告げた。ダガーだけでなく、ウィンダムまで出始めて、その大群の前方にはまるで見たことの無いMSのようなMAのような機体（後述ではMAと定義する）が、威圧感を放ちながら近寄ってくる。

それにムラサメが牽制のビームを放って様子を見るが、装甲が厚いのか、はたまたフェイズシフトでも採用しているのか、傷一つ付く事もなく向かってくるのだ。

その姿にムラサメ隊は怯みそうになるが、後ろに控えていた司令官である男のガンダムが踊り出て、忌まわしい記憶のある腰元に装備されたレールガンを、良くわからないMAへの直撃を避けて、その後ろで隊を成して進んでくるMSへと放った。

しかし、高速で迫る紅い光を眼前にしても、ダガー、ウィンダムは躲そうとする予備動作すら見せない。

おかしい、とアスランが感じたその時、その理由がまざまざと見せ付けられる事となった。

『何!?!』

エネルギーの奔流は、飲み込む筈のMSの前に立ち塞がったMAによって掻き消されてしまった。しかし、そこに驚いた訳ではない。そのやり方に驚いたのだ。

『な、何だよ…あれ…』

抗議の声を上げたが、それを結果的には無視してしまったシンは、既にそんな事はどうでも良くなっていた。

その紅の眼に映っているのは、MAが展開したビームシールド。レールガンだって、曲がりなりにも対艦砲になり得る出力を持った武装の筈だ。それをいとも簡単に無効化し、何事もなかったかのように

に向かってくるその姿は、まるで神の盾を奪った悪魔だ。

『このーっ!!』

レールガンで駄目なら、とルナマリアはアスランに続いて前に出て、イフリートを構える。そして数秒間のチャージの後、電子の迸しる紅の閃光が、安定しない形で、相手を飲み込むべく駆け抜けようとするが、その悍ましい姿を見てもMAもMSも、その軌跡から一切避けようとするしない。

そして直撃。陽電子の光が瞬いて、飲み込んだ全てを屠る筈だった。

『ど、どうなってんの…?』

前に出てきた不細工なMAごと消え去っている筈であった。地上では威力が落ちるとはいえ、陽電子の線条に耐えられる筈もない。

しかし、あのMAはそれすらも無効に、それも少しの損害も出さずに。

そして無効化だけならまだかわいい。そのシールドを展開した体勢のまま、反撃を繰り返してくるのだから質が悪い。

お陰でムラサメ二機が落ちてしまった。

『くっ……。シン、話の続きは後だ。今は戦闘に集中して欲しい!』

『わかりました!』

シンはクロードの事で少し張り詰めていた糸を緩め、気合いのギア

を入れ直す。戦闘用に使う集中を内側から引き出して、インパルスαの右背部に付いた緑色の砲門を肩に固定する。

『レイは右の、ルナは左のダガーを頼む！俺は正面の、あの不細工なMAを何とかする！』

いつの間にか隊長のように振る舞っているシンが普通に思えてきて、レイとルナマリアは苦笑した。

普段は寝坊はするし、部屋に女性（たった一人の特定人物のみだが）を連れ込むし、報告を定期的に閲覧しないし。お世辞にも素行が良いとは言えない軍人なのに、戦場に出ればこれ程に頼りになるとは思えなかった。

『OK！しっかりね！』

『あれは頼んだぞ』

二人は散開し、ムラサメ隊を引き連れて攻撃を開始する。派手に閃光が瞬き始め、周りは完全に本格的な戦闘に突入した。

『あのMAには参ったな…』

セイバーが隣に制止しながら、アスランがモニター越しに落とした眩きは、そのままシンの懸案事項にもなっていた。

『ええ…。防御に関しては文句のつけようがない。攻撃も兼ね備えてる。骨が折れますね…』

二人の間にだけ訪れている静寂が、周りの激しい線條の交差と爆散

する音が対比され、迫りくるMAの威圧感が二人の緊張を加速させていく。

『ダガーはムラサメ隊に任せ、俺達はあれの相手をするのが妥当だな』

『ええ。どうにかこいつを落とさないと、控えてる後続に皆やられる…！』

シンの瞳には、あのオノゴロの光景が思い起こされていた。

それが何故かなんて、本人も全く掴めていないのだから説明のしようもない。

どんどんと展開していく過去の残滓。それらは寸分狂わずに手を振る父さんだとか、その横で微笑む母さんだとか、手前で呼んでいるマユだとかを映し出してきて。

それらを壊そうとしたのは、何故か目の前に迫っている不細工なMAだった。

何が理由でそう見えるのかもわからないが、一つだけ確かなものがある。

《こいつをどうにかしないと、大切な記憶が目茶苦茶にされてしまう》という事。

『うおおおっ！』

ケルベロスの咆哮が瞬いた。デブリでさえ真つ二つに出来る程の一

撃が迫るが、やはり展開されたシールドによって弾かれてしまう。

シンはそれだけでは飽き足らずに攻撃を連続させる。

それは、まるでがむしやらに戦っているかのように、敵側からすれば自暴自棄になったと思わせるような、そんな規則性のない攻撃。

しかし、共闘しているアスランは違う目で見ていた。

インパルス of 邪魔をさせないように、ちよろちよると、まるで夏の虫のように思えるダガー達を、右手に持ったビームライフルで落としていく。

銃爪を引く度に伝わる振動が、アスランの心の奥底に眠る不審を募らせていく。

戦うという、自分の望んだ事に背いてしまう事象は、拭い切れない矛盾を生み出していて、それは結局一つの場所へと回帰していく。

そう、今回の無理矢理な戦いを受け入れ、対抗する為に議長 of 立場さえも利用しようと思いたった、わかる筈のない疑問は、アスランの猜疑心を育ててしまっていた。

そんな考えている間にも、無意識に放った線条が二機を一気に貫き、エネルギー of 物質の個性を表す色の爆発が巻き起こり、オーブの領海付近はダガーの破片が覆ってしまっていた。

それでも敵の増援は衰えを覚えていない。

ダガーは増える一方だし、新型のウィンダムまで登場し始めていて、

数のうえだけではなく、質も上回り始めてしまい、墜ちていくムラサメが急激に増加を始めてしまった。

『怯むな！』

弱気になり、じりじりとダガーやウィンダムから離れ始めてしまったムラサメ隊に檄が飛ぶ。それはたった数機で真ん中の進行を抑えている、赤いガンダムに乗る司令官からの鼓舞。

『お前達の大事なものがあの国にはあるのだろうか！？ そうだとしたら、あの地に足を踏み入れさせるな！ 守れるのは私達だけなのだぞ！』

改まった口調で全機に放たれた言葉は、確かに納得も出来て、限りなく事実に近いだろう。

しかし、人間の心は弱いのだ。相手が強大で、MSでどこまでも続くような無限の回廊を作り出しているような、そんな錯覚さえ起こしてしまっている奴らが大半になってしまっている。

その者達の内にあるのは、《死にたくない》という思い。

ステラが拒絶するこの言葉は、遍く人間の恐怖となり、気持ちを疎ませてしまう。

『はあああつ！』

そんな弱気の心に気合いの入った、まるで自分達に喝を入れるかのような、赤い閃光の一撃がダガーとウィンダムを薙ぎ払った。

顔を上げてモニターを眺める。領海ぎりぎりに立ち、巨大な砲門を構える赤いザク。その姿は正に堂々として、近付いてきたダガーによる一撃を盾で防ぎ、お返しとばかりにビームトマホークを抜き放ち、綺麗な放物線を描いて胴と脚を断ち切った。

『まだまだーっ!!』

そして近付かれてしまう前にもう一度、赤い閃光を密集地帯に目掛けて撃ち込む。そこに追撃も飛んできて、陽電子の餌食を避けたウインダムが爆散した。

後ろにカメラを向けてみると、ゆっくりとではあるが、艦隊がやってきて、その中には数門を展開するミネルバの姿も存在した。

『共に立ち向かってくれているザフトの方々に、怯んだ姿を見られていたいか？ そうじゃないなら心を強く持て！ 守るべきものをお願い浮かべて!』

確かに。我が国を守る為の戦いで奮起しているのが、我が軍ではなくザフトだけという状況はあまりにも拙い。

ムラサメの動きは一気に変化して、敵に突っ込んで攪乱をし、その隙に近付いて両断、又は撃ち抜くという連携が戻り、均衡が破れそうだった気配は既に無くなった。

しかし、大西洋連邦もそう甘くはなかった…。

『何!?!』

局地での格闘戦が想定された為に、スラッシュウィザードを装備し

た白いザク・ファントムのパイロット、レイ・ザ・バレルの声が響いた。

集団を引き付けて、ある一定の箇所へと誘導しきった後、ミネルバの最強装備であるタンホイザーが唸りを上げて、ダガーとウィンドムの団体様は消え失せてくれる筈だった。

しかし、赤き閃光の通り道は一つも掃除出来ていなかった。普通ならレーダーに引っ掛かる筈のそれは、突如としてタンホイザーの射軸に現れて、凄まじいエネルギーの奔流を受け止めきっていた。

立ち上った黒煙の向こうに見えるシルエット。見間違う事など出来ない特異な形。

『こいつ：何機居るんだ！？』

インパルスαと対峙し、距離を取ってケルベロス撃つのを追い込もうと躍起になっているのが見えて、もう一機厄介なのが増えてしまったのを、レイは普段上がる事のない語尾を盛大に上げて反応していた。

まるで立ちはだかる悪魔のようなその機体は、ザムザザーと呼ばれている。上半身は普通のMSと何ら変わりが無いが、戦慄を覚えるのは下半身で、まるで甲虫を思わせるような四本の脚を有しており、その一つ一つに大型のビーム砲を備えている。

『くっ！』

白いザク先程までいた地点を、四本の線が収束しながら通り抜ける。間一髪で避けたは良かったが、右足側部があまりに強力な奔流であ

ったが為に、少々溶けてしまっていた。また、後ろで援護を行っていたムラサメ数機が巻き込まれ、海に浮かぶ破片の仲間入りをしてしまっていた。

損傷の具合、そして減り続ける戦力への不安、その一瞬の隙を見逃してくれはしなかった。四機のダガー、ウインダムに囲まれてしまい、同時に放たれたビームがザクに遅いかかる。

『ぐっ!!』

左側からのものを盾で防ぎ、正面からのものはスラッシュウィザードで受け止めたが、右側と後ろからの攻撃は直撃を被ってしまった。

しかも、後ろからの攻撃でスラスターをやられてしまったらしく、浮遊していた機体はどんどん海へ吸い込まれていく。

しかし、ただで海に落ちる訳にはいかない。アラートが鳴り響く中、レイは意識的に攻撃を加えてきた四機ではなく、少し高度の低い場所に居たザムザザー目掛けて、スラッシュウィザードを思い切り振り下ろした。

重力加速度と機体の重さにより生まれる破壊力は、インパルスのエクスカリバーよりも上であろう。この一撃ならあのビームシールドさえも引き裂いて、一刀に伏せると思った、のに。

切っ先が触れようとした瞬間、ザムザザーの居た空間が揺らめいて、気が付いた時にはその場所には存在していなく、またちっとも手応えがなかった。

『ま、まさか…?』

この戦いに参加していないジュール隊の報告に上がっていた、連邦のユニウス条約に背く行為があったという事。

その威力は、今日の当たりにした通り。落とせたと思った瞬間に消え去り、また後ろに回り込んで出現して、巨大なハサミでザク・ファントムの身体を締め付ける。

『ぐあっ!?!』

凄まじい有用性と実用性、そして脅威的な威力。その為にユニウス条約で搭載を禁止されたのだ、ミラージュコロイドは。

ぎりぎり締め付ける威力が上がり始め、コックピットにもミシミシと軋む音が響く。どうかしようともがいてみるが、出力はやはり大型MAのあちらの方が上だ。

そしてハサミは、それだけで終わる代物ではなかった。

『くっ、ハサミの温度が上がって…!』

超振動による摩擦で起こる熱と挟む力の相乗により、ザク・ファントムの装甲はボロボロに溶解を始めたと共に、真つ二つになるカウントダウンまで始まった気がした。

不味い!とレイが焦燥に囚われてしまった時、苦し紛れのムラサメのビームライフル、イカヅチの一撃が下部からザムザザーに直撃し、爆発と共にハサミの振動が止まり、拘束も解けて、ザク・ファントムは海へと着水する。

そして痛みを孕んだ身体に鞭を打って、全機に通達する。

『…あのMAの弱点を発見！下部にはシールドを展開出来ない模様！』

大型で、しかも武装の大半を下半身に積み込んでいるせいか、前方、後方、上方にはほぼ完璧な防御を誇るが、それが仇となったせいで、苦し紛れの一撃で弱点を曝してしまったのは、油断の一言に尽きるだろう。

着水し、ホバー状態を保つ事により、ビームライフルで脚部を狙う。見事に直撃したそれで、体勢を崩していたザムザザーは更に傾き、バチバチとショートする箇所も出始めた。

そして、どんどんと取り囲むように集まるムラサメ達は、機動力を重視する為にMAとなり、翻弄するような動きと共に、擦れ違い様に下部へと一撃を加えていく。

決定的な損害は与えられなかったが、着実に積み重なるダメージのせいで、ザムザザーの動きは鈍くなる一方。

その頃シンは――。

『…くそっ！』

海面すれすれを飛行するインパルスとザムザザー。お陰で弱点である下部を攻撃出来ず、正面に威嚇程度の出力でケルベロスを放つしかなかった。

アスランは、ダガーとウィンダムをムラサメと共に相手にするのが

精一杯らしく、援護の手は期待出来ない。

援護があれば少しは戦略も意味を成そうが、単独でこいつを更に上昇させるのは至難だ。レイが相手にしている、ミラージュコロイドを搭載したザムザザーと違い、慢心を抱いていないという事か。

（もうちょっとだと思っただけだな…）

またケルベロスを放つ。闇雲に見えるが、これもシンに考えがあつての事だった。

ビームシールドというものが展開する時、一箇所から全てのエネルギーを供給している訳ではない。計算されて、適性な出力を保てるように配置された発生装置が所々に存在し、同時に機動する事によって点と点が繋がって、シールドの形を作りあげているのだ。

それは大型になればなる程に、そして強力になればなる程に、装置は数を増やしていく。

つまり、シンは高エネルギーを放てるケルベロスにより、その存在を確かめようとしているのだ。

威嚇射撃程度に抑えたケルベロスでも、シールド上に光を浮かび上がらせるには十分で、次に放った一発が突破口を開いてくれた。

『よし！見えた！艦長、タンホイザーの準備を！』

『ええ！』

ケルベロスの固定を解除し、脚部に収められたビームライフルを取

り出す。狙うは左肩と喉元より少し下。勘付かれる前に素早く二発、少しズレた線条を撃ち込んだ。

すると、上半分のシールドが消え去って、胸よりも上が露になった。その瞬間にシンはバーニアを最大に吹かす。ビームライフルをしまい、腰に据えられた二本のヴァジュラを抜き放ち、交差するように胸当たりに突き刺して、そのままバーニアを吹かしっぱなしにする。

『うおおおおあつ！』

少しづつ持ち上がっていくザムザザー。そして押し込む事により更に力を加え、弱点を海面から離す事に成功し、インパルスはヴァジュラから手を放す。そして左に備えられたエクスカリバーを抜き放つと同時に、振り翳したその長刀をザムザザーの真ん中へと突き刺した。

何の抵抗もなく貫かれたザムザザーは、為す術もなく爆散し、シンは海へと浮かんだヴァジュラ二本を回収した。

そして急速で離脱した場所を、高威力の陽電子の塊が通り過ぎると同時に、ザムザザーを盾に使っていた後ろの団体が綺麗さっぱりと消え去った。

『よし！』

シンの采配が的中し、圧倒的だった戦力図が少しでも盛り返った気がした。もし感覚的なものだとしても、敵の士気が下がったのは間違いないだろう。

レイが加わったムラサメ隊による攻撃で、完全に疲弊したザムザザ

ーはミラージュコロイドを展開する事によって消え失せ、ほぼ第一陣を退けたのは確実になった。

そして彼方からやってくる、艦船を含んだ本隊であろう機影が見えて、全員の集中力はいやでも引き締まっていく。

しかし、その集中のせいで思考は鈍っていた。普段であれば誰かが気がついていただろう、逃げ出した手負いの獣が一番厄介だという事を。

『マズい！熱源、ミネルバ前方に展開！』

マリクの焦りをふんだんに含んだ声がスピーカーに響き、漸く嫌な予感がやってきた三人は急いで戻ろうとする、のだが。

『行かせないよ！多分新型！』

アーモリーワンからの腐れ縁である水色のMS、アビスが水中から現れて、カリドウスをMA状態に変化する事により放ち、シンを一歩後退させる。

『それに、お前にはここで墜ちて貰うぜ！』

更に迫り撃ちがインパルスに襲い掛かる。ビームサーベルを振り下ろしながら降下してきたのは、緑色のMSであるカオスで、それをヴァジュラ一本でどうにか裁く。

（こいつらが居るって事は！）

シンの心が無意識に高揚を始めた。もしかしたら、今も苦しみ続け

ているであろう大切な人を救えるかと思ったから。しかし、そんな浮かぶ心もすぐに霧散していく。

大切な《人達》がたくさん乗っているミネルバが、ボロボロになったザムザザーによって、攻撃されそうになっているのだから。

『どけえーっ！』

そんなシンの叫びを嘲笑うかのように、ヴァジュラによる攻撃を受け止めるカオス。それならと、もう一本を左手に持ち、防御の死角を突こうとするが、今度はMSへと可変したアビスがビームランスで、それを防いだのだった。

焦燥に駆られる気持ちを抑え込めず、シンは辺りの様子を窺った。

レイはスラストをやられたせいで移動も困難。クロードはまだ目覚めていない。こうなると唯一の頼み綱はルナマリアになる。

上空を見上げてみると、イフリートを構えたザク・ウォーリアの姿が飛び込んできた。

手負いのザムザザーは、既にシールドを保つ程の安定性には欠けているので、後はミネルバに直撃しないように狙いを定めるだけだ。

正確に、出来るだけ素早く。数秒のラグの後、イフリートの砲門に赤いエネルギーが集まり始めた。ミラージュコロイドはまだ完全に解けていないので、ぎりぎり間に合う距離であろう。

そして、後は銃爪を引こうとした瞬間――。

『きゃああああっ!?!?』

イフリートが派手な爆音と共に弾け、ザク・ウォーリアは後方へと吹き飛ぶ。エネルギーの高まったそれを貫いたのは、緑色の線条。

そして、ザク・ウォーリアが体勢を整えた瞬間に、空の青の中から急速で出現し、ビームサーベルで襲い掛かってきたのを、ビームトマホークを咄嗟に構える事でいなした。

勢いで通り過ぎたその機体を見間違えう筈もなかった。英雄と同じ機影と、それを上回るであろう武装。そして青褪めたようなカラーリング。

『……あいつは。あいつはどこだーっ!?!』

代表を殺害しようとした魔狼フェンリルが、またオーブへと舞い戻ったのだ。

それが何を示すか、シンは理解すると同時に焦りは恐怖へと変わっていた。

頼み綱であるルナマリアまで止められてしまっでは、もうどうしようもない。幾ら、ムラサメやセイバーが高機動のMAへと変形できると言っても、明らかに間に合う距離ではない。

ぎりぎりと言ひ合う武器同士の音が、少しづつ小さくなり、そして頭の中は真っ白になっていく。

ミラージュコロイドを解除したザムザザーは、破壊されていない三つの砲門をミネルバへ均等に向ける。

『ステラーツ!!』

思わずに叫んだ大切な人の名前は、虚しくスピーカーを響かせた。それを聞いた事に驚いて、メイリンは閉じていた瞳を開くと、信じられない光景が眼前に広がっていた。

「えっ……? フリー…ダム？」

誰もが知る英雄の機体が、ザフトやオーブからすれば敵と認識していておかしくないそれが、ビームサーベルを構えて、ミネルバの前に踊り出していたのだ。

ザムザザーは全ての脚を斬り落とされたようで、そのままカメラを潰されて、真下の海にぷかぷかと浮かんでいた。

しかし、この異様な雰囲気は何なのだろうか? フリーダムの堂々とした姿だけが浮いていて、戦場となった領海付近は一時の沈黙の帳が下りていた――。

PHASE-41 フリー…ダム？（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

前々回程に後書きで、話の速度を上げると記しましたが、どうやら無理なようです。自分の性格上、描きたいことを描けない方が辛く、カットするぐらいなら載せてしまえ！と思い立ってしまったからです。

本当にスローペースな話ではありますが、宜しければお付き合い下さい。

では、お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4871i/>

GUNDAM SEED Destiny～Readjustment World～

2010年10月9日18時23分発行